

---

# ペルソナ 3 ~ 死神の旅路 ~

卯月夕吊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ペルソナ3〜死神の旅路〜

### 【Nコード】

N8170Q

### 【作者名】

卯月夕吊

### 【あらすじ】

10年ぶりにかつて両親を亡くした事故のあった地に戻ってきた双子の姉弟、有里 彩音と有里 湊。二人はあるきっかけでもう一人の自分 ペルソナを覚醒させる。そこから始まる、影時間、シヤドウ、タルタロスなどを巡る戦い。果たして二人は、どんな旅路を通り、どんな真実を見るのか……。この小説は作者の初投稿小説です。色々と至らない箇所があると思いますが、優しい目で見てくださると嬉しいです。この小説はネタバレをかなり含みますので、本編クリア後に読むことをお勧めします。基本原作沿いです。あま

り恋愛描写とか入らないかもしれません。出来るだけ早く投稿できるよう頑張ります。

## 設定（前書き）

初めまして、卯月夕吊と申します。

初投稿なので、まだまだ未熟ですが、温かい目で見守っていただけると幸いです。

早く投稿できるように出来るだけ頑張りたいと思います。

今回は簡単な主人公設定です。本文は次からになります。

こちらは原作をプレイされている方は読んでも読まなくても結構です。あまり重要なことは書いていない・・・筈です。

それでは、どうぞ。

## 設定

主人公設定

ありさと  
有里 あやね 彩音

月光館学園高等部2年F組所属。

10年ぶりにかつて両親が死んだ事故のあった地である辰巳ポートアイランド地区に弟、湊と共に戻ってきた。

そしてそこで影時間、シャドウ、タルタロスを巡る戦いに、特別課外活動部の戦闘リーダーとして参加。明るく、快活的な存在。他人ともすぐに打ち解けてしまうタイプ。

戦闘では雑刀を使い、リーダーを務める。湊とのコンビネーションは抜群。特に二人で行う「ミックスレイド」は強力。

ペルソナ能力ではワイルドを持つため、複数のペルソナを持ち戦うことが出来る。

初期ペルソナはオルフェウス。

ありさと  
有里 みなと 湊

月光館学園高等部2年F組所属。

彩音とは双子の姉弟。姉と共に辰巳ポートアイランド地区に戻ってきた。また、10年前の事故で右目を失明している。それ以来、前髪で右目を隠すようになった。

特別課外活動部では戦闘時の副リーダーを務める。たまにリーダーとして指揮することもある。

無口でポーカーフェイス。あまり他人と積極的に関わろうとはしない。彩音と正反対の性格。

戦闘では片手剣を使う。片目が見えないせいか、戦闘に関する勘が妙に鋭い。

ペルソナはワイルド。しかし彩音と同じペルソナはオルフェウスを除き持てないようだ。

初期ペルソナはオルフェウス。しかし彩音のものとは外見が違ふ。

## 設定（後書き）

さて、上にも書きましたが次回から本編になると思います。

感想、ご意見などありましたらお願いいたします。

まだ私自身、パソコンの扱いは慣れていないので、遅くなるかもしれませんが出来るだけお返事できるように頑張ります。

## 4月6日 く始まりく（前書き）

本編開始です。読んでくださる方、ありがとうございます。

さて、ここからはここに簡単な用語説明、メインキャラ紹介などを書いていこうと思います。あとがきの方に書くこともあるかもしれませんが。本編をプレイ、もしくはクリアされている方は飛ばしてくださって結構です。

それでは、どうぞ。



4月6日 く始まりく

時は、待たない。

全てのを、等しく終わりへと運んでいく。  
限りある命の輝きを守らんとするものよ。

1年間

その与えられた時を往くがいい。  
緩やかなる日々にも、揺るぎなく進むのだ。

「本日はポイント故障のため、ダイヤが大幅に乱れ、お急ぎのお客様には大変ご迷惑をおかけ致しました。次は、蔵戸台く……」  
深夜の電車の中。もう既に時刻は0時に近い。

そんな車内に、よく似た顔立ちの、同じ学園の制服を着た少女と少年がいた。

少年は座っており、少女がその前に立っている。

「ほら、湊、もう着くよ？」

栗色の髪を後ろで高くまとめた少女が、俯いて音楽を聴いている青い髪と右目を隠すように伸びた前髪が特徴的な少年 有里 湊に声をかける。

「……分かってるさ。」

湊はあくびをかみ殺しながら、目の前の少女 有里 彩音あやねに返した。

「なんでこんな遅くなるかなあ？もうちょっと早く着くと思ってたのに。そしたら早速駅のお店とか見て回れたのになあ。」

「……どうでもいい。」

彩音は湊のこの答えに慣れっこのようで、ため息をつきながら窓の外を見る。このあたりは住宅地なのか、綺麗な夜景などは見れなかった。

「ところでさ、もう10年になるんだよね。なんか早いような長か

ったような、変な感じじゃない？」

彩音の話に湊が少しだけ顔を上げた。

「でも、楽しみだよね！学校とかすごく綺麗らしいし、ショッピングモールとかもあるんだって！」

彩音の笑顔に、湊もつられて少し笑う。両親を亡くした地へ戻るといつのに、彩音の明るさはいつもと変わらない。

そうして少し話をしているうちに、電車は蔵戸台へ着いた。

二人が改札を通り、駅前に出たところで、駅の時計が0時を差す。

その瞬間、世界が変わった。

「・・・っ、何これ・・・」

彩音が変化にいち早く気づいて辺りを見回す。

街は異様に静かだった。街には人の姿はなく、代わりに不気味な棺桶が立ち並んでいる。道路には血だまりのような赤い水溜りが出来ていて、夜空は緑色になっている。そして極めつけは、普段とは比べ物にならないくらいに大きく見える月。

湊も少し視線を鋭くして、周りを見回した。

「・・・何もいない。とりあえず寮へ急ごう。」

湊は先に歩き出した。彩音も小さく頷いて湊に続く。

人のいない、静寂に包まれた街。そこに二人の足音だけが響く。

湊は事前に貰った入学案内を確認しつつ、辺りを警戒しながら進む。

「・・・ここだ。」

暫くして湊が立ち止まった。湊の目線の先には、一見寮には見えなような、古いホテルに見える建物があった。

「間違いない、みたいだね。」

彩音が扉の脇にあるプレートの文字を読む。

『月光館学園 蔵戸台分寮』と、確かに書かれていた。

「よし、入るよ湊。」

言うなり彩音はつかつかと扉を開け、中に入っていく。  
湊も案内をしまいながら彩音の後を追って寮に入った。

中は流石に暗い。でも外からの月明かりのお陰で、なんとか内装は分かった。

「・・・流石に誰もいない、よね。」

「ようこそ。」

その少年は、いきなり現れた。

黒と白のボーダーの服。それはまるで囚人服のようだった。年は7歳ほどに見える。

「遅かったね。長い間、君たちを待っていたよ。」

「えっ・・・誰？」

彩音が聞くが、少年は答えずに手に持っていたカードを差し出す。

「この先へ進むなら、ここに署名をして。一応、”契約”だからね。」

彩音はそのカードを恐る恐る受け取ると、少年はその様子を察したかのように、「怖がらなくていいよ。」と言った。

「ここからは、自分の決めた事に責任を取ってもらうっていう、当たり前の内容だから。」

そのカードには、確かに「我、自ら選び取りし、いかなる結末も受け入れん」と書かれていた。

そしてその下に、署名の欄が二つある。

彩音はいぶかしみながらも、上の欄に「有里 彩音」と書いた。そして隣にいる湊に渡す。

湊も上のメッセージを読むと、「有里 湊」と書いた。

カードを少年に返すと、少年は署名を確認する。

「・・・確かに。時は、誰にでも結末を運んでくる。たとえ耳と目を塞いでいてもね。」

「・・・さあ、始まるよ。」

少年はそう言うと、闇に溶けるようにして消えてしまった。いきな

りのことに、彩音と湊は驚きを隠せない。

「……何だったの、あの子？」

「……さあ？」

彩音と湊は顔を見合わせる。しかし、二人はすぐ寮の奥に目を向けた。

「……誰っ!？」

奥から、ピンクのカーディガンを着た少女がこちらを驚いたように見つめている。

「この時間にどうして……まさかっ!？」

少女は足についているホルスターから銃を取り出そうと、手を伸ばす。そしてその手が銃のグリップを握り、銃を引き抜こうとした。

「えっ!?! ちよつと待っ……待て!」

彩音が止めようとするが、その言葉は遮られる。

「っ!」

奥からまた一人少女が現れるのと、あかりが元に戻るのは同時だった。

ピンクのカーディガンの少女は、少しほっとした様子を見せる。そして銃から手を離れた。

「到着が遅れたようだね。私は桐条（とうじょう） 美鶴（みづる）。この寮に住んでいる者だ。」

「……誰ですか？」

「二人は転入生だ。ここへの入寮が急に決まってね。いずれ、一般寮への割り当てが正式にされるだろう。」

「初めまして。私は有里 彩音と言います。」

「……有里 湊。」

二人が挨拶すると、美鶴も「よろしく。」と返した。しかし、まだピンクのカーディガンの少女はこちらを警戒しているようだった。

「……いいんですか？」

「……さあな。」

少女が美鶴に小声で聞いた。しかし彩音と湊にもそれはすっかり聞

こえている。

「（・・・何のこと？）」

彩音は疑問に思ったが何も聞かなかった。

「彼女は 岳羽<sup>たけは</sup> ゆかり。この春から2年生だから、君と同じだな。」

「・・・岳羽です。」

少女 ゆかりも挨拶をしてきた。

「よろしくね、岳羽さん。」

「あ・・・うん。こちらこそ、よろしく。」

彩音のにつこり微笑んでの挨拶にゆかりも警戒を解いた。

「今日はもう遅い。部屋は3階に用意してある。荷物も届いてるはずだ。すぐに休むといい。」

「あ、じゃあ案内するんで、ついて来てください。」

彩音と湊は床に置いていた鞆を持つと、ゆかりの後に続いた。

寮の2階にまずは案内される。そして一番奥の部屋の前で三人は止まった。

「有里くんはこの部屋だね。一番奥だから、覚えやすいでしょ？あ、有里さんはこの真上ね。」

「・・・分かった。」

「えっと、何か訊きたいこと、ある？」

彩音と湊は顔を見合わせた。

「えっと、さつき署名したんだけど、あれって何の署名だか分かる？」

「え？署名？・・・何のこと？」

ゆかりは心当たりがないようで、不思議そうな顔をする。

「あ、知らないならいいんだ。何でもない！」

彩音は何でもない風に答えた。

「・・・あの、ちょっと訊きたいんだけど。」

「・・・何？」

「駅からここまで来る間、ずっと平気だったの……？」

「平気……？別になんともなかったよね？」  
湊も頷く。

「そつか……。ならいいんだ。ごめん、気にしないで。じゃあ、有里さん。部屋に案内するね。有里くん、おやすみなさい……」

「おやすみ、湊。」

「……おやすみ。」

二人が去っていくと、湊はすぐ割り当てられた部屋に入ってしまった。

そして二人は3階へ上がり、一番奥の部屋の前に来る。

「はい、ここが有里さんの部屋ね。」

「ありがと。確かに覚えやすそう。」

ゆかりが言ったとおり、彩音の部屋は湊の真上だった。

「……あのさ。」

「うん、何？」

「色々、分からないことあると思うけど……それはまた、今度ね。おやすみなさい。」

「分かった。おやすみ、岳羽さん。」

ゆかりはそのまま、下に降りていってしまった。

彩音も割り当てられた部屋に入る。

「……どうだった？二人の様子は。」

1階のラウンジに下りたゆかりは、ソファに座っていた美鶴に声をかけられた。

「全然平気そうでした。特に何も言っていなかったですし。」

「ふむ、成る程な。あの時間に平然とここまで来られるとは。これは適性がある、と見ていいのかもしれないな。とにかく、あの時間の間監視をする、と理事長もおっしゃっていた。早ければ明後日から監視を始めることになる。」

「……了解です。」

ゆかりは「監視」という言葉に少し嫌悪感を覚えながら了承した。

「それと、明日は二人を学校まで案内してくれないか？私は所用があつてね。・・・頼めるか？」

「あ、はい。分かりました。・・・じゃあ、そろそろ私も寝ます。

「おやすみなさい、桐条先輩。」

「頼んだぞ。おやすみ。」

ゆかりは会釈をすると、足早に階段を上がって行った。

歯車は動き出す。誰も知らないところで・・・

4月6日 く始まりく（後書き）

いかがでしたか？

最後は少しだけオリジナルを入れてみました。

・・・正直、文才欲しいです。殆ど説明文にしかなくていないよう  
な・・・（汗）

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などございましたらよろしく願  
いします。



4月7日 ㄱ 転入初日ㄱ (前書き)

続けて投稿です。

この調子で投稿できたらいいなと思います。 ちょうど明日も明後日も休みなので。

ㄱメインキャラ紹介1ㄱ

岳羽ゆかり

月光館学園高等部2年F組所属。

弓道部に所属しており、戦闘でも弓を使う。

お化けや怪談の類がかなり苦手。

恋愛のアルカナのコミュ相手(男性主人公でも女性主人公でも)。

プレゼントは高価なものがお好きなご様子。

では、どうぞ。

## 4月7日 く転入初日く

「……ん。」

彩音は窓の外から差し込む光で目を覚ます。枕元の時計を見ると起きるにはもう丁度いい時間。

「……今日からまた新しい学校か。さあて、準備しないとなあ。湊は起こしに行かなきゃ絶対起きないだろうし。」

彩音は大きく伸びをして起きると、ベッドを直し、支度を始めた。

部屋のドアがノックされたのは、殆ど支度が終わった時だった。

「岳羽ですけど、起きてるー?」

「はい！今開ける！」

彩音がドアを開けると、昨日と同じ制服にピンクのカーディガンを着たゆかりがいた。

「おはよう、眠れた?」

「バツチリ。」

「それなら良かった。あのね、先輩に案内しろって頼まれちゃってもう出られる?」

「うん、大丈夫だよ。」

「じゃあ、行こ?あ、あと有里くんも誘わなきゃ。」

湊のことを訊いた時、あちゃく、と彩音は頭を抱える。

「……多分湊のことだから、絶対まだ寝てると思う。しょーがない、たたき起こすか。岳羽さん、まだ余裕ある?」

「んく、ちょっとだけなら。」

「分かった。すぐ支度させるから、1階で待ってて。」

彩音はそう言つと、すぐに部屋から鞆を取って、2階の湊の部屋まで行った。

案の定、湊はまだベッドの中にいた。それどころか起きる気配すら

ない。

彩音は部屋に入ると、湊の布団をばっ、とはがす。

「起きろ、湊！遅刻するよ！」

「・・・あと5分・・・いや10分・・・」

「いい加減にしなさいっ！」

問答無用で彩音は湊にかかと落としを食らわせた。

「いつ!？」

湊も流石に目が覚め、痛みをこらえながら起き上がる。

「な、何するんだよ姉貴っ・・・！」

「こうでもしないと起きないでしょ。岳羽さん待たせてるんだから早く支度してね？」

彩音はそれはそれは綺麗な笑みで、湊の部屋を出た。

「通学にはこれ使うの、モノレール。珍しいでしょ？」

「すっごく綺麗！海の上進んでるみたい！」

モノレールにはゆかり、彩音、湊の三人が乗っていた。彩音は外の景色に目を輝かせ、湊は先ほどの起こされ方が不満なのか仏頂面だ。しかしボーカーフェイスのせいでそんなに変わっているようには見えないうえ。

「でしょ？私もここ好きなんだ。あ、学校があるのは終点の「辰巳ポートアイランド」って駅ね。聞いたことない？辰巳ポートアイランド。人工島の真ん中にうちの学校があるの。あ、ほら！見えてきた！」

ゆかりが指差す先を見ると、そこにはなかなかの面積を持つ人工島が見えた。その人工島の半分ほどの面積を、同じような造りの建物が占めている。

「広いね〜！あれが月光館学園だよね？」

「そう。で、あそこの建物が高等部。」

ゆかりの説明を聞きながら、彩音はモノレールが駅に着くまではいでいた。

「さ、着いたよ。ここが月光館学園の高等部。よろしくね！」

「わあ、近くで見るとすごいね！まだ新しいし。ね、湊！」

「・・・そうだな。」

高等部の広い建物を見ながら、三人は昇降口へと着いた。

「ここからは二人で大丈夫だね？えーと、まず先生にあいさつか。職員室はこの先を左に入ってすぐだから、詳しいことはそこでね。・

・以上、ナビでした。何か分からないこととかある？」

「ううん、大丈夫。ありがとね、岳羽さん！」

「大丈夫。」

彩音と湊の答えを聞くと、ゆかりは少し声のトーンを下げた。

「あのさ・・・昨日の夜、その・・・色々見たでしょ？あれ、他の人には言わないでね。・・・じゃあね！」

ゆかりは手を振って、右の通路の奥に入って行った。

「それじゃ、私達も行こうか？」

二人はゆかりに言われた通り、左の通路に入った。

職員室の中に入ると、それに気づいた女性教師が近づいてくる。

「おっと、転入生さんたちよね？・・・有里 彩音と有里 湊。2年生で間違いないわよね。」

女性教師は手元の資料をめくって、彩音達のことを確認しているようだった。

「ふうん・・・結構、転々としてきてんのね・・・えー、ご両親は、10年前の・・・あつ・・・」

女性教師の手が止まる。

「ああ、ごめん・・・バタバタしてて、詳しく読んでなくてさ。」

「構いませんよ。言われたこと何度もありますし。」

しかし実際は、「10年前」という言葉が出た時に湊の顔が少しゆがんでいた。

「そう？じゃあ改めて、私は国語科主任の鳥海とりうみです。よろしくね。」

「お世話になります。」

「・・・よろしく願います。」

彩音と湊は軽く一礼する。

「クラス分け、もう見た？あなたたちは私の担当する”F組”よ。

でも、この後すぐ始業式だから、先に講堂ね。案内するわ、ついて来て。」

鳥海はそのまま職員室を出ていった。二人もそれに続いて、職員室を出た。

「えー、諸君らの新しい1年の始まりにあたり・・・あー、”文筆頻々、然る後君子”という言葉を紹介します。うー、これの意味はといいますと・・・」

「(長い・・・)」

二人の気持ちは一致していた。多分他の生徒も二人と同じことを思っているだろう。

何せこの校長は必ず何か言うたびに「えー」だの「あー」だのがつくのだ。ウザいことこの上ない。それにダメ押しで、紹介している言葉自体間違っている。

「うちのクラス、転校生がいるってよ。」

「あ、オレ見た見た。岳羽さんと登校してきてさ。二人いるぜ。」

自分達の周りで噂話がされているようだ。しかもそれが自分達のことだと、なんとなく彩音は気になった。湊はそんなことお構いなしで見つからないようにあくびをしていた。

「おやあ？なんか話し声がしましたねえ？鳥海先生のクラスの辺りですかあ？」

「・・・つたく、静かにしてよ！怒られるの私なんだから！！」

「(自分のためかよ！)」

またも二人は心の声がハモってしまった。

しかし、噂話は止みそうにない。

そうしている間も、校長の長話は続いていた・・・。

「じゃあ、呼んだら入ってきてね。」

鳥海が先に教室に入る。おなじみの転入生紹介だ。

親戚中をたらいまわしにされて、その度に転校を繰り返している二人からすれば、自己紹介など今更緊張しない。後でクラスメイトから質問攻めにされるのが厄介だな、くらいにしか考えていなかった。「いいわよー！入ってきてー！」

クラスに入った途端、一斉に視線が二人に集まる。

「有里 彩音です。よろしくお願ひします。」

「・・・有里 湊。よろしく。」

「じゃあ二人の席は、そこが空いてるわね。そこに座ってください。」

その席は廊下側から3列目の前から2つ目と3つ目だった。

彩音は前から2つ目、湊は前から3つ目に座る。

二人ともクラスのほぼ全員から視線を浴びていた。特に彩音の通路を挟んで隣の席の男子生徒からの興味の視線がすごい。

「はいはい、質問は後。今は先生の話聞いてね。連絡してないと後でいろいろ言われるの、私なんだから！」

鳥海その言葉でいくらか視線は止んだ。

しかし、挨拶が終わると同時にクラスメイトの殆どが集まってきた。二人の予想通り、そしてお約束通りに質問攻めされたのは言うまでもない。

「つ、疲れた・・・毎回のことだけど、みんな転入生に興味持ちすぎ・・・」

「全くだ・・・」

「湊は隠れて音楽聴いてたからいいじゃない！」

ホームルームも終わり、二人は席でぐったりしていた。

どこから来たかとか、好きな人はいたのかとか、運動は出来るかとか、異姓のタイプはどんな人かとかエトセトラ。とにかく二人は質

問攻めの波にあい、疲れきっていた。

「よっ、転校生ズ！」

そこにまた一人のクラスメイトがやってきた。彩音と湊はまたかと内思いながら誰だと顔を上げる。

「なんだよ、んな『また好奇心旺盛なクラスメイトか・・・』って顔すんなよ！」

「誰？」

「ん、オレか？オレは伊織いおり 順平じゅんぺい。ジュンペーでいいぜ。実はオレも中2ん時、転校でここ来てさ。転校生って、色々と一人じゃ分かんねえじゃん？だからオレが最初にちゃんと話しかけなきゃなっさ。」

「・・・なるほど。」

「・・・確かにな。質問攻めでちゃんとした話も何もあつたもんじやない。」

そこにゆかりがやってくる。

「全く、相変わらずだね・・・誰彼構わず馴れ馴れしくしてさ。ちよつとは相手のメーワクとか考えた方がいいよ？」

「な、何だよ。ただ親切にしてるだけだつて。」

「ふうん、ならいいんだけど。」

ゆかりは二人に向き直った。

「なんか・・・偶然だよな。同じクラスになるなんてさ。それも、二人とも。」

「だよな。びつくりしちゃった。」

「兄弟、それも双子だと普通なら別々にされるからな。」

「はは、あなたたちも？」

「おいおい、オレだって同じクラスだぜ？仲間に入れてくれよー。」  
少し取り残されていた順平も話に入ってくる。

「てか、三人って知り合い？うち湊とゆかりツチってどういう関係？初日から一緒に登校したって聞いてさー。女子は女子でレベル高いの並んじやうし、それにもう一人もなかなかの美形だろ？噂のマ

トだっただんだけー？」

順平の話にゆかりは呆れ気味だ。

「ハア・・・もう、そういうのやめてよねー。噂、噂ってめんどくさいなあ。私はともかく、この二人は転校したてなんだよ？色々言っただけか、かわいそうとか思わないのかなー。」

「・・・僕も岳羽さんに同感。岳羽さんが可哀相。」

「だよー」。・・・じゃ私、弓道部の用事あるから行くけど、順平、この子に手出したりしないですよ？」

ゆかりは教室を出て行った。順平がやれやれ、と肩をすくめる。

「あの方、保護者が何か・・・？あつ、言っとくけどマジでヤマシイつもりはないからさ。何か困ったこととかあったら、いつでも相談してくれよな！」

「うん、覚えとく。」

「へへっ、んじゃ、これから宜しくな。」

順平が得意そうに笑う。彩音も軽く微笑み返すと、席を立った。

「さて、帰ろうか湊？」

「・・・ああ。そうだな。」

湊も続いて席を立つ。

「あ、何？帰んの？じゃあさ、一緒に帰らねえ？」

「うん、いいけど。順平は家は蔵戸台方面なの？」

「ああ。じゃ、そろそろ行こうぜ。」

その後は三人で他愛もない話をしながら帰った。

その夜。

彩音たちやゆかりが自分の部屋に戻った後、ラウンジで美鶴は読書をしていた。

そこに、上から一人の少年が降りてくる。

「ちよつと、出てくる。」

「・・・ん？」

美鶴も本から一旦顔を上げた。



「気づいてるか？このところの新聞記事。」

「・・・ああ。それまで普通だった者が、ある日を境に急に口も聞けないほどの無気力症に陥る・・・。最近、流行りらしいな。記事ではストレス性ということ片付けられてるが・・・。」

「そんなわけあるか。絶対”ヤツら”の仕業だ。・・・でなきや、面白くない。」

美鶴は少し呆れたような顔をした。

「相変わらずだな。・・・一人で大丈夫か？」

「なに、心配ない。トレーニングのついでだ。」

少年はそう言つて寮を出て行つた。

美鶴ははあ、と軽いため息を吐く。

「全く、明彦のやつ・・・遊びじゃないんだぞ・・・。」

その呟きは誰にも聞かれることなく消えた。

静かに時は迫る。暗い影は段々と忍び寄る。あと・・・2日。

4月7日 く転入初日く（後書き）

いかがでしたでしょうか。

まだ戦闘シーンなどは2話先になると思います。

ご意見、ご感想などございましたら参考にさせていただきますので、  
ありましたら宜しくお願いいたします。

4月8日 くベルベートルームく（前書き）

恐らく次で戦闘描写入ると思います。

うまく書けるかどうか心配ですが、見てやってください。

くメインキャラ紹介2く

桐条 美鶴

月光館学園3年D組所属。

月光館学園の母体「桐条財閥」のご令嬢。

特別課外活動部部长、生徒会長、フェンシング部部长を兼任する。

定期テストではいつも不動の1位を獲得している。

お嬢様育ちのため、一般常識から少しズレているところも。

では、どうぞ。

## 4月8日 くベルベートルーム

転入してから2日目。彩音と湊が学園から帰ってくると、見慣れない中年の男がゆかりとラウンジで話していた。

「あ、帰ってきました。」

「なるほど……この二人か。」

男は二人にソファに座るよう促す。

二人がソファに座ると、人のよさそうな笑みを浮かべて男が話しかけてきた。

「やあ、こんばんわ。私は幾月いくつき 修司しゅうじ。君らの学園の理事長をしている者だ。イ・ク・ツ・キ。言いくいだる？お陰で自己紹介はもうも苦手だよ。油断すると、噛みかねん……。」

「はあ、どうも。有里 彩音です。」

「……有里 湊です。」

二人は幾月の軽い感じに少々驚きつつ、挨拶を返す。

「部屋割りが間に合わなくて申し訳なかったね。正式な割り当てが決まるまで、まだ少しばかりそうだ。さてと、何か訊いておきたいことはあるかい？」

「……理事長が、どうしてここに？」

彩音がまず訊いた。

「どうしてって……君たちを迎えるためさ。ダメかい？」

「……いえ。今まで転校してきた中に、理事長直々に迎えてくれる学校なんて、なかったものですか。」

「そうか、まあそうだろうね。ここはこういう感じの学校だから、気にしないでいいよ。……あ、岳羽君。そういえば、桐条君は？」

「ハイ、もう上に。」

幾月はやれやれ、といった感じになった。

「いつもながら真面目だねえ。顔くらい出せばいいのに。他に質問はあるかい？」

彩音は湊をちらりと見た。湊は小さく顔を横に振る。

「大丈夫です。ありがとうございました。」

「よろしい。じゃあ、いい学園生活を。私はそろそろ失礼するよ。」  
幾月は席を立った。

「転入したてはいろいろと疲れるだろ？早めに休むといいよ。身体なんて、ぐーぐー寝てナンボだからね。昔、マンガにあつたらう？”ぐーぐーナンボ”？・・・なんちゃって。」

場の空気が凍りついた。

「・・・ごめんね。」

ゆかりが小声で謝る。

幾月は凍った空気に気づかないまま外に出て行ってしまった。

「・・・いつもあんな感じ？」

「そうだよ。・・・全っ然、面白くないのに。」

ゆかりがうんざりした顔を見せる。

「確かに、あれが毎回だとキツイかも・・・って、あれ？岳羽さんって、いつも幾月さんと会ってるの？」

「えっ？ええーっと、その・・・」

彩音の素朴な質問にゆかりが慌てた。予想外の質問だったのだろう。  
「き、桐条先輩ってほら！桐条のご令嬢でしょ？だから理事長として、いろいろ話があるみたいなんだよね！だから先輩が住んでるこの寮にもちよくちよく来る、って言うか・・・」

「・・・？」

「・・・？そうなんだ？」

二人がゆかりの慌てぶりにハテナマークを浮かべる。

「そ、そうなの！じゃあ私、部屋に戻るねっ！おやすみっ！」

ゆかりはそそくさと階段を上がって行ってしまった。

「・・・湊、私そんな変なこと訊いたかな？」

「さあ・・・？」

二人が首を傾げつつ、言われた通りに休むためラウンジを後にした。

二人がベッドに入って眠った頃

「お疲れさま。どうだい、二人の様子は？」

大きなモニターがあり、ラウンジほどの広さを持つ部屋に幾月は入ってきた。

既にモニターの前の機械を操作していたゆかりと美鶴が振り返る。

「先ほど就寝しました。今は眠っています。」

モニターには二人の部屋と、その部屋の奥のベッドで眠る二人の姿が見える。

「理事長、やはり二人は・・・」

「まあ、とりあえず見守ろうじゃないか。・・・もうすぐ”影時間”だ。」

理事長は近くにあった椅子に座る。

その頃、辰巳ポートアイランド、裏路地・・・

「ハア、つまんね・・・」

一人の男性が持っていたラジオを放り投げる。

そのラジオからはまだ軽快な音楽が流れていた。

『KJプレゼンツ、ザ・ベイ・ハッピー・チューナーズ。えー、来週もまた、この時間にお会いしましょう。バイバイ!』『この番組は、人に・永遠の・快適時間、桐条エレクトロニクスの提供でお送りしました。』

そしてまた、時計の針が0時を差す。

『0時です。』

一瞬にして周りに異変が訪れる。

「・・・ん？」

先ほどラジオを聴いていた男性だけが、その場に取り残されたかのようにひとり動いていた。

「なに・・・え・・・？」

男性はようやく異変に気づいたように、はっと夜空を見上げる。そ

して同時に、自分の異変にも気づいたようだった。

「か……らだ……が……」

動かない身体。そして男性の顔や手に、まるで血のように黒いものが流れ出す。

「……あ……あ……あ……」

ああああああああああああああああああああ！うわあ……

「……………」

男性”だったもの”はぐしゃりとその場に崩れ落ちた。

再び、三人がいる部屋。

「……フム、二人とも平然と眠ったまま……か。」

幾月がモニターに映された二人を見つつ言う。

「每晚0時になるたび訪れるこの”影時間”は、言わば隠された時間だ。普通の人間は棺のような姿に”象徴化”して、この時間があることすら感じない。」

幾月はすらすらとこの時間の説明をしていく。

「じゃあ、二人は……」

「見ての通り、二人に”象徴化”は起きてない。眠ってはいるけど、二人は今、ちゃんと影時間を体験してる。後は適性があるかどうかだ。というか、あるんだろうね……なければ今頃、奴らの餌食になってる。」

「餌食……ですか。」

ゆかりが露骨に嫌そうな顔をした。

「とにかく、もうあと何日かは、こうして様子を見てみないと。」

「はい。」

「隠れてこんなことして、ちょっと気が引けますけどね……」  
ゆかりの表情は晴れないままだ。

二人はモニターの中で、この”監視”に気づくことなく眠りつつけている。

「……………さま……………」

「有里 彩音さま……………」

「有里 湊さま……………」

二人は夢の中で、走って青い扉に入っていくような夢を見た。

気がつくくと、そこは前面ベルベット張りの部屋だった。

二人は並んで椅子に座った状態だ。

いくらか古風な造り方のそこは、どうやら上にながって行く「エレベーター」のようだ。

どこか悲しい旋律の歌とピアノが流れているが、どこにもピアノストや歌い手はいない。

テーブルを挟んだ向こう側には、ぎよろ目と長い鼻が特徴的なタキシードを着た老人が座っている。

その左脇には、エレベーターガールのような服を着た銀髪の女性、右脇にはホテルのドアマンのような男性がそれぞれ立っていた。二人とも分厚い辞書のような本を抱えている。

「……………ようこそ、”ベルベットルーム”へ……………」

老人が口を開いた。

「私の名は、イゴール……………お初にお目にかかります。」

イゴールと名乗った老人は話を続ける。

「さて、ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場所……………ここは、何かの形で”契約”を果たされた方のみが訪れる部屋……………」  
目の前のテーブルに、この前寮の玄関で署名したカードが置かれていた。

「今から貴方がたは、この”ベルベットルーム”のお客人だ。貴方がたは”力”を磨くべき運命にあり、必ずや私どもの手助けが必要となるでしょう。貴方がたが支払うべき代価は1つ……………」  
「契約」に従い、ご自身の選択に相応の責任を持って頂くことです。」

二人の脳裏に、目の前のカードのメッセージとあの時現れた少年の言葉が浮かぶ。



「・・・分かりました。」

「・・・分かった。」

「これをお持ちなさい。」

二人の返事を聞くと、イゴールは何かを合図するかのようには手を動かす。

すると、二人の前に青く光る鍵が現れた。二人はそれぞれの鍵を取る。

「おっと、紹介が遅れましたな。こちらが、エリザベス。そしてこちらがテオドア。同じくこの住人だ。」

イゴールが左脇の女性と右脇の男性を指し示す。

「エリザベスと申します。お見知りおきを。」

「テオドアと申します。テオ、とお呼びください。」

紹介された二人が一礼した。

「では、また、お会いしましょう・・・。」

イゴールのその言葉を最後に、二人の意識は遠くなった・・・。

二人の旅路の始まりはもうすぐそこに。いや、もう既に始まっているのかもしれない。ついに、明日。

4月8日 くべルベットルーム（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ご意見ご感想などございましたら宜しくお願いいたします。

さて、次は少しばかり長くなりそうです。

少し展開をどうしようかと思案中です。

主人公、と書いておきながら湊くんがあまり話さないし、サブキャラみたいになってる気がします。もうちょっと介入させないとダメですね（汗）。

## 4月9日 〈覚醒〉（前書き）

ついに最初の山場、みtainなところですよ。

読んでくださる皆様、ありがとうございます。

〈メインキャラ紹介3〉

伊織 順平

月光館学園高等部2年F組所属。

特別課外活動部内ではムードメーカー的存在。

「テレットテレット！順平はレベルアップ！」とレベルアップの際に言う為、プレイヤー間で「テレット」とあだ名されている。女性主人公では魔術師のコミュ相手だったが、特別な関係にはなれない。

それでは、どうぞ。

## 4月9日 〈覚醒〉

「・・・何か、不思議な夢だったなあ・・・。あれ？」

目が覚めた彩音は、手の中に何かの感触があることに気づいた。

「これ・・・あの夢で貰った・・・。」

握っていたのは、あの青い鍵。”契約者の鍵”と呼ばれるものだった。

彩音は不思議に思いながらも、湊にも見せてみようと思い、鞆の奥に仕舞った。

「・・・姉貴。夢、見たよな？」

「・・・うん。やっぱり、湊もか。湊もあの時いたから、もしかしてとは思ったけど・・・鍵、持ってる？」

「これだろ。」

モノレールから降りたあと、昨日の夢について話していた湊は、ポケットからあの契約者の鍵を取り出す。

「それ。じゃああれ、夢じゃなかった、って事？あー、あの・・・イゴールさん、だっけ？に訊いておけばよかったあ。」

「・・・夢であり、夢じゃないんだろ。」

「・・・？どういうこと？」

彩音は湊の言ったことに首をかしげる。

「これを貰ったのは紛れもない現実。しかしそれを貰ったのは夢の中。」

「??？なんか、こんがらかってきた・・・。」

「・・・僕も、言ってる分かんなくなってきた。」

二人して悩んでいたところで、いつの間にか校門まで着いていたようだ。

「ま、詳しい話とかは後にしよ？大体これ貰ったところで、使い方とか分かんないんだしさ。」

「・・・そうだな。」  
湊は鍵を元のポケットに仕舞った。

夜。

また”影時間”が訪れ、今日もゆかり、美鶴、幾月の三人は二人の監視をしていた。

「どうだい、様子は？」

「・・・昨夜と同じです。」

モニターには昨日と同じように眠っている二人の姿がある。

「フムフム・・・やはり興味深いね、”あの二人”は。たとえ影時間への適性があっても、初めはもっと不安定になるものだ。記憶が消えたり、混乱したりね。今までとの誰とも違う、実に例外的なケースだよ。それに例え双子だと言っても、二人同時になんてね。偶然かもしれないけど、こんなことは今までなかった。」

ゆかりは相変わらず複雑そうな顔をしていた。

「でも、なんか・・・これじゃモルモットみたい。」

「そう言ってくれるな。二人ともクラスメイトだそうじゃないか。同学年で、しかも一人は女の子が仲間になったら、君も心強いだろう？我々には、どうしても力が必要なんだよ。」

「それは、分かってますけど・・・」

何の関係もない二人を、こんな風に巻き込んでいいのか？とゆかりは思う。

自分は理由があって、自分から戦いに志願した。だけどこの二人は？そんな風にゆかりが思っているところに、外からに緊急呼び出し音が鳴った。美鶴がすぐに応答する。

「こちら、作戦室だ。・・・明彦あきひこか？どうした？」

「凄いヤツを見つけたっ！これまで見たこともないヤツだ！！」

部屋に緊張が走る。

「ただ、あいにく追われててな・・・もうすぐそっちに着くから、一応知らせておく。」

「それ・・・ヤツらがここに来るってことですか!？」

明彦と呼ばれた少年からの連絡を聞いて、ゆかりは驚きを隠せない。  
「理事長!!今日の監視は、ひとまずここまで。我々は応戦の準備をします!!」

「た、頼んだぞ!!」

美鶴はゆかりをちらりと見ると、部屋のドアに向かって走り出した。ゆかりと幾月も慌てて後に続いた。

1階のラウンジに、乱暴な音を立てて一人の少年が入ってきた。そしてすぐさま鍵をかける。

「クツ・・・」

そしてその場に座り込んでしまった。

「明彦っ!!」

美鶴とゆかりも上から降りてくる。

「・・・大丈夫だ。それより、凄いのが来るぞ。見たらきつと驚く。」

「面白がってる場合か!!」

美鶴が一喝した。

「真田君、”ヤツら”なのか!？」

「はい。ただ、普通のヤツでは・・・」

少年が言い終わらないうちに、寮を大きな揺れが襲った。

「キヤッ!!なにこの揺れ・・・冗談でしょ!？」

「理事長は作戦室へ!岳羽、君は上にいる二人を起こして、裏から逃がすんだ!」

美鶴が素早く指示を飛ばす。

「えっ・・・先輩達は!？」

「ここで何としても食い止める。明彦、連れてきたのはお前だ。責任が取ってもらっぞ。」

「ヤツらの方が勝手について来たんだ!まったく・・・。何してる!早く行け岳羽!!」

「わ、分かりました！」

ゆかりはすぐ踵を返し階段の方へ向かって行く。

「じゃ、じゃあ頼んだぞ！」

幾月もすぐさま階段を登っていった。

「よし、では行くぞ。明彦、立てるか？」

「ああ。」

美鶴は少年 真田 明彦が立ち上がるのを確認すると、武器を持ち直し、鍵を開けて外へ向かった。

真田もあとに続く。

湊は先ほど目が覚めた。悪い時の湊の勘は、驚くほど良く当たる。

すぐ近くにあった制服に着替え、外の様子を見に行こうかと部屋のドアを開けようとした時、ドアを乱暴にノックする音が聞こえた。

「起きて！！ゴメン、勝手に入るよっ！」  
ドアが開く。

「一体何が・・・」

「悪いけど、説明しているヒマないの！今すぐ、ここから出るから！とにかく急いでるの！有里さんも起こして、1階の裏口から外に出るよっ！」

ゆかりは早口でそれだけ言うと、すぐに階段の方へ駆け出す。

彩音はもう見に行こうと制服に着替え、3階の休憩所まで来ていた。

「よかった！ごめん、説明してるヒマなくて悪いけど、今すぐここから出るよ！ついて来て！」

「分かった！」

彩音は何も訊かずに下へ降りる。そこには湊もいた。

「じゃ、二人とも。一気に行くよ！私について来て！」

ゆかりは1階の奥の扉まで走り出した。そこは裏口になっていて、普段ならそこから浴場などに行けるようになっていた。

「よし、ここまで来れば・・・」

そうゆかりが言った直後、美鶴からの通信がゆかりの通信機に入る。

「岳羽、聞こえるか!？」

「ハ、ハイッ!聞こえますっ!」

「気をつける、敵は1体じゃないみたいだ!こことは別に本体がいる!」

「マジですか!？」

ドンッ!!!

裏口のドアを何か外から叩いた。ゆかりは慌てて、「ひ、ひとまず退却!？」と言ってまた階段の方へ駆け出す。

外では、美鶴と真田が寮を襲ってきた小型の怪物の相手をしていた。

「クソっ、数が増えてる!」

「避ける、明彦!」

美鶴が後ろから真田に飛びかかろうとしていた怪物を武器のレイピアで串刺しにする。

「・・・すまん、助かった!・・・なっ!？美鶴!」

真田が寮の壁を指さす。そこには、今二人が倒したような小型のものとは比べ物にならないくらいの大きさの怪物がいた。

「まずいつ!寮の壁を登って行ってるだ!?!・・・明彦、すぐ片付けるぞ!屋上で返り討ちにする!」

「了解した!」

真田は返事を返すと、腰の部分につけてあるホルスターから銃を引き抜いた。

三人は屋上に来ていた。ゆかりが外から扉の鍵をかける。

「フウ・・・鍵も掛けたし、ひとまずは、大丈夫かな・・・」

「・・・いや、まだだ。」

湊が屋上の端を睨みつける。

「・・・!？」

ぬらり、と明らかに人のものではない大きさの黒い手が、屋上の端



にかかった、そして別の黒い手が持った、人の顔を模したような仮面を、きよるきよると見回すように動かす。その顔が、三人を捉えた。

ばっ、と黒い手が7本ほど屋上の端にかかる。後ろから大きい剣を持った黒い手も姿を現した。

その”異形”が屋上へと上がってきた。”それ”は、人の形をしていなかった。

腕と腕がつながったようなものが、何本も絡み合っていた。そのうち一つの手が。青い仮面を持っている。他はすべて剣を持っているか、足のよう動いていた。

「嘘っ……！外を昇ってきたの……！？」

作戦室に、外の小型の怪物を全て葬ってきた美鶴と真田が入ってくる。

「いた！屋上だ……！」

真田がモニターの中の1つの映像を指差して言う。

「……なんだ、あの巨大な”シャドウ”は……！」

「……美鶴、行くぞ……！」

美鶴が真田の方を振り向き、頷く。そしてドアに向かって走りだそうとした。

「待て……！」

「……！？」

美鶴と真田が自分達を止めた人物　幾月に目を向ける。

幾月はモニターを見たままだった。

「あれがここを襲ってきた敵……”シャドウ”よ！」  
敵、という言葉に二人が視線を鋭くする。

「そ、そうだ、戦わなきゃ……！」  
「召喚……私だって出来るんだから……！」

ゆかりが足につけていたホルスターから銃を取り出す。

そしてその銃を、敵に向けることなく自分の額に向けた。

「・・・っ！何してるの！死にたいの!？」

彩音は驚いて止めようとす。しかし、ゆかりは止めない。荒い息を繰り返し、引き金を引こうとする。

しかし、その引き金が引かれることはなかった。怪物　シャドウが放った攻撃によって、ゆかりが後ろに吹き飛ばされたからだ。

「キヤアツ!!」

「岳羽さんっ!!」

「・・・大丈夫。軽く頭を打っただけだ。」

湊がすぐちらりと状態を確認して言った。

「あ!」

彩音が足元を見る。そこには、ゆかりが吹き飛ばされた際に飛ばされてきた銃があった。

ドクン。

心臓が一際大きく鼓動を打った。

それを取れ。

そして引き金を引け。

我は汝。汝は我。

我は・・・

彩音は自分の中から声が聞こえた気がして、足元の銃を取る。

そして迷うことなく、こめかみに銃口を当てた。

湊は何も言わない。ただ静かに、シャドウを見据えていた。

そして・・・

「ペルソナ」

引き金を引いた。

彩音の背後で、何かが形を成していく。  
長い、彩音と同じような栗色の髪。背負ったハート型の豎琴。機械めいた体。

「我は汝・・・汝は我・・・我は汝の心の海より出でし者・・・  
幽玄の奏者、オルフェウスなり・・・」

彩音は口の端を吊り上げた。

自分の中から力が湧き出てくるような感覚。まるで自分が満ちていくような・・・

しかし、それもそう長くは続かなかった。

ズキン！！と彩音の頭に痛みが走る。

湊も同じように痛みが走り、頭を抱えた。

オルフェウスにも異変が起きた。酷く痙攣し始め、何かが内側で暴れているかのようにもがく。

突如、何かがオルフェウスを食い破った。

いや、そう見えた、と言ったほうが正しいだろうか。

しかし、そこにいたのはもう先ほどのオルフェウスではなかった。

黒い棺をいくつか鎖でつなぎ、その背に背負っている。腰には刀をさし、黒いローブを着ていた。その顔の部分はどこか骸骨を思わせるようなもの。

”死神”。

その死神は真っ直ぐシャドウに向かっていく。彩音と湊の頭に激痛が走り、思わず彩音は声が出てしまうが、死神は止まらない。

シャドウを千切り、握り潰し、一閃し、ぐちゃぐちゃに屠ほぶっていく。まだ動く一つの手を握り潰すと、シャドウは霧散した。

『グオアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！』

死神はまるで獣のように、咆哮を上げた。

「……!!」

作戦室で屋上の様子を見ていた三人は、今起きた光景に啞然としていた。

「何だ、今は……!?」

「……」

幾月はこの光景を見て、その口元に狂った笑みを見せたが、二人はそのことに気がつかなかった。

死神は一瞬ノイズが走ったように姿が歪むと、元のオルフェウスの姿に戻った。彩音と湊の頭の痛みも引く。

「……終わった……の?」

ゆかりが今の光景を見て、少し震えた声で言った。

「……!」

軽く頭を振った湊が、すぐに彩音の元へ駆け寄った。

「……姉貴っ!」

彩音が前のめりに倒れそうになるのを、湊が間一髪で支える。

彩音はぐったりとしたまま、目覚めなかった。

「有里くん!」

ゆかりはまだ少し震えている足は動かし、二人の元に行った。

「……!」

その時、湊が前を見据えた。先ほどのシャドウの破片がまだ動いていたようだ。

「まだ、動いてる……! やっ……こ、来ないでッ!!」

「……岳羽。姉貴を頼む。」

湊はそう言つと、彩音が未だ握ったままの銃を抜き取ると、ゆかりに彩音を預ける。

「え……っ?」

湊は二人を守るように数歩前になると、銃口をこめかみに当てた。

「来い……」

そしてそのまま、彩音と同じように躊躇いなく引き金を引く。

それもまた、彩音の「オルフェウス」に良く似ていた。

違うところといえば、身体の色と髪型、豎琴の形位のものだ。

「行け。」オルフェウス”。

湊が命じると、オルフェウスは豎琴を手に持ち、シャドウの破片に向かつていく。

そしてオルフェウスが豎琴を叩きつけると、シャドウの破片は今度こそ消滅した。

でも同時にオルフェウスも虚空に溶けるようにして消えてしまった。ペルソナは1回の召喚につき1つの行動しか行えない。

しかし、湊はそれで充分というように、もう1体のシャドウに向かつて走り出した。

そして思いっきり蹴飛ばす。

シャドウは吹き飛ばされ、壁に叩きつけられて霧散した。

「ふう……」

湊は軽く息をつく。するとぐにやり、と視界が歪んだ。身体が重く、意識が遠くなってゆく……。

「あ……っ！」

ゆかりの前で、湊も倒れてしまった。

「ちよつと、大丈夫！？ねえ、ちよつと！二人とも！」

呼びかけながらゆかりは彩音をゆすってみる。湊のところへ行こうにも行けない状態だった。

「ねえってばっ！！起きてったらーっ！！！」

ゆかりが叫ぶが、二人は倒れたまま起きなかった。

ついに引き金は引かれた。その弾丸の目指すものは、果たして……

## 4月9日 く覚醒く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回はやっぱり長くなってしまいました。

一応湊もワールドは持っていて、デスも持っています。

召喚器が1つしかなかったので、同時に召喚は無理でしたが・・・

彩音と湊の名前の由来を書くのを忘れていました。

湊はそのまま、曾我部 修司さんの漫画からです。

彩音は、流石にあの「ハム子」こと「公子」では可哀相だと思ったので変えることにしました。私のゲームプレイ時に設定した名前です。

感想、ご意見などございましたら宜しくお願いいたします。

## 4月19日 く目覚めく（前書き）

今後の展開について、オリキャラを出すか？とか、パーティーメンバーとしてキャラが加入する前にそのキャラに会わせようか？などと考えています。

アドバイス等ありましたらお願いします。

キャラの紹介ですが、小説で出てきた順番に乗せるようにしています。後で加筆修正するかもしれませんが、あと1番最初の設定も。

くメインキャラ紹介4く

幾月修司

月光館学園の理事長。

元は桐条グループの役員だった。

よく寒いオヤジギャグで場を凍りつかせる。

女性主人公では夏休みの映画祭りに一緒に行くことも出来る。

特別課外活動部の顧問をしているが、ペルソナは召喚出来ない。

では、どうぞ。

## 4月19日 く目覚めく

また彩音と湊は、ベルベットルームあの部屋に来ていた。

「再び、お目にかかりましたな。」

彩音は少しだけきよるきよると辺りを見回す。

その様子に気づいたのか、イゴールが説明し始めた。

「貴方がたは”力”を覚醒したショックで、意識を失われたのです。」

彩音は納得したようにイゴールを見て頷いた。

「ほう・・・覚醒した力はお二人とも”オルフェウス”ですか。成る程、興味深い。」

「オルフェウス・・・って、あの、さっきの・・・って、あれ？湊も？」

彩音は湊の顔を見た。

「姉貴が気を失ったあと、僕も召喚した。」

「そういうこと。納得。」

また彩音はイゴールの方へ向き直った。

「それは”ペルソナ”という力・・・もう一人の貴方がた自身なのです。」

「もう一人の・・・自分？」

「・・・ペルソナ、か。」

「ペルソナとは、貴方が貴方の外側の物事と向き合った時、表に出てくる”人格”・・・様々な困難に立ち向かって行く為の、”仮面の鎧”と言ってもいいでしょう。」

「それが、”オルフェウス”？」

「・・・成る程。ペルソナとはラテン語で”仮面”だからな。」

「”ペルソナ能力”とは”心”を御する力・・・”心”とは、絆によって満ちるものです。他者と関わり、絆を育み、貴方だけの”コミュニケーション”を築かれるが宜しい。”コミュニケーション”の力こそが、



”ペルソナ能力”を伸ばしていくのです。よくよく、覚えておられますよう。」

「つまり、たくさんの人と仲良くなっていけばいい、ってことですよね？」

「そうなりますな。」

彩音は「心の力、コミュニケーションか・・・。」と考えこみ、湊は少しだけ面倒くさそうな顔になる。

「さて・・・貴方がたのいらっしやる現実では、多少の時間が流れたようです。これ以上のお引止めはできませんまい。今度お目にかかる時には、貴方がたは自らここを訪れることになるでしょう。では・・・その時まで。ごきげんよう。」

そのイゴールの声を最後に、また二人の意識は遠のいた。

彩音は、少しずつ意識がはつきりしてくるのを感じた。目を開けてみれば、寮のものではない天井が見える。すぐ傍に一人、人の気配を感じた。

「・・・あ、気がついた・・・？き、気分はどう・・・？」

「・・・ここ、どこ・・・？」

彩音がゆかりの方を向いて聞くと、ゆかりは心底ほっとしたように息を吐いた。

「はああ・・・良かった・・・やっと起きたよ・・・。あ、ここは辰巳記念病院って言って、駅前からちよっと思ったトコロよ。身体の方は心配ないって。過労みたいなものらしいけど・・・。」

「あ、あのさ・・・ごめんね。あの時は、何にも出来なくて・・・でも、驚いた。スゴいね、あの力。」

「あの”怪物”は・・・？」

「・・・シャドウのことね。シャドウは、私たちが戦っている敵。それに、あなたが使った力は、”ペルソナ”って呼ばれてる・・・。」

・・・大丈夫、後でちゃんと説明するから。ごめんね、隠してて・・・

「ううん、大丈夫。あんなこといきなり言われても、絶対信用出来ないと思うし……」

ゆかりは一瞬微笑み、また真面目な顔に戻った。

「えっと、さ……いきなりでナンだけどさ……私もね、あなたたちと一緒になんだ。」

「……どういう意味？」

「私のお父さん、小さい頃事故で死んじゃってさ……お母さんとも、距離が空いてて……あなたたちも、二人ぼっちなんですよ？」

彩音は無言でゆかりの言葉を待つ。

「実は私……あなたたちの身の上、色々聞いちゃってさ……私だけ知ってるのも嫌だし、話さなきゃって、ずっと思ってた……」

「……うん。」

「昔さ……この辺りで大きな爆発事故があったの。父さん死んだの、そのせいらしいけど、詳しい事情、分かってないんだ……父さんが勤めてたの、桐条グループの研究所だったの。だから、ここに居れば父さんの事情、何か分かるかもって思ってた。学園に入ったのも、この前みたいなことやってるのも、そういうワケ……もつとも、怖くてあの有様だったけどね……。私も初めてだったんだ……敵と戦うの。ゴメンね……。私が頼りないせいで、こんな……」

「……岳羽さんのせいじゃないと思う。私も怖かったし。」  
彩音は微笑んでみせる。

「ほんと……？」

「うん、誰だつてあんな怪物が襲ってきたら怖いよ。ま、湊はあの通りボーカルフエイスだから分かんないけど。」

「でも、ゴメンね……。それに起きた早々、こんな話……。待ってる間、色々考えちゃってさ。今まで色々隠してたし、まずは自

分のこと、話さなきゃって……。」

ゆかりの表情が少しやわらかくなる。

「でも、聞いてくれてありがとう。誰かに話したかったんだ、ずっと。」

ゆかりが立ち上がった。

「……じゃあ、そろそろ行くね。目を覚ましたって、知らせないといけないし。」

ゆかりはそのままドアの方へ歩いていく。しかし、ドアを開けたところで振り返った。

「……あ、あのさ。私のこと、”ゆかり”でいいからね。女同士だし、その……仲良くしようね。」

「うん、私も”彩音”でいいからね！」有里さん”だと、なんか変な感じだし！」

彩音の返事に、ゆかりも頷いた。

「じゃ、じゃね！」

ゆかりは軽く手を振ると、病室を出ていった。

同じころ、湊も隣の病室で目が覚めていた。

「……ん。」

「……目が覚めたか。どうだ、気分は？」

ベッドの傍に座っていた美鶴が、読んでいた本を閉じる。

「……大丈夫です。それより、ここは……？あと、姉貴……」

「ここは辰巳記念病院と言って、ポートアイランドにある病院だ。」

君の姉は、隣の病室にいるよ。今、岳羽が傍にいるはずだ。」

「……そうですか。」

「しかし、随分眠っていたな。過労とは医師から聞いていたが、10日も目を覚まさないなんてな。流石に心配したよ。まあ、転校したてで疲れも溜まっていたんだろっかな。」

「はあ……」

湊は少し申し訳なさそうな顔をした。

「別に責めている訳じゃない。それより、驚いたよ。土壇場で君も、君の姉も”あの力”を覚醒させたんだからな。あの時のことについては、君たちが退院してから改めて説明することになるだろう。そこで私達のことも話す。・・・ところで。」

美鶴はふと、湊の前髪で隠れているほうの目を見る。

「前髪が長くて邪魔ではないのかと思っていたが、まさか失明していたとはな。・・・驚いたよ。」

「・・・よく言われます。別に気にしてませんが。」

湊は目線を外す。これ以上話したくない、という拒絶だった。

「・・・そうか。すまなかった。・・・今日は一応検査も兼ねて病院に泊まってもらおう。医者の話では、目覚めたら簡単な検査をするだけで退院出来るそうだ。ゆっくり休むといい。・・・では、私はそろそろ失礼させてもらおうとしよう。ではな。」

美鶴は立ち上がると、病室を出ていった。

湊はその背を少し見つめていたが、また眠ってしまった。

つかの間の休息。安らかな日々も、いずれは・・・

4月19日 く目覚めく（後書き）

いかがでしたでしょうか？

湊の病室に美鶴を行かせたのは他に適任な人がいなかったからです。恋人関係にしたいから、という理由ではありません。

期待した方はすみませんでした。

本当は荒垣先輩でも・・・とは思ったのですが、この段階で出してもな、と。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いいたします。

4月20日 〈特別課外活動部〉（前書き）

お気に入り登録してくださった方、どうもありがとうございます！  
まだまだ未熟な文章ですが、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

〈メインキャラ紹介5〉

真田明彦

月光館学園高等部3年C組所属。

ボクシング部の主将で、16戦負けなしのエース。

大好物の牛丼にプロテインをかけて食べるという、ある意味凄い味覚の持ち主。

トレーニングに余念がなく、戦いもトレーニング感覚でやっているところがあるため、美鶴にたびたび注意されている。

女性主人公では星コミュの人物で、特別な関係になれる。

では、どうぞ。

4月20日 〱特別課外活動部〱

「おーす、久々じゃん。二人揃って休んじまって、ハラでも壊してたか？」

「・・・順平。」

「朝から元気だね・・・。」

彩音はあはは、と乾いた笑いを漏らす。

「ビョーキじゃねっつの！つか、ちょっと聞いてくれよー。」

「・・・何。」

「はっ、いかんいかん！オレはもう昨日までのオレとは違うんだ！」

「朝から元気だねー、ったく・・・向こうからでも聞こえたよ？」

ゆかりもやってきた。

「おっ、ゆかりツチじゃん。キミたち、同じ寮なのに別出勤？また噂のマトになっちゃうと・・・的なアレ？」

「はあ？ちよつと出るのが遅れただけ！つか、二人と話あるから。」

「バイバイ、順平。行こ、彩音、有里くん。」

「ええ・・・。」

ゆかりはさつさと順平を置いて歩き出す。順平が残念そうな声を出す。ゆかりは気にもとめない。

しばらく離れたところで、ゆかりが口を開いた。

「体、大丈夫？・・・彩音。有里くん。」

ゆかりがほんの少し頬を赤くさせた。まだ名前呼びに慣れていなかったようだ。

「大丈夫だよ。ゆかり！」

彩音もゆかりを名前で呼ぶと、ゆかりも嬉しそうな顔になる。

「あのさ、起きて急に、つて感じで悪いんだけど・・・今日、理事長からあなたたちに話があるらしいの。放課後、寮の4階に来て欲しいんだ。忘れないでよ？」

「オツケー。寮の4階ね？」

ゆかりが頷くと、彩音が「忘れないでよ?」と湊に念を押す。

「・・・覚えたよ。それより、いつから名前呼びに?」

ぱっ、と彩音とゆかりは顔を見合わせる。そして彩音が

「秘密!」

と、口に人差し指を当てて言った。

湊は少し目を見開くと、すぐそっぽを向いてしまった。

「・・・別に、いい。」

しかし言葉とは裏腹に、彩音とゆかりには湊がすねているようにしか見えなかった。

「・・・ふふつ、有里くんでもつとクールな感じかと思った。」

「湊はねー、単に表情が表に出ないだけ。まあ、こんなボーカルフ  
エイズだから誤解されやすいんだけどね。」

「へえ、そうなんだ?」

くすくす笑う二人に、湊はさらにぶすつとした表情になる。

その後二人で湊をからかいながら教室に向かった。

夜、二人は言われたとおりに4階に来た。

「あ、待ってたよ。さ、入って。」

そこには既にゆかりがいて、4階の部屋に二人を案内する。

その部屋にはもう幾月がいて、他に美鶴と真田もいた。

「やあ、来たね。」

幾月は二人に座るよう促す。二人が席についたところで、幾月が話し始めた。

「体の方は大丈夫そうで何よりだ。10日間も眠っていたから、流石に心配したよ。退院早々ここへ呼んだのは他でもない。君たちに話さなきゃいけないことがあってね。」

二人はなんとなく予想がついていた。恐らくこの間のことだろう、と。

「あ、そうそう。彼がここの寮のもう一人の住人の、真田君だ。」  
幾月が真田を差して言った。



「よろしくな。」

「どうも。」

二人は軽く会釈する。

「さて……いきなりでアレなんだけど……実は、1日は24時間じゃない……なんて言ったら、君たちは信じるかい？」

「何となく予想はつきますよ。夜中の、あの変な時間のことでしょう？」

彩音が先に思ったことを言った。

「察しがよくて助かる。初めてここに来た夜のことには覚えてるな？あの日、君たちは色々と思議な体験をした筈だ。自分が”普通と違う時間”をくぐったこと……覚えていいるということは自覚しているのだろう？あれは”影時間”。1日と1日の狭間にある、”隠された時間”だ。」

「……隠された時間？」

「隠されたと言うより、”知りようのないもの”ってとこかな。でも、”影時間”は毎晩、”深夜0時”になると必ずやってくる。今夜も、そしてこの先もね。」

「普通の奴は感じられないってだけだ。みんな棺桶に入ってお休みだからな。」

じゃああの立ち並ぶ棺桶は人間か、と二人は真田の言葉で納得する。通りで街中にたくさんある訳だ、と。

「けど、影時間の1番面白いところは見た目なんかじゃない。お前たちも見たる……”怪物”を。俺たちは”シャドウ”と呼んでる。シャドウは影時間にだけ現れて、そこに生身でいる者を襲う。だから俺たちでシャドウを倒す。どうだ……面白いと思わないか？」

「……確かに正義のヒーローみたいではありますけど。」

「……明彦！どうしてお前はいつも……痛い目を見たばかりだろ。」

美鶴が真田をたしなめる。

「まあ、いいじゃないか。ちゃんと戦ってくれてるワケだし。」

幾月が二人をなだめる。そしてまた真面目な顔に戻った。

「結論を言おう。我々は”特別課外活動部”。表向きは部活ってことになってるけど、実際はシャドウを倒す為の選ばれた集団なんだ。部長は、桐条美鶴君。僕は顧問をしてる。」

「シャドウは”精神”を喰らう。襲われれば、たちまち”生きた屍”だ。このところ騒がれてる事件も、殆どがヤツらの仕業だろう。」  
二人の脳裏に、最近騒がれている”無気力症”という事件が浮かび上がる。

「・・・なんとなく事情は察しました。ここにいる人が、ただその”影時間”という時間に入れるだけじゃないって事も。」

「ほう・・・そこまで分かってしまったか。」

「・・・だって、”シャドウ”はそこで生身でいる人を襲うんだろ？・・・あなたたちがその”生きた屍”になつていないのがいい証拠だ。そこまで”誰も知らない時間”を知ってるのなら、影時間に入ったことは1度や2度じゃない、ってことになるし・・・。」  
この推察に、美鶴と真田は感心した。

「その通り。実は、ごく稀にだけど、”影時間に自然に適應できる人間”がいてね。そういう人間は、シャドウと戦える”力”を覚醒できる可能性がある。それが”ペルソナ”・・・あの時、君たちが使つて見せた力さ。」

「じゃあ、ここにいる人はみんなその”ペルソナ使い”ってワケですか。・・・勿論、私達二人を含めて。」

彩音がこの部屋にいる人たちを見回す。

「(そこまで気づいたか・・・その思考の柔軟さに、頭の回転の速さ。普通ではないな。もっとも、少しだけ違っている部分はあるが)」

美鶴は興味深そうに二人を見た。

「君たちはなかなか鋭いね。そう、シャドウはペルソナ使いにしか倒せない。つまり、奴らと戦えるのは君たちだけなんだ。」

「(・・・君たちだけ?)・・・そうですか。」

美鶴が机の上にある2つのトランクを開ける。そこには、あの時二人が使った銃　ペルソナの”召喚器”と、”S・E・E・S”と書かれた赤い腕章が入っていた。

「要するに、君たちに仲間になって欲しいんだ。君たち専用の”召喚器”も用意してある。君たちの力を貸して欲しい。」

美鶴は二人の目を真っ直ぐ見据えた。

彩音は少し考えるそぶりを見せて、言った。

「・・・私に出来ることなら、やらせて貰います。・・・湊は？」

「・・・同じく。姉貴がやるなら。」

二人の答えに、ゆかりが安心したように息を吐いた。

「ふう、良かった。あなたたち、断るかと思つてた・・・。ちよつと・・・心強いかも。」

「いや、感謝するよ、ホントに。ああ、そうそう。君たちの、寮の割り当てだけだね。このまま今の部屋に住んでもらうことにしよう。偶然、のびのびになってたけど、こりゃケガの功名だね。ハハハハ・・・」

「偶然のびのびって、あれは・・・」

「多分ですけど、この寮に入れるのって、その”特別課外活動部”の人だけなんでしょ？もしくは、その候補生。」

彩音の言葉に、一瞬美鶴とゆかり、幾月が硬直した。

「・・・夜中に動向を探られていたりしてな。ここの機械を使って、監視とか。」

さらに続く湊の指摘に美鶴、ゆかり、幾月の3人の顔がこわばる。

「え、嘘！？全然気がつかなかつた・・・。」

「いや、僕も今の話と、その機械を見て思ったただだし、本当かどうかは。ただ、ありそうだなあ、くらいにしか思つてない。」

「そつか、そつだよね。」

二人の会話を聞き、実際に監視していた三人は「(バレていなかった・・・)」と心の中で安堵した。

「(しかし、ここまで鋭いとは・・・なかなか有能な人物かもしれ

ないな。この二人は。ぜひ生徒会に欲しい人材だな・・・」

「（よかったあゝ・・・）」

「（ふう、助かったな・・・。でも、流石にこの二人でも僕のあれには気づかないだろう・・・。あれはまだ知られるわけにはいかなからね・・・）」

三人は三人で、談笑している二人を見ながらそれぞれのことを思っていた。

そのとき、二人の頭の中に声が響く。そして浮かび上がる一枚の夕ロットカード。

そのカードは”0番 愚者”。

我は汝、汝は我・・・

汝・・・新たな絆を見出したり・・・

二人は、イゴールの言葉を思い出していた。

「（これが・・・コミュニケーション。）」「」

二人は「また後でベルベツトルームに行けたら話を聞こう」と思い、思考を一旦止めた。

影時間。

ベッドでうとうとしかけていた彩音は、誰かの気配を感じた。

「やあ、元気かい？」

見ると、初めて寮に来た時に署名を求めてきた少年だった。

「キミ、確かこの間の・・・。どうやって入ったの？」

彩音は起き上がり、目をこすりながら聞いた。

「僕は、いつだって君の傍に居るよ・・・」

少年は微笑んだ。

「・・・もうすぐ・・・」終わり”が来る。何となく思い出したんだ。だから、君たちに伝えなきゃと思つて。」

「・・・ありがとう？」

「・・・あははっ。お礼言われちゃったな。どういたしまして・・・

って言うんだよね？」

少年は嬉しそうに笑う。

「・・・”終わり”ことは、実は僕にもハッキリとは分かんないんだけどね。・・・それより、とうとう”力”を手に入れたみたいだね。それも、ちょっと変わった”力”みたいだ。何にでも変われるけど、何にも属さない”力”・・・それはやがて”切り札”にもなる力だ。君たちのあり方次第だね。」

「・・・ペルソナ、のことだよな？確かに、あの時の力は何か不思議だったけど・・・」

少年は答えなかった。まっすぐ彩音の顔を見ている。

「・・・初めて会った時のこと、覚えてる？交わした約束は、ちゃんと果たしてもらおうよ。僕はいつでも君たちを見てる。たとえ君たちが僕を忘れててもね・・・。」

少年は一瞬消えると、少し離れたところに現れた。

「じゃ、また会おう。」

少年はそれだけ言うと、すっと消えてしまった。

彩音はぼんやりと考える。

「あの子の言ってたことって、あの署名のことなんだろうけど・・・何でかな。あの子と初めて会ったのは、あの日じゃない気がする・・・。」

彩音は暫く少年のいた辺りを眺めていたが、やがて睡魔に負け、ベッドに倒れるようにして眠ってしまった。

同じ頃、湊の部屋にもあの少年は現れていた。

そして湊にも、彩音と全く同じようなことを言う。

しかし、すぐには消えずに少しの間、何か考えているふうだった。

「・・・まだ何かあるのか？」

「・・・君の持つ力はそれだけじゃなかったみたいだ。まだ、もう1つあったよ。だけど、今はまだ使えない。」

「もう1つの、力・・・？」

「それがどんな効果をもたらすのかは、まだ僕にも分からない。でも、いずれ分かる時がくる。・・・じゃ、また会おう。」  
少年は今度こそ消えた。

「・・・」

湊は少しの間考え込んでいたが、分からないという風に頭を軽く振り、ベッドの中に戻った。

新たな居場所と新たな繋がり。この2つのもたらすものは・・・

4月20日 〈特別課外活動部〉（後書き）

いかがでしたでしょうか？

少し伏線張ってみました。あからさま過ぎたかな・・・？1つは私のオリジナル設定になる予定です。

ゲーム本編のあの説明のシーン、ちょっと主人公が鈍感過ぎないか？と思い、変えさせてもらいました。

湊をもっと関わらせる、と前に書きましたが、少し極端すぎたかな、とも思います。今回はちょっと拗ねさせてみましたが、どうだったでしょう？

ご意見、ご感想などございましたら宜しくお願いいたします。

4月21日 〈タルタロス〉（前書き）

少し長いです。

さて、前回に少し付け足しをさせていただきました。あの子と会うイベントをすっかり忘れていたので・・・

〈用語解説1〉

ペルソナ

ラテン語で「仮面」を意味する。もう1人の自分（byファイルモン）

ペルソナについては様々な解釈がそれぞれの作品でなされているが、ペルソナ3では「自分の死と向き合い、乗り越えられた人間が使役出来る人格」とのこと。

普通ペルソナは1人に1体しか存在しないが、ごく稀に複数のペルソナを持ち使い分けられるペルソナ使いが存在する。その力は「ワイルド」と呼ばれ、ワイルド能力者はベルベットルームにて手助けを受けることになる。

（参考 ペルソナ倶楽部P3）

では、どうぞ。



4月21日　くタルタロス

放課後。帰りの支度をしていた二人の元に、ゆかりがやってきた。

「あー、ねむ・・・マジ寝ちゃうかと思った・・・」

「確かに・・・湊なんか爆睡してたよ。前からでも寝てるって分かったし。」

「・・・仕方ないだろ。昨日の夜少し考え事してたんだから。」

そんな他愛もない話をしていると、教室の前のドアがいきなり開いた。入ってきた人物は、周りの視線など気にせず3人の所に歩いてくる。

「ちよつといいか。」

「桐条先輩。どうかしたんですか？」

「今日、帰ったらラウンジに集合してくれ。全員に伝えることがある。詳しい説明はその時にな。じゃあ、伝えたぞ。」

それだけ言うと、美鶴はすぐに去って行ってしまった。

「・・・早っ・・・」

「私たちと違って忙しいんですよ。生徒会とか、そういうのです。」  
ゆかりは関係ない、とでも言いたげだ。

事情を少し知っている彩音は、まあ当たり前前の反応か、と思った。

「え・・・あれ？ゆかりタッチって・・・桐条先輩のこと嫌い？」

順平も今のやりとりを聞いていたようだ。

「別に、嫌いじゃないけど・・・。そ、それより帰ろ、彩音。」

ゆかりはあまり聞かれたくない話題のようで、すぐ彩音の制服の袖を引っ張ると急ぎ足で教室を出ていった。

「・・・どうしたんかね、ゆかりタッチ？」

「・・・さあ？・・・じゃ、僕ももう帰る。」

未だ不思議そうな顔をしている順平を置いて、取り残された形になった湊も教室を出て行った。

彩音が湊が2階から降りてくるのを確認すると、美鶴は「揃ったか。」とラウンジにいる面々を確認した。

「待ってたぞ。紹介しておこう。」

「え?」

ゆかりは何の話か首をかしげた。真田はそれに構わず、外に向かつて「まだか?」と聞く。

「ちつと待って、重つ……」

「……?あれ、この声……」

彩音が誰かを言う前に、玄関の扉が開いて、荷物を大量に持った順平が入ってくる。

「テへへへ。どうもっス。」

「えっ、順平っ!?!?……なんであんたがここに!?!?」

ゆかりは驚きを隠せないようだ。彩音も「えっ?」と声を上げ、湊も分かりづらいが少しだけ目を見開いている。

「2年F組の伊織順平だ。今日からここに住む。」

「今日から住むって……うそっ!?!?何かの間違いでしょ!?!?」

「この前の晩、偶然見かけたんだ。目覚めてまだ間もないようだが、彼にも間違いなく”適性”がある。事情はだいたい話した。俺たちに力を貸すそうだ。」

「”適性”があるって……それ、ホントなの!?!?」

ゆかりはまだ信じられないという風に、順平を凝視している。

「オレ、夜中に棺桶だらけのコンビニでマジベソかいてたらしくてさ。つか、正直あんま覚えてないんだけど、見られてたみたいで……ハッズカシー!でもまー、なんつーか、最初のうちは仕方ないんだってさ。記憶の混乱とか、アリガチらしいんだよね。キミたち、そういうの知ってた?」

「……私は平気だったよ?」

「……僕もだな。でもこの場合、僕たちの方が少し変わってるんだと思うが。」

「まーた、強がっちゃって。ま、これペルソナ使いの常識だから。」

彩音は乾いた笑いを漏らし、湊は「別に自慢するほどの知識じゃないから”常識”なんだが・・・」と思ったが口には出さなかった。「・・・けどさ、正直言うと驚いたぜ？キミたちとか、湊も”そうだ”って聞かされた時はさ。・・・でも、知ってる顔がいて良かったよ。1人じゃ、不安だったしな。」

少し真面目になっていた順平が、またにへらと笑う。

「ま、キミたちも湊も、オレっちが仲間になってホントんとこ、嬉しいだろ？男も真田先輩のぞいたら、ひ弱そうな湊だけだもんな？」  
順平の言葉に湊の眉がぴく、と吊り上がる。キツと湊は順平を睨みつけるが、順平は気がつかない。

「え？ま、まあね・・・」

ゆかりは一応そう言うが、顔にはしっかりと「頼りに絶対なんなぞう・・・」と書いてある。

順平は彩音の方へ向き直った。

「宜しくな、彩音ツチ。」

「うん、一緒に頑張る？」

「おうっ！まあ任せとけてー！」

順平は得意そうに胸を張ると、湊にも「宜しくな！」と言った。

「・・・ああ。」

「（・・・あれ？なんだか急に寒気が・・・）」

まだ殺気を飛ばしていた湊に、順平はようやく気づく。

「・・・あの、湊さん？もしかして、さっきのこと根に持ってる？」

「・・・さあな。しかし、僕もまだペルソナは1度しか召喚したことがないんだ。だからコントロールを誤って魔法を最大出力で順平に当ててしまうかもしれないな。」

ぶつぶつと絶対零度の冷たさの声で言った湊の言葉に、順平は思わず光速で土下座した。

「スンマセンっしたああああ！」

「あはは、湊はマジでキれるとかなり怖いからなあ。・・・湊、そろそろ許してあげたら？」

彩音のフロアに、順平は彩音の背後に神様を見た。

「さて、お楽しみのところ悪いが、そういうワケだ。よろしく頼んだぞ。よし・・・だいたい戦力も整ってきたな。これで、始められそうだな。」

真田の言葉に順平が真田を見て、慌てて立ち上がった。

そこで玄関の扉が開き、幾月が入ってくる。

「よし、全員来たようだね。ちょっと聞いて欲しい。」

幾月がソファに座ると、立っていた全員がそれにならった。

「我々の要するペルソナ使いは、長い間、桐条君と真田君の2人だけだった。けど、最近とんとん拍子に仲間が増えて、今や6人にまで増えてる。・・・そこでだ。今夜0時から、いよいよ”タルタロス”の探索を始めようと思う。」

「タル・・・？・・・なんスか、ソレ？」

「”タルタロス”よ。てか順平、あれマジ見たことないの？」

「ハテ・・・？」

順平は首をかしげる。

「見てなくても、不思議はないさ。なにせタルタロスは、影時間の”だけ”に現れるからね。それに、順平君はまだ目覚めて間もないそうじゃないか。よく影時間のことを思い出せない、というのものもあるかもしれないし。」

「影時間の中だけ・・・？」

「シャドウと同じってことさ。面白いだろ？それに、俺たちのスキルアップにもうってつけの場所だ。あそこは言ってみれば、シャドウの”巣”だからな。」

「お、おお・・・シャドウの”巣”っスか・・・」

「てか先輩・・・その体で行くんですか？」

ゆかりは真田をまじまじと見る。真田は先日のシャドウの襲来で、あばらを何本か折っていた。

「明彦はケガが治ってない。同行はしてもらうが、探索は無理だ。」

「・・・分かってるさ。」

真田は唇をかむ。好戦的な真田のことだ。折角探索が開始されるといふのに、自分が参加できないのが悔しいのだろう。

「先輩の分は、オレがバツチリカバーしますって!」

順平は胸を張るが、みんなからの視線は微妙なものだった。

「なんか、不安だな・・・」

「・・・僕も。」

「私も・・・なんとなく。」

「みんなヒドツ!!」

順平がガーン、と俯く。

「・・・理事長は、どうされますか?」

「僕はここに残るよ。どうせホラ・・・ペルソナ、出せないしさ・・・」

また部屋に微妙な空気が流れた。

特別課外活動部の6人は、夜の月光館学園正門前に来ていた。時刻はもうまもなく0時。

「は・・・?ここ・・・?」

順平が拍子抜けしたような顔をする。

「え、どういうことつスか?ここって、学校じゃ・・・」

「見てれば分かる。ほら、0時になるぞ。」

時計が、0時を差した。

夜空が緑色に変わる。一瞬にして街に静寂が訪れる。

そして、目の前の学校が有り得ない変形を始めた。

音を立てながら、まるで月に向かって伸びていくかのように建物が何かの形を成していく。

それは異形の”塔”だった。

形は歪で、ところどころ元の建物が何だったのか分からないところもある。

しかしそれは、月の光を浴びて妖しくそびえていた。

「これが”タルタロス”・・・影時間の中だけに現れる、”迷宮”だ。」

美鶴が静かに言った。

「メーキユーって・・・なんなんだよそれ！？オレらの学校、どこいつちまつたんだよ！？」

順平は今日の前で起きたことを飲み込めないようだった。

「影時間が明ければ、また元の地形に戻る。」

美鶴が冷静に解説した。

「こんなデカイ塔が、丸ごと”シャドウの巢”って・・・てか、オカシイっしょ！？なんだってウチの学校んトコだけ、こんな・・・」

「・・・タルタロス。冥界の、更に奥にある奈落・・・か。」

「・・・」

美鶴は黙り込んでしまった。

「・・・先輩達にも・・・分からないんすか？」

「・・・ああ。」

美鶴の顔がわずかに曇った。

「きつと色々あるんでしょ・・・事情が。」

「分からなきゃ、調べればいい。ここを本格的に探索するのは、俺や美鶴にとっても今日が初めてだ。ワクワクするだろ？」

どこまでも好戦的な真田に、流石に彩音も引く。

「どう見たって、ここには絶対何かある。影時間の謎を解く、カギになるものかな。」

「明彦。意気込むのは勝手だが、探索はさせないぞ。」

「う、うるさいな・・・何度も言うな。」

美鶴にまたたしなめられて、真田はおとなしくなった。

「これが、タルタロスか・・・」

彩音は空に吸い込まれそうなほど高くそびえる塔をしっかりと見据えた。

「おお・・・中もスゲエな・・・」

「でも、やっぱり気味悪い・・・」

中に入ると、そこはホールのようになっていた。すぐ目の前が階段で、その上に入り口がある。

右側には変な緑色の光を放つ機械があった。

「ここはまだ”エントランス”だ。迷宮は、階段の上の入り口を抜けてからさ。」

「じゃあ、ここにはまだシャドウは出ないんですね？」

「ああ、そうだ。」

二人も思わず目をきよるきよるさせてしまつ。

「まずは慣れてもらつ。今日の探索は、お前たち4人だけで行け。」

「えっ！？新人だけですか!？」

ゆかりはえ、と顔を引きつらせる。

「深入りさせるつもりはない。それに、必要な情報は私がここから通信でナビゲートする。」

「それとな、現場でのチーム行動を仕切る”リーダー”を決めておこうと思う。」

真田の言葉に順平がいち早く食いついた。

「リーダー？それつまり、探検隊の隊長!？ハイ、ハイハイッ！オレオレッ!!」

「・・・」

真田は順平を一瞥すると、二人の元に歩み寄つた。

「有里姉弟。どちらかがやれ。」

「えっ?」

「・・・僕たちが?」

「えっ・・・ひ、1人は女の子つすよ?それにこいつ、リーダーらしくないっしょ!？」

驚いたのは二人だけではなかった。順平も真田の抜擢に驚いている。

「・・・けど、もう実践経験してるから。」

「えっ・・・マジ?」

「確かにそれもあるが、選んだ理由はもつと簡単だ。順平、それに岳羽もだが・・・」

真田は持つてきていたらしき召喚器をこめかみに当ててみせる。

「ペルソナの召喚。あいつらのようにちゃんと出来るか？」

「も、もちろんツス！バッチリ決めますって！」

「私も、大丈夫です。」

「相手はシャドウだ。出来なきゃ話にならないぞ。」

「はい、分かっています。」

真田は召喚器を下ろすと、再び二人の方を向いた。

「で、どっちがやる？」

「・・・うん、どうする？」

彩音と湊が顔を見合わせる。

「・・・姉貴の方が、僕はいいと思う。」

「そう？湊でも、充分出来ると思うけど・・・」

「・・・僕も協力するから、頼む。」

「・・・湊が、そう言うなら。」

「決まったようだな。姉のほうでいいか？」

彩音はしっかりと頷く。

「はい。頑張ります！」

「よし、行って来い。準備はいいか、リーダー？」

「ばっちりです！」

「フツ、頼もしいな。皆、異論はないな？」

「はい。彩音ならなんか安心かも。」

「・・・大丈夫です。」

「まあ、実践経験してるってんなら・・・」

順平はいまいち納得いかないようだったが、他の2人が納得したので順平も渋々頷いた。

「じゃあ、行こっか？」

彩音たちが階段に向かって歩き出すと、ふと湊が足を止めた。そして一点をじいっと見つめている。



「湊？どうかしたの・・・って、あ。」

「どうしたの？」

彩音と湊はエントランスの奥の方に、見覚えのある青い扉があるのに気づいた。

二人のポケットの中で、契約者の鍵が光を放つ。

二人は吸い寄せられるように、扉の中に入った。

やはりそこはあの部屋だった。

「・・・お待ちしておりました。いよいよその力・・・使いこなす時が訪れたようですね。」

イゴールは二人を見つめながら話を続ける。

「今から挑まんとする塔は、果たして何故生まれ、何のために存在するのか・・・残念ながら今の貴方がたでは、答えを導くことはお出来にならぬでしょう。だからこそ、進まれる前に知っておかれるが宜しい。ご自身の”力の性質”というものをね。」

「力の性質・・・」

「貴方がたの力は、他者とは異なる特別なものだ。言わば、数字のゼロのようなもの・・・からっぽに過ぎないが、無限の可能性も宿る。貴方がたは複数の”ペルソナ”を持ち、それらを使い分けることが出来るのです。」

「・・・『何にでも変わるけど、何にも属さない力』・・・」

「そして敵を倒したとき、貴方がたには見える筈だ・・・自分の得た”可能性の芽”が、手札としてね。時にそれらは、ひどく捉え辛いこともある・・・しかし、恐れず掴み取るのです。貴方がたの力は、それによって育っていく・・・よくよく心しておかれるが良いでしょう。」

イゴールが手を組み替えた。

「さて、私も忙しくなりますな。次からご自分の意思で扉を開けて、ここへ来られるといい。お二人一緒でなくとも構いません。その時こそ、私の本当の役割・・・貴方がたへの手助けについて、お話し

しましよう。」

二人は頷いた。

「では、再び見える時まで……ごきげんよう。」

イゴールのその声を最後に、二人の意識は現実に引き戻された。

「ちよつと……大丈夫？二人とも……」

「どうしちゃったワケ？ボーっとしちゃってさ。」

「えっ……？あれ、確か私たち扉から……」

ゆかりと順平は怪訝そうな顔になる。

「は？扉……？」

「……どこぞに？」

「……見えてないみたいだな。」

ゆかりと順平の反応を見て、湊が呟いた。

「だから、見えてないも何も、そんなものないってば。夢でも見た？なんかボーっとしてたよ？」

「つかリーダーなんだからさ、寝ないっしょ、フツー！？湊も候補だったとはいえ、さ。まっ、ここはひとつ、オレっちに頼ってもらって構わないけどな！」

「ついてくからさ。とにかく、行くっ？」

「うん、そうだね。よっし、行くよー！」

彩音がぱっ、と笑い、「おー！」と右腕を高くあげた。

今から進む道は、どのような真実にたどり着く道か……

4月21日 くタルタロスく（後書き）

いかがでしたでしょうか？

本当はこの話で戦闘シーンも書きたかったのですが、長くなってしまったために次に持ち越しです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらよろしくお願ひいたします。

## 4月21日NO.2 ～初戦闘～（前書き）

タイトルが「初戦闘」ってなってるけど、本当の初戦闘って4月9日じゃね？

と思った方、いらつしやると思います。

しかし、タイトルが思いつかなかったもので・・・。

～メインキャラ紹介6～

イゴール

ぎよる目と長い鼻が特徴的な、ベルベットルームの主。

ペルソナシリーズ全作品に登場している。

ペルソナの合体、召喚、帰還、降魔などをしてくれる存在。

従者はシリーズごとにみんな違う。

では、どうぞ。

4月21日NO.2 初戦闘

4人は美鶴からそれぞれの武器を受け取り、タルタロスの迷宮の中に入った。

武器は彩音が薙刀、湊が片手剣、ゆかりが弓、順平が両手剣だ。

「いよいよ、こつから本番か・・・」

「なんか、すぐ迷いそう・・・」

順平とゆかりは周りを見回す。

「・・・入ってきたところがなくなってるし・・・」

「・・・油断するな。ここ・・・確かに何かいる。」

二人の言葉に、順平とゆかりはさらに表情を固くする。

「4人とも、聞こえるか。」

各自に渡された通信機から、美鶴の声が響く。

「おっ、先輩!？」

『ここからは、私が声でバックアップする。覚えておいてくれ。』

「えっ・・・中の様子が分かるんスか？」

『私のペルソナの特徴でな。実は、このタルタロスはこの構造が日によって変わってしまう。私もそちらに加わりたいところだが、外からのサポートが欠かせないんだ。』

「うわっ、ますます迷いそう・・・」

ゆかりはあからさまに嫌な顔をした。

『ところで、いま君らのいる場所は既に、いつ敵が出てきてもおかしくない。敵のレベルは低いはずだが、注意して進めよ。習うより慣れるだ。』

「うっす！」

「了解です。」

「分かりました！」

「・・・了解。」

美鶴からの通信が一旦途切れた。

「つたく・・・なんか勝手だなあ・・・」  
ゆかりのその呟きは、近くにいた彩音にしか聞こえなかった。

『では、行動開始だ！今日はここ2階で実践を行う。』

「よし、じゃあ行くよ！」

4人は武器を構えながら油断無く進む。

壁や床がほのかに光っているので辺りが見えない、なんてことはないが、中は相当気味が悪い。

元が学校だからか、内装は学校に少し似ている。しかしところどころに血のような赤い水溜りがあつて、それが元からの雰囲気を一層怖くさせていた。

「はあ・・・見れば見るほど気持ち悪い・・・。」  
ゆかりの呟きももつともだと彩音は思う。

「どう？湊、何か感じる？」

「・・・いや、具体的な位置までは。何かいる、っていうのは分かるが・・・。」

「え？なにになに？まさか湊って、敵の居場所とかわかつちゃうワケ？」

「湊はね、こついつときの勘は鋭いの。だからなんか分かるかもつて。」

「へえ、そうなんだ・・・。」

すると湊がびく、と何かに反応し、立ち止まった。

「いる・・・。」

『前方にシャドウ反応！先手をかける！敵の弱点は今解析中だ！』

「うえっ、マジかよ！？じゃあ湊は今のに反応して・・・。」

順平とゆかりが驚いている間に、彩音と湊は走り出していた。

それは、影法師に仮面がついたような形のシャドウだった。敵はまだ彩音と湊に気づいていない。

『敵、マーヤタイプの”臆病のマーヤ”だ！』

「・・・やあっ！」

彩音がシャドウを薙刀で斬りつける。シャドウは不意打ちに気づいたが、そこへすかさず湊が振り向いたシャドウの仮面に片手剣を突き立てる。

先の彩音の攻撃もあって、シャドウは耳障りな断末魔を上げて霧散した。

『敵、消滅。ご苦労だった。先に進んでくれ。』

「スゴいね！今の！」

ゆかりが走り寄ってくる。

「・・・喜ぶのは後だ。この先にいるヤツが、こちらの動きに気づいたかもしれない。」

湊は通路の奥の方を見据えて言う。

「え、嘘！」

ゆかりは慌てて武器を構えなおす。

「・・・！順平、避けてっ！」

「はっ？・・・うおわっ！！」

順平は飛んできた氷の塊を横に飛んで避ける。

「あつぶねえ・・・」

「来るよっ！！」

そこには氷の塊を放ってきた犯人である、先ほどと同じシャドウがいた。しかし今度は2体。

『敵、2体捕捉！先ほどと同じシャドウだ！』

「このっ！」

ゆかりは素早く弓を引くと、矢をマーヤの仮面に向かって放つ。

矢は仮面に命中した。しかしマーヤには少しのダメージしか与えられなかったようで、すぐに矢を引き抜くとまたこちらに向かってくる。

「このの野郎！！さっきはよくも・・・！」

順平が両手剣をマーヤに向かって振り下ろす。マーヤは今度こそ霧散した。

「順平、ナイス！」

彩音が言うと、既に召喚器を構えていた二人が同時に引き金を引く。  
「「オルフェウスっ!!!」」

2体のオルフェウスが、二人の頭上にそれぞれ現れた。

「「アギ!!!」」

2体のオルフェウスは息のぴったりあった動きで、持っていた豎琴を鳴らす。

すると小さな火球が2つ現れ、1つに合わさりながら真っ直ぐもう1体のマーヤに向かっていった。

マーヤは炎に体を焼かれ身をよじっていたが、やがて塵となって消えた。

『敵の消滅を確認。なかなかいいコンビネーションだった。』

「すげえ・・・今のがペルソナ・・・」

順平は今見た光景に啞然としていた。

「よし、じゃあ次いこうか！」

「・・・今のところ、そんなに近くにはいない。」

彩音と湊がそれぞれの武器を構えなおす。

とところどころにある宝箱を回収しながら進むと、少し広い部屋に出た。

『・・・敵、4体!多いぞ!』

美鶴の通信に、4人の武器を握る手に力がこもる。

『また”臆病のマーヤ”だ。このシャドウは先ほど調べてみたところ、火炎、電撃、疾風が弱点だ!』

「・・・よし、奇襲かけるよ!」

「うん!」

「おう!」

「了解。」

ゆかりがまずマーヤの集団に何本か矢を放つ。そして振り向いたところを順平が両手剣を振り回して攻撃。そして後ろから彩音と湊がオルフェウスのアギで追撃する。



『あと2体！・・・なっ！リーダー！避けろっ！』

「えっ・・・キヤアッ！！」

彩音は後ろから来た増援のマーヤの攻撃を避けきれず、軽く吹っ飛ばされた。完全な不意打ち。

前のシャドウに神経を注いでいた彩音は、後ろから来るマーヤに気がつかなかつたのだ。

『敵、増援3体！リーダー、立てるか！？』

「・・・つつう・・・」

「彩音っ！！」

「・・・このおっ！！オレだつて・・・っ！！」

順平はとっさに召喚器に手を伸ばす。そしてこめかみにあてがい、引き金を引いた。

「ヘルメスッ！！」

順平の頭上に順平のペルソナ、「ヘルメス」が顕現する。神々の伝令役と言われた神の名前を持つそのペルソナは、驚くほど俊敏な動きでマーヤに突っ込んで行った。

いきなりのペルソナの突撃に流石のマーヤも反応が遅れ、彩音に攻撃をしかけた1体が仮面を砕かれて霧散する。

「よし・・・！つつうおお！？」

今度は順平の背後からマーヤの1体が氷の塊　ブフという氷結魔法を放ってきた。

しかし間一髪でオルフェウスが間に入り、豎琴を振り下ろしてブフもろともマーヤを吹っ飛ばす。

「・・・へへっ、助かったぜ湊！」

「礼を言うのはこの状況を切り抜けてからにしる・・・！」  
湊はマーヤたちを見据える。残り3体。しかし自分たちはマーヤに挟まれている。前に1体、後ろに2体。

彩音は先ほど吹っ飛ばされた時にどこか打つたのか、まだ立ち上がれていない。

「私も・・・やらなきゃ・・・！迷ってるヒマなんか、ないっ！」

ゆかりは吹っ飛ばされた彩音を見て動揺していたが、意を決したように召喚器を引き抜き、額に当てた。そして一気に、引き金を引く。「イオッ!!」

ゆかりの頭上に、牛の頭に乗った少女の形をしたゆかりのペルソナ、「イオ」が現れる。

イオが彩音に向かって手を差し伸べる。すると彩音に温かい光が降り注ぎ、彩音が立ち上がった。

「ありがと、ゆかり! 回復したみたい! …さて、それじゃあ…」

彩音が皆を見回すと、皆は彩音の言いたいことが分かったのか、揃って頷く。

「……ペルソナっ!」「」「」

4人が同時に召喚器の引き金を引き、4人の頭上にそれぞれのペルソナが顕現する。

「「オルフェウス!!」」

「イオ!」

「ヘルメス!」

オルフェウスは後方にいた2体のマーヤにそれぞれアギを、ヘルメスは前にいたマーヤに「スラッシュ」という物理攻撃スキルを、イオは疾風魔法「ガル」でアギの威力を増大させた。

3体のマーヤがそれぞれの攻撃を受けて、2体は炎に体を焼かれ、1体は体と仮面を真っ二つに斬られた。そして3体とも消滅する。

「……敵、全て消滅。ご苦労だった。」

「……あ、あはは……やった……んだよね?」

ゆかりが脱力してへなへなと座り込む。

「……うん。皆、お疲れ様!」

「はあ〜っ、マジで焦ったぜ……彩音ツチがやられた時はよ……」

「……そうだな……心配した……っ?」

「あはは、ごめん……。……っ!？」

二人は頭の中に、1枚のカードが浮かび上がるのを感じた。

彩音は「6番 恋愛」のタロットカード。

湊は「2番 女教皇」のタロットカード。

そしてその裏には、それぞれ”妖精”ピクシーと”水の精霊”アップ  
サラスが書かれていた。

二人の脳裏に、イゴールの言葉が蘇る。

「敵を倒した時、貴方がたには見えるはずだ……。自分の得た”可能性の芽”が、手札としてね。」

「(これが……。私(僕)の力<sup>ヘルソナ</sup>……。!)」

「……。4人とも、ご苦労だった。近くに脱出ポイントがある。それを使って脱出してくれ。今日の探索は終了だ。」

美鶴の通信で我に返った二人は、美鶴の案内で脱出ポイントを見つけ、4人でダンジョンを後にした。

脱出ポイントのターミナルから出ると、美鶴が全員を確認した。

「よし、全員戻ったな。リーダー、どうだった？」

「疲れました……」

「フフ、緊張が解けたからか？数をこなしていけば、じき慣れる。」

「ありがとうございます……」

順平とゆかりは、まだ少しぼーっとしていた。

「すげえ……。自分の”力”っての、初めて実感したぜ！」

順平が我に返って嬉しそうに言った。

「でも……。なんでだ？なんか、ミョーに体がシンドいんですけど……」

「単なるハシヤギ過ぎじゃないの？」

「んなこと言って……。ゆかりツチだってもろバテ気味じゃなか。」

「バテるってか、なんか、息苦しいような……。なにコレ……」

「・・・僕も・・・流石に疲れた・・・。」

そんな3人の様子を見て、美鶴が説明する。

「それは”影時間”のせいだ。平時よりずっと体力を消耗するからな。心配ない、じき慣れる。」

そして美鶴は真田を見る。

「しかし、想像してたよりも行けそうじゃないか。明彦もつかうかしてられないな。」

「フン、ぬかせ。」

しかし真田は不敵そうに笑った。

「・・・とにかく、今日はもう疲れたんで帰る、ってことでいいですか？」

「ああ、そうだな。初めてにしては上出来だった。ピンチからも抜け出したしな。」

「いえ、あれは皆のお陰ですよ。」

彩音は3人を見回して言った。

「それじゃーみんな、今日は帰るよー!」

彩音の号令で、皆は帰る支度をし、タルタロスを後にした。

二人は戦いを経て、新たな力を得た。それは、二人の数多く持つ仮<sup>ヘル</sup>面の1つ・・・

4月21日NO.2 初戦闘（後書き）

いかがでしたでしょうか？

突っ込みどころ満載の戦闘シーンだったと思いますが、温かい目で見てやってください。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。  
明日からは更新スピードが遅くなると思います。休日にはなるべく投稿したいと思っていますので、よろしく願います。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などございましたらお願いいたします。

## 4月22日　〈新たな日常、開始〉（前書き）

ご要望も頂きましたので、オリキャラは出したいと思っています。元々出したいな、とは思っていました。

だけどまだ完全にキャラ設定などを考え付いていませんので、登場はまだ先になるかと。

〈メインキャラ紹介7〉

ベルベットルームの住人たち（力を司る者たち）

イゴールの傍に仕える者たち。

ペルソナ全書を持ち、全書に登録してあるペルソナを使役できることから、「力を司る者」と呼ばれる。

現在ではマーガレット、エリザベス、テオドアがこれに当たる。

ちなみに上記の3人は姉弟である。

では、どうぞ。

4月22日　く新たな日常、開始く

彩音は今、必死に眠気をこらえていた。

昨日のタルタロス探索時の疲れが完全には抜け切っていないのと、今現在行っている全校朝礼はただ先生や生徒会の話の聞くだけで、とても退屈なためである。

ちなみに隣の湊はもう睡魔に負け、見つからないように完全に眠っていた。

「（はあ・・・まだ終わんないの・・・？）」

今日だけでもう何十回目のおくびを噛み殺しながら彩音は心の中で毒づく。

「・・・以上で、全校朝礼を終わります。」

「（やっと終わったあ・・・！）」

「続きまして、生徒会から新しい役員の紹介があります。生徒会代表、生徒会長、3年D組、桐条美鶴さん。」

彩音はあからさまに肩を落とす。しかし聞こえた身近な先輩の名前に、「ん？」と顔を上げる。

「・・・やっぱ先輩に決まったんだ。ま、あの人の人気、スゴいもんね。」

「なんつっても”桐条”だもんな。オーラ出てるっつーか、近寄りがかたいっつーか。しかも桐条グループって、このガツコの母体なんだから？」

「あー、なんか聞いたことあるなあ・・・」

近くから聞こえたゆかりと順平の会話に、彩音は頭の隅から記憶を引っ張り出した。

桐条グループ。なかなかの大きな財閥で、南条グループという財閥の分家にあたる。

様々な分野に手をつけており、そもそも月光館学園を始め、このポートアイランドにある施設の殆どが桐条グループの手がかかっている。

る施設だ。

そんなことを考えているうちに美鶴が壇上上がり、演説を始めた。「生徒会長という大役を拝命するにあたり、私の所信をお話ししておきます。」

学園がより良くあるために、1人1人の積極性は確かに大事です。しかし、全員が1つの思いを1年間ずっと切らさずおくのは、簡単ではないでしょう。大事なものは、それが途絶えても確実に回る仕組みをいかに造っておくかです。

その為に、各自の中の明日への思いを確認し、今、この青春の時をどう過ごすのか。現実から逃げることなく、如何にして未来を直視するのか。全てはそれにかかっています。

私1人の視野では見えない物もたくさんあるでしょう。充実した学園生活を共にするため、皆さんの知恵と力を貸してください。よろしくお願いします。」

美鶴が一礼すると、会場から大きな拍手が巻き起こる。

「すげー・・・なんだあれ・・・な、意味分かった？」

「うーん、なんとなく？」

「えっ、マジ？あつたまいいなあ・・・」

順平は意味が全く分からなかったようで、しきりに首をひねっている。

「・・・つかアレ、フツの高校生が言うコトじゃねえよな・・・あの人じゃなきゃ笑い話だぜ。」

「あー、分かるかも・・・。」

彩音は美鶴の雰囲気を読み出しながら呟く。

ふと、彩音はちらりと隣を見た。

そこでは相変わらず、湊がぐっすり眠っている。恐らく演説など少しも聞いていなかっただろう。

彩音は幸せそうに眠る湊を見て、なぜか少し苛立つのを感じた。

「・・・いい加減に、起きろっ！」

「うぐっ!?!?」



彩音は湊の脇腹に、容赦なく肘を入れた。

放課後。

授業が終わり、丁度帰るところだったらしい順平と一緒に二人は校門を出た。

「・・・？」

湊がふと視線を向けた。

その先には、何人かの女子生徒が固まっている。

「・・・なんだろ、あの子達。」

そのとき、隣の玄関のドアからある人物が出てきた。

「来たわよ、真田先輩！」

「待つてくださあーい！」

女子生徒は一斉にその人物 真田に近寄る。

しかしその本人はどこ吹く風だ。ただ女子生徒を鬱陶しそうに見ている。

「いいよなー、アレ。真田サンの周り、いつもあんならしいぜ？  
全戦無敗のボクシング部主将。確かにカッコイイと思うけどさ・・・  
マンガでも見れないぜ、あんなの。今からどっか遊びに行くのかな  
ー。」

「・・・さあな。どうでもいい。」

「ええ、湊はまさかの無関心！？男ならああいうのは羨ましい光景  
だろー？」

「・・・別に。」

湊もさして関心はないようで、さっさと歩き出そうとする。

しかし、その足を彩音が止めた。話の元である真田がこちらに歩いてきたためだ。

「おいお前達、これからヒマか？」

「え、あ、オレらツスか！？ヒマっちゃヒマっすけど・・・」

「なら、今から”ポロニアンモール”まで3人で来てくれ。」

「・・・っ!？」

彩音は一瞬寒気がした。見ると、真田の取り巻きが彩音をすごい目で睨みつけている。

「場所は知ってるな？その”交番”で会おう。いいな。」

少しだけ殺気が収まる。どうやら話を聞いていた取り巻きが、場所が場所なだけに彩音を真田がデートに誘ったのでは、と思っただらしい。

「え、交番？」

全く違うことを予想していたらしき順平が聞き返す。

「・・・真田サン、そのお友達連れて行くんスか？」

「友達？この子達のことか？いや、名前も知らない。正直うるさくてかなわん。・・・とにかく、俺は先に行くからな。必ず来いよ。」  
真田はそれだけ言うと、さっさと校門を出て行く。

「ちよつとセンパイ。少しは相手してくださいよ！」

取り巻きもそれを追いかけて行った。

順平が呆気にとられた表情で真田を見送る。

「・・・名前も知らないって、1人もか！？ありねーだろ、普通・・・」

「真田先輩、鈍感そうだもんね。・・・それより、かなり寒気がしたんだけど・・・」

「・・・あの殺気に気づかないとは、姉貴もかなり鈍感だと思っぞ？」

「え、何か言った？」

「・・・いや。」

「・・・ま、とにかく、行かなきゃダメな流れだな・・・」

「そうだな。」

3人はとりあえず、言われた”ポロニアンモール”に向かうことにした。

「真田サン、来ました、けど？」

順平が恐る恐る交番に入る。そこには、1人の警官と話す真田の姿

があった。

「じゃあ黒沢さん、これ載っていきます。あとさっきの話、こいつらのことです。」

「……………」

「この人は黒沢巡査。俺たちの活動に協力してくれてる。」

「はあ、どうも……………」

彩音は少々怖い目つきの黒沢巡査に、少し戸惑いながらも挨拶した。湊と順平もならい軽く会釈をする。

「それと、これは幾月さんからだ。」

「えっ？何ですかこのお金……………」

彩音はいきなり真田から渡された5000円を受け取りながら聞く。「手ぶらじゃ戦えないからな。ここで準備しろ。黒沢さんは仕事のコネで、俺たちの”装備品”を揃えてくれる。もっとも、タダにはしてくれないけどな。」

「当たり前だ。世の中にタダのものなど無い。」

「分かってますよ。じゃあ、俺はこれで。」

真田は軽く片手を上げると、交番を出て行った。

「君たちのことは聞いている。俺の仕事は、街の治安を守ることだ。たとえそれが、どんな事情であつてもな……………」力”など無くても、俺にはこの街の異変は分かる。俺は俺が正しいと信じることをする……………」それだけだ。」

「……………」ありがとうございます。」

湊が軽く頭を下げた。

「……………」じゃあとにかく、ここで武器や防具を買って戦いに備えろ、つてことですよね？それなら、有り難く装備、戴きますね！」

黒沢巡査は軽く頷くと、少し奥にあったロッカーから大きめの袋を取り出す。

「とりあえず、今ある武器はこれだ。好きなものを選べ。」

袋の中には、本物ではない刃の薙刀、片手剣、両手剣が入っていた。

「うお、マジで……………」あ、でもコレ、全部で幾らツスカ？」

「・・・今日はサービスだ。これ全部で7000円にしてやる。」  
「うう！？い、意外と高いんツスね・・・。理事長、5000円かよ・・・しけてんよな。」  
「じゃあえつと、これ戴きますね。湊、順平、所持金いくら？私達の武器なんだから、割り勘ね！」  
そのあとは皆で割り勘してお金を出し合い、武器を購入した。

「・・・驚いたよ。まさか交番で武器を買えるなんて・・・」  
「そうだよな？あれ横流しじゃねえの？」

「・・・まあ、そこまでの危険を冒して僕達に協力してくれてるんだ。素直に感謝しようと思は思うが。」  
湊は背負った袋の中にある自分の武器を指差して言った。

「そうだね。そう思うことにしよう。」  
彩音も頷く。

「確かに、正義感強そうな人だったもんな。」俺の仕事は、街の治安を守ることだ”って言うてたし。」

「・・・じゃあこれで、タルタロスへ行く準備はあらかた整ったね。薬はあそこの薬局で買えばいいし。よっし、頑張ろうね！」

「ああ。」  
「おう！任せとけ！」

3人は改めて、戦いに向けて頑張ろうという決意を固めた。

新たな協力者を得て、二人と仲間塔へと挑む。

4月22日 く新たな日常、開始く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

10話目を書き上げることが出来ました。

これで結構パソコンを使用出来る時間ギリギリになってしまったので、平日に長めの話の更新はなかなか出来ないと思います・・・。

ご意見、ご感想などありましたらお願いいたします。

## 4月24日 くもう1人の転校生く（前書き）

はい、ついにオリキャラ登場！

本当はコミュも書こうかと思ったのですが・・・

ちよつとこつちを優先したいなーという私の我が侷です。

時間がありましたらコミュ編も書こうと思います。

オリキャラの詳しい説明はまた後で書きますね。

く用語解説2く

特別課外活動部

略してS、E、E、S。

表向きは月光館学園の部活だが、実際はペルソナ使いで構成される  
”シャドウを倒すための集団”である。

蔵戸台分寮を拠点とし、シャドウの討伐などを主にしている。  
尚、蔵戸台分寮には活動部の加入者か、ペルソナ使いの候補者しか  
入れない。

では、どしどし。

## 4月24日 くもう1人の転校生

夜。

影時間はもう終わり、ここポートアイランドの月光館学園高等部前は深夜の静けさに包まれている。

特別課外活動部も、もうタルタロスから帰った後だ。

しかし、その校門前には1人、小柄な学生がいた。

「・・・いるね。6人・・・か。そして・・・まだ目覚めていない人もいる。」

学生はにやりと、口元に笑みを浮かべる。

「ねえ、どう思う？」

学生の呟きに、答える者はいない。

翌日の朝の教室。

「・・・転校生？彩音たちのほかに？」

ゆかりが順平の話題に、怪訝そうに訊き返す。

「何でも都合で、新学期と同時に転入が間に合わなかったんだと。

で、今日から隣のE組に入ったんだとさ。」

「へえ、どんな子？」

彩音が楽しそうに訊く。

「オレもまだ見てねえから分かんねえよ。なんか、見たってやつが極端に少ないんだよな・・・」

「・・・使えない。」

「ちょ、湊それヒドクねえ！？いつから毒舌キャラになったんだよお前っ！？」

「・・・冗談。」

「真顔で冗談言つなよ・・・。」

話しているうちに、チャイムが鳴ってしまった。

「おおっと、鳴っちまったな。後でE組に見に行こうぜ、その転校

生！」

「うん。」

彩音が返事をする、ふと廊下を通りすぎたある生徒に目が留まる。

まだ転入して日が浅いから分からないが、その生徒には見覚えがない気がする。

「（・・・あの子だったりして。）」

彩音は思ったが、入ってきた担任によりその思考は中断された。

その頃、E組では。

「初めまして。満嶋みつしま 遥はるかです。よろしくお願いします。」

茶髪のショートカット、平均よりも低い身長、ブラウンの瞳。

まず見たら10人中10人が女と間違えそうなルックスの少年が、ぺこりとお辞儀をしていた。

結局、彩音たち4人は転入生を見損ねてしまった。

見ようにも他の野次馬が多かったり、移動教室などで見る機会がなかったのだった。

そんな中湊は「見れないならどうでもいい」と1人廊下を歩いている。

その時、

「！」

「あっ」

湊の右側に、誰かがぶつかった。

「・・・ごめん。」

湊は慌てて振り返る。ぶつかった生徒は茶髪で、同年代の人と比べると背が低い。

そしてその生徒も振り返る。

「ごめん！ちよっと慌ててて。」

「・・・いや。」



「君、もしかして・・・右目が見えなかつたりする？」

湊は立ち去ろうとしたが、その生徒　　遥の言葉に反応する。

「・・・何故、そう思う？」

「わりと近く歩いてたのに分からなかつたみたいだし。もしかして、思っただけ。」

「・・・まあ、な。ところで君は？」

「僕は満嶋　遥。今日、この学園に転入してきた。」

「！・・・君がか。」

湊は内心とても驚いていた。ぶつかっただけで目のことを見破られただけではなく、その人物が初対面で、さっきまで自分も彩音たちと一緒に探していた転入生だった、ということに。

目のことを、湊は他人に基本話していない。あまり話したいと思う内容の話でもないからだ。

「知ってるよ。君、有里　湊くんでしょ？クラスの人が話してた。

僕と同じ、転入生だって。」

「・・・そうか。」

「僕のことは、遥でいいから。よろしく、湊くん。」

「分かった。」

遥はにっこりと微笑んだ。

「それじゃ僕、そろそろ行くね。」

「ああ。またな。」

遥は軽く片手を振ると、湊のやって来た方向へと行ってしまった。

「・・・あれが、あの『特別な力』の片割れ。」

遥の呟きは、誰にも聞かれることなく消えていった。

「え、転校生くんと話したの！？湊だけずるい！」

放課後、彩音たちに遥と会ったときのことを話すと、彩音は悔しそうな顔をした。

「で、どんな感じだったの？」

「別に・・・普通じゃないのか。」

「なんだよ、もつとこう、なんかあるじゃんよ？話しやすいとか、面白いとか？そーいうの、ないワケ？」

「・・・不思議な感じだったな。」

「どこが？」

「・・・勘がいい。」

「それだけ！？使えないのはそっちじゃんよ、なあ湊？」

「・・・朝のこと、まだ根に持ってたのか？」

順平や彩音は転校生について質問攻めにしてくる。湊はそれに答えながら、やはり頭の中では遥のことを考えていた。

「順平、いろいろ訊くより有里くんが仲良くなったのなら紹介してもらえばいいだけの話じゃん。」

ゆかりが呆れながら順平に突っ込みを入れる。

「それもそうだな！湊、今度紹介してくれよ！」

「・・・ああ。」

ま、いいか　と湊は順平達の会話を聞いていて思いなおした。

遥は屋上にいた。

目線の先には、彩音、ゆかり、順平と一緒に歩いている湊の姿がある。

「・・・僕は傍観者。僕は、この先の君たちの物語を見続けるだけだ」

4月24日 くもう1人の転校生く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

見た目は明るいんだけど、どこかミステリアスな感じを目指したつもりですが・・・

彼は最後のセリフの通りのポジションについてもらいます。しかし、ストーリーに絡ませるところは絡ませます。

4月26日 く番人戦く（前書き）

本当は運動部コミュは書かなきゃならないと思うんですが・・・  
もしかしたら5月の強制入部日まで先延ばしになる・・・かもしれ  
ません。

くメインキャラ紹介8く

満嶋 遥

月光館学園高等部2年E組所属。

自分を「傍観者」だと言った、ミステリアスな転校生。

その素性、行動は謎の部分が多い。

背が低いことと女っぽいところに少しコンプレックスを持っている  
ようだ。

本作品のオリキャラ。

では、どうぞ。

#### 4月26日　～番人戦～

その日、ポロニアンモールには交番や薬局で色々購入する彩音と、それに少しうんざりとしながら荷物持ちとして連れまわされている湊の姿があった。

「なんで僕が連れまわされなきゃ・・・」

「リーダーの補佐は副リーダーの仕事でしょ？」

湊の愚痴に答えつつ彩音はかごに傷薬を入れていく。ちなみに、資金はこの間のタルタロスの探索でたっぷり稼いだので、余裕があった。

「あ、これこの間買おうとした・・・」

「余計なもの入れんな！それ完全に姉貴の趣味のものだろうが！」

湊が彩音の手に取ったものを見てすぐかごに入れるのを阻止した。

「えー、いいじゃんちよつとくらい！」

「持たされる方の身にもなってみろ！・・・はあ、戦いは遊びじゃないんだぞ。」

湊の言葉に、彩音がふっ、と真面目な顔になる。

「・・・分かってるよ。一歩間違えば死人が出てもおかしくないってことくらい・・・そうならないために今色々買ってるんだし。」  
「そう、今二人が買っているものは、全て戦闘用だ。しかも、今日買っているのは少し特別で、タルタロスの一定のフロアにいる”番人”と戦うためのものである。」

「・・・隙ありっ！」

「・・・！」

予想外の言葉に湊が素早くかごの中を見ると、先ほど入れるのを阻止したはずのものが入っている。

「・・・姉貴・・・」

「でも、だからこそぴりぴりしたままじゃなくて、こういった余裕

も必要だと思っただよね。」

彩音はあはは、と笑ってみせるが、湊は俯いたまま。

「………う。」

「？湊、今何か言った？」

「……それとこれとは話が違う！！！」

いつものボーカーフェイスはどこへやら、湊は明らかに怒っていると分かる顔だった。そして湊は今までの疲労もプラスされて、ついに頭の中で何かが切れた音を聞いた。

昼間の雰囲気も、ここに来ればすっかりなくなり、今は緊張感すら漂う。

現在彩音たち4人がいる場所はタルタロスの5階。そして、すぐそばに番人の反応がある。

美鶴や湊が「こいつは強い」と評価しているだけあって、4人の顔もいつもの探索以上に緊張した顔をしている。

「……皆、準備オツケー？」

皆が頷く。それを確認すると、彩音も武器を握る手に力をこめる。

「よっし、じゃあ行くよ……突撃！」

彩音の号令で、皆は一斉に番人の3体に向かって走り出す。

『敵、ヴィーナスイーグル！普通のシャドウとは格の違う相手だ。』

慎重にいけ！』

「桐条先輩、アナライズ！皆は物理攻撃でアイツを落とすよ！」

「了解！ヘルメスっ！」

「……突撃！」

順平と湊がそれぞれのペルソナを呼び出し、1体のヴィーナスイーグルに「スラッシュ」と「突撃」を繰り返す。

しかし、攻撃は確かに当たったが、流石番人とも言っべきか、あまりダメージを受けていない様子だ。

「……行っけえ！！！」

今度はゆかりが弓でヴィーナスイーグルを攻撃した。

だが、相手は鳥型。ダメージを受けたにも関わらずひらりとその矢をかわしてしまった。

「こうなれば・・・」

彩音はヴィーナスイーグルとの距離を詰め、ジャンプして薙刀を振り下ろす。

「はああああっ!!」

ヴィーナスイーグルも避けようとするがそれは間に合わず、薙刀は翼の付け根部分を切り裂いた。

『・・・まずいつ！反撃だ！有里っ、避ける!』

敵もやられっぱなしで黙っているわけがない。攻撃を受けていた1体が、魔法を発動する。

”マハガル”。

威力は単体で放つ疾風魔法”ガル”と同じだが、”マハガル”は敵全体にダメージを食らわせる。

「うっ!」

「きゃあ!?!」

「うああっ!」

「くっ!!」

4人は後方に吹き飛ばされた。特に疾風属性が弱点である順平のダメージは大きい。

「順平!・・・ヤバイ、みんな、ガードして!」

とっさに彩音はゆかりを、湊は順平を守る形で防御した。

そして間一髪でヴィーナスイーグルの攻撃を受け止める。

「皆、立てる!?!」

「なんとか・・・」

「オレも・・・」

「・・・平気だ。」

皆が立ち上がるが、特に弱点攻撃をされた順平と、疾風耐性を持っていないペルソナを付けていた湊がダメージが他と比べて多い。ゆかりは元々ペルソナに耐性があつたし、彩音はペルソナ”エンジエ

ル”を付けていたので何とか少ないダメージで済んだ。

『大丈夫か！？・・・シャドウの弱点の解析が終了した！貫通属性に弱い！あと、火炎と疾風は効かないから、気をつける！』

「了解です・・・（まず、この状況を何とかしなきゃ・・・）湊っ  
！」

湊が彩音のやろうとしていることに気づき、付けているペルソナを  
変更した。

「アプサラス！」

「オルフェウス！」

彩音もペルソナを付け替えると、二人同時にペルソナを召喚する。

「「ミックスレイド、”カデンツァ”！！」」

オルフェウスの奏でる豎琴と、インド神話で音楽の神といわれるア  
プサラスの歌声が、その場にいる4人を癒した。

「え、嘘？なにコレ・・・」

「すげえ・・・！」

ミックスレイド。

それはワイルドの力を持つものだけが発現できる力だ。特定の2体  
のペルソナを同時に召喚し、力をかけ合わせて様々な効果をもたら  
す。本来なら1人でも使用は可能で、むしろ1人の方がやりやすい。  
しかし、二人は双子ならではのシンクロ率の高さでそれを発動した。  
「よっし、やられた分はやり返すよ！ゆかりは弓で弱点攻撃！順平  
は後ろからダウンした敵にダメ押しで攻撃ね！湊は一緒に陽動作戦  
！」

「分かった！」

「よし！やるぜ！」

「・・・了解。」

それからの4人の連携は見事だった。

まず彩音と湊が攻撃をしかけ、ひるんだり、かわしたりした時にそ  
こを狙ってゆかりが弓で攻撃。

順平はダウンしたヴィーナスイーグルをペルソナを使って追撃。ダ



ウンさせる。

「すごい、さっきは当たんなかったのに！」

ゆかりは命中率が高くなったおとに驚いていた。

実はさっきのミックスレイド”カデンツァ”、追加効果として素早さをあげる効果もあったりする。

「敵シャドウ全部ダウン、総攻撃！」

彩音の号令で、ダウンしたヴィーナスイーグルを4人でリンチにする。

倒すまではいかなかったものの、十分に敵はダメージを受けた。

「なかなかしぶといね・・・さっきの作戦、もう1回！」

そこからは、もう4人の完全な独壇場だった。

敵も何とか状況をひっくり返そうとガルやマハガルを放ってくるが、順平はちゃんとそれに気づいて避けるかガードしているし、今や湊も疾風耐性のあるペルソナ”アルプ”を付けているので、そんなにダメージはない。それに、受けたダメージは彩音とゆかりが交代で癒す。

「ラスト！まとめて倒すよっ！総攻撃！」

何回目かの総攻撃で、ヴィーナスイーグルは3体とも完全に沈黙し、霧散した。

『敵シャドウ消滅！よくやった！見事だったぞ。』

「・・・やったあー！！」

「・・・よくそんな元気があるな・・・」

美鶴との通信を聞いて喜ぶ彩音に、湊はやれやれといった顔を向ける。だが湊も少し嬉しそうな顔をしていた。

「流石にオレも彩音ツチほど喜べねえな・・・でも、オレたちやっ  
たじゃん！」

「ホント、最初はどうなることかと不安だったけどね・・・」

順平とゆかりも彩音ほど感情は出さないものの、達成感と嬉しさを感じていた。

「だんだん戦いにも慣れてきたよね！でも……今日は流石にこれ以上の探索はやめとこうか。」

「はい、賛成……。矢を撃ちすぎて腕痛いし……」

「オレたちも……」

「……」

「じゃあ、この階の宝箱だけ取ったら戻る？で、今日は解散！」

4人はすぐ奥の部屋から宝箱の中身を取ると、転送装置からエントランスに戻った。

塔の真実へと着くにはまだ遠い。しかし、着実に一步は踏み出している。

4月26日 く番人戦く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

そういえばオリキャラの遥ですが、容姿はご想像にお任せします。

描写は入れますが・・・

絵が壊滅的に下手なんです、私；

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

#### 4月27日 く生徒会く（前書き）

この小説はゲームをプレイしながら書いています。

昨日、これを書くためゲームを進めていたら・・・油断していて戦闘不能になってしまいました。しかもセーブしていなかったことが災いし、最初からやり直す羽目に・・・；

なので昨日投稿しようと思っていたのですが今日になってしまいました；

く用語解説くく

シャドウ

影時間にのみ現れる”怪物”。

普段はタルタロスにいるが、稀に街中に出現することもある。それは”イレギュラー”と呼ばれ、出た場合は特別課外活動部が退治している。

無気力症もこのシャドウが原因で引き起こされる。

では、どしどし。

4月27日 く生徒会

現在彩音は、1週間前のようにあくびをかみ殺す羽目になっていた。今日もまた、理由は知らないが臨時朝礼をすることになったのである。

先週と違うところは、湊が熟睡せずまだ起きていることだろうか。

「・・・湊、珍しいね？明日は雨？」

「・・・五月蠅い。眠くないわけじゃない。」

湊は隠すこともせずあくびをした。

「えー、では全校朝礼を始めます。まずは、校長先生からのお話です。では、お願いします。」

二人が話している間に、全校朝礼が始まる。呼ばれた校長が、自信満々の顔で壇上上がる。

「・・・急に、なんだろ？やっぱり、最近の事件のことかな。世間も騒がしいしね・・・」

「さあな・・・でも、シャドウのこととか校長が知ってるわけなしな。」

「・・・醜い嫉妬だ。」

「え？湊、それどういう意味？」

湊が興味無さげに呟いた言葉に、彩音は首をかしげた。

「なんにしても、あまり長くならなきゃいいけどナ・・・」

「うちの校長、話し好きで有名だもんね・・・」

順平とゆかりが校長の話の長さを思い出してうんざりした顔になる。そんなことを話している間に、校長の話が始まった。

「えー、諸君らに今日は、特別に大切な話をしようと思います。あー、世間では。不可解な事件や理不尽な事件が多いようですが・・・うー、この学園の生徒である君らには、関係ないことだろうと思います。えー、しかし高校生という若い時期には、様々な悩みもあるでしょう。まー、だからといって、あまり、思い悩むことはないの

です。えー、”過ぎたるは及ばざるが如し”という言葉を紹介します。あー、この意味はといいますと・・・」

校長の話聞いていたゆかりが、あることに気づいた。

「これって・・・もしかして、前の桐条先輩のスピーチ、意識してる・・・？」

順平も肩をすくめながら同意した。

「たぶん、そんなトコだな・・・ま、同じ男として気持ちは分かるけどさ・・・」

「・・・安いプライドだ。まるで子供だな。」

湊は校長があまり好きではないのか、毒舌になっている。

「あ・・・そういえば朝、校門のところでそんな噂を誰かがしてたっけ・・・」

彩音は朝のことを思い出した。

「・・・勝負にもなっていないだろ。迷惑なだけだな・・・」

湊の言う通り、その後も校長は完全に美鶴に勝てていないと一目瞭然のスピーチを、長々と話し続けていた。

昼休み。

また美鶴が教室にやって来た。

「有里。」

「はい？」

彩音が何の用事かと首をかしげる。湊も顔を上げた。

「悪いが、今日の放課後空けておいてくれ。仕事を頼まれてほしい。」

「仕事・・・ですか？」

「急な話で申し訳ないのだが、君たちしか適任を思いつかない。詳しいことは放課後に話す。また、後でな。」

美鶴はそれだけ言うと、また素早く教室を去って行った。

「・・・僕達二人とも、か。何だろうな。」

「さあ？”アレ”関連？」

「それだったら岳羽や順平も呼ぶだろ。」

「そっか・・・」

「・・・その時になったら分かるだろ。」

彩音は頭に？を浮かべながらも、昼ごはんである購買のパンを手にとった。

「・・・待たせてしまって、すまない。」

二人が教室で待っていると、少し遅れて美鶴がやって来た。

「単刀直入に言う。生徒会に入ってもらいたい。」

「ええ!？」

彩音が驚くのも無理はない。二人は転校に次ぐ転校だったため、生徒会どころか学級委員にもなったことがないのだ。

「・・・急にどうしたんですか、桐条先輩。」

湊が冷静に聞き返した。

「君たちの適応力と頭の回転の速さを買っている。生徒会長というのも、なかなか多忙だね。緊急時に口裏を合わせられる人間が欲しい。私の”事情”に通じた人間・・・君たちを”リーダー”、”副リーダー”と見込んで頼みたい。」

「そういうことですか。じゃあ、どんな仕事をすればいいんですか？私達だって、いつでも生徒会に行けるわけじゃないですよ？準備もありますし。」

「生徒会の仕事は定例だが、君たちを常時拘束するつもりはない。時間がある時に生徒会室に来てもらえるよう、心がけてもらえるだけがいい。頼めるか？」

彩音と湊は顔を見合わせた。

「・・・それなら、いいですよ。」

「君たちなら、そう言ってくれると思っていたよ。」

美鶴が微笑んだ。

「・・・事後報告になるのだが、君の生徒会所属の件は既に承認済みだ。ただ、登録の手続きだけは、君たちが直接やらなくてはなら

ない。」

「ホントに事後報告ですね……。じゃあ、鳥海先生に会って手続きしてくればいいんですね？」

「そういうことだ。相談もなしに段取りをつけたことは詫びるが、君を必要とする私の境遇を理解して欲しい。手続きを終えたら生徒会室に来てくれ。待っている。」

美鶴はすぐ教室を出て行った。

「じゃ、行こうか？」

「……。ああ。何か少し強引な気も、しなくてもないけどな……。二人は美鶴の後を追うように教室を出て、職員室に行った。

「あら、二人とも、何か用？」

職員室では、運良く鳥海先生はすぐ見つかった。

「生徒会のことです。」

「ああ、はいはい。桐条さんから聞いてるわ。」

鳥海先生は自分の机の上に置いてあった書類を取ると、彩音に渡す。

「じゃあ、これに目を通したら名前書いて。直筆のサインがないとダメなの。」

彩音はさらさらと書類に名前を書く。続いて湊にも書類を渡し、湊も名前を書いた。

湊が鳥海先生に書類を返すと、鳥海先生はしっかりとサインを確認する。

「……。よし、大丈夫ね。じゃあ、後は任せて。がんばってね、生徒会。」

「ありがとうございます。」

「ところで……。桐条さん直々の推薦だけど、あなたたちかなり有能なのかしら？」

「……。さあ。自分では分かりません。」

本当のことを言うわけにもいかず、湊は適当にごまかした。

「あ、そうよね。でも、有能だったら私の書類も……。」



言いかけたところで、いきなりびくつと鳥海先生は辺りを見回した。  
「・・・この視線、絶対どこかにイヤミ田・・・じゃなかった、江古田先生がいるわね・・・。あ、今の話は聞かなかったことにしておいて。それじゃ、もう行っていいわよ。」

「はあ・・・じゃあ、失礼しました。」

二人が廊下に出ようとすると、江古田先生とすれ違う。

「・・・江古田の視線が鋭いのか、鳥海先生の感知能力がすごいのか・・・」

「さ、さあね・・・」

とりあえず、二人は気を取り直して生徒会室に向かった。

二人が生徒会室に入ると、早速美鶴が生徒会メンバーに二人を紹介する。

「先日も話したが、彼女が有里 彩音、彼が有里 湊だ。今日から生徒会の一員として働いてもらう。」

「よろしく願います!」

「・・・宜しく。」

二人が礼をすると、1人の風紀委員から興味深そうな視線を向けられていることに気がついた。

「有里さんに、有里君か・・・。」

その風紀委員は、二人に歩み寄った。

「僕は小田桐秀利。風紀委員を仕切らせてもらってる。」

そして今度は、眼鏡の内気そうな1年生が二人のところへ来た。人見知りなのか、どこかオドオドしている。

「会計の、伏見千尋です。1年生で、わからないことの方が多いので、その・・・お、お手柔らかに・・・彩音さん、湊さん。」

「こちらこそ宜しく。私も分からないことばかりだから、大丈夫だよ?」

彩音が優しく千尋に声をかけると、千尋は安心したように息を吐いた。

「……………」

「……？……何か？」

湊はさつきからこちらを見つめている小田桐に聞いた。

「……失礼、会長が人を推薦するなんて君たち、よっぽど有能な  
んだらうね。」

「(さつきも聞かれたな……)……自分では分かりませんよ。  
それを決めるのはあなたがただ。」

「そうか。これから宜しく。」

「こちらこそ。」

その後二人はそれぞれ小田桐、千尋と雑談する。そうやっているうちに、もう二人にとっては慣れた声が頭に響いた。

その声はこの間の特別課外活動部の時だけでなく、順平、クラスメイトの友近と一緒にラーメンを食べに行った時もあった。そのときのアルカナは確か”1番 魔術師”。

今二人の脳裏に浮かんだのは”4番 皇帝”だった。

後でイゴールに教えてもらったことだが、この”コミュニティ”を見つけていくことによって、そのアルカナのペルソナを合体で作出す時に力になる、とのことだった。

「(順番どおりじゃないんだ……?)」

「(アルカナは全部で22……まだあと19もあるのか。)」

二人がコミュについて考えていると、いつの間にか下校時刻になっていた。

「……今日は顔見せ程度でいいだろう。この二人には……我々の手伝いをやってもらう。君たちの生徒会室への立ち入りを特別処遇として公認する。放課後の君たちの行動は任意だが、”生徒会室”という選択肢を忘れないでくれ。今日はありがとう、二人とも。」

「いえ、大丈夫ですよ。私達にお手伝いできることなら、手伝いますから。ね、湊？」

湊も頷く。

そんな二人を、美鶴は嬉しさを含んだ微笑みで見つめていた。

4月27日 く生徒会く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

アクセス件数を見てみれば、3000アクセス突破、そしてユニークアクセスがもうすぐで500人でした。見てくださった方に感謝です！

これからもこの作品を宜しく願います！

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたら願います。

4月29日 く遥と二人く（前書き）

「遥とく」とつくものは、番外編っぽくする予定です。

く用語解説4く

無気力症

普通だった者がある日突然口もきけないほど無気力になってしまうという症状。

原因はシャドウで、シャドウに”喰われた”者たちのこと。

特別課外活動部内では無気力症の患者を”影人間”と呼ぶ。

症状の重さは個人差があり、1度発症して回復したらまず再発しない、とされている。

では、どうぞ。

## 4月29日　～遙と二人～

昭和の日。

もちろん休日なので、蔵戸台分寮生も思い思いに過ごしていた。

それは二人も例外ではなく、さてこれから何しようかと考えているところである。

ふと、湊は昨日順平から貰ったPCゲームソフト「デビルバスターズ・オンライン」を思い出した。

プレイしてみようかと机の上のパソコンに手を伸ばしたところで、湊の携帯が鳴る。

「・・・誰だ？」

湊が携帯を見ると、そこには「満嶋　遙」と件名が表示されていた。あれから湊と遙はよく話をするような関係になっている。というか、遙がよく話しかけてくる。携帯の番号もそのとき交換した。

『おはよ。湊くん、今日ヒマかな？』

「・・・ヒマではあるが。」

『じゃあ遊びに行こうよ。出来れば彩音さんも誘ってさ。じゃ、この後10時に蔵戸台駅ね。それじゃあ。』

「一方的・・・」

湊は携帯を閉じると、上にいるだろう彩音にメールを送る。

『遙から遊びの誘いが来た。姉貴も一緒に、だど。下のラウンジで待ってる。』

『了解（＾　＾）　すぐ行く！』

湊は返事を確認すると、必要なものを持って部屋を出た。

待ち合わせ場所で待っていると、二人に近づいてくる小さめの人影があった。

「お待たせ。・・・ん？何？」

思わず二人は遙を凝視してしまふ。

「・・・だつて、女の子にしか見えなかったんだもん・・・」  
「・・・同感。」

遙の格好は、彩音が言った通り女にしか見えなかった。

服装は茶色のタートルネックに赤いパーカー、紺のジーンズというシンプルな格好だったが、背が普通と比べて低めなのと、その顔立ちのせいで「ボーイッシュな女の子」としか見えない。

「もう言われ慣れた。何着ても女に間違えられるし。制服着ても『何で女の子が男の子の制服着てるの?』って言われたことあるから。」

遙が呆れ気味に言ったことに、二人は苦笑する。

「まあ、それは置いといて。ありがとね、付き合ってくれて。この辺あんまりどういいうお店とかあるのか分からなかったから、案内してもらいたかつたんだ。」

「あ、そういうこと。それならオッケーだよ。もつとも、私達もここ来たばかりで、何があるのかはそこまで詳しいわけじゃないけど。」

「大丈夫。それじゃ、まずはここら辺を案内してもらえないかな?」

「・・・分かった。行くぞ。」

そうして、3人の休日が始まった。

「そこがワック、つまりワイルダック・バーガーね。いつつもポテトが湿つてるの。で、そつちがたこ焼き屋・・・なんだけど、中身がたこじゃないって噂があるよ。私は中身が何なのか知らないけど・・・。で、あそこが古本屋さん。お爺さんとお婆さんがやってるんだ。」

「・・・2階が鍋島ラーメンはがくれ、定食屋わかつ、甘味処小豆あらい。3階がマンガ喫茶のマンガの星、牛丼屋の牛専科、海牛はがくれのラーメンは魅力、わかつの定食は学力、ワックのハンバーガーは勇気が上がる。」

「・・・彩音さんの説明は分かったけど、湊くん、その魅力やら学力かっていうのは・・・？」

湊の失言に彩音がこっそり足を踏む。湊は思いつき顔をゆがめた。「あ、ゴメンゴメン。看板に書いてあるんだ。その『学力アップ!』とか!ま、本当かどうかは分からないけれど・・・」

「・・・へえ。面白い宣伝文句だね。」

彩音は遥の様子にほっと安心する。

特に秘密、というわけではないが、二人はよく「学力」、「魅力」、「勇氣」を上げていた。

これはエリザベスとテオドアに「新しい絆を見つけるにはそれらの数値を上げることが必要」と言われたためだ。

「この辺り一通り回ったら、ここでご飯食べよ?」

「分かった。・・・湊くん、大丈夫?」

「・・・姉貴は容赦を知らない・・・」

「湊、なんか言った?」

「・・・アハハ、大変だね・・・」

彩音の無言のプレッシャーに何も言えない湊に、遥は苦笑した。

午後はポロニアモールを巡ることになった。

「この中では、やっぱりカフェとかカラオケをよく利用するかな。あとCDショップとか?」

「・・・順平あたりだとゲーセンもだる。」

「なるほど。今まで忙しかったからゆっくり見て回れなかったけど、色々あるね!」

遥はポロニアモールの中を見回しながら言った。

「・・・随分と今日は楽しそうだな?案内する方としては嬉しいが、」

湊が遥の様子を見て言う。先ほどの蔵戸台の案内も、学校で見るより楽しそうに見えていた。

「そう?新しい街でさ、こうやってお店を見て回るのって楽しいか

らだと思っけど。」

遥は屈託のない笑みを向ける。どこか不思議な感じのするくせに、  
こういうところだけは子供っぽい、と二人は同時に思った。

「そういえば、遥くんって何でこの街に来たんだっけ？」

彩音がふと聞いた。

「遥って呼び捨てでいいのに。えっと、こういう都会に住んでみた  
かったからかな。」

遥の答えに、湊はある疑問を感じる。

「……親の許可は？」

「……親？ああ、言ってなかったっけ。親、いないよ。顔すら知  
らない。」

湊が内心、しまった、と思う。

「……変なこと訊いたな。ごめん。」

「いや、いいよ。だって親のことなーんにも知らないのに、『可哀  
相』とか言われるのもなんか変な感じするし。」

遥の表情はさつきと変わらない。

「それよりさ、ゲームセンター行きたいんだけどいい？」

「……あ、そうだね。そうしよっか？」

遥の言葉で少し考え込んでいた彩音が我に返った。

「ほら湊くん、置いてくよー？」

「……分かってる。」

湊は、どうも遥の真意が読めないなと思ったが、そのまま2人に着  
いて行った。

夕方。最後に、と遥に頼まれてやってきた場所は、ムーンライトブ  
リッジだった。

丁度太陽が海に沈むところで、夕日が海面で光り、かなり綺麗な景  
色を作っている。

「うわあ、綺麗……」

「僕もここは好きだよ。モノレールから見るのもいいんだけど、こ



「こもなかなかいでしょ？」

彩音が思わずもらした眩きに、遙も夕焼けを見ながら言う。

「夜だと月が綺麗なんだ。車も通らないから、静かで落ち着いてる。街の夜景も綺麗だし。」

遙が夕日に照らされた街の方を振り返った。

湊も海の夕焼けに目を向ける。穏やかな波の音も心地いい。ずいぶんゆったりとした時間に感じられる。

「……君たちの見る世界の色は、何色かな？」

遙の眩きに、二人は振り返った。遙のその瞳は一層読めず、だけどしっかりとした意思のある眼差しに見えた。

「……どういうこと？」

「僕の見た世界に色は無かったんだと思う。君たちは、どうこの世界を見るんだろうね？」

彩音の疑問に答えず、遙は言葉が続けた。表情も読めないものになっている。

「どんな色に、染まるんだろうね……」

そこまで言ったところで、遙は軽く頭を振る。その後、困ったように笑った。

「ごめん、変なこと言っちゃったね。何でもない。」

「……意味、少し分かった気がする。」

湊が呟いた。しかし、遙はそれに触れない。

「もうすぐ日が暮れる。今日はありがと。そろそろ帰らないと。」

「あ、うん……。蔵戸台くらいまで、一緒に帰ろ？」

「分かった。」

その後も他愛のない話をして帰ったが、遙の表情はいつも通りだった。

しかし、二人はあの夕焼けの風景と一緒に、遙の言葉が頭にこびりついていた。

人はいくつもの仮面を持つという。彼のその仮面の下は、未だ誰にも知られることはなく・・・

4月29日 く遥と二人く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

色々と突っ込み所があると思います；

でもまあ・・・温かい目で見守ってやってください。

文章的におかしいところとかは、ご指摘お願いします。

ご意見、ご感想、誤字脱字などありましたらお願いします。

4月30日 〱依頼その1〱（前書き）

テオドアの方を見て書いてるので、エリザベスのセリフが本編と違うかもです。

また後でエリザベス編見て書き直すかも。

〱用語解説5〱

10年前の事故

10年前にポートアイランド地区で起こった大規模な爆発事故。ゆかりの父親はこの際に命を落とした。

彩音と湊の両親はその事故の余波で起こった交通事故にて死亡。桐条からはあまり詳しいことは発表されていない。

では、どうぞ。

4月30日　く依頼その1く

放課後、さて誰かとコミュニケーション上げをしようかと席を立った彩音の携帯に、電話が着信する。

湊の携帯も全く同時に鳴った。

発信者のところには「非通知」としか書いていない。

「……はい？」

『もしもし、テオドアでございます。』

「え、テオ？どうかしたの？」

彩音は予想外の相手からの電話に驚きの声を上げる。

電話などあの部屋にあったのだろうか？とも思った。

湊も同様に驚きの色を隠せずにいる。向こうの相手はエリザベスだったようだ。

『実は、折り入ってお話したいことがあります。ヘルベツトルムへは、ポロニアンモールからもお入りいただけます。”扉”をお探しください。現在姉上が湊様にもお話しされているでしょうが、お二人ご一緒に来ていただけないかと……。』

「分かった。これから行くね。」

『ありがとうございます。では、お待ちしております。』  
そう言って電話は切れた。

「なにになに？二人とも電話で『これから行く』って、まさかダブルデート？」

順平が今の電話を聞いていたらしい。

「……短絡的思考だな……。」

「ほんつと、そーいうことに結び付けすぎだっつての。デリカシーがないんだから。」

「ゆかりツチヒドっ！そして何気に湊も!？」

呆れ気味に言った湊と、順平と同じく会話が聞こえていたらしいゆかりの追撃に、順平はがくつと肩を落とす。

「友達に頼まれごとをされただけ。じゃ、順平は置いて行く、  
湊。」

「彩音ツチまで!?!」

彩音にまで言われてしまった順平は、唯一の救いの手を失ってずー  
んと落ち込んだ。

「で、来たはいいけど・・・モールの中って広いんだよねー。これ  
じゃ”扉”ってのを探すのも一苦労じゃない?」

「・・・手分けして探すか?」

「それもそうか。じゃあ・・・」

湊は向こうね、と言おうとしたところで、彩音は湊がある人気のな  
い路地の先を見つめているのに気がついた。

「・・・?湊、何かあるの?」

湊は黙ったまま、その方向に歩き出した。

「ちよつと待ってよ〜!」

彩音は慌ててその後を追う。

湊は振り返らずに進んでいく。辺りにはもう人は誰もいない。

不意に、ポケットに入れていた彩音の契約者の鍵が光を放ちだした。

「・・・ビンゴ。」

湊がの視線の先には、タルタロスのエントランスにあったものと同  
じ青い扉。

「すごい!何で分かったの?」

「・・・勘。」

湊の簡潔な答えに、ああそうだった、と彩音は納得する。本当に湊  
は勘がいい、と改めて認識した。

二人はそのまま青い扉を開ける。

もう見慣れたその部屋に、二人を呼び出した人物たちは主の傍に控  
えている。

テーブルの前の椅子に二人が座るのを確認すると、テオドアが口を

開いた。

「お呼び立てして申し訳ございません。実は・・・折り入ってお願いがございます。」

「・・・何？」

「もしよろしければ、私たちよりの”依頼”にお応え下さいませんかでしょうか？」

「・・・依頼？」

エリザベスが言った言葉に、彩音は首をかしげる。

「もちろん、依頼達成の暁には相応の”報酬”もご用意しております。」

テオドアのフォローに、少し彩音と湊が食いついた。現在タルタロス探索の際の回復やら仲間全員の装備やらでお金が足りない。いくらタルタロスや二人のアルバイトで稼いでも、予想以上に消費が重なってしまうのだ（まあ原因の1つには二人のパラメータアップ費用も入っているのだが）。

「貴方がたのお力を、私は見てみたいのです・・・」

「分かった！やるよ。で、どんなことをすればいいの？」

エリザベスのお願いで、彩音は嬉しそうに返事をした。

「ではこれを。私達からの依頼のリストです。」

エリザベスが差し出した紙の束を見ていくと、そこには依頼の内容と簡単な説明が書いてある。

「うーん、どれどれ・・・あっ、これなんかすぐ出来そうじゃない？」

「・・・なるほど、確かにな。」

二人が見ている場所には、”ポロニアンモールに出かけたい”という依頼が書かれていた。

「エリザベス、テオ！このポロニアンモールの案内、今いいよ！」

「本当ですか？」

テオドアが少し驚いた顔をする。今すぐ、とは流石に思わなかったのだろう。

「・・・イゴール。2人を借りるぞ。」

「構いませんよ。2人とも、お客人に迷惑はかけないようにするのですよ。」

「承知しております、主。では、早速行つて参ります。」

エリザベスとテオドアが軽くイゴールに礼をする。それを見た二人も椅子から立ち上がった。

「じゃあ、行つてきまーす！」

彩音もイゴールに軽く手を振ると、ベルベットルームを後にした。イゴールがちょっとだけエリザベスとテオドアを羨ましく思ったのは秘密だ。

まず二人はよく利用する店が集まっている場所を案内することにした。

「ここがポロニアンモール・・・ま、想像通りというところですね。」

テオドアはそう言うが、目が輝いているように見えるのは気のせいではない。

「・・・素直に喜べばいいのに。」

「そ、それほど単純ではありませんよ。」

湊の呟きに、テオドアは口ごもった。

「まあまあ、そう強がらなくていいでしょう、テオ。湊様の言う通りに楽しまないと。」

「それは・・・」  
テオドアはさらに口ごもる。

「・・・あ・・・これは・・・！早くも、見事な逸品との出会いが・・・！」

「・・・エリザベス？」

そこで、エリザベスがある物に向かって走り出した。

その先にあるのは噴水。この広場には複数設置されているが、それは広場の中心にあるものだ。



「噴水がどうかしたの？」

「これが”噴水”……」

エリザベスは噴水をまじまじと見ている。

「命の源たる水をもてあそぶ、罪深きアート……その魔性ゆえに、硬貨を投げ入れた者の願いを叶えてしまうものもあるとか……。」

私、大変興味があります。」

「……そんなの迷信だろ？」

「そうでしょうか……？硬貨の量が、噴水の主の求めに満たなかったという可能性は……。」

エリザベスは懐から何かを取り出す。それは大きく膨らんだ財布だった。

「実は私、そうした事も考慮しまして、硬貨をやや多めに持ってまわりました。」

「……エリザベス、まさか……それ全部入れるわけじゃないよな？」

湊が少し顔を引きつらせながらその財布を指差す。

「そのまさかでございます。500円玉にして2000枚……締めて100万円からスタートでございます。」

「ちょ、ちょっと待った！ね、そんなに入れないでも大丈夫だから！」

彩音が慌ててエリザベスの手を止めた。

「……何とかならないのか？お前の姉君は。」

「……私でも、時々良く分からないことがありますよ……。ですが、先ほどの姉上の話……本当なのでしょう？その……硬貨を投げ入れた者の願いをかなえてしまうとか……。」

「……確かに、そんな噂がある噴水があることは確かだな……。」

お前もエリザベスのように大金投げ入れるつもりだったのか？」

「し、しませんよ！それに、私はまだ……その、願いが決まっておりますから！」

テオドアの声に、それまで粘り強く噴水に500円玉をいれようと

していたエリザベスの手が止まる。

「・・・そういえば、私もまだ願いを何にするか、決めておりませんでした。」

「そ、そうそう！それ決めてからじゃないと意味ないって！それに、そういうおまじないは500円1枚で充分だからっ！」

彩音がこれ幸いとエリザベスに財布をしまわせた。

はあー、と息を吐く彩音に、湊はこっそり耳打ちする。

「・・・あの大金、欲しいって思った？」

「まさか！・・・でも、今ここに投げ入れさせといてベルベットルームにエリザベス達が帰ったら拾うって手もあったかも・・・？」

「・・・馬鹿だろ・・・」

湊が彩音と同じようにため息を吐く。

「・・・？ここは、何の施設でしょうか？」

テオドアの声に、二人はエリザベスとテオドアの元に戻る。テオドアの指差した先には、交番があった。そのままエリザベスとテオドアが交番へと向かっていく。

「中に険しいお顔立ちの御仁がいらっしやいますが・・・」

「顔写真・・・指名手配・・・報奨金？なるほど、こちらにも討伐の依頼があるのか・・・」

テオドアは交番の窓に貼ってあるポスターを眺め、感心したように頷いた。

「・・・討伐はしないよ？」

「ということは、生け捕りでしょうか？高度なハンターがいるものですね・・・」

「・・・シャドウが相手じゃなくて、ただの人間だから・・・」  
こちらも感心したように頷くエリザベスに、湊は訂正する。

「・・・あ・・・！まさか、あれは・・・！」

エリザベスが辺りを見回して、かなり嬉しそうな顔をしてその店の前に走っていく。

そこは”クラブ・エスカペイド”。

「ここが噂の”クラブ”・・・？」

「知ってるの？」

「ええ・・・。」内なるパトスのままに踊る・・・そんな日常では許されぬ欲求を解放する、光と音の地下庭園”・・・”

「・・・合ってるのか合っていないのか、いまいち判断に苦しむな・・・」

エリザベスの”クラブ”についての説明に、湊が若干困った顔をすする。

「私、1度は入って踊ってみたいと思っておりました。それでは中に・・・」

エリザベスがドアを開けようとするが、今は昼間。勿論やっているはずがない。

「・・・！？そんな・・・今は閉まっているのですか？・・・残念でございます。ぜひ私もと思っておりましたのに・・・」

エリザベスは愕然としている。しかし、突然顔を上げると、手やら腰やらを振って踊りだした。

「イエーイ！」

突然のことに、3人は啞然とする。何でエリザベスはこんな昼間にこんなところで踊っているのだろうか？と疑問が二人によぎる。

「さあ、テオ！貴方も一緒に！」

「わ、私ですか！？私は・・・その、遠慮しておきます・・・」  
テオドアはすす、と少し後ずさる。

やがて踊っていたエリザベスが踊りを終了した。

「・・・フウ・・・いくぶん気が治まりました。」

「・・・良かったな、エリザベス・・・。」

「はい。」

につこりと笑うエリザベスに、湊は少し疲れが出てきた。

「さて、次は・・・貴方がたのお勧めの場所に案内していただけませんかでしょうか？」

「私達の？じゃあ、ゲームセンター、とか？」

彩音の「ゲームセンター」という言葉に、テオドアが首をかしげる。

「ゲーム・・・センター・・・？」

「楽しいところだよ？さ、行こ！」

彩音が先頭にたつて歩き出す。丁度ゲームセンターはエスカペイドの反対側に位置していた。

早速、テオドアが店の前においてあるクレーンゲームを凝視している。

「未確認飛行物体捕手」・・・？」

「まあ、ジャックフロストの人形がたくさんありますね。」

エリザベスが嬉しそうにクレーンゲームの中に入っているジャックフロストを模したフロスト人形を覗き込んだ。

「・・・このケースの中に詰まっているのが、未確認飛行物体でしょうか？ジャックフロストのぬいぐるみに見えますが・・・」

「・・・違う。いや、フロスト人形なんだが、UFOじゃない。」

「では、これは一体どういう意味なんでしょうか？」

テオドアは理解できないといった風に首をかしげている。

「・・・いつか、未確認飛行物体が襲来した時のための模擬練習・・・ですか？」

湊は思いつきり勘違いをし始めたテオドアに頭を抱える。そして救いを求めるように彩音を見たが、彩音はもう既に教えることを諦めて状況を楽しむことにしたようだった。

それが更に湊に疲労感を与えた。

「・・・もう、どうでもいい・・・」

湊は面倒くさがりなところはあるが基本は真面目な性格だ。だが湊はもう、訂正することを放り投げた。

「じゃあ、1回やってみる？エリザベスがさつきからそれをものすごく欲しそうな目で見てるし。」

彩音がエリザベスを指差す。確かにエリザベスはクレーンゲームの中のフロスト人形を見つめ続けていた。

「姉上はジャックフロストが大好きなものですから・・・。それで

すね。少し、やってみましょうか。」

「・・・テオ、必ずジャックフロストを捕まえなさい。そして私に献上して下さいませ。」

エリザベスがキツとテオドアにプレッシャーをかける。テオドアは冷や汗をかきながらクレイメンゲームに200円を入れ、ゲームを開始した。

結局、エリザベスがフロスト人形を全部で3つ（鑑賞用、保管用、宣伝用にと）欲しがったため、テオドアが何回も挑戦したのだがゲツトできず、仕方なく彩音が2つ、湊が1つ取ってエリザベスにあげた。

しかしこれで合計7000円ほどテオドアのお金がなくなってしまったのだった。

ポロニアンモールの案内を一通りしてベルベツトルームに戻ると、エリザベスとテオドアが揃って頭を下げた。

「ポロニアンモールのご案内、ありがとうございました。」

「先ほど、このベルベツトルームに噴水を設置して欲しい、そしてこのベルベツトルームを”クラブ”にして欲しいと交渉したのですが・・・残念ながら、却下されてしまいました。即答でございました。せめて、”未確認飛行物体捕手”の設置をお願いできないかと掛け合っております。」

エリザベスの残念そうな顔に、二人は苦笑するしかない。

「さて、今回の報酬ですが、特別なものをご用意いたしました。これがあれば、ある特別なペルソナを合体で生み出せるようになります。」

彩音はテオドアから”小さなチャイナ服”を受け取る。

「それと・・・先ほどのフロスト人形のお礼、としまして、こちらを差し上げます。」

「・・・ジャックフロストとジャックランタン？」

エリザベスから渡されたのは、ジャックフロストとジャックランタ

ンを模した手袋だった。

「まだ装備できる方がいらっしやらないようでございますが、そこらは武器となります。その外見ゆえに、攻撃した相手を高確率で魅了してしまうという、大変優れた効果を持っております。」

「確かに外見はカワイイよね・・・」

彩音は湊が持っているジャック手袋をまじまじと見つめる。

「ま、私達も楽しかったし、また案内するね！」

彩音が笑顔でエリザベスとテオドアに言ったが、その隣で湊は先ほどの誤解しまくっていた2人を思い出して疲れがどつと出てきたのだった・・・。

異世界の住人との交流は、決まった世界しか知らぬ住人達に何をもちたらずのか。

4月30日 く依頼その1く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

さて、次はあの人が出てくる予定です。

投稿し始めて早2週間、たくさんの方のアクセスありがとうございます！  
これからも頑張って書いていきます！

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告等ありましたらお願いします。

6 / 4 加筆修正

5月1日 く真田のおつかいく（前書き）

本編が5月に突入！もう少してモノレール戦ですね。あと2話後くらいです。

3DS・・・発売しましたね。私は「デビルサバイバー オーバー クロック」が出るまで買いませんが。

く用語解説6く

桐条グループ

南条の分家にあたる大企業。現在の総帥は桐条武治。

月光館学園の母体でもある。

現在最大のシェアを誇るのが「桐条エレクトロニクス」。

かつてはシャドウ研究部門である「エルゴ研（エルゴノミクス研究所）」という部署もあった。

では、どうぞ。



5月1日 く真田のおつかい

「そういや、知ってた？真田サン、今日検査入院でさ。さっき連絡あつて、病院に届けモノ頼まれちゃったんだよネ。オレって、結構頼られてる？」

「そんなの、帰宅部ならヒマだろうって頼んだんでしょ？」

「そ、そんなことねーだろ。」

得意そうになつて言った順平に、ゆかりが厳しいツツコミを入れる。「へえ、真田先輩って今日学校来てないから、どうしたのかなーと思つてたけど。検査入院だったんだ？」

彩音も話に加わる。湊は音楽を聴いていて、話には入ってこない。

「で、何を持つて来いつて？」

「隣のE組の”クラス名簿”だつてさ。」

「名簿・・・？何に使うのかな？」

予想外のものに彩音は首をかしげる。順平に視線を向けても、順平も何も知らないようだ。

「て言うか、今日、たまたま部活休みだし、付き合おつかな、それね、一緒に行くよね？」

「うん！」

「有里くんは？」

「もち、強制連行。」

彩音の笑みに、湊は気がつかない。

「決まりね。」

「ええっ・・・」

順平がうつ、という顔をする。

「何よ、別に困らないでしょ？」

「オレが頼まれたのになあ・・・」

順平の呟きは、全員にスルーされた。

「じゃ、早く行こうよー！」

「……！？ちよつ、姉貴……！」

湊は彩音に引きづられるようにして教室から出て行く。  
ゆかりも未だ少し落ち込み気味の順平を引つ張って教室から出た。

彩音が真田の病室の扉を開けると、そこに真田の姿はなく、見知らぬ少年がベッドに座っていた。

「ここって真田サンの病室……じゃなかったりしますか？」

「……そんなことは無いだろ。ちゃんと確認したし。」

そこに丁度、真田がやって来た。

「お前たち。どうした、大勢で？」

「順平について来たんです！」

「ただの検査入院と言ったろ。」

真田は軽く苦笑する。

「……アキ、もういいか？」

先に病室に来ていた少年が立ち上がった。

「ああ、参考になった。」

「ったく……いちいちメエの遊びに付き合ってもらえるか。」

少年はそのまま彩音たちの横を通り過ぎようとする。しかし、その足は止まり、少年の目は二人を見ていた。

「お前ら……」

「……何か？」

「いや……何でもねえ。」

少年は今度こそ病室を立ち去った。

「だ……誰っすか、今の？」

順平が少年が去って行った廊下を指差して言う。

「一応、同じ学園の生徒だ。先月から増えだした”謎の無気力症”……お前たちも知ってるだろ。アイツたまたま、患者の何人かを知っててな。話が聞きたくて呼んだ。」

「同じ学園の生徒……？にしては見たことなかったし、私服だったけど……？」

「・・・休学中か何かなんだろ。」

湊が言うと、彩音は納得したように頷く。

「それより順平、頼んでたものは？」

「モチ、持ってきたツス。」

順平が鞆からクラス名簿を取り出し、真田に渡した。

「済まん。じゃあ、そろそろ行くか！」

真田はクラス名簿を確認すると、腕を回し始めた。

「ちよっ、んなに腕ブンブン振ったら、また・・・」

「平気だ、このくらい。あまり長いと部活にも響くだろ。取り戻す時間が惜しい。」

真田は平然と答えた。

「・・・そう言えば先輩って、なんでボクシングを？」

ゆかりが真田の様子を見て訊く。

「・・・始めた理由か？ そうだな・・・別にボクシング自体に思い入れはない。素手の格闘技なら何でも良かった。昔、自分の無力さを思い知ったことがあってな・・・。もう、ああいう後悔はしたくないんだ。」

真田はそのときのことを思い出しているのか、ぎゅっと顔を歪めた。拳も固く握っている。

「それに、自分がどこまで強くなれるのか興味もあるしな。まあ言うてみれば、”自分対自分”の終わらないゲームみたいなものだ。」

「な、なるほど・・・ゲームっすか・・・好きっすよ！ オレもゲームッ！」

「あんなのはテレビゲームでしょ？」

ゆかりが呆れて言う。

「真田先輩の言ってる”ゲーム”と順平の言う”ゲーム”じゃ違うもんねー。」

「・・・馬鹿だな。」

二人は順平の様子を見てこっさり耳打ちしあう。

「あ、でも”格ゲー”もやるよ？」

「・・・どうでもいい。」

順平の更なる馬鹿発言に、ゆかりは直すのを放り投げた。

「・・・馬鹿だな。完全なる馬鹿だ。試合の”ゲーム”と娯楽の”ゲーム”の区別もつかないとは。」

「ええ〜！？そこまで言いますか普通！？冗談なのに・・・」

「冗談に聞こえないよ、順平。」

彩音のさりげない追撃に、順平はダウンした。

「あれ、こんなところでどうしたの？」

その頃、病院を出た先ほどの少年

荒垣あらかぎ 真次郎まじろうは聞き覚えのあ

る声に振り返った。

「珍しいね。あ、真田先輩に呼び出された？今日は検査入院らしいし。」

「・・・お前か。」

荒垣の視線の先には、遙がいた。この2人は実は少し前から知り合  
いだったりする。

そして今現在、荒垣とタメ口で話す後輩など遙ぐらいしかいない。

「あの馬鹿がシャドウにやられるなんてな。あいつトレーニングサ  
ボってんじゃねえのか？」

「いや、トレーニングはちゃんとやってたみたいだよ。必要以上に  
あの真田先輩まいたがトレーニングサボると思う？」

「そういえばそうだな。」

荒垣と遙は並んで歩きながら話す。長身で少し雰囲気怖い荒垣と、  
背が低く女のような顔をした遙とでは、周囲からはかなり変わった  
2人組に見えるだろう。事実通りすぎる人の殆どが2人に珍しそ  
うな視線を向ける。

「アキは昔から、”力”のことしか頭に無え。過ぎた力は身を滅ぼ  
すだけだつてのに・・・」

そこまで言つて荒垣は俯いてしまった。

「あんまり無理しないでね。本来ならば”あれ”は別の用途に使う

ものだし、”あれ”は使いすぎると・・・」

「分かつてる。」

荒垣が遙の言葉を遮るように言った。

「・・・ならいいけど。じゃあ、僕はそろそろ行くよ。・・・忘れてとは言わないけれど、少し背負い込みすぎだから。」

遙は軽く荒垣に手を振り、駅の方に歩いて行った。

「・・・あいつも随分物好きな奴だ。俺なんかを気にかけるなんてな・・・。」

荒垣は遙が去って行った方を一瞥すると、裏路地の方へ歩いて行った。

5月1日 く真田のおつかい（後書き）

いかがでしたでしょうか？

荒垣と遥の繋がりは、前々から考えていたことでした。

ちなみに私は、女性主人公では荒垣派です。真田先輩や天田くんや綾時、テオもいいんですけどね・・・。

あの荒垣カップルENDは超大好きです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらよろしくお願ひします。

5月2日 〱回想と忠告〱（前書き）

連続投稿なんて久しぶりだなあ・・・。  
書き始めたときは勢いに任せて書いてしまったのですが（笑）  
さて、今回は多少ネタバレが入ります。

〱メインキャラ紹介〱

荒垣 真次郎

月光館学園高等部3年C組所属。しかし今は休学中。

真田とは同じ孤児院の出であり、親友。

かつて特別課外活動部にも参加していたが、とある事情で活動部を  
抜ける。

現在はポートアイランド裏路地によくいるようだ。

では、どうぞ。

## 5月2日　く回想と忠告

遙が荒垣と会ったのは、1年ほど前だった。

ポートアイランド地区に引っ越してくるまでの間に、ポートアイランドに来ることは何回があった。

ただでさえ人工島として有名だし、ポロニアンモールなどに来る客は結構多い。遙が来ていても不思議ではなかったのだ。

しかしそうは言っても、遙には定期的にこの街に訪れなければならぬ理由が少しだけあったのだが・・・それはここでは伏せておくともかく、その事情の一環で遙はポートアイランド駅周辺を歩いていた。

その中で、彼は見つけてしまったのだ。

もう既に厚手のコートなど不要なくらいに暖かくなったというのに、その人物は見るからに暑そうなコートにニット帽を被り、さらにブーツまで履いていた。

そして不良の溜まり場となった場所の中で、少しだけ離れて座っている。

その雰囲気は明らかに他人とは違っていた。

遙はその少年に少しだけ興味を持った。

その少年が、まるでいつかの自分と重なっているように見えたからだ。

遙はあの時間になるのを待ち、接触してみることにした。

遙はその気になればその少年のことなどすぐに分かるのだが、彼とは直接話してみたいと思った。

「こんばんは。」

「・・・ッ!? 誰だ、お前は?」

荒垣はすぐにバツと遙の方を睨みつけた。

荒垣にとっては、この時はまだ”この時間で動ける人間”など、特



別課外活動部の人間しか知らない。

遙の姿が見え、その外観が”背の低い女（実際には女ではなく女顔の少年だが）”だったとしても、荒垣は警戒を緩めなかった。

「この時間に来たのが悪かったかな？少し君と話したいと思って来たのだけれど。」

遙は困ったように頭を掻く。

「この時間帯なら、誰にも聞かれることなく話せるかなって。すぐ分かったよ。君は”適合者”だってね。」

「・・・何の用だ。つか、テメエは人間か？」

「やだなあ。僕は真正銘の人間だよ。こんなにリアルな”あいつら”なんて、今はまだ居ないでしょ？」

「・・・さア、どうだかな。いてもおかしくねえだろ。」

荒垣はフン、と鼻を鳴らす。

「質問に答える。何の用だ。」

「だからさつき言ったとおり。ちょっと話したいだけだつてば。そんな警戒しなくても、君のような人相手に僕が何を出来るって言うのさ。僕はただの無力な一般人なんだから。」

「知らねえよ。お前の言う”あいつら”が俺が知ってるのと同じ”あいつら”なら、”あれ”だつて持つててもおかしくねえだろうが。」

荒垣は視線を外すことはやめたが、まだ警戒を解いてはいない。遙は見た目だけでは無力そうな一般人で、殺気の類も感じられないが、まだあくまで感じられないというだけだ。それに”あれ”ペルソナが無力だとは限らない。ペルソナはたとえ使役者が女子供だとしても、能力が弱いとは限らないのだから。

「そうだね。でも大丈夫。持つてはいるけど、そういうことに関しては何も出来ない奴だから。信じてくれないかな？」

荒垣はじつと横目で遙を観察する。見たところ何も武器は持っていなさそうだ。召喚器すら、所持していない。

折れたのは荒垣だった。

「・・・フン、好きにしゃがれ。」

「ありがとう。」

遙は微笑むと、荒垣の隣に行き、座った。

「名前は？」

「人に名前聞くときは自分から名乗れ。」

「そうだったね。僕は満嶋 遥。高校1年。」

遙の自己紹介に、荒垣は驚いたように遙を凝視する。

「背が低いこと、これでも少しは気にしてるんだからそーいう風に見ないでよね。」

遙が軽く口を尖らせた。

「あ、ああ・・・。」

「で、君は？」

「・・・荒垣だ。」

「荒垣くん、か。よろしく。」

つくづく不思議な奴だ、と荒垣は思った。俺にこんななれなれしく話しかけてきたただけではなく、こうして少しでも微笑んでくる人物は初対面ではいなかった、と。少なくとも特別課外活動部を抜けてきてからは。

「・・・女がこんな時間に出歩いてていいのかよ。」

「え、何？よく聞こえなかったなあ？」

遙は荒垣の発した一言に恐ろしいほど綺麗な笑みで答えた。荒垣は背筋が凍るような感覚を覚える。

「・・・何でもねえ。」

「そう、ならいいけど。あ、言っとくけど僕は生物学的分類上では男だから。」

遙は”男”の部分強調して言った。

荒垣は先ほどの言葉を撤回しそうになった。単純に女に間違えられただけで、あれほどの殺気を出すとは、と。

「……で、荒垣くん。君は何を背負ってる？」

遥の言葉に、荒垣は先ほどとは違う意味で背筋が凍った。何故それを知っている。

「……んで、それを……」

「僕と雰囲気似てると思ったから。昔の僕に。で、やっぱり話したくないよね。ならいいや。訊いてみたいと思ったけど、撤回するよ。言いたくないことを言わせる趣味はないし。」

荒垣は少し拍子抜けした。自分から訊いておいて、凄く簡単に引き下がるものだな、と。しかし、まだ気は緩められない。

「それにまずは自分のことを話さないとダメだろうしね。あいにく僕は今、それを話すことは出来ないから。……ま、いいや。また来るよ。」

遥は立ち上がる。

「あ、そうそう。僕の話は誰にも話さないですよ？僕は直接”物語”には関わりたくないんだ。ま、もう関わっちゃってるのかもしれないけど。それじゃあね。」

遥はすたすたと来た道を戻っていく。

「何を思ってるのかは知らないけど、人の命の償いは死ぬだけじゃないんだよ。勿論相手が許さず、復讐を誓うかもしれない。でもそれはある意味では正しく、ある意味では違う。」

遥はそれだけ言うと、振り返りもせず路地裏を後にした。

それからだ。遥がちよくちよく路地裏に来て、荒垣と会うようになったのは。

荒垣はその日のことをぼんやりと思い出しながら、またいつものように路地裏に座っていた。

荒垣が回想をしているとき、二人は少年から忠告を受けていた。また二人がうとうととしている時にその気配が現れたのだ。

「やあ、元気かい？」

「・・・ああ、君ね・・・」

彩音は目をこすりながら目の前の少年を見た。

「1週間後は満月だよ・・・。気をつけて。また1つ、試練がやってくるからね・・・。」

「・・・試練って何？」

「君が”やつら”と出会うことさ。」

彩音はその”やつら”という単語で、目をこすっていた手がぴたりと止まる。

「またあの、この前の大きいやつみたいなの、か・・・」

「試練と向き合うには準備が必要だ。でも時間は、無限じゃない・・・」

「。もちろん、君たちなら分かっていると思うけどね。じゃ、それが過ぎたら、また会いに来るよ。」

少年はそれだけ言い残すと、消えてしまった。

今回は前回とは違って、湊にも同じ内容しか残さずに消えて行った。

試練の宣告。あと、7日・・・

5月2日 く回想と忠告（後書き）

いかがでしたでしょうか？

忠告を書きたかったのですが、それだけでは短いと思ったので回想を。

なんか示唆とか苦手な気がします・・・；

つい出しすぎる気がする；

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらよろしくお願ひします。

5月9日 〱?番 女教皇〱(前書き)

満月戦第2弾!です。

予想以上に進みが早い気がしますね。

まあ色んなイベント(主にコミュ)すつ飛ばしてるせいもあるんでしょうが・・・

〱用語解説〱

タルタロス

影時間の中だけに、月光館学園の位置に現れる塔。

中はシャドウの巣窟となっている。

その名前はギリシャ神話で”冥界の更に奥にある奈落”のこと。入るたびに構造が変わるため、探索時にはナビ役が不可欠。

では、どうぞ。

5月9日 〱?番 女教皇

今日は満月。

1週間ほど前に謎の少年から”試練が来る”と予告された日でもある。

今日は万が一の備えて、二人はどこへも寄らず寮へ帰ることにした。

影時間。

蔵戸台駅付近のとあるビルの屋上に、小さな人影があった。

屋上のギリギリに座り、そこから影時間で停車したモノレールの方を見ている。

その小さな人影の背後には、ローブを着込んでフードも被った、まるでゲームの賢者のような格好をした人影がある。顔はフードのせいで伺えない。しかしその姿は半透明で、その人影が人間ではないことは明らかだった。

「さーて、どう動くのかな・・・」

小さな人影の呟きは、誰にも聞かれることなく影時間の闇に消えた。

それと同じ頃、寮の作戦室。

美鶴が1人で、バックアップ用の機械をいじっていた。そこからは耳障りなノイズが鳴っている。

「フウ・・・」

美鶴がため息を吐く。先ほどから何回も挑戦してはいるのだが、うまく街全体のサーチは出来ていないことが原因だった。

「なんだ、まだやってたのか？」

そこへ真田がやってきて、驚いた様子で美鶴を見た。

「まあな。敵はいつ来るとも限らない。」

「タルタロスの外まで見張ろうなんて、そう簡単に出来るものか？」

「本音を言えば、力不足だな・・・。私の”ペンテシレア”では、

情報収集はこの辺りが限界かも知れない。」

美鶴がまたため息をついた。

「・・・しかし、ペルソナの力というのは想像していたより、だいぶ幅広いものらしい。何しろ、次々とペルソナを替えながら戦える者まで現れたくらいだ。しかもそれが双子とはいえ、同時に2人。

”あの二人”の能力には、特別なものを感じる。まだ覚醒して間もないというのにな。」

「確かに、あんなヤツが現れるとは驚きだ。しかし、ペルソナを使うのは俺たち自身。それを生かせるかは、アイツら次第だな。」

美鶴と真田が二人の能力について考えてるところへ、美鶴が操作していた機械から、先ほどとは違う音が聞こえてきた。

「ん・・・？」

美鶴が気づいて、機械を少し操作する。

「これは・・・シヤドウの反応・・・！？」

「なに！？ホントに見つけたのか！？」

見つかるとは思っていなかった真田が、驚きの声を上げる。

「でも待て、反応が奇妙だ。大きすぎる。こんな敵は今まで・・・」

冷静に状況を判断する美鶴の脳裏に、先月の光景が浮かぶ。

「まさか、先月出たのと同じデカイヤツか！？」

真田も同じ考えに行き着いたらしい。

「・・・間違いないだろう。」

美鶴の言葉が、それを決定付ける。

「そうか・・・思いがけず、楽しめそうじゃないか。他の4人を起こすぞ？」

「ああ。」

美鶴の返事を聞くと、真田は作戦室の機械を操作し、緊急招集をかけた。

すぐに4人は制服に着替え、召喚器とそれぞれの武器を持ち4階に上がる。



「お待たせしました！」

「何スカ！？敵スカ！？」

美鶴は冷静に状況説明を始める。

「タルタロスの外で、シャドウの反応が見つかった。詳しい状況は分からないが、先月出たような”大物”の可能性が高い。」

大物、と聞いて4人の顔に緊張が走る。

「外に出た敵は仕留め逃す訳にはいかない。影時間は、大半の者にとつて”無い”ものだ。そこで街を壊されたりすれば、”矛盾”が残る。」

「ま、要は倒しゃいいんでしょ？やっつてやるっスよ！」

順平は好戦的にガッツポーズをする。

「また、あんたは・・・」

先月の大型シャドウを知っているゆかりは順平を呆れた目で見返す。

「明彦は、ここで理事長を待て。」

美鶴が真田の方に向き直つて言う。

「なっ・・・冗談じゃない！俺も出る！」

「まずは体を治す方が先だ。足手まといになる。」

「なんだと！？」

真田が美鶴に食つて掛かるが、美鶴はきわめて冷静だ。

「彼らだつて戦えるさ。少なくとも、今のお前よりはな。・・・明彦、もつと彼らを信用してやれ。みんなもう実戦をこなしてるんだ。」

「・・・」

真田は悔しそうに黙ってしまった。真田は4人を信用していないわけではなく、ただ戦いに出ただけのようだ。

「・・・くそっ。」

「まかして下さい！オレ、マジやりますからっ！」

順平が自分をアピールするが、真田は順平の方はスルーし、二人の方へ向いた。

「仕方ないな・・・現場の指揮を頼む。」

「・・・やっぱ、そう来るんすね・・・」

順平がちよつとがっかりしたように肩を落とすが、誰も気になどしない。

「頼むぞ・・・出来るな？」

「任せてください！」

「ああ、期待してるぞ。」

彩音の答えに、真田が頷く。

「・・・っーか、もうこのままリーダー固定っばいよな・・・。オレ、男なのにさぁ・・・」

順平が愚痴る。

「・・・男も女も関係ないだろ。それとも姉貴がリーダーで、何か不満か？」

「湊の言う通りだ。男も女も関係ない。出来る者がやるだけだ。女だからという理由で、今後彼女を見下すような言動をしたら・・・」

「あ、や、いやいや！別に下に見てるとか、そーいうんじゃ・・・」

「・・・姉貴のことを馬鹿にするようだったら、ただじゃおかない。」

湊と美鶴の発言に、順平は身を固くした。

「いいから、3人は先に出る。美鶴は準備がいるんだろ？」

真田が3人の間に割って入る。

「ああ、駅前で落ち合おう。」

「了解です。じゃ、行きますか！！」

ゆかりの言葉に3人は頷いた。

先に来ていた3人は、駅前でジュースを飲みながら美鶴の到着を待っていた。

「まだかな・・・」

ゆかりがつい駅前の時計を見ようとすると、影時間で止まっていることに気づき、やめた。

「すぐ来んだろ。」

順平は缶ジュースを少し飲んで答える。

「今夜は満月か・・・なんか影時間を見ると不気味ね・・・」  
ゆかりが空で輝く月を見上げる。

そこに、どこからかバイク音が聞こえてきた。

「・・・ん？なんだあ!？」

すぐ気づいた順平が、立ち上がって周りを見回す。

すると、結構な速度で走ってきていた大型のバイクが、4人の目の前で止まった。

そしてバイクに乗っていた人物がヘルメットを取る。

「遅れてすまない。」

「バ、バイク・・・」

「・・・タルタロス探索の時もある物だな。今回は積んでいるものが少しだけ違うようだ。」

バイクに驚くゆかりに、湊が冷静に解説を入れた。

「いいか、要点だけ言うぞ。情報のバックアップを、今日はここから行う。君らの勝手はこれまで通りだ。シャドウの位置は、駅から少し行った辺りにある列車の内部。そこまでは線路上を歩くことになる。」

「え、線路歩くと、それ、危険なんじゃ・・・」

「心配ない、影時間には機械は止まる。無論列車もだ、動く筈はない。」

「や、でもそのバイク・・・」

順平は今美鶴が乗っているバイクを凝視する。

「これは”特別製”だ。」

「ああ、なるほど・・・」

「それに、情報があったら私が逐一伝える。よし、では作戦開始だ!」

「行って来ます!よし、みんな行くよ!」

彩音の号令に、3人が頷いた。

「ああ、戦果を期待しているぞ。」

美鶴の言葉を受けて、4人は無人の改札を通り抜け、シャドウのいるモノレールに向かった。

「お、意外に早い反応だったね。さて、ここからが戦いの始まりだよ。」

屋上の小さい人影は、本来ならそこまで鮮明に見渡せる筈は無いが、まるで全て状況を理解しているかのようにモノレールを見て、笑った。

相変わらず、背後の人影はびくりとも動かない。

「これ・・・だよな？」

ゆかりが目の前の、停車しているモノレールを指差す。

そこへ、通信機の着信音が鳴り響き、美鶴からの通信が入った。

「3人とも、聞こえるか？」

「あ、はい、大丈夫です。今着いたんですけど、パツと見じゃ、特に・・・」

確かにゆかりの言う通り、そのモノレールの外見からでは何も異常はないように見える。しかし、湊はこのモノレールに違和感を感じていた。

「敵の反応は、間違いなくの列車からだ。3人とも離れすぎないように、注意して進入してくれ。」

「分かりました。」

「・・・了解。」

ゆかりと湊が返事を返す。

「・・・へへッ、腕が鳴るぜっつーか、ペルソナが鳴るぜ！」

「じゃ、乗り込みますか！」

ゆかりと順平が話している間に、湊は彩音に耳打ちしていた。

「・・・姉貴、なんかこの列車、おかしいよ。何でこんな、駅も何もないとこでドアが全部開いてる？」

「あ、確かに・・・」

しかし、彩音がもう1度モノレールをよく見ようと振り向くと、もう既にはしごに登り始めているゆかりの姿があった。

しかし、ゆかりはハツと何かに気づいたようで、一旦足を止めると、後ろの順平を振り返る。

「・・・ノゾかないですよ。」

「へいへい、ノゾかねえつつの。・・・でか、見えたらしょうがねーよ?」

順平の言葉に、ゆかりの額に青筋が浮き出たような気が、二人にはした。

「・・・彩音。順平、ここに埋めていこうか。」

それは絶対零度の響きを持っていた。彩音はあはは・・・と苦笑するしかない。

「有里くんも、見たら同罪。」

しかしゆかりがそう言う前に、もう湊は目を逸らしていた。

全員がモノレールに乗ると、そこには乗客である棺桶のオブジェがぼつりと立っている。

「これ、人間・・・つか、乗客だよな?」

しかし、順平がそう言うと同時に、開いていたドアが全部閉まってしまった。

「あっ!?!」

「・・・やっぱり、畏だったか。」

「気づいてたんなら言えよ!?!」

「だって、どうせシャドウ倒さなきゃならないんだからどっちにしたって入らないと無理。」

彩音の解説に、湊以外の2人が悔しそうな顔をする。

『どうした、何があった!?!』

「それが、閉じ込められたみたいで・・・」

『シャドウの仕業だな・・・確実に、君らに気づいているということだ。何が来るか分からない。より一層、注意して進んでくれ!』

「りよ、了解です。」

美鶴の通信はそこで一旦途切れた。

「・・・ここで止まってても仕方ない。行くぞ。」

「うん。」

二人が武器を油断なく構え、進む。その後に、慌てて武器を構えなおしたゆかりと順平が続いた。

4人が8両目に進んでも、シャドウの影はなかった。

「んだよ、シャドウいねえじゃん・・・」

「なんか、妙に静かだね・・・」

「・・・いるのは間違いないな。なんとなく、この先にとっても嫌な感じがあるし・・・」

そこまで言ったところで、いきなり4人の目の前にシャドウが現れる。

「うわっ!?!」

「出やがったなッ!」

しかし、そのシャドウは攻撃をしかけてくることはなく、そのまま前の車両に消えていつてしまった。

「ちよっ、コラッ!!」

順平が逃げたシャドウを追おうとするが、湊が制する。

「んだよ、なんで止めんだよ!?!」

『待てっ! 敵の行動が妙だ。イヤな予感がする。』

「そんな、追っかけないと、逃がしちまうっスよ!?!」

順平が美鶴に反論する。

『有里、現場の指揮は君だ。この状況・・・どう思う?』

「・・・慎重に行くべきだと思います。あれはどうも、誘ってるようにしか見えないし。」

「・・・姉貴に賛成。」

湊も彩音の意見に賛成したところで、美鶴も同意した。

「私も同意だ。うかつに追っべきじゃないな。」

しかし、順平は納得できない様子で、制止していた湊の手を振り払う。

「……いや、オレだけで。そこで見てろって。オレがどーんと倒してやっからさ！」

そして順平はシャドウを追って、前の車両に走って行ってしまった。

「あ、コラ、順平ッ!？」

『危ない、後ろだ!!!』

美鶴が言うと、最後尾にいたゆかりが慌てて振り向く。

「……オルフェウスッ！」

湊は持ち前の勘のよさで、既に敵に気づいていた。そして当ててあった召喚器の引き金を、躊躇いなく引き、オルフェウスを呼び出す。顕現したオルフェウスが竖琴を引き、アギを放った。

タルタロスにて何回も戦闘をこなしていくうちに、魔法の威力も上がっている。そのシャドウ　偽りの聖典と呼ばれるシャドウは、1回のアギで消失した。

「ナイス、湊ッ！オルフェウス！」

今度は彩音がオルフェウスを呼び出し、もう1体の偽りの聖典を焼き払った。

「……さすが、反応速いね……。」

ゆかりは不意打ちでとっさに動けなかったので、二人の動きを見て驚いていた。

「ったく……さっそく敵のペースじゃん……。」

ゆかりは走って行った順平に呆れる。

『こうなっては仕方ない。とにかく、君らも伊織を追ってくれ。このままでは各個撃破の的だ。』

「もう、順平のやつ！自分からはぐれてどうすんの!？」

『反応では、何両か先に行ってるだけだ。』

「……了解。すぐに……。」

湊は何か気づいたそぶりを見せ、一旦ペルソナをオルフェウスからアルプに替える。

と、そこへ目の前に先ほどの偽りの聖典が2体、赤と青の天秤のよ  
うなシャドウ 炎と氷のバランサーが1体現れた。

「って・・・邪魔だつての、もうッ!!」

ゆかりが忌々しげに呟くと同時に、聖典の1体に向かって矢を放つ。  
「はあッ!」

そのシャドウに今度は彩音が薙刀で追撃する。攻撃は偽りの聖典の  
仮面にクリティカルヒットし、そのままシャドウは消えた。

「・・・アルプ。」

湊が召喚器の引き金を引く。小さな悪魔のようなペルソナ、アルプ  
が姿を現し、ガルをバランサーに向けて放った。

今までのタルタロス探索では見たことの無いシャドウだったが、う  
まく弱点を突き、シャドウは霧散する。

「よく弱点分かったね?」

「・・・勘だ、よっ!」

湊は続けて、もう1体の聖典に片手剣で斬りかかる。そして、素早  
く敵の前からどき、後ろから来るゆかりの矢を避けた。

しかしシャドウはそうもいかない。矢は聖典を貫き、聖典は霧散す  
る。

「よし、早く行こう!」

彩音の号令に2人は頷き、前の車両へと進む。

順平が居たのは4号車だった。

「あ、いた!」

「・・・あの馬鹿、言ってるそばから敵に囲まれてる・・・!」  
湊が舌打ちをする。

「助けるよ!」

3人は慌てて順平の元へ走る。

「順平っ!」

「くそっ・・・オレがやってやるんだっつもの!コノ、コノッ!」

しかし、順平の攻撃は焦っているせいも敵に当たっていない。



「オルフェウス！」

「イオ！」

彩音とゆかりがそれぞれのペルソナ、オルフェウスとイオを呼び出し、オルフェウスは聖典にアギを、イオはバランスーにガルを当てる。

その2体が体勢を崩したのを見て、順平も召喚器を取り出し、こめかみに当てて撃つ。

「ヘルメス、アギ！」

ヘルメスは3体目のシャドウであるダンシングハンドに火炎を浴びせる。

しかし元々順平は魔法タイプではない。魔法は弱点をついたようだが、倒すまでにはいたらなかった。

そこに湊が飛び込み、ダウンしているダンシングハンドに追撃する。その攻撃で、シャドウは全て霧散した。

「言わんこつちやない！1人で勝手するからよ、もう！・・・で、大丈夫？」

「・・・ああ・・・」

順平は何か納得がいかなそうに、どこか不機嫌に返事をした。

「んだよ、オレ1人でいけたっつーの・・・」

「ちよつと、あんたねえ！」

ゆかりが怒気を含んだ声で順平を咎めているとき、美鶴から焦ったような声で通信が入った。

『おい、気をつける！敵の動きが急に静まった。警戒を怠るな！』  
すると、モノレールが1回ガコン、と音を立てて動き出す。

「おわっ・・・なんだよ！動かねんじゃなかったのかよ!？」

『どうやら、列車全体がシャドウに支配されてるらしいな・・・』

「”らしい”って・・・ちよつと、大丈夫なんですか!？」

美鶴の返事を待つ前に、列車が更に加速した。

「お、おい・・・ヤバくねえ？」

『マズい、このままスピードが落ちないと、数分で1つ前の列車に

「追突する！」

「・・・やはりか！」

「追突！？なんなんですか、それ！？」

湊が忌々しげに先頭車両の方を睨みつけ、ゆかりが驚いた声を上げる。

『いいか、落ち着いて聞くんた。さつきから先頭車両に強い反応を感じる。多分それが”本体”だ。行って倒し、列車を止めるんだ！するとそれを阻むかのように、またシャドウが出現した。』

「クツソ！何のアトラクションだよ、つたくー！」

順平がすぐに両手剣を構えなおし、敵に斬りかかる。時間がないので、先手必勝で終わらせよう、という感じだ。

順平の物理攻撃力は高い。1回攻撃しただけでシャドウは消えた。

「湊、ゆかり！行くよっ！順平、避けて！」

彩音が言い終わると同時に、3人の召喚器の引き金を引く音が重なる。

「「オルフェウス！！」」

「イオ、アギを援護！」

オルフェウス2体がアギを放ち、ゆかりがガルでそれを増幅させる。そしてアギは2倍ほどの大きさに膨れ上がり、それぞれの火球がシャドウを焼き払う。

「おお、すげー・・・」

「感心するのは後！とりあえず急ぐよ！」

4人は慌てて走るのを再開した。

『衝突まであと・・・8分！急げ！』

「分かってます、よっ！」

彩音が車両と車両を繋ぐドアを力任せに開け、走る。

途中シャドウがいたが、全て物理攻撃で仮面を割ったり斬ったりしながら進む。

そして、先頭車両まで着いた。

「いた・・・！うつわ・・・すげーことになってんな・・・。」

そこには女形のシャドウが、我が物顔で座り込んでいた。

髪の毛だるう部分は、列車の壁にまるで何かのパイプのように繋がっている。

そして本体はM字開脚。いろんな意味で凄かった。

「・・・コイツが本体？」

「先はもう無いし、コイツで間違いないよ！」

『急ぐんだ！あと、6分！』

美鶴からのタイムリミットの宣告に、4人がすぐ召喚器を抜いた。

「スラツシュ！」

「アギ！」

「・・・突撃！」

「ガル！」

4人がそれぞれのペルソナの得意とするスキルを浴びせる。しかしさすがは大型シャドウ、その位ではまだ全然ダメージを受けない。

『アルカナ、女教皇！弱点はない！氷結属性を使ってくる、気をつける！』

美鶴のアナライズ結果に、彩音は内心舌打ちした。

「こうなったら、2人か3人一緒に攻撃！順平は前衛！湊も順平の後に続いて！ゆかりは後方で魔法と回復！」

「了解！うおおっ！！！」

順平が両手剣をシャドウに振り下ろす。

「姉貴！仮面か、あの髪部分を狙う！」

「オツケー！せーのっ！」

二人が息の合った動きでオルフェウスを呼び、アギを同時に撃つ。それは、しっかりと仮面部分を狙っていた。

シャドウの耳障りな悲鳴が響く。

「ビンゴだよ、湊！順平もゆかりも、あの仮面か髪を狙って！順平は物理、ゆかりは疾風！」

「分かった！イオっ！」

ゆかりがガルを放つためイオを呼び出す。

「へへ、じゃあ風をちいーっと利用させてもらうかなっ！ヘルメス、風に乗ってスラッシュ！」

順平の呼び出したヘルメスが、ゆかりの放ったガルの影響で起こった風に乗って、スピードを増して仮面へと突っ込む。

『敵の体力はあと半分ほど！時間はあと4分だ！』

「じゃあ、一気に行くよっ！」

皆が彩音の意図を察したのか、もう一度ペルソナを呼ぶ。

オルフェウス2体はアギを、敵ではなくヘルメスにぶつける。するとヘルメスは火の鳥のように、火を体に纏ったまま敵へと突っ込む。そしてそのスピードを後押しするのは、イオのガル。それは飛行スピードだけでなく、炎をも増幅させていた。

体を焼かれ、斬られたシャドウは一際強い悲鳴を上げた。思わず4人は耳を塞ぐ。

しかし、それが敵の反撃を許す隙になってしまった。

このままやらねばなしでは、さすがのシャドウも怒るだろう。そしてその怒りが魔力へ変換され、マハブフとなって襲い掛かってきた。

とっさのことで、皆は回避が出来ない。

周りの気温がいきに下がり、氷のつぶてがこちらに向かってくる。

「うああっ!!」

「・・・くっ!!」

「きゃあっ!!」

「いやあっ!!」

4人はそれぞれ、何とか回避しようとするが、間に合わない。特に1番前の順平などは、物理攻撃スキルを多用しているせいで体力が減っていた。

それを察した湊は、急いでペルソナをアップサラスに変更すると、とっさに順平の前に出る。

「ぐっ!!!!!!」

いくらアップサラスに氷結耐性があるとは言っても、1番前で攻撃を受けているのだ。大きいダメージを受けないはずが無い。

湊はそのダメージの、思わず苦痛の声を漏らす。

「・・・え？な、何で、湊・・・！」

ダメージが軽くてすんだことに気づいた順平が、目の前で自分の盾になっている湊の姿を確認して絶句する。

「湊っ!？」

「有里くん!」

ゆかりは慌ててイオを呼び出し、ディアをかける。しかし、ダメージを追った湊をターゲットにしたシャドウが、もう1回ブフを放つ。

「させないよ。」

素早く彩音がオルフェウスを召喚し、湊の前へ行かせた。そして豎琴を振るわせ、氷のつぶてを弾き返す。

自分の放った氷のつぶてが返ってくるとは思ってなかったのか、シャドウはその攻撃を受けた。

「・・・助かった、岳羽。」

湊はそう言っていると、すぐまたペルソナをオルフェウスに付け替え、呼び出した。

彩音ももう一度オルフェウスを呼び出し、順平もヘルメスを呼び出す。

「「「アギ!!!」」」

3人の声が重なり、3人分のアギがシャドウを襲った。

さすがの猛攻撃に耐えられなかったのか、シャドウは霧散した。

「・・・やったか？」

湊がシャドウが完全に消えたのを確認するが、モノレールは速度を緩めなかった。

「ってオイ!、止まんねえじゃんか!」

「そっか、ブレーキかかんないと、すぐには・・・」

『おい、どうしたっ!?!前の列車はすぐそこだぞ!』



美鶴の通信が切れると、彩音が運転席から戻ってくる。

「てか、ブレーキ、よく分かったね？」

「女の勘だよ。」

彩音はあはは、と笑って手でVサインを作る。

「女の勘って、そういうトコに働かないでしょ……」

「……大体、普通運転席には緊急用のブレーキかなんかがあるだろ……」

「あ、気づかなかった……無我夢中で……」

「……気づけっ！」

湊が鋭い突っ込みを飛ばす。

「ああ……いや、もう何でも。つか、帰り、なんか食ってかねえ？安心したらハラ減ったよ。」

「あのねー、女の子はこんな時間に食べないって……」

そこでゆかりが少し考え込む。

「コンビニなら、寄ってもいいけど？」

「……まあ、影時間明けてからになるけどな……」

「あ、忘れてた……」

「……しかもその前に、この列車が何メートル進んだかは知らないが、その分徒歩で戻らなきゃならないしな。」

「……うええっ!？」

湊の言葉に、ゆかりと順平があからさまに嫌そうな顔をした。

「まあ、このままモノレール乗って帰るわけにもいかないし。第一切符が無いしね。」

ゆかりと順平ががっくりとうなだれる。

彩音が乾いた笑いを漏らしたところで、もう何回目かのあの声が、二人の脳裏に響いた。

コミュニケーションアップ。この場合は”0番 愚者”のアルカナがランク3になった。

それから4人は、かなりの距離を徒歩で移動することになり、モノレールでの戦闘の分も重なって仲良く疲労状態になったのだった。

一方その頃、寮の作戦室。

作戦室の機械に、美鶴からの通信が入る。

「俺だ。」

「こちら現場だ。たった今、全て片付いた。モノレールにも目立つた被害はない。」

「ご苦労さま、桐条君。やー、列車を乗っ取られたと聞いた時は正直どうなるかと思っただけど、上出来だよ。これなら明日の朝刊にこんな大見出しが出るようなことは、無くて済むね。」

幾月はそう言うが、翌日の朝刊にはしつかりと”モノレールのオーバールン事故”として記事になる。

「彼らがよくやってくれました。短時間で驚くほど成長しています。」

「しかし、シャドウの様子・・・ただ事じゃないですね。モノレールを乗っ取るなんて、調子に乗りすぎてる。」

「こちらでも調べてるよ。」

「ついに・・・」始まった”ということなんでしょうか？」

3人が神妙そうな顔になる。

「うーん・・・まだ早計には言えないけどね・・・ま、とにかくまずは現れるきっかけを突き止めないことにはね。いつも、こんな土壇場まで分からないのはどうにもマズい。」

「私にもっと力があれば、みんなの負担を軽くできるんですが・・・」

美鶴が悔しそうに俯く。

「気にしないでいいさ。君はよくやってくれてる。そんなことよりね・・・」

幾月は困った顔で真田を見る。

「真田君さー・・・なんか、飲みモノ持って無い？」

「は・・・？」



真田は唐突に聞かれたことにぽかんとなった。

「と言うか幾月さん、今日、なんだか疲れてませんか？まさか、表に停めてあった自転車……」

「明日、いや、あさつてあたり……筋肉痛かな、こりや。」

影時間になってしまつて車が動かなくなつてしまつたのだろうと察しつつも、真田は乾いた笑いを隠せなかった……

「解決、か。なかなか早かつたじゃないか。」

蔵戸台のビルの屋上にいた人影は、ふう、と息をつき立ち上がった。

「もうこれで鍵は2つ外れたわけか……あのときやつた”アレ”

ももう薄れかけているだろうし、そろそろ発現してもおかしくないね……。そうでしょ？””。」

背後の人影は何も反応しない。

「お疲れさま。」

そう小柄な人影が言うと、後ろの人影は溶けるように掻き消えてしまった。

「しばらくは様子見だよね……。ねえ、彩音、湊？」

その人影　遙はモノレールを見てそう言い残すと、くるりと踵を返しその屋上から立ち去つた。

5月9日 〳?番 女教皇〳(後書き)

いかがでしたでしょうか？

モノレール戦、意外と長くなってしまいました・・・。  
2つに分ければよかったかな？と思います；

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

×月×日 〱謎の手記1〱（前書き）

番外編です。短いです。

〱用語解説8〱

月光館学園

辰巳ポートアイランド地区にある、桐条グループが母体の学校。初等部から高等部まであり、敷地面積はかなり広い。高等部では、かなりユニークな先生がたくさんいる。しかし影時間になれば、校舎はタルタロスに変化する。

では、どうぞ。

×月×日　〈謎の手記1〉

あの悪夢から数日が経過した。

研究員のほとんどが爆発に巻き込まれて死亡、また民間人にも多数、死傷者が出てしまった。

月光館学園でも、無気力症になっている生徒が多数いるとの知らせ。しかし、幸いにしてあの実験体は逃がさずにすんだ。

事故当時、いなくなつたと連絡を受け焦つたが、なんとか連れ戻すことに成功したのだ。

オリジナルサンプルにして、唯一の成功例。

あれだけは逃してなるものか。

また、事故当時にムーンライトブリッジにて1組の双子が救助された。

特に車は大破炎上しており、その双子の両親と見られる遺体も見つかった。

私個人としては、この2名の犠牲者には特に何も関わりは無く、特筆すべきことはないのだが、問題は救助された双子の方だ。

実験体に接触した可能性が0とも言い切れないのだ。

実験体を捕獲したのが同じムーンライトブリッジだということもある。もしこの2人が実験体に接触し、何かの干渉を受けたのであれば、さらに興味深いサンプルということになるのだ。

事実、あの実験体には未だ不可解な部分が数多くある。

残念なことに、あの双子はすぐに別の病院に移送されたという連絡が入った。

他者の系列の病院に行ったのであれば、こちらとしても手は出せない。

逃した魚は大きい、というやつか。

だが、そう悪いことばかりでもなかった。

例の実験体の解析を始めることができ、どうやら悪夢の日に何かの力を使ったという痕跡を発見できたのだ。

何をやったかは知らんが、その力の対象者の状態が気になる。

そういえば最近、実験体の様子がすこしおかしい。

実験や解析に支障はないため、黙認しているが、多少感情に揺れが見られる。

まあ、所詮ただの実験体に過ぎないのだが。

迂闊 だつ た。

まさか 他の 失敗作 と連 携すると は。

たかだ か実 験体と侮 っていた か 。

あいつは だれに も わたす わけに はいか ない。

じっけんたい コード ネーム

(この先は血に染まっていて読めない。しかし、最後の行は辛うじて「つれ もどせ」と読める。)

2000年×月×日発見

×月×日 く謎の手記1〜（後書き）

はい、短い手記でした。

最後の書き方は少しだけ「バイオハザード1」のあるファイルを真似させて頂きました。

分かる方いらっしゃいますかね？

PVが7000、ユニークが1000人突破いたしました！

読んでくださった皆様に本当に感謝しています！ありがとうございます！  
ました！

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

5月13日 〳試験勉強中〳 (前書き)

この話を入れるかは悩みました。

でも試験前に1話は書いておいたほうがいいと思うけど内容が浮かばなかったんです、

次で試験終わり(早っ!)です。

では、ごうごう。

5月13日 試験勉強中

来週には試験が控えている。

もつどこの部活も、生徒会すら試験勉強のために活動が休止になっていた。

そんな中、彼女もまた試験勉強に真剣に取り組む内の1人である。

大型シャドウ戦から数日が経ったが、今はそれを悠長に振り返って  
いられる時間などない。

そういうわけで彩音は勉強するため、勉強には最適な図書室にいた。  
今は湊はいない。どうやら向こうは向こうで”学力”を上げるため  
に、神社にお参りしたり、わかつでDHA定食を食べに行くらしい。  
しかし彩音はそれには乗らなかった。

理由は簡単、第一お金がかかるし、パラメータアップするからとい  
って今回の試験の範囲が頭に入るわけがないと思ったからだ。

彩音は目の前の本棚からいくつか資料を抜き出そうと、じっと目的  
の本を探している最中だった。

だが他の生徒が借りて行ったのか、目的の本はなかなか置いていな  
い。

「・・・出遅れた、か。」

彩音ははあ、とため息を吐いた。そして別の教科の資料でも探すか、  
と周りを見回す。

ふと、そこで1冊の資料が目に残った。

端の本棚の1番端にあったそれは、どうやら過去の月光館学園の何  
かの記録のようだった。

彩音は何となくその記録を抜き出す。



古くなったその表紙にはそう書かれている。

彩音は、こんな大事そうな記録がこんなどこに何であるの？と少し呆れるが、ぱらぱらと記録のページをめくっていった。

めくっていくうちに、ページをめくる手が、ふとあるページで止まる。

彩音にとっては思い出したくない日の記録がそこにあった。

2000年のとある日付。

その日付を見るたびに彩音は、その当時のことを鮮明に思い出す。いや、思い出さずにはいられないのだ。

自分達双子が、両親を喪ったその日を。

そこまで考えて、彩音は頭を軽く振った。

今はそんな感傷に浸っている場合ではない。目の前の試験に集中しなければ。

そう思っただけ記録を閉じようとするが、その記録に少し不自然な点があるのに気づいてしまった。

その月だけ、他の月よりも欠席者が明らかに多い。

だが彩音は、そのときは爆発に巻き込まれた人が休んだのだろう、と深く考えるのをやめた。

そしてもとあつた位置に資料を戻すと、彩音は気を取り直して資料探しに戻った。

彩音が別の棚に資料を探しに行くと、かなりオドオドした様子の女生徒がいるのが見えた。

辺りを何度もきよきよと見回し、怯えた様子で棚から本を取ろうとしている。

きよきよと見回しているのは、別に本を探している訳ではなく、まるで周りに誰かがいないのを確認しているように、彩音には見える。その姿はこの図書室内でも目立った。

「・・・あの、どうかしたの？」

彩音は気になって、その女生徒に声をかけてみた。するとその生徒はびくっ、と大げさなまでに反応した。そしてばっ、と彩音の方を見る。

「な、何でもありません！ごめんなさいっ！」

「あ、ちよつと・・・」

その女生徒は彩音に対して謝ると、急いで図書室を出て行ってしまった。彩音が止めようとするが、女生徒には聞こえていないようで、振り向きもしなかった。

「何だろ、あの怯え様は・・・」

彩音は首をかしげる。たかが図書室で、何をそんなに怖がっているのか分からなかった。

「（なんか今日は変な日・・・。あんなものは見つけちゃうし、今の子とか・・・）」

彩音はうーん、と首をかしげると、また資料探しを再開した。しかし先ほどの2つのことが頭から離れない。

結局その日は、彩音はあまり勉強に集中できずに下校時刻を迎えてしまったのだった。

5月13日 〱試験勉強中〱（後書き）

いかがでしたでしょうか？

うーん、短かったですね・・・；

あまりアイデアが思いつかなかったもので。

最後のくだりの女生徒は、誰だか分かった方が多いのではないのでしょうか？

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などございましたらよろしく願います。

5月23日 く復帰戦く (前書き)

真田さんふっかーっ!

試験の描写は飛ばしました。

だって書くこと思いつかなかったんですもん・・・

では、どうぞ。

5月23日　〜復帰戦〜

「終わったー！」

彩音はうーん、と大きく伸びをした。

彩音の前の席には早速部活の支度をしているゆかり、通路を挟んで隣には晴れ晴れとした顔の順平、後ろには普段と変わらない湊がいる。

今日で1週間にわたる試験は終了。他の生徒も浮かれたり、悔しかったり、必死に答え合わせをしていたりと様々だ。

「彩音、試験どうだったの？」

「んー、まあまあかな！にしてもやっぱりこの解放感、いいよね！」

「だよな！・・・でも、寮帰ったらまた落ち込むんだろうけどな・・・」

「気にしない！で、湊は？試験出来た？」

「・・・結果待ちだ。」

「有里くん、随分自信満々だね？」

4人は試験終了の解放感に浮かれている。

その後はゆかりが部活に行き、3人ははぐくれでラーメンを食べて帰った。

寮のラウンジに美鶴を除く4人が集まった。

今日真田は病院での検査があつた。そこで医者に完治したと言われ、真田の顔は晴れやかだ。

「先輩、全快したそうですね！」

「おめでとうツス。」

「おめでとうございます！」

「復帰メニユーが山積みだ。まるひと月サボってたワケだからな。」  
もともと真田はトレーニングに余念がない。そのことしか頭に入っていないのではないかと思われるほどだ。何故学校ではクールだと

もてはやされているのか、正直疑いたくなる、と二人は思っていた。「急に無理すると、また折れちゃいませんか？」

「・・・先輩は戦いが好きなんだろ。言っただとこで聞かない。湊はやれやれ、といった風だ。」

「分かってるじゃないか。それに、新たなペルソナ使いも見つかったしな。」

「おおっ！？新戦力って事スか！もしかして女子とか・・・！？」  
順平は期待をこめた眼差しで真田を見る。

「女子だ。ウチの高等部2年のな。」

真田の返事を聞いた途端、順平がかなり嬉しそうな顔になる。彩音はそれを一瞥すると、真田に訊く。

「その子、どんな子なんですか？」

「山岸 風花”・・・3人とも知ってるか？」

「山岸・・・？ああ、確かE組の・・・。なんか、体が弱いとかで学校ではあんま見ないような・・・」

二人は病弱で気弱そうな子、というイメージを頭の中で浮かべた。

「俺たちの居た病院へ来てたらしい。それで”適性”が見つかった。しかし、素養があっても体がそれじゃ、戦いは無理かもな。召喚器も用意したんだがな・・・」

真田が少し残念そうな顔をした。

「・・・ま、あくまで噂じゃないんですか？」

「そつスよ！もう諦めちゃうんスか！？せつかくオレが、手取り足取り個人レッスンとか・・・」

「・・・煩い。僕が言ったのはそんな意味じゃない。」

「発想がオツサンだね。」

「あははっ！やだ、私もたまに思うっ！」

「うおっ、ひでー！ボクちゃん、ピチピチのティーンなの！ナウなヤングなのー！」

二人の突っ込みに、ゆかりも加勢する。順平が反論するが、その言い方にゆかりは「・・・さっむ。」と一蹴した。

3人は同情したような目で順平を見る。

「ナニ？そのかわいそうな動物を見るような目は。・・・見んなよ。・・・オレを見んなよ。・・・」

「・・・さてそういえばリーダー、今日はタルタロス行くのか？」  
真田は心なしか期待しているように見える。早く戦いたい、と目が語っている。

「みんな、今日の予定は？」

「・・・大丈夫だ。」

「私も！」

「じゃあ行きましょうか！」

「え！？オレには聞いてくれないの!？」

順平はスルーし、彩音がタルタロス行きを決定した。

こここのところ、試験中でタルタロスには行っていなかった。試験前もモノレール戦や試験勉強で行ってなかったため、今日は久々のタルタロス攻略となる。

真田は電撃を得意とするペルソナ使いだ。それに回復や補助もこなすため、バランス型と言えるだろう。本人は前線で戦う方が性に合っているようだが、後方支援でも申し分ない実力がある。

おまけに真田はボクシング部主将。人外の怪物とはいえ、戦闘技術は常人よりは優れている。さらにシャドウと戦うことに関しては充分な経験がある。

真田が復帰したことによって、特別課外活動部は戦力を大幅に得た。しかし、その油断と過信によって、ある1つの事態が起きてしまうこととなる。

『おかしいな。このフロアには敵の気配がない。だが、妙な胸騒ぎがする・・・』

順調にタルタロスを登っていた探索メンバーが、美鶴のその通信で

足を止める。

現在の探索メンバーは、2年生に真田を加えた計5人だ。

「敵が・・・いない？1体も？」

「・・・確かに気配は無い。ただ、どうにも嫌な予感がまくってるんだが・・・」

「別によくねえ？いないならいいで。さっさと宝箱回収してこいぜ。」

順平が拍子抜けしたように言う。

「・・・うん。行こう。」

美鶴と湊の言葉に、何かよくないことでも起きるのか、と少し不安になっていた彩音だが、順平にならないフロアの探索を開始する。まだ胸に不安が残ったままではあったが。

「ホントに敵、いないね・・・。なんか畏とか張ってあったりして・・・」

「いや、それはない。そんなものがあれば、美鶴が気がつく。」

「でも、ここまで何もないと、逆に不安・・・」

嵐の前の静けさ。そんな言葉が彩音の脳裏によぎる。

そんなときだった。

「ッ・・・!？」

湊は背筋が凍るような悪寒がし、立ち止まる。彩音が声をかける前に、美鶴の切羽詰ったような声が通信機から聞こえる。

「この反応・・・マズイっ！死神だ！今の君たちに敵う相手じゃない！逃げろ！」

「死神？」

順平が怪訝そうな顔をするが、どこからか鎖の音が聞こえてくる。その音は段々とこちらに近づいてきているようだった。

「まずい・・・来る・・・！先輩、脱出ポイントの位置を！」

「分かっている！・・・なっ！」

ただ1人死神の恐ろしさを感じてしまっていた、湊が急いで美鶴に



ポイントの確認をする。しかし、返ってきた返事はかなり残酷なものだった。

『脱出ポイントが・・・死神の向こう側だ！階段すら、君たちの側にはない！その先は行き止まりだ！』

「え？え！？それってピンチじゃん！」

「姉貴つ、トラエストジエムは！？」

「ない！最初に貰ったの、使い切っちゃったよ・・・！」

「くそつ！！！」

最後の脱出の希望もなくなった。

そして、死神が5人の前に現れた。

湊の身長ほどはあるかと思われる長い銃身を持つ銃を両手に持ち、浮いてはいるがふらふらと動くその大きな影。着ているコートらしきものは血に濡れ、体に鎖が巻き付いている。顔には目が1つだけあり、ぎよろりとこちらを見ていた。まず人間の2倍はあるだろう大きさで、その姿は正に死神。

死神タイプ、”刈り取るもの”。それがこのシャドウの名前だった。その姿に、5人が戦慄する。

「嘘・・・」

「何、あれ・・・！」

「・・・くつ・・・」

「おいおい・・・マジかよ・・・！」

「・・・ふん、面白そうなヤツが出てきたじゃないか・・・」

真田だけは強気な発言をするが、刈り取るものの威圧感に、他の4人は「（戦ったら殺される・・・）」と直感で感じていた。

刈り取るものががちゃ、と銃を構える。そしてすぐに撃ってきた。

相手に手加減など存在しない。それはまっすぐ、真田を狙っていた。

「・・・く！」

真田がそれを辛うじて避けられたのは、もはや偶然や奇跡といった

以外の何物でもない。

「真田先輩っ！」

「・・・ペルソナ。」

湊はとにかく死神に隙をつくれなかと、新しくベルベットルームで作ったペルソナ、アーケエンジェルを召喚し、スラッシュを仕掛ける。

だが全く効かない。本体にダメージどころか、服に傷すらついていない。

「・・・チツ、効かないっ！」

「ヘルメス！」

「イオ！」

「ジャックフロスト！」

順平、ゆかり、彩音がペルソナを呼び出すが、刈り取るものはペルソナ達を魔法、アギダインで蹴散らす。

直撃は免れたものの、ペルソナはスキルを発動できずに消えた。

しかし、ペルソナが受けた攻撃は、使役者に跳ね返る。

「ぐあっ！」

「きゃあああ！」

「ああっ！！！」

特に火炎に弱いペルソナ、ジャックフロストを装備していた彩音は、もう体力がぎりぎりだ。

「ポリデュークス！殴り飛ばせ！」

真田が負けじとペルソナを呼び出す。そしてソニックパンチを放つが、それでも刈り取るものにはダメージになっていない。

また刈り取るものが魔法を放つ。電撃魔法のジオダインだ。

これは流石に真田も避けきる、とまではいかなかった。だが真田には電撃耐性がある。かといって無事かといえば・・・

「ぐあああっ！！！」

そうではなかった。

それほどまでに刈り取るものの魔力は凄い。戦闘不能は避けられた



そして、段々と血塗れたコートが黒い粒子となり、消えていく。同時に銃身の先も。

やがてそれは、刈り取るものを完全に消し去ってしまった。

「なに……今の……?」

『馬鹿な……死神の反応が完全に消えた……!?!』

美鶴も今の出来事に驚きを隠せなかったようだ。

そして、それを起こした湊が、ゆっくりと崩れ落ちていく。

「あつ……!?!」

彩音は慌てて、まだダメージの残る体を無理やり動かし、湊の傍へ行く。

「湊!湊っ!!」

彩音が湊を揺すってみるが、湊は何も反応しない。

「湊おっ!!起きてよっ!ねえ!」

彩音は半分涙目だ。しかし湊の顔色は悪く、一向に起きる気配を見せなかった。

『有里、落ち着け!反応ではただ気絶しているだけだ!とにかく一旦、戻って来い!』

美鶴の通信で、彩音の手がようやく止まる。

「……分かりました。ゆかり、真田先輩。みんなを歩けるくらいまで回復するの、手伝ってください。」

彩音が指示を出す、その声色は明らかに沈んでいた。

呼ばれた2人は頷くと、すぐにそれぞれのペルソナを呼び、ディアをかける。彩音もジャックフロストのディアで、自分と湊の回復をした。

その後は、順平が湊を背負って脱出ポイントに向かった。

「……すまなかった。今回も私の力不足だ。死神出現の予兆を見逃さなければ……」

「オレも……ごめん。楽観的すぎた……」

エントランスには重い空気が流れている。それも無理のないことな

のかもしれないが。

「影時間が明けたら、湊はすぐに病院へ搬送させる。」

「……」  
湊を膝枕している彩音は俯いたままだ。

「……何にも、出来なかった……」  
その場に沈黙が流れる。

「守れなかった……湊は、守ろうとしてくれてたのに……何にも、出来なかった……！」  
ぼたり、と湊の顔に雫が落ちる。

「私の、私のせいだ……！私がもっと、しっかりしてれば……！」

彩音の涙は止まらない。

「……お前のせいじゃない。くそっ！俺はまた……！」  
真田もぎゅっと拳を握り締める。

「そうだよ……！私も、何も出来なかったし……」  
しかし、彩音は泣き続けている。

彩音にとって湊は、ただの肉親ではない。唯一残された家族であり、ずっと一緒に過ごしてきた相手。その絆は強かった。そんな存在がもし、失われてしまったとなれば……どうなるかは火を見るより明らかだ。

「……今日の探索は終了しよう。」  
美鶴のその一言で、4人は暗い顔だったが撤収の準備をし始めた。しかし帰りの足取りは全員重く、沈黙が場を支配していた……。

5月23日 く復帰戦く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

湊の謎の力については、これから書いていきます。

さて、この後のスケジュールどうしようか・・・

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などございましたらお願いします。

5月24日 く遙と湊と天田少年く（前書き）

やっぱり、天田くんとはオリキャラを会わせなかったの。

さて、この後は風花救出作戦がありますが、どこでどういつ風に  
するか・・・

細かい設定を考え中ですな。

では、どうぞ。

5月24日　～遥と湊と天田少年～

もちろん、遥は昨日のタルタロスでの出来事を感じ取っていた。それに、湊の使った”あの力”が、近々覚醒するということも分かっていたのだ。

だからここ最近、遥は特に特別課外活動部の動きに気を配っていた。

だからといって、遥のことが特別課外活動部に知られるわけにもいかないため、わざわざ目立つようにはしなかったが。

そんなこんなで、遥は辰巳記念病院の、湊の病室を訪れていた。

時間は早朝。

こんな朝早くから病室に向いたのも、見舞いに必ず来るだろう彩音と接触するのを避けるためだ。

もともと、この時間は緊急の患者でも無い限り病院内には入れない。しかし遥は警備の目を抜け、誰にも気づかれることなく病室に入った。

ベッドの湊は眠ったままだ。起きる気配もない。

遥は音を立てずにベッドのそばまで近寄ると、湊を見下ろす。

その顔は無表情だった。

しばし、無言の時間が流れる。どちらも動かない。

不意に、遥はどこか悲しそうな顔になった。そして、湊の顔に遥の細い手が伸びる。

しかしその手は、湊の顔や髪に触れることなく止まった。

「……ごめん……」

遥が小さな声で呟く。しかしその呟きは誰にも聞かれることはない。すると、遥の背後からゆら、と影が重なる。

それは遥の脇でぼんやりと確認できるほどになると、その手を遥と同じように伸ばす。



その影は、かつてモノレール戦の日にも遙の後ろにいた影だった。半透明な遙のペルソナの手と、遙の手が重なる。

まるでペルソナが、”大丈夫だ”と遙を慰めているようにも見えた。やがてペルソナはふっ、と虚空に溶けて消える。遙も手を元に戻した。

「今の僕では、それしか無理だ。・・・使いこなして見せて。」  
遙の表情が無表情にすっ、と戻る。そして踵を返し、遙は病室を出て行った。

夢を見ていた。あの時の。

炎上する今まで自分達が乗っていた車、その車の運転席部分から出てくる血、大きくて丸い月、閃光。

意識を失う寸前、何かが倒れる音と、また別の何かの音が・・・

ゆっくりと、湊は目を開ける。

白い天井、そして自分の傍にある誰かの気配・・・

湊は軽くデジャヴを感じた。

「あ・・・湊・・・？」

「・・・姉貴・・・？」

「よ、良かったあああ！！」

湊に衝撃がくる。彩音が思いつきり湊を抱きしめたのだ。

「お、重いつて姉貴！どいて・・・！」

「いきなり倒れちゃうし！いくら呼んでも起きないし！ほんっと心配したよお！！」

彩音の目の端から光るものが零れ落ちる。

「・・・悪い。あの時は、僕も何がなんだか・・・それより、いい加減離してくれないか・・・？」

彩音ははっ、と今の自分の状態に気づき、湊から離れる。

「ごめん、起きたばかりだったのに・・・でも、かなり心配だったんだから！」

「分かったって・・・悪かった。」

湊は少し苦笑した。

「その後・・・どうなった？」

「えと、湊が何かして、あの死神が消えたの。それで順平に湊運んでもらって、タルタロス探索は終了になったよ。で、影時間明けたら急いでここに湊搬送して・・・」

「そうか・・・ありがとう。」

「今日は念のため病院泊まりね。まだ検査があるらしいから・・・って、やだ、止まんない・・・」

彩音が目をこするが、涙は止まらない。

湊はその姿を見て、自分が姉彩音にどれだけ心配をかけたかを実感した。「と、とにかくっ！もうあんな無茶はしないでね!？」

「・・・うん。」

「あ、それと・・・助けてくれて、ありがとう。」

「・・・。」

湊は何も言わずに微笑を浮かべた。

「じゃ、私はみんなとお医者さんに目を覚ましたって言うてくるね。

・・・ゆっくり休んで。」

湊はまた軽くデジャヴを感じたが、軽く手を振ってみせた。

長鳴神社には、1人の少年がいた。

名前は天田あまた 乾けん。月光館学園初等科の5年生だ。

彼は神社と一緒にいる公園で遊ぶわけでもなく、熱心にお参りしていた。

その必死さから、その願いは彼にとってかなり強いものだと伺える。天田はお参りが終わって踵を返す。すると、ベンチに放心状態（天田にはそう見えた）になって座っている人物がいるのに気づいた。その人物は背もたれに背中を完全に預け、ぼんやりと虚空を眺めていた。背は低いが、自分よりは年上なんだろうな、と天田は思う。

その人物はまるで目を開けたまま眠っているのではないか、というほどに動かなかつた。それに、瞳からは何の意思も宿していない。読めない眼差しだった。

天田はその人物に声をかけることにした。あんな状態で、気にならない方がおかしい。

天田が近づいていっても、その人物は何の反応も示さない。気づいていないのかもしれない。

「……あの。」

「……。」

「……あの！」

「……。」

「……あのっ!!！」

「……ん？」

漸くその人物は天田に気づいたようだった。

「どうか、したんですか？具合でも悪いんですか？」

「いや、大丈夫。ちよつと考え事をしてただけだから。」

大丈夫に見えない。と天田は心の中で突っ込んだ。

「君こそ、どうしたの？君くらいの年なら、こういう公園じゃなくて別のところで遊ぶものなんじゃない？」

「……遊びに来たわけじゃないですから。」

「じゃあ、学力アップ？それとも、縁結び？」

「はあ？」

良く分からない単語が出てきたことに天田は戸惑う。いや、意味は分かるのだが神社とそれらのものが結びつかない。

「あれ、知らない？この神社にお参りすると、学力が上がるんだって。あと、仲良くなりたい相手を思い浮かべながらおみくじ引くと仲が深まるとか。」

「……そんな迷信、信じませんよ。僕はその2つのどちらでもありません。純粹にお願い事があってお参りに来たんです。」

「へえ、そう。」

「自分から訊いたことなのに、随分と興味がなさそうですね。」

天田は思わず思ったことを言ってしまった。

「気分を害したのなら謝るよ。ねえ君、ちょっとだけ話をしないかい？」

「・・・いいですけど。」

「ああ、そういえばまだ名乗ってなかったな。僕は満嶋 遥。」

「・・・僕は天田 乾です。」

遥は内心驚いたが顔には出さず、ベンチの端のほうに少し移動し、隣に座るよう天田に促した。

天田が座るのを確認すると、遥は早速質問してみる。

「天田くんは、何を願いましたの？」

「・・・どうしても、成し遂げたいことがあって。それが成功するようにです。」

遥はそれを聞くと何かを考え込むように黙った。

「・・・なるほどね。ま、何をやりたいのかは訊かないでおこう。」

天田は意外そうな顔をした。てっきり訊いてくるかと思ったのだが。

「何かに向かって努力するのはいいことだ。たとえ、結果がどうであろうとね。そして、その目的が正しい行いでなくとも。」

「・・・っ!？」

何なんだ、と天田は思った。この、自分がやるうとしていることを見透かしているような言い方は、と。

「まあ僕は関わる気は無いよ。今の所は。手伝う気も、止める気も、アドバイスとかする気も。」

「・・・遥さん、もしかして人の心が読めるんじゃないですか？」

「さて、ね。」

遥は意地の悪い笑みを浮かべて見せた。

「・・・1つ、質問していいですか？」

「何？」

「あなたの大切な人、例えば家族とかが誰かに殺されたとしたら、あなたは殺した犯人をどうします? いや、どうしたいと思いますか

「？」

遙の目がすつ、と細められる。しかしそれに天田は気づかない。

「さて、ね。僕が家族と呼べる人っていたことがないから。君の気分は分からないけど、うーん・・・大切な人か。そうだな・・・」  
また少し考え始めた遙に、天田は驚いた。

「まさか、大切な人なんていない、って言うんですか？」

「いることはいるんだけど・・・君の言う”大切”とは違う意味で

”大切”かな。ごめんね、天田さんの望む答えは出せそうにない。」

「そうですね・・・。」

変わった人だ、と天田は思った。

「で？訊きたいことはそれだけ？」

「・・・はい。」

遙はそっか、と言うと立ち上がる。そして天田に「ちょっと待ってて。」と言うと、近くの自動販売機で飲み物を買って戻ってきた。

「どっちがいい？」

遙が持っているのは、四谷さいだあという炭酸飲料と缶コーヒー。

「じゃあ、コーヒーで。」

「ん、はい。」

「ありがとうございます。」

天田は缶を受け取る。

「じゃあ、僕はそろそろ行くね。」

「えっ・・・あの」

「じゃあね。」

天田が止める間もなく遙は立ち去ってしまった。

天田は遙に少しだけ興味を持っていた。だから、もう少し話を聞いてみたい、と思ったのだが。

「・・・変な人だったなあ。」

天田は呟きながら、缶コーヒーのプルトップを開けた。

5月24日 く遙と湊と天田少年く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

うむむ・・・

オリジナルストーリーを書きたいのはいいんですが、どうもその中で伏線張るのが苦手ですね・・・精進します。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。  
あと質問やご要望（こういうイベントが見たい、など）もありませんら、出来る限り応えたいと思います。

5月25日 〈試験結果発表〉（前書き）

輪番停電でパソコンが出来ない、という感じでした。

停電の影響で更新が遅くなるかもしれませんが、よろしく願います。

まずは余震が完全に収まって欲しいです。

では、ごうごう。

5月25日　〈試験結果発表〉

試験が明けた月曜日。それが何を意味するのかというと、ある者にとっては楽しみで、ある者にとっては見たくもない順位発表である。二人は一昨日のタルタロスの出来事でちよつと頭から離れていたが、どちらも結果待ちの状態だった。

順平は「見たくねえ〜！」と騒いでおり、ゆかりもまずまず、といったところのようだ。

先輩方は言うまでもなく頭がいいので、随分と余裕だった。というより、そんなことでいちいち一喜一憂したりしないのだろう。真田は特に、復帰できたことが嬉しいらしくトレーニングに余念がない美鶴はといえば、テスト前に「高校卒業程度の内容は2年前に全て修めた」と言っていた。こちらも順位は目に見えているらしい。

そして、昼休み。

二人は1階職員室前にある掲示板を見に行った。そこに順位が全年張り出されるのだ。

そこは人だかりになっていた。中には喜ぶ者、落胆する者様々だ。

「あ、彩音！有里くん！見たよ、スゴいね！」

先に来ていたらしいゆかりがこちらに寄ってきた。

彩音が言われてすぐ自分の名前を探し始めた。

そして、その名前はすぐ見つかった。

1位　有里彩音

有里　湊

と書かれていたためだ。

「・・・姉貴と同点でトップか。」

「えっ！？何でお賽銭とかにしか頼っていなくて授業中寝てばっか



りの湊と同点なの！？なーんか納得いかない……」

「？でもスゴいじゃん、二人とも！頭いいね。」

二人の会話に？マークを浮かべながらもゆかりが二人を称賛する。

「順平なんて、ホラ。」

ゆかりの指差す先には、ガツクリとうなだれている順平の姿がある。

「あー……」

「……平均よりもかなり下だな。」

順平の順位を確認した湊が納得したように頷く。

「私は平均点ギリギリだったからさー。ね、今度のテストから勉強教えてよ！」

「うん、いいよ。あ、湊の勉強方法だと全っ然参考にならないからね！」

彩音の言い草に少しだけイラつときた湊だったが、表情には出さず、また順位表を眺め始める。

「……桐条先輩は学年トップ。真田先輩も10位以内。」

「そうそう、桐条先輩はいつものことだったんだけどね、真田先輩、順位上がってるんだ。まあ、いつも上位なのは変わらないんだけど。」

「へえ〜。そうなんだ……」

「あ、そういえば……成績良かったら桐条先輩がご褒美くれるんだったよね。二人とも貰えるじゃん。」

ゆかりに言われて二人は思い出したようだった。

「じゃあ後で桐条先輩に会ってみるね。あー何だろ……」

彩音が嬉しそうにご褒美が何かを考え出した。

「あ、湊くん。その様子だと順位、良かったみたいだね。」

「……遥。」

そこに現れたのは遥だった。遥も試験結果を見に来たらしい。

「あー、負けたか。おめでと、湊くん、彩音さん。」

遥も名前をすぐ見つけたようだ。

それもその筈、

2位 満嶋 遥

となっていたからである。

「え、嘘！？すご！今回のテストは転校生が独壇場だったみたいだね・・・」

ゆかりも遥のテスト結果に驚いているようだ。

「・・・なかなかやるな。」

「いやいや。湊くんには敵いません。ぎりぎり負けちゃったしさ。」

「それでもだろ。4月の最初の方の授業、受けてないだろうし。」

「よーっし！ねえねえ、放課後テスト結果が良かったことを祝して打ち上げやろうよ！ポロニアンモールでさ！ゆかりも一緒に！」

彩音の提案に一同が賛成した。

「あ、順平は？」

「うーん、どうしよつか・・・？あの順位じゃあ・・・」

「彩音ツチひでえ！」

真面目に考える彩音に聞いていたらしい順平がツツコミを入れた。

そのときチャイムが鳴る。掲示板に集まっていた生徒達も、それぞれ散って行った。

「じゃあ放課後現地集合で！」

「分かった。」

5人も頷くと、教室にそれぞれ帰っていく。

その後、2年E組。

クラスの女子が大声で噂話をしているのを、遥は聞いてしまった。同じクラスなのでしょうがないことなのかもしれないが。

「それでね、あん時のビビリようったらチョーヤバかったの！めっちゃベソかいててえ、もうこの世の終わり、みたいなー？」

「分かる！あれはウケるよねー！じゃあ今度さ・・・」

遙はこの会話が何を意味するのか分かっていった。それだけに、不機嫌そうな態度を隠そうともしない。

くだらない。そう一掃して、読んでいる途中の本を取り出そうとした。

そこで、噂をしていた女子の声が小さくなった。

ちら、と遙がそちらを見ると、ある女子生徒が教室に入ってきたところだ。

やまぎし  
山岸 ふうか  
風花。

大人しい性格で、気弱そうな感じも漂わせている少女だ。

その風花が、このクラスでのいじめのターゲットになっている。

しかし遙自身は風花をそんな風には思っていないし、あまり話したこともない。でもだからと言って、表立って風花を擁護しているわけでもない。本人に分からないように少し観察しているだけだ。

風花には確かに適性がある。それも自分と似たタイプの力の使い手。

遙には薄々そのことが分かっていたので、こうして関わらない程度に観察しているのだ。

遙は風花を少し眺めていたが、すぐ別の方を向いてしまった。

今はまだ、関わる時じゃない。目覚めてからでいい

そう、感じたのだ。

その後は普通に午後の授業を受け、放課後を迎えた。

5月25日 〈試験結果発表〉（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次・・・は、ゆかりがいじめを聞くとところに普通はなるんですが、部活のことを書いてなかったのでそっちを書こうと思います。

遥はあまり、そういう事態に首を突っ込もうとはしません。  
いじめ・・・嫌ですよね。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

5月27日 く運動部く（前書き）

散々悩みましたよ・・・ハイ。

どの部活にするかを主に。男女主人公で被ってる部活ないしなあ・・・と。

で、結局こうなりました。

では、ごっげ。

5月27日　く運動部く

「何で、こうなったんだか・・・」  
そうぼやく湊は今、ある部屋にいた。

「何で、こうなったんだろ・・・？」  
湊と全く同じタイミングでそう呟く彩音もまた、ある部屋にいた。

湊のきつかけは、昨日の夜のことだ。

エリザベスとテオドアの依頼で、「三角の剣を持ってきて。」というのがあった。二人で考えた結果、その剣というのはフェンシング用の剣「エペ」という結論に至り、こうなれば持っているのは美鶴しかない、とエペを貰いに行った。戦闘でも片手剣を使っている、ということ、言い訳に使いやすいと貰いに行ったのは湊。しかしそこで美鶴がある勘違いをってしまった。

「戦闘の訓練なら、私が付き合ってやろうか？そういえば、君はただこの部活にも入っていないかったな。フェンシング部に入部すれば、私が直接教えてやるぞ？それに、君の戦闘を見ていると、なかなか筋がいい。」

湊は断ろうとしたのだが、美鶴は湊が断ろうとする前に話を進めてしまっていた。

「今年はまだ入部者がいなくてな。よし、では明日の放課後から来るといい。歓迎しよう。」

結局美鶴の、多少強引とも取れる話を湊は断ることが出来ず、そのままの流れで湊のフェンシング部入部が決まってしまったのだ。その話を同じラウンジ内で聞いていたゆかりは美鶴の強引さに少し怪訝そうな顔になり、真田は何を思い出したのか顔を青くさせて、そそくさと立ち去ってしまった。

彩音のきっかけは、先ほどのことだった。

たまたま廊下を歩いていたら、真田に呼び止められた。周りの取り巻きの視線が少し痛かったが、彩音はスルーする。

真田の話によれば、どうやら真田が主将を務めるボクシング部のマネージャーが急に辞め、代わりを探していたとのこと。それで思い当たるのが彩音しかいなかったらしい。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！それなら、あっちの取り巻き《ファンクラブ》の女の子たちでもいいんじゃない・・・？」

「美鶴からお前の生徒会での仕事ぶりは聞いているぞ。タルタロスへの出撃のスケジュールもすっかり立てているし、適任だと思ったんだが、どうだ？」

真田の期待した目を見てしまったのは、断ることは出来なかった。了承した途端周りからももの凄い量の殺気が飛んでくる。

それに冷や汗をかきながら、彩音は真田に連れられボクシング部の部室に連行されてしまったのだ。

湊は部室で基礎トレーニングをみっちりやらされていた。

今日は、いつもは生徒会などでなかなか顔を出さない美鶴もいるとあって、部員は張り切っているようだ。特に2年リーダー、岩崎いわさき理緒りおの指導が厳しい。

湊の運動神経は悪い方ではない。体力もそれなりにある。しかし苦戦しているのは、理緒と美鶴の練習メニューがいささか度を越しているためだろう。

噂の転校生、そして美鶴が生徒会と同じく自ら連れてきた新人だ。期待度は嫌でも高まってしまっただから、

「岩崎、もうそろそろいいだろう。少し休憩にしないか？」  
という声は、本当に救いに思えた。

「お疲れ。やはり私の見立ては正しかったようだ。初めてとは思え

ないよ。」

「そうですね。何か運動してた？」

「……いや。」

湊は渡されたタオルで汗を拭きながら答える。

「あ、そういうえば活動日とかを言うの忘れてた。活動日は月・水・金ね。」

「……生徒会とまるつきり被ってるじゃないか……」

「そういうわけなんぞな。私はあまり来られない。」

美鶴は苦笑してみせる。

「とにかく、君の活躍には期待している。分からないことは岩崎に訊くといい。」

「……はい。」

返事をする、慣れきった声が頭に響く。

今回のカードは”番 戦車”のカード。運動部のコミュだった。

「じゃあ、練習再開しよ！」

「ああ。有里、あまり無理はしないようにな。」

理緒が立ち上がったのを見て、湊もタオルを置き立ち上がった。

ボクシング部に来た彩音は、その現場の壮絶さに驚いていた。

床に散らばったトレーニング道具類。無造作に置かれたタオルからは汗臭さが染み出ており、空のペットボトルはあちこちにある。

「もう1人マネージャーはいるんだが、さすがにこの有様だと手が足りなくてな。手伝ってもらいたい。……おい西脇、いるか？」

「はい？」

部室の奥に真田が呼びかけると、ジャージ姿の女子生徒と同じくジャージ姿の男子生徒が現れた。

「新しくマネージャーを連れてきた。色々教えてやってくれ。」

「あ、あなた転校生の有里さんでしょ？あたし西脇結子ね。ここは結構キツいけど、頑張ろ？で、こっちがミヤ……えっと、宮本



「志ね。」

「うん。よろしく。」

「活動日は火・水・木だから。じゃ、まずはここ片付けちゃおうか？」

「了解！」

彩音が言われた通りにとりあえず近くのダンベルを拾う。

すると、彩音の頭にもあの声が響き、同じく戦車のカードが浮かぶ。

「こら！見てないでミヤも手伝ってよ！」

「お、おう……」

結子の声で我に返った彩音は、すぐ片付けを再開した。

帰りの道。昇降口で会った二人は、今日の部活についてお互い愚痴をこぼしていた。

「……あれ、二人とも。どうしたの？」

「あ！遥あ〜！聞いてよ、もう！」

彩音は現れた遥にも愚痴を言い出す。

「……そういえば、遥は運動部には入らないのか？」

「うん。運動はあまり得意じゃなくて。文化部なら考えたけど。」

遥は少し苦笑した。

「じゃあ、頑張ってるね。僕はちょっと寄り道しててから。」

遥は軽く手を振ると、すぐ角を曲がって行ってしまった。

「……ねえ、湊。」

「何？」

「私達、遥と何回も話してるよね？なのにコミュ、発生してない……」

「……コミュキャラじゃないんだろ。他にもいるじゃん、そういう人。」

「そっか……ちょっと残念。」

彩音は少し寂しそうな顔を見ると、また別の話をし始めた。

5月27日 〈運動部〉（後書き）

いかがでしたでしょうか？

うーん、何をしたかったんだ私・・・  
まさかのコミュキャラ男女主人公で逆転、というね。それに彩音の  
方はマネージャーにしちゃったし・・・  
相手が真田先輩と桐条先輩だったので、フラグ！？と思っただけ  
っしやるかもしれませんが、まだそれは未定です。第一書けるだけ  
の文才が・・・（汗）

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

5月29日 くいじめく (前書き)

現在セリフの確認のためP3Pを、ちょっとした好奇心で難易度マニアクスでプレイしてるのですが・・・難しさに挫折しそう・・・です。

素直に低い難易度でやるときゃ良かった・・・うう (汗)

では、ごうごう。

5月29日 くいじめ

放課後。

ゆかりは部活の用事で1人弓道場に行っていた。

そしてそこから帰る渡り廊下。

「はあ、つつかれた……。1年生にちゃんと片付け教えなきゃ。」  
ぼやきながら歩くゆかりの耳に、耳障りととれなくもない笑い声が響く。

「キャハハハハ！」

「ん？」

ゆかりが迷惑そうな顔で、そちらを振り向く。

見れば、同じ学年らしき女生徒が2人ほどで、大声で噂話をしていた。

「……。迷惑だよね。」

「えっ!？」

ゆかりが突然声のした方へ向くと、遙がいた。

「あ、う、うん。そうだね……」

いきなり現れた遙に少し戸惑いつつ、ゆかりはその噂話に耳を傾けた。遙も聞く態勢に入っている。

「……で、ケータイでさ、写真撮ったつぼくアピールしたワケ。

たらさー、あの子超ビビってさ、半ベソとか通り越してんの。弱み握られちゃった、みたいなの？なんつの、マジ世界の終わりって顔？  
だって声とか出なくなっただもん！」

「わ、ダセー！」

「つか、ビビって泣いてる顔とか見んの、超ウケるよね！」

また女生徒2人が「キャハハハハ！」と笑った。

「いわゆる、イジメ……。？ヒマねえ……」

「だね。人を下に見るのが、なんで楽しいんだか……」  
ゆかりと遙は肩を竦める。

「でさ、あの子、なんか前来た転校生と話してんの見ちゃったんだよねー。助けとか頼むつもり？」

「ないないって。あの子絶対、1人で抱え込むタイプでしょ？おおかた転校生が話しかけたんじゃないのー？よくやるよねえ。」

ゆかりは反射的に遙の方を向いた。

しかし、もうそこには誰もいなくなっている。

「え……？いつの間に……」

ゆかりは2人組に気づかれない程度に辺りを見回すが、どこにもいない。

話を聞くのに夢中で、足音に気づかなかったのかな？

そんなことを考えている時、2人組の内の1人の様子が急に変わる。

「え、なに……この声……あたしを……呼んでる……？」

何かに怯えたように、きよろきよろと見回す女生徒。

「は……声？なんも聞こえないけど？」

「……」

もう1人に、片方が聞いている”声”というのは聞こえなかったようだ。

「ちよつ、マキ……どうしたワケ？つか、聞いてる？」

もう1人は心ここにあらずのようだ。

「ねえ！マキってば！」

「……えっ？」

「アンタ、だいじょぶ!？」

「ゴ、ゴメン……えと、何だっけ？」

2人はその後、また先ほどと同じように誰かの噂話をして部活棟の方に歩いていってしまった。

「……行っちゃった。なあんか、ヤな感じだな、ああいうの……」

ゆかりは途中の女生徒の異変に少し引っかかりを覚えたが、遙のことも思い出し、校舎の方に歩いて行った。

「あ、ゆかりー！」

廊下を歩いていたゆかりが振り向くと、手を振りながら近づいてくる彩音と、ボクシング部マネージャー、結子の姿があった。

「どうしたの？部活もう終わったんだ？」

「まあ、ね。そういえば彩音はボクシング部のマネージャーになったんだっけ……」

「真田先輩に頼まれちゃってね……」

彩音が困った笑いを浮かべて頭をかく。

「……ねえ、彩音。……あ、マネージャーの仕事の途中だった？」

「いや、もう終わったからいいよ。岳羽さん、彩音に用事？なら……」

立ち去ろうとする結子をゆかりが止めた。

「あのさ、イジメって、周りから見ても凄くイヤな気分になるよね。」

「なるねー。……えっ？まさか、ゆかりいじめられてる……？」

「そういうわけじゃないんだけど、さっき、そんな感じの話聞いたやつてさ、凄くイヤな気分になってね……」

「あー、分かるよそれ。そっちのがなんの理由かは知らないけど、あたしも似たようなことあったし……」

結子がやれやれ、といった顔をする。

「あたしの時はその、男が絡んでただけだよー、相手が妬んじやつて。とばっちりだよ、まったく……」

「うわあ、そういうのって1番厄介じゃん……大丈夫？」

彩音が心配そうな顔をした。

「平気平気。ま、何とかしてあげたいけどねえ……ターゲットが誰かは分からないんでしょ？」

「うん、そこまでは……」

「うーん、と彩音と結子が首をひねる。

「ま、とりあえずは静観しとくしかないんじゃない？大事になるよ

うだったら、センサーが出てくるだろうし……」

「そうするしかないのが、なんか悔しいけどね……」  
彩音は確かに悔しそうだ。

こうやって人のことを真面目に思えるからこそ、彩音にはリーダー  
がしっかりと務まるのではないか……とゆかりはぼんやり考えた。

「……そういえば、2人とも遙くん見てない？」

「え……っと、転校生のだよね？見てないなあ……。……あ  
れ？なんでここで満嶋くんが出てくるの？」

ゆかりは先ほどの遙とのやり取りを話した。

「確かにそういうところあるよ、遙は。神出鬼没だから。」

彩音がまたか、といった感じた。

「彩音って、満嶋くんと仲いいんだ？」

「まあね〜。湊の方が仲いいみたいだけど。で、こないだも……」

それから3人で、他愛もない話をしながら帰った。

しかし、ゆかりの中に少しだけ残った違和感は、すぐにその正体を見せることとなる。

5月29日 くいじめく（後書き）

いかがでしたでしょうか？

いじめって、ほんとに嫌になりますね。

実際に体験したことがあるのでよく分かります。

まあ、悪口とかはスルーしましたけど。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。



5月30日 く怪事件の予感く（前書き）

結構6月の大型シャドウ戦までが長いです。

あと順平アワーに、報告会に、溜まり場、江古田の尋問・・・。

つまり満月バトル話はあと5話後くらいになりますかね。

では、どうぞ。

5月30日 く怪事件の予感く

休み時間の教室は、いつもより騒がしい。どうやら、ある1つの噂でもちきりのようだ。

「知ってる？E組の話・・・」

「なんか、スゴい噂じゃん。原因よく分かんないって・・・」

「らしいよね！でさ・・・」

「・・・何の噂だろう？湊は知ってる？」

「いや・・・」

湊は首を横に振る。

そこに、順平がやってきた。

「すげえな・・・もうこんな広まってんのか。どいつもヒマだな、まったく。な、もう聞いた？」

「聞いてない。何の話なの？」

いかにも知ってそうな順平が来たことで、彩音は順平に先ほどの質問をした。

「隣のE組の女子が、昨日の晩から夜通し”行方知れず”でさ。それが今朝んなって、校門の前でブツ倒れてたんだと！事情は目下ナゾで、噂じゃ意識も戻ってねえらしい。」

「・・・何か、怖いね・・・。」警察”関係の事件かな？」

「・・・さあ。事情が分からないんじゃないかな・・・。」

3人で考え込んでいると、ゆかりが来た。心なしか少し疲れた顔をしている。

「・・・おはよ。」

「よう、ゆかりッチ。今回の難事件・・・正直、このオレもお手上げ侍だワ。」

「お手上げ侍？」

ゆかりは順平の、おそらく順平独自のギャグなのであると言葉に、呆れたような視線を向ける。

「・・・バカじゃないの？・・・。てか、バカじゃないの？」

「2回言うな！」

ゆかりの2段攻撃が炸裂した。

「って、そう言や朝から見なかったけど、どしたん？」

「あ、そういえば。」

順平が話を変えた。今日は何故か、朝はいつも早めなはずのゆかりがいなかったな、と彩音は思い返してみる。

「先生に、ちよつと話してきたの。今朝倒れてたって子・・・実は私、きのう部活の帰りに見たのよ。彩音には話したよね？その時は、別に普通だったんだけど・・・。」

「ああ、渡り廊下んとこにいた？」

彩音とゆかりは？を浮かべている湊と順平に、昨日ゆかりが見た内容を話した。

「へえ・・・サスペンスだな、それ・・・。」

「・・・いじめられていた子の恨み・・・って線は無し？」

「それはないみたい。外傷は何もなかったらしいから・・・。」

「うん、と二人は考え込む。順平はもう考えるのを放棄したらしく、「うあー、お手上げ侍ー！」と叫んでゆかりにまた「バカ？」と言われている。

「・・・そういえば、その時には遙も一緒にいたんじゃないかっけ？遙もE組だし、何か知ってることあるんじゃない？」

「いや、止めといた方がいいと思う。噂の元がE組なら、野次馬が大量にいて会えないだろ。ただでさえ神出鬼没なやつだしな。」

訊きに行こうよ、と言う彩音を、湊は冷静に止めた。

「確かに、さつき見たらE組の野次馬はすごいなのって。」

「野次馬はともかくとして、それ無理だよ。先生にも『遙くんもその時一緒にいました』って言ったら、今日学校休んでるって。」

「・・・休み？遙がか？」

湊は知らなかったようで、すこし驚いていた。

その時、チャイムが鳴る。そのせいで強制的に話は終了となり、4

人はそれぞれ席に戻った。

「ここ……どこ……？何か、変なものいるし……。……お父さん、お母さん、心配してないかな……。」

その晩。

少女は気味の悪い大きな顔がところどころにある迷宮を、1人でさまよっていた。

その少女の呟きに、気づくものはない……。

5月30日 く怪事件の予感く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

風花の受けたいじめって、かなりひどいと思いました。  
ゲームだからっていうのもあるんでしょうけど・・・

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いいたします。

6月1日 く学校の怪談く（前書き）

6月突入です。やっとだ・・・

学校の怪談、というところこの学校にもあるものなんでしょうが、あ  
いにく私の通う学校にはないです。私が知らないだけなのかもしれ  
ませんけどね。

では、ごうごう。

## 6月1日 く学校の怪談く

その日の夜。二人は寮の食堂で食事をしながら、特別課外活動部の面々と話をしていた。

「そう言や、ゆかりツチさ。学生用のネット板とか、見てる？先週、E組の子が校門で倒れてんの見つかったっしょ？あれ、怪談に出てくる”オンリヨウ”の仕業じゃねーかってサ。」

オンリヨウ、という言葉にゆかりが反応する。  
ゆかりは強気な性格に見えるが、実はお化けとか怪談話が苦手という一面も持っているのだ。

「オンリヨウとか、マジやめてよ・・・ウソくさい！」

「その怪談というのは、どんな話だ？」

「桐条先輩も、そういうの興味あるんですか？」

意外な人物の意外な質問に、彩音は少し驚きつつ訊く。ゆかりは怪談を聞きたくないのか、「ちよっ!？」とすぐさま反応した。

「どうせ、作り話に決まってるし、き、聞かなくていいと思います  
が！」

「興味ある。話してみる。」

「う・・・」

真田までもが興味を持ってしまったようだ。ゆかりも言葉に詰まる。順平は待ってましたとばかりにどこからか懐中電灯を取り出して、顔を下から照らして話し始めた。

「・・・どこから出した、そんなの・・・」

湊も呆れ気味に呟くが、順平はスルーし話し始める。

「どうも、こんばんは。伊織順平アワーのお時間です。」

・・・世の中には、どーも不思議なことって、あるようなんですよ・・・。

ご存知ですか？遅くまで学校にいと・・・死んだはずの生徒が現れて、食われるよ、って怪談・・・

「・・・私の知り合いに、まあ、仮にAとしておきましようか。Aがね、言うんです。」伊織さあ、オレ、変なもの見ちゃった”って。あんまり真剣なもんだから、”なにが？”って、私聞きました、彼に。彼、首かしげながらね、”実は例のE組の子なんだけどね・・・、・・・事件の前の晩、学校来るとこ見たよ”って言うんです！”

ゆかりは順平の語る怪談に、わずかに肩を震わせていた。そして順平の声が大きくなるたびに、びくつと肩が跳ねる。実に分かりやすい反応だった。

そのまま順平の怪談は続く。

「うそだ、そんなあるかい、うそだ”って、私、彼に言うてやりましたよ。E組の子、夜遊びするような人間じゃない。でも、彼、真つ青はんだ、顔。確かに見たって、ガタガタガタガタ震えてる・・・。・・・私、考えましたよ。

そうなんだ、倒れていたE組の彼女お？・・・食われたんですよ、死んだはずの生徒に！夜中に学校にいたから食われて、だから倒れていたんだ！・・・って。

私、ぞくぞくとしました。ドゥーっと、冷や汗が溢れ出ました・・・。

世の中には、どーも不思議なことって、あるようなんですよ・・・。

・・・まあ、全部私の推測なんですけどね。」

順平が懐中電灯のスイッチを消し、怪談は終わった。

「どう思う・・・明彦？」

最初に口を開いたのは美鶴だ。ただ、順平の語りについての感想ではない。

「あら・・・？オレが熱演した件はスルー・・・？」

「あ、大丈夫。元ネタの人知らないけど上手だったよ！」

「知らねーのかよッ！どこから出てくるんだその根拠！？」

彩音のにつこりと笑って言ったセリフに、順平が突っ込んだ。

しかし、真田と美鶴はスルーして話を進めていた。



「オンリヨウかはともかく、調べる価値はありそうだな。」

「・・・そうですね。食われた、って言い回しがシャドウっぽいし。」

湊も話に加わっている。

「・・・しかし、ゆかりツチさ。お化けがニガテとは、チヨイ情けないよな。」

「な！？情けないって言った！？い、いーわよ、順平。だったら、調べよーじゃないの。」

順平の軽い挑発ともとれる言葉に、ゆかりはすぐ乗った。

「お互い、これから1週間、色んな人からテッテーテキに話を聞いて回るワケ。怪談なんて、ゼツタイ嘘に決まってるし！」

「それは助かる。気味の悪い話だからな。」

「えっ・・・」

「じゃ、宜しくな。あー怖い怖い。」

「ええっ・・・」

勢いで言ったことに、先輩2人も賛成したことで、ゆかりにしまった、という表情が浮かぶ。

「・・・じゃ、任せたからな。」

「・・・有里くんは参加。もちろん彩音は手伝ってくれるよね？」

「・・・ちっ。」

「うん、なるべく話は聞いておくよ。」

湊は情報集めから逃げようとしたようだが、あえなくそれは失敗した。彩音はすぐ了承したが。

「じゃ、金曜に報告会ってことで！」

ゆかりはもうヤケになっている。

彩音はまあまあ張り切っていたが、湊は「めんどくさい・・・どうでもいい。」とかなり面倒そうな雰囲気になっていた。

その日の影時間。

もう何度目かの気配を感じて、彩音は起きた。

「くんばんは。」

「・・・君ね・・・。」

「約束通り、また会いに来たよ。調子はどう？」

いたのはやはり謎の少年。彩音はそういえば、と思い出す。

ちょうど1週間後は満月だった。

「ぼちぼち、かな？」

「ふふっ、そっか。さて・・・あと1週間で、また月が満ちる。そして次回の試練がやってくるよ・・・気をつけて。」

ああやっぱりか、と彩音は思う。どうやらこの少年は満月の1週間前に来るらしい。

「・・・また、会いに来るよ。」

「・・・うん、じゃあね・・・。」

少年はそれだけ言うと、闇に溶けるようにして消えてしまった。

湊の方は、まだ少年は消えていない。

「そういえば、もうひとつの力が目覚めたみたいだね？・・・やっとその正体が、僕にも分かったよ。」

「!？」

まだ眠りかけていた湊の意識はその言葉で覚醒する。

もうひとつの力、とは十中八九この間の死神の時のことだろう。刈り取るもの

「・・・教える。あの力は・・・一体何だ？」

「あれは、君だけが使える力だ。ただ、使う時は少し気をつけなければならぬようだけど。」

少年は何かを考えるように首をかしげた。

「君の”眼差し”は、やつらを消せる。今言えるのは、このくらいかな。・・・さて、じゃあ、また会いに来るよ。・・・あ、そうだ。」

『使いこなして見せてよ』・・・  
だって。伝えたからね。」

「ちよっ、待て！まだ訊きたいことが・・・！」

湊が止めるが、少年は聞かずに消えてしまった。  
湊は暫くの間、謎の少年が残した言葉の意味を考えていたが、結論を出すことは出来なかった。

6月1日 く学校の怪談く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

謎の力についてちょこつと出しました。まだ戦闘であの力は出すつもりです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などございましたらお願いします。

6月5日 く怨霊の正体く（前書き）

春休み突入！ってことで若干テンションが高いです。  
更新速度上がると思います。

では、どうぞ。

6月5日 く怨霊の正体く

「というわけで、約束の週末ね。どう？3人とも、ちゃんと色々な人に話訊いた？」

「あれ、今日ってなんかの日だった？」

順平の一言に、ゆかりがイラつき気味に「はあ！？」「と言い、順平を睨む。

実際、湊もあまり調べてない1人だったので、ゆかりの剣幕に少し怯えていた。

「じよ、冗談だって！覚えてるつつの。すぐ、怒んだから・・・」

順平がやれやれ、という感じで肩をすくめる。

「彩音と有里くんは？ちゃんと調べた？」

「うん、バツチリ。」

「・・・ああ。」

湊が少し言いよどむ。調べてないな、と感じたゆかりが軽く湊を睨んだので、湊は冷や汗をかいた。

「とにかく、今日はラウンジに戻ったらラウンジに集合。忘れないですよ。」

「へーい。」

順平の気の抜けたような返事を聞いて、ゆかりは教室を出て行った。

「・・・なあ姉貴、結局オンリヨウの正体って何？」

帰り道で、湊は彩音に訊いた。つまり答えを訊いちゃおう、というわけだ。

「えー、やっぱり湊って調べてなかったの？」

無言で頷く湊に、はあと軽いため息をつきながら彩音は仕方なくヒントを教えてあげる。

「結局、倒れた子たちには共通点があったんだよ。」

「どんな？」

「それは教えな〜い。だって自分で調べてないじゃん。」

「う・・・姉貴のケチ。」

「はいはい、これだけでも教えてあげたんだから少しは感謝しなさいよ?」

逆上して何か答えを言うかと思っただが、彩音はそこまで単純ではなかったようだ。あるいは、湊がそれを狙っていることに気づいていたか。

「ゆかりに何か言われても知らないからね?」

「・・・はがくれの特製奢る。」

「ダメ。」

「・・・ワックもつける。」

「ダメ。」

「・・・1回だけ姉貴の言うこと何でも訊く!」

「ダメ。」

何を言っても却下されることに、湊は肩を落とした。

「ま、諦めな?そしてゆかりにしっかり怒られなさい!」

「・・・うう〜。」

結局彩音は何も教えてくれないまま、寮に着いてしまった。

ラウンジに全員が集合すると、報告会が始まった。

「ハイ、では月曜に約束した通り、集めた情報の確認会をしますッ。」

「

「おー、ノリ気じゃん。」

「当然。私的には、バッチリ色々掴んできたから。」

ゆかりは自信ありげだ。

「例の噂は、やっぱりオンリヨウの仕業なんかじゃないよ。」

「あ、そこ重要なんだ・・・」

「まあ、ゆかりにとってはそうなんじゃない?」

ゆかりはお化け嫌いを隠そうとしている節がある。だからオンリヨ

ウの仕業じゃないと掴んで、安心しているな、と彩音は思った。

「まず、この怪談騒ぎのそもそもの発端からだけど・・・校門で倒れてた例の子の話は、確かにちよっと怪談の内容と似てる。でも、1人がそういう目に遭っただけでこんな騒ぎになったのは何故でしょう？彩音、分かるよね？」

ゆかりは彩音に話を振った。

「うん。実は被害者が既に3人いた、でしょ？」

彩音に言われ、湊ははっとなった。

確かに帰り道、彩音は湊に「倒れた子たち」と言った。

つまり、それは被害者が複数いるという、彩音なりのヒントだったのだ。

「・・・そういうことかよ。」

「ん、何？」

彩音は湊の呟きに訊き返しているが、その口元は笑っていた。内心では「ようやく気づいたのね。」とでも思っていることだろう。一本取られた、と湊は思った。

「ハイ、正解！っていうか、驚いたよ！最初の事件のすぐ後に、実は2度も同じことが連発してたんだから！怪談と同じシチュエーションで、3人も病院送りじゃ、そりゃ騒がれる訳です。」

「・・・なるほどな。」

「へえ、そうだったの？」

順平が驚いたように言った。やはり調べてはいなかったらしい。

「えー、では次。被害にあった3人はクラスがバラバラで、一見、何の関係も無いみたいに思えます。でも実は、水面下に共通点があったの。その意外な共通点とは何でしょう？はい、順平。」

「何なんだよ、このノリ。誰のマネなんだよ？被害にあった3人の共通点・・・？おい湊、何か分かるか？」

順平は分からなかったらしく、湊に振った。

しかし湊も、彩音からは「共通点がある」としかヒントを貰ってない。流石に分からなかった。



「・・・素行が悪かった、とか？よく家出してた、とか。」

湊はもうヤケクソで、適当に答えを言った。

「おっと、”家出”で正解です！」

「えっ・・・」

1番驚いたのは湊だった。まさか、適当に言った答えが当たるとは思っていなかったのだから。

しかしゆかりは、それに気づかず話を進めていく。

「それも、結構ちよくちよく出てたみたい。幾つかワルいグループと関わってて、路上オールとかしてる時に知り合ってたみたい。つまり、湊くんが言った”素行が悪い”で大正解だね。」

ゆかりが意外そうな目で湊を見た。

「3人とも同じ状況で見つかってんだから、この繋がりはずっと何かあると思う。よって、更なる真相に近づくべく、現場取材を決定することにしたから。」

「は？現場取材？」

順平がぼかんとした顔でゆかりを見る。湊も同意見だった。そこまでするのか？とも思う。

「被害者の3人が決まって夜明けかしてた”溜まり場”ってのがあるらしいの。」

「お、おいそれ、もしかして、ポートアイランド駅の、裏入ったところ・・・」

「なんだ、知ってたの？」

「あそこヤバいって！」

順平が驚き、怯えたように言う。

「あそこ、駅のすぐ裏だけど、マジ超いろんなヤバい噂あんだぜ？」

「そーなの？なら、尚更みんなで行かなきゃ。ね、楽しみだよね！？」

ゆかりが期待のこもった目で二人を見る。順平はおろおろとつらたえ、二人に「絶対楽しみじゃないって！」と訴えている。しかし、順平を無視した彩音が一言。

「もちろん！」

それには順平だけでなく、湊も驚いた。

危険な場所を楽しみだなんて、正気か？

「だよね。」

「……マジか……？そんなところ行ったら、何されるか分かんないぞ……？」

「大丈夫！何かあればバレないようにペルソナ使えばいいし、湊と順平が守ってくれるんでしょ？」

彩音の楽観的な意見に、湊は頭を抱えた。

「オレ、行きたくないなー……あそこマジ、マンガみたいに荒れてんだよ。つか、そこまでする必要あんの、実際！？」

順平は完全に怯えているようだ。

「だって、今まで私たち、先輩に言われたまんま動いてきたでしょ？このままでいいのかなくて、そういう風に思わない？」

「や、そうかも知らないけどさあ……そこで真顔かよ、ズリいなー。ええー、行かないや駄目？」

順平はがっくり、となっている。湊も同意見だ。ただ順平のように”怖い”という理由からではなく、彩音やゆかりを危険な目にあわせたくないから、という理由だったが。

「決まりね。明日の夜に出発だから、そのつもりで宜しく。」

ゆかりのその宣言に、湊は酷い頭痛を覚え、順平は動揺し、彩音は楽しそうだった。

6月5日 く怨霊の正体く (後書き)

いかがでしたでしょうか？

ゆかりは変なところで勇気あると思いますね。  
行くことは思わないだろ普通・・・

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

6月6日 く溜まり場く (前書き)

久々に連続投稿が出来るかもしれません。  
土日で満月戦、終わるかな？

では、どうぞ。

6月6日 く溜まり場く

ラウンジに2年生全員が集合した。

女性陣の顔は楽しそうだったり自信満々そうだったが、男性陣の顔は一樣に沈んでいる。

「・・・という訳で、昨日の約束通り、出かけるよ。」

「すげー、ノリ気だ・・・ヤベエと思うなあ、のこのこ行くの。だって女の子2人よ？男2人いるとはいえ、エサ持ってくみたいなものじゃんよー・・・なんでオンリョーは駄目でこーいうのはアリなんだか・・・」

「・・・順平、分かるぞその気持ち。」

「駄目とか言わない。見えないモノは誰だって気味悪いでしょ。」

「見える方が怖いだろがっ！バットとか、光りモンとかさ！」

湊は順平に激しく同意した。

「もう・・・フリーョーの溜まり場くらい何よ？ほらほら急いだ。先手必勝なんだから。」

「早く行こう？」

彩音とゆかりは一足先に寮から出た。

「必勝・・・？」

「・・・面倒だな・・・。」

「まあ・・・ここはゆかりッチに任せようぜ・・・。」

「・・・危なくなったら即2人連れて逃げよう・・・。」

湊と順平は足取り重く寮から出た。

辰巳ポートアイランド駅の裏路地。

そこには既に数人の男女がたむろしている。中にはタバコを吸っている学生らしき人物もいた。

「・・・んだ、あれ？」

「つか制服・・・あれ、ツキ高じゃん？」

不良が入ってきた4人を見る。睨んでんじゃないかと思うほど目つき鋭い者もいた。

「ヤベエ。想像してたよりずっとヤベエ。」

順平が呟いたところで、不良の1人が4人の前に来た。

「ちつと、オマエらさ。遊ぶとこ間違えてんじゃないかねえの？」

「あ・・・いや、別に・・・」

順平がしどろもどろになりながら答えた。

「フウ・・・オマエらみたいの来つとシラけんだろ・・・帰れよ、ヒゲ男くん。」

「ヒ、ヒゲ男くん？あ、あー、オレの事っスね・・・」

「ここ来るのに、なんであんたの許可が要るワケ？」

「ちよっ、おまつ、バカかよ！オマエあれか！？空気詠み人知らずか！？」

順平が強気の発言をしてしまったゆかりに慌てて突っ込む。ゆかりは「なにそれ・・・」と呆れた。

「て言うか、こんな連中にビビんないでよっ！」

このゆかりの一言で、不良の目つきが鋭くなった。

「ああ？」

「”こんな連中つつつたよ、そのコ。つか、写メとか撮って流しちやおーか！パパとかが気い失うよーなセクスイーポーズなやつ！」

「きやははははっ！！やべ、ちよーウケるっ！！」

溜まり場にいた少女たちが笑い声を上げる。それにはゆかりだけでなく、彩音や湊も嫌悪感を抱いた。

「こいつら、サイッター・・・」

「あちゃー。彼女いま”サイター”とか言ったよね。ヒゲ男くんも大変だ。こんなアグレッシブなコと一緒にだど・・・サー！！」

不良が順平の腹に一撃入れようとした・・・が。それは止められた。

湊が不良の腕を寸前で掴んだのだ。

「ああん？何してくれちゃってんの、キタロー君。」

「・・・黙つとけ。」

湊は鋭い目で不良を睨む。手を出されかけたことが、彼の逆鱗に触れてしまったらしい。

「てめつ、調子乗んなよ！？こんな細い腕で、何が・・・」

湊が不良の腕をぐつ、と締め付けるようにして握る。

ペルソナ能力の補正は、影時間以外でも存在する。今湊が装備しているのは”力”のパラメータが高いペルソナ。つまり、湊自身の力は普段よりも強い。

「湊っ・・・」

ゆかりに負けず劣らず正面きつて不良に喧嘩を売った湊に、彩音は心配そうに声をかけた。

そして不良が湊に足で反撃しようとしたところで・・・

「その辺でいいだろ。」

聞き覚えのある声と共に、6月だというのにロングコート、ニットキャップという出で立ちの少年が奥から現れた。いつか、真田の病室にいた少年だ。

「知らねえで来てんだ。俺が追い出す。いいだろ、そんで。」

「バアカかテメーは。今さらそんで済むかよ！テメエもヤンぞ、コラー！！」

湊は少年の登場で手の力を緩めていた。そして不良はその湊の手を易々と振り解き、現れた少年に向かって行く。

不良は少年に殴りかかった。

しかしその拳は簡単にかわされ、少年は不良に頭突きを食らわす。不良はよろめいた。

「うおっ・・・つ、つええ・・・」

しかしやられたにも関わらず、不良の態度は変わらなかった。

「テンメエ・・・いま三途の川、渡ったぞ！ただで帰れると思って

んのか!？」

「・・・試すか？」

「う・・・い、いや、特に・・・」

不良は少年が睨みを効かせただけで、すぐごと引き下がった。その不良の姿に周りの少女たちが笑い声を上げる。

「テメエ・・・確か”荒垣”とかいったな・・・？そうだ、”荒垣真次郎”・・・！テメエも確かツキ高だな？」

「チツクシヨ、おっぱえてろよ!!！」  
そこにいた不良たちは逃げ去り、少女たちも笑いながら去って行った。

「・・・フン。」

湊は去っていく不良たちを一瞥した。

別に”虎の威を狩る狐”のつもりはない。ただ、自分より弱い者には威張り散らし、強い者が現れたら即逃げるといふ、不良の態度に心底嫌気が差したただけだ。

「・・・湊、大丈夫だった？」

「・・・ああ。少し、手が汚れたけどな。」

湊は帰ったらすぐ手を洗おうと思った。彩音は湊の様子にほっと安心したようだ。

「スゲーツス！先輩、つえーツス！」

「その顔・・・お前ら、アキの病室に居た・・・」

荒垣は4人の顔を見ていたが、すぐその表情は一変した。

「・・・バカ野郎が!・・・帰れ。お前らの来るトコじゃねえ。」

荒垣は踵を返し、立ち去ろうとした。

「待って!!」

ゆかりの声に、荒垣は足を止める。

「ごめんなさい・・・でも私たち、知りたい事があって来たんです!」

「・・・アキに言われて来たのか？」

荒垣は振り返ることなく聞き返す。



「違います！これは、私達の意志です！」

「・・・フン。」

彩音の返答に荒垣は、仕方ないという風に溜まり場奥のちよっとした段差に腰掛けた。

「知りたい話つてのは何だ。例の”怪談”とやらか？」

「そうですね・・・え、なんで分かったんですか？」

「ウワサだ。」

ゆかりの質問に、口は悪いが荒垣はしっかりと答えてくれていた。

「病院送りになった女どもが、その辺にタム口って毎日話してた。」

「山岸”って同級生を色々イジってるってな。」

「山岸”って・・・E組の”山岸 風花”？あいつ、イジメに遭ってたのか・・・」

4人は以前真田が話していた”新たな適性者”の話思い出す。

「おかげで騒がれてるぜ・・・犯人は、その山岸の怨霊だ、とかな。」

「山岸さんの”怨霊”って・・・え！？それ、どういうことですか？」

「お前ら・・・知らねえのか？その山岸”ってやつ、死んでるかもつて。もう1週間かそこら、家にも戻ってねえつて話だ。」

荒垣は彩音たちがその話を知らないことに少し驚きつつ、話してくれた。

「どうなってるんだ？山岸”って、確か、病気だつて・・・つか、行方不明つてことじゃねえか！」

「これ、もう”怪談”じゃないよ・・・。E組の担任”江古田”でしょ？アイツ、この事知ってるのかな・・・」

「多分知ってると思うよ。搜索願とか出されてたら、知らないはずないもん。それで隠してるんなら・・・」

「・・・不良以上に最低かもな。」

4人が話し合う中で、荒垣はぼつりと呟く。

「そうか、アキのやつ・・・あの日出来なかったことの”代わり”  
ってか？つたく・・・過去を切れねえのはどっちだってんだ・・・」  
「・・・？」  
「・・・」

ゆかりはその言葉に首をかしげ、湊はその意味をじつと考えた。

「なんでもねえ・・・」

荒垣はゆかりの視線に気づいたのか、首を横に振った。

「知ってんのは、そんだけだ・・・もういいか？」

「あ、はい！ありがとうございました！」

「・・・何もしてねえよ。」

彩音が笑顔でお礼を言った。それを見て、荒垣は顔を背ける。

「あの、ありがとうございました。話も聞けたし・・・。。。。。。優しいんですね。」

「あ？」

ゆかりの一言に、荒垣はゆかりの方を見る。

「あ、ごめんなさい・・・」

「・・・もう来んな。」

荒垣はそう言つと、立ち去ってしまった。

彩音には、それが照れ隠しとしか見えなかったが。

「・・・あの、先輩ってほんとに優しいと思います！ありがとうございましたー！」

彩音は荒垣に聞こえるように言った。しかし、荒垣は振り返らずに行ってしまった。

その後寮に帰って真田と美鶴に報告をしたが、溜まり場に行ったことで4人とも怒られたのは言うまでも無い。

影時間。

荒垣は先ほどの溜まり場にいた。周りには誰もいない。象徴化した

人間すらもだ。

しかし、荒垣のところには歩み寄ってくる人影があった。

「・・・テメエか。」

「こんばんは、荒垣くん。」

「ハッ、どうせお前のことだから、あいつらと話してたことも見てたんだろ。」

「ありや、バシてた？分からないようにしといたんだけどな？」

遥はいたずらっ子の笑みを浮かべながら、荒垣の隣に座る。

「何となくだ。それより、お前は知ってたんだろ、全部。わざわざあいつらにここ来させるより、お前が教えたほうが良かったんじゃないのか？」

「あれ、それも分かつちゃってた？でも無理。僕この1週間学校休んでたもん。絶対何か訊かれるに決まってるし、面倒くさくなっちゃってね。」

「・・・ハア。」

荒垣はため息を吐く。そうだ、こういう奴だったと思い出した。

「それに、僕は”傍観者”だから。教えるわけにはいかないの。それに関しては、あの渡り廊下は失敗だったかもなあ。」

「・・・？毎回言ってるよな、その”傍観者”っての。何なんだよ、そりゃ？」

「秘密ー。」

荒垣はそう言われ、これ以上訊くのをやめた。毎回そうなのだ。何回訊いても適当にはぐらかされてしまう。

「ねえ、湊くんたちは本当に真田先輩に言われてきたんじゃないよ？確かに怪談騒ぎの調査依頼をしたけど、桐条先輩とだし、ここに行くっていうのは完全に予想外だったみたい。」

「ふん、どうだかな。」

「本当だって。」

信じてよ、と遥は口を尖らせる。

でも荒垣は遥をそれなりに信頼していた。遥が言うのならそうなの

だろう、と無意識に思ってしまったている自分がある。

「ま、恐らく月曜には動くだろうね。江古田問い詰めて、救出って  
とこかな。満月と被るのが、偶然だとは思えないけどね。」  
遥は立ち上がった。

「そいじゃね。僕はそろそろ行くよ。明後日は気をつけてよね。」  
遥はそう言つと、ひらひらと手を振って去っていつてしまった。

6月6日 く溜まり場く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

私は女性主人公では荒ハム派ですので、この時の荒垣先輩もカツコよくて大好きです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

6月8日 く風花の行方く（前書き）

ついに30話目です！書き始めて1ヶ月半。けっこうハイペース・  
・の部類に入るんでしょうか？

6月の満月戦は2部構成にしようと思います。

では、どうぞ。

6月8日　　風花の行方

昼休み。4人は、職員室に来ていた。

もちろん、山岸　風花のことを担任である江古田に色々と訊くためである。

しかし、そこには既に先客がいた。

「あれ、桐条先輩、どうしてここに？」

「君らと同じさ。」

美鶴も一昨日に調査結果を聞いて、担任である江古田に話を聞きに来たらしい。また、奥の椅子には1人の女子生徒が居た。その女子生徒は怯えているように見える。

「先生、事情を伺いに参りました。」山岸　風花”という生徒について……」

「違うのっ！！違うのよ……こんな……こんな事になるなんて思わなかった！！風花……」

突然奥に居た女子生徒が叫ぶ。

「あれ……あなた、確か、前に……」

ゆかりはその生徒に見覚えがあつた。前に渡り廊下で、倒れた女子生徒と話していた生徒だ。風花のイジメに関する話を。

「山岸をどうしたんだ？」

「おいおい、桐条君。そんな言い方ないだろう？森山もりやまも困ってるじゃないかね。なあ、森山。話したくなければいいんだぞ。お前が余計なことを言つて山岸が変に思われてもいかんよ。」

江古田が声をかけるが、森山と呼ばれた女子生徒は話を続けた。

「風花つてさ……ちよつと突つただけで、いつも世界の終わりみたいな顔すんだ……。すぐ分かつたよ……コイツ優等生のクセに、根っこ、アタシらと同じだつて。どこ踏んづけときゃ立ないか……。アタシには丸分かりだつた。……。だから！あの日もほんの遊びのつもりだつたの！」

5月29日・・・風花を体育館に連れてって・・・外から鍵かけて・・・」

「ちよつ、おまつ、閉じ込めたつっつー事かよ!？」

順平が驚いた目で女子生徒 森山 もりやま 夏紀 なつき を見る。そこまでしたとは思ってなかったのだから。

「夜中になつて、自殺とかされるとマズいからって、マキが1人で学校行ったんだ・・・でも、マキ帰ってこなくて、翌朝・・・」

「校門で倒れてるのが見つかった、か・・・」

「風花を出さなきゃって体育館行ったら、まだ鍵が掛かったまんまで・・・ヤバいつて、すぐ開けたんだけど、そしたら風花、消えちゃってて・・・!アタシら、みんなビビって、次の晩から夜な夜なあの子を探しに行ったの・・・でもその度、行った子が帰ってこなくて・・・みんな次々、マキみたいに・・・!」

「倒れて発見され、病院送り・・・。それで、何も知らない部外者がそれを怨霊だと騒いで、今回の騒ぎになった、か・・・蓋を開けてみればとんだ大事だな。」

湊が考え込む。じゃあ誰が、否、何が風花を連れ去ったか、消したのか。

「なるほどな・・・」

美鶴も同じように考え込んでから、江古田に向き直った。

「・・・ところで、連日の山岸 風花の欠席を、先生は”病欠”と届けていらっしやる。だが実際は行方不明で、先生はそれをご存知だった筈だ。・・・どういうおつもりです?」

美鶴がキツ、と江古田を睨みつけた。しかし江古田はこれの言い訳を用意してあったようで、すぐ弁解を始める。

「何を言ってる。生徒のためにした事だよ。みんな色々、将来の為に都合があるんだ。子供の君らには分からんだろうがね。」

「失踪して警察ざたになる問題児など、ご自分の組には居ないという事ですか。」

「ほ、本人のためだ。こんな事で学歴に傷がついてはいかんだろ?」



親御さんも、そういう話で納得してんだよ！」

さすがの江古田にも焦りが見え始めた。しかし美鶴は、もう敬語すら使わず、江古田をバツサリと切り捨てる。

「保身の為には教師の本分すらも捨てるか。下衆め……！」

「ゲツ……いや……そんなふう……言わなくたってさあ……」

「いいえ、桐条先輩の言うとおりですね、先生。そんなに自分の身が可愛いですか？あなたは、生徒のことなど何も考えてないでしょ。本人のため？自分のための間違いではなくて？この自己中心じこちゅう的教師

「……」  
彩音もこの江古田の言い分には怒りを隠せなかったようだ。美鶴に負けるとも劣らぬ言い放題ぶりだ。湊たちは若干引いている。

美鶴はというと、もう江古田を見てはいなかった。夏紀の方の事情聴取に入る。

「病院に運ばれた君の友人について、なにか、気づいた事は無いかな？どんな細かなことでもいい。」

「……」声だ……。自分と呼ぶ声……。そうだ……。みんな病院送りになる前の晩……。そういえば同じ事言ってた……。気味のワルい”呼び声”を聞いたって……」

「声……？」  
順平は首をかしげるが、ゆかりは何か思い当たることがあったようだ。

確かに”呼び声”というのは、ゆかりが偶然聞いた噂話の中にもあった。だが、それだけではない。

「先輩……もしかして、今回の事件って!？」

「間違いない……ヤツらの仕業だ。」  
美鶴も同じ答えに行き着いたようだ。

「誰が影時間に落ちるかを事前に知る方法は無いとされてきたが……なるほど、”声”か。つまり影時間へは”落ちる”のではなく、ヤツらによって”落とされる”という事だな。実際の被害を目の前

にすると思い知る・・・ヤツらは確かに人間を”狙っている”んだ。シャドウ・・・紛れも無く人類の敵だ。」

美鶴は再び夏紀の方に向き直る。

「今夜は、私達の寮に泊まるがいい。それが一番安全なはずだ。もしも”声”を聞いてしまったら、すぐに教えるんだ。何かに呼ばれたように感じてても、決して部屋から出るな。これさえ守れば、君は助かるだろう。・・・そして、おそらくは”山岸 風花”もな。」

「風花・・・」

夏紀はうわごとのように、名前を呟く。

今度は美鶴は、彩音のほうに向き直った。

「有里。それから伊織、岳羽。放課後、生徒会室に集合だ。そこで今夜の作戦について説明する。」

「こ、今夜ツスカ!？」

「今夜、山岸 風花を救出する。おそらく、彼女はまだ、この学園から出ていない。」

「・・・ああ。確かに早いほうがいい。もう既に10日経ってる。」

「わ・・・分かりましたっ!」

順平とゆかりは今夜、という言葉に驚くが、しっかりと返事をした。

放課後、生徒会室。

今日は定例会の日だが、美鶴が会長の権力で定例会を取りやめ、ここには特別課外活動部メンバーである彩音、湊、ゆかり、順平、美鶴、真田の6人が集まっている。

「今夜、この学園への潜入作戦を行う。目的は”山岸 風花”の救出だ。」

「あの、イマイチ分かんないんすけど、山岸って、ガッコの中に居るんすか？」

「しかも、なんで夜に? 0時になっちゃったら、学園は・・・」  
腑に落ちなかつたらしい順平とゆかりが美鶴に訊く。

「その通り。山岸もそうやって、タルタロスに迷い込んだんだ。」

「じゃ、まさか山岸さんって、体育館に閉じ込められてからずっと……」  
ゆかりはようやく理解したようだ。

「……そうだ。」  
「そんな！10日も前の話じゃないツスカ！それ……どう考えても……」

「……ああ、そうだな。だけど、それが240時間+影時間だったらの話だ。」

湊の言葉を、真田が引き継ぐ。

「湊の言う通りだ。悲観するのは早い。タルタロスは影時間のあいだしが現れない。なら山岸 風花は、日中は何処に居ると思う？」

「そう。つまり日中は山岸さんにはないんだよ。」

「あ、言われてみれば……」  
ゆかりが湊たちの言おうとしていることに気づいたようだ。

確かにそうだ。日中の間風花が居れば、最初に体育館を夏紀たちが開けた時点で風花は発見されている筈なのだから。

「こいつは仮説だが、恐らく山岸はあの時からずっと影時間に居るんだ。つまり10日と言っても、山岸にとっては影時間を足し合わせた分しか時が過ぎてない。生存の可能性はある。」

「おおっ、マジツスカ!？」

順平の顔が明るくなる。しかし、その顔はすぐに少し曇った。

「あ……でも影時間って、慣れたオレらでも、居るだけで結構バテるじゃないスか。あれを10日分ぶつ通しつてのは……」

「そう言えば、そうね……。それに、たとえ見つかったも、場所によっては辿り着けるかどうか……」

その弱気な発言に、真田は声を少し荒らげる。

「なら、このまま見殺しにするのかっ!……方法はある。」

「山岸さんと全く同じ方法で中に入る……ですか？」

今度は彩音が真田の言葉を引き継いだ。

「……確かに、同じ場所から影時間に入れば、同じ場所に辿り着

ける可能性は普通よりも高い、か。かなり危険はあるけどな。」

「正直に言えば、私はこの作戦には諸手を上げて賛成は出来ない。湊の言うとおり、危険だ。最悪、二重遭難という可能性もある。しかし……」

「助かる可能性があるのに、放っておくなんて俺には出来ない……。後悔したくないんだ。」

二人は、一昨日荒垣が言っていた「あの日出来なかったことの代わり」という言葉と、前に真田が話してくれた「ボクシングを始めた理由」の話を思い出していた。

一体、何が真田をそこまで行動させるのかと疑問に思う。

「お前らが行かないなら、俺1人で行く。」

「先輩……?」

二人はこの真田の言葉で我に返った。

ゆかりもこの真田の必死さには疑問を持ったようだ。

「……分かった。危険は承知だが、このまま放置するわけにもいかないからな。」

「そうですね。やってみないとわからないし。」

美鶴とゆかりは真田の必死さを見て、行く事を決めたようだ。

「おし……夜の学校に侵入か！へッ。そうと決まれば”アレ”だな……」

順平は何故か乗り気なようだ。

「……アレ?」

ゆかりもそれは気になったようだが、順平は絶対に教えなかった。

「今日の夜、決行か。満月と重なるのは、果たして偶然か……」  
屋上。遥は柵によりかかりグラウンドを眺めながら呟いた。その横には、影時間ほどはつきりとした輪郭を持つてはいないものの、遥のペルソナがたたずんでいる。

「まあ、観察させてもらうとしますか。」

遙はペルソナを戻し、屋上を後にした。

6月8日 く風花の行方く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

うーん・・・満月戦は明日投稿になるかなあ・・・

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

6月8日NO.2 〳?番 女帝&?番 皇帝〳(前書き)

満月戦です。

今回はセリフが多いイベントなので、長くなると思います。

では、ごちそう。

夜。

昼間生徒会室で話し合った作戦を実行するため、ここにいる全員はもう出撃の用意を済ませている。

しかし、美鶴は携帯を持ったまま困った顔をしている。

「困ったな・・・理事長に連絡が取れない。」

「まあ、いいんじゃないですか？」

「1つだけ面倒がな。理事長の口添えがないとなると、夜の学校にどう入ったものか・・・。」

「それ、ご心配なく。その事なら”仕込み”が済んでマス。」

その問題を解決したのは、意外にも順平だった。

「仕込み・・・？爆薬か？フフ、いいだろう。今回は任せよう。」

「・・・は？爆薬・・・？」

2年生4人の声がきれいに八もった。

「時間が惜しい。出るぞ。」

真田と美鶴の2人は一足先に作戦室を出て行った。

「・・・爆薬？」

「・・・い、いや・・・鍵開けといたってだけなんだけど・・・」

ゆかりが不思議そうに順平を見る。それに対し順平も困った顔をしながらか種明かしをした。

「・・・行くぞ。多分、桐条先輩って若干天然入ってるんだろ。」

湊がすたすたと歩きだす。順平とゆかりはもつともなその意見に納得し、湊の後に続いた。

月光館学園の中には、順平の”仕込み”のお陰ですんなり入れた特別課外活動部の面々がいた。

「すんなり入れたっしょ？オレって、なんつーか天才？」

「自慢するほどの事？」



「・・・警備員がちゃんと確認してなかったただけだろ。簡単に鍵かけられて終わり、って可能性もあったんだぞ？」

鼻を高くする順平に、ゆかりと湊が突っ込みを入れた。

「昼間のうちに鍵を・・・ブリリアント！」

「グツチヨブ。」

先輩2人はそんな仕込みなど考えてもいなかったようで、順平を称賛した。しかし真田はすぐ真面目な顔に戻る。

「時間が惜しい。行くぞ。」

また先輩2人は先に行ってしまう。

「あの人・・・なんなの？」

「ブリブリとかって、なに？どういう意味？」

「真田先輩の変わり身早っ・・・」

「・・・ブリリアントは称賛の意味だと・・・”華々しく素晴らし”・・・だったか。グツジヨブは自分で調べろ。」

「え、そーなの？日本人は日本語使って欲しいよナ・・・」

4人はこそそと話をすると、2人の後を追いかけた。

着いたのは2年F組の教室だった。

「電気つけましようよ・・・」

ゆかりはここでもお化け嫌いがあるらしく、美鶴に言ってみる。

「怖がっちゃってまー！」

「怖くないっつの！・・・アホか。」

ゆかりはすぐに順平のからかいを否定した。

「ア、アホはないっしょ？」

「騒ぐな。この時間は、主電源が落ちてる。それに、暗いままの方が、都合がいい。」

真田が騒ぐゆかりと順平をたしなめた。

「なんか、コソコソしてて、ヤだなあ・・・」

「そう言わないでよ、ゆかり。山岸さん助けるためなんだし、見つかっちゃったら助けられなくなっちゃうから、ね？」

彩音はゆかりをなだめた。それを見て、美鶴がこの後の手順について確認を始める。

「まずは、体育館の鍵を手に入れるぞ。」職員室”か”校務員室”にあるはずだ。二手に別れて探し、1階の玄関ホールに集合だ。いいいな？」

それを聞いた順平は、何かを考えだす。

「職員室”のガサ入れか……。テストの問題とかあるかも？ウヒヒ……」

「……順平……」

「私の目の前で不正の算段か？事実なら”処刑”だな……」湊が順平をたしなめようとしたところで、美鶴が先に順平をたしなめた。それを聞いた真田は、何を思い出したか顔が青くなる。

「う、嘘に決まってるじゃないスか。嫌だなー、もー。」

順平も美鶴のただならぬ気配を感じたのか、すぐ訂正した。でも、美鶴は信用ならなかったようで、

「……なら、伊織は私と”校務員室”だな。」  
と言った。

「じゃあ”職員室”には私と湊と、あと真田先輩で行ってきますよ。」

こう彩音が言った時、ゆかりの顔が少しだけ曇ったが、すぐに元に戻った。

「分かった。では岳羽も”校務員室”だ。玄関ホールで落ち合おう。」

「よし、じゃあ早く行くぞ。」

そうして美鶴、順平、ゆかりの3人は校務員室へ、真田、彩音、湊の3人は職員室へ向けて教室を後にした。

職員室に行くには1階玄関ホールを通る。そこでふと、先頭を歩いていた真田が足を止めた。

「待て、何か来るぞ！」

3人は柱の影に隠れた。足音が段々とこつちに近づいてくる。

「こんな時間に、誰だ・・・？」

「怪談騒ぎに便乗して、肝試しに来た生徒とかじゃなきゃいいんですけどね・・・」

彩音が言つと、3人が隠れている柱を懐中電灯の光が照らした。そしてそのまま足音が遠ざかっていく。

「フウ、警備員か・・・」

3人は柱から注意深く周りを見渡す。

「・・・よし、いなくなつたな。行くぞ。」

「さつき湊の言つた通り、あまり有能じゃない警備員で助かつたね・・・。」

彩音がそう言つて、3人はまた職員室へ向かつて歩き出した。

職員室に誰もいないのを確認し、中へ3人は入る。

そこで鍵置き場を見つけ、中から鍵を漁つた。

そんな中で、真田が得意そうに1つの鍵を出す。

「あつたぞ、”体育倉庫”の鍵だ！」

「「違います。」」

二人の声が綺麗に重なつた。

「ついでに補足させてもらいますと、”体育館”の鍵ですよ？」

「なにっ!?! た、”体育館”だと?・・・そ、そうか。」

明らかに落ち込んでいる真田に、湊は少し同情した。

そしてまた鍵を探し始める。

しかし、その鍵置き場の脇に1本の鍵が光っているのを彩音は見つけた。

そのタグを見てみれば、”体育館”と書いてあつた。

だが真田はその鍵には気づかず鍵置き場をひっくり返していた。やがて諦めたのか、真田が鍵置き場を元に戻し、彩音の方に向き直つた。ちなみにその前に、湊は体育館の鍵を見つけている。

「ダメだ、ここには無い。ということは、美鶴たちの行ったほうに

あるってことだな。・・・何をグズグズしている。行くぞ。」  
そしてすぐドアの方に行ってしまいそうになる真田に、二人はついに、

「先輩の目は節穴かつ!?」  
と揃って突っ込んだ。

「なんだと!? 見る、”体育館”の鍵なんかどこにも・・・!」  
「・・・そこにありますけど?」

湊に指摘されて、ようやく真田は鍵の存在に気づいた。  
「・・・あつたな・・・。」

真田はその鍵を取ると、照れ隠しなのか早口で言う。

「・・・まあいい、見つかったんだ。ほら、さっさと行くぞ!」

二人は真田の行動に、笑いをこらえるのに必死だった。

「待ち合わせ場所は”玄関ホール”だったな。急ぐぞ。」

そして3人は職員室を後にした。

ホールでは既に、美鶴、順平、ゆかりの3人が待っていた。

「鍵はあつたか?」

「ああ、バツチリだ!」

「・・・気づかなかつた癖になんでああなんだ・・・」

湊の呟きは近くにいた彩音にしか聞こえなかった。

「よし、改めてチームを2つに分ける。3人もしくは4人が、このままタルタロスへ突入。私とあと1人が2人が外でスタンバイだ。

影時間に入ったら、私が位置を割り出す。」

「俺は突入組に入る。それと、お前たちのどちらかは必ず来い、有里。また仕切り役をやってもらう。」

「うーん、じゃあ湊は入ってよ。勘が鋭いし、少しは気配を読めるんじゃない? だったら、山岸さんがどこにいるかも感覚で分からないかなあ、って。」

「・・・じゃあ姉貴もだ。それならそつちに集中したい。集中しながら仕切り役なんて出来ないからな。」

「あ、じゃあ、4人目は私で……！」

「タイム、タイム、ゆかりツチ。」

ゆかりが立候補しようとしたところで、順平が間に入った。

「ほら、オレ、前にモノレールん時、実力出せなくてメーワクかけちったじゃん？恩返しっつかさ、汚名バンカイさしてくれよ、な？」

「はあ？ヘンな見栄張らないでよ！それと、汚名は”返上”。」

「もしくは”名誉挽回”ね。」

ゆかりは突入組がいいのか、順平が突入組に入ってほしくないように見えた。

だがそれは叶わなかった。

「そういうことなら、汚名返上させてやる。これで4人、決まりだな。」

「よろしくつス！」

「えー……」

ゆかりは少し嫌そうな顔をした。

「なんだ、岳羽。美鶴と2人きりは苦手か？」

「い、いや、そんなことないですよ。」

ゆかりは慌てて弁解した。

「……そろそろ時間だ。」

「行くぞ！」

もうすぐ影時間。それを美鶴が告げ、真田たち突入組は急いで体育館に向かった。

影時間、蔵戸台分寮。

夏紀用に割り当てられた部屋で、夏紀は象徴化せずベッドに座っていた、

「アタシ……そっか、アタシ……。……結局、独りなんだ……」

今この寮には、夏紀以外誰もいない。みんな作戦で出払っていた。

「風花……」

ぼんやりと夏紀は風花の名前を呟く。

その時、夏紀の耳に誰かの、否、何かの声が聞こえた。

「え……」

その声は1回だけでなく、また聞こえた。

「これ……イヤだッ……イヤだよッ!!」

夏紀は耳をふさいで首を振る。しかし、声は止まない。

しかし、夏紀の抵抗もそこまでだった。

「呼んでる……そうだ……学校……学校、行かなきゃ……

謝らなきゃ……風花……」

夏紀はまるで何かに取り憑かれたようにふらふらと立ち上がり、部屋を出て行った。

「さて、救出劇の始まり、かな。にしても、あの理事長も悪趣味なもの造るね。何に使うのか知らないけど。」

遙は月光館学園の天文台屋上にいた。また5月のように、傍らにペルソナがいる。

もつともこの”天文台”とは名ばかりで、実際に生徒に解放されてもないし、それらしき設備も見当たらない。

その代わり屋上には、普通に人を磔に出来そうな十字架が合計9本立っていた。

「……!」

遙が何かに気づいた様子で、蔵戸台分寮のある方角を睨んだ。

「”呼ばれた”か……。早くしないとね、みんな?」

遙はまた、タルタロスの方に目を向けた。

「もうすぐ、ここに来るしね?”試験”が。」

その頃、タルタロスのエントランス。

そこには今回突入組には入らなかった美鶴とゆかりが待機していた。

美鶴はバイクに積んである通信機材を操作し、ゆかりは階段に座り込んでいる。

沈黙に耐え切れなくなったのか、ゆかりが美鶴に話しかける。

「あの……」

「なかなか連絡が無いな……。通信の感度は最大なんだが……。ゆかりは自分の話を遮るような美鶴の言葉に、また黙り込んでしまっう。」

「……そ、そう言えば、あの森山って子……。寮に1人きりで、大丈夫ですかね。」

「正直を言えば、影時間に絶対安全な場所など無い。だが、ここに連れてくる訳にも、彼女の為だけに1人割く訳にもいかないだろ。」

「そうなんですか……。でも、山岸さんの救出には、こうして全員で……」

言いかけたところで、通信機材からノイズが大分混じった真田の声が聞こえてきた。

『美鶴、聞こえるか？』

「私だ。いま、そちらの位置を確認した。思ったより上だな……。通信がギリギリだ。それより、4人とも無事か？」

美鶴が通信機に向かって話すが、真田の方からのノイズは酷くなるばかりだ。

『……だ、わ……。らな……。』

「明彦！おい！」

やがてノイズで、真田の声は完全に聞こえなくなってしまった。

「……通信圏外とかですか？なんか、心配ですね……。ゆかりが心配そうに言う。」

しかし、この時の2人には分からなかった。タルタロスに向かってくる、2つの大きな気配に……

タルタロス第2ブロック、”奇顔の庭アルカ”。  
そこのあるフロアで、彩音と湊は目を覚ました。

どうやら、学校がタルタロスに変わる際何かの力がかかり、意識を失っていたようだ。

「……姉貴、無事か？」

「何とか。あれ、先輩と順平は……？」

彩音が辺りを見回すが、近くには湊以外誰もいない。

「……はぐれたみたいだな。ちよつと待つてる……」

湊は意識を集中してみる。

「……このフロアには、おそらくいない。山岸さんも、だ。どうやら、3人共上にいるらしいな。」

彩音は湊の報告を聞いて、渡されていた通信機をいじる。

「ダメ、桐条先輩にも繋がらないよ……。」

「目が覚めた？」

二人は突然聞こえた声に後ろを振り返る。

そこには、いつも影時間に現れては謎の言葉を残し去っていく少年がいた。

「え、何でここに……!？」

「君たちの部屋の外で会うのは、初めてだね。」

「……どうしてここにいる。」

湊は油断なく訊く。

「フフ、言ったでしょ。僕はいつでも、君たちの傍に居るってね。」  
そうだった、と二人は思う。

何回か同じ事を訊いたが、毎回同じような答えが返ってくるだけなのだ。

「でも今は、ゆっくり話してられない。今夜、君たちにやってくる試験は、どうも1つじゃないみたいだ。とにかく、急いだ方がいいよ……。」  
「彼女」が待つてる。「

「彼女」……?山岸さんのこと?」

彩音が訊くが、少年は答えない。



「今の君たちには、必要な人だ。じゃ、また会えるといいね。」  
少年は意味深なことを言い、消えた。

「……何者なんだよ、あいつ……」

「……とにかく、今は3人を探さないと。あの子の言う通りだよ。」

彩音の言葉に我に返った湊が、武器を構えなおした。彩音も同じように薙刀を握る手に力をこめる。

その時、ずっと沈黙していた通信機に通信が入った。

『……無事……か？』

「あ、はい！」

彩音は酷いノイズの中の声を何とか聞き取り、返事を返す。

『距離……が遠……く……こちら……から……の……サ』

ポートが……すま……ない……明彦たち……と……

『

そこで通信は唐突に切れた。

「とりあえず、真田先輩や順平と合流するぞ。この階にはいない。

次へ行こう。あいつらには動くなと言っているな。」

湊は周囲の気配に気を配りながら進んでいく。彩音も湊を補佐しながら前へ進んでいく。

『誰……？人、なの……？』

不意に、誰かの声がした。

「……！……この声……恐らく……」

湊がこの声の主をすぐに察した

明らかにこの声は順平や真田のものではない。つまり……

「山岸さん、だよな……？」

「ああ……行くぞ。」

湊は言うつと、目の前に見えた階段に向かって進んで行った。

二人が真田、順平と合流できたのは、元いた階から2階ほど上がった階だった。

「おー、ようやくリーダーと副リーダーのお出ました。心配したぜ・・・たく。」

「こつちもだよ。湊の勘に頼って、何とか合流出来たようなものだし・・・」

「今後は、こういう入り方は無理だな・・・」

「あ、つーかさ！オマエたち、ここ来る途中に”声”聞かなかった？えーと、なんつったらいいか・・・」

「・・・知ってる。おそらく”山岸 風花”の声だろ。」

「誰・・・？人・・・なの？」

湊が言った後すぐ、順平たちの背後から声がした。

「・・・これだろ？」

「つか、後ろからか・・・？」

順平と真田が後ろを振り向く。

そこには、曲がり角からこちらを見る少女がいた。

「あっ・・・」

「”山岸 風花”か？」

「は、はいっ・・・！」

少女は名前を呼ばれて返事をした。

「おおっ、生きてたー！！すげー！！」

「順平、それは失礼だよ。」

彩音が順平の言い草に注意する。しかし順平はお構いなしに続けた。

「もう大丈夫だぜ！オレら、救助隊だからサ！」

「よかったな・・・。俺たちと一緒に来い。」

「ありがとうございます・・・私・・・」

順平と真田の言葉に、風花は安心したようにほっ、と息を吐いた。

「フツ・・・オレの判断は正しかったな。美鶴に連絡を入れておくか。」

そう言っつて真田は通信機を操作し始めた。

その時、湊は背筋が凍るような、嫌な予感を感じる。  
しかし周りの人は何も気づいていないようだ。

「ここ、一体どこなんですか？私、学校にいた筈なのに、なんでこんな……」

「んー……その話は、ちっと長くなんな。戻ってから説明するっす。」

「美鶴、聞こえるか？……やっぱり駄目か。ノイズが酷いな。」

真田は諦めたように通信を切った。

「あ。ケガとか、だいじょぶか？つかここ、化けモン出るだろ？」

「じゃあ、やっぱり……ここ、何か居るんですね……。今のところ、何とか見つからずに済んでますけど……」

「見つからずについて、一度もか？どうやって!？」

真田が風花の言ったことに驚く。

「ええと、何て言ったらいいか……。居場所が、何となく分かるっていうか……」

「分かるって……何だそりゃ？オンナのカンってやつ？」

「……順平、女の勘はそんなところに働かないよ？モノレールのは別だったけど。多分、湊と同じ感じなんじゃないの？」

「……いや、これはどちらかというと……」

「美鶴と同じ力か……。いや、それ以上かも知れない。あいつのペルソナは、本来は戦闘タイプだからな。」

真田が湊の言いたいことを引き継いだ。風花は今真田が言った「ペルソナ」という単語に首をかしげている。

「これを持っていてくれ。」

真田は召喚器を出し、風花に手渡した。

「エッ!?こ、これって、ピストル!？」

「お守りのようなものだ。弾は出ない。」

「お守り……」

風花は召喚器をぎゅっと握った。

「よし、急いで戻るぞ!」

湊の嫌な予感は拭えないまま、4人は真田の後に続いて脱出ポイントを探すために歩き出した。

しばらく歩くと、見晴らしのいい通路に出た。

そこからは、満月が異様なほど大きく輝いて見える。

「月、デカッ！！明るッ！！・・・ってか、こんなキラキラしてたっけかあ？」

順平は月を見ながら言う。普通より高いところにいるせいか、月が近く見えた。

「月の満ち欠けは、シャドウの調子に影響するって説がある。もっとも、人間も同じだがな。」

「ゆかりツチがプリプリしてたのも、お月さんの影響スかねえ？モノレールの時も丸かったし。」

順平のその一言に、真田が反応する。

「ん？・・・前も丸かった？」

「な、なんスか!？」

「おい、4月に寮が襲われた日、月を見たか？」

真田が彩音に訊いた。

「・・・」

「・・・ええ。満月でしたね。」

湊は何も言わない。だが心なしか、肩が少し震えているように彩音は感じた。

それに気づかず、真田はぶつぶつと呟いている。

「今日が6月8日・・・モノレールで戦ったのが5月9日・・・寮の襲撃は4月9日だ！・・・全て満月だ！」

真田は急いで通信機に呼びかける

「美鶴、聞こえるか!？」

「・・・明彦か・・・シャ・・・ウが・・・」

だが通信機からはノイズが酷く、言葉が途切れ途切れにしか聞こえない。

「おい、聞こえているのか？返事をしろ、美鶴！」

『・・・気をつけ・・・』

通信はそこで途切れてしまった。

「美鶴！？おいッ！」

呼びかけるが返事はない。

「・・・湊、さっきからどうしたの？顔色悪いよ？」

「・・・来る・・・！！・・・いや・・・来てる・・・！！」

「・・・なに・・・これ・・・」

風花も何かを感じ取ったようだ。

「今までのより・・・ずっと大きい・・・しかも・・・人を・・・

襲ってる・・・」

「くそっ！！！」

真田の慌てぶりと湊と風花の異変に順平が焦って訊く。

「な、な、なんスかつ！？分かるように説明して下さいよっ！」

「出たんだ！おそらく・・・ヤツらは満月に来るんだ！・・・急ぐぞっ！！！」

真田はそのまま先へと走って行ってしまう。

「ちょ、ちよつとーッ！！！」

「早く行かないと・・・岳羽と先輩が危ないっ！！！」

4人は真田の後を追い、走る。そして脱出ポイントに急いで入った。

タルタロスのエントランスでは、大型シャドウが2体おり、そのうちの1体が美鶴を掴んでいた。

ゆかりは奥の方にしゃがみこんでいる。

「うっくっ・・・」

「コイツッ！攻撃が・・・効かないっ！！！」

そこにターミナルから現れた真田が駆け寄った。

「美鶴！」

「これは・・・！？」

風花も初めて見るシャドウに驚いている。

「真田サン！シャドウの気い逸らさないと！」

「分かつてる！……貴様らの相手はこっちだ！」

「……オベロン！」

突然後ろから電撃が飛んでくる。

真田が振り向くと、召喚器を構えた姿で立つ彩音がいた。

攻撃は効いたらしく、美鶴を捕まえていた方のシャドウが美鶴から手を離す。

美鶴はいきなりシャドウに手を離され、地面に衝突するかと思ったその瞬間……

湊が、美鶴をうまくキャッチした。

湊は急いで後ろに下がり、美鶴を降ろす。

「明彦、気をつける……こいつら……普通の攻撃が効かない。」  
そこに、いきなりエントランスのドアが開く音がした。そして誰かが入って来る。

「ふ……風花……」

現れたのは夏紀だった。

「バカなっ、何故……来た!？」

「まさか……森山さん!？」

その姿を確認した風花が叫ぶ。

「逃げてっ!!ここは危ないからっ!!」

「わ……私、あ、あなたに、謝らなきゃって……」

「……おい！危ねえ!!」

シャドウが入ってきた夏紀の方に狙いを定め、攻撃しよう構えた。

「森山さんッ!……私が……守らなきゃ!」

「山岸さんッ!危ないッ!」

彩音が叫ぶが、風花は森山を守るように前に出て、召喚器を自らのこめかみに当てた。

そして、銃声が鳴る。

「山岸さん……!?」

「ペルソナ……?」

そこにいたのは、目の部分が包帯で覆われていて、ドレスの下の部分が球体になつてゐる女性型のペルソナ。風花のペルソナ、”ルキア”と、その球体の中にある風花だった。

シャドウもいきなりの事に、攻撃するのを躊躇った。

「私……見える……私……あの怪物たちの弱い所……なんとなくだけど、見えます……」

風花が球体の中から言う。

「……思った通りだ。美鶴。バックアップは、彼女が代わる。」しかしそこで、シャドウが風花に向かい攻撃をしようとする。

「させるかっ！」ゾウチヨウテン”!!」

湊がペルソナ、ゾウチヨウテンを呼び出し、危機一髪のところ攻撃を受け止めた。

「こいつらは俺たちで片付ける!!」

「ゆかり! 桐条先輩と山岸さんと森山さんよろしくっ!!」

『指示してください。私が……敵の弱点を調べてみます。』

「……山岸、あの女っぽいほうの弱点調べてくれ!」

『分かりました!』

風花が集中している間に、先ほど美鶴を掴んでいたほうのシャドウに湊が狙いを定める。

「ゾウチヨウテンっ!」

また湊がゾウチヨウテンを呼び出し、ジオを放つ。

美鶴を解放する時に、彩音がオベロンでジオを放っていた。その時は攻撃が通つていたので、もしかしたらと思つたのだ。

案の定、電撃は通つた。そしてそれが弱点だったらしく、シャドウが体勢を崩す。

「ナイス! じゃあ私も! オベロン!」

「行け、ポリデュークス!」

湊の行動を見た彩音と真田も同じく電撃技で攻撃した。シャドウは

ダウンしているため攻撃を避けられず、大ダメージを与えることに成功する。

『弱点、分かりました！女型の方はアルカナ”女帝”、エンプレスです！物理攻撃が弱点のようです！』

「サンキュ！おーし、ヘルメスっ！アサルトダイブ！」

順平が素早くペルソナを召喚する。ヘルメスはすぐエンプレスに向かって突っ込んで行った。

弱点にヒットしたエンプレスが体勢を崩す。

「・・・姉貴。ここは・・・」

湊が彩音を見てにやりと笑う。その意味を察し、彩音は号令をかけた。

「おーっし！全員総攻撃ーっ！！」

その号令で、4人全員が敵をリンチにする。

その総攻撃が終わった時には、男型シャドウの方はもうボロボロになってきていた。

『あ、あのシャドウ・・・えっと、アルカナ”皇帝”のエンペラーですね。大分弱ってきています！エンペラーは魔法攻撃に弱いです！・・・あっ！』

その時、弱っていたエンペラーが最後のあがきとばかりに何かを行った。

『エンペラーの方の弱点が変わりました！今調べます！』

「よし、アナライズ結果が出るまであっちのエンプレスだっけ？を攻撃するよっ！」

彩音が言うつと、早速順平がヘルメス呼び、真田がポリデュークスを呼んだ。

そしてそれぞれスキル、”アサルトダイブ”と”ソニックパンチ”を繰り出す。

エンプレスが倒れたところで、彩音と湊はすぐ息の合った、薙刀と片手剣での攻撃を繰り出した。

「でやああああ！」



「はああああ！」

二人の攻撃はクリティカルヒットし、エンプレスはのたうち回る。

『弱点、出ました！エンペラーは今打撃弱点です！それ以外は無効化されちゃいます！』

「……真田先輩！」

「ああ！美鶴の受けたダメージの分、倍にして返してやるッ！」

そこで真田渾身の右ストレートが、エンペラーを吹っ飛ばした。

「……本日2回目の、」

「総攻撃ッ！！」

そこで全員がまた、エンプレスとエンペラーをボコボコに攻撃しまくり……

ついに、2体は霧散した。

『すごいです……！あんな怪物を……！』

戦闘が終わったことで、ルキアが消えた。

「敵……他に、敵は……」

「もう心配ない。」

まだ敵を探している風花に、真田が声をかけた。

「風……花……あなた……」

「け、怪我は、無い……？」

「う……うん……」

「良かった……」

風花はそう言うと、夏紀の前に倒れこんでしまった。

「風花！？」

「心配ない、疲れが祟っただけだ。」

「……俺たちも倒れたしな。」

「風花……風花、あたし……」

夏紀は泣き出してしまった。

「今の2体のシャドウは、何処から……？」

「外からだ。寮やモノレールに出た時と同じだ……」

ゆかりのディアでダメージは回復した美鶴が言う。

「そうか・・・」

「て言うか森山さん、影時間とかシャドウとか、全部見ちゃって、これから・・・」

「いや、彼女は俺たちとは違う。影時間の嫌な思い出は、記憶に残らない。それに、シャドウの声を聞いた筈が、結局こうして無事である。再び”落ちる”事は、もう無いだろう。」

「でも、それ・・・山岸さんが恩人だった事も忘れちゃうって事ですよね。そんなのって・・・」

「いや・・・そうなつても、案外、大丈夫かも知れない。」

全員の視線が、風花と夏紀に行く。

「ごめん・・・ごめんね・・・風花、ごめんね・・・」

夏紀は泣きじゃくりながら、風花に何度も謝っていた。

「自分がどうすべきだったのか・・・彼女はもう、分かっているよ。うだ。」

「ごめんなさい・・・ううっ・・・わあああ・・・」

結局その日は、何とか夏紀をなだめ、寮に連れて帰った。

風花は念のため、ということと影時間が明けた後に病院に搬送した。しかし、彩音と湊にはまた謎が残っていた。

満月が近づく度に現れる謎の少年。そしてその少年の”試練の警告”。

だがその真実は未だ掴めない・・・

「救出成功、つと。にしてもちよっと危なかったかなあ？」

遙はタルタロスのエントランスを見下ろして言う。

「あの子の索敵能力はなかなかだったしね。ペルソナに目覚めることは想定内だったけど、索敵専門のようだったから焦ったよ。集中されれば見つかったかよかったかもしれないな。でもま、僕の方がそっちの方面では強いしね。でも注意しとかないと。」

遥は踵を返した。

「今夜もお疲れ様、”ケイロン”。」  
「遥がそう言っと、遥のペルソナ”ケイロン”は虚空に溶けて消えた。」

6月8日NO.2 〳?番 女帝&?番 皇帝〳(後書き)

いかがでしたでしょうか？

いやー・・・予想以上に長くなってしまいました。

遥のペルソナの名前、一応出しました。星座とかに詳しい方なら分かるんじゃないでしょうか？

賢者っぽいペルソナ、っていうことで。神話ではまあ、文武両道っぽいようですし外見もこっちの描写とはかなり違うと思います。ですがそこは大目に見てください。これ以外に探した中でじっくり来るものが無かったんです・・・。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

×月×日 く謎の手記(前書き)

また番外編です。

これは短いです。

では、ごんげ。

×月×日 く謎の手記2

ただの実験体にしては、あいつは意志が強い。

他の実験体はどうだ。この研究所での毎日に死んだような目をしてるじゃないか。

だがあいつは違った。ただ1体の成功例は、目にしっかりと光が宿ってやがる。

何があいつをそうさせる？この実験体にとっては地獄にも等しい場所、何の希望を持っている？

俺はそれに興味を持ってしまった。

大した子供<sup>ガキ</sup>だった。

”怪物と友達になった”？”あの子達は何でも自分の言うことを聞いてくれる”？

子供ながらの純粋さでそう言えるのか？あんな地獄<sup>トコ</sup>で純粋さが何で保てる？

いや、もっと別の理由かもしれないな。

あいつは最近3人の実験体と仲良くしているようだな。

まあいくら特別な力を持つてるからって、住む場所は他の半分失敗作と一緒になんだ。

でもそいつらは、半分失敗作の中でもどっちかといえば成功した方か。

何を話してるのか興味はあるが、そういうことは専用のやつに任せよう。

だがどちらかといえば、あいつは成功作の中の失敗作ってトコか？本来ならあれは、もっと攻撃的はずだ。

なら、あいつがイレギュラーなのか？  
でもまあ、今はそれが役に立っているんだから大目に見るか。

やられたな。

あいつは性格上、そんなことをするようには見えなかったんだが・  
でもすぐ捕まったか。

いや、待てよ。何故あいつは捕まった？その気になれば逃げること  
なんて簡単だろうに。

それに、あいつが発見された場所・・・新しく完成した橋だったか。  
何かがそこであったのか？だが外傷などは見当たらない。

・・・謎だ。

あの日からあいつの様子がおかしい。

何か塞ぎこんでるっつーか、落ち込んでるっつーか。

何かこう、間違ったことをしてしまった時のような？後悔？そんな  
感じだ。

こんなことが無かったから、ちょっと不思議だな。

あと、少し思いつめてるようにも見えるんだよな！。何なんだろう。  
でも、あいつにこれからの利用価値なんかあるのかな？

おーおー。大人しいと思ったら派手なことしやがって。

前に仲良かった3人も一緒か。

俺もあの場に居合わせたらやばかったかもな。殺されててもおかし  
くねえ。

ま、俺はあいつの無事を祈っとくと思いますかね。利用なんてする気

ないし。

そういえば、”塔”に近々ご当主とお嬢様が直々に視察に行くとかあいつを元々護衛としてつける気だったらしいが、いなくなっちまったもんはしょうがねえやな。

ま、せいぜい俺は無事を祈っとくぐらいしか出来ねーけど。ってかそればっかだな、俺。

#### 数日前に退職した職員の日記



×月×日 く謎の手記2 (後書き)

いかがでしたでしょうか？

まあ・・・勘のいい方なら誰のことだか分かるでしょうね・・・  
というかあの人以上に当てはまるような人がいないでしょうね。  
とまあ分かる人にはネタバレです。すみません。  
つてあとがきに書いても意味無かったですね・・・。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

6月11日 く風花加入く（前書き）

ナビ役加入です。

春休み終了まであと1週間も無い・・・と少々焦りを感じている今日この頃です。

何で宿題なんてものがあるんだ・・・。

くメインキャラ紹介10く

山岸 風花

月光館学園2年E組所属。

イジメに遭っていたが、そのおかげでペルソナに覚醒した。

ペルソナは索敵に秀でた探知型。戦闘能力はない。

大人しめで、「癒し系」とは順平の談。

では、どうぞ。

## 6月11日　く風花加入く

満月から3日が経った。それでも未だ、風花が目覚めたとは聞いていない。

「山岸さん、大丈夫かな……。他の子は、もう起き出してるんですよ？」

「……。多分大丈夫だろ。外傷も無かったんだし。おおかた、ペルソナ召喚の時の過労と、数日間タルタロスにいたことが原因だろうしな。……。ペルソナ発現させただけで10日寝込んだ僕達が平気だったんだからな。」

「それもそうか……。お見舞い、行っちゃだめかな？」

「……。面会謝絶じゃなきゃいいんじゃないのか？」  
放課後、彩音と湊が教室で話していると、彩音の携帯に1通のメールが入った。

「真田先輩からだ。」

彩音がメールの本文を開く。湊も横から覗き込んだ。

> 山岸風花が、今日にも退院できる見通しだ。  
彼女を交えて話がある。今日は寮に戻り次第、作戦室に集合してくれ。

「山岸さん、目が覚めたんだ！良かった……。！」

彩音が安堵の表情を浮かべる。

「……。ああ。しかも退院……。か。回復してよかったな。」

「私、みんなに伝えてくるね！」

彩音は足取り軽く教室を出て行った。

湊もそれを見送ると、教室を出ようと立ち上がった。

夜。作戦室には特別課外活動部の面々と理事長、風花がいる。

彩音は風花の顔色が良くなっていることに、ほっと息をついた。

「話は聞いているよ。」山岸 風花”君だね。”

「は、はい。」

風花は理事長という人物を前にしてなのか、緊張しているようにも見えた。

「ハハ、そんな緊張しなくていいから。」

幾月もそれに気づいたらしく、笑って言った。

「あ、はい……」

風花の緊張も、少し解けたようだ。そこで幾月は本題に入る。

「みんなも本当にご苦労だったね。山岸君の件、よく突き止めてくれた。あ、そうそう、それとね。例の、意識不明で見つかった女生徒たちは、みんな意識を取り戻したらしい。」

「よかった……」

風花が安心したように言う。自分をいじめてた相手さえも気遣えるのか、と湊は感心した。

「彼女達は3人とともに、警備員が帰る夜中の0時近くを待つて学校に来てたんだ。そして門の前で0時を迎え、影時間に落ち、シャドウに襲われた……。ただ、昔からある怪談と状況が似てたとかで、変な騒ぎになっちゃったようだけどね。」

「まったく……。 ”怨霊”なんて、実際ありっこ無いですから。」

ゆかりが怪談調べの時のことを思い出したのか、やれやれと肩をすくめた。

そこでふと、風花の顔に影が差す。

「私が……悪いんです。」

「……って、なんでそうなるのよ。あなた、被害者でしょ？」

「でも……何日か休んだくらいで、死んでるとか変な噂になっちゃったのは、私のせいだし……。現に、同じく休んでたらしい満嶋くんは何も言われてないし……」

「いや、あのねえ……」

ゆかりは筋違いだと言いたいようだが、うまく言葉に表せないらしい。それを見かねてか、美鶴がゆかりの言葉を引き継いだ。

「君が居なければ、私達は勝てなかったかも知れない。君は、私達の命の恩人だ。だからもつと、自信を持っていい。君には、人の支えになれる特別な力があるんだからな。」

「特別な、力……」

ゆかりがその美鶴の勧誘のしかたに少しだけ顔を歪めたが、一瞬だったので誰も気づく者はいなかった。

「私達は”ペルソナ”と呼んでる。君の能力は、今の私達に必要なものだ。ぜひ、力を貸して欲しい。」

「それって……私が、先輩たちの仲間に……?」

風花の顔に驚きの表情が浮かぶ。

「そうだ。」

「桐条先輩……」

「俺からも、頼む。」

真田も風花に頼みこんだ。

「真田先輩……」

「あのさ、別に強制じゃないから、無理して今決めなくても……ゆかりが言うが、風花は決意した目でゆかりの言葉を遮って言った。

「私、やります。……やらせてください!」

「え、即答? いいの?一緒に戦うなら、この寮に入ってもらおうことになるけど……」

「それは、たぶん大丈夫。どうせ家には、私の居場所は無いし……」

風花の顔に一瞬寂しげな色が浮かんだ。しかしそれもまた、誰にも気づかれなかったようだ。

「ありがとう。協力、心から感謝する。ただ、こつという特別な事情だ。ご両親への説明は、学園がうまく計らおう。」

「はい、ありがとうございます。」

「……いいんですか?こんな簡単に人を巻き込んで……」

ゆかりが怪訝そうな顔で美鶴に聞く。しかし、それに答えたのは風花だった。

「あの、大丈夫ですから、私……。それに、同じ学年の女の子が2人もいるから、その……。嬉しいっていうか……」

「うん、よろしくね！これからは友達だよ？」

「えっ……。？あ……。ありがとう……。」

風花にとって彩音の言葉は予想外だったらしく、風花は驚いてからお礼を言った。

「まあ……。分かんないこととか、何でも聞いてくれていいからさ。」

ゆかりも納得がいかなそうな表情はそのままだが、彩音に続いて言う。

そこで再び理事長が口を開いた。

「ところで、また今月も、例の”普通じゃないシャドウ”が出たね……。何処から現れるのか、とか謎は残るけど、真田くんの予測は恐らく当たりだ。ヤツらは”満月”にやって来る。今後の指針にしてくれていいと思うよ。」

「来月からは、満月が近づいたらご注意くださいね……」

「敵の来訪周期が掴めたというのは、大きなアドバンテージだ。対戦の日取りが決まれば、トレーニングのメニューが組める。」  
順平と真田が好戦的な笑みを浮かべた。

ゆかりはそれを、納得のいかなそうな目で見ていた……。

その日はそれで解散となり、風花は真田と美鶴で送っていくことになった。

「先輩、その前にちゃんとした自己紹介してもいいですか？」

「ん？ああ、そうだな。」

美鶴のOKを得て、まずは彩音から自己紹介が始まった。

「2年F組の有里 彩音ね！名前呼びでいいから。よろしく……」

「……。有里 湊。見てのとおり、彩音は姉貴。よろしく……。」

「同じく2年F組の岳羽です。」

「俺は伊織 順平。このエースだぜ？」

自慢する順平をゆかりが胡散臭そうな目で見る。

「知っていると思うが俺は真田だ。よろしくな。」

「私は桐条 美鶴。生徒会などで知っているだろうが、一応な。この部長をしている。」

「僕は幾月 修司。この学園の理事長兼、特別課外活動部の顧問をしているよ。」

「あ、えつと・・・2年E組、山岸 風花です。これからよろしくお願いします・・・」

風花は軽く頭を下げた。

「・・・楽にしている。誰もここでは、君を責めたりとかはしないから。」

「あ・・・ありがとうございます・・・。えつと、有里くん。」

「だから、敬語は私達にはナシ！いい？」

「・・・うん。あり・・・じゃなかった、彩音ちゃん。」

彩音は満足げに頷いた。

「さて、その辺でいいだろう。山岸には日曜、ここに入寮してもらう。その時に色々聞いてくれ。」

「分かりました！じゃ、風花。またね！」

「！・・・じゃあね。」

山岸は早速名前呼び+呼び捨てで呼ばれたことに驚いたようだったが、すぐ微笑んで軽く手を振った。

6月11日 く風花加入く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ようやく仲間が増えた！これまでは元々いたメンバーが戦線復帰するだけでしたからね・・・。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。



6月12日 く友達く（前書き）

4月に入りました！ということので平成23年度がスタートです。  
つまりリアルP4ですね。主人公の稲羽市来訪は10日後。

今年度もよろしくお願いいたします。

では、ごうげ。

6月12日　〜友達〜

風花の加入から一夜明け、退院した風花は今日から学校に復帰することになった。

しかし風花の所属する2年E組では、色々な噂が飛び交っている。

「ねーねー、聞いた？エコダさ、あいつ”処分”とか受けたらしいよ！」

「マジい！？なんかやったの？」

「知らないけど、イキナリだって。・・・セクハラとか？」

「ハハハ、それ、イテェー！」

特に今の噂は、このクラスの担任である江古田の処分の話が多い。

あのあと、きつちり美鶴が桐条の力を使い江古田に何かをしたらしい。が、内容と原因は特別課外活動部内でも知るものはいない。

「あ、あの・・・お、おはようござ・・・」

風花はまだ少しおどおどしながらも、教室に入る。しかし、

「・・・あ、ユーレイの子だ。」

「やめなつて、ヤバイよ！」

という噂話を聞き、挨拶を途中で止めて俯いてしまった。

その時、今風花が入ってきた方のドアから夏紀が入ってくる。

「風花いる？」

「森山さん・・・」

風花は一瞬びく、となったが、ゆっくり後ろを振り返った。

「ちよつと話あるからさ、廊下行こ？」

「・・・う、うん。分かった・・・」

風花は夏紀に言われるまま、廊下に出た。

内心、風花は怯えっぱなしだ。あの時は何度も謝ってくれたが、少し前までは自分をいじめていた相手。警戒心は消えてくれない。

教室から少し離れたところで夏紀が足を止めて振り返り、話しはじ

めた。

「風花さ、あんた・・・寮に入ったんだって？」

「う、うん・・・」

「相変わらずくつらいの・・・。」

風花が少しだけ悲しそうな顔をした。

「・・・でも、何かあったら相談しなよ。いつでも・・・さ。どうせ頼れる相手も、いないんでしょ？」

その言葉に、風花が俯いていた顔をパツと上げる。その表情には驚きが浮かんでいた。

「森山さん・・・」

「カツタいなー、その呼び方。・・・ナツキでいいから。」

風花はまた少し驚くと、やわらかく微笑んだ。

「ありがと・・・」

遥は自分の席に座っていた。

遥の目は、開いた本には向いていない。廊下の、先ほど夏紀が風花を連れていったほうに向けられていた。

遥が本をパタンと閉じ、口元に笑みを浮かべて見せた。

「・・・よかつたな。」

そのまま、遥は本を机に置き、廊下に出て行った。風花たちとは反対の方向に。

その日の夜、女性陣は風花の部屋の片付けをしていた。

風花が入寮するにあたって空き部屋を覗いたところ、随分と汚れていたのが原因だ。

途中、黒光りする虫ことGが出たが、彩音が喫茶店「シャガール」でのバイトで鍛えられた退治術により退治し、男性陣は出る幕がなかった。

それにより、真田から「Gが出たら召集されるかも」という話を聞

き、ラウンジで待機していた湊が不機嫌そうに部屋に戻って行った姿が目撃されている。

そして片付けも終わり、今日はタルタロスも無しということであらゆることにベッドに入った二人の元に、ある来客が訪れた。

彩音はその気配で目が覚めた。

見れば、いつもの少年がいつもの場所に立っている。

「また一つ試練を乗り越えたね。」

「あれ・・・、満月前じゃないのに来たの？珍しいね。」

彩音が起き上がり、目をこすりながら訊く。

「僕だつてたまにはお喋りに来るさ。ところで、覚えてるかな・・・前に僕が言ったこと。」全てが終わる”って話。」

彩音は4月のことを半分眠ったままの頭で思い出した。

「あれからまた、少し思い出したんだ。たぶん”終わり”は・・・避けて通れない。でもね、不思議なんだ。君たちを見ると、そんなこととは反対の大きな可能性を感じる。現に君たちの”力”・・・前とはだいぶ変わってきてるみたいだしね。」

「力、か。・・・まあ確かに、色んなペルソナ作ってるし・・・」  
彩音も湊も、シャッフルタイムでペルソナを得ては合体を繰り返している。

しかし・・・彩音の頭に”力”ということ少し引つかかるものがあったのだが、何のことだったか思い出せず、結局訊くことは出来なかった。

「ねえ、よかつたら、僕とトモダチになってよ。君たちに、スゴく興味があるんだ・・・どうかな？」

「うん、勿論。」

彩音は即答した。元々こういう性格なのである。

その返事に少年は嬉しそうな顔をする。

「うん、じゃあ今からトモダチだ。」

彩音はそこで、ふと疑問に思ったことを訊く。

「そういえば、君の名前は何ていうの？」

「名前……か。僕の名前は……」ファルロス”。よろしくね。」

「ファルロスかぁ……うん、こっちこそよろしくね。ファルロス！」

彩音はにこつと笑って見せる。

その時、また脳裏にタロットカードが浮かぶのを感じた。

アルカナは”??番 死神”。

謎の少年ファルロスとのコミュニティだ。

「今日はもう遅いから、帰るよ。次に会える日が、今から楽しみだ。ばいばい。」

ファルロスはそう言うと言ってしまった。

「……次に会える日？友達なんだから、別に少し話すくらいなら明日とか明後日とかも来てもいいのにな……？」

彩音はそう呟くと、またベッドの中に戻り、眠ってしまった。

6月12日　く友達く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

風花と夏紀、彩音&湊とファルロスの友情関係の話でした。  
描写はしてないですけど湊も彩音と同じ会話しています。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

6月13日 く湊の力く（前書き）

春休みもあと2日・・・うう、短い（涙）

そういえばペルソナ2罪発売まで2週間切りましたね。  
私も予約済みです。

では、どうぞ。

6月13日 く湊の力く

風花の入寮は、本来ならば日曜の予定だった。しかし、本人たつての希望で今日となったのである。

それに、先ほど二人の携帯にエリザベスとテオドアから連絡が入り、タルタロスの封鎖されていたフロアが解放となったということだったので、早速タルタロスに出撃することとなったのである。

今日からは美鶴も探索チームに入ることになった。美鶴のペルソナ”ペンテシレア”の能力はあくまでも副次的なものに過ぎない。だから元々が索敵タイプの風花にバックアップの役目を引き継いだのだ。

美鶴の武器は片手剣。その中でも、フェンシング部部长ということもあつてか突剣を使用する。

また、鞭の一種でもある鉄鞭を振るうこともある。それを聞いた順平が「おお、女王様・・・」と言い、美鶴に「何か言ったか、伊織？」と目は笑っていない状態で訊かれていた。ということと索敵を始めた矢先・・・である。

『・・・え、あれ？し、死神っ!？』

「何？このフロアには今上がったばかりだし、敵もいる。前みたいなことは・・・」

『違うんです！えっと、その・・・』

美鶴が怪訝そうに問いかける。風花は困ったような、言っていないのか分からないといった感じだった。

「風花？」

『・・・その、有里くんから・・・死神タイプの反応、のようなものが・・・』



「……え？」

言われた湊はぼかんとしている。

「どうということ？」

彩音が風花に訊き返す。

『えっと、何ていうか……死神の雰囲気为重なってる、とでも言えばいいんでしょうか？有里くんの反応も、勿論あるんです。でも、同時に死神の反応もあるっていうか……』

「……湊、死神のアルカナのペルソナ、つけてる？」

「……つけてないし、持ってもいないぞ？」

『あの、そういうのじゃないんです！どのアルカナのペルソナか、っていうのは別の感覚で分かりますから。えっと、うん……』  
風花は必死に言葉を探していた。

「……もしかして、アレ？ほら、この間の……」

『あっ！！皆さん、戦闘態勢に入ってください！前から敵、4体来ますっ！』

風花の焦った声で、とりあえず今のこの話は中断された。

『敵、”傲慢のマーヤ”！疾風属性が弱点です！』

遭遇したシャドウの弱点を即座に見つける風花に感心しながら、みんながそれぞれの武器を構えた。

「ゆかりっ！」

「オツケー！イオっ！！！」

ゆかりは彩音の意図をすぐ理解し、ペルソナを呼び出した。

「マハガルッ！」

イオは疾風属性の全体魔法を敵に向かって放つ。ゆかりが新しく覚えた魔法で、敵を全部まとめて攻撃できる魔法だ。

マハガルは敵全部に直撃し、全部が体勢を崩す。

「よっし、そのまま行くよ！」

彩音の号令で全員が総攻撃をしかける。

『敵の全滅を確認！……ああっ！皆さん避けて！』

「……ッ！」

湊はとつさに前に跳んだ。そのすぐ後に、ガキンツ！と何かが床に叩きつけられる音がする。

後ろを振り返ると、何やら や の形をしたものが床に叩きつけられ、地割れを引き起こしていた。

それを器用にも操っているのは、身体は黒く、顔に赤い仮面をした蛇。それも2体いる。

「どんだけの威力だよ・・・」

順平がそう言うのも、湊は分かる気がした。

『敵、情欲の蛇2体！強敵の増援です！』

「強敵か・・・面白い、やってやる！」

真田が早速敵を殴ろうと近づこうとする。しかし武器を振り回した敵によつて、真田は近寄れない。

「風花！アナライズ！」

『今解析中ですっ！』

言う前にもう風花はアナライズを始めていたらしい。その返事を聞くと、彩音は召喚器をホルスターから引き抜いた。

「フォルトウナ、マハガル！」

彩音はさつきゆかりが使った魔法と同じものをシャドウに浴びせる。しかし、流石に強敵、しかも弱点ではないとくれば与えるダメージは少ない。

「・・・あまり効いてない、か・・・っ!？」

湊は不意に、右目がドクン、と脈打つたように感じた。

『!？』

風花も何かに反応したようだ。

考えて湊は、すぐ結論に至った。

あの時と同じ・・・

そう、かつて死神戦の時に使った力だ。あれがまた、発動しようとしている。

湊は見えないはずの右目でじつとシャドウを見据えた。今は、例えるなら発射準備に入っている砲台のようなもの。

他のメンバーは湊のしようとしていることに気づかず、それぞれの魔法で攻撃しようとしている。

・・・今だ！

瞬間、また湊の右目から禍々しい光が放たれ、シャドウの1体に直撃した。

「コッココ！？」

メンバーの全員が驚く。何せ、今まさに攻撃しようとした敵の内の1体が、いつかのように黒い粒子となって消えていったのだから。みんなが一斉に、湊の方を向く。

湊は右目を、武器を握っていない左手で押さえていた。息も上がっている。

「有里・・・今、一体何を・・・」

『あ・・・敵反応1体消滅！残るは1体です！あと・・・敵の弱点は氷結属性です！』

湊を見ていたメンバーが一斉に、風花の声で我に返る。

「・・・今はこっちが先か！来い、ペンテシレアッ！！」

美鶴が敵の方に向き直り、召喚器をこめかみに当て、引き金を引く。すぐに気高いアマゾネスの女王の名を持つ美鶴のペルソナ、ペンテシレアが現れ、残りのシャドウに向かってブフを放つ。

ブフはシャドウに直撃し、シャドウはダウンした。

「よしっ！一掃する！」

「了解しました！」

美鶴の”総攻撃チャンス”という合図に、彩音がGOサインを出す。すぐ湊を除く全員が総攻撃を始めた。湊はさっきの力の反動か、まだ荒い息を整えている。

結果として強敵に勝利したメンバーが、湊の元へ集まった。

「・・・ねえ、さっきの力は何？前はアレをやって倒れたよね？何でまた使ったの？」

彩音は続けざまに湊に問いかける。他の面々も、心なしか厳しい目で湊を見ているように感じた。

湊はその迫力に、彩音を怒らせてしまったと内心怯えていた。

『・・・あの、ちよっといいですか？そこだと、いつシャドウが出てもおかしくないですから、一旦エントランスに戻ってはどのようにか？』

風花の提案に、彩音はそれもそうだと思い、脱出ポイントから戻ることにした。

エントランスには、湊にとっては痛い沈黙が流れていた。

無言で湊を見つめる彩音。その視線に気まじくなり、目をそらす湊。

「・・・あの、さっきの現象をちよっと調べてみたんですが・・・」  
風花がその沈黙を破った。

「その、戦闘の前に言った話、覚えてますよね？有里くんに、死神の雰囲気为重なってるって。実は、あの現象が起こったとき、本当に死神かと勘違いしてしまうほど死神の反応が強くなったんです。だから、それに関係してるんじゃないかと・・・」

「死神の反応が強くなった？どういうことだ？」

美鶴が頭をひねる。

「大体、何で湊に死神の雰囲気が重なってるのか、っていうことも分かんないっスよね？」

「確かに、言われてみれば・・・」  
全員が考え込む。

「・・・その・・・姉貴？」

湊が恐る恐る黙ったままの彩音に声をかける。

「・・・前回私がどれだけ心配したか、分かってる？」

湊は何も言えなくなる。

「それなのにまた無茶して・・・」

「・・・」

「今回は倒れなかったからまだあれだったけど・・・もうあんな無

茶はしないで。分かった？」

「・・・ああ。」

他のメンバーも、その様子を黙って見つめていた。

「・・・で、何だっけ？湊に死神の反応が重なってた、って話だったっけ？」

彩音は他のメンバーの方を振り向いた。

「あ、うん。」

風花から話を聞いた彩音はうーんと考え込んだ。

「死神っていうと・・・思い出すのは4月しかないんだけど、あれは私だったし・・・」

4月といえば彩音が覚醒して、ペルソナを暴走させた時のことだ。

「・・・あー、分かんない！風花、あとで湊をアナライズしてくれない？」

「あ、なるほど・・・原因を探るわけね。それなら・・・」

「・・・その、言いにくいんですけど・・・それは一応やってみたんです。無断でやってごめんなさい。でも、これといった異常は見られなかったので・・・」

ゆかりの言葉を遮って、風花が謝った。

「とりあえず、有里のその力。色々気になることはあるがまた後で考えよう。あまりにも分かっていることが少ない。で、そうだな・・・

・”死神の眼差し”でも呼んでおくか。」

「・・・死神の、眼差し・・・」

湊はぽつりと、美鶴が名づけたその力の名前を呟いた。

6月13日 く湊の力く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

力の名前登場！

最近”コードギアス”にハマってましてね。そこであの力を考え付いたんですよ。”ギアス”という名前の力があって、主人公の場合には相手の目を見て命令すると1回だけ何でも言うことを聞かせられるっていう力なんですけれども。

その時、目に鳥のような紋章が浮かんで、それが飛び立って相手の目に入るっていう表現ですね。それで思いついたんです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

6月15日 く依頼その2 (前書き)

更新、遅くなって申し訳ありませんでした・・・。

言い訳を言わせていたくださら、小説を書くためにやっているP3 Pのタルタロスで、何回も何回も戦闘不能でやり直しになっていたのです・・・。

マニアクス難しすぎ・・・。

今回は依頼のNO.57「巖戸台に出かけたい。」ですね。

前回の依頼の話と同じく、また後で男性主人公のエリザベス編見て書き直すかもしれません。と言っても、まだ全然先になりそうですが・・・。

では、ごじげ。

6月15日 く依頼その2

また今日も、エリザベスとテオドアから受けた依頼を達成するため二人はベルベツトルームに訪れていた。

今回案内して欲しいと頼まれた場所は巖戸台駅前商店街。

早速二人はエリザベスとテオドアを連れ、巖戸台へと向かった。

「・・・何やってんだ・・・」

早速、辰巳ポートアイランド駅でそれは起きた。

駅の”上り”エスカレーターにエリザベスが乗っている。しかし、4人は駅前に行きたいので”下り”のエスカレーターに乗らないと本来はいけなはずである。

ちなみにテオドアはエスカレーターの乗るタイミングがうまくつかめないらしく、乗ろうとしない。

「私は今、この”行く手に刃向かい、流れてくる階段”に挑戦中なのでございます。どうかお止めなさいください。」

「・・・それは下りだし、試練でもトレーニングマシンでもないから。」

「あー・・・テオ、一緒に乗ろうか？」

「そ、それはいけません！」

エリザベスは上りエスカレーターを駆け下りており、テオドアは彩音のエスコートを断り、自分で何とかエスカレーターに乗った。

「・・・人がいなかったからラッキーなもの・・・。お前の姉君は本当にどうにかならないのか？」

湊がエスカレーターを逆走するエリザベスを呆れた目で見ながらテオドアに聞いた。

「そのご質問は2度目ですが・・・私では、どうすることもできませんね。姉上には、私は頭が上がらないのですよ・・・。前だってきな粉が好きだからと言ってたくさんのきな粉料理を・・・」



そこまで言ったところで、テオドアの顔が少し青くなった。まるで美鶴から「処刑」という言葉を聞いた時の真田の顔のようだ、と二人は思う。

「あ、もう降りるよ。」

二人はスムーズにエスカレーターから降りた。テオドアも少々ぎこちないながらも降りる。

エリザベスもちゃんと降りれたようだ。

そこに、偶然一組の親子が通りかかった。

しかしよくよく聞いてみれば、エリザベスは”上り”のエスカレーターに乗ろうとした親子に、逆だと注意している。それを聞いた湊は慌ててエリザベスの元へ行き、親子に謝って冷や汗をかきながら戻ってきた。

「・・・あれは何でしょう？」

エリザベスは彩音とテオドアのところに戻ってくるなり、駅前の工事中のマンホールを指差した。今テオドアが言ったのも、そのマンホールのことらしい。

「足元にお気をつけ下さい！・・・この先に”落とし穴”がござい  
ます。」

「・・・落とし穴？」

湊はまさかと思いつつ、マンホールを指差す。

「その通りでございます。目を引く看板で困んだうえ、”立ち入り禁止”の文字・・・。ですが、人は往々に、禁じられたものほど触れてみたくなる・・・。落とし穴は隠すものという常識を逆手に取った、高度なトラップでございます・・・。」

いや絶対そんなトラップなどというものではないのだが、エリザベスはそう確信しているようだった。

「流れる足場に加えて、心理トラップを組み合わせた落とし穴・・・。街の治安を守るとは、かくも大変なことなのでございますね・・・。私、胸を打たれております。」

エリザベスは一人で納得している。

湊はもう訂正しても仕方ないんじゃないかと思い、訂正することを放棄した。

蔵戸台商店街へと、一行は進む。

「ここが、”商店街”ですか……。随分、賑やかですね。」  
テオドアは辺りをきよるきよると見回している。

「これは……。！？この、かぐわしい香りは、まさか……。！」  
エリザベスが何かに反応する。

「あっ……。おい……。ったく、今日のエリザベスは何かご機嫌なようだな……。」

「はっ、まさか姉上はこの匂いに？私も興味がございます。」  
テオドアもエリザベスの後を追って行った。

「テオもだよ、湊。えーつと……。あ、たこ焼き屋か。」  
二人は苦笑しあつと、エリザベスとテオドアの後を追う。

「……。はあ、驚いたわ……。この具のヒミツ、臭いだけで分かるんか？姉ちゃんたち、伊達にオモイ格好しとらんな。ま、たこ焼き屋はタコ以外焼いたらあかんなんて法律はあらへん。どや、ちいと買ったつてや。ほつぺた落つこちてまうでえー？」

エリザベスとテオドアは、たこ焼き屋の店主と話していた。

ここのたこ焼き屋「オクトパシー」には、たこ焼きの中身がたこではなく別のもの、という都市伝説的な噂がある。しかもその材料は分かっていない。

どうやらその材料を2人は当ててしまったようだ。二人は、もうちよつと早く追いかけておけばよかった、と内心思った。

当の2人は、噂など勿論知らない。別のことで驚いているようだ。

「ほつぺたが落ちる」……。それは……。非常事態じゃないか……。！」

「ほつぺたが落ちる”料理……。！……。ぜひとも体験してみてください存じます。」

「あの、お2人さん？それって、ものの例えなんだけど……。」

彩音が一応補足で説明をするが、エリザベスはそれは耳に入っていないかったようだ。テオドアは、「し、知ってますよ」と慌てて言っている。

「・・・2人とも、食べるか？」

湊は既に、エリザベスにせがまれてたこ焼きを2パック買っていた。そのうちの1つを。彩音に渡す。

早速ベンチに座り、4人はたこ焼きを一口食べた。

「この独特の食感は・・・」アレ・・・よもや食材として出会う時が来るとは・・・」

「この食感は、間違いなく・・・」

「（だからそれが気になるんだって！）」

たこ焼きの中身に確信を得たらしい2人の様子に、中身が何か知らない彩音と湊は同時に思った。

「・・・その中身は？」

ついに湊が、2人に聞いた。

「知らない方がよい事もある」。そう、教えられていますので・・・」

「テオの言うとおりでございます。」

テオドア、エリザベスの順に言ったその言葉に、二人は更に中身の秘密が知りたくなるのだった。

そのとき、テオドアが彩音のほっぺたをつねり、エリザベスは湊の顔をまじまじと覗き込んだ。

「え、何!？」

「・・・僕の顔に、何かついてるか？」

エリザベスとテオドアは、二人のその様子に安心したようだった。

「貴方も、変わらないようですね。」

「見た感じでは、何も変化はありませんね。」

「・・・だから、ものの例えだつてさつき言っただろ。」

湊は若干呆れたが、それでもあまり悪い気はしなかった。

「ちよつと、今2パック買ってくれた学生さん!これ、オマケや。」

そっちの兄ちゃんと姉ちゃんにあげたって？4人分、今丁度無いねん。」

湊はたこ焼き屋の店主に呼び止められ、ストラップを2つ受け取った。

「・・・だそうだ。」

湊はエリザベスとテオドアに1つずつ、ストラップを渡す。

「まあ！可愛いストラップ、ありがとございます。早速コレクションの1つに加えさせていただきます。」

エリザベスとテオドアは嬉しそうにそのストラップを受け取った。

2人のその顔を見て、彩音と湊はこの2人と散策するのみなかなか悪くない、と思った。

「・・・だがしかし、今の二人には、この後の地獄など知るよしもない。」

「これでこの辺りの料理は、全て食べ尽くしたようでございますね。・・・あの、どうかなさいましたか？顔色が優れないようですが。」

エリザベスが言った通り、二人の顔色は悪い。それもそのはずである。

二人はエリザベスに言われるまま、ここ神戸台駅前商店街のファーストフード店を制覇したのである。

最初のたこ焼きに続き、まんがの星のドリンクバー、ワイルダック・バーガーのハンバーガー、はがくれのラーメン、小豆あらいのあんみつ、牛専科海牛の牛丼、わかつの定食。

エリザベスは平然と全部平らげていた。テオドアは流石に、小豆あらいの後あたりからドリンクだけを注文していたが。

あの細い体のどこにあんな量の食べ物が入るのか、二人には謎だった。

ちなみに二人ははがくれのラーメンでギブアップしていたが、エリザベスの勧めで少しだけ他の店でも食べたりしている。そのため満腹すぎるほどに二人は満腹だった。

「・・・あんな量、何で食べられるんだ・・・？」

湊の咳きは、エリザベスには聞こえなかつたらしい。

「ともあれ、今日は文字通りの”美味しい”体験をありがとうございました。」

「では、戻りましょうか。」

エリザベスが言ったあと、二人はエリザベスとテオドアをベルベックトルームに送り、報酬を貰ったあとすぐ寮に戻った。

6月15日 く依頼その2く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

うわ・・・なんかグダグダですね、これ（汗）。

更新遅れといてこれとは、読んで下さった皆様に申し訳ない・・・。  
後で直します；

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

6 / 5 加筆修正

6月20日 く忠犬と分類く（前書き）

PSP版P2罪発売まであと5日！！楽しみです！

でも・・・これから大会などに向けて部活の時間が増え、暇がなくなっちゃうんですよねえく（泣）

では、どうぞ。

6月20日 く忠犬と分類く

放課後。珍しいことに、彩音たちの教室に美鶴がやって来た。

「ちよつといいか。今夜、急に理事長が見える事になった。帰り次第、4階の部屋に集合してくれ。」

「あ、はい・・・分かりました。」

「じゃあ、伝えたぞ。」

美鶴はまた、前回ののように足早に教室を出て行く。

「今日は生徒会はないはずだけど・・・やっぱり忙しいのかな？」

「さあ？理事長を迎える準備、とかいうわけでもないだろうし。」

彩音とゆかりは美鶴が出て行った扉の方を不思議そうに眺めた。

「まあ、先輩もああ言ってたことだし、早く帰らない？」

「うん、そうだね。こら湊、帰るから起きなさい！」

彩音はそう言って、鞆の角で湊の頭を小突く。

今日が1週間の最後である土曜日ということもあるからだろうか、湊はHR中もぐっすり寝ていた。

「・・・痛って・・・」

湊は起こされ方に少々不満を抱きつつ、鞆を持って席を立った。

帰り道、寮の玄関前。

「あ、風花！早いじゃん。」

先に帰っていたらしい風花が、なにやらしゃがみこんで何かをしていた。

彩音が声をかけると、風花が振り返る。その先にいたのは、白い毛に赤い目が特徴の犬だった。

「あ、おかえりなさい！」

「・・・山岸、その犬は？」

「コロマルって言って、神社に住んでるワンちゃんだよ。ほら、コロちゃん、お手ー。」



「ワン。」

コロマルは差し出された風花の手に、前足をちょこんと乗せた。

「おお、したした！賢いぞお。」

ゆかりはお手をしたコロマルの頭を撫でた。二人もコロマルのそばに行き、コロマルを撫でる。

「ほら、コロちゃん。ごあいさつ、できるかな？」

「ワフッ！」

風花が言っていると、コロマルは二人の足下に擦り寄ってくる。

「わあ、可愛い！」

「・・・山岸、コロマルは神社に住んでるって言ったけど・・・」

「うん。いつもは神社の階段のトコにいて、狛犬みたいにじっとしてるんだけど。」

「・・・へえ。」

湊はもう一度コロマルを撫でる。コロマルは気持ちよさそうに、されるがままになっていた。

「・・・ふうん、この犬、相変わらず独りで散歩してんのねえ。」

そこに、おばさんが通りがかる。そのおばさんは、コロマルを見るところつちに近づいてきた。

「独りで散歩？」

ゆかりがおばさんに聞き返した。確かに、コロマルの傍には飼い主らしき人はいない。彩音が風花に視線を向けると、風花も意味を察したらしく首を横に振った。

「ああ、その犬はね、長鳴神社の神主さんが可愛がってた犬なのよお。この道は、夕方に必ず散歩するお決まりの道でさあ。」

「だから、ここにいたんだ・・・」

「まあ、生前の話だけだねえ。」

「え・・・生前？」

おばさんの言ったことに、4人が反応した。

「あらやだ、聞きたい？そうねえ・・・半年くらい前だったかしらねえ。」

おばさんは話し出した。

「神主さん、お散歩中に事故で死んじゃってね。それからっていうもの、その犬・・・決まった道を散歩する以外、事故のあった場所から動かないのよねえ。無理にどこかに連れてくわけにもねえ。だって、この間も、うちの息子がね・・・」

おばさんの話はコロマルの話から脱線し、延々と続いていた。もう4人はおばさんの話など聞いていない。

「あらいけない、こんな時間!? 息子が帰ってきちゃうわ。」

おばさんは話をやめると、そそくさと去って行ってしまった。

「・・・ようやく行ったか。」

湊はおばさんのマシンガントークに呆れ返っている。もちろん、湊も話の内容の後半は全く聞いていなかったが。

女子3人はおばさんの話など途中から完全にスルーしていた。いや、もうおばさんという存在すら無視していたのかもしれない。

「お前、忠犬なんだ! 泣かせるじゃない、この!」

「すごいよ、コロマル! 忠犬八千公にも負けないって!」

彩音とゆかりがコロマルを褒めているとき、風花が何かに気づいたようにコロマルを見た。

「あれ? この・・・」

「・・・山岸も感じたか?」

湊も何かを感じたようだ。

「どしたの?」

その様子を見たゆかりが2人に訊く。

「・・・うつん、ごめん。気のせいだったみたい・・・」

「?」

何が気のせいだったのか、とゆかりは思ったが、湊と風花は何も言わない。

「あ、それより今日って確か、理事長が来るって・・・。私達も、そろそろ中に入ろう。」

風花が話を変えた。

「・・・そだね。コロちゃん、またねー。」  
「ワンッ！」

「たまに私達も神社は行くから、その時に会ったらまた遊ぼうね！」  
彩音が手を振ると、またコロマルは律儀に「ワンッ！」と返事をし  
てから、神社の方向に歩いて行った。

しばらくして、寮の作戦室。そこには既に、特別課外活動部全員と  
理事長が座っていた。

「や、どうもどうも。調べ物に答えが出そうなんで、いち早く伝え  
ようと思ってるね。例の”満月に出るシャドウ”の件だよ。ちょっと  
面倒なんだが、良く聞いて欲しい。」

幾月はそう話を切り出した。そして続ける。

「・・・実はシャドウは、その性質によって12のカテゴリに分け  
られる。この事は、だいぶ前から分かってる。生物学の、”何科  
”や”何目”みたいなもんだ。・・・で、これまで出現したシャド  
ウをこれに分類してみると・・・実に興味深い！これまでのシャド  
ウ4体は、現れた順に、カテゴリの？から？だと分かったんだよ！  
見た目はたいそう特別だったが、連中にもこの分類は当てはまるら  
しい。」

幾月の目が輝いているように見える。

「それって、なんか凄いことなんスか？」

幾月の言いたいことが分からなかった順平が幾月に訊き返す。その  
順平とは反対に、風花ははっとしていた。

「そうか・・・つまり、大きなシャドウは全部で12体いて・・・  
残りが、あと8体ってことですね。」

「さすが、山岸君！飲み込みがはやいんだから。」

「・・・へえ、そうなんスか？実際、シャドウって何がしたいんス  
かね。」

順平はふと疑問を口にした。

「……いい質問だね。実は”目的”が、よく分かっているんだよ。連中は獲物を殺さずに”精神を喰らう”。”捕食”には違いないが……生き物のようにただ繁殖するのが目的なら、遠回りすぎる。シャドウは”総体”としては何を目指す存在なのか……その辺は研究中なんだ。」

「……面白いですね。ただ、シャドウが何であっても、残りも全部倒すだけのことです。」

「……そうだな。連中の目的が何であれ、全て倒すしか、今は対処のしようが無い。」

やはり、と言うべきか好戦的な真田に、珍しく美鶴が同意した。

しかし、ゆかりは憂鬱そうな顔になっている。

「あと、8体か……相当だな、それ……」

「データでは、来るたびに強くなっています。こちらも力をつけないと……」

「なんとかするさ。……時間は充分ある。」

そこでゆかりが、ぼつりとあることを呟いた。

「……タルタロスか。何で、あんなものがあるんだろ……」

そのゆかりの呟きに、美鶴が後悔のような、複雑そうな表情で俯いてしまった。

その様子に気づいたゆかりと彩音が、不思議そうに首をかしげる。

「……あの、理事長。質問があるんですけど。」

「うん？何だい？」

そこで今まで黙っていた湊が質問する。

「……変なこと訊くようで悪いですが……どうして大型シャドウが全部で12体って分かるんですか？」

「……どういう事だい？」

幾月が若干怪訝そうな顔になる。

「いや……シャドウって意味分からない存在って、今も言っていないですか。カテゴリや行動は分かっているけど、目的は不明。・

・なら、1つのカテゴリのシャドウが2体現れないと、どうして

「言えるのかなと。」

「・・・フム。成る程ね。だが今のところ、カテゴリごとに順番どおり、1体ずつしか現れていない。そこから考えたんだけど・・・」

「・・・予想外の行動を取るのがシャドウですよ。モノレールに乗っ取ったり、山岸の時にいじめっ子を1人ずつ喰らってったり。

断言できませんよ。それに・・・分類的には、アレはどれなんです？」

「アレ？」

「・・・あ。」

「彩音はすぐそこに行き着いたようだ。」

「そっか・・・タルタロスの中に出てきた、”刈り取るもの”！」

「・・・！」

幾月の表情が驚きに染まった。

「・・・風花、あれの分類・・・アルカナは？」

「・・・えっと・・・」

「風花は少し黙ってしまった。確かにあの場でアナライズをしていたのが風花ではなかったのだから、当然と言えば当然だろう。」

「・・・”死神”だ。」

美鶴が助け舟を出す。

「あ・・・ああ、あれについてはこちらにも研究中なんだ。何せ、出現条件が”タルタロスの1つのフロアに長く留まっている”とか”敵が全くいないフロアで少し待つ”とかだからね。サンプルが少なく、分かっていることは少ないんだ。」

「幾月は何故か、少し動揺しているように見えた。」

「・・・そうですか。でも、警戒はしておいた方がよさそうですね。」

「湊は幾月の態度が少し気にかかったが、あえてスルーし、話を終わらせた。」

6月20日 く忠犬と分類く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

幾月の目的に微妙に感づかせてみたり。

でも・・・すみません。私、ああいう言葉のやり取りというか、腹の探り合いみたいな感じの駆け引きが苦手です・・・。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

6月22日　く復讐代行く（前書き）

ストレガ登場、ですね。個人的にはあまり好きじゃない連中・・・  
幾月ほどではありませんが。チドリは別にして。

では、どうぞ。

6月22日　〜復讐代行〜

影時間。ポートアイランド駅の裏路地に、1つの棺桶が立っている。もちろん、これは本物ではなく、影時間のせいで象徴化した人間なのだが。

その時、棺が光ったかと思うと、象徴化した人間だった少年が少年の姿に戻った。

普通ならばそんなことは有り得ない、とされてきた。

シャドウは影時間に”生身”でいる人間を襲う。象徴化している人間は襲わないはずだった。

その”生身”でいる人間もまた、シャドウが影時間に落とす。

だがそうだとしても、近くにシャドウの姿は見られない。それに加え、その少年は声など聞いてはいない。

「あ……れ……?……なんだ……?俺、何して……」

少年は辺りを見回す。しかしそこは、少年が知る路地裏とは全然違った場所だった。

夜空は緑色、それにところどころにある血のような赤い液体。そして棺桶。

それだけでも軽くパニックに陥っている少年に、また更に恐怖を駆り立てる存在が現れた。

「くんばんは……」

「……!？」

少年はすぐ声のした方に振り返った。

そこには、異様な3人組がいた。

1人は上半身が裸だ。しかも、両腕にはタトゥーがびっしりあり、ズボンのベルトのところには大型拳銃が挟まれている。警察に見つ



かれば、即逮捕されてしましそうな格好だった。

もう1人は眼鏡をかけており、なにやら大きめのトランクを持っている。そして手で、ピンのついたボールのようなものを弄っていた。この3人の中では1番まともな格好に見える。

最後の1人は、この3人組唯一の少女だった。だがもう6月だというのに、暑そうなドレス姿だ。ゴシックロリータ、略してゴスロリと呼ばれる服だ。さらに頭には、まるで剣が刺さっているのではないかと錯覚してしまうヘッドドレスをしている。

「驚きましたか？しかしここは、本当は誰もが毎晩訪れている世界なのですよ。」

タトゥーの人物が言う。

「な・・・なに言ってたんだ？アンタ達、誰だよ？」

少年は目の前も3人に怯えていた。こいつらは、只者じゃない。そう少年の勘が告げていた。

「・・・」

「自分で名乗ってからが筋やろ。コレ見てみい。」

ドレスの少女は無表情で少年を見ていた。そして眼鏡の人物が、1枚の書類を少年に見せた。

「住所、氏名、年齢。職業、もろもろ・・・オマエで間違いないか？」

その紙には、少年の個人情報の詳細までしっかりと書かれていた。

「な・・・なんだよこの紙？どっから持ってきたんだよ！？」

少年は動揺した。なぜ初対面のヤツが、俺のことを知っている？いや、それより・・・コイツらは一体何だ？

「お前を恨んどるヤツがおんねや。でもって”復讐”を頼まれとる。」

「は・・・復讐！？なんだそりゃ！？恨んでるって・・・誰だよ！？」

「そら言わん約束や。わしら”代理人”やさかいな。」

「”代理人”・・・？」

そこまで言つて、少年の頭にある1つの名前が浮かんだ。

「ま、まさか・・・ネットで、妙な噂んなってる・・・そんな・・・あんなもんが、マ、マジに・・・？」

復讐依頼サイト。ネット上で今噂になっているもので、復讐したい人物を書き込むとその相手に復讐してくれるというサイトだ。絶対に足がつかず、バレることはないという。

「もう、よろしいですか？」

タトウーの人物がベルトから銃を抜き、少年に銃口を向ける。

その銃を見た少年が震えだした。

「ま・・・待てよ・・・お、俺、何もしてねーよ!?つか、何の復讐だよ!!何したってんだよ!!」

少年がわめくように言った。しかし、タトウーの人物が銃を降ろすことはない。

「さて・・・それは私たちには分かりません。あなたが自覚している悪意と、相手を感じている悪意とは無関係・・・人はみな、聞きたいように聞き、信じたいことだけ信じるものです。」

タトウーの人物が1歩前に進み出る。それを見た少年は、震える足で何とか後ずさりをした。

「い、いやだ・・・来るな・・・来るなあああ!!」

少年は何とか3人組から逃れようと踵を返し走り出す。

「素晴らしいですよ、その声!その感情こそが重要なのです!」

ドレスの少女が目をそむける。そして、タトウーの人物は躊躇い無く、

引き金を、引いた。

大きな発砲音が裏路地に響く。

そして、弾丸が人体を貫く。その弾丸は正確に逃げた少年の背中を貫いていた。

鮮血が舞う。そして、力を失った少年の体は、どさりと地面に崩れ落ちた。

「・・・まだ死んでない・・・」

ずっと黙っていたドレスの少女が呟くように言った。

「どうでもええて・・・わしら別に、復讐が果たせればそれでええんや。それに、どうせ何や他の事件に置き換わって記憶される。」  
影時間にあつた事故などは、別の事件、例えば通り魔などに置き換わって記憶されるのが普通だった。

特別課外活動部ではこれを”補正がかかる”とも言う。

「・・・予定がないのなら、帰りましょう。少し、疲れました・・・」

タトウーの人物がまだ熱いままだろう銃を、ベルトに戻した。

そして3人は踵を返し、もと来た道に戻っていった。

「お仕事”お疲れ様。”」

路地を出てすぐのところ、小柄な人物が腕を組み、壁によりかかって立っていた。

その人物の皮肉がこめられている言葉に、3人がそちらを見た。

「これはこれは・・・見ていたのですか？」

「盗み聞きとは嫌な趣味やなあ。」

タトウーの人物と眼鏡の人物が言う。眼鏡の人物の言葉もまた、多量なりとも皮肉を含んでいた。

「・・・また・・・」

ドレスの少女も呟いて少し俯いた。その表情は無表情だが、どこか悔しそうに見える。

「まあ・・・ね。」

小柄な人物は姿勢を崩さずに答えた。

「・・・前に言ったこと、受けてもらえる気にはなりませんか。」

「やめとくよ。僕は見るだけなんだ。それに、僕が入ったらその子の役目がなくなっちゃうだろう？」

小柄な人物は、ドレスの少女を見ていた。

「そんな事はありませんが・・・まあいいでしょう。私達はいつでもあなたを歓迎しますよ。・・・行きましょう。」  
「タトゥーの人物はあっさりと引き下がり、そのまま2人を連れて去って行った。」

残された人物も、3人の姿が完全に消えたことを確認すると、3人が去った方向とは別方向に去って行った。

6月22日　く復讐代行く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回はまあ・・・珍しく主人公ズが出ず、ストレガオンリーの話になりました。

最後に出てきた人物は・・・言わなくても分かりますよね（笑）

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

6月23日 く真田と荒垣く（前書き）

ついに発売！「ペルソナ2 罪」！！

早速プレイしています。PS版の攻略本見つっ（笑）

でも、そんなに進んでいるわけではないです。イベントの度に色んなところ回って、パーティーメンバーや街の人の話聞いているので（笑）あとカジノにはまったり。

では、どうぞ。

6月23日　〜真田と荒垣〜

「・・・あれ？真田先輩・・・？」

湊と下校途中の彩音が厳戸台駅前商店街を通った時、ちょうどはがくれに入ってしまった見慣れた先輩の影を見つけた。

「牛丼だけじゃなくラーメンも好きなのかな？」

「・・・さあな。何にせよ、健康にはよくないと思うけどな。」

「ああ・・・確かに。」

彩音は寮での真田の様子を思い浮かべて苦笑する。

真田はいつも海牛の牛丼（大盛り）の上にプロテインをかけて食べている。プロテイン飲料を飲みつつ食べていることもあるが、周りから見ればどちらも出来れば見たくない光景だった。

でも二人が入寮してもう2ヶ月は経っているので、慣れたくなくても慣れてしまったのだが。

「先輩、ボクサーなんだよね？あれできちんと栄養管理出来てるのかな？あ・・・いや、出来てるわけないね。」

「・・・それでよく体を壊さないもんだ・・・。ボクシングでは16戦無敗の王者、夜はタルタロスにも行ってるっていうのに。」

二人はそんな他愛もない話をしながら、寮に向かって歩いていく。もう真田の方には注意は向いていなかった。

真田がはがくれに入ると、目当ての人物を向こうに見つけ、すぐその人物の隣に座った。

「へーい、お客さん、1名様で？」

「こいつと同じのを。」

真田は注文を取りに来た店員に、隣の人物が食べているラーメンを指差しながら注文した。

「・・・あ？」

隣に座っていた人物　荒垣が一旦箸を止め、真田の方に向いた。

「ヘイまいどっ！特製1丁〜！」

店が厨房に戻っていくのを確認すると、真田は荒垣の食べているラーメンに目を向けた。

荒垣が食べていて、真田も注文したのは”特製”というラーメンだ。過去、彩音と湊も順平とクラスメイトの友近と食べに来たときに食べたものでもある。

「またそれか。・・・よく飽きもせず同じ物を食えるな。」

「うるせえ。てめえの牛丼だって同じようなモンだろうが。メシとプロテインを並べて食う野郎に言われたくねえぜ。」

「フン・・・」

いつもならここでプロテインについて語りだす真田だが、鼻を鳴らすだけにとどめた。

そこに、真田のラーメンが運ばれてくる。荒垣も食べるのを再開した。

「ヘイ、”特製”お待ちっ！あ、ドンブリ熱いから気をつけてっ！」

真田も割り箸を割り、食べ始めた。しかし、食べようとした時にスプーンが思いのほか熱かったらしく、少しだけ顔をゆがめる。

しばらく、2人が麺をすすする音だけが響いた。

「・・・まだ迷ってるのか。」

「・・・そういう話かよ。」

真田の話の展開が読めたのか、荒垣は呆れ顔になる。だが真田はそれを気に留めることなく話を続けた。

「今年になって、新人が一気に5人加わった。俺たちの活動は、お前が居た頃とは様変わりしてる。」

「興味ねえな。」

荒垣は真田の話を一蹴した。

「戻って来い、シンジ。その”力”・・・無駄にするな。」

「無駄でいいんだ。」

「シンジ！」



真田が荒垣の方を振り向くが、荒垣は拒絶し続ける。

「俺は、もう”力”を捨てたんだ。戻る気はない。」

「またそれか。いつまで縛られてる。いいかげん忘れろ、過ぎた事だ。」

「フン・・・過去に縛られてんのはテメエも同じだろ。」

話は堂々巡りになっていた。戻れと言う真田に、それを断り続ける荒垣。

しかし話はいつしか過去の話になっていた。

「なに？」

「同類なんだよ。俺も・・・テメエもな。」

そう言うと、荒垣は箸をテーブルに置き、代金を置いて席を立ち、店を出て行ってしまった。

「あっ・・・おい、シンジ！」

はぐくれの中には、真田の悔しそうな姿だけが残った。

6月23日 く真田と荒垣く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

荒垣先輩・・・やっぱりカッコ良いなあと書いてて思います。

1週目で恋人になれなかったことをあれほど悔やんだコミュは無い・  
・・!

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

6月24日 く遙と真田く（前書き）

ペル2罪にハマった・・・。

もうちょっとで淳くん救出だ！

では、ごんげ。

6月24日　く遥と真田く

元々、遥は特別課外活動部の先輩たちには会わないようにしていた。荒垣は今は特別課外活動部から抜けているから例外として、だ。

理由は簡単。もし何かをきっかけとして遥の力のことが知られては絶対に駄目だからだ。

遥はあくまでも彼女達の活動を見るだけに徹している。

幸い、風花の索敵能力を上回るだけの能力を有しているために美鶴や風花のサーチから逃れているが、力がバ<sup>ヘルシナ</sup>レてしまえば即勧誘されるだろう。それを避けるためだった。

そのはずだったのだが・・・今の状況はなんだろうか。

遥は絶対に真田も美鶴も来ないであろうと思っていた、ワイルダック・バーガーにて食事をしていた。

湊から話を聞く限りだと、美鶴はそもそも宗家の用事や生徒会で忙しいし、それ以前にお嬢様育ちのためこういう店には入ったことがない。真田は、この蔵戸台駅前で行くとしたら海牛かはがくれないので、このワイルダック・バーガー略してワックにはどちらも来ないと踏んでいたのだ。

今は湊も彩音もない。一人でハンバーガーを食べながら色々と考えていた。

そこに、その人物は現れたのだ。

「・・・ん？お前は、月光館の生徒か？」

遥はその声が出した方に素早く振り向く。

今まで何とか関わりを持たないようにと気を配っていた、真田がそこにいた。

「・・・真田、先輩？」

遥は自分でも顔が引き攣っているだろうことを自覚しながら、真田に言った。

「ああ。・・・もしかして、4月に来た転校生の3人目・・・か？  
いつもは鈍いと聞いていたのに、こういうときは鋭いんだな、と遥  
は思いつつ、頷いた。

「ええ、どうも。にしても転校生だと目立つちゃってしょうがない  
ですね。先輩にまで顔を知られてるなんて。」

「いや、顔を知っていたわけじゃない。うちの寮の後輩・・・有里  
は知っているだろう？有里に、話を聞いてたからな。」

「湊くんですか？僕の事、何て？」

「いや、姉の方だ。」背が低くて女顔で不思議な雰囲気、そして神  
出鬼没”だとな。」

遥は背のことを言われたとき、額に青筋が浮かんだ。

「・・・そうですか。それで、真田先輩は僕に何か用があつたんで  
すか？」

「そうだった。今日、この辺りでロングコートにニット帽を被った  
男を見なかったか？」

荒垣のことだな、と遥は直感で理解した。そういえば、荒垣が「い  
い加減アキがしつけえ」とこぼしていたことを思い出す。

「いえ、そんな人は見ませんでしたけど・・・。」

遥は素直に答えた。これは本当で、今日は荒垣には会っていない。

「そうか・・・。分かった、ありがとう。じゃあこれで・・・。」

「真田先輩はその人を探しにここへ？」

「・・・まあ、そうだ。」

遥は用件だけを聞いてさっさと立ち去ろうとした真田を呼び止める  
ようにして訊く。

「そんな嫌そうな顔しないでください。質問されたんですから質問  
していいですよね？」

真田それで少し考え込むようにした。

「・・・確かに不思議な奴だな。学校内では殆ど会わないから分か  
らなかったが、で、聞きたいことは何だ？」

遥は少し考えた。今ここで遥が真田を呼び止めたのは、荒垣が真田

に本当に自分のことを話していないか確かめようと思ったのだ。さて、どうやって聞き出すか。

「そういえば、僕の事って彩音さんや湊くんから聞いて知ってたんですか？」

「……？そうだが？ああ、あと岳羽や順平、山岸からも聞いてはいる。」

「……そうですか。」

良かった、と少しだけ遥はほっとした。勿論荒垣を信じていないわけではないが、一応確認しておきたかったのだ。

「はい、ありがとうございます。」

「何だ、それだけだったのか？俺はてっきり、俺とシ……その男との関係でも聞きたいのかと思ったが。」

「そんなプライベートルームまで踏み込むつもりはありませんよ。それとも聞いて欲しかったんですか？」

真田の意外そうな顔に、遥はハンバーガーを再びかじりながら言う。「面白い奴だな。じゃ、俺はそろそろ行く。じゃあな。」

真田は踵を返して、何も買うことなくワックを出て行った。

「……ま、バレなかったわけだしっか。でも、ちょっと話しすぎたかな……？」

遥はハンバーガーの包み紙を綺麗に折りたたむと、まだ残っていたワック特有の湿ったポテトをつまんだ。

6月24日 く遙と真田く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ちょっと短いです。

一応、次は・・・ファルロスのところかな？何か他のにするかもし  
れません。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

6月30日 くゆかりの不信 (前書き)

ペルソナ2罪をやってるんで、ペルソナ2罰も出来ないかなーとプレステを起動しようとしてみたものの・・・出来ません (涙)

完全にプレステのゲームが出来なくなつた・・・。  
PSPで罰発売して下さいっ!!と本気で思います。

では、どうぞ。



6月30日 くゆかりの不信

夜、ゆかりと風花は作戦室にいた。ゆかりが風花を呼び出したのだ。「あのっ・・・ゴメンね、風花。いきなり呼び出しちゃって・・・。」

「ううん、気にしないで・・・で、話って何？」

「あの・・・あのね。風花のスキルを見込んでね、ちょっと頼みたい事、あるんだけど・・・。」

ゆかりはちよつと言いづらそうにしながら、話し出した。

「前、学校のこと調べた時に分かったんだけどさ・・・10年前、結構な数の生徒が、一度に理由無く不登校になった事があってね。しかもそれ、よく調べるとホントに不登校だったのか怪しくてさ。

風花、知ってた？」

風花の脳裏に、この間パソコンで調べ物をしていた際に見つけたことを思い出す。

10年前の謎の爆発事故。それを見て、風花もまた多少なりとも引っかけりを覚えたのだった。

でもその時は、「へえ、そうなんだ」という感覚でしか見ていなかったため、詳細まで詳しく知っていると訳ではなかった。

「え、あまり詳しくは・・・。」

「今更だけど・・・気になんない？シャドウが現れたのって・・・昨日今日の話じゃないって言うし・・・。」

「え、それって、つまり・・・。」  
「分かんない。けど、どうも引っかかるの。」

風花の頭の中で1つの仮説が組みあがる。でも、それをゆかりははつきりと肯定することはしなかった。確定出来ないからこそ、風花にこうやって依頼しているのだから。

「それに、言いたくはないけど・・・。」

ゆかりは少し声を潜めた。

「・・・桐条先輩って、タルタロスの話になると、ちょっと様子おかしいし。」

「そうかな・・・？」

風花はゆかりの事情を知らない。だから純粹に、よく観察してるなと感心もした。

「事件のこと、詳しく知りたいの。関係無いなら、無いでいいし。」  
風花は少し考えた後、頷く。

「・・・うん、そうね。分かった、調べてみるね。」

「ありがと、風花。」

その後、ゆかりは風花に今まで調べた内容と、詳しく知りたい事柄を話した。

その日の影時間。

今日は美鶴や真田にも、「満月まであと1週間」と言われていた。そう言われて二人の頭に真っ先に頭に浮かぶのは、いつも影時間に現れる”ファルロス”と名乗る少年だった。

そして今宵も、ファルロスは相変わらずやって来た。

気配を感じ取り、彩音は体を起こす。

そこには、やはりファルロスがいた。でも前までとは違い、ファルロスの顔はどこか明るく見える。

この間、「友達になろう」と言われて友達になったからだろうか。

「やあ。」

「こんばんは・・・ファルロス。」

彩音は目をこすりながら言う。

ファルロスは「こんばんは」と挨拶をされたことに嬉しそうに笑ったが、すぐ真面目な顔に戻った。

「・・・何を伝えに来たか分かる？」

「うん。分かるよ。多分湊も分かっている。」

「・・・フフ、そろそろ慣れてきたのかな。・・・あと1週間で、次の満月だね。準備は出来てるかい・・・？気をつけてね。」  
「準備はしてる。」

彩音のその答えにファルロスは満足そうに頷いた。

「また、会いに来るよ。」

「あ、待つ・・・。」

彩音はファルロス呼び止めようとしたが、ファルロスは止まることなく消えてしまった。

「・・・もつと会いに来ていいのにな。」

彩音はふわぁ、とあくびをすると、またベッドの中に戻った。

6月30日 くゆかりの不信（後書き）

いかがでしたでしょうか？

お気づきになった方もいらっしやるでしょうが、ゆかりと風花のあのシーンの日にちを1日ずらしたのです。

ちよっと書く内容が思いつかなかったので、くつつけました。

次・・・は、うん・・・早ければホテルかな？

でも・・・ああいうシーンを上手く書ける自信がありません・・・

（汗）

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

7月7日 〰?番 法王了 (前書き)

なんか最近4日に1話投稿になってます。目標としては3日に1話だったのに・・・。

しかも次回は満月戦&書くのが苦手な恋愛)?(シーン・・・  
・・・頑張ります。

では、ごっご。

7月7日 く？番 法王

7月7日。

本来ならこの日は天上の織姫と彦星が1年の中で唯一会える日”七夕”としての意味合いが強いのだが、特別課外活動部の面々はそんな悠長なことも言つてられなかった。

今日は満月。例の大型シャドウが襲来してくるだろうと予測された日だ。

作戦室では、風花がルキアを出して索敵をしている。

「どうだ、反応はあるか？」

「待つてください………見つけました！市街地に、大型のシャドウ反応！」

「ほんとにキタツ！」

風花の報告に、順平が驚きの声を上げる。

「フンフン。満月の件、どうやら確実と見ていいね。」

幾月は前から、「大型シャドウが来るのは満月」だという確証を取りたかったのか、この日を期待しているようにも見えていた。

「場所は蔵戸台の、ええと……白河通り沿いのビルです。」

「白河通りか……ここ数日、影人間がよく2人1組で見つかるって聞いてたけど……なるほどねえ。」

幾月が意味ありげな笑みを浮かべた。

「2人1組か………そういう事か。」

美鶴もその”白河通り”と”2人1組”という単語で意味が分かったらしい。

まだ分かっていない風花が、ルキアを帰還させ誰にもなく聞いた。「白河通りって、どんな所でしたっけ。私、あの辺あまり行かないもので……。」

「あ、私も知らないな。何があるの？」

彩音も賛同した。湊は薄々その2つのキーワードが意味するものは気づいていたが、あえて口には出さない。

「聞いたことはあるけど・・・」

「あ、そっか、ホテルんところか。だから、2人1組なわけね。風花も知ってたんだろ？ホテル街だよ、ホテル街！」

ゆかりは言いにくそうに言葉を濁したが、空気を読まない順平が言ってしまった。

「え、ええっ・・・」

「あんたねえ・・・」

「・・・お前風に言うなら、”空気詠み人知らず”か？」

風花が”ホテル街”という響きに引き、ゆかりは咎めるような視線を向け、湊はさりげない非難の言葉を浴びせる。

「おいおい、何を妄想してるんだ？内装が凝ってるだけの単なるホテルだから。言ってみれば、そう・・・アミューズメント・ホテル？」

「アレ、そうなんスか？」

「・・・アミューズメントの使い方が何となく間違ってる気がしないでもないが・・・」

幾月の説明に、意外そうな顔を浮かべる順平。

「なーんか、今回はヤな予感する・・・。行くのヤメよっかな・・・」

ゆかりがぼつりとそんなことを漏らした。しかし、それを聞き逃さなかつた順平がゆかりをからかう。

「まあた、ゆかりツチ。意外なトコ子供なんだから・・・」

そのからかいに、ゆかりも乗せられた。

「ちよっ、子供はどっちよ！オツケー、行こうじゃん。私、今日の作戦は前線で戦うの予約します！」

「よ、予約制なの？」

からかった本人である順平も、ゆかりの剣幕というか意地というか、という態度に若干引いていた。

「さあ、現場の指揮は誰がやるんですか？」

問いかけられた美鶴は、真っ直ぐ彩音の方を見る。

「有里。今まで同様、今回も君だ。それとバックアップは、今回から作戦時も山岸に頼む。」

「はい、がんばります！」

風花は今回が一応正式メンバーとしての初めての作戦になる。そのせいかいつもよりもやる気を出しているように見えた。

「よし、なら前線に出るメンバーを決めてくれ。人選は任せる。」  
「はい。」

前線メンバーを考えだした彩音に、順平はどことなく羨ましさを含んだ視線を向けた。

白河通り沿いのホテル、”シャン・ド・フルール”前のビル。

その屋上に、またも小柄な人影。遥とそのペルソナ、ケイロンがいる。

手すりに寄りかかるような格好で、遥はこのホテル内にいるシャドウの動向を探っていた。

ふと、索敵に集中しかけていた遥が、そのビルの屋上のドアへと視線を向けた。

「……へえ。もう放っておくことはやめたんだ？」

「……よし、決まった。」

彩音が待機メンバーに向き直る。

「じゃあ、今日の突撃メンバーは……」

湊以外で。」

作戦室に沈黙が流れた。みんな彩音の判断に驚きを隠せないようだ。



勿論湊も例外ではない。

「え、なんで？一応有里くんは彩音と並んでエースみたいなものじゃない？逆に入ったほうが・・・」

沈黙を破ったのはゆかりだった。

「ん〜、ゆかりじゃないけど、何となく嫌な予感がするの。だから、緊急時のためっていうか。それに、風花のアドバースとかもした方がいいんじゃないかな、って。」

「・・・嫌な予感って、どんな風に？」

「何となく、だよ。なんかよからぬことが・・・」

”よからぬこと”の言葉に反応して、残りのメンバーが湊に注目する。

「・・・その根拠は？」

視線が何故か痛くなつた湊は、内心慌てて話を変えた。

「女の勘！」

ずばり言いきつた彩音に、湊は一瞬動きを止めたが、やがて呆れて肩をすくめた。

「それにさ、何かやろうとしてない？何となく、湊が危険なことしそうな気がする・・・。」

湊は内心驚いた。

実は、あの”死神の眼差し”と名づけられたあの力が、大型シャドウにも効くかどうかを試したかったのである。勿論彩音には内密で、だ。

そこを見抜いてしまうあたりは、流石双子の姉といったところか、と湊は内心思った。

「・・・分かったよ。外で待機してる。」

「うん。じゃあ・・・現場に行くよ！」

彩音の号令で、風花を除くメンバーは先にシャドウの反応が確認されたビルに向かって寮を後にした。

そこは、完全にどこから見ても”ホテル”だと分かる建物だった。ゆかりは内心、そこがホテルとは関係ない普通のビルだと思っていたのだが、その理想は木っ端微塵に砕かれた。そして、反応があると風花から報告された最奥の部屋。

そこには、かなり太った体型のシャドウがいた。

それは椅子に座っており、見る限りでは大して強そうには見えなかった。

「何よ、こいつがボス？結構マトモじゃん・・・」

ゆかりが言いつつ、召喚器に手を伸ばした。

『敵、法王タイプのハイエロファントです！来ますっ！』

「先手必勝っ！」

まず最初に飛び出したのは彩音。エリザベスやテオドアからの依頼で貰った”ビームナギナタ”を振りかぶって跳躍し、ハイエロファントの太った体に振り下ろす。

ハイエロファントは確かに攻撃をもらに食らったが、倒れないのは流石大型と言ったところだろうか。

続けて順平と真田が飛び出す。

だがハイエロファントも負けじと”ジオンガ”という電撃属性の魔法を放った。

「ふっ、その程度の電撃、俺には効かん！」

真田のペルソナは電撃にはめっぽう強い。実際ダメージは全然大したことではなく、そのまま真田は進んでハイエロファントにラッシュを浴びせる。

「フィニッシュー!!」

「ホームランツー!!」

真田が最後の一撃を決めると、順平が野球のバットのように剣を振るうのは同時だった。

「ギャアアアアアアッ!!!!」

ハイエロファントは体勢を崩しそうになる。が、倒れるまでには何

故か至らなかつた。

「チツ、効かなかつたか？」

「デブだと倒れづらいんじゃないですか？行くよ、イオツ！」

ゆかりが召喚器の引き金を引き、ペルソナ、イオを呼び出す。

「ゆかり！相手は電撃使うから出来るだけ後ろで魔法攻撃ね！真田先輩は前衛で！」

「オツケー！ガルツ！」

ゆかりは後方からガルを放つ。

大抵のシャドウの弱点は、シャドウが使う魔法の反対の属性であることが多い、とゆかりは踏んでいた。タルタロスに出る”　　テ―ブル”のシャドウなんかがそうだったからだ。

しかしこのシャドウの弱点は風ではなかったらしく、体勢も崩さなかつた。

「ふん、ならこれならばどうだ！」

美鶴はいつの間にもやらシャドウの正面にまで来ていた。そして、武器である片手剣での素早い突きを繰り返す。

トドメの足蹴り。その攻撃で、流石の相手も耐え切れなかつたらしく倒れた。

「レッツ、総攻撃ーっ！！！」

彩音の号令で、みんなが一齐に突撃をしかける。ハイエロファントはすぐボコボコにされた。

しかしまだハイエロファントは立っていた（元々は椅子に座っているが）。

「来て、タケミナカタっ！」

彩音は追い討ちとばかりにペルソナ、”タケミナカタ”を召喚する。タケミナカタが得意とするのは電撃だが、それが効かないのは分かっている。それなら・・・

「パワースラッシュ！」

タケミナカタは”力”の数値も高い。しかしまだ負けじとハイエロファントは耐え、魔法の詠唱を始めた。

『……っ！気をつけてください！マジオンガ、来ますっ！！』

「ゆかりっ！ガードしてッ！」

「きゃあっ！？」

彩音の声よりも電撃がパーティーメンバーを襲う方が早かった。弱点属性の電撃を食らったことにより、ゆかりがダウンする。

彩音と真田はまだ耐性を持っているからいいものの、弱点ではない順平と美鶴のそれなりのダメージを受けてしまった。

「桐条先輩、ゆかりにディアラマ！ゆかり、立てたらみんなにメデアアして！順平、真田先輩！」

彩音は指示を飛ばすと、キツとハイエロフロントを睨みつけた。

「行くよ、タケミナカタ！」

「ポリデュークス、ソニックパンチッ！！」

「ヘルメス、アサルトダイブッ！」

3体のペルソナが、それぞれ得意とする物理攻撃スキルを放った。

衝撃でハイエロフロントの体が少し後ろへ押される。

「もう頭きたっ！イオ！最大出力でガルッ！」

メデアアをかけた後、さっきの攻撃でやられたことになんげ怒りを感じているゆかりがガルを放つ。

「タケミナカタ！」

彩音もタケミナカタを呼び出し、またパワースラッシュを放つよう命じた。

ゆかりの風と彩音の斬撃が合わさり、斬撃の威力を増大させる。

「真・疾風斬！……なーんちゃって。」

「ナイスだ！とどめだ、ペンテシレア！」

美鶴が追撃のためペンテシレアを呼び出す。

「凍りつけっ！！」

ハイエロフロントを、大きい氷の塊が直撃した。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

ハイエロフロントは一際大きな叫び声を上げて、霧散した。

『おつかれさまでした。今回も無事、倒すことができて本当に良かったです。こちらで待ってます。帰還してください。』

『・・・お疲れ。』

風花の声が戦闘終了を告げた。

「よし！帰ろっか？」

彩音が入ってきたドアに手をかける。

そしてドアを引いてみた・・・が。

「あ、あれ・・・？開かない・・・」

「？どうしたの？」

「ドアが開かない・・・！」

『・・・！そんな・・・なぜ？部屋にまだシャドウの反応がありません！さっき倒したのは別のシャドウです！』

「ええっ!？」

彩音は慌てて周りを見渡すが、シャドウの姿などどこにもない。

「あれ・・・あの鏡・・・」

ゆかりが部屋に飾られていた大きな鏡を指差す。

「この鏡、何か変じゃない？」

「え・・・」

途端、彩音の意識はゆっくりと遠のいていった・・・。

7月7日 〰?番 法王了 (後書き)

いかがでしたでしょうか？

うわぁ・・・次の話を上手く書ける自信がありません・・・  
ついでに戦闘シーンはなんか変な感じだったと思うし・・・

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

7月7日NO.2 恋愛(前書き)

ゴールデンウィークも早3日目。

出掛けたのがせいぜい近くのショッピングセンターや部活だけという、ちょっと寂しい連休です。

では、ごうき。

7月7日NO.2 ～？番 恋愛～

「あつ！待って、有里くん！今入ったら・・・」  
言い終わる前に、ホテル前で待機していた湊はホテルの中へと入って行ってしまった。

シャドウの精神攻撃らしきものに、中にいるメンバーに通信が届かなくなってしまった、という風花の言葉を聞いてからすぐだった。ホテルの中に湊が入ってすぐ、湊とも通信が途絶えてしまう。

「と、とにかくみんなに何とか呼びかけなくちゃ・・・！」

「あら。まあでも、湊くんは勘がいいから・・・バレルのは何とか防げた、ってところかな。ま、どうやって解決するのか、ゆっくり見物させてもらおうと。」

遥はホテルの中に入って行った湊を見ていた。精神攻撃から特別課外活動部を助ける気は、遥には無いようである。

彩音は、ホテル内の客室の1つにいた。

頭の中がぼんやりとしていて、ここに何をしに来たか思い出せない。

「何か・・・忘れてるような・・・」

彩音はぼんやりとしたままの頭を何とか働かせ、考えようとする。

ふとそこで、バスルームから水音がするのに気づいた。

「・・・？誰か、入って・・・っ！！」

その時、彩音の頭の中で何かの音がする。

『享樂せよ・・・』

「な、何・・・？誰・・・！？」

『我、汝が心の声なり・・・今を享樂せよ・・・』

見えざるものは幻・・・形ある”今”だけが真実・・・』

彩音はつい肯定の言葉が出そうになるが、それをなんとか止めて否



定の言葉を謎の声に言う。

「そんなことない・・・！」

だが謎の声は止まらない。

『未来など幻想、記憶など虚構・・・』

欲するまま、束縛から解き放たれよ・・・汝、それを望む者なり・・・

『・・・』

「勝手に、決めないで・・・」

『汝、真に求むるは快樂なり。』

汝、今まさに快樂の扉の前にあり。

本心に耳を傾けよ・・・汝、享樂せよ・・・』

「今は・・・ダメ！」

言い切った彩音は、はっと顔を上げる。

意識がようやくはつきりしてきた。そして本来の目的も思い出す。

「みんなは・・・」

周りを見回すが、ここには彩音以外誰もいなかった。

そこで、シャワーの水音が止んだことに気づく。

「誰・・・!?」

彩音はバスルームから出てくるだろう人物に身構えた。

そこから出てきたのは、真田だった。

「お前、次・・・」

言いかけたところで、真田もようやく今の異常さに気がつき、正気を取り戻したようだ。

「うわっ!! な、な、な何だこれは!? どういうことだ!?!」

普段の真田からは想像も出来ないような慌てた声が飛び出す。

彩音はさっ! と恐るべき反射神経で顔を背けた。顔が赤くなっている。

「せ、先輩っ! とりあえず服を着て!」

「あ、ああ、そうだな、そうだな!」

真田は慌ててバスルームに戻って行った。

「……っ、ああもうっ！何で真田先輩なのかなっ！？湊なら小さい頃は……順平は論外で……って何考えてんだ私っ！！」

さりげなく酷いことも含んだ独り言をつぶやき、完全にさっきとは別の意味で正気を乱されていた。

そこに、風花のナビが響く。

『よかった、やっと通じた！2人とも、聞こえますか？』

「あっ、風花！？えっと……今どうなってるの？」

『フォローが遅れてごめんなさい……シャドウの精神攻撃のせいで、呼びかけが届かなくて……。飛ばされたのもシャドウの仕業です。おかげで、みんな分断されて……。あっ、そういえば……有里さんに精神攻撃のことを言ったら、ホテルの中に入っただけで済みましたんですけど……。』

風花の声を聞いて落ち着いた彩音はそれを聞いてため息を吐く。

「……湊ったら……こんな時に冷静でなくてどうすんの？いつもポーカーフェイスを崩さない奴がさ……。」

『とにかく、有里くんとも合流してさっきの部屋まで向かってください。……真田先輩？聞こえますか？』

ずっと反応のない真田に、風花は疑問に思ったようだ。

「……あ、ああ、聞こえてるぞ！」

真田はさっきのことでまだ落ち着きを取り戻せていないようだ。

『え……何かあったんですか？』

真田はそれには答えなかった。

それから少しすると、ドアが開き、真田が出てくる。

「よし、行くぞ。……その、さっきのことは……秘密で……頼む。」

「分かっていますよ。さ、こんなことした奴をブチのめしに行きますか！」

彩音はドアを勢い良く開けた。



「は、はい・・・」

いつもの冷静さはどこへやら、湊は頷くことしか出来なかった。

『えっと、敵の反応はさつきと同じ部屋です。でも、結界が張られて、今のままじゃ部屋に入ることは出来ません。今、結界を破るための方法を探ってます・・・』

湊たちはまだ部屋に留まっていた。そこで、部屋の中のある一つのものに気になった。

「・・・この鏡・・・シャドウと同じ気配が・・・」  
湊は部屋にある鏡を見る。

『・・・分かりました、鏡です！このホテルにある鏡から本体と同じ反応が感じられます！多分、その鏡を壊せば結界が解けるはずですよ。』

「・・・ペルソナ。」

湊はすぐ召喚器で頭を撃ち抜いた。

「・・・アレス、鏡を割れ。」

ペルソナ、アレスがスキル”月影”を放つ。

この技は満月の時に威力が増す。鏡は木っ端微塵に砕け散った。

『結界の力が弱まりました！でもまだ3階に鏡があるようです。合流して、3階を搜索してください。』

風花のナビを聞いて、彩音はすぐ2階に移動した。

階段のところには美鶴と順平がいた。

だが美鶴は心なしか額に青筋が浮かんでいて、順平はもう7月だというのにガタガタと震えている。

「（・・・ああ、そういうことか）」

その姿を見て、真田はご愁傷様、という視線を向ける。彩音は何があったか分からないようだ。

「さ、真田さん！！」

順平は完全涙目で真田の近くに寄った。

「なに、大したことではない。少しばかり、”処刑”をしたただけだ。」

「・・・顔は笑っているが目は笑っていないかった。」

その姿に、その場にいた3人は冷や汗が止まらなかった。

そこに、205号室から残りの2人が出てくる。

「・・・あはは、あからさまに何があつたか分かるよ。うん。」

彩音は少しだけ、湊に同情した。

「さ、早くあのムカつくシャドウを倒しに行こ？」

こちらもまた、目は笑っていない。というか顔も笑っていない。

湊の勘で敵のシャドウの気配がある304号室の鏡を割った6人は、さつきと同じ一番奥の部屋 法王の間に来た。

そこには、大きなハート型に羽が生えたような、”いかにも”なシャドウがいた。

「おかしな真似しやがって・・・死ぬ準備は出来てるだろうな!？」

「ったく、コイツ!!乙女の心を弄んだ罪は重いんだから!」

「・・・今までで最大級の”処刑”をしてやる・・・!」

女2人+1人は射殺さんばかりに目の前のシャドウを睨みつけ、戦闘態勢に入った。

もう目の前の3人だけで、このシャドウは倒せそうな勢いだ。

『今度こそ、いけます!皆さん、頑張ってください!』

しかし、ここにも目の前のシャドウを今にも抹消しようとしている人物がいた。

「・・・姉貴。コイツ瞬殺していい?」

「気持ちは分かるけどダメ。今ここで思う存分ポッコボコにさせてあげないと、後で絶対誰かがターゲットになって集中攻撃されるよ?そうなる確率が高いの・・・誰だか分かるよね?」

湊だつてこのシャドウの被害者だ。コイツのせいでゆかりに叩かれた、と言つても過言ではないのだから。

しかし、ここで湊がシャドウを瞬殺してしまえば・・・やつあたり攻撃されるのは十中八九湊だ。

『敵、ラヴァーズ。恋愛タイプです。・・・どうやら、相手を魅了する攻撃が得意なようです!』

「・・・って聞いてないね、あの4人・・・」

彩音はやれやれと肩をすくめた。それもそのはず。

「行くよっ!イオ!」

「ペンテシレア!」

「ポリデュークスっ!」

「・・・アレス、アサルトダイブ。」

シャドウに恨みがある人たちが一斉に集中攻撃をしかけていたのだから。

「・・・いいや、こっちでフォローすればいいだけの話だし?よしみんなー、やっちゃえー!」

彩音も言いつつ、またタケミナカタを呼び出して加勢する。順平も後ろからペルソナに攻撃させることに決めたようだ。

ラヴァーズを、まず美鶴のペンテシレアのブフーラが襲い、次にゆかりのガルが襲う。

「コダイヤモンドダストっ!!!」

氷の粒がキラキラと光る吹雪が発生し、ラヴァーズを襲った。

「・・・あれ?なんとなく言っちゃったけど・・・まあいいか!」

「ソニックパンチ!」

「アサルトダイブ!」

今度は真田のポリデュークスのソニックパンチ、湊のアレスと順平のヘルメスのアサルトダイブが炸裂する。

「オクトパシーフィスト  
タコ殴り!!」

名前の通り、ペルソナによるタコ殴りだ。流石にラヴァーズもこの怒涛の連続攻撃には耐え切れず、体勢をくずす。

「ラスト!」

語尾にハートマークがつきそうな笑顔で、彩音はタケミナカタにパ

ワースラツシユをやらせる。

しかしまだラヴァーズは倒れなかった。

「くっ……しぶとい！」

そこで、ラヴァーズは反撃とばかりに”マリンカリン”という、敵を魅了させる魔法を放ってきた。

だが、イライラが募っている4人には……

「そんな！」「魔法など！」「効くか!!」「よっ!!！」

ゆかり、美鶴、真田、湊の順で息のぴったり合った攻撃を食らわす。勿論言った通り魅了状態になるメンバーなどいない。

「ギヤアアアアアアアアアア!!!!!!」

耳障りな断末魔を残し、シャドウは霧散した。

シャドウに勝利し、ホテルの前で待つ風花のところに討伐組は帰ってきた。

「お疲れさまでした。」

「上出来だ。トリツキーな敵だったが、助かった。」

「ありがとうございますっ。」

美鶴が風花を称賛した。そして、今度は彩音に向き直る。

「それと君もな、有里。よく惑わされず、立て直した。」

「ありがとうございます。」

彩音も美鶴にお礼を言ったところで、彩音と湊の頭の中にカードが浮かぶ。

”0番 愚者”のコミュが、ランク4になった。

「よし、なら解散だな。」

二人の頭の声など知らない3年生2人は、すぐ帰ってしまった。あとは2年生5人が残る。

「……そうだ、ゆかりちゃん。あの……この前、頼まれた事だけど……」

「うまくいった？」

「う、うん。」

「分かった、後で聞かせて。」

ゆかりと風花はなにやらコソコソと話し合っていたが、すぐゆかりが3人の方に向く。

「よし、私たちも戻りましょ？今日は風花も大活躍だし、2年生組、大勝利って感じだね！」

ゆかりのその声に、彩音は「そうだね！」と笑う。しかし、順平はどこか機嫌悪そうにそっぽを向いていた。

「ほら順平、何してんの、行くわよ。」

それに気づいたゆかりが順平に声をかけるが、順平はゆかりではなく有里姉弟の方に視線を向ける。

「彩音・・・オマエ、無理してんじゃねーよ。・・・ったく、なんでオレだけしか・・・」

最後の方は小さな呟きで聞こえなかったが、どうやら最後は湊に向けられたものだったようだ。

「心配してくれてる？」

彩音は順平の機嫌の悪さに気づいていないらしく、逆に聞いた。湊は順平の雰囲気をなんとなく感じ取っていたので、何も言わない。

「心配つつか・・・まーいいんだけどサ・・・」

「ちよつと、どしたの？まーた、”女にリーダー取られて”ってフテ腐れてんの？」

「・・・岳羽・・・」

湊が咎めるような視線を向けたが、もう遅かった。

「うつせえなっ！！」

順平は不機嫌さを隠そうともせず怒鳴ると、足早にホテルから立ち去って行ってしまった。

「なんなの、もう・・・」

ゆかりは順平の去っていった方向を怪訝そうに見つめる。

「うーん・・・私何かしちゃったかなあ？」

「・・・さあな。」



残った4人は、順平の態度に首を傾げながら（1人は違うが）ホテルを去った。

全員が立ち去ったあと、向かいのビルの屋上。

他に誰もいない影時間の中、1つの拍手が近辺に響き渡る。遥ではない。

「想像よりも、早い解決でしたね。大した見世物です。彼らはここしばらく、毎月こういった活躍をしていますね。」

手を叩いていたのは、いつかの上半身裸でタトゥーが両腕に書きこまれていた少年だ。

「最近では、頭数も増えているようですし、戦い方もなかなかユニークだ……。あの”塔”にも頻繁に出入りしているようですしね……。どうでしょう、ジン。彼らは敵でしょうか？」

「遥に聞けばええんとちやいますか？」

ジンと呼ばれた眼鏡の少年が、ビルの柵に寄りかかっている遥を見る。

「……人の観察に勝手に邪魔しといて、何なのそれ？僕に聞いたって、教える気はないよ。」

「つれへんなあ。しゃあない。もうそろそろ”ヤツ”に会う頃合いやし、訊いてみたらええんとちやいますか？」

「なるほど……。それはいい。彼は今や、私たちと同じ運命を背負う者……。すぐにも会って、話してみましよう。私たちにはあまり時間が無いですからね……。その彼と違って。」

「何それ？イヤミ？まあ否定はしないけど。」

「遥は先ほどよりもイラついていた。”彼”を引き合いに出されたことで。」

「オマエが言わへんからやる？」

「関わる気はないよ。今だって、本来なら話してなかったはずなのにさ。」

「・・・遙、変わった。」

「そりゃあ変わるよ。10年も経てば、ね・・・」  
「遙は付き合ってもらえない、とばかりにドアを開け、屋上をあとにした。」

7月7日NO.2 恋愛（後書き）

いかがでしたでしょうか？

やっぱり満月戦だと文字数が全然違いますね。

気づいた方もいらっしやるでしょうが、私が現在P2罪をプレイしている影響で、合体魔法が出てきています。（合体魔法じゃないのもありますが・・・）

まず、これはミックススライドではありません。ミックススライドは特定のペルソナを使うと発動するもので、合体魔法は特定のスキルを使うと発動します。また、これは有里姉弟にしか使えないものです。今回出てきたものはこちら。

真・疾風斬 疾風系＋斬撃系

ダイヤモンドダスト 氷結系＋疾風系

オクトパシーフィスト 打撃系＋打撃系＋打撃系

あと、「前にも出てきたアレは合体魔法じゃないの？」というものがあるかと思いますが、それは・・・書いたときに合体魔法、というアイデアまで行かなかったのです。ですから合体魔法ではない、と答えさせていただきます。

これからも出す予定ではありません。

でも本来のゲームシステムである「ミックススライド」を出すべきなんでしょうなあ・・・。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

×月×日 く秘密のビデオく(前書き)

GWもあと1日・・・早いなあ。

本っ当にどこも行かない連休でした。

では、ごんぞ。

×月×日 く秘密のビデオ

この蔵戸台分寮には、部屋や廊下に監視カメラがつけられている。そしてそれは、作戦室のコンソールデッキで見られるようになっていた。勿論、”黄昏の羽”を組み込んでいるので影時間でも動く。4月に彩音と湊を美鶴たちが監視していたことから分かるだろう。

しかし、このデッキはたまに誤作動を起こすのである。原因は不明。たまに見てみると、監視カメラが勝手に動いて映像を記録してしまうのだ。

しかも、撮られたシーンはなかなか面白いものだったりする。そして、その映像に気づき、それを見ている人物もこの寮内にはいるのだ。

> 2009/5/10

01:23:02

記録開始

映像で映されているのは、作戦室だった。そして机に向かい、幾月が何か書き物をしている。

「ふむ・・・街の真ん中にシャドウ・・・しかも交通機関に乗っ取るか・・・」

この言葉から分かるとおり、この映像が記録されたのはあの5月の満月戦。モノレールがシャドウに乗っ取られて2年生組が討伐に向かい、丁度帰ってきた辺りだった。

「これはいいよ・・・」 始まった”可能性を検討する必要がある” そうだね・・・」

幾月の顔が、一瞬狂気に満ちた笑みへと変わる。

「モノレール・・・」モノレールにも乗れーる”・・・!!”

幾月は対して面白くもなく、場を凍りつかせるだけの寒いオヤジギ

ヤグを思いついたようだ。

「ぷっ、くくくっ。そうだ、メモメモ・・・と。」

・・・作った本人は、このギャグを面白いと思っているらしい。紙の端に、今のギャグをメモしている。

でも、すぐ幾月は真面目な顔に戻った・・・ように思えた。

「だが、今回の勝利は偶然に味方された要素が大きい・・・。特に最後・・・運転台の操作を誤っていけば、あれだけで命に関わったに違いない。シャドウが集団で機械を乗っ取るという前例のない行動・・・。モーター・・・」モーターが壊れてもーたー」・・・！」

性懲りもなくまた思いついたようだ。

「ぷフフフ・・・ッ！どうしたんだ、今日は冴えてるぞ！？ええ、メモメモ・・・と。」

また紙の端にメモしている・・・何度も言うようであるが面白く無い。むしろ寒い。

そこからは、幾月はもう書き物をやめてギャグを考えることに専念し始めた。

「ちゃんと歩道を歩きましょう・・・」シャドウ”は大変危険です！・・・むおおー、本題からだいぶ逸れた所でノッってきてしまったが・・・まあよし！そうだ・・・書き貯めておいて、今度みんなが集まった時に全弾発射だ！」

もちろん、付き合わされる方はたまったものではなく、後日のラウンジでは冷たい空気が流れていた。そして風花が対応に困っていたのは最近の話である。

「・・・」靴下を発掘した”・・・！ぷっ、くくくーっ！もはや作戦と何の関係もないね！ええ、それから・・・と。」

それでいいのか、理事長。

その後も、幾月の勢いは留まるところを知らず・・・最初の目的であったらう書き物などすっかり忘れてしまったようだった。そこで、映像が切れた。

>2009/6/14 16:17:49 記録開始

映像に映っているのは、誰かの部屋だ。ただ、そこはかなり汚れている。

床に物は散乱し、色んなものが無造作に置かれている。

そう、言わずと知れた順平の部屋である。

ただ、映像の中には順平は見当たらなかった。しかし、誰かが部屋に入ってくる。

「こちらです、巡查。入り口の扉が半開きなのに気づいた時、部屋は既にこの状態でした。ご指示の通り、一切手はつけていません。」

「・・・」

入ってきたのは美鶴と黒沢巡查だった。どうやら黒沢巡查は美鶴が呼んだらしい。

黒沢巡查は部屋を何も言わず眺めると、美鶴に聞いた。

「・・・この部屋の使用者は？」

「高等部2年の伊織 順平です。携帯電話に呼びかけているんですが、実は30分ほど前から連絡がつかない状況で・・・」

黒沢巡查はそれを聞き、小さくため息を吐いた。・・・どうやらこの事態の犯人というか原因というか、が分かつたらしい。

しかし美鶴は何か勘違いしているようで、悔しそうにしている。

「・・・うかつでした。寮は1度襲われたことがあるのに・・・！

自己責任とは言え・・・もし彼に何かあれば、部長の私の責任です・

・・・」

「・・・桐条さん。言いにくいことだが、恐らくこいつは・・・」  
黒沢巡查が真実を話そうとした時、外から声がした。

「あれ・・・桐条先輩？」

入ってきたのは、この部屋の持ち主である順平。

順平は部屋にいる黒沢巡查を見て驚いている。

「……って、黒沢さん！？え、ちょっと……何事っすか！？」  
現れた順平に今度は美鶴が驚いている。

「伊織！？今までどうしてたんだ？連絡しただろう！」

「え、あ、いや……エアコン壊れて暑かったんで、マンガ喫茶行つたんすけど、寝こけちまって……」

「ハア……まあいい、とりあえず無事でよかった……となる  
と、残る可能性は物盗りか。なぜ空き巣はこの部屋を選んだんか……？」

完全に何かを間違えている美鶴。

「空き巣！？」

「見て分かるだろ。部屋がめちゃくちゃに荒らされてる。学生寮を荒らすとは……許し難い狼せきだ。見つかり次第、処刑だな。」

「……なら、コイツを処刑するんだな。」

黙っていた黒沢が口を開いた。

「どうだ、伊織。この部屋は、荒らされてるか？」

「え……いや、なんつーか……」

順平は言いにくそうにしている。

「これが、ワタクシの部屋のありのままの姿というか……」

「な……なに！？いや、だって……暮らせないだろ、これじゃ  
！？そ……それに、部屋の扉は開いていたぞ？」

「それは……どうせ知らないヤツは来ないし、出てる間、風通し  
よくしようかって……」

真実(?)を知った美鶴は黙り込んでしまった。

「無事解決だな？ご令嬢、仕事に戻っていいか？」

「あ、はい……その……済みませんでした。見苦しいものをお  
見せして……」

「……！」

今の美鶴の発言にダメージを受けたらしき順平。  
黒沢巡查はそのまま部屋を出て行った。後には少し気まずい雰囲気



の美鶴と順平が残される。

「済まなかった・・・私もまだまだ視野が狭いな・・・」  
美鶴も申し訳なさそうにし、部屋を出て行く。

「・・・せめて叱ってよ！つか、部屋散らかってるだけでケーサツ呼ばれるって、なんなのこの罰ゲームは！？」  
いやそれは自業自得だろう。

「オレなんかした！？・・・したか。帰りがけ、おみくじが”大凶”だったもんな・・・」

それは関係がない。

そこで、映像が途切れた。

「・・・理事長、相変わらずだな・・・」

「いやあれ真面目に困るよ？あんなことしてるから前に桐条先輩に理事長たしなめられてたんだ！」

「・・・にしても順平・・・あれは無いだろ・・・」

「湊の部屋もシンプルすぎると思うけどね？あれだけ物が無いのは逆に生活感が無いよ。」

「そーいう姉貴だつて、前は僕が片付け教えなきゃなかなか片付けなかったクセに・・・」

「い、今は片付いてるもん！昔の話でしょ、それ！？」

「・・・焦ってるのは怪しいな。まさか、第2の順平の部屋に・・・」

「なってるない！なってるないからねっ！！」

×月×日 く秘密のビデオく（後書き）

いかがでしたでしょうか？

あのビデオの話です。今回は幾月、順平ということで。

・・・ちよつとツッコミが混じってますが気にしないで下さい。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

7月11日 ～10年前の出来事～（前書き）

はい来ましたシリアスシーン。長いです。

個人的に、ここはちょっと好きなシーンです。何と云うか、過去に何があったのか明かされるシーンは大好きなんですよね。

だからちょっと不謹慎かもしれないけど、好きなシーンです。

では、どうぞ。

7月11日　〜10年前の出来事〜

ここ最近、クラスの雰囲気はあまり良いとはいえなかった。理由は順平だ。

この間の作戦の時からどこか機嫌が悪い。彩音が話しかけても、不機嫌さを隠そうともしなかった。

湊はなんとなく理由を察しているらしく、話しかけないでいる。

それにゆかりと風花も何か隠し事のようなことをしているせいで寮に帰っても救いは得られず、どこことなくクラスも寮も居心地の悪い空間になっていた。

そのため二人は気苦労が絶えない。

「はあ〜・・・疲れた。この雰囲気が無理だよう・・・」

「・・・順平の気持ちも分からなくは無いけど。」

彩音はクラスの雰囲気能耐えられないようだ。湊も何ともないように振舞っているが、疲れていた。

机に彩音が突っ伏している横で、湊は音楽プレイヤーをいじっている。

そこで、二人の携帯が同時に鳴った。

>今夜、幾月さんが来る。何か話があるらしい。戻り次第、4階の部屋に集合だ。

「理事長ねえ・・・どうせ作戦の報告とかでしょ。」

真田からのメールを読んで、彩音が言う。

「とにかく帰るか。」

「遙くんも誘う?」

「・・・いや、多分いないと思うからいい。」

彩音は湊の言葉に引っかかりを覚えた。

「また休んでるの？」

「・・・授業には出てるみたいだ。山岸の話によれば、HRが終わったらすぐどこかに消えるらしい。」

「ふーん・・・相変わらず神出鬼没なんだね。」

彩音はそついえば確かに見えないな、と思い、手に鞆を持って立ち上がった。

夜。作戦室では、彩音が予想したとおり作戦の報告が行われた。

「・・・以上が、7日に行った作戦のあらましです。やはり、個体によつては一筋縄では行かないようです。」

「なるほど・・・敵も徐々に手強くなってるね。だけど、悪い話じゃない。実は、今日みんなに集まってもらったのは・・・」

「待って下さい。」

幾月の話を遮つたのは、ゆかりだった。みんなが、一斉にゆかりの方を見る。

「この際なんで・・・桐条先輩に訊きたいことがあります。」

「私に・・・？」

美鶴が怪訝そうな顔をする。

「私だけじゃないと思いますけど、ここに来てから、ビックリの連続で・・・私、少し流されて来た気がするし、だからこの際、はっきりさせたいんです。」

ゆかりの視線が厳しくなった。周りが少し緊張した雰囲気になる。

「ズバリ訊きますけど・・・先輩、私たちにまだ大事なこと言っていないんじゃないですか？例えば”影時間”や”タルタロス”の事、分かんないみたいに言っていましたけど・・・あれって、10年前の事故と関係あるんじゃないですか？」

「10年前のジコ・・・？」

彩音と湊の肩がビクツと震えた。順平は何だソレ、という表情をしている。

湊は殆ど反射的に右目を押さえた。

「ゆ、ゆかりちゃん……」

風花はゆかりのこれから話さんとして知っていることを知っているようだ。「学園の周りで爆発があつて、たくさん人が死んだ話……当時すごいニュースになった筈ですし、先輩は、知ってますよね？」

「……ああ。」

美鶴は静かに答えた。そのことを訊かれるのを、覚悟していたとも取れる振る舞いだ。

「幸い生徒は無事だったみたいですけど、でも、何かヘン。なぜかちょうど同じ頃、一度に何十人も不登校になつてゐるんです……コレ、偶然なんでしょうか。」

「どういう意味だ。」

「私、実は学園に残つてゐる昔の書類とか調べたんです。そしたら、不登校なんてのは記録だけ。ホントはみんな、急に倒れて入院したつて……。似てると思いませんか……。？風花をイジメた子が……入院した時と。」

美鶴は俯いてしまった。

「ちゃんと説明して下さい！10年前の事故……。あの日、本当は何があつたんですか？学園は桐条グループが建てたんだから、桐条先輩は知つてゐるはずでしょ！私、ホントの事が知りたいんです！」  
彩音と湊は顔色が悪くなつていた。  
連呼されるたび、あの日のことを鮮明に思い出すようだった。

風花が二人の様子に気がついたのか、心配そうな視線を向けてくる。

「……隠してる訳じゃない。必要の無い事は告げてないというだけだ。しかし……」

「……仕方ないさ。君のせいじゃない。」

黙つていた幾月が美鶴を慰める。

美鶴が顔を上げた。

「……分かつた。全て話そう……」

美鶴が折れ、話し出した。

「シャドウには幾つもの不思議な能力がある。研究によれば、それは時間や空間にさえ干渉するものらしい。私達は敵と思ってるからあまり意識しないが、もしそれを利用出来るとしたら・・・どうだ？何か大きな力になるかも知れないと思わないか？」

「え・・・？」

ゆかりは一見、何も関係がないような美鶴の説明に、怪訝そうに眉を寄せた。

「今から14年前、そう考えて実践に移した人物が居たんだ・・・。桐条グループの先代、桐条 鴻悦こうえつ・・・私の祖父だ。」

彩音の脳裏に、厳しい顔の老人が浮かんだ。

彩音とて、この10年間何も調べなかつた訳ではない。もちろん桐条グループのことだって調べた。その時に写真で見たのが鴻悦だった。

「祖父はシャドウの力にいたく魅せられ・・・それを利用して、何か途方も無い物を作ろうとしていたようだ。」

「途方も無いもの・・・？」

「実現のために、研究者を集い、シャドウを大量に集めさせた。」

「シャドウを集めたあ？うえっ・・・正気がよっ。」

順平が苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「しかし、10年前・・・計画の最終段階で暴走事故が起き、実験は失敗・・・制御を失ったシャドウの力で、後には忌まわしい痕跡が残る事になってしまった。」

「それって、まさか・・・」

風花が連想したのは、あの影時間だけに現れる不気味な塔。

「そう・・・影時間と、タルタロスだ。」

ゆかりは何も言えなくなっていた。ある程度想像はしていたが、こんなスケールの大きい話だとは思わなかった、といった所か。

「記録では、集められていたシャドウは分かれて飛び散り”消失”したとある。満月の度にやって来るのは、この時のシャドウだ。」

「消失”・・・それでいつも、予想できない場所に・・・」

「ちよつと、いいですか？今の話がホントなら、なんで学校がタルタロスに？まさか・・・」

ゆかりが質問を浴びせる。だが、その答えに気づいてしまったようだった。

「実験をやった場所って・・・！？」

「・・・そうだ。」

「じゃあ・・・ウチの生徒が何十人も入院したっていう、あれも・・・」

「全て、君の考えている通りだ。傘下にあつて、人も集まり、最も好きなように出来る”場所・・・恐らく、ポートアイランドは最適だったんだ。実験の場所は、紛れもなく、10年前の月光館学園だ。」

ゆかりが茫然と呟く。

「それ・・・どういう事ですか・・・それじゃ、この部の活動って・・・無関係の私たちを使って、その時の後始末ってこと？・・・騙したんですか？」

「・・・無関係・・・ならまだいいけどな・・・」

湊が小さな声で呟いた。だからこそ、その呟きは彩音にしか聞こえなかった。

「真田先輩だつて知ってたんでしょ？これじゃ私たち、都合よく利用されてるだけじゃない！？それとも先輩は、戦う理由なんてどうでもいいって事なんですか？」

「そんな風に言った覚えはない！理由なら・・・あるさ・・・」

真田は口ごもってしまった。

「どう取ってくれてもいい・・・黙っていたのは、確かに私の意思だ・・・済まなかった。」

美鶴が真田を庇うように言った。それでも、ゆかりは事実には納得が行っていないようだ。

「隠す気など無かった。だが筋道よりも、君らを確実に引き入れる



事の方が、私には大切に思えた。理不尽だろうと、戦えるのはペルソナ使いだけ・・・世界で私達だけだからだ。」

「今さら・・・！」

「それに、私には・・・力を得るかどうかが、選ぶ余地など無かった。私は・・・」

「美鶴・・・もういい。」

真田が美鶴の話を止めた。

「岳羽君、・・・罪は”過去の大人たち”にある。そして彼らは、みんな自らの行いによって命を落とした・・・。今はもう、当事者は居ないんだ。謂れの無い後始末なのは、みんな同じなのさ。」

「でも・・・」

ゆかりは何か言い返そうとしたが、何も言葉は出てこなかった。

「事故から10年・・・シャドウ達がどうして今になって目覚めたかは、本当に分からない。でも目覚めたって事は、見つけて倒せるって事でもある・・・これ、どういう事が分かるかい？」

幾月が全員を見渡した。

「あの12体こそ、全ての始まりなんだ。・・・と言ったら、分かるかな？」

「ヤツらを全部倒せば・・・”影時間”や”タルタロス”も消える・・・？」

「その通り！さっきは話の腰を折られちゃったけど、どうだい、朗報だろ？」

「本当なんですか！？」

メンバー全員が驚いた顔をした。

「確証となる記憶もある。ここからが、本当の戦いの始まりだね。」

「ホントの、戦い・・・」

「事情はどうあれ、人を守る為なのは変わらない。シャドウ達は、だんだん力をつけてる。待っているだけじゃ勝てない。」

「・・・はい。」

二人とゆかりを除くメンバーの顔に、希望の色が見えた。

「それに、タルタロス自体にも謎は多いからね。何故あんな巨大なものが現れたのか・・・僕らの知らない”答え”が、きつとある筈だ。」

「答え・・・」  
ゆかりが、ぽつりと呟いた。

「思わぬところで真実を知れた・・・のかな。」  
その後、作戦室で顔色の悪かった二人は湊の部屋に移動していた。湊はベッド、彩音は勉強机のところにある椅子にそれぞれ座っている。

本来なら寮則で異姓の部屋には入ってはいけないという決まりがある。しかし、この二人は姉弟だからという理由で特別に許可されていた。

「・・・だけど、何となく納得がいかない。12体のシャドウを倒せば、影時間もタルタロスも消えるって辺りが。」

「シャドウって影時間にしかないんでしょ？ならなんであの事故の前にシャドウを集められたの？ってところもね・・・。」

二人は考えこむ。

「・・・思い出してた？」

「そりゃ、ね・・・。当たり前でしょ。湊だって・・・。」

「そうだけどさ。」

二人はため息をつく。

「・・・今日はもう戻るね。色々知って、疲れた・・・。」

彩音が立ち上がり、軽く手を振って部屋から出て行った。

7月11日　く10年前の出来事く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ちよつとこの話は展開に悩みました。けど、基本的には原作どおり  
ということとで落ち着きました。

次は・・・それぞれの休日ですね。また長くなりそうだなあ・・・。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

7月12日 くそれぞれの思いく（前書き）

この間、社会の授業で「アンデス山脈でメロンは採れるか？」という問題（と呼べるものでもないかもしれない）が出ました。流石に試験には出さないでしょうけどね（笑）  
勿論答えました。

では、ごうござい。

7月12日　くそれぞれの思いく

美鶴により衝撃の過去が明かされた翌日。寮のメンバーは各自で眠れない夜を過ごした。それぞれが複雑な思いを抱え、休日を過ごす。

昼間。ポートアイランド駅の裏路地に、真田はやってきていた。今は昼間のため、不良などは見当たらない。

しかし、段差に腰掛けている人物がいた。相変わらず厚手のコートを着た少年、荒垣だった。

「暇そうだな、相変わらず。」

「ん……？」

真田が声をかけると、荒垣は顔を上げた。

「テメエか……何しに来た。また連れ戻そうってんなら、話す事はねえ。」

「……そんなんじゃない。」

真田は荒垣に近づき、荒垣の隣に腰を降ろした。

「腐れ縁の相手でも、たまには心配になる事もある。」

「ああ？」

いつもとは少し違う様子の真田に、荒垣は怪訝そうな顔を向けた。

「お前とも長いな……孤児院で顔を合わせてから、もうすぐ14年か……。よく美紀とお前と3人で、まだ更地だったこの辺を夜まで走り回ったな。フ……影時間どころか、”時間”なんてものに目が行く事さえ無かった。」

「つたく、変わらねえな……。弱音なら、仲間に吐きやがれ。」

「ツ……なんだと？」

荒垣の態度に、真田は怒り気味に荒垣を見る。

「普段のテメエは馬鹿みてえに前しか見てねえ。昔の話なんかしね

え。分かり易すぎんだよ。」

真田が言葉に詰まる。

「・・・思い出話くらいするさ・・・俺だってな。」

2人の間に沈黙が流れる。しばらくして、真田が口を開いた。

「実はな・・・影時間やタルタロスを消す方法が、ついに明らかになった。」

「本当なのか・・・？」

荒垣もこの話は意外だったようで、顔には出さないが、驚いているような口ぶりだった。

真田は「ああ・・・。」と頷く。

「・・・今まで俺は、強くなることさえ出来れば、正直、他は二の次だった。だが昨日、目的も無く戦ってるのかと正面から言われてとっさに返せなくてな・・・。」

「戦う理由、か・・・そんなもん、それぞれだ。理由がねえなら、いつそ手を引きやいい。・・・俺みてえにな。」

「お前とは・・・違うさ。というか、お前に説教をくうとは・・・ヤキが回ったもんだ。」

荒垣は何も言わなかった。真田は立ち上がる。

「邪魔したな。」

真田はそのまま裏路地を出て行った。後には荒垣だけが残る。

「ったく、ガキが。ちっとも変わってねえ・・・。」

真田の背を見送りながら、荒垣は呟いた。

同じ頃。風花の部屋のドアがノックされた。

「はい。」

「ちよっと・・・いいか？」

「先輩・・・珍しいですね。あ、どうぞ。」

風花が言つと、美鶴が入ってきた。美鶴は風花に促され、ベッドに座る。

「戦いのバックアップだけじゃなく、色々な調べ物も得意みたいだな。」

「あ、す、済みませんっ、皆さんに無断で、私・・・」  
昨日ゆかりが話した内容のいくつかは、風花も調べるのに協力していた。

「いや、君にああいうスキルがあるなら、折り入って頼みがある。」  
美鶴は風花の言葉を遮って言った。

「10年前の事件・・・あれの真相を、分かる限り調べて欲しい。」  
「でも、あの事件の事は、一般にはたぶん・・・」

あの”桐条”が動いていたのだ。一般に公開されている情報など、殆ど嘘や”影時間に起きた事件の補正”にすぎないだろう。

「調べて欲しいのは、桐条が保有してるサーバーだ。」  
風花は美鶴の言葉に驚いた。

「それって、侵入・・・宜しいんですか？」  
「私のIDとパスワードを預ける。君が罪に問われるような事は決してない。・・・詳しい事実が知りたいんだ。」

「先輩・・・」

美鶴の態度で、本気だということが分かる。  
「勿論、無理強いする気はない。」

「分かりました。私に出来る事なら、協力します。」  
「そうか・・・済まない。」

美鶴は一息つくと、あっさりと受け入れた風花にあることを訊くことにした。

「山岸、君は・・・不満は無いのか？事情はどうあれ、私は隠し事をしたまま、君たちを戦いに巻き込んだ。恨み言の1つも、言いたい筈じゃないのか？」

「それは違います。」  
風花はきっぱりと断言した。

「私の家って・・・親族がみんな医者ばかりで、ウチだけが医者をしてなくて・・・両親が私の事にすごく熱心なのは、そういうコン

ブレックスを見返す為なんです。だから、家に居るの、正直つらくて・・・でも、ここには私にしか出来ない事があって、それを必要としてくれる人がいる・・・。恨み言なんて、無いです。」

美鶴は風花の複雑な家庭環境に少し驚いた。

「・・・君は、ここに必要な人間だ。代わりは誰にも務まらない。」

「そ、そんな・・・。」

「恩にきるよ・・・邪魔をしたな。」

美鶴は礼を言くと、風花の部屋を出た。

辰巳ポートアイランド駅前。順平は、そのベンチに座り込んでいた。

「タルタロスも影時間も消える、か・・・。・・・チッ！」

順平はぎゅつと拳を強く握る。

「消えていいじゃんか・・・そういう為に戦ってんじゃんか・・・なのに、なんでオレ・・・。クソッ！なんでこんなモヤモヤすんだッ！」

そこに、2人の女子高生が通りかかった。

「・・・アツッ！。まだ7月なのに・・・。」

「っ！か、ウチらもう3年じゃん？こうやって制服で寄り道とかすんの、ナニゲにもう人生ラストっばいよね。」

「いーよ別にいい。早く大学とか行って遊びたいジャン。」

女子高生たちはそのまま喋りながら去って行った。

「・・・はは、そっか・・・なんか、分かつちった・・・。」

順平は自嘲のような笑みを浮かべる。

「戦うの、使命とか思って夢中になってたけど、考えてみりゃオレ・・・そればっかじゃん。それ無くなったらオレ・・・、それ無くなったらオレ、他になんもねえじゃん。ハハ、正義の為とか・・・ウソじゃん。」

自分にはその”力”しかない。でも、それは。



「しかも、戦うのだって・・・アイツに水空けられたまんまじゃんか・・・。あーっ、クソッ！全部ハンパじゃんよ、オレ！」  
順平はため息をつきながら頭を掻いた。

同じ寮内、ゆかりの部屋。

ゆかりはベッドに座り、ある一枚の手紙を見ていた。

「・・・悪い予感だけ、どんどん当たってく・・・形の無いものを信じてたって、そんなの無駄なのかな・・・。父さん・・・。」

ゆかりは封筒から手紙を取り出す。

「春先に届いたこの手紙・・・読み返すの、もう何度目かな・・・」  
手紙を開き、ゆかりはその文面に目を走らせた。  
もう何回も何回も読み返した手紙。

”10年後の家族へ。”

明日、ムーンライトブリッジの開通式の会場から、この手紙を出すつもりです。

手紙はタイムカプセルに入れられて、届くのは10年後です。  
10年経ったら・・・ゆかりは16歳か。こんなにちっちゃい君が、もう高校生なんだね。

ゆかりは無言で、手紙の2枚目を見る。

僕は、仕事でいつも、君を寂しからせてるけど、君はいつも笑顔をくれる。

今、お父さんは、仕事にやり甲斐を感じてる。”桐条”さんから主任研究員を任されたんだ。

すぐに、大きな仕事も待ってる。ここまで認めてもらえたのは、素直に嬉しい事だ。

でも、誓って言おう・・・君や母さんの未来より大事な物なんて、僕には一つも無いんだ。

「父さん・・・」

また、ゆかりは手紙をめくった。

ゆかり・・・毎日は楽しいかい。希望をもって、前に進んでいるかい。

今隣に居る小さな君のように、明日を待ち遠しいって、感じてるかい。

これから10年、たとえどんなことがあっても、君は幸せでありますように。

・・・それじゃあ、となりに居る母さんとこの心配性な手紙を大いに笑ってください。

2000年・3月6日。岳羽 詠一郎。

ゆかりはそつと、手紙をしまつ。

「どんなことがあっても・・・か・・・信じるしかないよね・・・。」

ゆかりはふと、携帯を取り、随分古くなったストラップを見つめる。10年前、ムーンライトブリッジの開通式で買ったものだ。

「私は逃げない。母さんみたいにはならない。絶対・・・」

ゆかりはストラップをぎゅっと握り締めた。

湊の部屋。

湊はベッドに寝転がり、彩音は椅子に座って足をぶらつかせていた。二人の間に、会話はない。二人とも、ぼんやりと虚空を眺めていた。

「・・・ねえ。」

「・・・何。」

不意に、彩音が口を開いた。

「眠れた？」

「・・・いや、全然。寝ようとはしたけど、フラッシュバックする。」

目を閉じてはみるものの、あのときの光景が蘇ってきて眠れなかったのだ。

「・・・そういえば、湊がそんな感じになったのってあの時からだっけ。それまではそれなりによく喋ってたけど。」

「姉貴もだ。・・・明るくなった。」

「それだけ聞いてると、いい事に聞こえるけどね・・・」

二人は10年前は、それなりに似ていた。容姿は別としてだが、今の仲の良さも勿論あって、性格も今よりは似ていた。

二人が今のような感じの、”正反対”な性格になってしまったのは、あの事故からだ。

「で、どうするの？これからも戦う？」

「・・・姉貴は？」

「質問を質問で返すなつての。私は・・・まあ、ゆっくり考えるよ。今はそんな感じじゃなくなってるけどね。」

「・・・同感。」

「まだ知らないことたくさんあるしね。」

「うん。」

そこで、会話は途切れた。

二人はそれぞれの位置で、言葉もなくなただばんやりとしていた。

遙もまた、昨日の会話の内容をペルソナを使い聞いていた。たまたま探っていたら、聞こえてしまったのだ。

彼が今いるのは長鳴神社だ。

遙は今、無性に苛立っていた。それは、昨日あの場にいたとある人

物のことだ。

「・・・よくもまあ、あんないけしゃあしゃあと・・・！」  
ダン、と座っていたベンチの隣を遥が握った手で叩く。

「・・・正直、ストーリーはどうなってもいいけど、あいつだけは許せない・・・。」

遥の目は、普段のどちらかといえば静かな印象とは違って、怒りを表していた。

その夜の影時間。なかなか寝付けないでいた二人の部屋に、もう慣れた気配が現れた。

「また会ったね。」

「ん、ファルロス・・・。」

ファルロスは彩音たちの様子など気にしないかのように話しかけてくる。

「僕ら、初めて会ってからどのくらいかな・・・。時が経つのは、あつという間だね。ペルソナ使いとしての日常はどう？」

「・・・充実、してるかな・・・。」

「そう、それは良かった。」

ファルロスのいつもと変わらない笑みに、少しだけ気持ちが軽くなつたように二人は感じた。

「やって来る”終わり”について、また少し思い出したんだ。”終わり”が来ちゃう原因は、たぶん、ずっと前の出来事にある。そう、確か・・・10年前だ・・・。」

また出てきたそのキーワードに、二人は顔をしかめた。

「ねえ。君たちが両親を亡くしたのも、確か・・・10年前だったよね。」

二人の気持ちなど知ってか知らずか、ファルロスは二人の痛いところを突いてきた。

「ペルソナはね、使う人の”鏡”なんだ。だからペルソナ使いは、

自分自身の本当から逃げられない。でも僕は、それでも君たちと共にあるよ。友達……だからね。」

「使う人の……」鏡”。見たくない現実、見たくない自分自身……”

彩音が呟く。それと同時に、頭の中にまたカードが浮かぶ。

”??番 死神”のカード。ファルロスとの絆が深まった証だ。

「おやすみ……」

ファルロスはそう言うと、闇に溶けるようにして消えてしまった。

7月12日 くそれぞれの思いく（後書き）

いかがでしたでしょうか？

この辺はイベント続きですよ。また次の日にもイベントあって、そのあと試験、旅行と続くわけですから。旅行どう書こう・・・？

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告等ありましたらお願いします。

7月13日 く屋久島旅行く（前書き）

前回の話の最後を追加しました。ファルロスイベントを忘れていたので。

テスト4日前！でも投稿します。

多分次の投稿はテスト終わった後になるかなあ・・・。

3本編でも、この話の次の日テストですね。

では、ごきげん。

7月13日　く屋久島旅行く

やっぱり、寮のラウンジはどこか重い空気が漂っている。

一応全員は揃っているが、会話らしい会話もない。

「・・・」

ゆかりと美鶴はため息をこぼすばかり。

だが、ここであの人物の空気エアーフレイカー壊しが炸裂した。

「どうした、みんな。腹でも減ってるのか？」

いや、完全に違うだろう。

「い、いえ・・・」

ゆかりも返答に困っている。

「え、ええと・・・も、もうすぐ夏休みですね。皆さん、何しようとか、考えてますか？」

何とか雰囲気明るくしようと、風花が話を振った。

「そらまあ、夏と言えば海っしょ。ビーチに、水着に、ひと夏の思い出。ああーっ、気晴らしにどっか海とか行ってえー！なんかこう、南の方の、メチャクチャ透き通ってるっぽいところ！」

順平が話に乗った。この間までの不機嫌さは今は出ていない。

しかし、順平はがっくりと肩を落とした。

「つか、明日から期末だよ・・・あー、マジだりいいー・・・」

「まあまあ。けど、キレイな海っていうと、沖縄とか、1度行ってみたいな。」

「沖縄じゃあないけど、”屋久島”って選択肢ならアリかもね。」

突然聞こえた声に、その場の全員が玄関の方を振り返る。

丁度理事長が、言いながら寮に入ってきたところだった。

「理事長・・・いらしてたんですか。」

「いや、前を通りかかったんで、来週の予定をちょっと知らせにね。」

桐条君、お父上は今年の休暇を、屋久島で取られるつもりらしい。」

「え・・・お父様が？」



「試験が明ければ、君らは休みだろ？どうだい、ここらで気分転換でも？」

話には、順平が真っ先に食いつく。

「マジッ！？それ、旅行つて事っスよね！？キタァー！！海！海！水着！水着！」

「水着、水着つて・・・こいつ・・・」

ゆかりは急にハイテンションになり、騒ぎ出した順平に呆れている。「ふふっ。」

風花も笑みをこぼした。

「どうだい、桐条君。」

「しかし・・・お父様もお忙しい方ですし、せっかくのご休暇をかき回すわけには・・・」

「ハハ、珍しく弱気じゃないか。ご息女が顔を見せに来るというのに、お父上は迷惑がると？君らは本当に、よくやってる。たまには息抜きも必要だよ。次の作戦日も分かっている訳だし・・・私はいいと思うけどね。」

「・・・ですが・・・」

「センパイ！おねがいしやつすう！」

泣る美鶴を、順平が期待した目で見る。

「・・・分かった。気分転換は必須事項のようだ。行こうじゃないか。」

美鶴も順平の期待のこもった目に負けたようで、屋久島行きを承諾した。

「オツシャァー！！」

「海か・・・特別メニューが組めそうだな。」

「やつべ、楽しみー！！」

「あ、私、水着とか買わないと・・・」

「あんだよ、オレの貸してやるって！」

「・・・馬鹿だろ・・・」

真田と湊のツッコミが被った。

「理事長も泳ぐんですか？」

「僕は泳ぐのはちよつとね。夏の太陽を浴びると、身体が灰になるから。」

「エー、マジ!?」

「……馬鹿だろ(でしょ)……」

今度は真田と湊と彩音のツッコミが被った。

みんなが旅行の話に花を咲かせている中、美鶴がそつとその輪の中から抜け出し、階段の方に向かった。

それに気づいたゆかりが、美鶴を追いかける。

「あつ……ま、待つてください、桐条先輩!あ、ええと……」

ゆかりが美鶴を呼び止める。

「この間は、スイマセンでした……。その……言い過ぎたかもつて……」

「……構わないさ。屋久島に行くことになったのも、ある意味、必然かも知れない。あの事故の当事者は、もう全て居ないと、理事長は私を庇ってはくれたがな……。実は1人だけ、生き証人がいるんだ。」

「え、生き証人……?」

予想していなかったのか、ゆかりが驚く。

「私の父さ。」

美鶴はそれだけ言うと、階段を上がって行ってしまった。ゆかりはそれを呆然と見送る。

「そう、だったんだ……。」

ゆかりはその後しばらく、その場で何かを考え込んでいた。

7月13日 く屋久島旅行く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次はちょっと遥の描写入れたいと思います。  
なので屋久島行きは2話先ってことで。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

7月17日　　〜準備〜（前書き）

テスト終わったーっ！とちょっとテンションが高いです。

前回のあとがきを訂正します。正しくは、屋久島行き描写は前回から3話後、つまりこの話から2話後でした。すみません。

では、ごうござ。

7月17日　〜準備〜

「へえ、屋久島？」

「ここ最近姿を見かけなかった遙だが、今日は珍しく一緒に帰ろうと言ってきた。」

「現在その遙と、この間決まった屋久島旅行の話をしているところだ。」

「そ！桐条先輩が行かないか、って！」

「そうなんだ？楽しんできてね。」

「・・・遙は、一緒に行きたいと言わないのか？」

「遙のちよつと予想外の反応に、湊が聞き返す。」

「だって、一緒に行けるのって寮生たちだけなんでしょ？僕が無理言って連れてってもらうわけにはいかないし。」

「私達が頼み込めば、連れて行ってくれるかもよ？」

「・・・いや、それは・・・」

湊が「それは流石に無理だろう」というニュアンスを込めて彩音を見た。

「いいって。みんなで楽しんできてよ。順平くんも、岳羽さんも一緒でしょ？」

「えー、一緒に遊びたかったのに・・・湊もそう思うでしょ？」

「・・・まあ、そうだけど・・・夏休みになれば、遊ぶ機会だって・・・」

「旅行なんて夏休みに私達だけで出来ると思ってる？そんな機会ないから言ってるんじゃない！」

「確かに一緒に旅行とか楽しそうだけど・・・やっぱり悪いしね。」

「彩音はカタいなあ、と口を尖らせている。」

「あ！それならさ、屋久島で着る水着を選ぶの手伝ってよ！」

「「え！？」」

湊と遙が驚きの表情で彩音を見る。

「ちよ、ちよつと待った！なんで遙に水着選びを・・・いくら顔が

女っばいからと言って・・・」

「湊の！」

「あ、ああ・・・やっぱりそうだよな・・・」  
湊はほっと安心した。

「・・・ふふっ。」

遥はくすくすと笑っている。

彩音と湊は不思議そうに遥を見る。

「湊くんの面白いところ、見ちゃった。取り乱す湊くんなんて、滅多に見られないもの。そういう事なら、いいよ。じゃ、行こっか？」

今日はまだ試験期間中ということもあり、下見だけしておくことにした。

やって来たのはポロニアンモール。とりあえず近いし、色々な店があるからだ。

現在彩音は別行動中。彩音は彩音で女性用水着の方を見に行っている。遥と湊は勿論男性用の水着を見ていた。

「やっば湊くんって言ったら、蒼じゃない？」

「・・・遊びに行くのに、ブーメランはないよな。」

「湊くんの寮だと、1人だけやりそうな人がいるんじゃない？」

「ああ・・・確かに・・・」

2人の脳裏に真田先輩トレーニングバカの姿がよぎる。

「んー・・・やっぱりシンプル系？湊くんはクールだから、あんまり派手な柄じゃない方がいいよね。」

「・・・」

湊はかなり真剣に自分が着そうな水着を選んでいる遥を見ていた。遥は湊の視線に気づかない。

「・・・あ！これなんかどう？ラインとか、カッコ良くない？」

遥が1枚の水着を湊に見せる。それは、湊の好みにもぴったり当てはまっていた。

「・・・凄い、な・・・」

「え？・・・あ。気に入らなかつた？」

「・・・逆だ。僕の好きなデザインだよ、それ。」

遥はふわりと微笑んだ。

「良かった。」

「・・・これにするよ。今度の休み、買いに来る。」

「・・・ホントに？ホントに、これで良いの？」

「遥が勧めてくれたんだろ？」

「や、だって・・・」

遥には、湊が自分の選んだやつを買うというのが予想外だったらしい。

「・・・ありがとう。」

「・・・うん。」

遥のこういうところはすごく子供っぽいな、と湊は思った。

その後、彩音も自分の水着を選び終わり、3人で途中まで帰った。

「屋久島・・・か。・・・あの子に起きてもらわなきゃね・・・」

7月17日　　～準備～（後書き）

いかがでしたでしょうか？

・・・なんかちよつとBL？っぽくなったような・・・。そんなつもりじゃなかったんですけど・・・。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。



7月18日 天田 乾（前書き）

屋久島イベントを見るため、男性主人公で今プレイ開始しようとしています。

また、近々『6月15日 依頼その2』の加筆修正をするつもりです。

メインキャラ紹介11

天田 乾

私立月光館学園初等部5年生。

歳のわりには大人びているが、不死鳥戦隊フェザーマンという番組が密かに好き、という子供らしい一面も持っている。

2年前に母親を事故で亡くしている。

では、どうぞ。

7月18日　〜天田　乾〜

「終わったーッ!!」

HRが終わった途端、順平が勢いよく立ち上がった。

「ようやく終わったぜ、暗黒のテストデイズ! ああ……シャバの太陽が目にも染みるぜ……」

「んで、どうだったの?」

「聞いて驚け!」保体は”バツチリだ!”

「ああ……なんか、色々分かった。」

ゆかりは呆れ顔だ。

「フツ、男は済んだ事をくよくよ振り返らないのさ……。オレの心はもう、遙か遠く屋久島のスカイブルーな空の下だぜ!」

「あ、そっか、もうすぐだっけ……。二人は、なんか準備とかした?」

「遙くに水着選び手伝わってもらったよ、湊が。私ももう選び終わってるけど。」

「……荷物準備は、まだかな……」

「えー!湊、遅い!」

テスト勉強ちゃんとしたのか……。?と湊は心の中で思った。彩音も、順平みたいに旅行が待ちきれないようだ。

「そっか……。そうよね、せつかく行くんだもんね。ゴメン、私なんか暗いよね。どっか気晴らしに、寄り道して帰ろっかな。今日は部活無いし。どう、二人とも?」

「おっ、いいっすね!どこ寄ってく?」

寄り道しようという話に、順平も乗ってきた。

「水着とか買っんなら、オレが、アドバイスしてやるっか?」

「要らないっつーの。てか、ちょっと待ってて。部室から荷物取ってくるから……。あ、ついでに風花にも声かけよ。」

ゆかりは教室から出て行ってしまった。後には二人と、順平が残る。

その時、順平が躊躇いがちに話しかけてきた。

「あの、さ……なんつーか……」

「ん？」

「……ここんどこ、悪かったな……。……変に突っかかってたつーか、感じ悪イつーか……。その……。大人げなかったよな……」

その言葉に、湊はちらりと彩音の方を向いた。彩音も同じで、湊の方を向いたため目が合う。

しかし彩音はすぐ視線を元に戻す。

「そんなこと、あつたっけ？」

「……え！？……マジで言ってるの？それとも……」

「ねー湊、そんな感じあつた？」

「……さあ？順平はいつも通りだと思っただが。」

湊がこつそりと口の端を上げてみせる。その顔を見て、順平も全部察したようだ。

「……まあ、いいや！また……。元通りやろうな。」

「えー、だーかーらー、何が元通りなの？私達こんな感じだったじやん？」

「ハハッ、彩音ツチには敵わねえや。んじゃ、行こうぜ。」

玄関のところで、ゆかり、風花、真田と合流した3人は、そのまま一緒に帰ることになった。

「ツシャアー！んーっ、この解放感！なーにすっかなー！」

「順平くん、切り替え上手だね。」

「まあなっ！……。てか、あれ、そう言や真田サン一緒なの、珍しっスね？」

珍しく玄関で落ち合った真田を順平が見た。

「幾月さんに呼ばれてる。なんでも、”新たな戦力”について話が

あるらしい。」

「戦力つて、また新人ですか？」

「さあな・・・」

「またまた、女の子っスかね!？」

「知らん。」

ゆかりは順平に呆れ気味な視線を向ける。新人が来るというだけで、順平は目を輝かせていた。

「風花ーっ!」

その時、後ろから声がかかる。全員が振り返ると、こちらに走ってくる夏紀の姿があった。

夏紀は6人に追いつくと、真田と彩音たちの方にそれぞれ1回、会釈をした。

「あれ、夏紀ちゃん。どうしたの？」

「風花さ、補修付き合ってくんない？知ってる顔、無くてさ・・・。・・・あ、っか・・・今日はアレか・・・。・・・実家帰るところじゃあ・・・いいや。」

「待って。」

踵を返そうとした夏紀を、風花が止める。

「いいよ、大丈夫。一緒に行こう。」

風花は申し訳無さそうに、真田たちの方を向いた。

「済みません、先に戻って下さい。」

風花は会釈をすると、夏紀と連れ立って校舎の方に歩いて行った。

「・・・なんか、変わったよなあ・・・ビックリだぜ、マジ。」

順平が風花の後姿を眺めて言う。

「仲良き事は美しきかな。いや、結構。青春って素晴らしいよね!なんか、キラキラしてる。」

またどこからか声があった。全員がそちらを振り向くと、初等部の少年を連れた幾月がこちらに向かってくるところだった。

「理事長・・・？」

「人を迎えに来て、近くを通りかかったもんでね。ちょうどいい、

紹介しとこう。」

幾月が連れていた少年を手で示す。

「どうも。」

「・・・ッ!」

何故か真田はその少年を見て、酷く驚いた顔をした。

「あれ、天田君じゃん。どしたの?」

「知り合いだっただのか・・・」

「・・・その様子だと、順平も知ってるのか?」

順平も頷いてみせる。

「彼は、事情があつて休み中も帰らないんだよ。」

「あ、少し聞いてます・・・。確か、ご両親・・・」

「もともと母さんと2人だけだったんですけど、その母さんも、事

故に遭つてしまつて。一昨年のことです。」

「・・・そつか。」

彩音は何ともいえない表情で少年 天田を見た。

「まあ・・・そういう事なんだ。今は遠縁からの学費の保証だけで通つてる。でも、だからつて1人ぼっちで初等科寮に居たんじゃ寂

しいだろ?そこで、彼を夏の間だけ、君らの寮へ転居させることにしたんだ。」

「転居つて・・・えっ!?いいんですか!?!」

「もちろん、招くからには、彼にも”見込みがある”という事だよ。」

幾月は少し声を小さくして言った。

「それじゃ、俺が聞いてた”新たな戦力”というのは・・・」

「うん、まあね。でも、ご覧の通り、彼は初等科だし、あくまで可能性の話だけだ。」

真田は黙り込んでしまった。そんな真田に、天田は近づいていく。

「真田明彦せんぱい・・・ですよね。」

「あ・・・ああ。」

「ウワサ、初等部にも届いています。ボクシング・・・負け無しだっ

て。よろしくおねがいます!」

「ああ……よろしくな。」

言ったきり、真田は何かを考えるように黙ってしまった。

「あ、そういえば……ゆかりさん。高等部に、背が少し小さめで茶髪の……満嶋 遥さんっていう人、いますか?」

「……遥?」

「うん、いるよ。それなら、そこにいる有里くんに聞いた方が詳しく知ってると思うよ。……でも、なんで急に満嶋くん?」

いきなり出てきた名前に、真田と幾月を除いた面々が怪訝そうな顔をする。幾月はというと、一瞬だけ本当に驚いたような表情を見せた。が、すぐに元に戻る。

「えっと……初めまして。天田 乾といいます。」

「……有里 湊。こっちは姉貴の、有里 彩音。」

「よろしくね。」

「はい、よろしくお願ひします……。で、話を戻しますけど……満嶋さんとは、前に長鳴神社で会ったことがあって。」

湊はまたか、と遥のいつもの神出鬼没さを思い出した。

「少し話をさせてもらっただんですけど、なんだかとても不思議な人で。また機会があったら話してみたいな、と思っただんです。……ところで、満嶋さんって……湊さんの彼女ですか?」

「……は……?」「」「」

天田のある意味ストレートな発言に、真田と幾月を除く4人はぼかんとしてしまふ。

「え、違うんですか?いつも一緒にいる、みたいな感じだったから……」

「……えっと、ちょっと待って。何か、誤解してるよね?……遥くんって、男の子だよ?」

「え……」

天田が、信じられないという表情で固まった。……恐らく、天田は遥と休日に出会ったのだらう。制服ならまだしも、私服なら言われ

てみないと気づかないほど、遙は女の子のように見えてしまう。

「えええっ!!? 全っ然分からなかった……!!……あっ、その！ 済みませんでした！ 僕今変な事聞いてしまって!!」

天田は赤くなっている。本気で気づかなかったようだ。

「……それは、いいけどさ……。本人の前で、絶対に言つなよ……?」

「は、はい!」

天田の頭の中では、未だに信じられないという思いが渦巻いていた。

7月18日 天田 乾 (後書き)

いかがでしたでしょうか？

一応、前に遥と天田が会った話では、遥の一人称「僕」なんですけど、  
・覚えてなかったという設定で。あと、みんなが「くん」付けしてたのもちよっと疑問に思っていたけど、男という発想には行き着  
かなかった、ということ。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。



7月20日 く屋久島旅行1日目 昼く（前書き）

祝、50話！

イベントたくさんの屋久島旅行です。

もちろん遙は同行してませんよ。入れようかとも思ったのですが、流れるに無理かな、と。

では、ごうごう。

7月20日 く屋久島旅行1日目 昼

今日から3泊4日で、特別課外活動部メンバーは屋久島旅行に出かける。

順平はこの旅行を楽しみにしていたようだが、対称的にゆかりはあの衝撃の事実がまだ頭に残っているようで、あまり気乗りがしないと言っていた。

皆がそれぞれの思いを抱えた屋久島旅行。

今は、その屋久島に向かうフェリーに揺られている。

まもなく、屋久島だ。

「おー、ようやくハッキリ見えてきた、すげー！ヤ・ク・シ・マー！」

順平が船上から見える屋久島を見てはしゃいでいるが、周りの雰囲気はどこか重かった。

「わ、わー！珍しい木がいっぱい！見て、あれなんて・・・」

風花もこの重い雰囲気をなんとかしようとして試みるが、美鶴やゆかりは無言のままだ。

湊は元からあまり喋る方ではないが、いつも元気のいい彩音も今は黙ってしまっている。

「・・・えつと・・・」

「す、すげーよなー？おー、すげー、まじヤベエ。」

「順平くん・・・」

「・・・ハア・・・」

順平もずつと続くこの雰囲気をなんとか出来ず、ため息をついた。

重い雰囲気のまま、フェリーは屋久島に到着。

港で待っていた桐条の使いの車に荷物を全部乗せて、幾月以外の全員は桐条の屋久島別邸に移動した。

荷物を持って別邸に入った美鶴以外の特別課外活動部メンバーは、ただただ驚くばかりだった。

「すごい……」

「リアルに”世界の豪邸訪問”だな……」

桐条の別邸「広くて綺麗」としか言いようがなかった。外観でも充分大きかったが、中に入ってみるとこれまた広い。

そこに、メイドたちがやってきて、完璧にシンクロした動きで一礼した。

「お帰りなさいませ、お嬢さま。」

「今日から短い間だが、宜しく頼む。」

「メイド……さん……?」

「そちらは、ご学友の皆様ですね。ようこそいらっしやいました。どうぞこちらへ。」

「”ごがくゆう”って……」

「メイドって、実在してんだな……」

メイドの完璧な対応に、順平やゆかりは驚く。

「やっぱり先輩、スゴい人なんだ……。改めて実感……」

「……桐条といえば、世界でも有名な財閥だ。これくらい居てもおかしくないと思うが……」

「湊……冷静すぎ。」

こんな時でも冷静な湊に、彩音は若干呆れた。

その時、奥の部屋からSPを数名引き連れた、右目に眼帯をした紳士がこちらに向かってきた。

「お久しぶりです。」

美鶴が横を通ったその人物に挨拶をする。紳士は、少し立ち止まって特別課外活動部メンバーを一瞥した後、すぐその場を去った。

「い、今の人って、もしかして……」

「先輩の……お父さん?」

「・・・多分、な。桐条グループ現総帥、桐条 武治たけはる総帥・・・」

「怖ッ！南の島だけに・・・海賊ルック？」

「そんなわけがあるか・・・」

「失礼だよ、順平。」

美鶴以外のメンバーが順平を呆れた目で見た。

「フフ・・・短い休暇だが、まあ存分にくつろいでくれ。」

「おし！楽しませてもらうツスよ！！となりや、すぐそこだし、まずは海だな。やっべ、テンション上がってきた！早速、ビーチに突撃！？」

「ちよっ・・・もう海？てか、行くのはいいけど、そんなすぐ支度なんて無理だよ？」

「ならオレと真田先輩、湊は先行ってるぜ。つか、1秒もムダに出来ねーからなッ！！」

順平はそう言うのと、湊と真田を引っ張り、メイドに案内を頼んで先に部屋に行ってしまった。

「もう、順平ったら・・・なんなの、あのはしゃぎ様は。」

「ねえ、私達も行かない？順平ほどじゃないけど、やっぱり海で早く遊びたいし！」

「・・・順平の場合、それ以外にも理由がありそうな気がするんだけど・・・」

4人はそれぞれ雑談を交わしながら、こちらもまたメイドに案内を頼み、部屋に移動した。

水着に着替えて一足先にビーチに来ていた湊は、女性陣の水着について熱く語る順平をちよつと鬱陶しく思いながら、もう泳ぎに行ってしまうおつかと考えていた。

湊の水着は、この間遙に選んでもらった青いトランクスタイルの水着。

順平はオレンジのトランクスタイルだ。キャップは前後反対にして

被ったままになっている。

真田はといえば、ブルーメランタイプの水着に白いTシャツを着ている。真田のことだから、おそらく遊ぶという事よりもトレーニングするという事の方が優先順位が上になった結果だろう。

「んー、この、ビーサンに足の指の付け根が食い込む感じ・・・ようやく”夏”実感だぜ！」

「沖に目印になるような物は無いな・・・泳ごうかと思ってたが。」

「ああ・・・出ました、真田サン。遊びに海来たのに”黙々と泳ぐ”タイプ。」

順平のはしゃぎ様と、ここまで来てもまだトレーニングをしようとする真田に湊は心底呆れつつ、ふとビーチの入り口の方を見た。

ゆかりと彩音が、こっちに向かってきている。

「だぜ、じゃねーっつ・・・。ていうか、何？あの真田先輩の水着・・・。見てるこっちが恥ずかしいよ・・・。」

「遊びに来たのに、アレは無いね・・・。」

一方、こちらもちちらで男性陣の水着について話がされていた。

そういう彩音の水着は、ピンクのビキニ。”綺麗”よりも”カワイイ”感じのものだ。

ゆかりは上はピンクで、下はデニムスカートっぽくなっているビキニだ。

湊がこちらに気づいたようで、こちらを見てちょっと目線を逸らした。

「よう、来たか・・・？何だ、岳羽。」

真田も気づいて、こっちに話しかけてきた。

「・・・随分、小さい水着ですよね。」

「何だ、知らないのか？水の中での抵抗を少なくするため・・・。」

「いえ、いいです・・・。」

真田の要らないトレーニング知識の話が始まりそうだったので、ゆ

かりがすぐ断った。

ふと、そこでゆかりは順平の様子に気づく。

「・・・てか、どしたの？順平。鼻の下やばいよ？」

「いっやゝ、目の保養ですなゝ、ナハハ。ゆかりツチのは、想像よりけつこう強気のデザインですなゝ！やっぱ、部活でシボれてるって自信が、大胆さに繋がってるんでしょうか!？」

「はあ!？」

ゆかりがキツイ目で順平を睨む。

「そして我らがリーダーも、これまたキュートな人魚ですなゝ！普段は見えないラインが、もう、ね！たつまりませんねゝ!!」

「オツサン？」

彩音も顔は笑っているが目は笑っていない。

「いんやゝ、いーんでない?いーんでない?湊なんかもう直視できなくなってるし。なあ？」

彩音の視線が、ふいと顔を背けたままの湊に行く。・・・心なしか湊の顔が少し赤い気がする。

「湊?どしたの？」

「・・・」

「あ、もしかして恥ずかしくて見れない、とか?もー、私の水着姿なら前によくプールとか行ったから何度も見てるじゃん!」

「なぬっ!?!湊おゝ、オマエ羨ましいな、このやる!」

「順平は黙ってる。・・・前のプールはそんな奴じゃなかっただろ。・・・」

「だってコレは旅行用に新しく買ったやつだもん。」

「そうじゃなくて・・・。もうちょっと控えめな奴にしてくれないと目のやり場に・・・」

「いいじゃん、いいじゃん!これくらいで照れるなんて、かわいいなあ!」

「・・・可愛くないし、照れてない・・・。」

二人が言い争い(?)をしている時、後ろから風花が来た。

「パラソル・・・空いてるとこ、勝手に使っていいのかな？」

「おっとー、続いては風花選手ですなー。」

すぐ順平が風花の水着を見る。

風花の水着は水色の、シンプルなタイプのビキニ。下はスカートのようになっている。

「っーか、風花オマエ・・・メツチャ着痩せするタイプ・・・!？」

「え・・・ええっ?」

「んだよー、そんなハズかしがなくてもいいじゃんよー。ムフフ。」

「ムフフって、変態かつつの!」

ゆかりが順平にキツイ視線を浴びせるが、順平は気づいていないようだ。ゆかりの後ろにうつすらとイオが見えるのは、気のせいではないはずだ。

「そんで、トリを務めますのは・・・。」

最後にやって来たのは美鶴。

美鶴は白のパレオで、胸元にはハイビスカスの花を差している。

もう美しいとしかいえない佇まいだ。

「ん・・・どうした?」

本人は自覚が無いのか、こちらを凝視するほかのメンバー（湊除く）を不思議そうに見た。

「うわー、桐条先輩、キレイ・・・」

「ホントすっごい、白くて、キレイ!日焼け止め、もう塗りました?」

「い、いや・・・。」

「もうキレイとしかいいようがないですって!」

次々と浴びせられる贅辞の言葉に、美鶴は顔を赤らめた。

女子が美鶴に「キレイ」などと言っているうちに、順平はこっそり真田に訊く。

「ね、真田先輩。ぶっちゃけ、誰が好みっスか?」

「・・・。」

「え、そーなんスか!?!」

「こ、声大きい!」

「いつやー、へー、そうスかー。なあ、なあ!じゃあ湊は?どの夕イプがイチオシよ?」

「・・・」

湊はぼそぼそと小さな声で名前を言った。顔はいつもの湊からは想像できないほど、誰から見ても明らかに赤くなっていた。

「へ、何!?聞こえねーって・・・」

「どしたの、2人ともニヤニヤしちゃって。有里くんはかなり顔赤くなってるし。」

「べつつに〜。・・・おい、後で絶対聞かせろよ?」

「な〜に企んでんのかなあ・・・。」

彩音は順平と湊をしげしげと見比べるようにして見る。

「いいなあ。こういうの。ホント、来てよかったよなあ。よっしゃ、そいじゃ、そろそろ水に浸かるとしますか!行くぜっ!」

「待てっ、1位は譲らん!」

順平と真田が海に向かって走って行ったところで、湊はさっ、と冷静な顔になって森の方を見つめる。

誰かに見られている。そんな気がした。

湊は注意深くその視線の正体を探ろうとするが、それは海の方から聞こえてきた水音に遮られた。

「うわ、ツメテー!!ギャハハハ!!」

「・・・っ、消えたか・・・。」

「湊おー!!何してんのー!!早く来ないとみんなで集中砲火するよー!?!?」

「!・・・今・・・」

今行く、と言おうとして振り向くが、女性陣の水着を思い出し、再び目を逸らしながら湊は海岸に向かった。



7月20日 く屋久島旅行1日目 昼々（後書き）

いかがでしたでしょうか？

水着のタイプ、合ってますかね・・・？一応、「ペルソナ倶楽部P3」を参考にしました。

湊は恋愛経験とかそういうのが皆無な設定です（笑）。原作では色々な女の子口説き落としてます（私もゲーム本編ではやりました）が、こっちではそんなことがまだ無い、という設定で。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

6 / 5 加筆修正

7月20日NO.2 〱屋久島旅行1日目 夜〱（前書き）

もうすぐ私は修学旅行があります。行き先は定番の京都・奈良。生八つ橋は美味しいですよね！。

では、どうぞ。

7月20日NO.2 〱 屋久島旅行1日目 夜〱

美鶴は一足先に屋敷に戻ってきていた。

エントランスで美鶴が待っていたのは、彼女の父、桐条 武治。

武治氏はちょうどエントランスを通りかかったところだった。今はSPの姿は見えない。

「……ご無沙汰していました。」

「……」

「お元氣そうで何よりです……。」

「……彼らは、寮にいる者たちか？」

「済みません、ご休暇を大人数で騒がせてしまって……。」

「彼らに……明かしたそうだな。なぜ、今まで隠していた。」

武治氏の威厳とその視線に、美鶴は冷や汗を流す。

「別に、隠したわけでは……。」

「言つてある筈だ。元々、お前が負うべき罪ではない。」

「ですが……」

「”調和する2つは、完全なる1つに勝る”。”南条”と分かれた

折より、我ら”桐条”に伝わる言葉だ。」

美鶴はその言葉を頭の中で復唱してみる。

「美鶴、人を信じてみる。どれだけ己を殺しても、所詮は個の力。

この世には、1人では成せない事がある。」

「……はい。」

「宗家のデータベースに入り込んだのは、お前だな？それも然りだ・

・旅行などにかこつけず、なぜ初めから、じかに私に問わない。」

「申し訳……ありません。」

「彼らを全員、ここに集める。」

武治氏は奥の部屋を手で示す。そこは映像も見れる、応接室になっている部屋だった。

「元より隠す意図などない。全てを伝えるため、準備をしてある。」

「全てを・・・？」

「連れてきた中に、”岳羽”という少女が居るだろう。彼女が力に目覚めるとは・・・もはや、運命なのだ・・・。」

後半はつぶやくように言ったため、美鶴には少ししか聞き取れなかった。

「お父様・・・？」

いつもとは様子の違う父の姿を不思議に思いながらも、皆を呼びに行くため軽く会釈をして美鶴はその場を去った。

それからしばらくして、応接室。

特別課外活動部メンバー全員が、今この場に集まっている。幾月はいない。

全員が座つたのを確認すると、武治氏は話し始める。

「美鶴から、大体は聞いているな。」

「あ、はい・・・。」

巨大財閥の当主の威厳もあり、少し緊張した様子のゆかりが頷く。メンバーは美鶴と湊以外が緊張した表情になっていた。美鶴とはこの中で1番付き合いの長い真田も、流石に武治氏に会うのは今回が初めてだったらしい。湊はいつものポーカーフェイスを崩さない。

「左様、全ては大人の・・・我々の罪だ。私の命ひとつであがなえるのなら、とうにそうしていたところだが・・・今や、君らを頼る他はない。」

”私の命ひとつであがなえるのなら、とうにそうしていた”という武治氏の言葉に、美鶴はほんの僅かに顔を歪ませた。

「父”鴻悦”が怪物の力を利用してまで造り出そうとしたもの・・・それは”時を操る神器”だ。」

「時を、操る・・・？」

「言葉の通りさ・・・時の流れを操作し、障害も、例外も、全て起こる前に除ける。未来を意のままにする道具と言ってもいい。」

「す、すごい……野望のサイズがデカイ……」

「……出来るわけがない、そんなもの。」

スケールの大きさに驚く順平とは対照的に、酷く冷静に切り捨てる湊。

「だが研究は、父の指示によっておかしな方向へと進んでいった。……晩年の父は、何かとても深い虚無感を胸の奥に持っていたようだ。今にして思えば、父の乱心は、それを打ち破るために始まったのかも知れん……。」

武治氏が、近くにあつたりリモコンを手にとった。

「君らが全てを知りたいと望むのは当然の事だ。私にも、伝える義務がある。」

武治氏がリモコンを操作すると同時に、部屋にあつた巨大スクリーンに何かの古い映像が映し出された。部屋の明かりも薄暗くなる。

「これは……?」

「現場に居た科学者によって残された、事故の様子を伝える唯一の映像だ。」

「……映像?」

「前に理事長が言っていた、”12体のシャドウを倒せば全て終わるといふ確証の記録”ですかね?」

彩音が前に幾月に言われたことを思い出した。

映像の場所は、酷く荒れていた。どこかの事故現場のようだ。

しかも映像は随分と荒い。目の前に移っている男性の顔もぼやけてよく見えなかった。

『この記録が……心ある人の目に触れる事を……願います。』

「この声……!?」

ゆかりが酷く驚いた顔をした。信じられない、とでもいうような。

『ご当主は忌まわしい思想に魅入られ、変わってしまった。この実験は……行われるべきじゃなかった!もう未曾有の被害が残るのは避けられないだろう……。でも、こうしなければ……世界の

全てが破滅したかも知れない!』

「世界の・・・破滅?」

次々と出てくる、身近なものとは思えない語句に、皆は驚いている。

『この記録を見ている者よ、誰でもいい、よく聞いて欲しい!』

「・・・?何か、変・・・?」

湊はどことなく映像が変だと感じた。が、何が変なのか確証がつかめない。

『集めたシャドウは大半が爆発と共に近隣へ飛び散った。悪夢を終わらせるには、それらを全て消し去るしかない!』

映像の研究員の声のトーンが下がる。

『全て・・・僕の責任だ。全てを知っていたのに、成功に目が眩み、結局はご当主に従う道を選んできました・・・。』

そこで、一瞬だけ映像が鮮明になる。

『全て、僕の・・・責任だ・・・』

「!?!」

そこで、何かが爆発する音が響き、映像は終わった。

ゆかりは思わず、席から立ち上がった。

「お父さん・・・」

「お父さんって・・・今の人が・・・?」

この事実には、武治氏を除く全員が反応した。

「お父様、これは・・・」

「彼は岳羽 詠一郎・・・当時の主任研究員だ。実に有能な人物だった。その彼を見出して利用し、こんな事件まで追いやってしまったのは、我々グループだ。詠一郎は・・・桐条に取り殺されたも同然だ。」

「ま、まさか・・・」

最悪の形だった真実に、一同は気づく。

「つまり・・・私のお父さんが、やったって事・・・?影時間も・・・」

・タルタロスも．．．たくさんの人が犠牲になったのも．．．みんな、父さんのせいって事．．．？」

「お．．．おい．．．」

「じゃ．．．色々、隠してたのって．．．ホントはこれが理由？私に氣遣って、隠してたってこと？そういう事なの．．．!？」

「岳羽、それは違う、私は．．．」

美鶴が弁明しようとするが、もう遅かった。

「かわいそうとか、やめてよッ!！」

ゆかりはそう叫ぶと、ドアを乱暴に開け、外に走って行ってしまった。

「岳羽ッ!！」

美鶴が呼びとめようとするが、ゆかりの姿はもう見えなくなっている。

「あの．．．誰か．．．行った方が．．．」

風花がおずおずと言った。

「．．．有里、のどちらかでいい．．．彼女を、追ってくれ．．．」

「

．．．分かりました。」

「．．．岳羽は海岸にいる．．．勘だけど。」

「なら湊も一緒に行くのっ!！」

彩音は湊の腕を掴み、ゆかりの後を追って走り出した。

海岸に行くと、確かに湊の言ったとおりゆかりが居た。

ゆかりは立って海を眺めている。ゆかりと海を、三日月が照らしていた。

「ゆかり．．．」

「ずっと信じてたのに．．．こんなの、キツイよ．．．」

二人はゆっくり、ゆかりに近づいた。

「彩音．．．有里くん．．．」

ゆかりが振り向く。

「覚えてる？前に、病院で言ったこと・・・有里くんも彩音から聞いている？・・・私のお父さん、子供の頃に死んだって・・・。さっきの話で分かったでしょ・・・あの事故が原因なんだ。」

普通の人は真相なんて知らないから、当時は根も葉もない噂が立ってさ・・・父さん主任だったから、世間から目の敵にされてね・・・色んな場所を転々と引っ越したの。」

「・・・大変、だったよね・・・」  
湊は黙って聞いている。

二人も親戚の都合で引越しはかなりした。だから、少しはゆかりの気持ちも分かる。

「・・・まあね・・・でも私、ずっと信じてた。父さんは悪くない筈だつて。小さい頃から大好きだったし、絶対悪い事するような人じゃないつて。」

実は・・・春頃ね、手紙が届いたの。10年前の父さんから・・・”家族へ”つて。笑っちゃった。殆ど私の事しか書いてないんだもん・・・。だから信じようつて思ってたのに・・・。

だから、自分に力があるつて分かった時は、偶然じゃないつて思った。怖かったけど、桐条グループの傍に居れば、父さんの事・・・なにか分かるかもつて。だからペルソナ使いになって、戦いも続けしてきた。

でもさ・・・なんて言うか・・・そんなの無駄だったんだよね・・・。

今度は彩音も何も言わなかった。ただ黙って、ゆかりの話聞いてる。

「ハハ、現実つてキツイよね・・・。怖い我慢して戦ってるのに、どうにもならないよね、これじゃ・・・。」

それに私・・・もしかしたら、嫉妬してたのかも。あんな事があつたのに、なんで桐条先輩にはまだお父さんがちゃんと居るのかつて・・・。ハハ、みつともないね、私。」



「・・・あまり、自分を責めるな。」

湊が初めて口を開いた。

「・・・八八、すごいよね、キミ。いつもそうだよ。1人だけ冷静で、余裕あって。そうやって、私のこと慰めて、支えてくれるってワケ・・・？」

しかし、その同情がいけなかったのだろう。ゆかりはキツと湊を睨みつけた。

「分かったような顔しないでよっ！あなた、私のこと、何も・・・！」

そのままゆかりは、湊の肩を掴む。湊は、何も言わない。何ともいえない眼差しで、ゆかりを見ていた。

「ゴメン・・・私、余裕無くて、ワケ分かんない・・・なんか、怖くて・・・もう、全然、分かんない・・・」

ゆかりの、湊の肩をつかむ手が小刻みに震えている。ゆかりは俯き、泣いていた。

「教えてよ・・・私、これからどうしたらいいのかな・・・」

湊は何も言わず、ゆかりの頭にポンと手を置いた。

「・・・信じていけばいい。何があるうと、信じ続ければいい。その気持ちは、無駄なんかじゃない・・・」

ゆかりが顔を上げる。湊は手をゆかりの頭から離れた。

ゆかりもずっと湊の肩を掴んでいたことを思い出したのか、少し慌てて手を離す。

彩音は傍で、少し苦笑を浮かべていた。

「・・・すごいよね、キミ。・・・ゴメンね、私のことばかり。あなたたちも両親、亡くしてるのにな・・・。辛いのは慣れているから、私は大丈夫。でも、あなたと話せてよかった・・・。ありがとね。」

ゆかりは泣き腫らして赤くなった目で笑っていた。

「連れて来いって、先輩に言われたんでしょ？で、彩音が行こうと

して・・・引つ張られてきた、って感じ。」

「・・・よく分かったな。でも・・・今となつちゃ、あまり関係ないかもな。」

「いっつもそうだもん。見てれば分かるって。・・・ハハ、ちよつとカツコいいじゃん。」

どことなくいい雰囲気になった2人を、彩音は微笑みながら見つめていた。

「うおおーい！」

唐突に、雰囲気壊す声が聞こえた。

3人はその声が見た方を見る。順平が、ちょうど海岸に入ってくるところだった。

「ハア、まったく、遅いよオマエら・・・みんな、心配してるぜ・・・。もうすぐ影時間だし、戻って来いってさ。・・・アレ？なんか、湊とゆかりツチって・・・。」

「そ、そっか、影時間って・・・場所、関係ないんだよね・・・。」

「まったく、あたり前だろ？オレっち、全然気づいてたぜ？」

へへん、と胸を張る順平に、彩音はまた苦笑を浮かべた。

そんな中、ゆかりがぼつりと話す。

「私さ・・・最近、思ったんだ・・・。」

「？」

順平が頭にハテナマークを浮かべる。

「ペルソナ使いは、力に目覚めると影時間の体験を忘れなくなる・・・。それって、力と引き換えに、目を背けられなくなるって事なのかも。・・・忘れたい現実からさ。」

”ペルソナはね、使う人の鏡なんだ。だからペルソナ使いは、自身自身の本当から逃げられない。”

ファルロスの言った言葉が二人の頭に浮かんだ。

「やるしか・・・ないんだよね。」

「・・・だな。よっしゃー！じゃ、戻るかつ！」

「だね。ふぁー、今日はホントにいろいろありすぎて疲れた・・・。」

「  
4人は話しながら、屋敷に戻って行った。」

「・・・最重要人物と酷似した人物を発見。明日、直ちに接触を試み、確認を取ります・・・。」

7月20日NO.2 〱屋久島旅行1日目 夜〱（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回は・・・男性主人公サイドで行きます。

土曜辺りに以前のお話を書き直すかも・・・。

って、何回も言ってる割に直してません・・・済みません。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

6 / 5 加筆修正

7月21日 く屋久島旅行2日目 湊side（前書き）

依頼と満月シャドウ（7月、後半戦）、屋久島旅行1日目を加筆修正しました！

ストーリーは変わっていません。セリフを少し手直しました。

ふう、やっと出来た・・・。

昨日から男性主人公編を一気に進めました。今日は部活が1日あったし、昨日も出かけたのでかなり急いで進めました・・・。

では、どうぞ。

7月21日 く屋久島旅行2日目 湊side

屋久島旅行2日目。

ゆかりや美鶴の雰囲気が暗くなっている中で、順平は今日も真田と湊を連れ出してビーチに来ていた。

しかし肝心の女性陣はビーチに来ていない。

ビーチに来る途中、真田は使用人から手紙を預かったのだが、まだその中身は見えていない。

「あつれー、彼女たち。まだ起きてないのかなー？んもー、お寝坊さんなんだから！海は待つててくれないってのに、ねー？」

「・・・順平、微妙、いやかなり気持ち悪い・・・。」

朝から変なテンションな順平に、湊はぼそつと酷いことを言った。

「ああ、日がかげると水温が下がり、体力を余計に消耗するからな

」

「え、あー、そつスね・・・そこなんだ・・・」

「・・・先輩がズレてるのは、いつものことだろ・・・」

いつもより湊は機嫌が悪い。今日は色々と考え事をしたかったのにそれを順平が邪魔したからだ。

だから湊は、今日は水着ではなくいつものTシャツに短パンという格好だった。濡れるのを避けるため、今日は普段着だが音楽プレイヤーは置いてきている。

「そついえば、来がけに屋敷の使用人から手紙を渡されたんだつ・・・」

」

真田が手紙を持っていた手紙を出すと、順平がさつ、とそれを掠め取った。

「あつ、おい、順平！」

「抜け駆け禁止っス！！メイドさんからラブレターなんて、お父さん許しません！！」

「馬鹿だろ……」

「……いつからお前は先輩の父親になった……」

しかしそういう言葉は無視し、さっそく順平は手紙を開いていた。

「えー、なにになに……」

”4人で縄文杉を見てきます。”

……ええっ!?

「これは、山岸の字だな……。」

手紙を真田も覗き込んだ。

「あーもう！夏に、南の島へ来て、なんで海に来ねーんだ!?!いいのかわソレ、”人”として!?!」

「……ああもう、煩い……!縄文杉だってこの観光名物だろ……。誰が何処行こうと、それは自由だし……!」

湊も少しイライラしだしている。

「お前が原因だろ。」

真田は昨日の順平の話を出す。その話というのは、風花曰く「いやらしい話」だった。

「昨日のは、重たい空気を何とかしようって、オレなりに気イ使ったんすから。」

「俺に言うな。」

「……まあでも、それはいいんす。大事なのは、ヤロウだけでどうすんのっていう事実っす!持ち合わせが無ければ現地で調達!これ、兵法の初歩ナリってね!ズバリ、名づけて……」ヤクシマ磯釣り大作戦”!」

「磯釣り……?ナンパの事か……?」

「ねえねえ、どうスか?つか、真田サンいれば絶対イケますって!真田はかなりあからさまに引いていた。その真田の心情に、湊も激しく同意する。」

「有里、お前の意見も聞いておこうか。」

「……そんなことしてる暇あったら、屋敷でちょっと考え事したいんで戻りたいんですけど。やるんなら勝手にやっってください。」

「えーっ、オレらだけで1日中何するんスか？つか、あり得ねー。  
この流れはもう必然ですよ、必然！」

湊は踵を返し立ち去ろうとする。しかし、その腕を掴んで止めたのは意外にも真田だった。

「なら、いつもの通り・・・と言いたいところだが、生憎リーダー  
がいないんでな。だから副リーダーのこいつに現場指揮をさせる。」

「エエツ、何スかそれ!？」

「・・・だから、やるんなら勝手にどうぞって・・・」

「”作戦”だと順平が言っただけからな。」

「うっわ、超ヘリクツだ、それ!」

順平は真面目な顔で湊を見る。

「おい、ちゃんとマジメにやれよ、湊?”作戦”だかな。」

「だから、知るかかって言っただろ・・・。」

湊も苛立ちのこもった目で順平を睨んだ。

とりあえず、3人は近くのパラソルで休んでいた女性2人組みにア  
タックすることにした。

「おっ、さっそく目標捕捉ツ!じゃ、さっそく行こうぜ!」

「・・・作戦は”判断は任せた”。僕を巻き込むなよ・・・」

「そも行かねえよ、湊。お前が居なきゃ成功しねえし、第一リー  
ダーなんだからよ。まあ、こういう所での声のかけ方を教えてやつ  
からさ。」

「・・・だから、いらねーよそんなもん・・・」

ついに湊の口調が崩れ始めた。でも順平はお構いなしだ。

「・・・まずは、相手と共通の話題を探し出すのが有効なんだよね。  
だから、最初は誰でも答えやすい無難な質問から入る・・・コレ鉄  
則。」どこから来たの?」とか、「海、楽しんでる?」とかな。」

「・・・話を聞け・・・」

「そういう他愛ない質問で始めて、後は、会話のキャッチボールが  
重要なわけ。まず、オレが声かけて気を引くからさ、オマエが質問



の切り出し役な？」

「・・・知らねえ・・・」

しかし順平はお構いなしで女性に声をかけた。

## 第1ラウンド スタート

「ねえ、ねえ！お姉さんたち〜！」

「・・・海、楽しんでる？」

湊はやれやれ、と言ったかんじでいつものポーカークフェイスを作り、話しかけてみた。

「・・・は？どうだっていいじゃん。」

だが返って来た反応は冷たいものだった。

「あれ・・・あ、そんなこと言わないで教えてよ〜。」

順平はなんとか話を繋げようとする。

「なんで、君に教えなきゃいけないの？」

「な、なんでっつて・・・そんな、冷たいこと言わないでよ〜。」

湊はもう、会話の続行を諦めた。

「・・・おい、これのどこが”会話のキャッチボール”なんだ？」

「いや、これからっすよ、これから！」

順平はなおも女性に話しかけていく。無駄なあがきだ・・・と湊は思ったが、口には出さない。

「あの、お姉さん達、大学生ですか？それともOLさん？」

「あのさ・・・君たち、まだ若いよね？・・・高校生とか？」

「・・・その通り。」

湊は仕方なく順平の代わりに答える。

「ふ〜ん・・・高校生が、屋久島観光かあ・・・なんか、ムカツクよね〜。」

「ムカツク・・・と言われてもな。たまたま友人の別荘がここにあつて、招かれてるだけだからな・・・」

真田の言葉ももう、雰囲気悪化の原因にしかならない。

「へ、屋久島に別荘？スゴいじゃん、その友達。・・・うちらは、稼いだ自分のお金で遊んでるんだけどね。」

「・・・あ、そりゃ偉いつすねえ。」

「別に偉くはないけどさ・・・。・・・で、君たち、何の用かな？ここで素直に”ナンパだ”と言うのはまずいだろ。湊はとりあえず順平にアイコンタクトを送り、自分は黙っていることにした。でも順平は、思った通りに動いてくれない。

「・・・黙ってるってことは、何にも用は無いつてコト？それならはーい、じゃ、またねー。」

女性たちはそこから去って行ってしまった。

## 第1ラウンド 惨敗

## 第2ラウンド スタート

気を取り直して別の女性を探し始めた3人は、黒いビキニの女性が1人でいるのを発見した。

「おつ、体調、見てみる！お姉さまが”ひとりっきり”だぜ！出会い募集中ってことだろ！？成功率高そうじゃねーか？」

「あら、カワイコちゃんたち・・・うふふつ、お姉さんに何か、よ〜お〜？」

話しかけるまでもなく、向こうが気づいて話しかけてきた。

「ええと、こ、こんにちは・・・」

少し危険な香りのするその女性に、順平は少し興奮したようだ。

「・・・ぼ、ボクたちちよつとトイレ！！」

3人は急いでその女性から離れた。

「お、おい、湊・・・近くで見ると、なかなかかなりの・・・お姉さま”だぞ！”」

「・・・もつやめないか・・・？」

「ねえ、なぐにコソコソ話してるのぉ？」

湊が言ったところで、女性がまた話しかけてくる。

「えー？いや、あの・・・」

「キミたち、高校生でしょぉ？」

「は、はいっ！！・・・よく分かりましたね？」

「・・・職業柄？まあいいの、そんなことより・・・キミたち、お姉さんと遊びたいのかな？」

職業柄、といった言葉で湊は少し疑問を抱き始める。

「あゝ、えっとー、ダ、ダメですよねー？ボクらなんか、ほら、歳の差が・・・」

「・・・何？」

「・・・女性の雰囲気が変わった。

「さ・・・真田サン！真田サンの番ですって！！ほら、さっき行くって言ってたし・・・歳、近いし！」

「あつ・・・ああ。」

真田は順平の迫力に押されて、何とか女性に話しかけようと試みた。

「その・・・」

「・・・うふっ、キミの体、イイわぁ。細いのにマッチョで・・・いいわいいわぁぁ。そこの青髪のキミもカワイイけど・・・うん、キミに決めた！お姉さんと恋のバ・カ・ン・ス・・・しちゃう？」

「えっ、いや・・・」

「うふっ、誰にも内緒だぞ！」

あるうことが女性は真田の体に手を伸ばす。

「うわ、ちょ・・・さ、触るな！！」

真田に身の危険が迫っている。

「・・・ちっ、何でこうなる・・・！順平、助けるぞ。」

「オレ！？あ、ええと・・・お・・・お、おおお・・・」

「お？」

なかなか言い出せない順平に、女性が聞き返す。

「お・・・おばさんっ！！」

瞬間、女性を取り巻く空気が凍りついた・・・気がした。顔がピクピクと震えている。

「に・・・逃げろっ!!!」

「・・・もうちよっとやり方があったような気もするが・・・まあいい。」

3人はすぐ逃げ出した。

「あぶなかった・・・。」

真田は苦虫を噛み潰したような顔をする。

## 第2ラウンド 逃走

## 第3ラウンド スタート

今度は、奥のパラソルの女性が1人いるのを見つけた。

「女性1人・・・か。さつきみたいなのは・・・。」

「ハハ、だーいじょうぶツスよ。あんなことが2回も起こったら、それこそ天変地異だろって。つか、イケる気がするんスよね、今回こそは・・・!」

「・・・嫌な予感がする・・・。」

湊は呟くが、順平はもう女性に話しかけてしまっていた。

「すいません、お姉さん!」

「あら、何?」

「うおっと、ヤベエ・・・ええと・・・ひ、ひとりですか?」

順平が女性のなかなかの美人ぶりに顔を赤くする。

「そうよお。もうヒマすぎて困っちゃう。ところで・・・見てたわよ。あなた達、さつきからナンパしてたでしょ?で、どうだったの?」

「・・・あれはダメ以外の何物でもない・・・な。」

湊は何か嫌な予感がものすごくしていたが、平静を装って答えてみ

る。

「ふふっ、だと思ったわ。あなた達、女心が分かってないもの。」

「そ、それを言われると・・・」

「帽子くんは自分のコトばかりって感じ。女の子のために”してあげる”って、思いつかないんじゃない？」

「ハイ・・・」

女性の指摘は的を得ていたようだ。

「Tシャツくんはクールだけど・・・女の扱いはまだまだ知らないって感じ。」

「ま、まあ、そうかもしれない。」

「ていうか、何かめんどくさそう。理屈っぽい感じで。」

「う・・・」

しつかり真田の性格も掴んでいる。ある意味凄い、と湊は思った。

「んー、髪の毛のちよつと長いキミは・・・分かんないなあ。」

「・・・どういう意味だ？」

「ふふっ、ミステリアスって言うか・・・アンビバレンツって感じかなあ。言ってる意味、分かる？」

「・・・何となく・・・」

「あつ、かしこい。うん、やっぱりキミが一番好みかも。」

女性が湊の顔を見る。

「えっ、ちょ、待ってよお姉さん!!」

「なぐんで、冗談・・・。私、キミも気に入っちゃったな。」

「マ、マジっすか!」

「私に”してあげる”こと・・・教えてあげようか？」

「はっ、はいっ!!」

女性の妖しげな笑みに、順平は顔を赤くしながら頷く。

「でも、さすがに3対1はきついから・・・1人、選ばせてもらっていい?楽しくって・・・心が広い人がいいな。」

・・・この女性は確かにキレイだが、何か嫌な予感が離れない。

そう思った湊は、順平にとりあえず譲る。

「・・・順平、いいよ。」

「お！オマエ、わかってんじゃん！」

「しかし・・・」

真田が腑に落ちないような表情をして、女性を見る。

「さつきから、気になっていることがあるんだが・・・」

「うん、なあに？」

「・・・やはり・・・」

真田は口ごもりながら言った。

「ア・・・アゴに1本・・・あつてはならんものが・・・」

「え？え？」

女性？が顎を触る。

「私、剃り残しある？」

「ま、まさか・・・」

「いや〜ん、もう。うまく騙せたと思ったんだけどなあ。ざんねん・・・カワイイ男の子をたぶらかしたかったのにい。」

成る程、嫌な予感の正体はこれだったのか、と湊は納得した。

「う・・・うそだろ・・・？」

「ちよつと、君たちには早すぎたかもね。うふふふ、そっちに目覚めたらまた誘ってねえ〜。」

女性？は手をひらひら振りながら、パラソルから出て行ってしまった。

第3ラウンド ターゲットではなかった

「うまくいかねっすね・・・」

これまで全戦全敗。湊以外は悔しそうな表情をしている。

「・・・ナンパにや興味無かったんじゃ？真田サン？」

「勝負”にはこだわりたい。」

「・・・出た・・・。この熱血馬鹿・・・。」

湊は何気に酷いことをいいながら興味ないという風に足で砂を弄っている。

「ハア・・・。」

「問題は分かっている。お前の”欲望”が丸出しだからだ。」

「あつ！きつたねー、責任のがれだ！」

「事実を言ったまでだ。」

言い争いに発展しそうな2人を、止めるでもなく湊は見ている。

「そ、そう言う真田サンこそ、ハズレばつかじゃないスか！なんで女の子の前でも理詰めなんスか、意味分かんねっスよ！」

「なんだと・・・？」

まあ確かにどつちもないな、と湊は言い争いをぼんやりと聞いている。

「こうなったら、現場リーダー！どつちが悪いと思う！？」

「・・・どつちも。」

湊は即答した。

「俺は”勝負”にはこだわるんだ！」

「そーだそーだ！そんなんで納得できつか！つかオマエ、ちゃんと考えて答・・・え・・・。」

「知るか。どつちもどつちだ。・・・？」

順平がある方向を見ていることに気づいた湊は、そちらに目を向けてみる。

「どうした？・・・何かあるのか？」

真田もそちらを向く。

小さい棧橋の先。青いワンピースを着た金髪の美少女が、海を眺めていた。

「(・・・!??・・・あの子、どこかで見たような・・・?)」

湊は見覚えのあるようなないようなその姿に、必死に記憶を探ってみる。が、そんな記憶は見つからない。

「ちょ、何してんだよ！行くぞっ！」

「あ……」

湊は順平に引つ張られ、棧橋に近い岩場に連れて行かれた。

岩場の影に隠れて、3人は金髪美少女を眺める。

「お……最後の最後にスゲエ波だよ……！ニクいぜ、神サマ！つーか、マジ、カワイイ……」

「確かに……」

「やつべーよ、マジで。これ取りゃ、今までの負けなんてチャラでしょ。ここはひとつ、みんなで行かずに、1人ずつ慎重に行く作戦で、どうスか？」

「よし、採用だ。」

何か順平たちが話しているが、湊は必死に記憶を掘り起こして聞いていなかった。

「うしッ、なら順番決めるっスよ！勝った人から時計回りで。」

「……僕は最後でいい。」

「あ、そう？じゃあ真田サン、行きますよ……。最初はグー！ジャンケンポン！」

結果は真田がグー、順平がパーだった。

「ヤリイ、勝ちいい！じゃ、オレ1番、真田サン2番、オマエが最後ね。オシッ！」

順平は意気揚々と、棧橋の先に居る少女の方へ歩いて行った

最終ラウンド スタート

「あ……さっきからずっと……海、見てるね。あ……ひとり？」



順平の問いかけに少女が振り返る。正真正銘の金髪美少女だ。

「オレ、じゅ、じゅ、順平ってんだ。」

「・・・じゅ？」

「あ、えと・・・もしヒマしてたら、話でもしねえ？1人よか、楽しいんじゃないかな。」

「・・・人を探しています。」

「へ、へえ・・・」

「貴方ではありません。」

バシユツ。

効果音が聞こえてきそうなほど、見事に順平は斬られた。

順平は肩を落とし、こちらに歩いてくる。

「斬られたな・・・予想以上に早かったな・・・。」

「て、手強いつすよ、先輩・・・。」

「よ、よし、後は、俺が勝つだけだな・・・。」

今度は真田が、少女に向かって歩いていく。

「ああ・・・君・・・海が、好きなのか？」

「何でしょうか？」

どこかあの少女には感情というものがないような・・・そんな気がした湊だった。

「あ、いや、海はいいよな。トライアスロンの選手は、プールでの練習が中心の選手より、海で鍛えている人の方が強いぞ、やはり。」

「そういった情報は、わたしには必要ありません。」  
バシユツ。

真田もまた、順平と同じように斬られた。

でも真田は、どこか勝ち誇ったような笑みを浮かべて戻ってくる。

「フツ、勝ったな・・・。お前よりも長続きしたぞ。」

「長さの問題じゃねっつの！・・・ああ・・・なんかオレ、もう泣きそうッス・・・。」

「な、泣くな！俺までみじめになるだろうが……」  
ふと、順平が湊の肩に手を置く。

「……という訳だ。オマエが何とか拾わないと、トラウマんなっちまう。」

「俺は負けてない、負けてないからな……。後は任せた。」  
「……分かったって。」

湊はなんだかなあ、と思いつながら少女の方じ歩いていく。

結局、見覚えはあるような気がするものの、どこで会ったのかは思い出せなかった。

「……こんにちは。」

とりあえず湊は普通に声をかけてみる。だが、振り返った少女は驚きの表情を顔に出した。

「あなたは……」

何か普通とは違う感じになったことを敏感に察知した順平と真田がこっちに駆け寄ってきた。

「ひとまず危機回避を優先します。それに確認は、静かな場所でない……」

少女はそう言うと、森の中へ向かって走り出してしまった。

あまりに突然の出来事に、湊も驚きを隠せない。

「オマエ……何言ったワケ？走って逃げるって、絶対なんかやっただろ……つかオマエ、追いかけた方がいって！」

「何もしたつもりは無いけど……」

「余裕かましてる場合かつ！とにかく謝って来い、な？でなきや、共犯になっちまうだろ？今行けば、まだ間に合うって……！」

理由はともかく、湊は順平に言われるまま、少女を追って走り出した。

森、縄文杉の前。少女を見失った湊は一旦立ち止まり、辺りを見回す。

「・・・あ。」

少女は何とも分かりやすい場所にいた。縄文杉の看板の影に隠れていたのである。

「・・・あーっ、湊！！探したんだよ！」

そこに彩音もやって来た。

「・・・？何、あの子？」

彩音はそう言いながら少女に近づく。湊も続いた。

少女も出てきてくれた。

「やっぱり、あなたがたは・・・見つけました。」

そう言つと、少女は二人に抱きつく。

「あなたがたをずっと探していました。」

わたしの一番の大切は、あなたがたの傍にいる事であります！」

最終ラウンド 確保 ？

7月21日 く屋久島旅行2日目 湊side (後書き)

いかがでしたでしょうか？

いや・・・結構長くなってしまいました。

次は彩音サイドでお送りします！

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

7月21日NO.2 ～屋久島旅行2日目 彩音side～（前書き）

テスト約1週間前！でも投稿します。

今回は屋久島旅行2日目の彩音視点&夜です。

ついに出ましたアイギスちゃん。

～メインキャラ紹介12～

アイギス

対シャドウ非常制圧兵装のラストナンバー！。

機械だが、「黄昏の羽」というアイテムを中枢に組み込むことによつて影時間でも動け、なおかつペルソナも召喚できる。

10年前の事故で大破し、ラボで預かりとなっていた。彩音と湊に異常な執着を見せる。

では、どうぞ。

7月21日NO.2 〱 屋久島旅行2日目 彩音side

屋久島旅行2日目。

未だ暗い雰囲気が漂う女性陣を、風花が何とか気分転換にと縄文杉を見に行くことを提案し、実行に移していた。

勿論、男性陣には使用人をに手紙を渡すよう頼んである。

そんな感じで、森の中。

「空気、おいしい……。こんな森林浴なんて、厳戸台じゃ絶対出  
来ないですよね。」

風花が話しかけるが、ゆかりを始めとした他の面々は黙ったままだ。  
ゆかりと美鶴は気まずい空気が漂っているし、彩音は何か考え事を  
しているようだった。

「そ、そうだ、昨日の順平くん……。なんだか、やらしい話ばっか  
りで、困っちゃいましたよね……。私たちだけで来て、よかった  
かも……。」

「……。ん？……。まあね。」

とにかく場を何とか明るくしようという風花の話題も、すぐ終わっ  
てしまう。

はぁ……。と風花が内心ため息を吐いたとき、美鶴の携帯が鳴った。  
「……。はい、私です……。待ってください、スピーカーホンを  
切り替えます。」

美鶴が素早く携帯をスピーカーホんに切り替える。

「どうぞ。」

『今、島の研究所にいるんだが……。廃棄されて、動かないはずだ  
った機械が、勝手に出て行ってしまったんだ……。』  
相手は幾月だったようだ。

「機械……？」

「ええと……。どういった物なんですか？シャドウ以外だと、勝手に

が違つので・・・」

風花はペルソナで探すつもりでいるようだ。

『戦闘車両の一種でね・・・実は”対シヤドウ兵器”なんだよ。』

「対シヤドウ兵器・・・って、要するに”戦車”ってコト!？」

4人の脳裏に、砲台とキャタピラがついたおなじみの”戦車”が浮かぶ。

「ちょ、みんなに連絡しなきゃ!えっと、ケータイ・・・」

ゆかりは慌てて携帯を取り出す。

「実は今、男子3名と別行動中でした。全員の召集には時間がかかりそうです。」

『そうか・・・。とにかく、出来るだけ早く当たってくれ。私もすぐに戻るから。』

「もし、目標が捕獲不能と判断される場合、破壊しても宜しいですか?」

『破壊はね、たぶん無理だね。』

「無理って・・・そんなのホントに止められるんですか・・・?」

『とにかく、やってもらうしかない。また後で連絡するよ。』

そこで、幾月からの電話は切れた。

「ダメです、みんな繋がりません。」

「順平のことだから、また海にでも行ってるんでしょ。でも、湊は残ってると思っただけだなあ・・・。順平に強引に連れてかれたか・・・。」

「・・・まあいい。まずは、我々の装備を取りに戻ろう。そうすれば山岸のペルソナでも探せる。もっとも島全体となると、簡単じゃないが・・・。」

「もうっ!カンジンな時に・・・!」

4人はすぐ元来た道を引き返し、召喚器などの装備を取りに戻った。

その頃、男子が”ヤクシマ磯釣り大作戦”というナンパ作戦をして

いることを、女子達は知らない。(知っていたら彼女達は真つ先に海岸に向かい、男子3人を処刑していただろう。)  
また、男子も女子が”戦車捕獲作戦”をしていることを知らない。

それぞれが装備を持ち、風花のバックアップの元で森の中の探索が始まった。

しかし、固まって行動するのではなくバラバラに行動している。だがもし目標を発見した場合は、すぐ風花に知らせ、他のメンバーにも通達される手はずになっていた。

今、彩音は1人で森の中を探索中である。

きよるきよると辺りを見回してみるが、どこにも戦車らしき影はない。

「(こんな森の中じゃあ、戦車って走れないんじゃないや・・・?いや、小型戦車?でもそれじゃあシャドウにすぐやられちゃうし・・・戦車の特徴、もっと聞いておけばよかった・・・)」

彩音は肝心なことは教えてくれなかった幾月に多少の苛立ちを感じつつ、森を歩く。

「(でも、昨日の映像・・・なんか引つかかったんだよね・・・不自然っていうか。湊も気づいたみたいだし・・・)」

いつの間にか考えていることは脱線していた。そして、つい考えに集中して進んでいく。

「・・・あれ?」

気づいた時、そこは縄文杉だった。無意識に来てしまったらしい。

「・・・?」

ふと、足音が聞こえた。誰かと思い、縄文杉の反対に回り込んでみる。

そこに居たのは、半袖Tシャツに短パンという格好の湊。

「・・・あ。」

湊は何かを見つけたように、縄文杉の看板を見ている。



「あーっ、湊！探したんだよ！」

湊の方に駆け寄ってみれば、湊はちらりと彩音を見た。

彩音も湊が見ている方向が気になりずつと見ている看板をしてみる。そこには、看板に隠れるようにして立つ、青いワンピースの金髪碧眼の少女がいる。

「・・・？何、あの子？」

彩音は少女に近づいて行ってみる。湊も後に続いた。少女も看板の影から出てきた。

「やっぱり、あなたがたは・・・見つけました。」

少女はそう言つと、二人に抱きついてきた。

「あなたがたをずっと探していました。」

わたしの一番の大切は、あなたがたの傍にいる事であります！」

彩音と湊の思考は、フリーズした。

確かに見覚えはあつた気がするが、彼女に何かしただろうか？いや、何もしてない。してない気がする。

なら、今の状況は・・・？

「いたいた・・・って、ふえっ！？何その展開！？そんなんアリかよ！？」

「馬鹿な、どうなってる・・・！？声もかけてない筈だッ！？」

二人の思考を引き戻したのは、順平と真田の声だった。でも、少女は離してくれない。

「やあつと見つけた、彩音・・・って順平！！どこ行つてたの！？探したんだから。」

「と言うか・・・有里くん以外、なんで水着で森の奥に・・・」

「まったく、こっちは大変な事に・・・って、あれ！？彩音、それに湊くん・・・何で抱きつかれてるの？その子・・・誰？」

ゆかりたちもやって来た。ゆかりは湊が抱きつかれているのを見た時、怪訝そうな表情をする。

「・・・さあ・・・？」

「わたしが一番の大切は、あなたがたの傍に居ることでありま  
す！」・・・なんだって。」

「・・・ええ？」

ゆかりは意味が分からないという風だ。意味を分かっているのは、  
この場では少女だけなのだろうが。

「聞いてくれ。実は少し面倒な事が起きてる。休暇中に済まないが、  
すぐに戻って戦う準備をしてくれ。」

「いや・・・準備はいいよ。探し物は見つかったからね。」

幾月もやって来た。

「理事長・・・どういう事ですか？」

「やれやれ・・・探したよ。勝手に出たらダメだろ、アイギス？」

「・・・はい。」

幾月の言葉に、アイギスと呼ばれた少女は抱きついたまま返事をす  
る。

「・・・あの、えっと・・・そろそろ離れてくれない？動けないし・

・・・」

「・・・了解であります。」

少女は渋々といった感じで二人から離れた。

「とりあえず・・・詳しい話は屋敷に戻ってからしようか。」

それからしばらくして。

屋敷に戻ったメンバーは応接室に集められていた。少女の姿は見え  
ない。

「いやはや、心配かけて済まなかったね。もう大丈夫だ。」

「あの・・・戦車を追うとかいう作戦はどうなったんですか？」

「・・・戦車？追う？」

「ああ、えっとね・・・」

意味が分かっていないらしい男性陣に、彩音は説明してあげる。

「あ、それもう完了だから。・・・アイギス、こっちへ来なさい。」  
「はい。」

彩音の説明が終わった頃を見計らって、幾月が先ほどの少女の名前なまえを呼んだ。

少女が部屋に入ってくる。しかし、その姿は先ほどとは全然違っていた。

「彼女の名は”アイギス”。見ての通り”機械の乙女”だ。」

「初めまして、”アイギス”です。シャドウ掃討を目的に活動中です。」

そのアイギスの格好といえば、こうだ。

肩や足の付け根部分は完全に機械の部分が露出している。

体には布張りがされてあって、首には赤いリボンが巻かれていた。

足も人間のような形をしてはいない。手には銃が内蔵されているらしい。

頭のヘッドホンかと思われた部分は、よく見ればモーターのような機関だった。

「今日付けで、皆さんと共に行動するであります。」

「うそ・・・まるで、生きてるみたい・・・。」

「信じられん・・・。」

「こんな力ワイイのに、ロボって・・・なにこのトホホ・・・」  
皆は次々と驚きの声をあげる。

「10年前、シャドウが暴走した時の保険として”対シャドウ兵器”というのが計画されてね。アイギスはその中でも最後に造られた1体・・・そして唯一の生き残りなんだ。」

「対シャドウ兵器・・・ということは、まさか、ペルソナを・・・？」

「はい。ペルソナ呼称”パラディオン”を扱える仕様であります。」

「・・・機械でも、ペルソナを使えるのか・・・。」

ペルソナを使えることに、更に驚くメンバー達。

「彼女は、10年前の実戦で大ケガを負って、ここの研究所で管理

されていたんだ。なぜ今朝になつて急に再起動したのか、いまいちハッキリしないんだけどね・・・まあ、これから仲良くしてやってくれ。」

「精神が備わつた、対シャドウ兵器・・・すごい・・・すごいですっ！」

機械に詳しい風花は目を輝かせている。

「・・・あの、ところでさ、ちよつと確認したいんだけど・・・、あなたさつき、抱きついてたよね・・・彩音と湊くん。その、二人を知ってるの？」

「はい、わたしにとつて、お二人の傍にいる事はとても大切であります。」

「フム、人物認識が完全じゃないのかもね・・・。あ、それとも”寝ボケてる”って事かな？んー、そいつは興味深いぞ・・・。フムフム・・・」

「寝ボケてるつて・・・」  
考え出した幾月にゆかりは何とも言えない視線を向ける。

「・・・まあ、それは後で考えるとして、だ。なあ、みんな知ってたかい？実はここ、色んなレジャー設備がズラリ揃ってるんだよ。テニスコートに。プールバーに、あとカラオケなんかも完備らしい・・・。聴かせちゃおうかな？僕のメドレー。」

「ええっ・・・」

順平があからさまに引いている。

「ラインナップがちよつと古い気が・・・？あ、でもカラオケなんかはいいかも！湊、私達の歌声、聴かせちゃう？」

彩音が話に乗った。湊はそれに対し、面倒くさそうな顔だ。

結局この後は全員でカラオケに行くことになり・・・。満足そうな幾月、満足そうだけどちよつと苦笑が消えない彩音、疲れた顔の残り全員がいた。

7月21日NO.2 〱屋久島旅行2日目 彩音side〱(後書き)

いかがでしたでしょうか？

屋久島旅行、次で最後(の予定)です！  
なかなか書いていて楽しかったです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

7月22日 く屋久島旅行3日目く（前書き）

屋久島旅行の最終話！

男性主人公の話と女性主人公の話混ぜて書く、というのは難しい  
というか、手間がかかるというか。それを実感しました。  
でも！だからといってやらないつもりもありません。

では、どうぞ。

7月22日 く屋久島旅行3日目

明日はフェリーに乗って帰るだけという、屋久島旅行3日目。海岸には、ある1人を除く全員が水着姿で集まっていた。帰る前にもう1度、海で遊ぼうということのようだ。勿論、ここには昨日正式に仲間になったアイギスもいる。

「んー、華の屋久島旅行も、はや3日目か。明日はもう帰るだけだし、正直、3日じゃ短けーよなあ……。まあでも、それっぽっちの割にや、色々あったか。」

「理事長の歌とか、お前の歌とかな……。おかげで昨日の晩は、殆ど寝られなかった……。」「目の下に薄く隈を作っているのは、真田だ。」

昨日はあの後、みんなでカラオケに行ったのだが、その時の順平と幾月の意味は色々な意味で凄かったのだ。

「海岸で、何かの任務でしょうか？」

「ハハ、そんなんじゃない。ただ遊びに来ただけだ。」

「そういえばアイギスは”遊ぶ”って、分かる？」

「もちろん分かるであります。娯楽は心の栄養です。」

「おおー、そうそう。へえ、結構フツーに話せんじゃん。」

アイギスは早くも打ち解けているようだ。でも、アイギスが機械であるということからか、喋り方はぎこちないが。

「ま、とりあえず帰る前に、いつぺんくらい、ちゃんと泳ごうぜ。」

順平がアイギスを連れて波打ち際へと走っていく。

「あ、ちよつと、順平くんっ……。！……。アイギス、塩水に浸けて平気なのかな……。？」

「そんなヤワじゃないでしょ。」

「そうそう。ポートアイランドだって、海の傍だし。それくらい平気じゃないとダメだって。」

彩音もゆかりに同意する。

するとそこへ、アイギスだけが戻ってきた。

「あれ、海に入るんじゃないの？」

「皆さんも、ご一緒されるのがいいであります。1人だけが楽しい行動は、本当の”遊ぶ”ではないであります。」

「えー、メンドいなあ……。ヘンなところ律儀なんだから……。」

「まあまあ。そー言わずに、ねっ？」

彩音に言われて、渋々と言った感じで海岸の方へ歩いていくゆかり。でもその横顔は、どこか楽しそうだった。

「私たちも、行きましようか。」

「……。そうだな。」

風花と美鶴も、海の方へ歩いて行った。

1人でビーチパラソルにいる真田の元へ、幾月がやって来る。

「どうだい、楽しんでる？ いやあ、色々あったけど、何とか今日は終日羽根を伸ばせそうだね。」

「……。そうですね。」

真田は昨日の幾月の歌が思い出されるのか、ぎこちない笑みで返す。

「真田さん！ 何してんスカー！ 真田サンの番っすよー！！」

「俺の番って……。何をやってんだ？」

真田が首をかしげる。

「ハハ、楽しそうで良かったよ。明日の事だけど、帰りの船の時間は言っただよな？ 僕は多分、先に港へ行ってると思う。朝早いから、遅れないようにね。」

「はい。伝えておきます。」

「じゃ、寮に帰ったら、また宜しく頼むよ。」

「はい。」

真田が頷いたのを確認すると、幾月は手をひらひらと振りながら屋敷の方に歩いて行った。

「真田せんぱーいー！！」

再度真田を呼ぶ順平の声に、真田もビーチパラソルから出た。



「ちょ、待ってアイギス！」水鉄砲”ってそういう意味じゃないから！うっぎゃああー！！」

「順平くん、ダウンです！」

「おっし、総攻撃チャーンス！」

「よし、とっつけぎー！！」

「ちょ、タイム、マジ無理だっつ・・・ギャー！！」

ビーチにみんなの笑い声が響く（約1人は悲鳴だが）。

みんなが楽しそうに遊ぶ中、彩音の脳裏に1枚のカードが浮かぶ。

”0番 愚者”のカード。特別課外活動部のコミュがランク5になった。

順平への総攻撃が終わった頃、順平がふと何かに気づいた。

「あれ、そっぴや湊は？考えてみれば居ねーな。」

「ああ、湊なら・・・「湊さんでしたら、”ちよつと考え事がしたい”とおっしゃって、自室にいます。私も残ろうかと考えましたが、湊さんが”みんなが行くのなら楽しんで来い”と言って送り出してくれたであります。」・・・とそういう事。」

「何だよ、勿体無えーな。実はただ夏バテとかして、動きたくないだけなんじゃ・・・？」

順平の言葉にアイギスがぴく、と反応する。

「それは本当でありますか？ではすぐ戻り、湊さんと健康状態を確認後、適切な処置を・・・」

「ま、待ってよアイギスーっ！！湊は午後になったら来るって・・・！！」

すぐにくるりと踵を返し、屋敷まで戻ろうとするアイギスを一生懸命止めた彩音だった。

その後、また順平が総攻撃を食らったのはまた別の話。

アイギスを何とか送り出した湊は、割り当てられた部屋でノートパソコンを操作していた。

先日見た映像の違和感がどうしても気になり、武治氏に頼んで映像のディスクを貸してもらったのだ。

ディスクを入れ、再生するとすぐあの映像が始まる。

研究員 ゆかりの父親が、顔はよく分からないものの、必死な表情でカメラに向かって訴えているのが分かる。

ふと湊が、ある場面で映像を一時停止する。

「・・・無い。」

湊の目は、ゆかりの父親ではなく、その脇に向いていた。

一昨日、自分が見た気がした違和感が、綺麗になくなっていく。

そう 茶髪の小柄な人影が。

そんなはずは無い、というのは分かっている。事故の当日、あれだけの荒れた現場に子供が入れる隙など無いだろうことは。

ただ・・・その姿をどこかで見たことがあるような気がしてならなかった。だが思い出せない。

「（・・・気のせい、だったのか？ただの見間違い・・・？）」

湊は何回もその場面を見返してみる。しかし、元々の映像も荒く、そのようなものは見つからなかった。

何回目かの”一時停止”を押したところで、湊はため息をついた。

そして、そのままウィンドウを閉じてディスクを取り出す。

ディスクをケースにしまったところで、ふと頭の中にカードが浮かぶ。

”0番 愚者”のカード。

「・・・姉貴たち、楽しんでるみたいだな。」

湊は立ち上がり、海側にある窓から外を眺める。

木で海岸の様子は見えないが、コミュランクが上がったということを楽しんでいるのだろう。

湊はディスクを手に取ると、返しに行くために部屋を出た。

7月22日 く屋久島旅行3日目く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ちよつと先の話を書きますと、9月以降はちよつと個人的に書きたいイベントが多いです。オリジナル話もありますよ。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

7月23日 く荒垣と復讐代行（前書き）

ついった始めました。興味のある方はimport sevenで検索してみてください。

口調・・・というか、性格が全然違います。

では、どうぞ。

7月23日　〜荒垣と復讐代行〜

特別課外活動部のメンバーが屋久島から無事帰ってきて、寮で思い思いに過ごしている頃。

辰巳ポートアイランドの裏路地では、不良たちがいつものように騒いでいた。

その近くに、荒垣は座っている。しかし、どこか様子がおかしかった。

荒い呼吸を繰り返し、額には脂汗が滲んでいる。

そこに、3人の人影が近づいていった。

その中のリーダー格の少年　タトゥーの少年が、荒垣の少し前に立つ。

「随分と苦しそうですね。」

「！・・・オマエらか・・・。」

荒垣はちらりと3人を一瞥する。

周りの不良たちは、3人の姿を見ると急に騒ぎ始めた。

「やべえ、あいつらだ・・・。」

「あー、あの3人が例の？ほんとだ、キテンねー！」

「バカ！行くぞ！」

溜まり場にいた不良たちは、蜂の子を散らすように去って行った。それを、ドレスの少女が無言で見送る。

「何故、他の者は私を見るたび、姿を隠そうとするのでしょうか。まるで、路地裏のネズミですね。」

「・・・さあな。」

それは絶対オマエの格好のせいだろ、とは荒垣は言わないでおく。

「ジン・・・彼にカプセルを。」

タトゥーの少年が言うと、脇にいた眼鏡の少年が荒垣にビルケースを渡す。

荒垣はすぐそのビルケースから1錠薬を取り出すと、すぐ口に放り

込み、飲み込む。

「・・・悪い。礼はいつもの方法で・・・。」

荒垣が立ち上がり、路地裏から出て行こうとした。

「待ちや。」

荒垣を止めたのは、眼鏡の少年だった。

「今回は代価を頂く代わりに、話を聞かせて欲しいのです。かつての同志にも話を伺いましたが、何も教えてくれないものでね。・・・あの”ペルソナ使い”達が、何やら騒がしいのですよ。彼らはこのところ、月が真円になるたび”宴”に繰り出す・・・。あの”塔”にも頻繁に立ち入っているようですし・・・何故、あんな戦いを始めたのです？」

荒垣は言いにくそうに顔を少しだけ歪めた。

「知っているのでしょうか？言えませんか？仲間・・・だからですか？」

「違うッ！俺ももう、連中の仲間なんかじゃねえ。」

「なら、教えてください。」赤の他人”より、今はカプセルの方が大事なのでは？」

「チツ・・・。」

荒垣は自分に舌打ちする。もう縁を切ったはずなのに、まだ 特別課外活動部の仲間だった真田や桐条、1ヶ月半ほど前にここに来た2年生たちのことを思い浮かべてしまうことに。

「・・・離れてた身だ、詳しい事は知らねえ。ただ・・・あの敵を全部やれば、影時間やあの気味の悪い”塔”が消える・・・そう、聞いている。」

「影時間を消す・・・という事ですか？」

タトウの少年の顔色が変わった。

「どついう事です！？なぜペルソナ使いが、影時間を消すなどと・・・。」

「ああ？」

「しかもあの”滅びの塔”までも！」

「滅びの塔”だ……？……あんなブキミなモン、消せるってんなら試すだろ。」

荒垣はタルタロスを思い浮かべる。

確かにあの”シャドウの巣”となっている場所が消せれば……と、普通の人間なら思うだろう。

「……」

「タカヤ……」

眼鏡の少年とドレスの少女がタトウの少年を見る。

「ええ、分かっています。」

タトウの少年がさういうと、路地裏を出て行く。後の2人もそれに続いた。

残された荒垣は、1人呟く。

「フツ……今さら戻れつかよ……俺の力は、もう……昔みてえな純粋なモンじゃねえ……。」

荒垣もまた、路地裏から出た。

7月23日 く荒垣と復替代行く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

さて・・満月戦までゲームの時間軸でいくとあと2週間となりました。

でも今のところの問題は・・・明王杯と合宿だったり。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。



7月24日 くなるほどなー (前書き)

テスト終わった&修学旅行まであと4日!

・・・タイトルは気にしないで下さい。

では、ごっげ。

7月24日 くなるほどな〜

「・・・朝です！」

彩音はその声で、まだ眠いというように寝返りをうつ。

「起きて頂きたいであります。」

「うつ・・・もうちょっと・・・？」

言いかけたところで、ようやく彩音は異変に気づいた。

鍵は掛けているはず。なのに人の声が凄く近くでする・・・？

彩音はがばつと起き上がった。驚いた目でベッドの傍に立っている人物 アイギスを見る。

「無事に起床しましたね。任務完了であります。」

「え！？『任務完了であります』じゃなくて！何でココに！？」

「わたしの一番の大切は、あなたがたの傍に居ることです。」

では、これから湊さんを起こしに行きますので。」

アイギスが踵を返すと、丁度タイミング良くドアがノックされる。

「ゴメン、ねえ、起きてる？実は、”あの子”がどこ探しても居なくて、ちよつと手伝って欲しいんだけど。」

「・・・屋久島の時みたいに、勝手に出てったかもしれないんだとさ。」

ドアの外には、ゆかりと湊がいるようだ。

「わたしの名前は”アノコ”ではありません。アイギスなら、ここにおります。」

「え・・・？」

「・・・姉貴、入るよ。」

返事を待たずにドアが開いた。

「アイギス！？あなた、いつの間に・・・」

「この方は就寝中でした。ドアの開錠には2分かかりました。」

「モロ”不法侵入”じゃん！」

ゆかりは頭を抱える。湊は眠そうに、目をこすっていた。

「夜は作戦室に居てって言ったでしょ!？」

「今後、わたしの待機場所はココもしくは湊さんの部屋が良いかと思いますが、何か？」

「・・・唐突に何言い出すんだ、アイギス。姉貴とは同姓だからまだよし・・・良くは無いけど、何で僕の部屋なんだ？」

「問題点があれば速やかに対処します。」

「いや、質問の答えになってないし・・・」  
今度は湊が頭を抱えた。

「あー・・・まあ、彩音とは女の子同士だし・・・当人がいいならいいかもだけど・・・。・・・部屋、すごい狭くなると思うよ? いいの?」

「・・・えーっと、それはちょっと遠慮したいかも・・・」

「ダメだつて、アイギス?それに、湊くんは論外だしね。」

「・・・仕方ないであります。」

アイギスが少し落ち込んだように俯く。

「・・・せめて3階に部屋を用意してもらっぐらいのことは出来るだろ。そっち行ってくれないか？」

アイギスが顔を上げた。

「あと、勝手に寮の外へ出たりしないでよ?」

「命令であれば、従うであります。」

「ハア・・・なんか疲れた・・・。じゃ私、朝練あるから行くね・・・」

ゆかりは肩をすくめて、部屋から出て行った。

「・・・ゆかりに叩き起こされたせいで、もう目も覚めたし・・・下で待ってるから。」

湊もそう言つと、手をひらひら振って部屋を出て行った。

「なるほど・・・皆さん本来は、朝になると”学校”へ行く訳ですね。なるほどな!。」

アイギスは1人で頷いている。

「・・・あの、着替えとかしたいから、アイギスも一旦外へ出てく

れない・・・？」

彩音が困惑気味に言うが、アイギスには聞こえていないようだ。彩音は朝から大きなため息を吐いたのだった。

昼休み。今日は試験結果が張り出される日だ。

彩音と湊は連れ立って順位を見に行った。

「・・・あ、来た来た。今回は引き分けだね。」

「・・・引き分け？」

既に遥がそこにいた。そして、試験結果の上の方を指差す。

1位 有里 彩音

有里 湊

満嶋 遥

全くの同点だったらしい。

「偶然っていうか、奇跡？こんなことは無かったって、先生も言うてたよ。」

「確かに、これは・・・。同点1位が3人、しかも全員転校生・・・って、普通無いね。」

「でしょ？いつか抜かすよ。」

冗談ぽく言って、遥は微笑んだ。

「そっいえば、屋久島は楽しかった？」

「うん！色々刺激的な体験がたくさんあったよ！」

「・・・まああれは確かに刺激的というか、何と言うか・・・」  
それからしばらく、3人は屋久島旅行の話などで盛り上がった。

夜、路地裏。

今日は昨日の3人組のこともあってか、不良などはいなかった。

だが、その中で1人だけいつもの位置に座る荒垣がいる。彼はいつものように、ただ座っているだけで何かしている様子も無い。

そんな路地裏に、遙が入ってきた。

遙は無言で荒垣に近づく。荒垣も、そちらに視線を向けていた。

つかつかと荒垣の隣まで来ると、遙は荒垣の隣に腰を降ろす。

「・・・また会ったでしょ、あの3人組に。」

「・・・」

「呼んでくれればそれくらいやるのに・・・」

「別にいい。俺が勝手にやってることだ・・・。仲間<sup>仲間</sup>にやってやったらどうだ？」

「何の事？僕は別に平気だし、特別課外活動部員<sup>あの人たち</sup>にはいらなくていいよ？」

荒垣は疑り深い目で遙を見た。でも遙はいつも通り、考えが全く読めない。

ふ、と遙が今までの表情から真剣な顔に変わる。

「・・・ゴメン。」

「あ？」

「うづん、なんでもない。」

荒垣はその謝罪の意味が分からなかった。

遙は立ち上がる。

「ま、そろそろ行くね。じゃ。」

「おい、待てよ・・・」

荒垣は遙を呼び止めようとするが、遙は振り向かず去って行った。

「ったく、あいつは・・・何が言いたい？」

悪態をつきながらも荒垣は、遙の後を追うことはしなかった。

7月24日 くなるほどな〜 (後書き)

いかがでしたでしょうか？

さっきまでの凄い雨が降ってました。雷も鳴ってるし・・・。  
梅雨入りしたとはいえ、最近雨多すぎじゃないですかね？

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

7月25日 く宣戦布告く(前書き)

ついに明日です、修学旅行!

とにかく楽しんでこようと思います。

では、ごんげ。

7月25日　～ 宣戦布告 ～

今日は終業式、つまり明日からは夏休みだ。

長すぎる校長の話も聞き流し、クラスは解放感に包まれている。

彩音たちも思い思いのことをしている中、美鶴が入ってきた。そのせいで少し周りが静かになる。

「ちょっといいか、有里。」

「・・・何でしょう、先輩。」

用があつたのは湊の方だったようだ。

「実は夏休み中の部活のことなんだが、今年はちょっと特殊だな。

他校に合宿に行くことになっているんだ。」

「合宿・・・ですか。」

「それも、ボクシング部と合同だな。」

「えっ・・・って事は、私も行くって事ですか?」

彩音が驚いて聞き返す。

「そうなるな。そちらについては、後で明彦から詳しい連絡があるだろう。とにかく、その合宿のための練習をすることになっている。明後日から1週間、練習だ。」

「・・・分かりました。」

「詳しい時間などは後で、な。」

美鶴はそれだけ言うのと、踵を返して教室を出て行った。

丁度そこに、タイミングよく彩音の携帯が鳴る。

「真田先輩からのメールだ。・・・やっぱり、その合宿のことみたい。」

彩音がメールを確認しながら言った。

「・・・まあ、いいんじゃないか。屋久島行ったばかりであれだけど、また楽しむか。」

「そうだね!」

その後二人は、それぞれの部室へと行き、その詳しい日程などを聞



いた。

夜、ポートアイランド駅の裏路地。

また、いつもの3人の人影が入ってくる。勿論、その目的は荒垣だ。

「こんばんは。お元気そうで何よりです。」

荒垣は無言で3人を見る。

「ほれ、薬や。」

眼鏡の少年が差し出すビルケースを受け取る時も、荒垣は無言だった。

「そう言えば彼ら・・・また1人、面白い仲間を加えたようですね。・・・もとい、あれは1人ではなく”1つ”でしょうか。」

「別に興味ねえ。」

しれつと言う荒垣を、ドレスの少女は無言で見つめていた。

「あなたから聞いた事・・・本当のようですね。彼らは本当にやる気のような。まったく嘆かわしい・・・これでは私たちも、立たない訳にはいきません。」

「・・・！」

荒垣が一瞬、キツとタトウの少年を睨みつけた。

「彼らは何をしようと構わない・・・力の使い道は持ち主が決める事です。しかし彼らは影時間を消すと言っている。それは力そのものを否定することです。それだけは、何があっても許容できません。」

「

「好きにすりゃいい・・・」

荒垣は立ち上がると、付き合ってもらえないとばかりに路地裏から出ようとした。それを、また眼鏡の少年が止める。

「待ちや。お前・・・どないする気や。知つとるで。戻って来いて、誘いが来とるやろ。」

「・・・ムカつくぜ、このストーカー野郎が。」

「わしらはアイツらを止める。アイツらに味方する言っんやったら、

真つ向カタキ同土や・・・ええんか？」

「前にも言つたる。俺にはもう、関係ねえ・・・」

荒垣はそう言うと、裏路地を出て行った。

「・・・彼のようなことを言いますね。盗み聞きはよくありませんよ。」

タトウの少年が言うと、後ろの建物の影から呼ばれた人物が出てくる。

「勘で言つたら当たってた、ってところだろうけど、その勘の良さは褒めようか。」

「では、聞きましょう。あなたは・・・」

「答えはNOだ。僕は絶対に手を貸さないよ。・・・何故、影時間を求める？」

少年の問いを即答で拒否した遙が逆に訊く。

「何故？妙なことを言いますね。」

「妙なんかじゃないよ。影時間、そして力が消えれば・・・君たちは生きることが出来るのに、何故それをしないのかってことだ。」

「・・・」

復讐代行者達と遙のやり取りは、いつの間にか緊張したものになっていた。

「ま、いいや。でも、君たちが彼らを傷つけるようなことをすれば・・・」

全力で妨害させてもらうまでだけどね。」

「ほう・・・珍しい。滅多に表舞台に出ないあなたが。」

「それは違うな。あくまでも僕は裏方。でも、上がらせてもらうなら上がらせてもらうなりの覚悟はするってところかな。」

遙は踵を返し、そのまま路地裏から出て行った。

7月25日　　〳宣戦布告〵（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ちよつとストレガと遥を因縁深い（？）ものにしてみたり。タイトルの通りです。

でもこんなこと言っても、しばらくは活躍・・・というか、表立った行動はしない予定です。

〵意見、〵感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

7月29日 く白き守護者く（前書き）

ただいまーです！いや、暑かったし疲れた・・・。

けど、それ以上に楽しかったですけどね。お土産たくさん買ってきました。

お寺で四天王の像とか阿修羅の像とか見るたびに、「あの時はお世話になりました・・・っ！」と頭の中で言っていたのはここだけの話（笑）。

ペルソナで助けていただきました。

では、どうぞ。

7月29日　く白き守護者く

数日前から本格的に、部活の特訓が始まった。

フエンシング部に所属している湊、マネージャーの仕事に追われることになった彩音も夜には疲れた顔をしていた。

満月戦が迫ってきてはいるものの、今日は先輩2人が居ないのでタルタロスをナシにして、早めに休むことにした矢先。

けたたましい警報の音が、影時間に鳴り響く。

『お休み中にごめんなさい！実は、シャドウの反応が見つかったの！急いで4階に集合してください！』

「シャドウ・・・！？何で、まだ満月は先のハズ・・・！」

彩音は急いで制服に着替え、召喚器と武器を素早く準備して4階の作戦室に向かう。

湊も同様だった。

全員が作戦室に駆け込むと、既に風花と美鶴が待機していた。

「何事スか！」

「市街地にシャドウの反応だ。さっき山岸が偶然見つけた。」

「エッ・・・なんで？満月って、まだの筈じゃ・・・」

「それ、私も思ったんですけど・・・？」

2人が首をかしげる。

「違うの。反応はごく普通のシャドウだから。でもシャドウは普通、タルタロスの外ではこんな風に暴れないんですが・・・」

「場所は長鳴神社の参道前の辺りだ。近くに居た明彦が、先に行ってる。あいつ1人で充分だと思うが、念のため準備してくれ。」

「了解っス！」

彩音と湊は、それぞれ持つてきている自分の武器の入った袋をしっ

かり握りなおした。

それからしばらくして。

作戦室の機械に、外部からの通信が入った。

「ハイ、こちら山岸です。」

『今現場にいる。悪いが、すぐ来てくれ。』

「どうした？苦戦してるのか!？」

『いや、シャドウは片付いた。・・・と言うより、片付いてたと言った方が正確だな。』

真田の言い回しに、仲間たちはそれぞれ良く分からない、と言った顔をした。

「何があつた？」

『俺の代わりにケガした奴が居るんだ。出来れば助けたい。』  
それだけ言つと、真田からの通信は途絶えた。

「”代わり”って、どういうこと?」

「オ、オレに訊くなよ。」

「とにかく行くぞ。」

美鶴の号令で、とにかく現場に向かうことにした。

長鳴神社の前。

白い犬が、血まみれで横たわっている。傍では、真田が犬の様子を見ているようだ。

「え、コロちゃん!?コロちゃん!しっかりして、コロちゃん!」

コロマルの姿を確認した風花が急いでコロマルの傍に駆け寄る。

「知ってるのか?」

「はい、この辺じゃ有名な犬で・・・ってか、すぐ手当てしないと!」

「とにかく止血と消毒だな。」

ゆかりは慌てて召喚器を取り出す。彩音もまた、タルタロスにいつ

も持って行っている道具袋の中から包帯を取り出した。

「全く・・・大したヤツだ。何しろ犬がシャドウに立ち向かって、しかも、倒したんだからな。」

「え、待てよ、それってつまり・・・この犬コロ、ペルソナ使いつて事!？」

「”守った”・・・と言っています。ここは”安息の場所”だそうですね。あそこに、花束が。」

アイギスがある場所を指差す。そこには、最近備えられたものらしい花束があるのが見えた。

「あの花束・・・もしかして、神主さんが亡くなった事故の・・・」  
「ホントに守ってたんだ・・・」

風花とゆかりがその花束を見て驚いていた。

「つかアイギス、オマエ・・・犬語ホンヤク機能付き?」

「犬に言語は無いであります。でも言語だけが意思伝達じゃないであります。」

「・・・コロマルの発するイメージを、読み取っているということか。」

湊の考えに、アイギスが頷いた。

「とんだ変り種も居たもんだ・・・」

「まったくですね。」

「オマエもだっつもの!」

真田の言葉に頷いたアイギスに、順平がツツコミを入れた。

「よし、理事長に報告して作戦は終了だ。後は獣医の手配か・・・

夜中だが・・・まあ何とかしよう。」

「頑張ったね、オマエ。犬にしとくの、勿体ないよ。」

ゆかりがコロマルの頭を撫でてやる。コロマルも「ワフツ・・・」と鳴いてゆかりに擦り寄った。

「あ、そうだ・・・ペルソナ使いなら、回復魔法も普通に効くよね?」

彩音は思い出したように言って、召喚器を使いペルソナを呼び出す。

「サラスヴァティ、ディアラマ。」  
弦楽器をもった女のペルソナ サラスヴァティが弦楽器をかき鳴らす。

すぐに癒しの光がコロマルを包み、傷がふさがった。

そこをすぐ湊が包帯を巻いてやる。

コロマルは自分を治療してくれたことが分かったのか、二人にも擦り寄った。

それから影時間が明けた後、美鶴が獣医に連絡を取り、コロマルは無事病院に運ばれた。



7月29日 く白き守護者く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

京都に行ってきたことで、修学旅行の描写（まだまだ全然先ですが・  
・・）もちよつとリアルに書けるかな、と思います。  
にしても皆さん、「すずめの丸焼き」ってご存知ですか？  
京都のとある場所に売っているんですよ・・・。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

8月1日 く合宿1日目く（前書き）

明日テストなんですよ……。

定期ではなく、3年生特有の学力テスト、みたいなやつです。

……憂鬱だ。

くメインキャラ紹介13く

コロマル

漢字で書くと「虎狼丸」。

長鳴神社の前神主が飼っていた犬。アルビノ。

前神主が亡くなってからはずっと神社を守っていた。

では、どうぞ。

## 8月1日 く合宿1日目

「では、行ってくる。留守の間のことは、頼んだぞ。」

「いつてらっしゃい。何かあったら連絡しますね。」

早朝の寮の玄関先には、見送りの風花とゆかり、荷物を持った美鶴と真田と彩音、そして必死にあくびをかみ殺している湊の姿があった。

これから、ボクシング部である真田とマネージャーの彩音、フェンシング部の美鶴と湊は合同合宿に出掛ける。

行き先は、稲羽市という田舎町だ。

「何かあったなら理事長が来てくれるはずだが・・・3年と現場リーダーが同時に寮を空けるなどという事は初めてだからな。くれぐれも警戒を怠らないようにしてくれ。」

「分かってます・・・楽しんできてくださいね。」

「ありがと、ゆかり。じゃ、行ってきます!」

彩音は元気にゆかりと風花に手を振りながら歩いていく。

こうして、1泊2日の合宿がスタートした。

電車に長い間揺られながら、一行は稲羽市へと向かった。

交流先は、八十神高等やそがみ学校という高校だ。

そこは少し古い感じがするが、自然に囲まれた場所だった。

「ひなびてる学校よねえ。コンビニとかすぐ無いし、クラブとかも無いし。」

叶先生などはそう言うが、彩音たち4人はそうは思わなかった。

「・・・大体、教師が普通に”クラブ”とか言うか・・・?」

湊はぽつりと呟く。

「あっ、みんな、失礼無いようにねえ?」

アンタが1番失礼なこと言ってるよ、と彩音は思ったが、口には出

さない。

「「「宜しくお願いしまーす。」」」

「「「こちらこそ、宜しくお願いしまーす。」」」

出迎えに出てきてくれた八十神高校の生徒と挨拶をして、一同は体育館へと向かった。

フエンシング部 by 湊&美鶴 side

「まずは基礎からだな。」

「折角ですから、山までランニングします?」

「成る程、それもいいな。」

「・・・桐条先輩も、参加するんですか?」

「何を言ってる、当たり前だ。」

早速こちらはジャージに着替えて、基礎練の準備に入っている。

いつもは滅多に見ない美鶴のジャージ姿に、湊は驚いていた。

「・・・あのー、交流会って交流するんじゃないんですか? ナニ、基礎練って・・・」

「誰よ、温泉で極楽とか言ったの・・・」

八十神高校、月光館学園の両生徒から不満の声らしきものが上がるが、当の美鶴や理緒には聞こえていないようだ。

「その後は・・・筋トレですかね? それから試合。」

「よし、それで行こう。」

「こんにちは、もう始めてます?」

美鶴と理緒が練習プランを決めたところで、ボクシング部のマネージャーの結子がやって来た。

「西脇じゃん。これから始めるところだけど、どうしたの?」

「・・・試合やるんだよね? ならさ、負けた方が片付けと掃除、でどうよ?」

「・・・また何か面倒ごとになりそうな予感が・・・」

湊が軽く頭を抱えた。

「ともかく、賭けるものがあつた方が本気にならないか、って事。どうですか、桐条先輩？」

「なるほど、グッドアイデアだ。よし、それで行こう。」

「じゃあ・・・片付けと清掃と・・・ダッシュユ10本賭けて勝負！でどうでしょう？」

周りがざわめいた。

「10本に増えてる・・・！」

「これは負けられない・・・！」

「・・・何がグッドアイデア、だよ・・・」

湊ははあ、とため息をついた。

「何か言つたか、有里？」

「いえ、なんでもないです。」

美鶴の顔に「逆らつたら処刑」と書かれている気がして、湊は即答した。

基礎練や筋トレを行い、試合開始。

まず最初は、理緒の試合だ。

湊も壁によりかかり、その試合を見ていた。

流石に人一倍練習熱心で、2年の中ではかなり上手い理緒は上手く相手の隙を狙い、攻めていつている。

その動きを感心した目で見つめていると、肩にポン、と手を置かれた。

「・・・姉貴か。マネージャーの仕事はいいのか？」

「別に応援に来たつていいじゃん！全部結子から聞いてるよ。」

「僕の試合はこの次だ。」

「いいじゃないじゃない。細かいことは気にしない。」

彩音は試合中の理緒の方に目を向ける。

「あれ、岩崎さんだよ。うわあ・・・流石桐条先輩が褒めてただけあるなあ・・・」

「・・・へえ？確かに、人一倍頑張ってるけどさ・・・」

そうやって話しているうちに、試合は理緒の勝利で終わった。

「お、すごいじゃん！湊、負けたら承知しないからね？」

「分かった分かった。・・・じゃ、行つてくる。」

湊は自分のエペを取り、次の試合に向かった。

「みーなーとー！頑張れー！！」

大声でこちらを応援してくる自分の姉に少し恥ずかしさを感じながら、湊は相手と向き合った。

試合開始。

「・・・いい動きだな。今年から始めたとはとても思えないよ。」  
いつの間にか、美鶴が彩音の傍に来ていた。

今のところ、どうやら湊が相手を押しているようだ。

「しかもこういう試合では、湊の方が不利なはずなのに。見えな  
いというハンデは大きい。」

「・・・いつから知ってるんですか？」

「4月からだ。入院した時の検査で・・・な。すまない。ずっと黙  
っている感じになってしまっていて。」

「そうですか・・・。あの、他の人には言つてませんよね？」

「勿論だ。本人も言われたくないようだしな。」

「・・・見えなくなつて10年ですし、もうとっくに慣れたつて、  
本人は言つてましたけどね。」

彩音は湊の方を見ながら言う。

「・・・あ、勝つた。」

見れば、試合が終わるところだった。湊の勝利だ。

八十神高校側は、2連敗に焦りを感じているようだ。  
彩音は、湊の方に駆け寄る。

「おめでとー！！」

「わ、ちょ、姉貴！やめ・・・」

二人の声を聞きながら、美鶴は微笑んでいた。

最後は美鶴の試合だ。今のところ、両方とも同点。つまり、この1戦で勝利は決まる。

相手もこちら側も、緊張の眼差しで両者を見ている。試合が、開始した。

美鶴の剣さばきは綺麗としか言いようが無かった。流石、タルタロスなどで戦ってきただけはある。

月光館学園側も、八十神高校側も啞然としてその試合を見ていた。またたく間に決着がつく。

美鶴の、勝利。

「……や、やったあ……!!!!!」

月光館学園側の生徒から歓声が上がった。八十神高校側は、どよんとした空気が流れている。

こうして、片付けと清掃、ダッシュ10本は八十神高校側のものになった。

ボクシング部 by 彩音&真田 side

こちら、真田のトレーニングに付き合わされた形で、両学校はトレーニングに励んでいた。

「……結子、どこ行った……!」

一人でタオル運びやら水筒を持っていつたりだとかの仕事をしている彩音は、恨めしそうな目で悪態をつく。

一応、練習をするのは止められている宮本がいるが、それはケガをしているからだ。手伝わせるわけにはいかない。

そこに、張本人の結子が帰ってくる。

「……結子、どこに行ってたの……?」

「ハハハ、ゴメンって。……怒ってる、よね?」

「それ、訊く?」

「う、ごめんなさい！！でも、代わりにいい情報持ってきたから！」  
彩音の後ろに見える黒いオーラに、結子は慌てて謝る。

「フェンシング部で試合するんだって！有里くんは確か2番目！」

「・・・湊の試合？見に行く！じゃ、結子はここよろしくね！宮本くんには手伝わせないでよ！」

彩音はすぐフェンシング部がいる方に向かって行った。

「どうした、西脇？」

そこに、真田がやって来る。

結子は事情をとりあえず説明した。

「そういうことか。さっきまであいつは良く頑張ってたしな。行かせてもいいだろ。西脇、頼んだぞ。」

「は、はい・・・」

結局、結子は試合を見に行けず、ボクシング部のマネージャーの仕事をして一人でこなすことになった。

湊の試合が終わり、彩音が戻ってきた時には、こちらもまた練習試合に入っているようだった。

今は丁度真田の試合で、真田は相手を勿論押していた。

16戦負けなしの肩書きは伊達ではない。

「ようやく帰って来た・・・！もー、手伝ってよー！！！」

「長い間フェンシング部行ってたんだからこのくらい普通でしょーが！」

「ううう・・・」

結子は涙目になっていた。

ちょうどそこで、真田の試合が終わる。

「やっぱり強いな、真田先輩・・・。じゃ、他の用事よろしく！」

彩音はスポーツドリンクとタオルを持って、真田の方へ行った。

こうして、両部活の交流会は無事に終わった。



宿泊は、このあたりでは有名な旅館「天城屋旅館」という場所らしい。

「ねえねえ、聞いた？天然温泉なんだって、その旅館！」

「……ふーん。」

「何、その興味なさげな顔は。」

早く汗を流したいと思っっている湊は、温泉のことなど興味ないようだ。

「……ここってさ、いいところだよな。ノンビリしててさ。その割りに、商店街って活気があったりしてて。」

「……でも、何か変な予感がする。」

「……？」

「……まあ、ちょっとした違和感というか何と言うか……だけだ。」

彩音は湊の言っている意味が良く分からないように首をかしげている。

そんな話をしている時、1人の少女がこちらに近づいてきた。セーラー服に、肩の辺りで切りそろえた黒い髪の少女だ。

「月光館学園の部員さんでいらっしやいますか？天城屋旅館から、お迎えに参りました。」

「えっ？あ、ど、どうもありがとうございます。」

「……旅館で働いている……って風でもなさそうだな。」

少女を見て二人は驚いていた。  
「いえ、ただの手伝いです。天城屋旅館女将の娘の、天城あまぎ 雪子ゆきこです。」

「女将の娘……若女将？かあっこいい。あ、高校生ですか？」  
いつの間にか来ていた結子が訊く。

「いえ……中学生です。」

「中学生で家業手伝うってどんだけケナゲ……じゃあやっぱり、後を継ぐんですか？」

「こら、結子！色々聞いちゃ失礼だよ！」

彩音がどんどん質問していく結子をたしなめる。

「いえ、大丈夫です。・・・まだ分かりません。」

「こら、人の事情に首突っ込まない！」

いつの間にか理緒も来たようだ。

「は〜い・・・ゴメンね。いつつもお節介だつて言われててさ・・・

」

「・・・いえ。ヨソから来られるかたとお話しするのは、楽しいですし・・・」

「あーっ、いたいた雪子！！」

後ろから、茶髪で短い髪の雪子と同じセーラー服を着た少女が走ってくる。

「あ、千枝。」

「葛西さんから伝言。車の鍵、持って行ってないか、だつて。」

「え、車の鍵・・・？」

雪子はポケットを確かめている。

「これは家の鍵だし・・・持ってないよ？」

「なら大丈夫じゃん？でさ、ちょっとお願いがあるんだけど・・・後で勉強見てくれない？」

「いいよ。先、家行つてて？」

「分かつた！じゃ、また後で！」

茶髪の少女は手を振ると、元来た道を走って行った。

「・・・すみません、お喋りしてしまつて。その、友人で。」

「・・・仲、いいんだな。」

「ええ。いつも彼女には、助けてもらつていて・・・と、そろそろ時間ですね。それじゃ、行きましようか。こちらです。」

月光館学園の部員は、雪子の後について旅館へと行った。

旅館の部屋。

「ひつろー・・・ぜいたくー・・・いいのかな。ウチらが泊まつたりして。怒られない？」

「桐条先輩はあの通りお嬢様だから、もつといい部屋に通されたらしいよ・・・。つーか、怒られるって誰から？」

「え？えーと・・・政府とか？」

「なに言ってるの・・・って、西脇はこの部屋じゃないでしょ？」

結子の話に、呆れ顔の理緒と彩音。

「それがさー！聞いてよー！何の手違いか、私、ミヤと同じ部屋なんだよー！！」

「ミヤ・・・って宮本？・・・って、え？同じ部屋？宮本って・・・男だよね。」

「男だよ！あれでも！！部屋割りしたの、叶先生だよ？適当すぎ。マジで。」

「フエンシング部とボクシング部もごっちゃになってるしねー・・・お陰で湊は真田先輩と一緒に部屋なんだよ。そういうことならさ、この部屋来ない？」

「よかったー、そうさせてもらわないと廊下で寝るトコだった・・・

・あ、もちろんミヤがね。」

「こら、けが人に何させてんの！」

彩音が結子の頭を小突いた。

「宮本、ケガしたって・・・大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないから湯治に来たの・・・。もー、あいつずーーーと黙っててさ。悪化してるの！ホント、やばかった！」

騒ぎ出す結子を、彩音がなだめた。

「・・・なんか、いいコンビだね。」

「はあ？冗談じゃ・・・あ、今何時？ミヤの薬の時間だった。じゃあ、また後でねー！！」

結子はそういうと、部屋を出て行った。

「・・・何だかんだ言っいて、面倒見いいよね。西脇って、何か・・・お母さん、って感じ。本人は嫌がるだろーけど。」

「分かる分かる。」

その後は、他愛も無い話に花を咲かせ、お風呂に入ってゆっくり過ごした。

騒々しくも、楽しい夜が過ぎて行った。

8月1日 く合宿1日目く (後書き)

いかがでしたでしょうか？

ええ、試合の描写はしよりましたよ。だって書けないですもん。・  
・すみません。

はい、千枝ちゃん登場！リアルP4イヤーですからね。これくらい  
はしないと！

さて次は誰が出てくるでしょうか・・・？

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

8月2日 く合宿2日目く (前書き)

今日は七夕ですね。

とりあえず、私は高校合格を祈ります。

では、ごうそ。

8月2日　く合宿2日目く

2日目は、天城屋旅館を出た後に八十神高校の生徒に挨拶をして、それから少し八十稲羽の散策をしてから帰ることになっている。そして今は、八十神高校の校門の前。

「それでは、お世話になりました。この経験を糧に、明日からも頑張ります。」

「「「ありがとうございます。」」」

「「「おつかれさまでした。」」」

2つの高校の生徒がそれぞれに向かつて礼をする。

これからはまず商店街に全員で行き、そこから解散になる予定である。

挨拶も終わって気が抜けたのか、周りでは早くも部員たちが思い思いのことをしている。近くでは結子と宮本が漫才のようなやり取りをしていたり、理緒と美鶴が話していたりした。

そんな皆の様子を見ている二人の元に、雪子がやって来た。

「ぜひまた、いらしてくださいね。」

「わざわざお見送り、ありがとうね。」

「いえ。お気をつけてお帰り下さいね。」

彩音が頷いた。

「ゆきこ〜っ!」

「・・・あの子って確か、昨日の・・・」

雪子の名前を呼びながら走ってきたのは、昨日の茶髪の少女だった。

「あ、千枝。どうしたの?」

「あー・・・まだ手伝い中だった?あちゃ〜・・・」

「・・・僕達なら構わない。」

やっちゃった、と頭を抱える少女に、湊は言う。

「なんか、すみません。昨日も・・・」

「のあ、謝らないですよ。あたしが失礼な人・・・あ、いや、失礼な人か・・・」

「全然いいって。友達って大事だし、私たちも大丈夫だから。」  
微笑む彩音に、雪子はもう1度「すみません。」と言って頭を下げた。

仲良く話す2人を見てみると、集合がかかる。

「あ、時間だ。それじゃ天城さん、ありがとねー！」  
手を振る彩音に、雪子と少女も手を振り返した。

稲羽中央通り商店街。なかなか活気があって、そこその人でにぎわっている中を二人は歩く。

「いいね、こういう商店街。蔵戸台もいいけど、ここはのどかだし。」

「・・・変な店もあつたけどな・・・」

ちなみにその変な店とは、金属の刀や鎧などを売っている店だった。

「でも、あれなら戦いに使えそう・・・いや、絶対使えるよ。って

いうか。面白い店もあつたね。あの”四目内堂書店”とか。」  
よめない

「・・・あれはわざとじゃないのか・・・？」

二人は話しているうちに、商店街の北側まで来ていた。

ふと見ると、奥から1組の家族連れが歩いてくるのが見えた。

灰色のYシャツに赤いネクタイで、上着を手に持っている中年の男性と、優しそうな女性、そして2人の間にいる、5歳くらいの女の子。

「・・・平和だね。影時間とか戦いとかシャドウとか、全部忘れちゃいそう。」

「・・・あと4日、だな。」

「こういう時にそういうカウントダウンみたいなこと言わないの！  
でも、そっか・・・あと、6体か。」

彩音はふと足を止めた。



「あ、神社がある。・・・ね、ちょっとお参りしていかない？」

「・・・まだ時間には余裕があるし、いいかもな。」

「じゃ、決定！」

彩音と湊はその神社 辰姫神社へと入って行った。

中には1人、先客がいた。

その少年はヘッドフォンで何か音楽を聴いているようだ。神社の賽銭箱の前の石段に座っている。

どうも、この町の住人じゃなさそうな雰囲気だった。

少年が、入ってきた彩音たちに気づく。そして、無言で石段をどいた。

彩音と湊はそれぞれお賽銭を入れ、静かに手を合わせた。

「・・・あの。」

お参りが終わるころを見計らって、少年が話しかけてくる。ヘッドフォンは首にかけていた。

「その制服・・・月光館学園ですよね？辰巳ポートアイランドの。」

「うん、そうだよ。もしかして君も？」

「いや、俺は違います。たまたま、近くの学校で。」

「・・・君は、旅行か何か？」

「家の事情・・・ってヤツで。1年後くらいに、こっちに引っ越すかもしれないんで。」

少年は言ってから、「あー・・・」と頭を掻いた。

「こんな話、すいません。忘れてください。」

「ううん、大丈夫。頑張って・・・としか言えないけどね。」

彩音はあはは、と苦笑した。

「・・・君、もか・・・」

湊はぼそりと呟いた。

「……？何か言った？」

「……いや、なんでもなし。それより、そろそろ行かないとマズいかもな。」

「あ、ホントだ。じゃあ私たち、そろそろ行くね！」

彩音は少年に手を振ると、神社を先に出た。

湊もその後を追いかける。

少年は黙って二人を見送っていた。

二人は無事に集合場所に間に合い、一行は八十稲羽を後にした。

でも、その帰り道の途中、二人は乗り換えた電車の中で、不思議な感覚を感じた。

その少年は、珍しい銀髪だった。

まるで、もう一人の自分を見ているような。自分たちと似ていると……本能的に感じた。

その少年はすぐに電車を降りて行ってしまったため、それが誰であるのかを確かめることは出来なかったが……。

それでも、3人がすれ違う際……誰からともなく3人は口端を吊り上げていた。

こうして、2日間の合宿は幕を閉じた。

そして、彼らの物語が始まるのは……あと、一年半後だ。

8月2日 く合宿2日目く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

もう誰だかはお分かりになったと思います。

本当はもう1人候補が居たのですが・・・絡ませづらいということ  
でナシに。

でも口調があつてたかなーとか、雰囲気違ったよくなとか、そう  
いうことがちよつと不安です。おかしいところがあつたらご指摘願  
います。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

8月6日 くストレガく（前書き）

満月戦ですね。また今回も前後編に分けたいと思います。  
今回は前編。会話がメインですね。

では、どうぞ。

8月6日 くストレガ

今日もまた、特別課外活動部は大型シャドウを狩るための作戦に身を投じる。

作戦室には、既に全員が揃っていた。勿論、今回が作戦初参加となるアイギスもだ。

「さて……また今月も満月の晩が巡ってきた訳だね。」

「山岸、どうだ？」

「はい、確認出来ています。やはり今回もシャドウの反応がありません。」

「フ……そうこなくちゃな。」

真田が好戦的な笑みを浮かべる。

「場所は、厳戸台の北の外れにある、廃屋が並んでる一帯です。ただ、反応は10メートル以上の地下から確認されてて、それがちょっと……」

「単に建物に地下があるって事じゃないの？」

「港湾部地下には、建築時に地下10メートルを申請している建物はありません。ですが、ずっと以前には、陸軍が地下施設を置いていたという記録があります。」

ゆかりの問いに答えたのはアイギスだった。

「陸軍？……そうなの？」

「彼女には、この辺りの地形や建築に関する情報が一通り記録されてるんだよ。もっとも……放置していたので最後の更新は10年前だが。」

「10年前であります。」

「更新しようよ……」

順平が呆れながらツッコむ。

「で、結局どう解釈したらいいんだ？」

話を元に戻したのは真田だった。

「詳しい事は、実際に行ってみないと何とも・・・」

「戦争の遺物、か・・・。今回は、状況が未だ不透明だ。よって前線を誰にするかは、現地へ行ってから決める事にする。」

二人は頷いた。

「了解だ。」

「了解であります。」

「では、行こう。」

一行は、その地下施設に移動を開始した。

蔵戸台、港湾部北。

廃屋の中に、カモフラージュがされた陸軍の地下施設への入り口がある。

その近くの廃屋には、やはりというか遙が潜んでいた。

既にペルソナを出していることから、もう遙は状況を見ているようだ。

「（・・・彼らは移動を開始した、か・・・。この近くに、アイツらも潜んでる。・・・ふふ、その程度のジャミングなんて、僕には効かないけど。でも・・・山岸さんには効いているみたいだね。）」  
遙は冷静に状況を調べる。

「（アイツらも流石に僕には気づいてはいないみたいだ。ある程度来るであろう予感はいそうだけだね・・・。）」  
遙は静かに、集中するため目を閉じた。

風花に先導され、特別課外活動部の面々が旧陸軍地下施設に到着した。

「ターゲット、この辺りの筈なんだけど・・・」

「・・・何か変な気配というか・・・無理やり何かを変えられてるような、そんな気持ち悪さがあるんだが・・・」

湊は小さく呟く。  
その時。

「お見事です……」

一斉に、彩音たちは入り口の方を振り向く。

「え、誰……！？私のルキアには、今の今まで何の反応も……！」

「……そういうことか、つまりこの妙な感覚は……」  
湊は何かに気づいたようだ。

いつの間にか、そこには2人の人影が立っている。  
いつも路地裏に現れる復讐代行の内、ドレスの少女を除いた2人だった。

「お目にかかるのは初めてですね。私の名はタカヤ、こちらはジン・ストレガ」と、我々を呼ぶ者もいます。」

タトウの少年　タカヤが名乗った。

「さて……今日までの皆さんの活躍、陰ながら見せて頂きました……見ていたのは、私たちだけではないようですがね。聞けば、人々を守るための”善なる戦い”だとか。ですが……今夜はそれをやめて頂きに来ました。」

「なんだと!？」

最初に食って掛かったのは真田だった。だがそれに構わず、タカヤは続ける。

「お仲間が随分と急に増えたようですね。きっと、ここが罪深い土地だからでしょう……。タルタロスは今宵も美しくそびえている……」

「あんたたち……」

「それと、戦いをやめろつてのと何のカンケーがあんだよ？」

「どうして、私たちの邪魔を？」

ゆかりと順平も、ストレガに対して怒りを隠せないようだ。彩音も

口調こそ静かだが、態度には怒りが見え隠れしている。

「簡単なこつちや。シャドウや影時間が消えたら、”この力”かて、消えるかも知れん。そんなん、許されへん。」

「”この力”・・・？まさか・・・！」

「・・・お前たち、ペルソナ使いか？」

その問いに、タカヤは薄気味悪く笑う。

「もう少し、頭を使って欲しいものだ・・・。貴方がたは、力が消えてもいいのですか？ペルソナは、誰もが使える力ではないのです。影時間は、その私たちに開かれたテリトリーだ。そして”滅びの塔”もね・・・。」

「そんな・・・だから邪魔しようっての？分かってないのは、そつちでしょ！シャドウを放つといたら、どんなことが起こるか分からないのよ！？」

ゆかりはキツ、と2人を睨みつける。

「シャドウのもたらす災いですか・・・。・・・そんなもの、放っておけばいい。災いなど、常にあるもの・・・。シャドウでなくとも、人が人を襲う。誰がどんな災いに見舞われるかなど、どのみち、分かりはしないのです。」

湊もまた、目の前のタカヤとジンを鋭く睨みつけている。

「それよりも・・・あなた方は気付くべきだ。自身が、影時間を知る前よりも、今の日々に一層の充実・・・楽しみを感じている事にね。」

「た、楽しいなんて、そんな事・・・。」

ゆかりは否定しようとする。

「本当にそうでしょうか？他の方はいかがです？前の退屈な日常を取り戻したいですか？」

「んだと・・・？」

「・・・。」

「私、楽しんでなんか・・・。」

ストレガを睨む者、黙り込む者、否定する者に特別課外活動部は分



かれる。

「お前らには”個人”の目的しかあらへん。どいつも本音はその為に戦つとる。お前らの正義は、それを正当化する為のただの”言い訳”や。そんなんは”善”やない・・・ただの”偽善”や。そんなもんは邪魔されとうない。」

「いいよ、偽善でも。」

黙っていた彩音が口を開く。

「それはアンタたちの考え方・・・そういう風に言われるなら、こつちだつて邪魔されたくないし。私からしてみれば、アンタたちの方が個人の目的のために動いている風にしか見えなけれど。ただの子供のわがままにしか見えない・・・正義なんてどうでもいいよ。私たちはただ、目的を果たすために動いている・・・ただそれだけ。」

「・・・話になりませんね。」

タカヤがやれやれと首を振る。

「そうそう、1つだけ言い忘れていたことがありました。一応、忠告はしておきましょうか。」

「・・・敵の忠告？そんなの、お前たちに何のメリットがある？」

「あなたたちにも関係があることなのですよ・・・あなたたちの活動を見ている第三者がいるのです。勿論、私たち以外でね。今のところ、敵か味方かというのものはつきりしない人物でして。今後、その人物が何をするか全く分からない。しかも、その方は力の使用者・・・」

「ペルソナ使いの第三者、だと？そんな馬鹿な、そんな人物がいるなら・・・」

「私たちでも簡単には見つからない人物なのです。もし仲間にしたというのであれば、探してみるとよろしいでしょう。最も、あなた方の仲間になるかは別として、ね・・・。それでは・・・」

タカヤは言い終わると一歩後ろに下がる。

そしてそれを待っていたかのように、ジンが施設の入り口である大

きな隔壁を思い切り蹴った。

ドン！！と大きな音が響く。

「なっ……」

隔壁が衝撃により、閉まっていく。ストレガの2人は隔壁の外に居るために、閉じこめられない。

「せいぜい、あがきや。」

ジンの言葉を最後に、隔壁が完全に閉まった。

真田が閉まった隔壁をダン！と叩く。

「くそっ……閉じこめられた！！」

「……きつと大丈夫です。今は見失った目標よりも、シャドウの事が先決と思うであります。」

アイギスが冷静に告げる。

「そうね。冷静さを失くしたら思うツボか……」

「シャドウが動き出しました！今の震動で、私たちに気付いたみたいですよ！」

「……ちっ、アイツら何もかも邪魔していく……」

湊が低い声で言う。

「よし、本来の目的の戻るぞ。勝てなければ、脱出も何もない。先行するメンバーを選んでくれ、有里。戦闘の準備だ。」

「はいっ！」

彩音の返事で、今回の作戦がスタートした。

先手を打たれた。

遙は今までのやり取りを聞いていて、舌打ちしそうになるのをぐっところらえていた。

ペルソナ使いの第三者。そんな者が居れば、美鶴などは絶対に探し回る。

桐条の権力は強い。見つかる確率も高いだろう。それに、向こうには何かと勘が働く湊なども居る。

わざと知らせることで、ストレガは遙の動きを勘付かせた。それはこちらの、遙自身の目的には不利。

先日の宣戦布告はすべきだったのか、と本当に思ってしまった。

「でもま、頑張って逃げ回るけどさ。僕は逃げに関しては得意だし。さてと、じゃ・・・再開しよう。」

8月6日 くストレガく（後書き）

いかがでしたでしょうか？

うーん、ちょっと分かりづらかったかも・・・？

でもとにかく、遙はS・E・E・Sに気付かれるわけには行かない理由があるんです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

7 / 15 加筆修正

8月6日NO.2 〳?番 戦車&?番 正義〳(前書き)

満月戦のバトル回です。

ちよつと変なところがあるかもしれませんが、そこは大目に見てください。

明らかにおかしいだろって所はご指摘お願いします。

では、ごうげ。

シャドウを追い、特別課外活動部のメンバー達は地下へと進んだ。中は薄暗く、色々な場所にクモの巣があったり、武器が転がっていたりした。

その中には白骨死体もある。

普通なら逃げ出してしまいたくなるような光景が広がっているが、今はシャドウ討伐の作戦の最中。逃げる訳には行かない。

今日の前衛は彩音、湊、真田、順平、アイギス。風花の護衛と後衛がゆかりと美鶴。

特にアイギスは彩音と湊の傍にぴったりとくっつくようにして一緒に走っている。

しばらくすると、少し開けたような場所に出た。

「ここは・・・戦時中に武器庫として使用されていたみたいですね・・・。こんなに無造作に兵器が転がっているのを見るのは初めてです・・・。」

「・・・今は使い物にならないだろ。シャドウ戦に流用出来たら・・・。」

「そんなこと言わないの。でもこれ・・・全部人を殺すために作られたものなんだよね・・・。」

彩音が複雑そうに目の前に転がる兵器を見る。

「・・・！彩音さん、これを！」

アイギスが何かに気付いて床を指差す。

「タイヤ痕・・・？いや、違う。これは・・・。」

「恐らく、戦車のキャタピラのようなものだと思います。」

「これ、今さっきついたものじゃないか？それに、何故入り口ではなく奥に続いているんだ？」

真田がもつともな意見を口にする。湊是最悪の想像をしてしまった。

「・・・嫌な予感・・・」

「ちょよ、ちょっと！湊くんが”嫌な予感”って言うとまず当たるんだけど・・・」

「現在、シャドウは更に下層部へと移動中のようです。」

「・・・うん。湊の予感は十中八九当たるよ。私も今、嫌な予感した・・・。」

彩音は引き攣った笑みを浮かべる。

「でも・・・行かないわけにはいかないし。行くよっ！」

彩音たちは更に奥へと続く坂を下りる。

更に坂道を降りていくと、もうそこは洞窟のようになっていて、舗装などは全くされていない。

そしてその、一番奥。

「ターゲットはこの奥にいます！準備はいいですか？」

「勿論。行くよ！」

そして、全員奥に進んだ。

「・・・はは、予感的中。」

彩音は乾いた笑いをこぼす。

そこにいたのは、紛れも無い”戦車”。

「これが。キヤタピラの跡の正体！？」

「・・・今日の敵のアルカナが”戦車”だからか？幾月さんじゃあるまいし・・・そんな駄洒落いららないんだけど。」

湊も呆れ顔だ。

湊が呟いている間に、風花はルキアを召喚する。

『シャドウが、戦車の装甲を見にまとって利用してるようです！皆さん、準備を！来ます！！』

風花の声で、全員が武器を構える。

『えっと、敵タイプ”正義”・・・じゃなくて、”戦車”・・・あ、

あれ？見かけは1つなのに、反応が2つ・・・？こんなシャドウ、初めてです！」

「はあ？フザけんのは外見だけにしろよなっ！」

「ああもっ、とにかく先手必勝？ペルソナっ！」

彩音が召喚器の引き金を引く。現れたのは若い青年の姿をし、槍を持った人影。

「セタンタ！ジオンガっ！」

セタンタが槍を持って前に突き出す動作をする。すぐに電撃が迸った。元々戦車は小回りが効かないのか簡単に当たる。しかし。

「・・・あんまり効いてないみたいだな。流石戦車、装甲が固いか・・・ならっ！」

湊が今度は引き金を引く。現れたのは、弦楽器を持った女性。

「サラスヴァティ、マハタルカジャ！」

1学期期末試験の結果が良かったために、彩音と湊は美鶴から褒美としてスキルカードを貰っていた。

そのカードが”マハタルカジャ”。味方全員の攻撃力を上げる補助魔法である。

湊はそれをサラスヴァティに覚えさせていた。

ちなみにこのサラスヴァティ、以前は彩音のペルソナだったが彩音が合体に使った後に、湊がその回復スキルを見込んでペルソナ全書から引き出したものである。

「ポリデュークス！ラクンダ！」

続いて真田が相手の防御力を下げた。これで鉄壁の守りも少しは崩れただろう。

「パラディオン！」

アイギスのペルソナ、パラディオン。トロイア戦争でトロイア軍に崇められていた女神アテナの像の名と同じ名前のペルソナ。

パラディオンが、真っ直ぐ戦車に向かって突進していく。”キルラツシュ”というスキルだ。

流石に防御力を下げられた時の攻撃力が増している攻撃は多少なり



ともダメージを与えることに成功した。

しかし相手も黙ってやられる気はないようだ。アイギスに照準を合わせ、砲弾を打ってくる。

「ペルソナっ！」

アイギスが再びパラディオンを呼び出す。

パラディオンは打ってきた砲弾を、しっかりと受け止めた。

「アイギスに貫通属性は効かんぞ！続けっ、ペンテシレア！」

美鶴がペンテシレアを呼び出す。ペンテシレアは得意の氷結魔法で、戦車のキヤタピラを凍らせて止めた。

「待ってましたあ！ヘルメス！」

順平がヘルメスを呼び出し、戦車に突撃させる。"キルラッシュ"だ。

ゆかりもイオを召喚し、得意の疾風魔法で攻撃した。

その時、聞き慣れない何かの駆動音がする。

「うそ・・・分離!？」

風花の驚いた声がルキアごしに聞こえる。

戦車の砲塔部分が外れ、浮いたのだ。

「・・・分かりました。砲塔が"正義"タイプ、大きい方が"戦車"タイプです。戦い方も連携してるみたいです。気をつけて下さい！」

「分かった！湊、真田先輩と順平でそっちの大きい方！アイギス、桐条先輩は私とこっち！ゆかりは状況見ながら、風花の護衛とこっち撃ち落として！」

「・・・了解！」

湊はすぐ召喚器の引き金を引く。サラスヴァティがブフーラという氷結魔法で、キヤタピラを止めている氷を強化した。

ゆかりもすぐ弓を構え、狙いをつけて放つ。

しかし"正義"タイプのシャドウ ジャスティスは飛んでいるため、ひらりひらりと矢をかわした。

「・・・ムツカつく！」

「セタンタ！」

彩音がセタンタを呼び出した。セタンタはもう既に、ジャスティスの背後で槍を振りかぶっていた。

そのままセタンタの槍がジャスティスを捉える。ジャスティスは地面に落とされはしなかったものの、いきなりの背後からの衝撃で動きがフラフラしていた。

「今だよ、ゆかり！」

「オツケー！絶対に撃ち落とすっ！」

ゆかりは矢を更に放った。そして見事命中する。

湊の方は、とにかく物理攻撃スキル（順平）と電撃（真田）で”戦車タイプ”のシャドウ、チャリオッツと戦っていた。

「・・・とにかくあの結合する部分を破壊する！」

「オツケー、行くぜっ！」

「分かったっ！」

まず真田が動く。ポリデュークスを呼び出し、ジャスティスと結合する部分に電撃をピンポイントで当てた。

「ラクカジャ！」

順平は湊にラクカジャをかけた。

「・・・ペルソナチェンジ、オオミツヌ！」

湊の目の前に、石で出来た武士の像のような大きなペルソナが現れる。オオミツヌは最初から姿勢を低くしていた。

湊はそのオオミツヌの背中を登っていく。

そしてそのまま勢いをつけて、跳んだ。

湊の手には、いつの間に変えたのか大剣が握られていた。順平の装備の予備として持っていたものだ。

オオミツヌは湊が跳んだ絶妙なタイミングでチャリオッツに向かって突進を仕掛ける。

何とか踏ん張ったチャリオッツだが、その上には湊が大剣を下に向

けて構えていて。

「はあああああつ!!!」

湊は声と共に、ジャステイスとの結合部分に大剣を突き刺した。耳障りなチャリオッツの叫び声。

湊は剣を刺したまま抜くことはせず手放し、器用にチャリオッツの背中から飛び降りる。

双方共に大ダメージを受けたジャステイスとチャリオッツは、再び元の戦車の形に戻ろうとするが、結合するはずの部分には湊が刺した剣が残っている。

「チャンス！みんなっ！」

彩音が声をかけると、皆が一齐にペルソナを呼び出した。

「・・・キルラッシュ！」

「ジオンガ！」

「マハガル！」

「マハジオ！」

「マハブフ！」

「電光石火っ！」

「2連牙！」

全員のそれぞれの攻撃が決まり、ジャステイスとチャリオッツは黒い霧になって消えた。

寮内、作戦室。通信用のデッキに、通信が入る。

「はいはい、僕だ。」

『こちら、美鶴です。目標のシャドウは鎮圧しました。』

「そうか。ご苦労様、戻ってくれていいよ。」

『待つてください。実は、今回はそれ以外にも報告すべき事が。』

幾月の目が怪訝そうなものになった。

『作戦中、謎の者達から、妨害を受けました。・・・恐らく”ペル

「ソナ使い”です。」

「ペルソナ使い!？」

「しかも、1人ではありません。影時間の中に平然と現れ、我々の事も知っているようでした。それに、少し妙な事も言っておりまして……。」

「……妙?何だい？」

「我々の行動を監視する”第三者”の者がいると。そちらもペルソナ使いで、敵味方も判別できない人物だと言っていました。」

幾月は少し考え込むようにして黙ってしまった。

「……その相手は、何か手掛かりになるような事を言い残さなかったか?その相手についてでも、第三者についてでも。」

「そう言えば……自分達は”ストレガ”と呼ばれていると。第三者については、何も……。」

「ストレガ……?」

幾月が眉を寄せた。

「……なるほどね。調べてみるよ。」

「お願いします。それと……実は、もう1つ報告が。そのストレガという連中に一杯食わされて、閉じこめられてしまつて……。」

「ああ、分かつた。もうシャドウの危険は無くなつた訳だし、後で誰か人を送るよ。」

「申し訳ありません……宜しくお願いします。」

そう言つて、美鶴からの通信は切れた。

「……我々以外のペルソナ使い、か……。」

一瞬、幾月がニヤリと笑つたが、それに気付く者は誰もいない。

ここももう危ない。そう感じた遥はもう廃屋から抜け出して夜の街を歩いていた。

今の時点で、影時間の中で遥を見つけれられる者は皆無だろう。風花でさえ、近くにいたはずの遥に気がつかないのだから。

「……全く、厄介なことをしてくれたな。幾月にまで知られるなんて……。」

遥は呟きながら歩く。

「でも、ペルソナも持たないあのオジサンに僕を見つけられるはずは無いね。」

遥はふと立ち止まり、寮のある方角を見つめた。

「それはあなたが一番分かっているはずでしょ、幾月サン？」

遥の後ろには、従うように浮かぶ遥のペルソナがいた。

8月6日NO.2 〳?番 戦車&?番 正義〳(後書き)

いかがでしたでしょうか？

いや・・・予想よりも時間がかかってしまいました。

次は番外編の予定です。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

×月×日 〈再考察〉（前書き）

番外編です。まあ短いです。

〈メインキャラ紹介14〉

ストレガ

復讐代行を請け負う者達。メンバーはタカヤ、ジン、チドリ。

それぞれペルソナを持っており、影時間中に復讐代行を行う。

その名前は、昼間は魔女、夜は鴉に変身するという吸血鬼の名前。

では、どうぞ。

×月×日（再考察）

満嶋 遥。

2009年に月光館学園高等部2年E組に転入してきた転入生。しかし、彼には不可解なところが数多くある。

まず、経歴。

彼には、7、8歳までの記録が存在しない。

意図的に消し去られたかの如く。

どこに住んでいたのかなど、そういうのが全くもってのブラックボックスなのだ。

桐条の力 あくまで私が行使できる力だが をもってしても、それは調べられなかった。

次に、転入の意図。

彼は元々、親の事情で転入してきた、という訳ではない。

そもそも親そのものが居ないのだ。

彼は8歳くらいの時に 経歴が明るみに出てからになるが ある家庭に養子にと引き取られていた。

しかしその養子に取った家も、数年後には事故で他界。以来、彼は蔵戸台近くのアパートに引っ越して、月光館学園ではない学校に通っていた。

それが、2009年になってから突然の転校。学力的には問題なかったものの、何故頑なに今まで入らなかった学校に突然転入したのか・・・それは考えてみれば謎である。



そして、最も異常だと思うのが 彼自身が、あまりにも他人に知られていないということだ。

少数を除き、月光館学園生徒でも「名前だけしか知らない」という生徒が多すぎる。

顔は知らないという生徒が多い。

学校で、クラスメイトや特別仲のいい人物以外、殆どこのような認識なのだ。

名前は知ってる。しかし、顔は知らない。すれ違ったことも無いように思う。

そういう認識が、大多数なのである。事実、私もそう思う。

更に言うと、誰もその認識を不審に思わない。

それでいいものだと、それが当たり前だと、無意識のうちに思い込んでしまっている。

それは、幾らなんでも有り得ないのではないだろうか。

転入生を調べてみて、彼の不思議さが浮き彫りになったような気がする。

それでもまだ信じられないのが、今すぐにも、ここに書いた事実などどうでもいいと思ってしまうそうになる自分。

一体、これはどうしたことだろうか。

思考がぼやける 正にそんな感覚だった。

これからも少しずつ彼については調査を進めていきたいところだ。

×月×日 〱再考察〱（後書き）

いかがでしたでしょうか？

これはまあ、誰が書いたとかは想像にお任せします。

ただちよつと、遥の不思議さと言うか、そういうのが分かってもらえたらなーと思って書きました。

でも勘のいい方なら、ちよつとカラクリが分かつちやうんじやないでしょうか？

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

8月8日 くコロマル加入く（前書き）

さて、一応この章がこの小説の”前半部分”の最後になります。

明るい話が多かった1学期とは違い、2、3学期は暗い話が多いですからね。

ですから分けたいと思います。

では、ごうげん。

8月8日　くコロマル加入く

満月戦から2日経った朝。彩音の部屋のドアがノックされた。

「・・・姉貴、起きてるよな？」

「んー、湊？鍵は開いてるよ。」

湊がドアを開けて入ってくる。

「おはよ。早いね、休みならもうちょっと寝てるかと思った。」

「・・・なんか目が覚めて。そうそう、桐条先輩から伝言。」

「なに？」

「全員に伝えておきたい事がある。夜になったら、4階の部屋に集合してくれ」・・・だって。」

彩音は首をかしげた。

「何のことだろ？やっぱりこの間のストレガとかの対策・・・つばいもの？」

「・・・どうかな？僕も」今話してもいいが、実際に見てもらった方が早い”って言われた。」

彩音の頭上にハテナマークが浮かぶ。

「見てもらった方が早いもの・・・？うーん・・・」

「・・・夜になったら分かるんだし、今ここでそんな熱心に考えなくても・・・」

「・・・ま、そっか。じゃあいや。ねえ湊、今日はヒマ？」

「ヒマ、だけど・・・どこか出掛けるのか？こんな暑い中？」

「いいじゃん！行くこう行くこう！」

彩音はもう既に出掛ける準備をしていたのだろう。鞆を持つと、湊を引っ張っていく。

「姉貴・・・！」

「・・・ダメだ、聞こえていない。」

湊は仕方なく諦めて、されるがままになることにした。

作戦室。

彩音と湊は一緒に部屋に入った。もつとも、二人の様子はまるで反対だったが。

彩音は満足そうに笑みを浮かべているが、湊は疲れきった表情を浮かべていた。

作戦室には、美鶴を除く全員が集まっている。

「集合命令ということは、これから作戦でありますか？」

「え……さあな。でも警報とか鳴ってねえよな……。」

寮では緊急の際、例えば市街地にシャドウ反応があるなどと言った時には必ず警報が鳴るはずである。

皆が首をかしげていると、ドアが不意に開いた。そして、白く小さな影が中に入ってくる。

「あれ!？」

「コロちゃん!？」

「ワンツ!」

入ってきた影 コロマルは、返事をするように1回吠えた。遅れて、美鶴が入ってくる。

「ケガはもう大丈夫なんですか？」

「ああ、問題ない。出血こそ派手だったが、臓器は奇跡的に無事だったそうだ。」

「つて、あれ、この首輪……。」

風花がコロマルの首に付けられている、やけに大きい首輪を見つけた。

「その首輪は、ペルソナの制御を助ける物だ。言わば、犬用の召喚器といった所だな。」

「それ……コロマルも一緒に戦うって事ですか？」

「正直、私もこうなるとは予想してなかったが、テストの結果、充分可能らしい。というか、理事長からの強い要請なんだ……面倒もこの寮で見る事になる。」

「え、コロちゃん……いいの?」

風花は驚いた顔でコロマルを見た。

「ワンッ！」

「”助けてくれた恩を返す”という意図のようです。」  
アイギスがコロマルの言葉を代弁した。

「いや・・・あんだ、ホント義理堅い犬だね・・・」

「ワンッ！！」

「よろしくね、コロちゃん！」

「・・・よろしくな。」

彩音と湊はコロマルの頭を撫でた。

「ワフッ・・・」

コロマルは気持ちよさそうにしている。

「いいじゃん、オレ的には大歓迎よ？別にニンゲンじゃなくなたって仲間が増えりゃ、楽しいジャン？よし、オレ散歩とかしちゃうもんネ。ちようど、夏休みだしサ！」

「そうだな・・・ただ、休みを楽しむのはいいが、学業の方も、ちゃんともらうぞ。」

ここで、美鶴がある爆弾を投下する。

「来週から”夏期講習”だし、長い休みだからといって、気を抜くなよ。」

「夏期・・・え？今、なんと・・・？」

「夏期講習だ・・・聞いてないのか？学校で集中的に補習をするんだ。私たち寮生は、全員分申し込んである。日ごろ、戦いと学業を無理に両立してもらってるからな。勉強の時間も、思うように取れなかったろう。済まないと思ってるよ。理事長からも、強く賛成されてね・・・岳羽や山岸に伝えておいたんだがな。」

「マジかよ！？つか、聞いた事ねーぞ！？」

「・・・学年トップでも、か・・・？」

「え、あ、その・・・ごめん、忘れてた。」

「ありえねーっ!!」

順平が頭を抱える。

「てか、あんた成績アレなんだから、行かなきゃダメに決まってんでしょ!？」

「アレとか言うなっ! ああ・・・最悪だ。」

「まあまあ。でも楽しみかも。湊、そんな顔しないでよ。」

湊は凄く苦々しい顔をしていた。

「ま、まあ、少しの間ですから、がんばりましょう・・・」

順平と湊は、がっくりと肩を落とした。

夜。ベッドに入っとうとうとしていた彩音は、いつもの気配を感じた。

「やあ、調子はどう?」

「ファルロス・・・」

「また少し、思い出した事があるんだ・・・」

彩音はファルロスを見つと見る。

「”終わり”は、どこかの誰かが引き起こすわけじゃない。それは、大勢の人たちに望まれてやって来る・・・まるで最初から決まっていた事みたいだね。でも変だよ・・・”終わり”を望む人が居るなんてさ。」

「変、でもないんじゃない・・・? だって、嫌なことなら早く終わって欲しいし。」

彩音はあくびをしながら言う。

「そっか・・・確かにそうだね。たとえば・・・全てがイヤになったんだとしてもね・・・。ま、いいや。」

ファルロスの言い方が、彩音は少し気になった。

「実はね、今日はもう1つ、君に伝えたいことがあるんだ・・・。もうすぐ、”毒のある花”が芽を出すよ。向かいの花壇に3つ・・・そして、君の庭にも1つ・・・。さらに、どこの花壇でもない場所

に、”毒があるけどない花”が1つ・・・」

「”毒のある花”・・・？”毒があるけどない花”・・・？”

「”終わり”と関係あるかは、今はまだ分かんないけど、気を付けた方がいいよ。」

「・・・よく分からないけど、ありがと？」

彩音のお礼に、ファルロスは小さく微笑む。

「ふふっ・・・そう言ってくれると嬉しいな。また、何か分かったら知らせに来るよ。僕たち、友達だもんね。」

ファルロスは屈託無く微笑んでいる。

すると、彩音の頭の中に1枚のカードが浮かび上がる。

死神のアルカナのコミュが、ランクアップしたということだ。

「それじゃ・・・おやすみ。僕の、大事な君・・・」

「えっ・・・？」

彩音はファルロスの最後の言葉が上手く聞き取れず聞き返そうとしたが、ファルロスはその前に消えてしまった。



8月8日　くコロマル加入く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ファルロスの来訪日をまた1日ずらしました。

さて・・・次は多分湊と遥の話になるかな・・・と思います。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

8月10日 〳夏期講習〳（前書き）

ついに、ついに明日ですっ！「デビサバ2」！今日眠れるかな・・・。

あと、もう1つお知らせというか、何と云うか・・・。

この小説のユニークが1万人突破、アクセス数が8万突破しました！いつも読んでくださっている皆様、ありがとうございます！

これからも、この「ペルソナ3」死神の旅路」を宜しく願います。

では、どうぞ。

8月10日　〜夏期講習〜

「うー、暑い・・・。」

「あれ、順平って炎には耐性あるんじゃないかなかったっけ？」

「それとこれとは別なんだよ。あー、プールとか行きてえ・・・。」

「暑い暑い言ってるよ、こっちまで暑くなるでしょ。それにプールだって、女の子の水着が目当てなんじゃないの？」

「違えーって！オレっちはただ純粹にだな・・・。」

順平、彩音、ゆかり、湊が歩いているのは、学校の校舎内。今日から、夏期講習が入っているため4人は学校に来ているのだ。

今日の講習はもう終了したので、どこか寄り道して帰ろうかと4人は話し合っていた。ちなみに、風花は夏紀の復習を手伝っているし、先輩2人は見つからなかった（美鶴は何か用事、真田はトレーニン  
グだと4人は思っている）ので4人だけなのである。

「・・・？あれ、遙じゃん？」

順平が指差した先には、茶髪の小さい後姿。

先ほどから、頭が痛い。

今日は本当は体調が悪かった。朝から体はだるかったし、最近は何不足気味だったことも原因の1つなのだろう。

しかし、これくらいなら平気、と軽く考えて学校へ来てしまった。

その結果がこれだ。足もふらついているのを感じるし、流石にやばいかもしれない。

「おーい！遙くん！！！」

後ろから大声で自分を呼ぶ声がする。しかし、その声は実際の距離より遠くから聞こえるように感じた。

後ろを振り返ろうとするが、そこで酷い眩暈がする。

「う・・・。」

遥はそのまま力が抜けていくのを感じ、意識を手放した。

「?どうし……」

ドサッ。

「え……」

「……遥!？」

様子がおかしいことに気付いた彩音が、どうしたのと呼びかけようとしたところで、遥は倒れてしまった。

とつさに4人は遥に駆け寄る。

「遥くん、熱が……!」

ゆかりが遥の額に手を当てる。

「……とにかく、保健室!」

湊が素早く、遥の体を起こして背負った。

息が荒い。これは少し、マズいかもしれない。

「軽……」

「あらあなたたち、こんなところでどうしたの?」

そこに鳥海が通りかかった。

「先生!目の前で、遥くんが倒れて……!」

彩音の説明と、湊の背にいるぐったりした遥を見て鳥海は状況を察したようだ。

「すぐに満嶋を保健室に運ぶわよ。ほら、早く!」

さすが教師といったところか、鳥海は取り乱すこともせず湊に指示を出した。

湊は頷くと、遥をあまり動かさないようにして走り出す。彩音たち4人も、すぐ後に続いた。

……段々意識がはっきりしてきた。

遥はまず、辺りを確認する。白い天井、白いカーテン。ここはベッドの上らしい。ということは、保健室か、と遥はぼんやりと思う。遥はすぐに察した。自分は倒れて、誰か 恐らく有里姉弟のどちらかだろう。にここまで運ばれたのだろう、と。

体のだるさはまだ残っている。動くには少し辛い。

それでも遥は起き上がった。

途端に、遥はため息をついた。

ここ最近風花が影時間にルキアを使いペルソナ使いの反応を探している。風花の索敵もレベルは上がっていて、覚醒当初の索敵よりも精度が上がっていた。それにペルソナ使いを集中して探していたため、普段遥が無意識にペルソナにさせている索敵ジャミングでは、風花の索敵を邪魔することが難しかった。そのため遥は影時間中も起きていて、ペルソナの方に集中しなければならなかったのだ。

その結果が、寝不足による疲労の蓄積。

そして、影時間以外でも勘のいい湊や風花、探し回っている美鶴の目もかいくぐらなければならぬ。湊や風花に感づかれないように行動すること。これで、疲労は思ったより大きくなってしまったのだろう。

加えて、この暑さ。元々暑さにそんな耐性のない遥には、少々きつかった。

そういった原因が重なり、今回倒れてしまったのだろう。

どうやら、風邪も引いてしまっているらしいし。

「・・・起きた？」

「！」

カーテンが開けられ、湊が顔を出す。

「・・・驚いたよ。いきなり倒れるし、熱はあるし・・・。」

「ごめん、心配かけちゃって・・・。・・・湊くんが運んでくれたの？」

ふい、と遥の質問に湊は目を逸らす。自分から言うのは気が引けるらしい。

「・・・でも、ありがと。・・・痛つ・・・」  
「まだ無理するな。」

ずき、と痛んだ頭を押さえると、湊が冷たいタオルを差し出した。  
「・・・それで冷やしとけ。鳥海先生が、病院まで車で送っていつてくれるつてさ。」

「え、そんな・・・。薬飲んどけば治るよ、これくらい。」

「ダメだ。・・・倒れられたら、心配にもなるだろーが・・・。」  
ちよつと俯いて言った湊に、遥はう、と言葉に詰まる。

「・・・分かったよ。」

「・・・病院は先輩が手配してくれた。立てるか？」

「うーん・・・頑張る。」

「・・・そういう時は手伝ってつて言えばいいのに。」

湊は遥を軽々と背負った。

「いいつて！」

「・・・病人は大人しくしとけ。」

遥は抵抗するが、湊は降ろす気は無いらしい。

遥が不満そうな声を上げるのを聞きながら、湊は保健室を出た。

「・・・ありがと。」

「・・・これくらい当たり前だ。」

湊の言葉に、遥は小さく微笑んだ。

ふと、湊の頭の中に一枚のカードが浮かび上がる。

”？番 運命”。

湊は、運命のアルカナのコミュである満嶋 遥コミュを手に入れた。

湊の頭にカードが浮かび上がった時・・・遥もまた、湊の背で驚いた顔をしていた。

まさか自分がコミュの1つを担うことになるとは思わなかったからだ。

でもすぐ、遥は元の顔に戻る。

それは、知らないから・・・だと思いなおして。

「・・・どうかしたか？」

「いや、なんでもない・・・」

遙はいけないいけない、と気持ちを切り替えて、今は湊の好意に甘えることにした。

8月10日　〜夏期講習〜（後書き）

いかがでしたでしょうか？

うー・・・BLに見えるのは気のせいだ！そっちの方向じゃない！  
ただ純粋な友情だっ！と言い張ります。

まあ何と言うか・・・ベタな展開ですが。

ちなみにあとの3人は帰りました。湊が「先帰ってていい」と言っ  
たからです。

そして、遙が目を覚ますまでには、江戸川が変な薬を遙に飲ませよ  
うとしたのを湊が頑張って止めたという裏設定もあったり。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。



8月14日 く遙とアイギスく（前書き）

明日はコンクールなのです。出ないけど……。  
バスが苦手なものですから……ちよつと憂鬱だったり。

あー、夏祭りどうしよう……。姉弟で回っても面白くはない、か  
も……？

では、ごじゆ。

## 8月14日 く遥とアイギスく

1日過ぎれば風邪も治り、遥はまた夏期講習に顔を出すようになった。

もちろん、その際にも感づかれなかったための努力は欠かせない。

しかし・・・遥は1つ、忘れていたことがあった。

正確には”忘れていた”ではなく”計算から外している”だったが、ともかく、遥にとってその出会いは予想外だったのである。

彼女 アイギスとの出会いは。

アイギスは、「機械である」ということも考慮して、なるべく外出はしないようにと美鶴から言いつけられていた。

街の地理などデータとして頭に入っているし、わざわざ見て回る必要はない。彼女もそう判断していた。

しかしそれは、アイギスが何よりも優先と考えている、「有里姉弟の傍にいる」ということが無ければの話だ。

要するに、彼女は連日夏期講習に行く二人を迎えに行こうと考え、行動に移したのである。特に夏期講習初日は、湊が遥の付き添いでずっと学校にいたため、帰るのが遅くなってしまったのも一因だ。

勿論だが美鶴は反対した。だがなにやら興味を持った幾月が、外出を許可してしまったのである。

流石に美鶴と言えども理事長には逆らえない。ということで、アイギスは夏期講習の間、二人の迎えを許した。

ということと今現在、アイギスは屋久島でも着ていた水色のワンピースを着て、月光館学園まで来ていたのだった。

そこに、運悪く・・・遥が居合わせてしまった、のだった。

「（……！……はは、何なのかなこれ。前の真田先輩といい、今回といい……）」

「……！」  
遥はそそくさと立ち去ろうとしたが、アイギスに見つかってしまった。

「……その貴方、少し待っていただきたいであります。」

アイギスを相手に鬼ごっこをしても、負けるのは目に見えている。ここは素直に立ち止まっておくことにした。

「……何かな？」

「質問があります。ついて来てください。」

アイギスは有無を言わず、遥の腕を握ると、人気の無い方に歩き出す。

握られた腕が、地味に痛かった。

「……っ、逃げないから、その手を離してくれない……？」

言ってみるが、アイギスはそれを完全に無視する。

少しして、人気の少ない裏路地にやって来た。

ようやくアイギスが手を離し、こちらに向き直る。

「あなたのお名前は？」

「……満嶋 遥。」

「……！」

アイギスは驚いたようにして、少し考え始めた。

「……わたしと、どこかでお会いしたことは？」

「君とは初対面だと思う……けど。何で？」

アイギスはまたも少し考える。

「……聞きたいことはそれだけ？」

「……すみません。ありがとうございました。」

アイギスはそう言うと、踵を返し立ち去っていく。

完全にアイギスの姿が見えなくなったところで、遥は息を吐いた。  
「バレるかと思った……。」

アイギスは1人、月光館学園の近くに帰ってきていた。

「・・・おかしいであります。なぜ、わたしはあの人を知っている気がしたのでしょうか・・・。しかも、あの人を傷つけてはいけない気がするであります。」

アイギスは良く分からない感覚に、頭を悩ませていた。

8月14日 く遙とアイギスく（後書き）

いかがでしたでしょうか？

あー、なんかグダグダな気がします。すみません。

デビルサバイバー2、やっぱり面白いです。現在4日目。

イオちゃんが意外に物理攻撃も出来てちよつと驚いています。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

8月16日 〽夏祭り 彩音side〽 (前書き)

今は夏休みで、確かに夏祭りってシーズンですけども・・・。

私の家の近所では、8月の後半に大きいお祭りがあるまで他はもう無いんですね。

だから、そのお祭りは楽しみです！

では、どうぞ。

8月16日 〱夏祭り 彩音side〱

今日は、長鳴神社の夏祭りだ。

数日前から、アイギスが浴衣に興味を持ち、「潜入作戦を希望するであります」と言っていた。

湊は先に誰かから誘われたらしい。

今、彩音は浴衣を着て、長鳴神社の前である人を待っていた。不意に、彩音が大きく手を振った。

「真田せんぱい!!」

そう、彩音が待っていたのは真田だった。

真田はいつもの通り走ってきたらしく、軽く汗をかいている。

「すまん、待たせたか？」

「いえ、大丈夫ですよ。じゃ、行きましょう!」

彩音は真田の手を引いて、階段を上がる。

神社は出店でにぎわっていた。その様子に、彩音が顔を輝かせる。

「へえ、なかなか盛況じゃないか。人も多いな・・・はぐれないようにしろよ?」

「大丈夫ですって。なんなら手、つないどきますか?」

「何言ってるんだ。そこまで子供扱いしてないだろ?それじゃ、まずはお参りから行くか。」

真田は人が多い中で、はぐれないようにと彩音の隣を歩いてくれる。

彩音は楽しそうな真田の様子に、自然と笑みを浮かべていた。

ふと、真田がこちらの視線に気付いたのか彩音を見る。

「・・・?何ですか?」

「・・・歩きにくそうだな。わざわざ、浴衣を着て来なくてもよかつたんじゃないか?あ、いや・・・」

真田は口ごもった。そしてふいと顔をそらす。

「ただ、その……、……まともに、見られないだろ。」  
「え、どういうことですか？」

真田の顔が少し赤くなっているのを見ながら、彩音は少し怒ったように言ってみた。

「に……似合ってる。だから怒るな。」

ちよつとした悪戯のつもりだったのに、予想外なことを言われて、彩音はしばしばかんとしてしまった。

「ん？どうした？」

「……なんでもないです……。」

彩音も少し顔が赤くなっていた。それを隠すために、少し俯く。

そして2人は、お参りを済ませた。

「……美味そうないだな。」

お参りを終えて、出店を見ながら戻ってくる最中、ある出店の前で真田が足を止めた。

真田が見ている出店に並んでいるものは、たこ焼き。

「たこ焼きか……買うから、半分食うか？」

「あ、はい。いただきます！」

「……すみません、たこ焼き1つ。」

真田はたこ焼きを買いに行った。

「おっ、イケメンだね。よし、1個オマケ！」

店主が真田を見てたこ焼きを1つオマケしてくれた。店主は隣に隣に来た彩音を見る。

「そっちの子、彼女？いいね、青春。」

「ちっ……違う！！……あ、いや……。」

真田は黙ってしまった。

そして、無言で店主にお金を払いたこ焼きを受け取ると、たこ焼きを1つ口に入れる。

「……！」



「せ、先輩……？」

どうやら、熱かったようだ。

「……恐ろしい戦いだっただ……。」

真田はようやく飲み込み、ほっと一息ついた。

「まあ、勝利だがな。ほら、お前も食べよ。」

真田にたこ焼きを渡される。彩音も1つ食べてみた。

「熱っ……。でも、美味しいです。」

「だろ？」

その後、真田とたこ焼きを半分こして食べ終わった彩音は、また出店を回ることにした。

「懐かしいな、お面だ……。」

真田がお面の店を見て、感慨深そうにつぶやく。

「500円……。か。いつの間にか、買えるようになってたんだな……。」

昔は、高く買って買えなかった。祭りに来ても何も買えずに、ただウロウロして……。帰ったよ。今は……。買ってしまうな……。」

「お小遣いすぐ使っちゃうタイプだったんでしょ？」

「いや、そういうことじゃなくてな……。」

「よっ！お2人さん！くじ引いて帰らない？ここ来た思い出に、どうだい。ウチのは、空くじは少なめだよ！」

真田が続きを話そうとしたところに、くじ引きの店の店主が話しかけてくる。

「くじ引きか……。ここに飾られてるようなものが本当に当たるのか……。ずっと疑問だった。やってみるよ、有里。俺が金出すから。」

「え、いいですよ！お金くらい自分で……。」

「いいから。」

真田は先に店主にお金を渡してしまった。

「……後で返しますからね！」

彩音は差し出された箱に手をつ突っ込んだ。

手で軽く三角くじをかき混ぜてからくじを引く。

「おーっと！おめでとう！いや、ウチで当てるたあ、スゲえ強運だな、お嬢ちゃん！」

店主は景品の棚から、ジャックフロストを模した人形を取り、彩音に渡した。

「ほれ、賞品のフロスト人形だ！」

彩音は人形を受け取る。

「さすがに、1等じゃないか……。まあ、こんなところで運を使い果たされても困る。……。ああ、それはお前が引いたんだから、賞品もお前のものだ。」

「え、そんな！」

「……。やるって言ってるんだ。素直に受け取っとけ。」

「……。うー、じゃあお金は返します！」

「いや、それもいいから。」

「先輩がよくつても、私の気がおさまりません！」

折れたのは真田だった。分かったから、とお金を受け取る。

しばらくして真田が腕時計を見てみると、もう結構遅い時間だった。

「もう暗いな。思ったより長居したみたいだ。今日は、いい息抜きになった。……。ありがとう。」

「私事です、真田先輩。ありがとうございました。」

その後は2人で寮に帰った。

「……。遅かったな。」

「先帰ってたんだ？道理で会わなかったなあ、と……。」

寮に帰ると、ラウンジに湊がいた。他のメンバーはもういない。一緒だった真田も先に2階に上がって行ってしまった。

「……。？湊、なんかあった？疲れてない？」

「……。別に。楽しかった？」

「うん！湊は？」

「・・・楽しかったよ。」

湊が立ち上がった。

「・・・浴衣、似合ってる。じゃ。」

そのまま湊は、そそくさと2階に上がって行ってしまった。

「・・・ありがとう。」

彩音は湊の後姿を見送って、小さく微笑んだ。

8月16日 ～夏祭り 彩音side～ (後書き)

いかがでしたでしょうか？

うーん・・・つくづく思いますけど、ひねりがないといつか・・・  
次回は湊サイドです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

8月16日 ～夏祭り 湊side～ (前書き)

最近『家庭教師ヒットマンREBORN!』にハマってしまっています。

雲雀さんが特に好きだったり。デフォルメされたやつは可愛いし。

今回は湊視点でお送りします。お相手は・・・勿論とつか・・・

では、ごきげん。

8月16日 夏祭り 湊side

彩音が長鳴神社に真田と一緒に来る少し前。

湊は既に、約束した人物と合流し、神社の中を歩いていた。

その人物とは、ピンクと白の市松模様で、ところどころ花の絵が入った浴衣を着たゆかりである。

湊は彩音と真田の邪魔をしたくなかったし、自分も楽しめるようにと時間をずらして待ち合わせしていた。

「あつ！あの浴衣カワイイなー。そっかぁ・・・やっぱり探せば、ああいうのあるんだ。」

湊の隣を歩くゆかりは、道行く人の浴衣を色々と見ていた。

「あー、どうせ着るなら、もうチヨイ遠出して探すべきだったかなあ・・・」

「・・・大丈夫。・・・中身は勝ってる・・・から。」  
言ってぷいと目を逸らした湊のセリフに、ゆかりは顔を薄く赤らめる。

「そ、そう？でか、湊くんがストレートにそういうセリフ言うの・・・珍しくない？・・・まあ、素直に嬉しいけど。」

ゆかりが目を逸らしたままの湊の顔を覗き込もうとする。

「・・・あ。湊くん顔赤い。」

「・・・うるさい。」

湊は顔を見られないようにあさつての方を向いた。

「・・・でもさ、この”浴衣”って、何て言うか・・・だいぶ無防備な服だよな。涼しいのはいいけど、このスースー感は、慣れられない人もいると思う・・・昔の人って、実は大らかだったのかも。」

「・・・そうかもな。」

湊は顔を逸らしたまま答える。

その時。

「あ、真田センパイだ！センパイも夏祭りなんて来るんだ。」

「ねえ、誰か隣にいるよ？」

「嘘、抜け駆け？誰？」

「ほら、2年の・・・同じ寮入ってる転校生・・・」

「・・・なんかムカつくね。同じ寮だからって、でしゃばんなつての。」

「しかもアイツ、別の奴とデキてるって噂あんじゃん・・・。何、男漁り？」

通りすがりのそんな会話を聞いて、湊はすぐ振り返る。

見れば、今悪口を言っていたらしき人たちが入り口の方に向かっていくのが見えた。

その先には、丁度今来たらしき彩音と真田。

2人は湊たちにも、悪口を言っていた女生徒たちにも気付いていないようだ。

「・・・嫌なカンジ。」

「・・・止めよう。邪魔、させたくない。」

ゆかりが頷くのを確認すると、湊は女生徒の方に向かっていく。

「・・・ちよつと待て。」

女生徒に追いつくと、湊は少し低めの声で呼び止める。

「何？アタシ達になんか用でもあんの？」

「・・・彼女連れてんじゃないん。何それ、自慢？」

「あ・・・そういえばこいつ、あの2年の転校生の弟じゃん・・・。」

「まさか、聞いてた？んで、邪魔しに来たとか？」

彼女、と言われてゆかりが反応するが、湊が目線だけで止める。

「・・・分かつてるんなら話は早い。」

「は？何しようがアタシ達の勝手じゃん。」

「それに真田センパイはみんなのものだしー？抜け駆け注意して何

が悪いの？」

「・・・先輩は誰のものでもないだろう。どうせ、あわよくばなんて思ってたんじゃないか？」

凶星だったらしく、女生徒が言葉に詰まる。

「べ、別にそんなこと・・・」

「・・・ね、もういいよ。行こう？」

女生徒たちは逃げるようにその場を去って行った。

「・・・なんかあいうの、ムカつくなあ・・・。他人のこと好き勝手言つてさ・・・。」

「・・・ごめん、巻き込んで。行こう？」

「う、うん・・・」

2人はまた、お祭りの中に戻ることにした。

あまり遅い時間になつては危なくなるかもしれないので、湊たちは早めに帰ることにした。

彩音たちはまだお祭りの中にいる。

「今日は楽しかったね。また今度、2人でどっか行く？」

「・・・考えておこうかな。」

「!・・・うん、楽しみにしてる。」

少し冗談半分で言ったことが真面目に受け取られてしまい、ゆかりはちよつと驚いた顔をした。

「・・・じゃ、帰るか。姉貴たちは、まだいるみたいだし・・・。」

「そうだね。」

2人は話の花を咲かせながら、寮へと戻った。

湊はラウンジで1人、彩音の帰りを待っていた。

不意に、玄関のドアが開く。

「・・・遅かったな。」

湊は入ってきた彩音に声をかけた。

「先帰つてたんだ？道理で会わなかったなあ、と・・・。」



彩音は充分楽しめたようだ。

「……？湊、なんかあった？疲れてない？」

「……別に。楽しかった？」

湊は祭りの途中で会った女生徒2人を少し思い出していた。なんとか平気なように振舞う。

「うん！湊は？」

「……楽しかったよ。」

そろそろ上がるか、と湊は立ち上がる。そして、一言。

「……浴衣、似合ってる。じゃ。」

やっぱり面と向かって言うのは少し恥ずかしかった。そのまま、湊はラウンジを早足で立ち去る。

「……ありがとう。」

一瞬反応しそうになった湊だが、それは浴衣のことだと思いなおし、ラウンジを後にした。

8月16日 く夏祭り 湊side (後書き)

いかがでしたでしょうか？

皆さんの予想通りだったと思います。

やっぱり恋愛要素は苦手だ・・・。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

8月20日 〈絵を描く少女〉（前書き）

3DSを早速昨日購入しました。

DSが無くて今までなかなか思うように進まなかったデビサバ2もこれで再開できる！とすぐさまプレイしています。

現在土曜日。ルートは、憂う者の「世界を新しく造り直す」ルートです。

では、ごじぞ。

8月20日 く絵を描く少女く

夏休みも残り10日ほどになった。宿題をほったらかしにしている者は、そろそろ焦りだす頃である。

そんな中で、順平は特に行くあてもなくブラブラとしているうちに、辰巳ポートアイランド駅に着いていた。

「ああく、なんか蒸すなあ。」

順平はおもむろに携帯を取り出し、開く。

「うげっ、もう20日かよ。夏休み、もうすぐ終わんじやん……。……って、することもねえけどさ。」

携帯を閉じ、ポケットにしまう。そのまま順平は、ぼんやりと空を見上げた。

少し憂鬱な気分とは反対に、今日も空は青く晴れ渡っている。

「なんか……特別な力とかあったところで、世の中、結構つまんねーな……。……ん？」

順平の視界に、あるものが入った。

夏には絶対に不似合いな、白のドレス。長く伸ばされた赤い髪。ヘッドドレスのデザインは、まるで剣が刺さっているかのように見える。

明らかに周りから浮いている少女だった。

「あの子、絵……描いてんのか？似顔絵とか描く人……？……。……ってんでもねーか、誰も居ねえし。」

少女はスケッチブックに、何かを描いているようだった。

順平は辺りをきよきよと見回してみる。

「え、何描いてんだ？ナンもねえだろー、こんなところ。」

確かにここには、花壇やベンチなどといったものしかない。そんなものはわざわざここに来なくてもポロニアンモールの方にもあるわけだし、こんな暑い屋外で描く意味が分からない。

順平は少女の近くに行つて、少女をじーつと見つめる。

「・・・どいて。」

不意に、少女が声を発した。

「見えないでしょ・・・どいて。」

「あ・・・ああ、悪イ。」

順平は慌ててそこから少しずれた。少女はそれを確認すると、また無言で手を動かし始める。

「にしても、何描いてんだ・・・？」

やはりこのような場所では何を描いているのかが気になった順平は、少し離れながら少女の絵を見た。

・・・思わず、順平は顔をしかめる。

スケッチブックには、一面に赤と黒が広がっていた。何を描いているのかが全く分からない。

「何？」

視線に気付いたのか、少女が手を止めて順平の方を向いた。

「あ、いや、なんでもねえんだ・・・ワリイ。」

順平はそそくさとそこから移動した。

「すげえカッコ・・・こんだけ暑いのに・・・しかも、あのキモい絵・・・。ゲージュツは爆発つてやつ？」

未だ絵を描いている少女を見ながら、順平は呟く。

「ま、いつか・・・」

順平は「あれは個人の自由だ」と思うことにし、その場を立ち去った。

少女は順平が去った後、また手を動かしていた。

と、その時。

ヒュッ。

「！」

少女は自分に向かって投げられたものを、とっさに掴んだ。

冷たい。

少女は投げられたものを見てみる。

それは、恐らく自動販売機で買ったものだろうスポーツドリンクの缶だった。もちろん開けられてはいない。

ふと、缶に何かが書かれているのが目に入った。

『熱中症には気をつける』

「・・・」

少女は無言でその素っ気ない文を読むと、

「・・・余計なお世話。」

と呟いて缶を脇に置いた。

その缶を投げた人物を、思い浮かべながら、辺りを見回しても、もう誰もいない。

少女はまた、絵を描くことを再開した。

8月20日 〈絵を描く少女〉（後書き）

いかがでしたでしょうか？

・・・はい、そんなことをする人物は思い当たるのが1人しかいないと思います。

ストレガや特別課外活動部ではありませんね。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

8月21日 映画祭り (前書き)

デビサバ2クリア!

あれですね、先手必勝!ですね。

映画祭り、テオドア&エリザベス編です!

では、ごうげ。



8月21日　〜映画祭り〜

最近、辰巳ポートアイランド駅前の映画館「スクリーンショット」にて映画祭りが行われている。

テーマに沿った映画を連続上映するというイベントで、なかなか人気のあるイベントだ。

かくいう彩音や湊も、絆「絆」を作った人たちと共に連日映画祭りに出掛けていた。

そして今日も、彩音と湊の元には誘いの電話がかかってきていた。

『もしもし、こちらテオドアでございます。』

「え、テオ？どうしたの？また失踪者？」

「かかってきたのは予想外の人物で、彩音は少し驚く。」

『いえ、そういうわけではなくてですね……。実は、”エイガマツリ”……なるイベントが行われていると聞きました……。興味があるのですが、ご一緒願えませんでしょうか？勿論、姉も湊様を今お誘いしておりますが。』

「ああ、映画祭りね？うん、いいよ！一緒に行こ？」

彩音は快く了承した。

『ありがとうございます。それでは後ほど。』  
そう言って電話は切れる。

しばらくすると、ドアがノックされた。

「湊？映画祭りなら行くよ？」

「……やっぱりな。そろそろ出ないと……。」

「うん、今行くー！」

彩音は待っていた湊と一緒に、映画祭りに出掛けた。

スクリーンショットに着くと、もう既にエリザベスとテオドアが待っていた。

今日の映画のテーマは、「悲恋大特集」。

それを見たテオドアが首をかしげる。

「悲恋・・・とは何ですか？」

「見てみたら分かるよ。ハンカチは用意した？」

「・・・？ハンカチでしたらいつも持っておりますが。」

「・・・多分必要だろうな。」

「そうなのですか？知らないことが学べる気がします・・・。楽しみですね。」

4人は早速中に入ることにした。

悲恋というテーマだけあり、上映される映画は悲しげなものが多かった。

エリザベスやテオドアも何かを感じたらしく、いつもと様子が違っている。

彩音は泣いてしまっていたし、湊も少しだけ目を潤ませていた。

合計3本映画を見て、今日の映画祭りは終わった。

彩音は目が赤くなっているし、4人は全員どこか暗い雰囲気だ。

「・・・分からないことがたくさんありました。いえ、正直に言いますと、分からないことのほうが余程多かった・・・。」

最初に口を開いたのはテオドアだった。

「ですが・・・不思議と、胸が痛みました。何故なのでしょう・・・。」

2人は黙り込んでしまった。

「・・・しばらく退屈せずにすみそうです。本日はありがとうございました。」

「・・・わかるといいな。」

湊の言葉に、エリザベスとテオドアが頷く。

「・・・姉貴は泣きすぎだ。」

「だって、だって・・・しょーがないじゃん！」

湊はやれやれと、さっき濡らしたハンカチを彩音に渡す。

「・・・ありがとう。」

彩音はハンカチで目を押さえた。

「では、今日はこれで・・・。」

テオドアとエリザベスが一礼した。

二人はエリザベスとテオドアと別れ、寮に帰ることにした。

8月21日 く映画祭りく (後書き)

いかがでしたでしょうか？

やっぱり最近は短くなっている気がします・・・。  
次、は・・・24日のやつかな？

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

8月24日 く因縁の片鱗く（前書き）

今日の雨、ほんとに凄かったです。

涼しくなるのはいいんですけど、あれだけ降るっていうのも困り物ですね。

最近、オリキャラの登場機会が増えてます。

では、どしどし。

8月24日　く因縁の片鱗く

夏休みだけという制限つきで蔵戸台分寮に入寮している天田は、この日蔵戸台駅前商店街をぶらついていた。

勿論目的がないわけではない。天田はとある人物を探していた。しかし今回もと言うか、その人物は見つかっていない。そもそも人物像すらおぼろげな人物を探すというのは、かなりの幸運か偶然がなければ成しえないだろう。

しかし、幸運というか不運と言うべきか、偶然というか必然と言うべきか。

その人物に、天田は再会した。

天田は商店街のビルで、見慣れた人物を見かけた。真田だ。

「あれ、真田さんがいる。・・・？」

真田は今ビルの2階部分にいる。天田は3階にいたので、見下ろす形になった。

誰かと待ち合わせをしているのか、真田は「はがくれ」の前に立っている。

しばらくして、「はがくれ」から1人の男が出てくる。

夏なのに厚いコートを着て、ニット帽を被った荒垣だ。

荒垣は真田を見るなり、苦々しく呟いた。

「ったく・・・テメエのしつこさじゃ呆れんぜ・・・」

今はそんなに人がいない。よってここはいつもに比べて静かで、少し耳を澄ますだけで会話は聞き取れそうだ。

天田は気になり、会話を耳を傾ける。

「何度でも来るさ。俺は諦めが悪いんだ。」

「何度来ようが同じだ。戻る気はねえ。」

何かの勧誘だろうか、と天田は思った。

「実は、面白い仲間が見つかったな。動物がペルソナを使う。」

「あ？今なんつった？」

「半年くらい前にシャドウ絡みで主人を亡くした”犬”だ。こいつがまた忠犬でな…俺たちの所に来るまで、原因の事故が起きた場所に居座ってた。辛い思い出のある場所に、わざわざな。」

荒垣は黙り込んでしまった。

天田もその犬は知っていた。ついこの間、寮で飼う事になったと聞かされたコロマルだろう。

しかし、”ペルソナ”や”シャドウ”といった聞き慣れない語句に、天田は眉をひそめる。

だが次の真田の言葉を聞いた時、天田の顔が驚きに染まる。

「一昨年の10月…俺たちの前で、やはり1人の人が死んだ。あれから、もう2年になるな…」

荒垣はまだ黙ったままだ。

「あの事件”の事…いつまで、引きずっている気だ。駅前裏の溜まり場…誰と親しい訳でもないのにも居るのは、そのせいだろ。」

「関係ねえ。」

天田の頭の中は混乱していた。一昨年の10月、駅前裏の溜まり場…心当たりのありすぎる単語が頭の中でぐるぐると回る。

でも、その会話は耳に入ってくる。そして。

「あれは”俺がやったんだ”。一度、起きたことは消えねえ。テメエ勝手なケジメを付けたからって、そんな事でどうなる…何が戻る。美紀の…お前の妹の時とは違うんだ。」

「シンジ…」

「終わったんだよ…。思い出したくもねえ…もう2度とな。」

荒垣は言い捨てて、真田に背を向け去って行った。真田も、追いかけなかった。

「2年前って…そんな…」

先ほどの会話の重点的な部分が、ゆっくりと頭に入っていく感覚を、天田は覚えた。

そして、天田は俯いていた顔を上げる。

その目は、少し前とはまるで違っていた。怒り、悲しみなどが混じった、暗い目。

紛れも無い、復讐者の目だった。

「名前…」シンジ”って言ったな…」

暗い決意を宿した小さき復讐者。

その復讐の炎は静かに、けれど強く燃え上がる。

歯車はここで違ってしまったのかもしれない。

天田の足は、自然と長鳴神社に向いていた。

復讐が成功するようにと願掛けをしに行こう、と無意識に思ったのかも知れない。

「いつかの少年、だよ。確か天田くん。」

階段を登った時、聞き覚えのある声があった。

声のした方を向けば、そこには前に1度会った、遥がいた。

遥は前回と全く同じ場所に座っている。

「また会うとは、ね。…ん？」

遥は何か気付いたかのように眉をひそめる。

「…変わったね、天田くん。何かあったのかな？」

天田は少し驚いた。自分の変化に、こつこつ早く気づくとは、と。

天田はとりあえず、遥の傍に移動した。

「…遥さん。」

天田は遥の少し前で立ち止まる。

「僕、決めました。ずっと成し遂げたかったこと…いや、成し遂げ



たいことを、絶対に成功させます。」

「…そう。」

天田は、今ここで何か言っておかないとダメな気がしていた。自然に、言葉が紡がれていた。

「以前言ったとおり、僕は何も干渉する気はないよ。ま、頑張れ。」

「…いいんですか？」

全て、この人には分かっているのだろう。自分の目的も、何もかも。そういう確信が、天田の中にあつた。だから聞いた。

「僕を止めなくても、いいんですか？」

「だから干渉はしないって言ったでしょ？君の成し遂げたいことが、たとえ正しい行いでなくとも。」

「…そうですか。」

天田は踵を返す。

「…ありがとうございます。」

「何もしてないよ、僕は。」

「何か…救われた気がします。」

「多分それはまやかじゃない？」

「まやかしてもいいです。…じゃ、失礼します。」

天田はそのまま、ゆっくりとその場を立ち去った。

8月24日 く因縁の片鱗く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

先に言っておきますと、この先遙は宣言どおり干渉はしません…復讐に関しては。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

8月28日 く天田加入く（前書き）

…やってしまった。

本来の投稿日を過ぎてしまいました…。

というか、色々イベントをすっ飛ばしているような気が…（汗）

では、さようなら。

8月28日 く天田加入く

夏休みももうあと残り3日。

今日も誰か映画祭りに誘おうかと思っていた矢先、ドアがノックされる。

「はい？」

『私だ。済まない、少しいいか？』

聞こえてきたのは美鶴の声だった。

「あ、今開けます！」

彩音は急いでドアを開ける。

「おはよう。」

「おはようございます。どうかしたんですか？」

「今夜、また理事長がいらっしやるそうだ。夜になったら、4階の部屋に集合してくれ。」

また？と彩音は首をかしげたが、とりあえず「分かりました！」と言う。

「じゃあ、伝えたぞ。」

美鶴はすぐに去って行った。

今日はアイギスが暇そうだったので、アイギスと映画祭りに行くことにした。

今日の映画のテーマは”風雲忍者列伝”。

「忍者列伝：ということとは、大勢の忍者さんが登場するでありますか？」ニンジャとは、男のロマンン！”：：”そう順平さんから聞いたであります。」

「順平、変なことを吹き込んで……。」

彩音は少々呆れたが、アイギスが楽しみにしているようだったので

早速入ることにした。

映画館を出たアイギスが、彩音を呼び止めた。

「…インプットされている重要な情報を更新しました。つまり忍者とは”最強の称号”であります。」

映画にはそれなりに脚色も入っていたのだが、アイギスにはそれが本物と見えたらしい。

「最新の特殊装備に匹敵する力を生身で引き出す特殊戦闘員…まさに鬼。死角なしであります。」

「まあ、あれだけ大掛かりな演出だと、ね…」

彩音は苦笑したが、アイギスは何か考え込んでいる。

「彼らほどの存在が、なぜ廃れていったのでしょうか…。…氷河期…?」

「いや、そんな昔だと忍者どころか人間いないから!？」

「…では、インターネットの普及…?」

「江戸時代とかにインターネットはない!」

「…謎は尽きないであります。」

色々変な考えを持っているアイギスに彩音は突っ込んだ。

「今日は、ありがとうございました。これから彩音さんを、彩音忍者と呼ぶであります。」

「え、それは困る!」

彩音が急いで止めると、アイギスはしてやったりという笑みを浮かべる。

「…ちよつとした冗談であります。」

彩音はきよとんとなった。が、すぐに笑って、

「真顔で言わないのー!本気にしちゃっから!」

とアイギスの肩を叩いた。

夜。言われたとおり、作戦室には全員が座っている。もう、幾月も着席していた。

「全員、いるみたいだね。さ、入って。」

幾月は扉に向かって呼びかける。みんなの顔が一気に怪訝そうなものになった。

ドアが開く。

「失礼します。」

入ってきたのは、夏休みの間だけこの寮にいる天田だった。

天田には、この寮の秘密は知らされていないはず。

「まさか…」

真田が驚きの表情で幾月と天田を交互に見る。

「色々調べさせてもらった結果、彼にも充分な”適性”があると分かってね。早速、仲間に加わってもらおうと思って、みんなに集まってもらったんだけど…」

「ま、待ってください理事長。彼は、まだ初等科です。それに…」

真つ先に反論したのは、美鶴。

しかし、幾月は何がいけないのか分からないといった風に首をかしげる。

「それに…何かな？彼のペルソナ能力は確かだよ。鍛えれば、充分戦力になり得る。」

「そいつ自身は、いいと言ったんですか。」

「僕の方からお願いしたんです。」

真田の質問に答えたのは、当の本人である天田だ。

それを聞いて、全員が更に驚く。

「僕にだって、出来る事があると思うし…それに…僕になんで”力”が目覚めたのか…ようやく、分かった気がするんです。」

「…とまあ、そういう事。だから、お願いさせてもらったんだ。」

「足を引つ張らないように頑張ります。宜しくお願いします!」

天田がぺこりとお辞儀をした。

「…本人から言ってるのなら、何も口出しは出来ないが…」  
「こちらこそ、よろしくね！」

湊は何か考えていたが、彩音はにこりと笑って言った。

「ハイ！」

だが、浮かない顔をしている真田は黙り込んだままだ。

「まあ、いいんじゃないっすか？オレらもついでるワケだし！たまにゃキツイ時もあったけど、やるからにゃ、頑張れよ。」

「ハイ！」

順平が真田の様子に気付き、天田のフォローをした。

ともかく、今日から天田が加わるようになって、集会は終わった。

集会の後、湊は個人的に天田を呼び止めていた。

「…天田、少しいいか？」

「あ、はい…何でしょう？」

「…その、言いたくなければ言わなくていいが…少し気になってな。」

天田は冷静に答えた。

「志願した理由、ですか？それなら、さっき言った通りです。」

「それじゃない。…」なんで自分に力が目覚めたか分かった”という部分だ。」

天田は少し言いづらそに言葉を濁らせた。

「それは…目標みたいなものが、見つかって…」

「…いや、悪い。言いたくなければ別にいいさ。ただ、何となく…嫌な予感がした気がしてな。」

天田ははっと息を呑んだ。もしかして、あの人と同じようにバレてるんじゃないかと、嫌な想像が頭をよぎった。

「…目標というのは聞かない。…変なこと言ったな、忘れてくれ。」  
湊は軽く謝ると、そこから去って行った。

「遙さんといい、湊さんといい…何で皆さん鋭いんだろ…。」  
その眩きを聞くものは、誰もいなかった。



8月28日 〱天田加入〱（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次は多分、チドリと順平か、依頼ですね。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

8月29日 く少女との再会（前書き）

夏休みはあと3日…でも、OCまであと4日！

…まあ、受験生なのにゲームなんかやってていいのかって話ですけどね…。

では、ごうげ。

8月29日　く少女との再会く

この日、また順平はポートアイランド駅にいた。ただ、本当に何となく、ぶらりと来てしまったのだ。

「ああー…2学期始まんの、もうマジすぐじゃん…っか、来年もう高3だもん…なんか、速えーよなあ…」

頭をガシガシと掻き、順平は顔を上げる。

「あれ、あの子…」

順平の目に、1人の少女の姿が留まる。

いつか見た、ゴスロリドレス姿の、絵を描いている少女だ。

「まーた絵、描いてら…」

順平は少し興味を持ち、その少女に近づいた。

少女は順平が近づいてきたことに気付いたのか、鬱陶しそうに顔を上げる。

「…また来たの？」

「あ、いや…。っか、驚いたな。覚えてたんだ、オレの事？」

「そっちもでしょ…」

驚く順平に、しれっと少女は返す。

「いや、君ホラ、割と目立つカッコだしさ…」

少女は何も言わず、またスケッチブックに視線を戻した。

「あのさ…なに描いてんの？」

「絵だけど？それが何？」

「ああ、別にどうとかは…無いけどさ。ただ、そやって熱中できるモンがあんの、イイなと思って。」

それは順平が本心から思ったことだった。

自分には、そういうようなものなど無いと、分かっていたのだから。

「意味なんて無い…ただ、描きたいから描いてるだけよ。」

「ふうん、そっか…」

順平は、少女が抱えているスケッチブックに目を落とす。

「…それ、出来上がったら、オレにも見してくれよな。」  
順平はそう言っただけで笑うと、そのままその場を立ち去った。  
後には、少女が残される。

少女は、順平が去っていった方向を、じっと眺めていた。

初めてだった。あんなふうに親しげに話しかけてきてくれて、何の意味も持っていないと思っっている絵を、「見せてくれ」と言った人は。

少女はほんの少しだけ、また会えたらと期待してしまっていた。

その日の夜。

彩音は、いつもの気配を感じて目を覚ました。

「やあ。…あと1週間で、次の満月だよ。準備は出来てる…？」  
彩音は頷いた。

「試練も残り少なくなってきたね…だからこそ、気をつけてね。」  
ファルロスは一瞬、心配そうに目を伏せる。

「…私たちを誰だと思ってるの、ファルロス？試練だろうがシャドウだろうが、そんなの倒してやるって。」

彩音の言葉に、ファルロスは目を見開く。そして、微笑んだ。

「…ふふ、そうだったね。…また、会いに来るよ。」

ファルロスはそう言っただけで、闇に溶けるようにして消えてしまった。

8月29日 く少女との再会（後書き）

いかがでしたでしょうか？

はい、短いです。

というか、マニアクスの難しさがヤバ過ぎる…！

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

8月30日 く依頼その3く(前書き)

新学期スタート+デビサバOC発売っ！

ああ、早くプレイしたいなあ…。

では、どうぞ。

8月30日 く依頼その3

今日はエリザベスとテオドアによる、街を案内するという依頼をこなすため、彩音と湊は2人を連れて長鳴神社に来ていた。

「ごめんね、お祭りの時に案内してあげれば良かったんだけど…」  
彩音が申し訳なさそうに言う。しかし、テオドアは首を横に振った。  
「いえ、私どもにとってはこちらの世界を案内していただけるというだけで充分でございます。」

エリザベスもテオドアと同じく首を振った。

「さて…ではここが”寺院”に良く似た施設…”神社”ですね。確かに…シャドウ等とはまた違った、神秘的であらたかな気配が致します。」

「…まずは参拝、か。」

湊は前にポロニアンモールを案内した時の、あの小銭のぎっしり入った財布を思い出し、嫌な予感がした。

4人は賽銭箱の前やって来た。

「あの…こちらには、幾らくらい収めればよろしいのでしょうか…？」

「入れた分だけ、願いは叶うのでございましょう。”ゴリヤク”という神秘のエネルギーは、奉納した金額に比例すると聞いております。」

エリザベスはまたも、ぎっしり硬貨が入った重そうな財布を取り出す。

「えと、まあ入れる金額は自由なんだけど…”御縁がありますように”って五円を入れるのが一般的、かな…？だからそんな入れなくても…”

彩音は戸惑いつつエリザベスに言う。

「…元々、神社っていうのは願い事を言って叶えてもらう場所、というわけじゃないんだ。”何かをするから成功するように見ててく

ださい”…っという、いわゆる”誓いの場”だな。」

「え、そうなの？知らなかった…」

「…僕も少し前に何かで見たんだ。」

「成る程…勉強になりました。ありがとうございます。では…」

エリザベスは財布の中をなにやらごそごそと漁っていた。

「…困りましたね。五円玉を所持しておりませんでした…」

残念そうにエリザベスは言う。いつの間にかテオドアも五円を財布の中から探していたようだが、見つからなかったようだ。

「…ま、幾らでもいいんじゃないのか。言つとくが、いくら入れても願いが叶う可能性、というのは変わらないと思うけど。」

そういわれて、2人は結局五百円玉を入れることにしたらしい。一応、五、ということにこだわったようだ。

彩音が参拝の作法を教え、無事に参拝は終わった。

「考えてみると…この賽銭という仕組みは、噴水のそれと、よく似ておりますね。」

エリザベスがそう言うと、テオドアもそう言えば、と感じたようだ。

「迷信かもしれないけどね…特に噴水は。」

彩音の呟きは、2人には聞こえなかったようだ。

ふと、テオドアが何かに気付いた。

「あちらに沢山結ばれている、紙の束は…？」

「行ってみる？」

「もしかして…」

エリザベスも目を輝かせ始めたので、4人はそこへ向かった。

「これは”おみくじ”と呼ばれるものでしょうか…？」

「自らの運命を、あえて紙切れ1枚に託し、そのリスク感を楽しむ遊戯と伺いましたが…なるほど…運命について、様々に書いてあるようですね。」

「リスク感を楽しむんじゃないで、占いなんだけど…」

彩音が訂正するが、エリザベスは耳に入っていないようだ。



「では…ひとつ私も引いてみたいと存じます。全種類コンプリートするまで、少々お待ち下さい。」

「…それ意味無い。」

湊の突っ込みも、意味を成さないようだ。エリザベスは嬉々としておみくじを引いている。

「テオも引く？」

「…姉上のあのよう楽しんでそうにしていますし…そうですね、私も1回引いてみることに致します。」

「…エリザベスのようにコンプリートする、とは言い出すなよ。」

結果、エリザベスは見事大吉から大凶までを揃え（書いてあるものまで全種類揃えると言い出し、何とかして3人で止めた）、テオドアが1回引いたところ大吉で、大吉のお守りもゲットしていた。

満足したようなので、次のところに移動しようとする、エリザベスが公園のある方を指差した。

「あの…先ほどから気になっておりましたが、あちらにあるものは何なのでしょう？」

「…神社に併設されている公園だ。」

エリザベスが走り出したので、3人は慌てて後を追う。

「これは…確か…こちらが滑り台で、こちらがジャングルジム…誠の神前には、形ばかりの儼かさなど不要…なんと寛大で本質に満ちた姿勢でしょう…！」

「…湊、言ってる意味が微妙に分からなくなってきたよ…」

「僕もだ…」

「でしたら早速…」

「あ、姉上！」

エリザベスは、早速滑り台に向かって走って行ってしまった。

「…テオ、行きたいなら行って来ていいぞ。」

テオドアは戸惑っているようだった。

その間にも、エリザベスは滑り台の上に立つと、笑顔で手を振り、「イーイ。」

立ったまま滑り降りてきた。

そしてうまく着地する。

「これは…楽しみを得るには、まず同じだけ昇らねばならない…世の摂理を無言にして教える、奥深い遊具でございますね…」

なにやらしみじみとなっているエリザベスを、二人は黙って眺めていた。

「テオ。折角の機会なのですから、貴方も遊んではいかがですか？」  
エリザベスはそう言いつつ、テオドアを引つ張っていく。

そしてまた昇ると、自分が先に滑り、催促していた。

テオドアも姉の威厳と、自分の興味には逆らえなかったようで、エリザベスと同じように滑り降りた。

「…これは、なかなか…」

「でしょう。では、次はこちらのジャングルジムについても教えていただけますか。」

遠い目をしていた二人は、はっと我に返った。

エリザベスは興味深々で、ジャングルジムの中に入っていく。しかし、登ることはせず、そこで固まっていた。

「…姉上？」

不審に思ったテオドアが声をかける。

「…出られません…」

「…登るんだよ。あ、でもエリザベス、スカートだから…」

「…エリザベス、それよりあっちの鉄棒は？ジャングルジムよりそっちが楽しいよ、うん。戻れば出られるから。」

「そうなのでございますか？」

エリザベスは何とかジャングルジムから抜け出し、鉄棒に向かって行った。

そして鉄棒をまじまじと見つめると、ひらりと上に乗った。

…そのまま、鉄棒の上に絶妙なバランスで立っている。

「これは…バランスが…な…んと、難しい…」

「遊び方が違う、かな…さっきもだけど。」

エリザベスはひよい、と飛び降りる。

「…いいことを思いつきました。テオ。」

「な、何でしょう、姉上？」

「私と、この鉄棒という遊具で勝負いたしましょう。貴方は先ほど、おみくじにて”お守り”を手に入れましたね？それを賭けなさい。」

エリザベスの大吉のおみくじには、なぜか”大吉のお守り”がついていなかったのだった。

テオドアは結局姉の威厳エリザベスに勝てず、勝負をすることになった。

その結果、テオドアが負け、お守りはエリザベスのものになった。

「本日は、今までの外出にも増して楽しゆうございました。…まずは私共の部屋に鉄棒など置いて頂けないかと、主に掛け合う所存でございます。」

エリザベスは満足したように笑っているが、テオドアの顔は心なしか暗い。

「…ま、まあテオ、元気出してよ？お守りなら、私がまた今度あげるからさ…」

彩音の言葉にテオドアがパツと顔を明るくした。それに彩音は安堵する。

「…じゃ、帰るぞ。」

4人は、長鳴神社を後にした。

8月30日 く依頼その3 (後書き)

いかがでしたでしょうか？

はい、エリザベスの方で書いていたのでエリザベスフィーバーになってますね。

後で付け足します。…恐らく。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

8月31日　く名前く（前書き）

ようやくプレイ開始できました、デビサバOC！  
面白いのと同時に若干懐かしさが…。

では、ごきげん。

8月31日　〈名前〉

今日で夏休みは終了し、明日からまた学校生活に戻る。

そんな日に、最後に何かしようという思いか、はたまた宿題という名の現実からの逃避か、順平はまたもやポートアイランド駅を訪れていた。

「よう、またまた会っちゃったな。」

「…そっちが勝手に来るんでしょ。」

順平の目的は、はつきりと言ってしまふならこの子だった。

最初は、その格好や描いている前衛的な絵を見てそそくさと立ち去るだけだったのが、前回の会話を経て、順平は彼女に興味を持っていたのだった。また、少女の方も順平に多少なりとも興味を持っていたらしい。

「オレ、順平ってんだ。君、名前は？この辺に住んでんの？」

順平が訊いてみるが、少女は黙ったままだ。ただ、順平を見上げていた。

「…ハイ、無視ね！。ま、いつけどさ…って、ちよつ、手！手！」

順平がふと目を落とすと、少女の白く細い手首から、血が流れ出ているのが見てとれた。

「何だよそのケガ！？血い出てんじゃんか！」

血は腕を伝い、幾筋も赤い線を描きながら地面にぽたぽたと垂れている。

手首を身を乗り出して凝視している順平に、少女は非難の目を向けた。

「ちよつと、この間から何なの！？用も無いのにつきまとわないで！」

「そんな、放つとけっかよ！えつと、えつと…」

順平は何とかポケットなどを探り、真新しいハンカチを取り出した。一応、夜の戦いのことなどもあり、簡単な応急処置の方法などは美

鶴から教えられていた。もつとも、回復魔法という便利なものがあるため、少しくらいのケガなら魔法で何とか出来てしまうので使う機会は殆ど無かったが。

「ほら、手出させて！ハンカチで縛るから。」

順平は半ば強引に、ケガをしている方の手首を前に出させた。

しかし、焦っている順平とは対照的に、少女はきよんとした目で順平を見る。

「何を慌ててるの？」

「はあ？慌てんだろ、フツ。」

少女はまるで、何で慌てているのか分からないといった風だった。ただ、ケガの部分を慣れない手つきながら丁寧に縛っていく順平を見ている。

「よし、つと。すぐ医者に見せるよ。てか、ついて行ってやろうか？」

応急処置を終えた順平がそう申し出る。だが、少女は無言だった。

「…ヘンな人ね。」

ようやく出た言葉がそれだった。

そして、すつと立ち上がる。ついて来ないでいい、というように、少女は踵を返して歩き出した。

だが、順平から少し離れたところで立ち止まる。

「…チドリよ。」

「…は？」

いきなり言われたことに、順平は頭がついていけなかったらしい。

「私の名前。順平が聞いたんでしょ？」

少女 チドリが振り返る。

「あの絵…もうすぐできるから。私の描いたものは、私にしか分からない。でもそんなに見たきゃ…来れば？」

チドリはそれだけ言い残すと、もう振り返ることなく立ち去った。

「チドリ…か。」

順平は去っていくチドリの後姿を眺めながら、先ほど教えてもらっ

た名前を眩き、微笑んだ。



8月31日　く名前く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

さて…満月戦まで、あと4話くらいです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

9月1日 くアイギス転入く（前書き）

実際転入するのは9月2日ですが（笑）

何で体育祭がこの時期にあるのかかなり疑問です。

もう少し涼しくなってからでもいいのでは…

では、どうぞ。

9月1日 くアイギス転入く

始業式。長かった休みも終わり、また学校生活が始まる日だ。

月光館学園は他とは少し変わっていた。始業式が終われば、すぐ授業に入るのだ。

ただし、授業は宿題の提出や復習問題などが大半だが。とにかく、まだ夏休み気分が抜けない中、何とか眠気を噛み殺し、彩音たちは授業を受けた。

「お、今帰りー？」

寮にもうすぐ着くという時、後ろから順平が話しかけてきた。

「順平、遅かったね？私たちは委員の仕事とか同好会やってたけど

…」

「ちつとポロニアンモールのゲーセン行ってたら、時間忘れちゃまってさー…」

「…順平、そんなので大丈夫なのか？」

「だ、大丈夫だって！そんな憐れんだ目でオレを見んな！湊、前から思ってたけオレの扱い酷くねえ！？」

憐れんだ目で見ていた湊に、順平が弁解する。

「…今更気付いたのか？」

「うわそれ更にヒドイ！オレ泣いちまうぞー…」

「ねえ、早く入らない？私ちよつとお腹すいちゃった。」

「…そうだな。順平は放っておいて…」

「…ああ、もういいですよ、慣れましたよこんな仕打ち…」

少しだけ順平が可哀相になった彩音が少しだけフオーし、3人で寮に帰宅した。

「ただいまー！」

彩音が中に入ると、ゆかりと天田がラウンジにいた。だがどこか様子がおかしい。落ち着かないようすで、ある方向をちらちら見ていた。

「…あ、帰ってきた。ちょうど良かったかも。」

「ちょうど…？何が？」

順平が首をかしげる。二人も顔には出さないが同じ気持ちだった。

「ねえ風花、アイギスどうなった？」

ゆかりが奥に呼びかける。呼びかけに答えて、風花とアイギスが現れた。

「…え？」

声を漏らしたのは彩音だった。

「ど、どうかな？」

「こうなっただけあります。」

そこにいたのは、月光館学園の冬制服を着たアイギス。

「え、えつと…コスプレ？」

「…違うだろ。どうせまた、幾月さんが研究目的だか何だか知らないけど、アイギスを学校に行かせるとか言い出したんじゃないの？」

「うーん、ちょっと違う、かな。アイギスが学校に行きたいっていうから、冗談で先輩達に話してたんだけど…理事長が、即オツケーしちゃって、明日から高等部2年生ってことにネ…」

ゆかりがやれやれといった感じで説明した。

「マ、マジ？オツケーって…あの人、いいの？」

「コミュニケーション負荷の高い場所での活動が興味深い…とかって言ってたけど。」

「ま、オツケー出でんなら、いいけどさ…」

「そうだね、私たちでフォローすればいいもんね！」

「…どうした順平、さっきから目を逸らして…」

湊の言うとおり、先ほどから順平はアイギスから目を逸らし、ちらちらとアイギスを見ている。

「い、いや…結構似合ってるし？カ、カワイイんじゃない？」

でもアイギスは、そんな順平の反応も何も一切感じていないようだ。「風花さんに装着して頂いた、”学園用迷彩”はカンペキであります。」

「想像以上に似合ってますよ。誰も、特別ななんて思わないんじゃないかな。でも、なんで学校なんかには？何もないですよ、多分。」

「”2学期”の開始を受けて、日中の活動を合わせたいと考えました。わたしだけ、ここに待機しては、任務に支障をきたしますよって、同行を申し出たであります。」

天田は頭に？を浮かべている。

「…アイギス、何故か僕達姉弟には異常なくらい執着してるんだ。

”わたしの一番の大切は、あなたがたの傍にいらることあります”  
…なんだってさ。」

湊が天田に説明する。天田は最近入ったばかりということや、よく部屋にこもりがちになっていたため、アイギスが彩音や湊に執着していることは知らなかったのだった。

「任務に支障、ね…。…むしろ居た方が支障出るっばいけど。」

「至らない所は、順次改善を図っていくつもりであります。」

「あー…うん、そうして…」

そうやって7人が話しているところに、コロマルがやって来た。

「ワン、ワンツッ！」

アイギスが素早く、コロマルの思考を読み取る。

「”自分も学校に行く”と言っています。」

「…コロマル…さすがにあんたはここに居て。」

「クウーン…」

コロマルが寂しそうに頭を伏せる。

「帰ってきたら散歩に連れてってあげるから、ね？」

彩音がコロマルの頭を撫でた。

閑話休題だが、夏休み、コロマルを映画祭りに連れて行くこととしたことが彩音と湊にはある。

しかし、ぬいぐるみだと言い張ったのだが結局当たり前というか映画館には入れてもらえず、帰ってきたことがあるのだ。

「コロマルはその前例もあり、”なんで自分だけは駄目なのか”と思っているらしい。」

「…そういえば。」

アイギスが不意に口を開いた。

「ひとつお聞きしますが、満嶋 遥さんという方はどのクラスに所属しているのですか？」

この名前には全員が驚いた。何故知っているのか、といったのが主な疑問だ。

「…アイギス、何故遥を？」

「夏休み中、街でお会いしたであります。彼を、何故かは分かりませんが、知っている気がしたであります。」

「ホント、不思議な人だよね…。」

ゆかりがぼつりとこぼす。

「でも、いつ会ったんだろ…？アイギスは7月に屋久島からこっちに来たんだから、それ以前はまず無いよね？屋久島に遥くんが行っていたとしても、アイギスと会う可能性は限りなく低いし…。」

「アイギスがこっち来てからなんじゃねーの？たまたま街で何度か見かけたとか？」

「でも、それなら”見たことがある”って言うべきなんじゃない？アイギスは”知っている”って言ったよ？それに、街を何回か歩いてたんなら、他にもそういう”見たことある”っていう人はいるはずだしな…。」

風花、順平、彩音がうーん、と考え込む。

「…ま、遥も印象は強い方だと思うし。いいだろ、それは。…遥なら2年E組だ。山岸と同じクラスだから。」

「了解しました、ありがとうございます。」

アイギスは小さく一礼した。

この日は少しだけ疑問を残し、解散となった。

9月1日 くアイギス転入く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

9月2日 く荒垣の帰還く（前書き）

ようやく全員集合、と相成りました（笑）

では、さようなら。



9月2日 く荒垣の帰還く

アイギスの転入が突然決まった翌日。彩音と湊は、アイギスと共に学校に登校した。

玄関ホールを見渡し、アイギスが言う。

「なるほど！ここが昼間のタルタロスでありますね。」

アイギスは高等部の近くまでは来たことがあったものの、中までは入ったことがない。

そのため初めて入る”学校”を、きよろきよろと見回している。

「…今は”学校”な、アイギス。」

「昼のタルタロスは”学校”でありますね。肝に銘じておくであります。」

「ねえ、なんか私たちずつごい注目集めてない…？」

彩音の言う通りだ。道行く生徒が全員、ちらちらとこちらを見ている。

「…アイギスが目立つからな。流石にロボ娘ってことはバレてないだろうが、金髪碧眼の美少女だし。それに…」

湊はポケットから1枚メモを取り出す。

「『2年F組のマドンナ、有里彩音！校内でも岳羽ゆかりと並ぶほどの人気！これは桐条先輩に並ぶ日も遠くない！？そしてその弟はクール&ミステリアスな有里湊！一部からカワイイとの声も！今現在、校内で最も注目度が高い姉弟である！』…みたいな感じで噂になってるらしいから。」

「な、何それ!？」

湊が読み上げたメモ…恐らく校内新聞らしきものの切り抜きをひらひらと振る。

「…順平が主な情報源で作成された裏学園新聞。」

「…そのようなものが出回っているのは、今後彩音さんと湊さんの行動に支障が出る恐れがあります。早急にその「ウラガクエンシンブ

ン」なるものの回収と、順平さんを尋問に……」

「ちょよ、ちょよと待ってアイギス！校内では騒ぎ起こさないで……！」

すぐに駆け出したアイギスの後を、慌てて彩音が追う。

「……はあ、どうでもいい。」

湊は走り去っていく彩音とアイギスの背中を見送り、自分はさっさと教室に向かうことにした。

アイギスをなんとかなだめ、職員室に行かせた彩音は、HRの時は疲れ果て机でぐったりとなっていた。

「……なあ、彩音ツチどうしたん？」

「……お前、後で処刑される覚悟しとけよ……？」  
頭に？マークを浮かべている順平を放っておいて、湊は前に向き直る。

鳥海の横に、アイギスが立っていた。

「今日から仲間入りすることになった、転入生よ。もうこれで3人目よ？ハットトリックっていの、コレ？」

ハットトリックとは、サッカーで同じ選手が3回点を入れることである。確かに似ていなくも無いが、違っている。

「……じゃ、自己紹介してね。」

「アイギスです。皆さま、ひとつ宜しくお願い致します。」

アイギスが礼儀正しく一礼する。

また書類を読んでいなかったのか、鳥海は少し怪訝そうな顔をしていた。

「アイギス……さん？珍しいお名前ね、生まれは外国なのかしら。」  
そして、手元の書類をめくり始める。やっぱりか、とクラス全員の心が一致した。

「他に特記事項は……ん？……人型……戦術兵器？」

「ちょよっ！？」

極秘事項であるはずのそれが、なぜ書類に書いてあるのかといったことに驚いたゆかりが声を上げかける。

しかし、それは杞憂に終わった。

「…なんかの間違いね、この書類。見たもの、聞いたもの全てが正しいなんて思っちゃ駄目よね。」

内心冷や汗をかいた特別課外活動部メンバーが、ほっと胸をなでおろす。

他のクラスメイトも、全く信じなかったようだ。

「そ、そーですよー！」

順平がなんとか平静を取り戻していう。しかし、それは怪しげに聞こえない事もない。

だが幸運なことに、それに気付く者はいなかったようだ。

「ええと、席は…、どっか、空いてるー？」

鳥海は、教室を見回した。

「…あ、そこ空いてるじゃない。彼女の隣。」

「へっ？」

いきなり指差されたせいで、いままでダウンしていた彩音が変な声を上げる。

確かに、彩音の隣の席は空席だった。

「じゃ、そこね。」

「え、センセ、そこは空いてんじゃないかって、たまたま、サボってるだけなんじゃ…」

「…そんなの居ないのと一緒に。そこを使ってください。はい、着席。」

アイギスは我関せずのようで、すたすたと自分の席に行く。

「この場所なら歓迎であります。わたしの一番の大切は、いつでもこの方たちの傍に居ることです。」

クラスにどよめきが走った。アイギスを密かに狙っていた男子達の視線が、一斉に恨みのこもった視線に変わり、湊に向けられる。

湊はいいよのない悪寒を感じた。

「ハア…出だしからこうだよ…」

ゆかりは呆れてため息をついた。

「あら、ご近所どうし、仲が良さそうね。でも授業中は、ちゃんとケジメつけなきゃダメよ?」

「…たく…」

鳥海自身も何も指摘してこないの、特別課外活動部の面々（アイギス除く）は深いため息をついた。

昼休み。

あの後はかなり大変だった。

二人にはクラスメイトからの質問が殺到し（特に湊への男子からの質問が凄かった）、廊下に避難しようにも隣のクラスからも噂を聞いた生徒たちが集まってきて、二人に質問攻めをするため、どこにも逃げ場所は無い状態だったのだ。

お陰で今は朝の彩音のように、二人とも机に突っ伏していた。

その時、二人の携帯が同時に着信する。

「見る気…しないんだけど…」

「…真田先輩からだ…」

湊が携帯を開く。彩音が覗き込んできた。

『今日の放課後、大切な用事がある。お前たちにも付き合ってもらいたい。』

「帰りがけに、校門で待っている。必ず来いよ。』」

「…大切な用事って、なんだろうな…?」

「でも、とにかく行くしかないじゃん?はあ…今日はなんと云うか、疲れる…」

「彩音さん、湊さん。お疲れのようでしたので、購買でパンを買ってきたであります。」

バツ、と二人が起き上がる。

「…うう、サンキューアイギスっ！」

二人はアイギスが買ってきたパンをすぐさま取り、食べ始めた。

放課後。

真田のメールどおり、二人は校門前に来た。既に、真田が待っている。

心なしか、少し苛立っているように見えた。

「…来たな。一緒に来てもらいたい所がある。行くぞ。」

「分かりました。」

何やら真田のただならぬ様子に、彩音は頷いた。

真田が踵を返し、歩き出す。その時、湊がある事に気がついた。

「…そのトランク…召喚器が入っていた…」

「あ…言われて見れば…」

言われて、ようやく彩音も気がつく。

だが真田は振り向かず、さっさと歩いていってしまった。

丁度真田達が目的地に着く頃、その真田達を見下ろす影があった。

その場所は、丁度夏休みに天田が真田と荒垣の会話を聞いていた場所でもある。

少しだけ背伸びをし、手すりに腕をかけて様子を伺っているのは、やはりというか遙だ。

遙は真剣な眼差しで、下の階のある店の前に着いた3人を見ていた。

着いたのは、巖戸台駅前商店街2階の”はがくれ”の前。

そして、少しばかり待つと、中からコートを着た男が出てきた。

その男…荒垣は真田の姿を見つけると、苦虫を噛み潰したような顔になる。

「いい加減しつげえぞ！」

「事情が変わった。悪いが今日は”ノー”と言わせる気は無い。」  
「ああ？」

有無を言わせぬような真田の雰囲気、荒垣は怪訝そうな顔をする。真田はトランクを荒垣の前に突き出した。

「これ、分かるな。お前が使ってた召喚器だ。」

荒垣は無言でトランクに目をやった後、何の真似だといわんばかりに真田を見る。

「新しい敵が現れた。俺たちと同じ”ペルソナ使い”だ。それに奴らのいう事を完全に信じるわけではないが、敵か味方が分からんペルソナ使いも、付近に潜伏しているらしい。」

「…別に、興味ねえな。」

荒垣にとつて、心当たりはある。だがそれは表に出さずに言った。「話はまだある。」

天田が「俺たちの仲間に入った。」

「ッ…!？」

今までのポーカーフェイスが嘘のように、荒垣が動揺した。

「どういう事だ、そりゃ!？」

「”適性”が見つかり、幾月さんが認めた。今のアイツは、ペルソナ使いだ。」

「なんてこった…」

荒垣は、強く唇を噛んでいた。そして暫く無言の時間が続いた。

二人は、さっきから何がなんだか分かっていなかった。辛うじて、真田が荒垣を勧誘に来たということとはつかめたが、何故ここで天田の名前が出てくるかが分からない。

「…1つだけ聞かせてくれ。」

沈黙を、荒垣が破った。

「仲間になつたつてのは…アイツの意志か？」

「…ああ。自分から志願して来た。」

「…そうか。」

荒垣が俯く。しかし、すぐに顔を上げた。

まるで、何かの覚悟が決まったかのような。

「なら、傍に居ねえとな…」

荒垣はトランクを真田から受け取った。そして、未だ状況がよく分かっていない彩音と湊の前に歩いていく。

「お前ら…特にお前が、現場を仕切ってるってヤツだな。」

荒垣は彩音をまっすぐ見ていた。

「訊いておきたい事がある。お前は、何の為に戦ってる。」

「…大事な人や、仲間…みんなを、守るためです。」

彩音はキツパリと言い切った。

「…そうか。お前は。」

今度は湊を見つめる。

「…姉貴と同じです。大切な皆を…守りたいから。」

「…そうか。まあいい…俺あ、すべき事をするだけだ。」

荒垣は真田に向き直った。

「俺の部屋あ、まだ空いてんのか？」

「ああ。」

そこで荒垣は、呆れた視線を真田に向けた。

「…たく…桐条といいコイツといい、女じゃねえか…っと、リーダーは分担してるんだっただか？」

「…主な探索の指揮は、姉貴が。僕はサポートです。」

「…だから何だ。女だろうと、コイツは立派に…」

「んな事言ってるじゃねー、アホ。」

荒垣が真田の言葉を遮って言う。

「お前がしっかり守ってやれってんだ。…たく…」

「えっ、それはどういう意味…」

「…おい、お前の姉貴は鈍感なのか？」

「…そういう部分があることは否定しませんよ、先輩。」

聞き返した彩音に、またもや少し呆れる荒垣、それに答える湊。

ともかく、これでまた1人仲間が増えた。

一部始終を気付かれことなく見ていた遙は、小さく呟く。  
「…やっぱり、決意は固いんだね…本当に…。…引き金は引かれた、  
か…」



9月2日 く荒垣の帰還く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

少しだけテンションが上がってしまった今回の話。  
やっぱ荒垣先輩はカッコイイです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告ありましたらお願いします。

9月4日 くまた、明日く（前書き）

そういえば今日と明日は東京ゲームショウが開催されていますね。  
あそこの人ごみはマジでヤバいです。

では、ごんげ。

9月4日 くまた、明日

「よっ、チドリ。」

順平は、またもやポートアイランド駅にやって来ていた。そこにはまた、チドリがいる。

「この間のケガ、あれからどうした？」

チドリは無言だ。順平はチドリに近づき、ひよいと腕を覗き込む。驚愕したのは順平だった。

「え、アレ…傷は？跡も無い…？意外と軽かったのか…？」

チドリは答えない。

ようやく順平が腕から目を離したとき、チドリが話し始めた。

「…順平はさ…何をしてる時、”自分は生きてる”って思う？」

「え、さあ…息してる時とか？」

チドリは今までになく、痛切な顔をしているように順平には思えた。だからこそ、励ますような意味も込めて軽い感じで話す。

「ハハ、つか考えた事ねーや。チドリは、やっぱり絵描いてる時か？」

「どうかな…こんなの全部、ただの落書きだし…自分の事なんて…分からない。」

チドリは珍しく、素直に順平に答えた。

「そっか…」

順平は少し考えた。

実を言ってしまうと、1つだけ心当たりがあった。だが、それを一般人の彼女に行ってもいいものか、と少しだけ思案したのである。

だが、順平は一般人だからこそいい、と言う風に考えた。

どうせ今から話す事など、笑い飛ばされるだけだ…と。

それに、ありのままを語る気など無い。脚色を勿論加える。

「…オレさ、実は1コだけあんだよね。充実してつかなくて、思える時がさ。まあ、なんつーか。”正義のヒーロー”やってる時かな？」

チドリがきよとんとした顔で順平を見る。

「今日と明日の間にある誰も知らない時間…そこは、選ばれた力を持つ者だけの戦場！」

アニメのナレーターのように、順平は語る。

「影の怪物から人々を守るため、ヒーローは今日も戦い続ける！…とまあ、そういう感じでさ、充実の瞬間っすよ！」

チドリは黙ったままだ。

「えっと…鼻で笑ってツッコむとこだけ？冗談だから。」

「それ…あなた1人で戦ってるの？」

チドリは真面目に聞き返してきた。それに順平は少しだけ慌てる。

「お、おいおい、真に受けんなって。」

それでも構わず、チドリは続けた。

「誰も知らない時間の中なんですよ？なら…誰も知らなくて当然じゃない。誰も知らなくて、誰も誉めてくれないのに、戦ってるんだ。エライね。ちよっと見直した。」

チドリが僅かに微笑んだ。不覚にもその笑顔に、順平はどきりとなる。

「そう…かな？こんな話、信じてくれちゃうとは思わなかったな…」

「ねえ、それ、もつと聞きたい。」

順平の中には、この子なら話してもいいかな…という気持ちが芽生え始めていた。

「なんか…不思議だよな、君。」

チドリはじつと、順平を見ている。

順平の方が折れた。

「んーと…ま、いつか。じゃ、これ絶対ヒミツにしてくれよ？」

「…ん。」

チドリが頷いたのを確認して、順平は話し出した。

「“ペルソナ”って超能力みたいのがあってさ、それ使えるヤツだえが、怪物を倒せん。けど誰でもペルソナ使える訳じゃなくて、だから選ばれた何人かで戦うしかない。仲間はダチとか先輩でさ…」

こう見えても、オレ入ってからは連戦連勝なんだぜ？」

「へえ、楽しそうね。順平が来てから連勝って事は、順平は、チームのエースみたいなもの？」

「ま、まあな…リーダー的な役割…ってとこかな。」

順平は一瞬だけどう答えるか迷った。

リーダーやエースは、自分じゃない。あの姉弟だ。

でも、今はチドリの憧れを壊さないようにと、嘘をついた。

「とりあえず、オレがいないと始まんないって感じ？」

順平は言っているうちに、少し調子に乗ってきた。

今この話を聞いているのは、チドリしかいない。なら、別に少し強がってもいいじゃないか、と順平は思い始めていたのだ。

「作戦始まつたら、みんなオレの指示で動くんだ。結構、大変なんだよな、リーダーってのも。」

それからしばらく、順平の話は続いた。

ひとしきり話したところで、チドリが立ち上がった。

「ありがとう…順平。楽しかった。」

「そ…そっか？」

順平が照れたように頬を掻く。

「でももう時間。また明日…会いたいな。」

チドリはそう言って少し微笑むと、その場を立ち去った。

「へへッ…また明日、か…ヨシッ!!」

チドリが、自分に心を開いてくれた。自分の話を、楽しんで聞いてくれた。

そのことから来るものか、順平はその場でガッツポーズをした。

明日は、満月の作戦…。

9月4日 くまた、明日く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次は満月戦ですねー。今回もなんか長かった…。  
また前半後半分けると思います。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

9月5日 く網目く (前書き)

台風が凄いです… (汗)

早く去ってくれないかなあ…

では、ごんぞ。

9月5日 く網目く

今日は、満月の作戦決行日。

だが、順平は昨日のチドリとの約束のため、ポートアイランド駅で遅くまで待つていたのだ。

しかし、結局チドリの姿は現れず、待つのを諦めて順平は寮に帰ってきた。

「チドリ、今日居なかったな…」

順平の声には明らかに落胆の色が浮かんでいる。

「やっぱ、もっぺん探してみっかな…でも、流石にマズいか…。…作戦あんだしな、今日。」

もう1回探そうかと後ろを振り向きそうになるが、作戦だからと思いとどまる。

「作戦か…。」

ふと、順平は考え込んだ。

「…考えてみりゃ、あの子を守るための戦いでもあるしな。なんか、そう考えつと、やる気出てきちゃうな…。つか、これこそまさに正義の戦いってヤツか？」

順平は途端に元気を取り戻し、「オシツ!!!」と気合いを入れる。その時だった。

「動かないで!」

「えっ?つか、この声…うわっ!」

聞き覚えのある声を最後にして、順平の意識は強制的に刈り取られた。



影時間、作戦室。

風花がペルソナ、ルキアを召喚し、辺りの気配を探っている。この場には、順平、天田を除いた全員が集まっていた。

天田はこの場に現れなかった順平を探しに行っている。

「…今日で、もう6度目の満月だね。敵は見つかったかい？」

「はい…」

風花がルキアの中から返事をする。だが、どこかその表情は困惑しているようにも見えた。

「多分、ポロニアンモールの辺り…だと思っんですけど。何だか、モールの周辺から、ぼんやりと感じるだけで…範囲を絞ろうとはしてるんですけど…」

「今回のシャドウの”能力”って事か？」

真田が少し考え、風花に訊く。

「分かりません。」

「充分だろ、そんだけ分かりゃ。」

荒垣が言ったところで、ドアが開いた。天田が帰ってきたようだ。

「天田か、どうだった？」

「順平さん、何処にも居ません。カバンも無いし、今日はまだ部屋に戻ってないみたいです。」

「あいつ…満月って分かかってんでしょーに！」

ゆかりが怒りを露にする。

「寮の近くにも居ないようですね。順平さんの反応は見当たりません。念のため、少し時間を使って探してみましようか？」

「いや、いいよ。」

幾月が順平の搜索を断る。

「若い君らだ。そういう気分の時もあるだろうさ。とにかく、今は目の前のシャドウをなんとかして欲しい。」

「…」

荒垣が胡散臭げに幾月を見たあと、何かを考え出した。

とにかく、今の最優先はシャドウ討伐だ。

美鶴が号令をかける。

「ここでくすぶっていても仕方がない。とにかく出動だ。」

「行くぞ！」

真田もそれに便乗し、幾月を除く全員がドアに向かい始める。風花もルキアを帰還させ、後に続いた。

「僕達も行こう。」

彩音が頷き、二人も部屋を出ようとした時、最後まで動いていなかった荒垣が話しかけてきた。

「順平のやつ…何か言っただけか？」

「いえ、特に…湊は？」

「…聞いてはいない。ただ、昨日あれだけはしゃいでいたクセにこないとは、なんか妙な気がするけど。」

「…なら、いい。」

荒垣はそう返すと、早足で作戦室を出て行った。しかし、その顔はどこか苦虫を噛み潰したような顔に見える。

「…どうしたんだろうね？」

「さあ？とにかく、行こう。」

二人も皆の後を追いつつ、作戦室を出た。

「網目…か。カラクリに早く気付くといいね。」

一方、今回も傍観しに来ていた遥は、ポロニアンモール内にある”カラオケ マンドラゴラ”のとある一室にいた。傍らにはやはり、ケイロンが控えている。

もちろん、遥には今回の敵がどのような姿なのか掴めていた。

「…にしても、あの子もまだまだだね。ああ、でも…僕が異常なのか。」

遥は自嘲気味に笑みを浮かべる。

「さて、山岸さんも本気出して搜索するだろうし…僕も気付かれないうちにしなきゃね。」

一行は、ポロニアンモールに到着した。

「…うわ、あの噴水…気味悪い。」

彩音が目の前の噴水を見て言う。その噴水は、影時間ということで水が赤色になり、さながら血の噴水に見えた。

「じゃあ、もう1回探ってみますね。」

着いてすぐ、風花がルキアを召喚してまた気配を探りだした。

「…どうだ？」

しばらく経ってから、美鶴が訊く。

『この、ボンヤリした感じ…こんな近くに來てるのに、どうして

…!?!』

風花はまだ、シャドウの気配を見つけられないでいた。

「…確かに、嫌な感じはする…。ただ、霞がかかったみたいで…」  
湊も、俯いて顔をしかめる。

「よし、後は手分けして探すぞ。時間は掛けられない、急げ！」

『待つて下さい!』

散開して探し始めようとした皆を止めたのは、風花だった。

『お願いします、やらせて下さい!これは、私の役目だから…!』

美鶴が彩音を見た。彩音は、頷く。現場リーダーの意見を聞いたのだ。

それを感じ取った風花が、今までにないほど強く精神集中を始めた。

『ルキアの指が触れる…土の答え。

髪が触れる…風の答え。

唇が触れる…水の答え。

教えて…この霧のような姿は、何…?』

「…おい、大丈夫なのか…?」

風花の異常を感じた真田が、美鶴に訊く。

「集中の邪魔をするな。」  
しかし美鶴は一蹴した。

「…これ、は…ここまでの力が、既にあるのか…。こんな至近距離にいて…気を抜いたら、すぐバレそうだ…」

遙の方は、風花の予想外の力に、自らの存在を気付かれないようにしていた。

『これは…』

風花が驚いたように目を見開く。何か感じ取れたようだ。

『足の…下…網目…？』

「網目…もしかすると、地下ケーブルと関連があるかもしれません。ここは、島が開発中の頃は工事中電源の基地があった場所です。」

「地下ケーブル…？」

美鶴がアイギスに聞き返す。

「網目のような相当量の電気ケーブルが、地下に放られたままになっているようです。」

「それが索敵の邪魔になってるって事か？」

「でもなんで、電気ケーブルが索敵の邪魔になるんですか？いまいち、結びつかないんですけど…」

『…ありがとう、アイギス。今ので全部分かったわ。』

首をかしげる彩音に、風花が説明する。

『ケーブルに、シャドウの位置が攪乱されてる訳じゃなく…そのケーブル網自体が、シャドウに乗っ取られている！』

「それっ…え…？つまり…足の下は、そこらじゅうシャドウって事！？」

「…絞れなかったワケだ。本当にこの辺全部を占める大きさって事

か…」

ゆかりが驚き、真田が納得する。

「そ、そんなの、どうやって倒すんです!？」

「チツ…地面の中か…」

一方その頃、寮の屋上。

幾月が作戦室にて見張っているはずだったが、屋上には2つの人影があった。

そのうち、長い髪をした方の影が、帽子を被った人影を突き飛ばす。

「イテっ…」

帽子を被った影…順平が床に放り出され、声を上げた。

今順平は、手と足を鎖によって拘束されている状態である。しかも召喚器も手元に無く（あつたとしても召喚など出来そうも無いが）ピンチに陥っていた。

「拍子抜けね…こんなに無防備だなんて。…これで、この建物のフロアは全部？」

「ちつくしよ…」カ」が出ねエ…いい加減にしるよ…

…チドリ。」

呼ばれた長髪の人物、チドリが冷たい目で順平を見下ろした。

あの時、声をかけて順平を拘束したのは彼女だったのだ。

「頼みたいことがあるの。」

チドリは静かに言った。

「あなたの仲間に、私の言う通り、命令を出してもらつわ…通信くらい、出来るはずよ。」

「オレが…命令？」

「言う通りにするなら…何もしない。」

順平が、チドリに言われたことに対して驚く。

「…作戦の”中止命令”を出して。簡単でしょ？今やってるのだけじゃない。今後の作戦も全部やめるように言って。」

「作戦をやめろって…まさか君…」あの連中”の…」

先月の作戦の時、邪魔をしてきたあの異様な2人組み。あいつらの仲間だというなら、チドリのこの言葉も頷ける。

「早くして。」

チドリの視線が厳しいものに変わる。

順平は、シヨックを隠せず黙ったままだった。

ポロニアンモール。

「まいったな…これでは、手が出せない。」

美鶴が考え込む。

「…ねえ湊。前にもこんなこと、なかったっけ？ほら、”何かが乗っ取られる”ってやつ。」

「…ああ、あつたなそういえば。死にかけたんでよく覚えてる。確か5月…」

彩音は呑気とも取れる口調で湊に訊く。

『…！それだ…！前にモノレールを乗っ取ったシャドウがいたと、記録で見ました。恐らくそれと同じで、どこかに”本体”がいるはずです！私が見つけます。』

彩音と湊のヒントで風花は気付いたらしい。他にも、あのとくに居合わせたメンバーは、はっとした顔をしている。

風花がまた強く集中し始めた。

『…』

風花は固く目を瞑り、手を胸の前で祈るように固く握り締めている。その額には汗が浮かんでいた。

「風花…」

先ほどから無理の連続とも取れる風花の行動に、ゆかりが心配そうに風花の名前を呼んだ。

「…場所が分かったとしても、問題は行き方だな…前はモノレールの先頭車両だったから良かったものの…」

「放置された施設であれば、今でも、潜入が可能かも知れません。」  
「だいたいかな……」

話していると、風花に反応があった。もう息も上がっている。

『ハア…ハア…見つけた。ここのがく近く…このモールの中です！』  
「この中!？」

ゆかりが驚きの声を上げる。

『地下に出来ている小さな空間の中です。…四角い箱の形をしてるから、たぶん、人工の空間だと思います。』

「四角って…地下室とかかな…」

「そっいや…」

荒垣が何か思い出したようだ。皆の視線が一斉に荒垣の方に向く。

「"エスカペイド"のフロアやってる奴…最近、電源の調子がどうのってボヤいてやがったな…。おかげで停電喰って、デカイイベントが飛んだとか何とか…」

「電源?」

「確か、昔からあった地下の空間を、部屋に改造したとか、聞いたことがある。ひよつとすつと…」

『…間違いないと思いますっ!』

「よくやった、山岸。」

「というか、先輩の人脈広いですねー…先輩、助かりました!」

彩音が荒垣に礼を言い、そしてすぐ真面目な顔に戻る。その顔は、戦闘を指揮するリーダーの顔。

「よし、準備が整い次第仕掛けるぞっ!」

「はい!」

戦いの火蓋は切って落とされる。

9月5日 く 網目く (後書き)

いかがでしたでしょうか？

次で戦闘です。さて、どう書くのか…

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告ありましたらお願いします。



9月5日NO.2 〳?番 隠者〳(前書き)

満月戦のバトル回!

基本的に満月バトルは全員参加、で。

では、どうぞ。

クラブ、エスカペイド。

「…こいつか…」

全員の視線の先には、手足が電気ケーブルで、体に薄く電気を纏ったシャドウがいる。

『シャドウの心臓部ですっ！体がケーブルですから、電気を攻撃に使ってくるかも知れませんか！どうか、気をつけてっ！』

「オツケー風花！ゆかりは後ろで回復とかの支援！アイギスも後ろからペルソナで攻撃ね！」

「分かったっ！」

「了解であります！」

ゆかりとアイギスが少し後ろに下がったのを確認すると、彩音は前に向き直る。

「電撃なら、俺が相手だな！」

真田は言わずとも前に出た。

元々、「電撃相手なら目をつぶっていても勝てる」と豪語する真田である。

勿論、彩音も電撃を得意とするシャドウなら真田に出てもらおうと考えていた。

「…僕も行く。」

言って進み出たのは湊だ。

「よし、湊と真田先輩は突っ込んで！その一步後ろから荒垣先輩、天田くんが攻撃！その後ろで私と桐条先輩、コロマルが魔法で攻撃！」

彩音が指示を飛ばすと、すぐ返事が返ってくる。

『何をしてくるか分かりませんが、注意してください！』

「…ペルソナ。」

まず最初に召喚器を抜いたのは湊だった。

「クー・フリーン！」

湊の頭上に、「クランの猛犬」の異名を持つ、槍を構えた整った顔立ちの青年が現れる。

湊が敵に向かっていくと同時に、クー・フリーンも敵に向かって行った。

「ナーガラジャ、マハタルカジャで援護！」

彩音が言い、召喚器の引き金を引く。

下半身が蛇のナーガたちの王、ナーガラジャが現れた。全員の攻撃力が上がる。

「ポリデュークス、ラクンダ！」

真田も続いて、敵シャドウ「ハーミット」の防御力を下げる。

「疾風斬」！

湊の声と同時に、クー・フリーンが鋭い槍さばきでハーミットを斬り刻む。

攻撃力アップ＋防御力ダウンのコンボは、相手に多大なダメージを与えた。

耳障りな悲鳴を、ハーミットは上げる。同時に、手足から繋がっていたケーブルの何本かが切れた。

「ペンテシレア、マハブフ！」

美鶴はすぐさま、そのケーブルを凍らせた。

シャドウの事だ、何をするか分からない。もしかしたら、ケーブル再生などもやっつてのけるかもしれない。その対処だった。

「ふっ、純度の高い氷だ、電気は通させんぞ！」

元々純度の高い水は電気を通さないのである。それでも水が電気を通すのは、中に不純物が色々と混ざっているからに他ならない。

「少しでもケーブルを切断できれば、電撃のダメージを軽減できるかもしれない！電気攻撃をやられる前に対処するよ！」

「分かりましたっ！」

今度は天田がペルソナを呼び出す。

「ネメシス、マッドアサルト！」

天田のペルソナ、ネメシス。ギリシャ神話の、復讐の女神の名を持つペルソナ。

体は細長い人型のような形だが、真ん中に車輪のようなものが縦に回っている。

ネメシスが、前かがみになった。車輪が、激しく回転する。

ギギギ、と嫌な音がして、ケーブルが数本まとまって切断された。

「来い、カストール！」

続いて荒垣がペルソナを呼び出した。

馬に乗った人型のペルソナ、カストール。ギリシャ神話では真田のペルソナであるポリデュークスの兄にあたる存在だ。

そして何故か、そのペルソナは胸の部分に槍の先端のようなものが突き刺さっていた。

「……！」

荒垣のペルソナを見た天田が、一瞬動きを止める。

その隙を待っていたかのように、ハーミットは天田のネメシスによって切断されたケーブルを鞭のように振るおうとする。

気付いたときには、もうすぐそばにケーブルが迫っていた。

天田がとつさに槍を盾にしようとした瞬間、間に何かが入り込んだ。

何か カストールは、迫り来る鞭を一刀両断する。

「ボサつとしてんじゃねえ！」

「は……はい。」

天田はちらりと荒垣を見る。そして、誰にも見られないように歯を食いしばった。

「パラディオーン！」

「イオ！」

後ろの二人も、ケーブルを切ろうとペルソナを呼び出していた。

「デッドエンド！」

「ガルーラ！」

パラディオーンが斬撃を繰り出し、イオが疾風の刃を飛ばす。

「アオーン！」

コロマルのペルソナ、地獄の番犬ケルベロスもケーブルを焼き払った。

『ギヤアアアアアッ!!』

体の一部であるケーブルを斬られたり凍らせられたり焼かれたりしたハーミットが、一際大きい悲鳴を上げた。

すると、ハーミットの様子が変わる。纏う電気が大きくなった。

『敵シャドウの体に、大量の電気が充電されています…何か、仕掛けてくるかも知れません!』

「…っ!」

本体に攻撃を浴びせていた真田と湊が飛び退く。

「っ、疾風斬!」

湊がクー・フリーンを呼び出す。

「ナーガラジャ、ミリオンシュート!」

彩音もナーガラジャを呼び出した。

二人の攻撃が、ケーブルを更に断ち切る。しかし、残ったケーブルでハーミットは充電を続けた。

「マズいっ!みんな、避けて!」

充電が極限にまで達した。

彩音はとっさにアイギスを、湊はゆかりを庇う。

刹那。

ハーミットが己の内に貯めた電気を解放する。

酷い電撃だった。雷が嵐のように、エスカペイド内に迸った。

とっさにみんなガードしたようだが、その威力は凄まじかったようで、ダメージを受けている。

アイギスとゆかりは庇われたせいかわりは浅く済んだようだ。そして、電撃を完璧に無効化するナーガラジャを付けていた彩音は、ダメージは無い。

「っ、みんな!大丈夫っ!?!」

いち早く体を起こした彩音が、辺りを見回す。

「っ痛……」

続いて起きたゆかりが、周りえを見て素早く召喚器を抜いた。

「イオ、メデイラマ！」

回復魔法が、全員にかかる。

「今のは流石に危なかったな……」

他にも美鶴をはじめ、回復した他のメンバーが立ち上がる。

「…湊くん？」

ゆかりがまだ起き上がれない様子の湊に声をかける。

「…感電した、かも……」

湊がなんとか答えた。

「湊は回復するまで休んでて！みんな、あの攻撃がまた来る前に倒す！」

号令と同時に、皆がペルソナを呼び出す。

「ケーブルは大分減らしたから、本体を狙うよっ！」

全員が、それぞれが得意とする攻撃を浴びせた。

「よくもさつきはやってくれたなっ！」

真田が怒りのラッシュを浴びせる。先ほどからのダメージの蓄積で弱っていたハーミットは、体勢を崩した。

「レッツ、総攻撃っ！」

彩音の号令で、全員がハーミットに総攻撃を浴びせた。

『ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！』

一際大きい悲鳴を上げたハーミットは、倒れて霧散した。

9月5日NO.2 〳?番 隠者〳(後書き)

いかがでしたでしょうか？

…2部構成にするつもりだったのが、時間の都合で3部になってしまいました。

あと電気を通さない云々は授業でやったことなので多分合ってる…  
と思います。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

9月5日NO.3 く捕らわれの順平（前書き）

結局3話構成になってしまいました。

という事なので多分短いですが、はい。

では、ごんげん。



9月5日NO.3 く捕らわれの順平く

ハーミットが消えると、風花が皆のところへ戻ってくる。

「敵の反応、消滅です。お疲れ様でした、皆さん。あ、そういえば、リーダー。」

「何？何かあった？」

「さっき、順平君の反応が見つかったの。多分寮に帰ってると思うんだけど、なんだか、ちょっとだけ様子がおかしくて…理事長も居るし、何も無いとは思うけど、私たちも、急いで戻りましょう。」

「…いや、何か起こってるかもしれない。あの理事長、ペルソナ持っていない分鈍そうだし。」

湊の言葉に、全員が「ああ、確かに…」と納得した。

「とにかく、急いで戻ろう！理事長、また駄洒落考えるのに夢中になって監視カメラ見てないかもしれないし！」

「…”また”？」

「と、とにかく戻るよっ！」

怪訝そうに訊き返したゆかりを何とかごまかし、彩音はエスカペイドのドアを開けた。

「…こんなもんか。久々に骨が折れたかも…」

遥はペルソナを帰還させて、呟いた。

チドリのジャミングは、風花に対して未だ有効だった。だが、遥が間に入るにより、ジャミングを一時的に解除したのだ。一種の感覚乗っ取りとも取れる。

それのお陰で、順平の存在を風花に気付かせることが出来たのだ。た。

「さて、それじゃそろそろ居なくなっただけだし、帰ろうか。後は湊くんたちで何とか出来るでしょ。」

遙は立ち上がり、そばにあった棺桶を上手く避けて部屋を出た。

一方その頃、寮の屋上。

「…もう作戦は終わってしまったみたい。」

チドリが呟いた。

「!?!?…分かんのかよ!?!?」

「分かる…メーディアが教えてくれるから。」

「メーディア?」

「私の…友達。」

「チドリ…」

どこか悲しげな、それでいておしさが籠ったような呼び方に、順平はただチドリの名前を呼ぶことしか出来なかった。

「それより…どうして”中止命令”を出さなかったの?」

チドリの顔が険しいものに変わった。

「命より、作戦が大事ってこと?死ぬ事って、普通の人には一番の恐怖なんですよ?…違うの?」

「いや…オレはただ、命令なんかした事ねっつーか…したくても、出来ねっつーか…」

元々、自分がリーダーだと嘘をついたのは、女の子の前ではいい格好をしたいという強がりからだ。

「その…オレ、リーダーなんかじゃねえんだ…」

チドリの表情が驚愕に染まる。

「全部ウソだったってこと?どうして…?…理解できないわ。」

こんな軽そうな少年が、こちらの正体を全部知った上で自分を騙していた、というのは理解できない。そして、感情の起伏に乏しいチドリは、強がりなどというものもまた、理解できなかったのだ。

「なあ…1コだけ教えて欲しいんだけどさ…最初っから、なんもかも芝居だった?偶然会った事や、ケガとか、絵とか…ハナっから、オレの事知っててハメてた?」

順平もチドリと同様に、自分を最初から騙すつもりで仲良くしたのかということに気付く。

「つか、そっか、手のケガ…マジの傷ならすぐに消える訳ねえもん  
な…ハハ、そっか…」

「あれは…」

チドリが言いよどむ。

そしてまた何か言いかけた時…

バンツ！！

勢いよくドアが開いて、特別課外活動部のメンバーがぞろぞろと入ってきた。

「順平！？」

拘束されている順平を見て、真っ先に声を上げたのはゆかり。

「ッ…もう戻ってきたの！？」

チドリが舌打ちして、召喚器を取り出す。

「それは…召喚器！？ペルソナ使いなのか！？」

チドリはそんな美鶴の声を気にせず、召喚器をこめかみに当てた。

「メーディア、おいで…」

「やめろっ、チドリっ！！」

しかし、召喚の気配を感じ取った順平が、拘束された体でチドリに体当たりする。

「ああっ！」

衝撃で召喚器を落としたチドリが倒れこむ。

素早く湊が転がってきた召喚器を拾った。

「いやっ！か、返してっ！！」

「…悪いが、返すことは出来ないな。」

「おいおい、何の騒…おわっ！？いつの間に…！？」

ここでようやく幾月がやって来た。

「今の今まで気付かなかったんですか…！？」

彩音が呆れた視線を幾月に向ける。

「アイギス、彼女を拘束してくれ。」

「了解であります。」

アイギスがチドリの腕を拘束した。

「メーディア!!!」

しかし、チドリは奪われた召喚器の方を見て、恐らくは彼女のペルソナであろう名前を叫んでいる。

「私…今の今まで気付けなかった…私には…この力しかないのに…」

「山岸君でさえ何も感じなかったとなると、これはもう”錯乱する能力”って事だね…僕なんかもう、全然、さっぱり、カラつき気付けなかったよ…」

幾月が方をすくめる。肩を竦めたいのはこっちだと、彩音と湊は思った。

「訊きたい事が色々ある…君も、あのストレガとかいう連中の仲間か？」

「…私は…死ぬ…なんて…怖く…ない…」

「チ、チドリ…!?!」

様子が先ほどと全然違うチドリを見て、順平が心配そうに声をかける。

「…メ、メーディア…私は…」

「…話を訊ける状態じゃないな…精神がひどく乱れてる。しばらく安静にさせて様子を見るしか無いだろう。」

「チドリ…」

順平はただ、チドリの名前を呼ぶことしか出来なかった。

9月5日NO 3 く捕らわれの順平く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

久しぶり、ほんと久しぶりに2日連続投稿をしました。  
あとは番外編で、この章は終わりですね。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

×月×日 〈秘密のビデオ2〉 (前書き)

ビデオシリーズその2です。

では、ごんご。

画面に映ったのは、風花の部屋だった。

風花はドレッサーの鏡の前に立って、何やら考え込んでいる。

「うーん…やっぱりワンピースの水着にした方が良かったかな…こういうセパレートのって、見方によっては、ほとんど下着だし…おへソがスースーする…」

そう、今風花が着ているのは水着。少し恥ずかしそうにポーズをとっている。

もうすぐ屋久島旅行。その時に着るために買った水着を試着してみていたのだ。

「考えてみたら…一人で水着選んだのって、これが初めてかも…でもワンピースのって、そんなに種類無いみたいだったし…やっぱり、ゆかりちゃんにもう1回見立ててもらおうかな…」

風花は選んだ水着にあまり自信が無いようだ。

「あ、でも私…あんまり運動してないから、真横に並べたら自信なくなりそう…リーダーもいるし…」

そこで、何か思いついたように風花は顔を上げた。

「あ、そうだ。あれ今朝届いたんだった。」

風花は部屋の隅に置いてあったダンボールの箱を持ってきた。そしてカッターを使い綺麗に開ける。

中から取り出したのは、「お腹まわりに巻くだけでウエストが細くなる」という宣伝文句のダイエット用品。

「時価ネットさんで買った、ウエストすっきり低周波パット！お値段の割にちゃんと効果あるってネットで評判だったし、行くまでに少しでも…」

風花は早速使うことにしたようだ。

でも、風花は知らない。通販の罫を。

「えっと、おなかに巻いて…電源どこかな…」  
電源を入れる。

その途端、風花はお腹を押さえて笑い出した。

「や、ちよっと…これ、んふふふ…やつ、くすぐったつ、ははは…どうしよ、ふふふふ、あはははははッ。」

風花はベルトを巻いたまま。悶絶している。

「ふふふふ、ううっ、取れない…ははは、なんでなの…」

どうやら、設定した時間が終わるまでは、ベルトは取れなくなり、停止も出来なくなるようだ。

風花の声は涙声だ。

その時。運悪く、部屋のドアがノックされた。

『山岸、ちよっといいか？』

聞こえたのは美鶴の声。

「あ、桐条せんぱ、ふふふふ…で、出なきゃ。はい、あの今出ま、ふふ、出ますー！」

美鶴は風花の声に何かを感じたらしい。

『あ、いや…取り込み中か？』

「い、いえ、別に、ふふふつ、別にそんなつ、はははっ…」

だが、返事をする声の中にも笑い声が混じってしまい、うまく状況を伝えられない。

『大した用じゃないんだ。その…気にせず続けてくれ。』

何をしていると勘違いしたのか、美鶴はそう言って去ってしまった。

「あ、先輩…！」

風花が呼ぶがもう遅い。

「こ、コレ、腹筋、きたえるって、そういう、ことなの…？」

その”ウエストすつきり低周波パット”とは、低周波で腹筋を鍛えるのではなく、くすぐったさをこらえることで腹筋を鍛えるという意味だったのだ。通販グッズによくある落とし穴である。

「ていうか、ふふふ、止めてー！」



風花の叫び声が部屋に響き渡った。

映像はここで途切れている。

2009/8/13

22:41:19

記録開始

画面に映されているのは、何やらトレーニング用具がたくさん置いてある部屋。真田の部屋である。

部屋の持ち主はというと、部屋の中を苛立たしげに歩き回っていた。「くそ…屋久島の勝負…どうも納得いかん。俺の会話力が、順平あたりと大差ないだ…？あんな本能の赴くままの喋りと一緒くたにあしらわれただ…？」

ふと真田が立ち止まり、机の上に置かれた雑誌を手に取る。

真田が開いたページには、「実践！会話が苦手な人のための今すぐ使える会話テク！」と見出しがある。

「あなたは自分の言動によって、周囲に笑いを起こす事が出来ますか？」まあ…確かに多くはないかもしれんが、そのくらいは俺だつて…」

真田は雑誌を読み進める。

「注意：笑わせる事と笑われる事は全く別のものです。」…。「真田は苦々しげに黙り込み、ページをめくる。

「人から話しかけられた時、正論や解決策ばかり答えようとしていませんか？口下手な男性によくあるパターンです。空気を読んでください。」…くっ…否定できん…！」

更に真田はページをめくった。

「では、異性の友達や後輩に話すつもりで、行きつけのお店に誘つてみてください。笑顔とユーモアが大切です。」…。」

真田は少し考えた後、雑誌を片手に話し始めた。もちろん、今読んだ内容を実践するために。

「や…やあ、いい所で会った。グツジョブ！」  
色々違う気がする。

「これから”海牛”に寄って帰るんだが、一緒にどうだ…？」  
そこで言葉に詰まったらしい。「ユーモア…ユーモアか…」と考  
えている。

「海牛だけに…ウミウシ…ウミウシ…ウミウシ…？」

真田はユーモアの部分がどうも考え付かないらしい。「むおおお…」  
と唸っている。

やがて、雑誌を乱暴に閉じ、机に叩きつけた。

「理事長か。俺はッ！？やめだ！」

真田はそういうと、近くにあったグローブをはめ、部屋にあったサ  
ンドバッグを一心不乱に叩き始めた。

映像はここで途切れた。

「っ…！」

「顔赤くしないでよ、変態に見えるよ？」

「…だって、いきなり再生したら、風花の水着姿で…」

「あーもう、はいはい。純情？まーいいや。」

「…」

「あー、冗談だよ、冗談。で、えーと…湊、”屋久島での勝負”っ  
て、何？」

「そ、それは…」

「会話が関係してくる勝負…？何だろう…？」

「…そ、それより、あんな雑誌に書いてあることを本当に信じて  
はな…」

「真面目だからねー。で、湊。本当に知らない？」

「…知らない…」

「…？」

×月×日 く秘密のビデオ2く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回は風花&真田のビデオでした。  
次はあとがき（前半部分）です。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

## 1111までのあとがき

どうも、卯月夕吊です。

まずは、この「ペルソナ3〜死神の旅路〜」を読んでくださっている皆様に感謝の言葉を。

ありがとうございます。

初投稿してから早約半年。読者の皆様のお陰で、ここまで続けることが出来ました。

さて、今回のあとがきですが、この章で小説の前半部分が終了、となります。

これから先、ストーリーはどんどん暗くなっていきますので、特別課外活動部メンバーが全員集合したこの時点を一区切りとし、あとがきを書かせていただきます。

えー、まず…やっぱり本作のオリジナルキャラクター「満嶋 遥」のことでしょうか。

彼には「傍観者」の立ち位置にいらってます。といっても、その枠を超えて、ストーリーに関わってきちゃっている感じなのです。

正体については、ここでは明かしません(笑)。というか、色々分かりやすい伏線張りすぎている気がするので、薄々「こんな感じじゃないのかなー」と予想ついてる方もいらっしゃるのではと思います。

モデルは特にないのですが、イメージ的には「ペルソナ3トリニティ・ソウル」の洵君が一番近いのではないかと勝手に考えております。

1つだけ言っておきますと、彼はある方面についてはチートじみた

能力の設定をしています（笑）。

ペルソナはケイロン。やっぱり主要キャラの初期ペルソナがギリシヤ神話から出ているというルールにのっとりまして、ギリシヤ神話です。簡単な説明を書かせていただくと、半人半馬のケンタウロス族の賢者で、ヘラクレスやカストール、アスクレピオスなどに武術や馬術、医術を教えた存在ですね。

”賢者”の部分だけ注目し使用しました（苦笑）。

ペルソナのイメージは、半人半馬ではなく、長いローブを着た人型、って感じですよ。フードを被っていて顔は見えません。

次に、主人公について、ですね。

主人公を双子設定にしております。ありがちといえばありがちなのですけど。

視点としては、彩音の方は原作ストーリーそのものの視点として、湊は彩音を補佐しながら、独自の設定の方の視点を担当してもらっている感じです。

だから彩音より湊の方が遥と仲良くさせてあります。それに、特殊能力もありますし。（最近出せていませんが…。）

主人公以外のキャラの会話の殆どを、ゲームのセリフ文から引用してしまっていて、独自の展開が少ないです。

ですから、この小説独自の原作キャラの性格設定というものも、あまりしていません。

普通に原作通りの性格だと考えていただければ。

…多少順平がいじられキャラになっていますが。

では、後半部分のことですが…

遙の出番が多くなります。遙コミュ書きます。  
独自設定、独自展開出てきます。

…はい、今言えるのはこれだけです！もう伏線書き始めちゃうと、  
出し過ぎちゃう気がするので。

更新ペースは頑張って維持していきたいと思います。

ご意見、ご感想、ご質問などありましたら感想かメッセージにてお  
願います。

(ただし荒らしはおやめください。)

執筆の励みになりますので、感想下さるとかなり喜びます！

最近誤字脱字が多くなっている…気がしますので、誤字脱字等もあ  
りましたら報告宜しく願います。

では、ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございました。  
た。

引き続き、「ペルソナ3 死神の旅路」を宜しく願いましたしま  
す。

1111までのあとがき(後書き)

参考

Wikipedia

9月6日 くちどりの尋問く（前書き）

明後日が定期テストだったりします。

憂鬱です…。

では、ごんげ。



9月6日　くチドリの尋問く

満月戦から一夜明け。

昨晩捕らえたチドリはここ辰巳記念病院に入院していた。

周りには、話を聞きに来た美鶴や真田がいる。

「…もう1度訊くぞ。チドリというのは、本名か？」

「…」

チドリは答えない。黙ってスケッチブックに何かの絵を描いている。

「ストレガというのは、どういう組織だ？君ら3人の他にもまだ居るのか？」

答えない。話など聞こえていないかのようだ。

先ほど、というか開始からずっとこの状態が続いていた。美鶴や真田が質問をするが、チドリはだんまりを決め込んだまま一言も喋らない。ただ黙々と、スケッチブックに絵を描くのみだ。

「ハア…」

美鶴がため息をつく。

『ちよつ…待つてよ、順平！』

廊下からゆかりの声がした。美鶴と真田はそちらに目を向ける。

『来ていいって言われてないでしょ！？』

だがゆかりの制止も振り切り、廊下でゆかりと口論になっていた人物　順平は部屋に駆け込んだ。

「チドリ…！」

「順平！」

遅れてゆかりも入ってくる。

「あの…すみません。この場所、しつこく聞くもんだから…」

チドリも相変わらずだが、順平も相変わらずのようだ。昨日病院へチドリが搬送された後から、ずっとチドリのことを気にしていた。

順平はチドリに駆け寄って話しかけている。

「気分、どうだ？もう、落ち着いたんだろ？」

チドリは順平の問いかけにも答えない。

「ああ…落ち着いたものさ。どんな検査も質問も、全て無言の拒絶だ。」

心なしか美鶴の言葉にも棘がある。

「…そのスケッチブックも、取り上げるべきか？」

「いいじゃないスカ、そんなくらい！こんなもん、取り上げたって、何もなんないスよ！」

「どうか。召喚器を取り上げた時は、だいぶ動揺していたみたいだがな。」

美鶴はもう1度チドリに向き直る。

「ペルソナの召喚器…君はあれを何処で手に入れた？」

「…メーディア…」

チドリがうわごとのように、自分のペルソナの名前を呼ぶ。

次の瞬間、チドリの様子が豹変した。

「返してよっ！！返してっ！」

チドリは持っていたスケッチブックを乱雑にベッドの上に放り出した。チドリの肩は小刻みに震えている。

「おい、むやみにその事に触れるなど言ったる！？」

「じゃあ、どうすればいい！」

先ほども召喚器の話題を出したら、今のように様子が豹変した。チドリにとってこの話題はタブーなのだ。

「ハア…次からは誰かに代わってもらうか。」

美鶴はため息をついて困ったようにチドリを見つめた。

「なんで…なんで取り上げるのよ…メーディア…なんで…」

美鶴の視線の先のチドリはまだ、小刻みに震えている。

「…岳羽、看護師を呼んできてくれ。今日はもうここまでだ。幾月さんには、俺から報告をしておく。」

「あ…はい。ほら、順平、行くよ。」

ゆかりが順平の腕を引いて、病室を出ようとする。

「チドリ…一体どうしちまったんだよ…」

順平は、様子がすっかり変わってしまったチドリに対して眩くことしか出来なかった。

9月6日 くチドリの尋問く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今日は短めでした。

これから勉強します。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

9月8日 くちどりの尋問2 (前書き)

ようやくテスト終わりました。

英語の出来が…

では、ごうぞ。

9月8日 くチドリの尋問2く

放課後。

また美鶴と真田は、チドリの尋問に来ていた。今回は、彼女から何か情報を感じ取れるかもしれない、ということで風花も同行している。

「どうだ、山岸…何かを感じるか？」

「いえ…」

チドリはまた黙って絵を描いている。

風花は集中するように目を閉じているが、何も感じ取れていないようだった。

チドリの心のガードが固いのか、ペルソナ”メーディア”が何か邪魔しているのか。はたまた、彼女自身が何も感じて居ないのか…それは分からなかったが、とにかく情報や手掛かりとなりそうなものは何もない。

「ハア…黙っていて、困るのは君だぞ。」

美鶴がため息をつきながら、困ったようにチドリを見る。

「恨んで拘束してる訳じゃない。無意味な戦いを避けたいだけなんだ。」

チドリは何も喋らない。それどころか、無表情のまま、表情の変化も見られない。

扉が開いた。

入ってきたのは、順平。授業が終わってすぐ、ここに来たようだった。

「…チドリは？」

「またか…どういっつもりだ、順平。」

真田が呆れたような視線を向けるが、順平は気にしていないようだ。

「彼女、なんか言いました？」

「…いや。」

順平は少しだけ、落ち込んだように俯いた。しかし、少しして顔を上げる。

「…オレに、話させてください。」

その目は、必死だった。

美鶴はもう1度、ため息を吐く。

「伊織…君はどうも、この件では冷静でいられないようだな。どうかしたのか？」

「それは…」

順平が口ごもった。

「…正直、分かんねーっス…。…襲われたのも、分かってる。けど、なんか、放つとけないんス！お願いしますッ！」

順平は帽子を取り、深々と頭を下げた。

「順平くん…」

いつもの軽い感じの彼からは。考えられないような真剣な態度。それに、風花は驚いた。

「…いいじゃないですか。事前に少しでも交流のあった順平なら、可能性は他よりも高い。」

ドアが開き、声が出た。

そこから現れたのは、湊。

またもや尋問を行っていると聞いて、湊も様子を見に来たのだった。

「有里…君まで…」

「…たく…」

美鶴が驚いたように湊を見返した。

「…どのみち、私達では手詰まりのようだ…それに、有里が言うように可能性もある。…いいぞ、話してみる。」

「…っス！」

順平はもう1度頭を下げると、チドリの傍に行った。

「…元気だったか？」

順平が話しかけても、チドリは答えなかった。それでも、順平は話を続ける。

「スケッチブック…取られなくて、よかった…。八八、ここでも絵描いてんだ…。絵を描くのだけは、やっぱ、ホントに好きなんだな…」

チドリの表情が少しだけ変わった。絵を描いていた手が止まる。順平を軽く睨むように見る。

「…関係ない。」

チドリが、初めて喋った。

「しゃべった…」

驚きの表情で、風花がチドリを見る。

「…こんな絵、私以外にも理解できないし…」

「お、おい、チドリ？」

順平が、話すチドリの手を見て驚きの声を上げる。

「腕、腕!！」

見れば、チドリの腕に巻かれた包帯には血が滲んでいた。

「チツ…またか！山岸、医者を！」

「は、はいっ！」

真田がいらついたように言った。風花が慌てて病室を出て行く。

「なんスか、これ!?なんで血が!？」

「…自分でやっちゃうんだ。」

「…自傷行為、か…」

湊も苦い顔を浮かべる。

「…クソッ、危なそうな物は、取り上げたつもりだったが。」

「…自分で…!？」

順平はまだシヨックから立ち直れていないようだった。

「…理由は分からないが、放っておくと、すぐそうするんだ。もっとも、信じられない治癒速度のせいですぐ治ってしまうようだが…」

「じゃ、あん時の手の傷も、君が自分でやったのか!？」

ポートアイランド駅前で会ったときにも、1回こっやって血を流し



ていたことがあった。あれは自分を罫に嵌めるための芝居だと思っていたが、あれは本当の傷で、しかも自分で傷つけていたのだ。  
「…言つとくけど、心配してくれなんて、言っていないから。あんたの勝手な早合点でしょ。」  
その通りだった。順平はきつく唇を噛んだ。  
暫くの沈黙。

「…やめろって。」  
やがて、順平が口を開く。

「…やつちゃ駄目だ。…心配とかして、言ってるじゃない。やって欲しくないんだ。チドリに…そんな事さ。」

チドリが少しだけ驚いたような表情で、順平を見た。

「すぐに医者が来る。…もう戻れ。」

また沈黙が降りたところで、美鶴が順平に言った。

「…ハイ。」

「…失礼しました。」

順平と湊は、言われるまま病室を出る。

チドリは、去っていく順平の後ろ姿をじっと見ていた。

「…喋れるじゃないか。」

美鶴が呟くが、チドリは何も言わなかった。

所変わって、長鳴神社。

チドリと順平が会話しているその頃、荒垣は散歩に出ている。

荒垣は現在休学中だ。だから、学校には行かない。

コロマルの餌でも作ってやろうか、と考えて買出しに出ようと思ったのだ。

その帰りに、つつい立ち寄ってしまったのである。

「…やあ。」

声が聞こえた。見れば、入って左側の奥のベンチに遙がいる。

下校途中らしく、制服だった。

「お前か。」

「ちよつと話さない？」

遙がにこ、と笑みを浮かべた。

荒垣は仕方なく、遙の方に歩いていき、隣に腰を降ろした。

「戻ったんだね。あんなに戻らないって言ってたのに。」

「理由、知ってたんだろ。お前なら。」

「まあねー。」

遙はまた笑みを浮かべて見せた。

「この間のことだって、全部見ていたんだろ。」

「大正解。気付いてた？」

「いや、ただそんな気がしただけだ。」

お前なら絶対やってるだろうってな、と荒垣が付け加える。

「流石だね。」

遙は笑みを崩さない。

作り物の笑みか、本物の笑みかは荒垣には分からなかった。

「生活はどう？そうそう、有里姉弟は面白いでしょ？」

「物好きな奴だったな。昨日なんか、一緒に飯食ってきた。姉の

方と。俺なんかより、もっと別に過ごしたい奴とかいないのかよ、

あいつは。」

「良かったじゃん。荒垣くんは優しいからね。きっと、彼女にはそ

れが分かったんだよ。」

「そんなものか？」

「そんなものさ。」

遙は立ち上がった。そして大きく伸びをする。

「ありがと。ちよつと最近疲れてたから、気分転換になった。」

遙は荒垣の方に振り返る。

「隣が山岸さんなの。有り得くない？だからもう壁つくるのに大

変で、さ。」

「いっそのこと、全部バラしちまえばいいじゃねえか。」

「やだよ、それって荒垣くんが特別課外活動部のメンバーに2年前

の事件のこと全部話せって言われてるようなものなんだよ？」

「それは確かに嫌だな。」

荒垣も立ち上がった。

「…また、食べたいな。荒垣くんのご飯。」

「気が向いたらな。」

「ほんと？やった。」

無邪気な笑顔を見せられて。自然と荒垣は小さく笑みを浮かべていた。

こいつは、本当に不思議だ。なんで、こんなにも穏やかになってしまうのか…

「じゃ、楽しみにしてるから。…バイバイ。話してくれて、ありがとう。」

遥は軽く手を振ると、足早に神社を後にした。

「…俺も帰るか。」

荒垣も、寮に帰ることにした。

9月8日 くチドリの尋問2 (後書き)

いかがでしたでしょうか？

遙が荒垣と仲がいいのは、私の趣味が半分以上入ってます(笑)。でも、似た者同士なんですよ。まあ、その辺も後で明らかにしていきますが。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

9月10日 く制御剤く (前書き)

土曜日のペルソナ4アニメーションが楽しみです。  
でも、展開がやっぱり早いですね…。

では、ごんげ。

9月10日 く制御剤く

チドリが話すようになってから、順平は毎日病院に通っていた。

一応美鶴と真田も付き添いという形で一緒に来ている。

まだ肝心なことは聞き出せないままだが、それでも少しずつチドリが順平に心を開いているだけ前進といえるだろう。

今日もまた、3人はチドリの病室にやって来ていた。

「よっ、チドリン！」

「…やめてよ、それ。」

「そうトンガんなくて。」

順平がつけたあだ名を、チドリはすぐさま否定した。

順平はすぐチドリの傍に歩いていき、手に持っていた袋からある物を取り出した。

「ほらこれ、スケッチブック。そろそろ使い切んじゃないかと思っ  
てさ。」

差し出された新しいスケッチブックを見て、チドリは驚いたようだ。  
だが受け取らず、そっぽを向いてしまう。

「そんな事…順平に頼んだ覚え無い。」  
でも順平は嬉しそうに笑っていた。

「へへっ、やっとまた”順平”って言ったな。…もう呼んでくれな  
いかと思っただぜ。」

チドリは虚を突かれたように目を見開いた。そしてそろそろと、ス  
ケッチブックを受け取る。

その様子を美鶴と真田は無言で眺めていた。

不意に、ドアが開く。

入ってきたのは荒垣だった。

「…どうだ？」

美鶴たちの傍まで荒垣は歩いてくる。そして、小声で2人に聞いた。

「何とか、話し始めた。ただ、今のところ、取り調べにはなっていないが…」

「それだけでも前進だろ。俺たちには。口も利かなかったんだ。」  
「少しづつ、順平と雑談し始めたチドリの様子をちらりと見て。真田は答える。」

「ところでお前…なんで来た？」

真田が荒垣の方に向き直る。  
だが、その時。

「ウツ…!!」

「チドリ!?!ど、どした!?!」

チドリの呻き声と、順平の焦ったような声が聞こえて、3人は一斉にそちらを向く。

「うつ…くは…」

チドリは苦しそくに、首元を掻きむしっている。

まるで、見えない拘束から逃れようとするような。

「この感じ…何かいるぞ!! 敵か!?!」

何か不穏な気配を感じ取った真田が病室を見回す。美鶴も同じように見回した。

すると、ベッドの上に一瞬、ペルソナらしき影が現れた。その影は、チドリの首を絞めている。

「違う、どけつ!!」

切羽詰った表情で荒垣はチドリの元へ駆け寄る。

よく見れば、手には小さな注射器が握られていた。

それをチドリの首に注射する。

「ハア…ハア…」

「チドリ!」

チドリはまだ荒い息をついているが、先ほどのように首を掻きむしることは無くなった。

「心配ねえ…ペルソナが”暴れた”だけだ。」

「ペルソナが…暴れた？」

聞きなれない言葉に、美鶴が怪訝そうな顔をする。

「ちゃんと見てろ、ったく。ペルソナが、一瞬コイツ自身の首絞めてたろ。」

確かに、一瞬だがそれらしきものが現れた、と真田と美鶴は思い返す。

「コイツらは、俺らとは違う。ペルソナを”飼い慣らせねえ”んだ。だから”制御剤”が要る。自分のペルソナに寝首をかかれない為にな…」

「”制御剤”…？」

美鶴の顔が険しいものになった。

「お前…”ストレガ”って連中のこと、何か知ってるのか？」

「…ルールを外れて初めて、見えたモンもあるさ…」

荒垣はそう言うと、もう用は済んだとばかりに踵を返してドアの方に行く。

「俺の持つてる薬を、医者に渡しておく。…後あ任せる。」

荒垣はそれだけ言い残すと、そのまま病室を出て行ってしまった。

「待て、シンジ！オイツ！！」

真田がイライラした様子で、荒垣の後を走って追いかけて行った。

「わた…し…」

ようやく息を整えたチドリが、ベッドの傍で黙ったままの順平に声を掛けた。

「…順平？」

「…よ、よかった…！マジ、死んじゃうかと思ったぜ…」

「なにそれ…なんで、そんな顔してるの？」

チドリがきょとんとした顔で順平を見上げる。

「死ぬなんて怖くないのに…」



「怖くないって、オイ…」

チドリは本当に、”死ぬ”ということの恐怖を知らないようだった。その様子に、今度は順平が啞然とした。

「死なんて、あした目が覚めないってだけ…ただそれだけじゃないの。」

「な、何言ってるんだよ！つか…マジで言ってる、それ？」

「…順平？」

焦る順平を、更にチドリは困惑した目で見上げる。

「オレはやだよ！チドリが死ぬなんて、オレはイヤだ！」

「順平…」

順平は更に続ける。

「怖くなきゃイイとか、そんな事じゃねえだろ？チドリが死んだら、オレ、ヤなんだよ！」

「…フフ…」

チドリはそんな順平の様子に、小さく微笑んだ。

「順平って、ヘン…」

「…ったく、ヘンはどっちだよ…」

順平も困ったように笑った。

その頃、辰巳ポートアイランド駅。

「おい待て！シンジ…！」

真田は荒垣によくやく追いついた。

何の偶然か、たまたまそこに居合わせた遙は慌ててところどころに立っている柱の影に隠れた。

荒垣が立ち止まる。

「どついう事だ…説明しろ。あんな薬…なぜお前が持つてる！？」

遙は話の内容を察し、俯いた。

荒垣は答えない。振り向きもしない。

「聞いた事だけはある。ペルソナの制御がうまくいかない場合、無

理やり押さえ込む薬があるとな。

だが、あれの副作用は…」

荒垣はまだ何も言わない。

「お前も…使ってるのか？」

本当は、否定して欲しかった。荒垣は幼馴染であるし、何より、1番の友人なのだから。

だが、使っていないとすれば何で持っていたのか説明がつかない。

「…」

「どうなんだ！？」

真田が声を荒らげた。その声で周りにいた人たちが真田を見て、そくさとその場を立ち去っていく。

「…テメエに話す義理じゃねえ…」

ようやく荒垣が口を開いたが、それは逆に真田の怒りをヒートアップさせるだけだった。

「キサマはいつもそうだ！そうやって…」

「テメエの言い分なんざ、分かってんだよ…」

荒垣が少し語気を強めて言う。

「力があんのに使おうとしねえ…そういうハンパなのが、気に食わねえんだろ？聞き飽きたぜ、この正論バカが…」

真田は無言で荒垣に近づき、こちらを向かなかった荒垣を無理やり向けさせる。

そして、そのまま荒垣の頬を右ストレートで殴った。

柱の影で話を聞いている遥がびくっ、と肩を震わせる。

「…！ッテエ…」

「全然、分かってねえ…」

真田の声は低い。そしてそのまま、話し出した。

「お前は知ってる筈だな…10年前、孤児院が火事で焼け落ちた時、俺は妹を救えなかった…。あの時の俺には、飛び込むどころか、止める大人の腕を振り切る力さえ無かった。」

荒垣は黙って聞いている。

「だから俺は”力”に拘つてきた…お前だつて同じだつた筈だ！俺たちだけでも生きていけるように…一緒に強くなるうって…なのに、なぜだ…！なぜ俺に黙つて、クスリなんかで力を抑えた！？」

しばらく沈黙が流れた。

やがて、荒垣が口を開く。  
「俺あ戦いに戻つたんだ…もうペルソナを押さえ込む必要もねえ。文句ねえだろが。」

「…クソッ…」

真田は唇をかみ締めていた。何よりも、止められなかった、気付けなかった自分自身の不甲斐無さに、心底苛立っていた。

「…副作用は…もう、出てるのか。」

荒垣は黙つた。それは無言の肯定とも取れた。

「…今の俺には…やるべき事がある。こいつはケジメだ。俺にしか務まらねえ。」

「…やるべき事？」

それは固く、揺るがない決意のようだ。覚えのある遥は息を呑んだ。「いいか。いつまでも俺に付きまとしてんじゃねえ。テメエはテメエで、信じた道を行きやがれ。…いいな。」

それだけ言つて、荒垣はその場を去つて行つた。

「シンジ…」

真田は去つていく背中を見て、ただ名前をつぶやくことしか出来なかった。

荒垣の言葉が、いつまでも頭に残っていた。

遥もまた、その場で俯いて立ちすくむことしか出来なかった。手を血が出そうになるまで、強く固く握り締めて。

9月10日 く制御剤く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

やっぱり荒垣が絡むシーンって、重いけど、否、重いからこそ心に残ったり、好きになる気がします。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

9月12日 くちドリのカ〜(前書き)

ペルソナ4、やっぱり面白いですね〜。

今回の陽介のシャドウの時のやり取りにはかなり笑いました。

では、ごうげ。

9月12日　〜チドリのカ〜

病室のドアが開き、チドリはゆっくりそちらを見た。

入ってきたのは順平。今日は、美鶴と真田の姿は無かった。

「今日は、先輩達は来ないぜ。…けど、召喚器とかは、やっぱり返せねえつてさ。」

順平がベッドの方に来ながら言う。

「…別に、期待はしてないけど。だから、ここで監視してるんだろ  
うし。」

最初の頃よりは随分落ち着いたようだと思順平は思った。

美鶴たちの話によると、召喚器のことを訊くたびに暴れだして大変  
だったらしい。

今は話しているのが順平だから、というのもあるのだろうか。

「あ、この前のケガ、だいじょぶか？」

順平はチドリの腕を見た。

「…って、そうか、すぐ治っちゃうんだっとな。」

跡形もないケガを見て、順平は前の話を思い出した。

ふと、順平が気になっていたことを訊く。

「…そういや、チドリ、今日は、絵とか描いてねえの…？」

「…別に、いいでしょ？」

「ああ、そりゃ、もちろんいいけどさ。」

順平は少し気まづくなり、病室を見回す。

「あれ、この花しおれちまってんな。外まだアチいしなあ。」

確かにベッドの脇の机の上に飾ってある花が、しおれてしまってい  
た。

「あ、そだ。新しい花、何か買ってくつからさ。チドリ、何か好き  
な花とか…」

チドリは無言で、花を眺めている。そして、おもむろに手を花にか  
ざした。

「…って、どした？」

「ん…」

そして、少し集中するように目を閉じる。

次の瞬間、花が淡い光を放つ。そして、その花は今咲いたばかりのように、綺麗にいきいきと咲いていた。

「え…花が…」

順平は驚きに目を見開いた。

「それ、切り花だよな？すげ…なに、どうなってんの！？」

「…私のを少し分けただけ。」

「治癒の力って…こんな事まで出来んだ！すっげ、マジックみてえ…」

順平は子供のように目をキラキラさせながら花を見ている。

「別に、スゴくない。順平だって、力があるんでしょ？これだって、その1つよ。」

「まあ、そうなんだけどさ…」

順平が少し言葉を濁した。

「オレの場合、それ以外が何にも無いっつーかさ。」

チドリが頭に？マークを浮かべる。

「オレ…この力を取ったら、正直、何も無いんだ。”正義のため”なんて、口ばつかでさ…」

順平は、少しずつ自分が抱えていた葛藤を話し出す。

チドリは黙って聞いていた。

「オレほら、ハンパってゆーかさ…何のために戦ってんのか…：つか、何のために、生きてんだろうな…」

「何のために…生きる。何のために…」

チドリが順平の言葉を反復する。

「ガキの頃はさ、バカみたいな夢とか、あつたけどな…」

「…夢？」

「メジャーリーガー。…アホだろ？まあ、ガキンときなんて、そんなもんだろ。」

チドリが悲しげにうつむいた。

「分かんない…。私は…小さい頃の事、あまり覚えてない。覚えてるのは…白い部屋…ずっと、真っ白…」

話すチドリは、順平には儂く見えた。

「ふうん…」

「病院は嫌い…」

「そ、そっか…」

恐らく、その小さい頃の記憶というのは、チドリにとってあまりいいものではないのだろう。

病院が嫌い、というのは、その白い部屋を思い出すからかもしれない、と順平は薄々感じた。

「…ゴメンな…」

「でも、ここにいれば、順平が来る…だから、今はここでいい。」

「チドリ…」

予想外の答えに、順平は目を丸くした。そして照れたように頭をか

く。「そ…そっか。なら、全然、来るよ…オレ…」

順平は照れて赤くなった顔を隠すように帽子を被りなおすと、チドリとの話に花を咲かせた。

その夜、影時間。

寝ている彩音の元に、またあの気配が来る。

「やあ。久しぶり。」

彩音は目をこすってファルロスを見る。

「君たちと会ってから、もう3つめの季節だ…。時間が流れるのは速いね…いろんなものが変わっていく。でも世界には、決して変えられない、”決まり”みたいなものもあるんだろうね…。…君はどう思う？」

「…変えられないことも、あると思うよ。」



「そっか…」

ファルロスはまっすぐ彩音を見た。

「君がそう言うなら、やっぱりそうなんだろうね。」

ファルロスは続ける。

「今まで、君たちに話してたこと…いろんなものが、見え始めたんだ。…あの”塔”だよ。」

塔、といわれて思い浮かぶのは、タルタロスしかない。恐らく、今宵も高くそびえているのだろう。

「最近、そのことばかり考えてる…。」

ファルロスは、少しだけ目を伏せた。

「僕らの関係は、変わらないものかな…それとも、変わってしまったのかな…」

「…変わるとしたら、友達から”親友”に、ってところじゃない？」  
ファルロスははっと、彩音を見る。

「…！ふふっ、そうか…そうだね。ありがとう。これから先に何が待っていてようと、君たちと僕は友達だよ。…絶対にね。」

「もう、親友にランクアップしようよー…」

彩音は寝ぼけた目で、ふにやりと笑って見せた。

でも、それに対するファルロスの笑みは、どこか悲しそうに見えた。少し、ファルロスとの絆を感じた…。

彩音の頭に、いつものようにカードが浮かぶ。

”??番 死神”がランク6になった。

「また来るよ。それじゃ…おやすみ。…僕の大事な人…」

「えっ…？」

彩音はファルロスの最後の言葉が聞き取れず、聞き返そうとする。しかし、それを待たずにファルロスは消えてしまった。

「…また聞けばいいか…」

彩音はそう思うと、また眠りについた。

9月12日 くちドリのカゝ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

来週が早くも楽しみです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

9月16日 くホームパーティーく (前書き)

荒垣とのコミュニケーションから、です。

文化祭、どうしようか考え中だったり…

では、ごんげ。

9月16日 くホームパーティーく

「…荒垣先輩が？」

湊が驚いた顔で、彩音の隣にいる荒垣を見る。

今日は、以前彩音が荒垣を説得して約束させた、パーティーの日だった。

呼びに行くまで秘密にしておこうという計画だったのだが、運がいいのか悪いのか、始めようという時に湊がラウンジに降りてきてしまったのだ。

「うん！料理、振舞ってくれるんだって！」

「テメエがパーティーにしろって言ったんだろが…」

荒垣が呆れがちに彩音を見る。

「…大方、姉貴が押し通したんじゃないやありませんか？」

「そんなことないって！」

荒垣が答える前に、彩音が少し慌てて間に割って入った。

「…にしても、10人分を1人で、ですか？手伝いましょうか？」

「いや、いい。…山岸に教えるついでだしな。」

「じゃあ、見学させてもらいます。」

湊も、荒垣の料理風景というのは興味がある。

「あ、私も私も！」

彩音も便乗した。

「お前らも、料理するのか？」

荒垣が少し意外そうに言った。

「…たまに。」

「湊の方が、私より料理上手いかも…手先器用だし…」

彩音は湊を羨ましそうに見た。

「…多分、荒垣先輩には及ばないと思います。」

湊は見られて恥ずかしくなったのか、明後日の方向を向いてしまった。

「んなことねえよ…さて、そろそろ始めつか。見たいなら好きにする。」

荒垣はそう言っつて、カウンターキッチンの方に向かっていく。もう既にそこでは風花が待っていた。

二人も、すぐにカウンターキッチンに移動した。

「下ごしらえは、こないだ教えた通りにしてある。こっからどうするか、覚えてるか？」

「はい！えつと…フライパンに油をひきます！」

風花が元気よく答えた。

「そうだ…つて、何でミリン持つてんだ。オリーブオイルつったろ、これだ。」

確かに風花が持つていたのはみりんの瓶。荒垣はそれを指摘し、別の瓶を取り出した。

「ええと、油を大きじ4…ですね。」

「何で、お玉持つてんだ。計量スプーン、見たことあんだろ？」

「あつ…これで計るんですかー。」

風花はお玉を大きじだと勘違いしていたらしい。

しかし荒垣は何も言わず、口調はぶっきらぼうだが優しく丁寧に教えている。

「あはは…前途多難だね、これは。」

「…1時間じゃすまないかもな。」

「あ、確かに…」

二人は苦笑しながら、風花と荒垣の料理風景を見学していた。

「…荒垣先輩、教えながら別のメニュー作ってる…」

荒垣の手元を見て、湊が言った。

「あ、ほんとだ…手伝いましょうか？」

「来んな、こっち狭えんだから。それに、お楽しみが減るだろ？」

荒垣はカウンターに入っつてこようとしたりした二人をすぐ止めた。でも、その顔は優しく笑っている。

「ご、ごめんね、二人とも。私がつと上手ければ…」

「いーから手元見てる。いま卵のカラ入ったぞ。」

風花は慌てて視線を手元に戻す。

「あ、本当だ。先輩、スゴイです。」

「…つうか、卵白残せつつつたのに、黄身”だけ”が残ってなーか？」

「あれっ？いつの間に…」

また間違えてしまった様子の風花に、荒垣はしっかり教えている。

二人はほのぼのとした感じで様子を見ていた。

「…風花つてさ、料理部ではすごい頑張ってるんだ。タルタロス登るときに、アナライズ以外でも何か出来ることないかなって、始めたらしいんだけどね。」

彩音が口を開く。

「…確かに、頑張ってるな、風花は。それに、そういう気遣いが出ることも風花のいいところだと思うし。」

「そうだね…」

風花は色々失敗しながらも、めげることなく荒垣に教えてもらい、料理を作っていく。

しばらくして、順平、コロマル、アイギスがラウンジに降りてきた。

「なーんか、いいニオイスねー？…え、風花？風花なの？」

順平がカウンターを覗き込み、驚いたような声を上げる。

「お、教えてもらってるの！」

コロマルは黙ったまま、風花を見上げている。

「コロマルさんが不安がっているであります。」

風花の料理の（色々な意味での）凄さは、この寮の中では全員が知っていることだ。

風花はストレートに言われ、すこししょげながらも、料理を続けていく。

「わー、いいニオイ！お腹減ってきちゃうなー…」

「シンジが作ってるのか…それ、余らないのか？」

ゆかりと真田も降りてきた。

「見て分かんねえか？」

「…そういう時は、気を利かせて多めに作るもんだろ。」

「ホント、バカだな。12人分くらいあんだろ、どう見ても。」

「えっ！」

荒垣の一言に、順平が目をキラリと光らせた。

「もしかして…」

ゆかりも期待した目で荒垣を見ている。

「はい、注目！お腹減ってる人ー？」

彩音が言った途端。

「はいっ！」

「はいはいっ！！！」

「はいはいはいっ！！！」

ゆかり、順平、真田がすぐさま手を挙げる。3人はとても嬉しそうな顔をしていた。

「うっせえ、座ってる…」

メンバーのハシヤギ様を見て、荒垣がため息をつく。

「ワフツ。」

「もう座っていると云っています。」

コロマルの言葉を、アイギスが通訳する。

「分かったから…コロちゃ…コロマルも大人しくしてるよ？」

その後も、みんな待ちきれないのか色々と言出しをして、そのたびに荒垣に怒られるといったことがあり（ちなみに一番怒られたのは真田で、1回も怒られなかったのが湊だった）、風花も色々やらかしたりして、ようやく完成した。

時計を見てみると、作り始めてからもう2時間が経過している。

「これ…全部？」

ゆかりが目の前の、たくさんのおいしそうな料理に目を丸くした。

「スゲー…何のパーティー？」

先ほどまで騒いでいた順平も、絶句している。

「…トマトの Pasta に酢豚、唐揚げ、パエリア、オムライス…凄いな。」

その他にも色とりどりの料理が並べられ、本当のフルコースになっている。

「桐条先輩、お部屋かな？呼んできますね！」

風花がパタパタと上にながっていく。

「ああ…それと、アキ。…天田も呼んできてくれ。時間押したが、寝てねえだろ…」

「…分かった。」

真田は頷き、すぐ2階に上がって行った。

「オレ、1つも作り方分かんねーよ…」

「しかも全部出来たてとか…」

順平とゆかりは未だに啞然としている。

そこに、階段から足音が聞こえてきた。

「どうした、急に集まりなど…」

美鶴と天田が降りてきたようだ。美鶴はテーブルの上の料理を見るなり、驚いて足を止めた。

「これは…何事だ？どこからかシェフでも呼んだのか？」

「違いますよ！荒垣先輩と風花が作ってくれたんです！」

彩音が嬉しそうに言った。

「え…荒垣さんが作ったんですか。」

天田は少し黙ってしまった。

「…座れ、全員。」

「はいっ。」

言われた通り、全員が席に着く。

「そしたらハシ持って…」

「はいっ。」

全員がそれぞれの箸を持つ。



「…食べ。」

「はいっ！」

「いただきます！」

荒垣の声と同時に、みんなはすぐ食べ始めた。

「…美味しい。優しい味、だな…」

「うわぁ…幸せ…全部美味しいよう…」

「うん…幸せ…」

彩音、ゆかりがすぐく幸せそうな顔になる。湊も、よく味わっているようだ。

「こ、これは…豚肉のテーマパークや〜！！」

「…どういう意味だ？」

順平が某グルメリポーターの真似をするが、美鶴には通じなかったらしい。

「むぐむぐ…ゴフツ、ゴフツ！」

「お、お水！」

料理を喉に詰まらせかけた真田に風花が水を運んだ。そこで風花はあることに気付く。

「…あれ、天田くん食べないの？」

「あ…た、食べます。…いただきます…」

「…おう。」

天田も言われて、一口オムライスを口に運ぶ。

「…美味しい、です…」

そっぴいなながら天田が、複雑そうにしていたことに気付いたのは荒垣だけだった。

楽しい時間は、こうして過ぎていった…。

9月16日 くホームページテイーく (後書き)

いかがでしたでしょうか？

このイベントはP3Pの中でもかなり好きなイベントです！  
書いてて楽しかったです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

9月17日 く文化祭準備く(前書き)

やっぱり、文化祭ネタは何か思いつかないので…

原作通り、ということぞ。

でもその前に準備です。

では、どうぞ。

9月17日 く文化祭準備く

「文化祭：ねえ。」

「遙くんは初めてだよね。はいこれ、遙くんの分担。」  
そう言つて、風花は遙にプリントを渡す。

今週の土曜と日曜は文化祭だ。そのため、クラスでは皆が準備に取り掛かっていた。

ここ、2年E組は普通に喫茶店をするのだという。

遙も今まで、文化祭に参加してきたことが無いわけではない。しかし、このように自分のクラスが店を出す文化祭は初めてなのだ。

去年の転校前の学校では、自分のクラスは休憩所をやって特に何も仕事が無かった覚えがある。

中学なんでもつてのほかだ。

だが別段、遙には「こういうことをやりたい」などという憧れなどは全く無いに等しい。

遙は少し面倒に思いながら、プリントを見してみる。

「…これ、何？」

「あはは…」

遙はプリントを凝視する。

そこには、「満嶋 遙：ウエイトレス」の文字。

「それを決めた時、確か遙くんは居なかったはずなんだけど…勝手に決まっちゃって。」

「ウエイターの書き間違いじゃなくて？」

「うん。そうみたい。」

ちなみに、風花は客の呼び込み。このクラスの人には風花の料理の腕前を知っているの、料理係には回さなかったらしい。最もな判断だ、と遙は人事のように思った。

「まさか、女装？いや、有り得るはずが…」

「そうみたい。あ、でも大丈夫だよ！絶対、可愛くなるし…」

風花がフォローしようとするが、遙には全くもってフォローになっていない。

遙が最も嫌がるもの。それは、”女に間違えられること”なのだ。

「ねえ、山岸さん。」

「は、はい!？」

普段の遙からは想像も出来ないような、低い声。それに風花は思わず肩が跳ねた。

「実行委員長、誰だっけ。それか、この分担当決めた人。」

遙の後ろに、何か黒いオーラが見えた気がした。

「じ、実行委員長は打ち合わせみたいの行つてて教室にはいないよ!あと、それ決めたのはやっぱり実行委員長で…」

「分かった。じゃあその打ち合わせってどこで?」

「そこまでは…」

「そう。じゃあ自分で探さないかね。これ、何が何でも変えてもらうから。」

遙のプリントを持つ手が震えている。よほど怒っているのだろう。

普段控えめな人ほど、怒ると怖い。それを身を持って実感した風花だった。

「あ、でも!確か週末には台風が来るから、文化祭の開催も危ういし…」

慌てて風花が言った。

この雰囲気は何とかしなければ。本能的にそう思ったのかもしれない。

「…あ、そうか。」

遙は今更気付いたとばかりに呟いた。手の震えがぴた、と止まる。

「この分だと直撃は確実らしいし…よし。着なくても大丈夫だな。」

風花は内心、ほっと安堵のため息をついた。しかし。

「でも、こんなの勝手に決めて…実行委員長には問いたださなくちゃな。」

「わ、わっっ!」

風花は慌てる。しかし、そんな風花を置いて、遙はすぐ教室から出て行ってしまった。

「…ごめんなさい、実行委員長…私には遙くんを説得するのは無理でした…」

風花は実行委員長が無事であることを祈りつつ、自分の仕事に戻ることにしたのだった。

「…ん、遙…?」

湊は偶然、廊下で黒いオーラを纏った遙と会った。

しかし珍しく、遙は湊には気付かずすれ違っていく。

「…何かあったのか?」

そこで、湊はふと遙が何かを落としていったのに気付く。

それはどうやら、くしゃくしゃに丸められたプリントのようなものだった。

「…?」

つい好奇心で、遙はプリントを開いてみる。

「あ…」

湊はそこに書いてあったことを読んで、今の遙の様子が納得できた。

「…ご愁傷様。」

湊はとりあえずそのプリントをポケットの中に入れておくと、自分の教室に戻る。

そういえば、確かゆかりもメイド喫茶でメイド役やらされることになって怒ってたっけ…。

そんなことを、考えながら。

その数分後。

2年E組実行委員長の叫び声が、学校中に響いたとか響かなかったとか…。

9月17日 く文化祭準備く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

外伝チックでコメディみたいでしたね。しかも短め。  
最近こんな感じの小話を書くことが多いもので…。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

9月18日 く台風直撃く (前書き)

最近友人に頼まれる短編小説をよく執筆中…。

では、ごきげん。



9月18日 く台風直撃く

文化祭の準備ですっかり遅くなり、ようやく帰る頃には、台風の影響で雨が降ってしまったていた。

しかも不運なことに、入れたと思っていた傘は鞆の中には無く。

二人は諦め、走って帰ることにした。

やっこの思いで寮に着いた。もう体は二人ともびしょ濡れだ。

二人の体は冷え切ってしまったている。

「あー、ギリ、降られちまったみてーだな。」

寮の他のメンバーは皆傘を持って行ったか、雨が降り出す前に帰ってきたのだろう。

「お前ら、びしょ濡れじゃねーか。」

荒垣がタオルを2人分持ってきて、彩音と湊に渡す。

「ありがとうございます。」

一応、タオルですっかり水分を含んでしまった髪や制服を拭いていく。

見てみれば、寮の仲間全員がラウンジにいた。雨風のすごさに、何となく寄り添っているようだ。

一通り体を拭いたあと、二人もソファに座った。テレビからは天気予報が流れている。

「台風、上陸したって、さっきニュースで言ってたよ。例年に無いくらい大型で、しかも、速度が遅いから居座りそうだって…」

「あー…だからこの雨…」

「おかげで学祭、中止だもんねー。」

順平の言葉に、湊がフリーズした。手がふるふると震えている。寒さからもあるだろうが、怒りも含まれていることは確実だな、と彩音は思った。

「やっぱりねー…」

彩音はある程度予想していたことだったので、湊ほどショックを受けてはいないが。

「…まあ、アレ結構メンドい事も多いし、それはそれで、いつけどさ。でも結局、台風が来んじや、外で遊びづらいよなあ…」

順平が言っているのは、この連休のことだろう。5月のゴールデンウィークに対してか、または敬老の日が含まれているからか、この連休は「シルバーウィーク」と呼ばれているが。

「…で、オマエらはこの連休、どうすんの？」

「…え、特に何も無いけど…」

「…僕も同じく。」

「はは、彩音ツチはともかく、湊ってヒマが似合う奴だよなあ。」  
湊はむっとしたが、今は少し体調が悪かったので言い返す気になれなかった。

「風花は、どうすんの？」

「え、私は、予定って言ったら、映画くらいかな…」

「お、映画？それって、もしかして…」

「ち、ちがうってば。夏紀ちゃんと約束してるの。映画の話、結構するから…」

順平が何を考えたのか、すぐ風花は察知し、答える。

「でも、この台風だし、まだ、分かんないけどね。」

確かに、この雨や風の中で出掛けるのは大変だろう。

順平は次に、ゆかりにターゲットを変えたようだ。

「ゆかりツチは？やっぱ部活？」

「…どうだろ？弓道場ってモロ外だから、連絡来るまで、ひとまず部活は無理かも。」

「俺もだ。まったく…台風でメニューが狂いそうだ。」

真田がやれやれと肩をすくめてみせる。

「桐条先輩は、どうするんすか？」

「…さあな。ところで伊織、君こそ、何故そんなに、人の予定ばかり訊くんだ？」

「え、オレツスか？オレの予定、聞きたいツスか？」

順平が待つてましたとばかりに嬉しそうな顔になる。

「…どーでもいい…」

湊は呟くが、順平には聞こえていないようだ。

「チドリさんの所へ、行くと見ました。精神的にはもう安定したという事ですが、解放するワケにはいかないであります。」

「もうー、アイちゃんったらスルドイなあー。いや、ぶっちゃけ、そうなんス。チドリ、オレに”来て欲しい”って言うてるんスよー。」

順平が照れたように言う。

「…やつべ、言っちゃった。ハズカシー！」

一瞬、寮の仲間の（順平と真田除く）の順平を見る視線が、同情するような、何かイタイ人でも見ているような目になった。が、順平はそれに気付かない。

「…まあ、嵐の中でもなんでも、とりあえず、行つといた方がいいかなあ…なんて。」

「あ、そう…」

ゆかりは呆れている。

「…どうしたんだ？なんで順平は喜んでる？」

「え、なんでつて言われても…」

真田の鈍感な発言に、今度は同情の目が真田に向く。しかし、真田もまた、それに気付かない。

「山岸にも分らないのか…」

場に何ともいえない空気が流れた。

「…ええと、あ、そう言えば、天田くんは、この連休はどうするの？」

風花がこの雰囲気をなんとかしようと、天田に話を振る。

「僕は、別に…これといって用事も無いですね。」

「んだよー、さみしい小学生だなあ。」

「今台風来てるんだよ？遊びに行かないほうが普通だって…」

彩音が順平に突っ込む。だが、その声は明らかに元気がない。

「あ、でも、その神社には行くと思いますけど。」

「神社っておまえ…どんなジジイ趣味だよ。」

「いつもあそこでお参りしてるんです。」

しかし、順平の反応はスルーし、天田は続ける。

「願掛け…って言うんですかね、こういうの…」

「…」

荒垣は無言で、天田をちらりと見やった。

「じゃあ、僕、部屋に戻ります。宿題、結構出ちゃったし…」

天田が席を立った。

「お…おう。分かんないところあったら、訊けよな…」

「…順平には訊かないほうがいいぞ。」

天田は小さく会釈すると、そのまま2階に上がって行ってしまった。

真田と荒垣は、それをただ無言で見送る。

「そういえば…二人とも大丈夫？なんか、顔色悪いみたい…」

風花が心配そうに二人の顔を覗き込む。

「確かに…今日は、大事をとってゆっくり休め。こんな雨じゃ、タルタロスにも行けないだろう。」

「…分かりました。」

「はい、そうします…」

寒いし、何か体がだるい。これは完全に風邪引いたなど、湊は素直にそう思った。

「後でなんか持って行ってやる。それと、その制服のまま寝るなよ？」

荒垣がそう言い、カウンターキッチンに入っていく。

「…ありがとうございます。」

湊は小さく礼を言い、彩音と一緒に上に上がった。

9月18日 く台風直撃く (後書き)

いかがでしたでしょうか？

文化祭、終わりました。といっても歌を歌うだけですが…

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

9月19日 くお見舞いく (前書き)

オリジナル話といふことで、お見舞い編を。

では、ごんごん。

9月19日　くお見舞い

外は未だに、雨が降っている。まだ上陸したばかりということもあり、しばらくこの強い雨は止みそうにも無い。

そんな中、遥はいそいそと出掛ける支度をしていた。

行き先は、蔵戸台分寮。

昨日、湊からメールがあったのだ。

「風邪を引いてしまったらしい」と。

遥は普段ならば、こんな真似はしないだろう。

外は台風だが、それ以外にも、あの寮へと行くことは敵陣のど真ん中に単身乗り込むようなものである。

今までならば、そんなことは絶対にしなかった。

だが、これも情の力か。今は、純粹に湊を友達として心配する気持ちがあった。

それに、湊には夏休みに遥が風邪を引いたときに傍に居てもらったという借りもある。

ということ、今遥は準備を整えて家を出ようとしているところだった。

途中のスーパーマーケットでスポーツドリンクと果物を買い、遥は強い雨風の中を歩く。

ほどなくして、目的の寮に着いた。

インターホンを押すと、すぐに風花の声が聞こえてきて、ばたばたとこちらに走ってくる音もする。

「はい、どちらさま…って、遥くん？」

「湊くんのお見舞いに来た。」

「わ、分かった。とりあえず外にいるのもあれだから、入って！」

風花に招き入れられ、遥は中に入らせてもらう。

「…へえ、中ってこんな風になつてたんだ…」

遥は特別課外活動部の寮など、勿論入ったことなどない。つい、きよるきよると中を見回してしまった。

「ちよつと待つてて。今タオル持つてく…」

「やつぱり、濡れてんじゃねえか。全く、あいつらみたいにお前まで風邪引くぞ？」

言い終わらないうちに、荒垣がタオルを持って来る。その声と表情は少し呆れを含んでいた。

「あ、荒垣先輩ありがとうございます…。あれ、荒垣先輩と遥くんって知り合いなんですか？」

「あ、いや…」

「前に不良に絡まれてたところを助けてもらったことがあるんだ。それで少しお話させてもらつて。」

言葉に詰まる荒垣を遥がカバーする。

「ああ…まあ、そんな感じだ。」

「へえ…なんか意外かも…」

遥が濡れた服などをタオルで拭く。

「あれ、遥くんじゃん。どうしたの？」

「満嶋…だったか。」

ゆかりと真田がラウンジに降りてきた。

「こんにちは、岳羽さん、真田先輩。湊くんたちのお見舞いに。」

「えっ？それ、どこから聞いたの？」

「湊くんからメールもらつたんだ、ほら。」

遥が携帯を開き、メールの文面を見せる。

「あ、そうだ。はいコレ、湊くんたちに。」

一応、荒垣に見舞いの品のスポーツドリンクと果物を渡す。

「わざわざ悪かつたな。」

「いえいえ。」

「丁度いい。食事も出来たところだ、会つてくか？」

「いいんですか？」



遥は少し驚いた。

「といつても、多分まだ寝てるけどな。それに、アイギスのヤツが鍵勝手に開けて…」

「彼女はあの二人にもものすごく執着してますもんね。風邪なんか引いたって聞いたら、ドア壊してでも湊くんたちの部屋に入りそうだし。」

事実、そうだった。朝になっても起きてこない二人を心配したアイギスが、部屋の鍵を壊してでも部屋に入ろうとしたのだ。その前にやめさせ、スペアキーで開けて部屋には入ったが。

「じゃ、付いて来い。」

「あ、じゃあ私も…」

「じゃ、後から果物むいて持ってきてくれ。」

「分かりました！」

ゆかりと風花がキッチンに向かおうとする。荒垣は素早く風花の手を止めた。

「山岸。お前は替えのタオルだ。」

「えっ、あ、ハイ！」

風花がキッチンではなく、奥の裏口に向かう。

荒垣はカウンターキッチンに置いてあったお粥の乗ったお盆を持ち、階段の方に向かった。

遥も後に続く。

「やっぱり、寝てやがるな…」

湊の部屋に入ると、そこには少々荒い息をしながら眠る湊の姿。

アイギスは彩音の方に付きつきりらしい。

「いいよ。顔見れば満足だから。」

遥が口調をいつものものに戻す。先ほどは皆がいたから、敬語にしていただけのことだ。

それと同時に、後ろにペルソナ、ケイロンが現れる。召喚器を使用

した様子はない。

「最初から見えないように出していた。このケイロンがいれば、他人の感覚の操作なんてお手の物だからね。それに監視カメラなんてものも役に立たないよ。」

遥のペルソナ、ケイロンはサーチのジャミングだけではなく、他人の感覚をも操作できるらしい。相手の目を欺くことにかけては、このペルソナは他の追随を許さないように感じる。

「それに、山岸さんはペルソナを出していない状態でも感覚が鋭くなってるから。」

「…」

荒垣は無言でちらりとペルソナを見やると、机の上にお盆を置き、湊の頭に乗っているタオルをまた濡らして元に戻した。

遥は湊の傍に寄ると、寝ている湊の頬をつついてみる。雨で冷えた指先には、熱で体温が上昇している湊は余計熱く感じた。

「まったく…こいつらは無理しすぎなんだ。それに、お前も。」  
荒垣の言ったことに、正直驚く。

「すぐ遥も言い返す。」

「そつちこそ。」

そこで、タイミングよくドアが開く。ゆかりと風花が来たようだ。

遥は荒垣にも分からないようにペルソナを見えなくして、手を離す。そして湊を見下ろした。

その後、遥は彩音の部屋には寄らずに帰ることにした。

女の子の部屋にそう簡単に入っていいものではないことは、勿論承知しているからだ。

「ありがとね、お見舞い。」

「いや、こつちこそ。早く良くなるといいね。」

遥はそう言って、軽く手を振って寮を後にした。

9月19日 くお見舞いく (後書き)

いかがでしたでしょうか。

…何か、何書きたいんだか分からなくなったような…！  
グダグダですね。すみません。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

9月21日 く台風一過く (前書き)

…更新が遅くなり申し訳ありませんでした！

ここ数日、ネットに繋げないという事態が発生してまして… (汗)  
これからはまた前のような更新スピードで参ります！

では、どうぞ。

9月21日　〜台風一過〜

「おはようございます。」

ベルベットルームの夢から覚めた彩音は、まだ自分が夢の中にいるのかと思いい目をこする。

でなくては目の前にアイギスがいるわけがない。

だが、目をこすってみても、目の前には金髪碧眼の美少女がいて。

「ちよ、ちよっと待ったあ！何で！？何でここにいんの！？」

勢いよく起き上がり、目の前のアイギスを凝視する。

「彩音さんと湊さんが風邪で倒れてから、ずっとわたしが傍にいたであります。もっとも、場所を交代する際には他の方にお願いしましたが。」

「それで、またピッキングを…」

「はい。湊さんの部屋に入る際は、ゆかりさんにもものすごい勢いで止められましたので、仕方なくスペアキーを使っただであります。すぐに彩音に疲労感が襲ってきた。もう一度布団に入ってしまったえば寝れる。そんな気がした。」

「では早速、健康状態をチェックします。」

彩音が「は？」と言っている間にアイギスが自分の手を彩音の額に当てた。次に彩音の手を取り、脈拍を測る。

「体温、脈拍、呼吸数、いずれも異常無し。風邪の治癒を確認しました。生還、おめでとございます。」

「生還、って…」

使い方が間違っている。だがアイギスはそれに構わず、すっと立ち上がった。

「次は湊さんの容態を確認しなければ。では。」

「ちよっと待って。」

言わないうちに、アイギスはすたすたと彩音の部屋を出て行った。

パタン、という音を聞いて、彩音ははあ…と肩を落とす。

自分ならまだいい。アイギスは女性型なので、一応同性ということになるのだから。だが、湊は…。

「…あー、もう知らないっつと…」

彩音はアイギスをとめることを早くも諦めた。

携帯を確認し、2日間眠っていたのかと彩音は驚愕した。ベルベツトルームに行くと、かなりの間眠っている気がするのは気のせいだろうか。

ともかく、彩音は着替え、ずっと閉めっぱなしだったカーテンを開けてみる。

外は快晴。あの台風のときの雲が嘘のように、澄み切った青空が広がっている。

外の空気を吸いに、散歩にでも行こうか。もう身体のたるさは完全がない。

彩音はそう思い、部屋を出た。

ラウンジに降りてみると、寮のメンバーのほぼ全員が集合していた。

「あ、おはよう。風邪治ったんだね。」

まず話しかけてきたのはゆかり。それにつられ、周りの視線も彩音に集まる。

「バカは風邪引かないって言うしな。つまり、風邪を引いたオマエは利口ってワケだ。」

「じゃあ風邪引かなかった順平はバカなんじゃない？どうせ、昨日か一昨日に病院行ってたんじゃないの？」

「そ、それだったらゆかりッチとか先輩とか天田とかも風邪引いてたっっておかしくないはずじゃ…！」

「ふふ、冗談冗談！」

くすくすと笑う彩音に、順平は脱力した。

「でも、ありがとね？心配してくれたんでしょ？」

「あ…ああ、まあな。」

につこり笑った彩音に、順平は少しだけ顔を赤くして目を逸らす。

「調子はもう大丈夫なのか？」

「あ、はい。大丈夫です！」

「そうか。ならタルタロスのアタックも再開できるな。だが、あまり無理をするなよ？」

美鶴はちらりと、近くでグローブの調整をしている真田に目を向けた。

「無理をするのは、明彦だけで充分だからな。」

「な、なに!？」

真田は何か言おうとするが、何も言葉が出てこないようだった。

「…おはよ、姉貴。」

「あ、湊! 具合、平気？」

「…そつちこそ。」

後ろから湊とアイギスが降りてきた。湊も、あの健康状態チエックをアイギスにやられたのだろうと、容易に想像できる。

「もしかして、湊も外の空気吸いに行こうとか考えてる？」

「…当たり前だ。」

「じゃ、一緒に散歩行こうか？」

湊は黙って非難の視線を彩音に向ける。

「よしよし、じゃ行こー！」

しかし、彩音はそれを完璧にスルーして湊を引っ張っていつてしまった。

「やっぱり仲いいな、あの二人…」

「姉が弟を無理やり引っ張ってるようにしか見えないがな…」

確かにそう見えなくもない。だが、渋々ながらも姉彩音に付き合う弟湊も、この年頃なら珍しいかもしれない。

「まあ、とりあえず、元気になったってことでいいじゃないスか！」

「…フ、そうだな。」

残るシャドウはあと3体。それまでの、ちょっとした休息。

…まだ、この時はまだ、この先に待ち受ける悲しき未来のことなど、  
知らないのだから…。



9月21日　〜台風一過〜（後書き）

いかがでしたでしょうか？

…あーっ！なんかグダグダになった気がすごいするーっ！

何が書きたかったのか良く分からなくなる…

…精進します。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

9月24日 く文化祭後片付けく(前書き)

映画祭りも書くことかと思っただのですが…やっぱり、どうしても短くなっちゃうというところで断念。

そんなわけで、後片付けです。

では、どうぞ。

## 9月24日 く文化祭後片付け

「えー、本日の放課後は、授業無し。って言っても、残念ながら遊べまっせーん。文化祭の展示とか飾りの片付けをしてちょうだい。」

「…うえ、片付けか…」

彩音が嫌そうな顔をする。当たり前といえば当たり前だ。準備で遅くなって雨に濡れて、風邪を引いたのだ。それですぐ片付けとは。

「…姉貴、気持ちは分かるけどさ…。理科室だって。」

「…うー、分かった…」

湊に励まされ（なんとなく珍しい光景だ）彩音は渋々といった感じで立ち上がり、他の片付けメンバーと共に理科室へと向かった。

理科室の片付けメンバーの中には、順平やゆかり、アイギスもいる。更に宮本や、友近とも一緒だった。

理科室は写真部の展示が置いてある教室だ。壁や台には、写真部が撮った色々な写真が所狭しと置かれている。

「それじゃ、パパツとやつちゃお。えーと…写真外す人と、外した写真束ねる人で二人一組って感じでやるっか。」

「あいよー。」

「まあいいや、とりあえず頑張ろー」

「姉貴、全然気合入ってないな…」

「いいじゃん、別に。じゃ、私と湊はあっちから…」

とりあえず、早速みんなで片付けに取り掛かった。

「こんなに撮ったのに、発表できなくて写真部もかわいそうだね…」  
ゆかりが手早く写真をまとめながら呟いた。

「…あ、これ、夏の合宿の写真じゃない？ほら、彩音と湊くん映ってる。」

「ああ…八十稲羽の。いいところだったよ。田舎だけどさ、旅館はすごかったし…」

「いいなー、しかも温泉だっただんでしょ？」

「わたしも入りたかったであります。」

アイギスや順平もこちらに近づいてきた。

「オレらだって、もうすぐ行くじゃん？」

「…修学旅行のこと？あれ11月とかだし…気が早いっつーの。しかも京都なんて…」

「ま、定番だよな。寺巡りとかホント、カンベンしてほしいぜ。」  
「だよなー。」

友近と宮本も、話に入ってきた。

今までこの2人には、道具を持ってきてもらっていた。その証拠に、2人の腕には紐やらガムテープやらがある。

「そういうワケだから岳羽さん、京都は一緒に回らない？」

「何が”だよなー”なの…てか、釘抜きあつた？」

友近の言葉に、ゆかりは少し呆れる。

「あつたあつた。宮本が根こそぎ持ってきた。」

「何本でもあるからな。」

「…そんなに人数いないし、要らないと思う。」

宮本の持っているくぎ抜きを見て、湊も呆れる。

「1、2本でいいのに…他のクラスの人も使うんじゃない？」

「あ、そ、そか…返してくる！」

「いや、まあ…言われたらでいいと思うけど。」

「そ、そか…じゃあ返さない！」

少し動揺しているっぽい宮本を見て、友近がにやりと笑う。

「お前って、女の子の前だと…っていうか岳羽さんの前だと…」

「な、なんだよ。」

「べつつにー。へー、そっかそっか。」

宮本が何度も聞き返すが、友近はにやにや笑ったままで何も答えな  
い。

「…つか、順平はプチプチ係だろ？確保してきた？」

友近は順平に話を振る

「プチプチ…あ、梱包材か。あー…」

順平は答えづらそうに頭を掻いたあと、友近に笑顔で向き直った。

「よし、友近にバトンタッチだ。資材置き場、分かるだろ？」

「いやいや、分かるけど。つか今、行って来たけど。」

「行って来いよー。お前が忘れたんだろー？」

「…順平、責任転嫁すんな。自分の仕事だろうが。」

湊が注意するが、順平はそんなことお構いなしだ。

「え、いいの？オレが行っちゃって。あそこ、酒池肉林よ？オマエ好みのお姉さんが待ってるよ？」

「え、ま、マジ！？よーし行っちゃうぞー。ってバカかお前。ナニ資材置き場だ。」

軽くコントに発展している。

「あーもう、これじゃ終わんないよ？口動かす人は、手も動かしてくださいーい！さっきから彩音と私だけじゃん、ちゃんとやってんの！」

「ホントだよー！」

ゆかりと彩音が軽くキレた。それを見た順平は、「プチ切れ侍…」と呟くが、ゆかりには聞こえていたようだ。

「ったく…バカじゃないの？」

「てか、バカじゃないの？」

必殺、ゆかりと友近の連携攻撃。

「あらやだ、なにこのデジャブ。ハア、しょうがねー。後で資材置き場行ってくる…」

ようやく、男子たちも仕事に戻り始めたところで、ノックの音がする。

「すみませーん、失礼します。ここに釘抜き、余ってないですかー？」

入ってきたのは遥。

「…釘抜きならそこに大量に。」

湊が宮本を指差した。

「あ、本当だ。2本くらいでいいから、貸してもらえる？」

「お、おう。」

宮本から釘抜きを受け取った遙は、そのまま理科室を出ようとしたが、友近がタイミングよく口を開いた。元々計画的だったのかもしれない。

「てかさー、残念だよな。文化祭流れてさー。色々、企画あったじやん。女装コンテストとかさ…」

女装、という単語に遙が少し顔を引き攣らせる。

「あれ、飛び入りでいいって言うから参加するつもりだったんだけどなー。」

「えっ、オマエが女装！？ねーわー…。…いや、ねーわー…」

「…さっきの仕返し？」

「お前、想像したろ、今。超絶カワイかったろ。」

「その自信、どっから来んだ…」

順平だけでなく、他全員から友近はかわいそうな視線を送られている。が、友近は気にしない。

「お前の女装よりは絶対イケてると思うけどな。お前はヤバイ。」

「…何かそー言われつとム力つくな。オレは絶対、宮本よりカワイイよ？」

「俺？いや、俺はそんなシユミ…」

「いいのか、宮本？お前は”負けてる”って言われてんだぞ？」

友近が宮本を挑発する。案の定、宮本は簡単に乗った。

「なっ…決まっつてんだろーが、俺が一番カワイイよ！ダントツだったーんだよ！」

「…ねえ宮本くん、そんなトコで一番になっただって何もいいことないよ…？」

彩音の冷静な意見も、宮本には聞こえていない。

「女装なら、わたしも負けてないであります。」

「そりゃ、アイギスさんは…」

「わたしは女性型ですので、服装もやはり女性用のものが…」

「わーわー、もういいって！」

機械だとバレそうなアイギスの言葉に、慌てて順平が待ったをかける。

「ではお聞きします。湊さんも一応男性ですので、ここは彩音さんに。どう思いますか？誰の女装が一番”超絶力ワイイ”ですか？」

「えっ……」

彩音は一瞬びつくりした後、部屋の中にいる男性をぐるりと見回す。そこで、彩音はすっかり出るタイミングを逃してしまっただらしい遙を見た。

「…遙くんじゃない？」

「えっ？…ええええっ！？」

「あ…なるほど、盲点だった…」

「そういえば、確かにダークホース的な…」

みんなが一斉に遙を見る。

遙はといえば、全員の顔を見渡したあと、顔を赤くさせた。

「ちよっ、冗談じゃないってっ！僕は！絶対にそんなことしないからっ…！」

照れではなく、怒りで顔が赤くなっていたのだった。

「絶対、似合わないからッ！」

遙はそれだけ言うと、ガラガラピシャン！と乱暴ともとれる手つきでドアを閉め、教室を出て行ってしまった。

「…もう、へんなこと言うから遙くん怒ってたじゃん！」

「…ごめん。」

とりあえず宮本が謝る。

「外見で言ったら、ゆかりッチも”超絶力ワイイ”けどな…」

「…何が言いたいワケ？」

「…ナンデモゴザイマセン。」

こちらを睨んで言ったゆかりに、順平はただ口を閉ざすしかなかった。しかし。

「つまり、ゆかりさんの性格は可愛くないということでもあります。」  
「解説せんでいい!」

アイギスが余計な一言。

「アイちゃん、流すことも大切よ? そうしないと、ゆかりツチがステージ目でにらんでく…」

順平は最後まで言い切れなかった。

ゆかりが順平の首を、ぎりぎり締め上げる。

「ほらね!? ね? やめて、締め上げないで!! み、宮本! 何か言  
つてやって!!」

「こ、根性だ!」

「何が!？」

順平は宮本に助けを求めるが、宮本は的外れな答えを返したただけだ  
った。

彩音と湊は揃って溜め息を吐く。もう1人の元凶であるアイギスは  
ただ見ているだけ。

「そ、そういえば岳羽さん、メイド流れちゃってもつたないね。」

「へっ!？」

友近のフォローに、順平を締め上げていたゆかりの手が緩む。その  
際に、順平は拘束から抜け出した。

「あー… やっぱ知ってたんだ、その話。全ツ然、流れていいし…」

「残念がってるヤツも多いよー。な? 宮本。」

「あ、そ、そうなのか? つか、何だ? メイドって。」

「ピュア発見…!」

順平は宮本を信じられないものを見るような目で見ていた。

「まー。アレよね。男… つか順平あたりのロマンよね。」

「順平…」

順平の目の前の人物から、負のオーラが出てくるのを感じる…。

「いやいや、何その顔。知ってたけど、みたいな顔。」

「順平さん…」

「うっそ、アイギスまで!？」



アイギスまで便乗し、そして…

「…順平…やっぱりそんな…」

「うわ、うわー！何だよ、何なんだよこのイジメはー！」

「…順平。」

「お前もかー！！」

お約束の通り、彩音と湊も便乗した。

こうして、話しながらもなんとか片付けを終えた…。

9月24日 く文化祭後片付けく（後書き）

いかがでしたでしょうか？

例の如く、後で男性主人公編見て加筆修正します！  
今テスト期間中なのです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

9月27日　く宣告く（前書き）

シリアス突入…みたいな感じで。短いです。  
もうこのあとすぐ満月戦、かも…

では、どうぞ。

## 9月27日　く宣告く

満月シャドウ戦まで残り一週間。

残り3体、ということとか、士気は高まっている。タルタロスにも、二人が復活してからちよくちよく行っていた。

しかし…この日。

荒垣が、ラウンジに降りてくる。そこには、1人でブラックコーヒーを飲む天田の姿があった。

荒垣は天田にちらりと目をやったが、別に話しかけることはしない。この後はタルタロスへと出撃することになっている。準備などで、他のメンバーは皆部屋に上がっているようだ。

「…荒垣さん。」

キッチンの方に行こうとしていた荒垣を、天田が呼び止める。荒垣は立ち止まってゆっくり振り返る。天田は荒垣の方を向いていない。

「少しお話があります。」

荒垣は無言で、天田の傍に寄った。

天田は最近、どこか影がある。先ほども2階のラウンジで、ゆかり達が話していた。

勿論、荒垣はそれに感づいている。そして、その原因が自分にあることも。

「一週間後、作戦日ですよね。」

荒垣は何も言わない。ただ無言を貫き通している。

そして、天田の声もまた、淡々としていた。

「その日の影時間：ポートアイランド駅の、路地裏に来てください。」

その場所が表すものは、1つ。

復讐、そして断罪。

荒垣は勿論気付いていた。その日が、自らが罪を犯した日だと。

「作戦には行かないで…来てください。待ってますから。」

沈黙が、場を支配した。空気はいつの間にか、張り詰めている。

「…分かった。」

荒垣はそう短く答えた。

拒絶など、するつもりはない。

話は終わると、すぐ荒垣は自室に戻ってしまった。

天田は話の間、ずっとコーヒーマシンの水面に映る、自分の顔を見ていた。

正確には、自分の目を。

その目は、天田自身でも分かるほどに 酷く濁っている。そして、暗い光が宿っている。

復讐の光。憎悪の光。

ふと、天田は内心、自嘲の笑みを浮かべた。

自分のペルソナのアルカナは、風花によれば「正義」らしい。

だが、ペルソナは「ネメシス」。復讐の女神。本来その復讐は、”

人間への天罰”のような解釈であるものの、これほど自分に似合ったペルソナはいない。

皮肉だ。分類上ではあるが”正義”を持つペルソナが、復讐などと

本当は、頭では分かっている。それは、してはいけないことなのだ。

絶対に。

でも、やらずにはいられない。だからこそ。

そこまで考えて、天田はふと神社で会った人物を思い出した。数日前、この寮に来た人物。

自分のこれから取る行動を、恐らく分かっていたのに。咎めるでもなく、許すでもなく、助けるでもなく、何も干渉しないときっぱり言い切った彼。

彼は、大切な者がいない…否、天田の言う”大切な者”である存在がない。そう言った。

今更ながら、思った。彼なら、どうしていたのだろうと。この立場に置かれたら、彼はどのようにしたのだろうと。だがすぐ、天田はこの考えを頭から追い払った。そんなことを考えても仕方が無い。

天田は残ったコーヒーを飲み干すと、席を立った。

コーヒ―は、やけに苦い気がした。

今日も無事、タルタロスの探索を終えた。

タルタロスからの帰り道。彩音と湊は、最後尾を歩いていた。

そんな二人だが、ふと足を止める。慣れた気配が、後ろにあった。

「こんばんは。」

二人は振り返った。

「珍しいね、部屋の外で会うなんて。」

彩音は軽い感じで返す。

分かっている。彼が何を言いに来たのか。

「言わなくても分かっているかな。…あと1週間で、満月だよ。」

「うん、ありがと。」

彩音はにこりと笑って見せた。

「…今回も大丈夫だといいいね。だけど、未来というのは何が起こるか分からない…だから、くれぐれも気をつけてね。」

「…大丈夫だよ。今回も絶対、成功させるから。」

湊が言った。その口調は、静かながら自信に満ちている気がした。

「いつも、君たちを見てるよ。…また、会おうよ。」

「…当たり前。」

二人が揃えて言う。それに、ファルロスは微笑んだ。

そして、ファルロスはいつものように、闇に溶けるようにして消えた。

9月27日　　〳宣告〳（後書き）

いかがでしたでしょうか？

少し天田君の心情も入れてみました。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

9月30日 後は任せたく（前書き）

…すみません。

満月戦ではなく、荒垣COMMUMAXのイベントになります。

ちょっと甘め？

では、どうぞ。



9月30日　　後は任せたく

夜。2階の休憩所で、何やら彩音が唸っているのを湊は発見した。

「…何してんの。」

「…あ！湊、ちょうど良いところに！」

彩音は、湊を見た途端ぱつと目を輝かせた。

湊はとりあえず、彩音の向かいに座る。

「探し物、してるんだけど…見つからなくて。湊も探してくれない？」

「…何を探してる？」

「懐中時計。」

そこで湊は、ん？と眉をひそめた。

「…いつそんなもの、買ったんだ？」

「えっと、そうじゃないの！荒垣先輩がね…無くしたんだって。それで、何か寂しそうだったから…」

「…ああ、そういうこと。」

湊は納得する。

「で？どんなやつ？」

「古いやつだって。」

「…どこでなくしたのか聞いた？」

「ううん。」

「…で、どこ探した？」

「とりあえず学校…と、商店街は一通り歩いてみた。あと寮の中でしょ、それと長鳴神社。」

「…」

湊は一旦黙った。

聞いていれば、どんなものかも詳しく聞いていない。情報が圧倒的に少なすぎる。

それに、どこかで落としたのならもう誰かが拾っている可能性だっ

て高い。

「…無鉄砲…」

「何か言った？」

「…いや、何にも…」

一瞬、彩音の後ろに黒いオーラが見えた。

「とにかく、どこ探しても無くって。どこか心当たりない？」

「…交番。」

は？と彩音が驚く。

「交番に届けられていないかは、黒沢さんに確認したのか？」

「…ああ〜っ！それだ！」

「…やれやれ…」

今の今まで思いつかなかつたらしい。

「よし、早速訊きに行くよ！」

「えっ…」

返事をするより早く、彩音は湊を引っ張って、すぐ走り出した。

「…探し物？」

「はい。」

辰巳東交番。早速彩音と（引っ張られてきた）湊は黒沢巡査に会っていた。

「それこそ警察の専門分野じゃないか。で、何を探しているんだ？」

「…古い懐中時計です。」

湊が答えると、黒沢巡査は驚いたようだ。

「…お前らは幸運のツキの下に生まれたな。ほら、これだろ？」

黒沢巡査は近くの棚から、古い懐中時計を取り出す。

「あ…！」

「…先輩のものかもしれない。」

彩音は時計を受け取る。

「あ、ありがとうございますっ！」

彩音はすぐ礼をすると、来た時と同じように湊の手を引っ張ってすぐ交番を後にした。

「…やれやれ、騒がしいもんだ…。弟の方も大変だな…」

黒沢巡査は彩音の背を見送って、苦笑した。

帰ってきたときには、タイミングがよくラウンジには荒垣が1人だけ。

「先輩っ！」

彩音はすぐさま荒垣の方に向かっていった。漸く解放された湊は、溜め息を1つついて階段の方に向かう。

荒垣がそんな湊をちらっと見やった。湊は視線に気付くと、軽く苦笑して2階に上がっていく。

「これ…！」

「…！それ…。」

すぐ彩音が荒垣に懐中時計を見せる。荒垣は驚きに目を見開いた。

「これ、先輩のですか？」

「…ああ。サンキュ…」

荒垣は彩音から時計を受け取ると、まじまじと時計を見る。

「…彩音。ちよつと付き合え。」

「え？は、はい！」

荒垣が真面目な顔で言う。彩音はすぐ、頷いた。

荒垣に連れられてやってきた場所は長鳴神社。もう夜も遅い時間だからか、人はいない。

辺りはとても静かだ。

神社に併設された公園の中のベンチに、2人は座っていた。

「これ、どこにあった？」

「交番に届けられていたのを、引き取ってきました。」

「そうか…」

荒垣は懐中時計に目を落とす。

「見つからなくても、それはそれでいいと思ったが…他でもねえ”お前”が、持ってきて来るなんてな。」

「そんな、交番だって気付かせてくれたのは湊だったし…」

「…だからさつき、お前に連れまわされてたのか…」

荒垣は先ほどの湊を思い出して苦笑した。

しかし、その顔はどこか辛そうだ。

「代わりっちゃん何だが、これをやる。…渡そうかどうか、迷ってた。」

「

彩音は荒垣から腕時計を受け取った。細い革の、シンプルな腕時計。

「お前に、似合うかと思ってる…」

「！」

顔が少し赤くなっているのを、彩音は感じた。

「あ、ありがとうございます…」

「ああ…」

荒垣はうつむいた。恥ずかしいらしい。

少し沈黙が流れた。

ようやく顔も普通に帰ってきた。荒垣はまだうつむいたままだ。

「…アキを…頼む。」

荒垣が、ぼつりと言った。

「…あいつ、馬鹿だから。」

荒垣が顔を上げた。

「最初の喧嘩の話、覚えてっか？」

喧嘩の話とは、まだ荒垣が寮に帰ってきて間もない頃に、はがくれでした話だろう。

黙って、彩音は頷いた。

「あれな…俺が万引きしたんだ。おもちゃ屋で、女の人形ひとつ。

アキの妹が、友達できなかったから…喜ぶんじゃねーかって、それやった。したら、アキがそれを見つけて、俺をしこたま殴ってるな…

泣きながら。」

彩音には、その情景が想像出来た。

「んで一緒に、返しに行った…おもちゃ屋に、頭下げて。おもちゃ屋のオヤジに、アイツまで殴られて…あん頃から、変わってねーんだ。あいつは。」

彩音は話を黙って聞いている。

「馬鹿で、まっすぐで、誇り高くて、優しくて、泣き虫で…ガキだ。…だから、誰かがついててやんねーと。」

「…荒垣、先輩は？」

彩音が訊くと、荒垣は少し困ったような顔をした。

「…そりゃあ、俺だっついてる。」

また荒垣は少し俯いていたが、すぐ顔を上げた。

「俺あな、お前がいるから何の心配もしていない。…後を、頼むな。」

「…っ！」

荒垣は、優しい笑みを浮かべていた。

だが、彩音は怖かった。なんだから、このまま荒垣が、消えてしまいたい。そう。

「！」

思わず、彩音は荒垣にぎゅっと抱きついた。

荒垣が驚いた顔をしたのが、気配で分かる。

彩音は何も言わなかった。泣きそうになるのを、何とかこらえる。

荒垣もまた、無言だった。手を彩音の背中に回す。

その手は、温かった。

しばらく、2人はそのまま過ごした。

9月30日 後は任せたく（後書き）

いかがでしたでしょうか。

書いててなんかものすごく恥ずかしくなってきたしまいました…。  
もうとにかく切ないやら何やらで…。

この後はご想像にお任せします。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

10月4日 〃?番 運命&amp;mp;?番 剛毅〃(前書き)

筆が進んできたのでそのまま次に更新です。  
満月シャドウ戦です。

では、どうぞ。

また今月も、運命の日がやってきた。

寮の作戦室には、天田、荒垣以外の全員が集合している。

風花はもうルキアで、シャドウの探索に当たっていた。

「…湊？どうかした？」

彩音が隣の湊を見た。湊は何やら、頭を抱えている。

「…何か、頭痛がする…。」

「まさか、風邪？大丈夫？」

「…大丈夫。さっき頭痛薬も飲んだ…。」

湊は今日1日、謎の頭痛に悩まされていた。影時間に入ってから  
の頭痛は、特に酷い。

特に、右目の奥辺りが強く痛む。

何か嫌なことが起きる前触れでなければいいが…と湊は考えていた。

『目標を発見しました。これは…蔵戸台の駅前広場です！』

今まで敵のサーチをしていた風花からの報告。

「これで10体目か…12体まであと少しだね。1体ずつ慎重に  
くとしよう。」

「…って、1体ずつとは限らないですよ。ハハ、ウソですけどね。」

『…すごい、ゆかりちゃん。反応、2つあります！』

笑っていたゆかりの顔が驚きに変わる。

「え、マジ？当たんなくていい、そんなの…」

ゆかりはあからさまに苦い顔をした。

「…シンジはどうした？」

真田が聞いた。真田は、さつきからちらちらと扉の方を見ていた。

『荒垣先輩なら、後から合流するって、さつき連絡が。理由は聞い  
てませんけど…』

「…後から？相変わらず、勝手な奴だな…」





マジ困るんだけど…」

「なんだか、私たちを待つてるみたい…」

ゆかりと風花はシャドウを見て嫌そうに顔をゆがめている。

「…ところで、天田はどうした？」

「…あ、なんか、部屋に居なかつたんすよ。」

順平が天田の部屋に行ったところ、そこはもぬけの殻だった。鞆はあつたから、帰宅してはいるのだろうが。

「シンジの奴、遅いな…」

真田は少しイライラしているようだ。

「あの、急いだ方がいいと思います。もうすぐ、動き出しそうな気配です。」

「仕方ない。このメンバーだけで当たるか…」

「…はい。」

彩音が返事をし、メンバーは駅前へと向かうことにした。

目の前には、花束の上に立った女のような形のシャドウと、機械仕

掛けの4本脚の動物のような形のシャドウがいる。

『バックアップ開始します！気をつけてくださいっ！』

皆が武器を構える。

戦闘開始。

女の形のシャドウ ストレングスが持っていた花を高く掲げる。

すると、機械仕掛けのシャドウ フォーチュンの姿が透明になって

見えた。

『“運命”タイプの反応が消失！“剛毅”のシャドウが、何かした

ようです！』

「厄介な…」

真田が舌打ちしたのが聞こえた。

『今は攻撃できませんね…まずは“剛毅”タイプから倒してください』

い！』

「オツケー！行くよ、オオクニヌシ！マハタルカジャ！」

「ポリデュークス、ラクンダ！」

こちらの攻撃力を上げ、敵の防御力を下げる。

「おっし、続けて行くぜ！ヘルメス！」

「…コウモクテン。」

続いて順平と湊による物理攻撃。

だがやはりシャドウも強くなってきている。それくらいではびくともしない。

すると、何やらフォーチュンの方が変な動きをし始めた。

「あ…みんな、後ろに下がって！」

彩音の声で、湊たちはすぐバックステップで距離を取った。続いて攻撃をしようとしていた女性陣も、すばやく後ろに下がる。

落ちてきたのは、赤い絨毯と…大きな丸い装置。

その真ん中にフォーチュンが2本足で立って乗ると、それが回り始めた。

『な、何コレ…ルーレット！？』

カジノには必ずあるだろう、ルーレットが落ちてきた。そこには青と赤の場所があり、それぞれ何か書いてある。

「…」

彩音はじつとルーレットを見つめた。ちなみにストレングスの方は、ほらどうしたはやく止めてみるとばかりに特別課外活動部メンバーを見ている。

「…ストップ！」

「バカ！姉貴、乗るな！」

湊が叫ぶ。こんな怪しいもの、下手すれば何が起こるかわからない。カチカチカチ…と音を立てて、ルーレットが止まった。ルーレットの目は、青で「防御力UP」。

「えっ！？順平、ラクカジャ使った！？」

「やってねえよ！」

全員が、まるで防御力アップラクカジャの魔法をかけられたように感じた。

『分かりました。あのルーレット、止まった目によって色々な状態を引き起こすようです！”赤”の目に止まるとハズレみたい……こっちに不利な事が起きるようです。』

言い終わらないうちに、ストレンジスがこちらに向かってくる。

不気味な笑い声を上げながら、ストレンジスは持っていた花を振り下ろした。

その先は湊。

「ぐっ……!?!」

とつさに剣で防いだものの、それは重い一撃だった。

しかし、思ったほどダメージはない。

「……姉貴、さつき青止めたよな……」

「よっし！敵がわざわざラクカジャかけてくれたんだし、このまま攻めるよーっ！」

先ほど、皆が感じたとおりに防御力は上げられていたようだ。

何も知らずにルーレットを止め、それで味方に有利なことを引き起こさせるとは、彩音はなかなかの運の持ち主のようだ。

「ペンテシレア！」

「パラディオン！」

「イオ！」

ペンテシレアがブフーラを、アイギスがデッドエンドを、ゆかりがガルーラを放つ。

しかし、それでもストレンジスは涼しい顔。

「やっぱり防御力、体力共に上がっているようですね。」

アイギスが冷静に考察する。

「……あ、まただ！」

また影が出来る。ルーレット盤が召喚されたようだ。

今度は先ほどのものとは違い、それぞれの状態異常を示す絵柄だ。また彩音はじつと見つめる。

「……!」

ふとそこで、湊はあることを思いつき、にやりと口端を吊り上げた。  
「…姉貴、”恐怖”に止めてみてくれ。」  
「…！そういうことね、オツケー。一撃で終わらせてあげる。」  
彩音はじつと見つめて、「ストップ！」とまた言った。

カチカチカチ…

止まったのは、湊が依頼したとおりの”恐怖”。しかも青。  
ルーレット盤が片付けられる時、敵はやはり、恐怖状態に陥っていた。こちらに攻撃を仕掛けてこない。

「サンキュ、姉貴。ペルソナチェンジ。」

湊はペルソナを、「コウモクテン”から”モト”に変える。

「”亡者の嘆き”」

湊の頭上に、大きな棺型のペルソナが現れる。

その途端、ストレンクスは断末魔の叫びを上げて霧散した。

亡者の嘆き。恐怖状態の敵を、必ず即死させることができる魔法だ。

『あ……”運命”タイプの反応が再び出現！え……つまり……今なら攻撃が当たります！』

ストレンクスが消滅したことにより、フォーチュンの方にも攻撃が届く。

それに慌てたのか、またフォーチュンはルーレットを召喚してくる。

『あ……なんかズルイですよ、これ……』

風花がルーレットの盤を見て言う。

それは、全体の8割ほどが赤で、残りの2割が青といった割合のルーレット。

「何コレ、インチキルーレットじゃん！」

ゆかりも憤慨する。しかし、彩音はまたじつと見つめた後にまた「ストップ！」と言った。

カチカチカチ…

今度止まった場所は…ギリギリで青。

「彩音ツチ、さすがー!!!」

敵にダメージ。

さすがにコレで青を止められるとは予想外だったのか、相手はダメージにひるむ。

「チャンス!!!」

飛び出したのは真田。渾身のラッシュを、フォーチュンに浴びせる。  
「キャノン!!!」

アイギスが叫ぶと、すぐ真田が後ろに下がる。すぐさま、アイギスの超磁鋼レールガンが装着された右腕から、弾が発射される。

フォーチュンはそれをモロに喰らった。

「せーのッ!!!」

次に攻撃を仕掛けたのが順平。フォーチュンの、横から見ると薄い体に思いつきり剣を振り下ろす。

フォーチュンは耐え切れず、地面に叩きつけられた。

「まだ終わりではないッ!!!」

「行くよ、イオ!!!」

ペンテシレアの氷弾と、イオの疾風が続いてフォーチュンを襲う。

「ラスト!!!」

彩音がオオクニヌシを呼び出す。

「剛殺斬!!!」

最後の斬撃が決まり…フォーチュンはガシャン!と音を立てて地面に倒れ、霧散した。

10月4日 〓?番 運命&amp;mp;?番 剛毅〓(後書き)

いかがでしたでしょうか。

2部構成です。次は…あのシーンです。  
もうこのまま書きゃおうかな？

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

10月4日NO.2 断罪の刻 (前書き)

もういいやつ!!とばかりに3話連続。

3話連続なんて2月以来です…。

では、ごきげん。



10月4日NO.2 断罪の刻

「お疲れ様です。」

シャドウを倒し終わったこともあって、風花がこちらにやってきた。

「ふいー、やっぱ2体で来られると気分的にシンドイな。」

「今回は、ストレガを名乗る2名の妨害はなかったでありますね。」

「ナビ役を押さえてるからね。先回りできなくなったのかも。でも、無事に終わって良かったよね。」

「まあ、ね。」

彩音は、ちらりと隣の湊を見やった。湊は俯いたまま、顔を上げない。

「結局、荒垣先輩、間に合わなかったし。あと、天田君も。」

「…」

真田が荒垣と天田のことを聞いて、黙り込んだ。

「理事長も、喜んでましたよ。問題無いので、先に帰るそうです。」

「…山岸、2人の居場所は？」

「済みません、まだハッキリとは。」

風花が困った顔をする。

普段なら、ペルソナ使い、しかも仲間となればすぐ見つかるのだが。

「ひとまずは、寮に戻ろう。」

「…」

真田は何故か苦い顔をしている。

「…おい、明彦、聞ってるのか？」

「…今日は…10月4日だったな…」

「…そうですね。」

真田がはっとしたように顔を上げる。

「…先に戻っててくれ。俺は2人を探してから戻る。」

そう言うやいなや、真田はすぐ走って行ってしまった。

「あ、ちよっと、先輩…？…どうしたんだろ。」

「明彦…？」

ゆかりと美鶴は不思議そうな顔だ。

「…痛つ…」

「ねえ、まだ痛むの…？」

彩音は湊を心配そうに覗き込む。

「これで作戦、終わりなんだし…今日は早めに休む？」

「…嫌な予感、が…」

そう呟いた後、湊は頭を押さえて完全に黙り込んでしまった。

一方その頃、辰巳ポートアイランドの裏路地…。

天田は、1人でたたずんでいた。まだ、約束の人物は来ない。

手には、槍。今が影時間だということを考えれば、持っているのはおかしくない。

だが、天田はその槍をかなりの力で握っていた。

ふと、足音がした。こちらに向かってくる、早くも遅くも無い足音。

その足音は、天田の後ろ数メートルで、止まった。

「約束通り…来てくれましたね。」

天田は振り返らない。

そして、後ろの荒垣は黙ったままだ。

「なぜ呼んだか…分かりますか？…約束通り、作戦を放ってまで来てる訳だから、分かっているんだよね。」

天田が後ろを振り返る。

「ちょうど2年前の今日…10月4日。あの日…僕の母さんは、ここで死んだんだ。」

まるで罪状を読み上げる裁判官のように。

「死因は交通事故ってなってるけど、あれは事故じゃない。僕は見てた…母さんは、殺されたんだ…」

目が、強い光を帯びる。

「お前が殺したんだッ!!」

荒垣は天田の、憎しみが籠った視線を黙って受け止める。目をそらすようなことは、しない。

「…いい事なんて1コも無かった。生きてくなんて、辛いだけだった…。周りだって、そういう扱いさ。どこに行っても”かわいそう”ってさ。…いる意味がないんだ。」

周りから向けられるのは、同情の目。何処に行っても、両親がいなという事実が付きまとう。

そんな日々が、どんなに苦痛だったか。

「死んじゃおうって思ったときもあるけど…このまま母さんに会うなんて、出来ない。…だから、決めたんだ。お前を見つけるまで、生きてようって!」

そこで一旦、天田は自分を落ち着けた。

「…あの日のこと…」 思い出したくもない”って言うてたる?だから、今日が満月って分かった時、…お前を呼ぼうって決めたんだ。

…今日は、母さんがついでる。」

再び、鋭い視線が荒垣に向けられる。

「自分のしたことを思い出させてやる!僕がお前を殺してやるっ!」

決意したのは、復讐。他でもない、目の前にいる憎き相手を殺すこと。

彼は10歳にも満たない年齢で…それを決意した。そうすることを、選んだのだ。

そして、それに対する荒垣の答えは。

「…分かった。」

寮の作戦室。真田を除いた討伐メンバーが、寮に戻ってきた。幾月の姿は既に無い。

「あれ、まだ誰も戻ってないんだ…」

ゆかりが作戦室を見回す。

「つか、真田サン、様子ヘンだったよな。今日はどうなってんだ？」

「10月4日って、なんかの日だっけか？」

「10月4日…しまった…そうか！」

美鶴がはつとしたように顔を上げ、ぎりりと唇を噛んだ。

「作戦に気を取られすぎて思い至らなかった…今日は…天田の母親の命日だ！」

美鶴は気づかなかった自分を責める。この日ならば…天田や荒垣が居ない理由も説明がつく。

「命日…？」

しかし何のことが分かっていない、湊以外のメンバーは首をかしげる。

「山岸、急いで荒垣と天田の居場所を突き止めてくれ。2人一緒に居る可能性がある。明彦も、多分そう気付いたんだ。」

「わ、分かりました。」

風花はすぐルキアを呼び出した。

「…ポート、アイランド駅…」

「…湊？」

頭痛が酷くなり、ぐったりしていた湊が言った。しかし、彩音は湊が何を言っているか聞き取れなかった。

「あの…どういう事ですか？」

ゆかりが美鶴に訊く。

美鶴は少し黙っていたが、やがて口を開く。

「…天田の母親が命を落としたのは、公には”事故”となっているが…本当は、過去の私たちが原因なんだ。」

「えっ…」

予想だにしない事実には、ゆかりが驚く。

「2年前、イレギュラーで街に出たシャドウを討ちに行った時の事だ。ペルソナを得たばかりの荒垣に、軽い”力の暴走”が起きたんだ。敵を追うのに気を取られていたとは言え、民家が巻き込まれてしまった。運悪く…1人だけ、犠牲者が出てしまった。それが…天田の母親なんだ。」

「そんな…ホントなんスか!？」

「じゃあ…天田君にとって、荒垣先輩は…」

大切な人を奪われた者の、考えの行き着く先。それは、容易に想像できる。

復讐。

「天田は自ら志願して、仲間に加わった。しかし、今にして思えば…」

「犯人を…探すためですね。」

彩音が言葉を引き継いだ。美鶴が頷く。

「見つかりました!辰巳ポートアイランドです!2人一緒です。それと…近くにもう2つ反応が。」

「明彦か?…いや、ストレガ!？」

「待ってください、この反応は…これはストレガ!？それと…えっ、なんで…?」

「マ、マズくねーか!？つてかもう1人は!？」

『私と同じクラスの…満嶋くんです!しかも…これはペルソナの反応!？』

全員が息を呑んだ。湊も、目を大きく見開いている。

「くっ…最悪だ!」

美鶴はすぐ、扉を開けて出て行ってしまった。

「あ、先輩!!追っかけよう!!」

「う、うん!!」

「勿論！湊、行ける？」

「…」

湊は黙ったままだ。よほど、今告げられたことがショックらしい。彼が、ストレガの可能性だってあるわけなのだ。

しかし、湊は痛む頭を押さえて走り出した。

再び、裏路地。

天田は槍を構えていた。そして、荒垣はその刃のすぐ前に、自分で進み出る。

あと少し動かせば、その刃は荒垣の胸に刺さるだろう。

「…やれよ。抵抗はしねえ。」

荒垣の口調は、とても静かだった。

「お前の言った通りだ。俺は…忘れたかった。仲間と離れたのも、クスリで力を抑えたのも、要はその為だった…けど無駄だった…体が忘れねえんだ。」

荒垣は裏路地を見やった。

「気がつけば、ここへ来ちまう。…見たくもねえ場所なのにな。」

天田は唇を噛んだ。

「俺のやった事だ…報いは受けるさ。だが…1つだけ忠告がある。」

「忠告…？」

天田が不思議そうに荒垣を見た。

「こんな俺の命でも、奪えばお前は、俺と同じ重みを背負うことになる。そいつだけは、覚悟してくれ…」

「何だよそれ…命乞いってこと？」

人の命を奪ったという事実。それは、いつまでも天田に付きまとい、そして縛るだろう。

自分のように。

「今は憎しみしか無くて、いつか必ず、背負っちまう。」

「ぶざけるな！！そんなの、背負うもんか！！」

天田には、まだ、それは分からない。  
しかし、そこで。

「…全く、その通りですよ。」

第三者の声、響く。

「…!!!」

荒垣が、すぐその声の方向を向いた。

場所的には、天田の後ろ。その路地から、ストレガのリーダー、タカヤは現れた。

「そんなもの背負うはずがない…必要もない。彼の行いは”復讐”  
なのです。殺されたのだから、殺してもいいはずでしょう?」

「…そ、そうさ。」

「何の用だ。」

荒垣は鋭くタカヤを睨みつけた。

「仲間が1人、欠けてしまったのでね。先回りが、しづらくなりま  
した。しかし、このまま放置する訳にもいきません。」

タカヤはそういって、自身が愛用している銃を取り出した。

「デメエ…」

「恐れる必要はありません。これは、通過点に過ぎない。あなた方  
は、救われるのです…」

「んだとツ!?!」

荒垣は、天田を庇うように前に出る。

「聞いていけば、勝手に乱入して、好き勝手なことほざきやがって  
てめえのそういう所が嫌いなんだよ、僕は。」

また、足音。それは、荒垣や天田の後ろからやってきた。

後ろに自らのペルソナを従えた、少年。  
遙。

遥は、普段の彼からは想像も出来ないような鋭い目と、乱暴な口調で現れた。

「介入なんかしないつもりだった。約束だしな。しかし…てめえという邪魔者が出てきたんなら、仕方がない。邪魔者同士、さっさと消えるぞタカヤ。」

「…遥さん!？」

「お前、何で…!？」

天田と荒垣は予想外の乱入者に驚いている。

「まさか、あなたが出てくるとは。全く…全くの予想外でしたよ。」

「こつちだつてお前が出てくることなんざ予想外だ。お互い様だろ?」

遥は相変わらず、タカヤを睨みつけている。

「でも、あなたにこの状態をなんとか出来るとでも?我々と違い、戦う力など何も持たないあなたに。」

遥は舌打ちをこらえる。

確かにそうだ。自分は言うならば、チドリや風花といった後方支援タイプのペルソナ使い。

「それに、普通ペルソナを持った者ならば誰にでもつくはずの”補正”すらも持たない…」

「何勝手に人の能力喋ってんだ。」

殺気がタカヤにぶつけられた。しかし、タカヤは平然としている。

一方、天田はこの状況についていけないでいた。無関係だと思っていた彼は、実はペルソナ使いで、目の前のこの男とも知り合っていた。その事実には、頭は混乱していた。

荒垣が、遥も庇うようにさらに前に出た。

「ほう、その無力なくせに介入してきたお荷物だけではなく、自分を殺そうとする少年をまかばうとは…。ああ、そうでした…復讐など無くて、どのみち、あなたは死ぬ運命…」

荒垣が黙る。遥は、唇をぎりりと噛み締めた。

「なっ…どういうことだよ…!？」



天田は槍を落としそうになった。

「ペルソナの抑制にクスリを使い出して、もう、随分と経つはずで  
す。あなたは、もう長くない。」

「テキスト言っただけじゃねえ！」

荒垣は怒鳴る。事実を否定するように。

「自分の体の事でしょう…分かっていないはずですよ。」

「…ッ！」

荒垣は言葉に詰まる。

「どういうこと…？勝手に…死んじゃうっていつのか…？僕が何も  
しなくても…勝手に…そんなのアリかよ…！」

天田は一步前に進み出た。荒垣を押しつけて。

「それなら僕は…今まで、何を…」

「死が何によってもたらされるかなど、どうでもいい事でしょう。」

少年…君からは、彼とは別の意味で生きている臭いがしない。…彼  
を殺した後で、自分も死ぬ気だったのでしょう？」

天田が黙り込む。凶星だった。

「天田、お前ッ…」

タカヤの銃が、ガキツと不気味な音を立てた。

「待て、てめえが介入していいことじゃねえ！」

「あなたは黙っていなさい。ただ後ろでこそそしていることしか  
出来ない弱者が。」

「くっ…」

確かに、その通りだ。戦う力など、遥には皆無なのだ。  
だが。

「タイミングが、少し前後するだけの事です。どのみち2人も  
死ぬのですから、私が今、確実に息の根を止めてあげましょう。」

静かに、荒垣に銃口が向けられる。

「フザけるなッ…！」

Bannon!!

天田は今日の前で起きたことに、目を見開いた。荒垣も同様に。

遥が、荒垣の前に飛び出していた。

「う、うそだ…」

思わず、天田は言った。

赤い雫が、地面に落ちる。

遥は、胸に銃弾を受けていた。

「…バカ野郎っ…!!」

荒垣が叫ぶ。

自分をかばうことなど、無かったのに。それなのに、何故。

遥は、ゆっくりと崩れ落ちた。まだ、薄目を開けている。

「遥さんッ!」

天田が大声で名前を呼ぶ。地面に、地溜まりが広がっていく。

遥のペルソナ、ケイロンがゆっくりと、遥の脇に移動する。そして、フツと消えた。

遥は、なんとか荒垣と天田の姿を視界に捉えた。そして。

口角を、ゆっくり吊り上げて見せた。

そして、遥からはゆっくり力が抜け…目が、完全に閉じられた。

「…ッ…!!」

2人は息を呑む。

「ふん…このような最期を取りましたか。せいぜい、力だけは有効利用出来たのですが…まあいいでしょう。彼も所詮、あなた達の側だったということでしょうから。でも、せめて利用させてもらいましょう。まだ辛うじて息はある。」

タカヤは、冷たく遙を見下ろす。

「では…答えてもらいましよう。チドリと似た”情報の使い手”が君らの中に1人居る筈ですね？」

タカヤは、今自分が撃った相手を気にも留めない。その、事実にも「…あなたの方が、情報が速くてね。シヤドウを守ることが出来ないのです。教えて下さい、誰なのか…。言わないと、ほら…彼の命が減っていきますよ。」

タカヤは遙に近づき、その腹を蹴った。

遙は無反応だ。まるで、もう死んでいるかのように。

「あつ…!？」

天田は息を呑んだ。

今日の前で起こったことが、信じられなかった。何故。何故、あの人が。

「…どうしたのです？教えてもらえませんか？教えないと、彼…本当に死んでしまいますよ？」

「そ、そんな奴は…いな…」

タカヤは冷たく、荒垣を見た。

そして、もう1度傷口を蹴ろうと足を振り上げる。

「待って！」

そこで、天田が割って入った。

「ぼ…僕だよ！」

「本当ですか？」

タカヤの目が、天田を捕らえる。

「…ああ、本当だよ。それが出来るから…だから僕は、子供でも戦いに加えてもらったんだ。」

「な…!?!なに言っ…」

最後まで、荒垣は言い切れなかった。

タカヤが、遙の頭に銃口を当てたのだ。

「あなたには、訊いていません。遙が、どうなってもいいのですか？」

タカヤはとても冷たい声で、そう言い放った。

「どうだっていいさ…僕の復讐は…もう終わったんだ。…もう、ここに理由だって、もう、これ以上戦ったって…」

「…なるほど、君は充分に、生きたというわけですね…」

タカヤは、また天田に銃を向ける。

「すばらしい覚悟だ…君を先にしましょう。楽におなりなさい…」

タカヤは、完全に銃口を天田の頭に向けた。

「母さん…」

「…ッ!」

2度目の銃声。

天田は目を閉じていた。しかし、予想していた痛みはいつまで経ってもやってこない。

「あれ…」

天田は恐る恐る目を開けた。

「…えっ!」

目の前には、天田を身を挺して銃口から守る…荒垣の姿があった。

「…ごぼっ!」

口から赤い血を流して、荒垣は倒れた。

「…どうしたというんです。この子供を救って、あなたに何か得が?」

「あ…あ………」

天田は、未だに信じられないといった目で荒垣を見つめる。

自分は、殺そうとしたのに。なんで。

「あらがき、さん…」

「シンジッ!!」

遠くから、真田の声らしき声がする。

「フウ…お仲間ですか。ここで水を差すとは、興ざめな事を。では…いずれまた。」

タカヤはそっぴい残すと、元来た道に戻っていった。

そして、入れ替わりにこちらに近づいてくる足音。真田だ。

「シンジッ!!」

真田は荒垣の姿を見て、絶句した。

「シンジ、おい!!しっかりしろ!!」

天田は言葉を失っている。

真田は急いで、召喚器を取り出す。

そして、後から美鶴、そして湊や彩音たちなど他のメンバーもやってくる。

「…!!」

彩音は目の前の光景に絶句した。

血まみれで倒れる、荒垣の姿に。

「荒垣!!」

「先輩!!」

「荒垣サン!!」

「うそ…!!」

仲間が次々に驚きの声を口に出す中、彩音はすぐ召喚器を取り出して引き金を引く。

「先輩、先輩ッ!!しっかりしてッ!!」

呼び出したのはパールヴァティ。すぐにダイヤモンドを指示する。

何度も何度も、同じように引き金を引き、荒垣にダイヤモンドをかけたづける。

しかし、血は止まらない。

湊は、奥に倒れる遙を見ていた。勿論荒垣の容態にも絶句したが、ここに本来居る筈の無い彼が、血の池に沈んでいるのだ。

「あ…遙…？」

急いで、湊は遙に駆け寄る。

「遙、遙…」

しかし、遙は無反応だ。

胸の辺りの、銃で撃たれた傷口。それを見て、湊は頭が真っ白になった。

急いで回復魔法の使えるペルソナに付け替えて、召喚器を握った。

「あま、だ…」

荒垣が天田を呼んだ。天田は息を呑む。

「へっ…なんて顔だ。せつかく…望みが、叶うつてのによ。」

「…ッ…！」

「憎しみを…すぐに…捨てなくていい。力にすりゃ、いい…お前は…まだガキなんだから…こっからだろ…これからは…てめえの為に…生きる…」

「僕…は…」

荒垣は次に、真田に目を向けた。

「…アキ。こいつを…」

「…ああ。」

真田は静かに、だがしつかり頷いた。

天田は何も言う事が出来ない。

そして…荒垣は、彩音に目を向けた。

彩音はまだ、召喚器でパールヴァティを呼び出し、回復魔法をかけたようとしている。

「泣くな…彩音…」

彩音の顔は、涙で濡れていた。

「これで…いい…」

荒垣はそう言つと、咳き込んだ。赤い血が、飛び散る。

荒垣の下には、もう血溜まりが出来ていた。

「あっ……」

全員が、息を呑む。

荒垣が、ゆっくり目を閉じた。

「病院……病院を……」

「す、すぐ運ぼう……。……ッ！……影時間が明けなければ、医者……」

「そんなっ……。間に合わないの……？」

「あ……あ……」

「うああああああ……！！！！！！」

天田の慟哭が、響く。

「……ッ、真田先輩ッ！先輩にディアラマ！ゆかりもッ！アイギス、  
風花！回復アイテム！！荒垣先輩に使つてッ！」

彩音は涙でぐしゃぐしゃになった顔で、指示を飛ばす。

「絶対に死なせない、死なせないから……ッ！！！！」

彩音も、何度も何度もペルソナを呼び出しては回復魔法を唱えていく。

それは、影時間が終わるまで続けられた。

遙のほうもまた、湊による懸命な救助活動が続けられた。

幸い、荒垣よりは回復魔法による傷の治りが早い。

順平や美鶴などの協力もあり、湊は無我夢中で遙に回復魔法をかけ続けた。

影時間が明け、病院に搬送された荒垣は自力で呼吸も出来ないほどだった。

医者は一言、”意識の回復の見込みは無い”と告げ…その晩は、誰ひとり口を開こうとしなかった。

また、遥は回復魔法が功を奏し、一命は取り留めたが…未だ油断のならない状況となった。



10月4日NO.2 断罪の刻々（後書き）

いかがでしたでしょうか？

うわあ、時間かかった…。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

×月×日 〈秘密のビデオ3〉 (前書き)

番外編のビデオシリーズ第3弾。

シリアスに入った後でギャグテイスト…とは思ったのですが、書かないと書くタイミングを失ってしまうので。

では、どうぞ。

×月×日 〈秘密のビデオ〉

2009/09/06 19:10:36 記録開始

そこに映っていたのは、見慣れたラウンジ。

そこには、荒垣とコロマルがいるようだ。テレビを見ているようである。

『ハイでは、テキストの39ページをね、開いてみてください。今日はね、唐辛子のスパゲッティ。残暑を乗り切るスタミナ料理ですよー。』

見ているのは料理番組のようだ。見れば、荒垣の手元には少々分厚いテキストがある。

『唐辛子はね、万願寺唐辛子、というのを使います…種を抜いてくださいね。そうしたらね、昆布だしを取りますね。このくらいのパスタ鍋に…』

『パスタ鍋…そう言やあんのか、ここ…?』

荒垣がラウンジの奥の、カウンターキッチンの方を見やる。

『ワフツ…?』

ふと、コロマルが何かに気付いたように、玄関の方を見た。

荒垣もつられて、そちらを見る。

『はあ、まだまだ暑いねー。』

『表面温度を一定に保つのに、エネルギーが要るであります。』

外には、帰ってきた風花とアイギスがいるようだ。

『うおっ…』

『ワンッ!』

荒垣はとっさに、持っていた料理本のテキストを顔に乗せ、寝たフリをする。

それと同時に、2人が扉を開けて寮内に入ってきた。

『ただいま戻りましたであります。』

「ワンツ、ワンツ！」

「ただいま、コロちゃん。」

2人は早速出迎えにと近づいてきたコロマルの頭を撫でてやる。でもそこで、風花はソファで眠る（フリをしている）荒垣に気付いた。

「あ、でも静かにしてあげて。荒垣先輩、寝ちゃってるみたいだから……」

「ワン。」

それに対し、コロマルは1回吠える。すぐさま、アイギスがコロマルの言いたいことを感知する。

「荒垣さんは眠っていないはず……との事です。」

「え？」

風花は何でコロマルにそんなことが分かるのか不思議そうだ。そしてもう1度、荒垣の方に目を向ける。

「……あ、先輩のあの本、”家庭の料理”のテキスト……」

ラウンジのテレビには、さっき荒垣が見ていたテレビがそのまま流れていた。

「荒垣先輩……お料理番組なんて見るのかな。ていうか、今月号出たんだ……」

「ワン。」

コロマルが肯定するように吠えた。

「荒垣さんは、大体こういう番組を……」

「あ、アイギス、いいのいいの！ほら、もう行きましょう。」

風花がアイギスの言葉を遮り、早く行こうと促す。

アイギスと風花はそのまま、2階に上がっていった。

荒垣は2人が完全に居なくなったのを気配で感じると、本をどかして起き上がる。

その顔は、なんだかバツの悪そうな顔だった。

「……そうか……そうだった。あいつあ犬語ホンヤク機能付きだった……」  
アイギスが聞いていたらすぐに訂正しそうだが、今荒垣の言葉を聞

いていたのはコロマルしかない。

「クウ〜ン…」

コロマルがしょげたように、荒垣を見た。あれは、言ってはいけないことだったらしいと、今気付いたようだ。

「あ、いや、気にすんなって。お前は悪くねえよ。」

荒垣はコロマルの頭を撫でる。

「…そうだな。今度コロちゃんにも、なんか作ってやるか。」

「ワンツッ！」

荒垣の言葉を理解したのか、コロマルはとても嬉しそうに吠えた…。

映像はここで終わった。

2009/09/20 01:13:41

記録開始

次に映ったのは、彩音の部屋だった。

丁度この日は、風邪を引いて寝込んでいる時である。傍にはスポーツドリンクのペットボトルやら、水が入ったコップと薬が置いてある。

いきなり、ドアが開く音がした。

そして、入ってきたのはアイギス。

「開錠に9.2秒…前より改善であります。」

やっぱり、鍵を勝手に開けて入ってきたようだ。

アイギスはベッドの傍に近づくと、身をかがめ、眠っている彩音の額に手を当てる。

「…体表温度、36.2度…平熱…これなら、朝にはすっかり治っていますね。冷凍庫で枕を凍らせておきましたが、どうやら彩音さんには不要であります。」

アイギスは体を起こすと、辺りを見回した。

「…長居すると、皆さんに叱られてしまいますね。皆さん、本当に心配されてましたから…」

アイギスは前にも、勝手に侵入して怒られたことがある。それを思い返し、今回は素直に踵を返した。

そして、部屋から出て行こうと扉の前まで来る…が。

そこで、もう1度アイギスは彩音の方を振り返った。

そして、スタスタと部屋の半ばまで戻ってくる。

「日の出までは、まだあと4時間12分…。…もう少ししたら、湊さんの部屋にも行くであります。湊さんの部屋でも、朝になる前に抜け出せばいいでありますね。」

アイギスは床に座り込んだ。

「もう少し…ここで見守るであります。」

その視線の先には、彩音の寝顔。

映像はここで終わった。

「…荒垣先輩…そういうえば部屋に入れてもらったときも、あの本はあつたような…」

「…入ったのか？」

「頼み込んで入れてもらった。」

「…了解とってるなら、いいけど…」

「アイギス、やっぱりピッキングして侵入してたんだ…」

「…この感じだと、僕の部屋もか。」

「…なんで私の部屋だけカメラ回ってるんだろ…」

×月×日 く秘密のビデオく（後書き）

いかがでしたでしょうか？

さて…次から新章ですね。

遥の秘密も明らかになります。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

10月5日 く真田の誓いく(前書き)

12月入りましたね…

うわ、受験まであと2ヶ月…

では、どうぞ。



10月5日　〜真田の誓い〜

月光館学園高等部生徒が、2人同時に暴力事件で意識不明の重体。その噂はまたたく間に学園中に広まった。

勿論、その真相を知っている特別課外活動部のメンバーも、皆目で分かるほど落ち込んでいた。

特に…現場リーダーの2人は。

真田は今日、学校に来ていない。

放課後。美鶴が、2-Fに来た。

「ちよつと…いいか。」

「あ…はい。」

皆手を止めて、美鶴を見る。

「今日…帰ったらラウンジに集合してくれ。用件は…分かるな？」

「まあ…」

明らかに、声のトーンが下がっている。

「急いで考えをまとめなくてもいい。正直、私も迷ってるしな…。」

「じゃあ、伝えたぞ。」

美鶴はそう言つて、教室を出て行った。

「天田の事…だよな…どう考えても。ハア…シンドイ話っぱいな…」

「うん…」

先ほどから、2人は黙つたままだ。

「…大丈夫？」

ゆかりが声をかけるが、二人は黙つたままだった。

今回巻き込まれた2人と仲の良かった二人のことだ。ショックは他のメンバーよりも大きい。

「…ごめん、ゆかり。先に帰るね…」

彩音がようやくそれだけいい、すぐに教室を出て行ってしまった。湊もそれに続く。

順平とゆかりは、そんな二人の背を心配そうに見送った。

一方その頃、辰巳記念病院。

真田はある病室の前にいた。そこには”荒垣”の文字と”面会謝絶”の紙。

しかし真田はそれを一睨みして、病室に入ってしまった。

荒垣は、様々な生命維持装置に囲まれている。それらから発せられる機械音が、荒垣が生きていることの唯一の証明だ。

真田は荒垣のベッドの脇に行く。

「よう。案外、顔色いいじゃないか。いつまで寝ている気だ？」

真田は本当に、荒垣と話しているかのように話す。

「いつものアレを食って来た…授業サボって食うラーメンの味が知りたくてな。意外といいもんじゃないか。…誘えよ、1度くらい。」その言葉どおり、真田ははがくれに行っていた。店主や他の客から見れば、さぞ奇妙な光景に見えただろう。

「…黙ってないで、返事くらいしろよ。…いつもそうだ、お前は。」真田が視線を落とす。

「いつも黙って勝手に行つちまう。こっちの身にもなれってんだ…」荒垣は勿論、答えない。だが、真田は荒垣を真っ直ぐ見た。

「…逆だと言いたいのか？ そうだな…力だ理屈だつて、1人で突っ走つてたのは俺の方だ。美紀を失つてから、俺は、ただ力だけを求めてきた…力さえあれば、どんなものでも守れると思つてた…」真田の目には、うつすらと涙が溜まっていた。

「なのに今、お前まで…！ お前まで失つたら、どうしたらいい！？ お前まで…」

真田が膝をついた。

「俺を置いていくな…！！！」

そして荒垣のベッドに突つ伏す。

「聞こえてるんだろ！？目を覚ませよ…！！目を、開ける…！！シンジ…！！」

真田の嗚咽が、病室に響く。

普段は決して涙など見せない真田が泣いている。それほどまでに、真田の中の荒垣の存在は大きいものだったのだ。

しばらく、真田はベッドに突っ伏して泣いていた。

どれほどの時が経ったのか、やがて真田が顔を上げた。そして、涙を腕で強く拭う。

そして、立ち上がった。

「…わかってるよ、シンジ。泣いてたって、何も始まらないってんだろ…？わかってるさ、それぐらい。」

真田の声の感じが、変わった。

「どうせ俺は、俺であることから逃げられない。…いい加減、ウンザリしてんだ。」

その目は、何かを決意した目。強い光をたたえている目。

決意の心は、真田に新たな力を呼び醒ます…

真田の頭上には、ポリデュークスが浮かんでいた。その姿が、一際強い光を放つ。

次の瞬間、そこにいたのはポリデュークスではなかった。

左手に剣が刺さった地球儀を持っている、人型のペルソナ。

皇帝、”カエサル”。

「…いいぜ、シンジ。見ていろ…まだ、俺にはやることがある。…そうだろ？」

真田は、そのまますっかりとした足取りで、病室から出た。

夜、寮のラウンジ。天田を除いた全員が、集まっている。

「集まってもらった理由は…分かるな。」

美鶴が全員の顔を見て言う。

「天田の処遇をどうするか…私達で話し合おうと思う。理事長も了解済だ。アイギス、彼を連れてきてくれ。」

「了解しました。」

普段と変わらない様子でアイギスは返事をする、すぐ2階へと向かった。

「…私のせいだ…」

口を開いたのは、風花だった。全員の視線が風花に集まる。

「荒垣先輩が遅れる理由を言わなかった時、”あれ？”って思ったのに…私、まただ…私が気付いてれば、こんな事には…それに、遥君だって…私をもっと早く、発見できていたら…」

「そんな、風花…」

「君のせいじゃない。事情を知っていた私こそ、もっと早くに気付くべきだった。」

風花をゆかりと美鶴が慰める。

「オレ…自覚、足りなかつたっス…遊びじゃねえって、分かってたけど…こんな事になっちゃうなんて、全然…」

順平も、俯く。

「過ぎた事を言っただうする。」

しかし、真田は強く言う。

「シンジの言葉、覚えてるだろ？」これでもいい”…全く、大したヤツだ。死ぬかもしれんって時に、前だけを見てた。…だから、俺も前しか見ない。」

真田は強く言い切った。

「”これでいい”か…」

「先輩…」

「…そつか。先輩に…託されたんだ。私…なら…」

この人は、強い。辛いことがあったのに、前を見ている。前を、見

据えている。

彩音もまた、ここで1つ、気持ちの区切りがついた。言葉の意味を、考え直してみたら、そういうことなのだ、と。

そんな時、アイギスが急いで階段を駆け下りてきた。

「報告します！天田さんが、部屋に居ないであります！」

「うそ！？」

全員に驚きが走った。

「窓に、こじ開けたような跡が。」

「天田くん…！」

風花が立ち上がった。そして、玄関の方へと向かう。

「ちよつと！どこ行くの、風花！心当たりあるの？」

「それは…無いけど…でも放っておけないでしょ！？」

「無茶よ、やみくもに探す気！？」

「だって、私達が探さなきゃ！！天田くん、居場所が無いんだよ…」

私、そういうの分かるから…」

「で、でも、探すって言ったって…」

確かに、今闇雲に探したとて見つかる確率は正直、低い。しかし、

風花にはこんな事態を見過ごせという方が無理だったのだ。

「ゆかりちゃんだって、もっと分かってあげるべきじゃないの！？」

「風花…」

はっ、と風花が強く言ってしまったことに気付く。

「ごめん、私…」

「天田の事は、放っておけ。」

真田がぴしゃりと言った。

「庇ってどうする。連れ戻して何か変わるのか。」

「明彦…」

「アイツのケジメだ。どう生きるかは、自分で決めるしかない。…」

自分で決めるしかな。」

美鶴は黙り込んだ。その言葉に、有無を言わせぬ強さを感じた。

10月5日 く真田の誓いく（後書き）

いかがでしたでしょうか？

真田覚醒イベント！

天田までやったら、遥の秘密についてやります。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

10月6日 く天田の決心く(前書き)

早いものでもう100話です。

自分でも凄い驚いてます(笑)。

では、ごんげ。

## 10月6日　〜天田の決心〜

夜、ポートアイランド駅の裏路地。

例の事件のせいもあってか、今日は珍しくたむろしている連中が1人もいなかった。

だが、その奥。建物の影になっている場所に。制服姿の小学生くらいの少年がうずくまっていた。

天田だ。

天田はずっと、ここで長い間こうしていた。

ふと、天田は影が出来たのを感じた。顔を上げてみると、そこには特別課外活動部の先輩：真田が立っていた。

「まるで、死んでるような顔だな。」

天田は俯いて答えない。それは、そのことは自分でもよく分かっていた。

「ここで、何をしている。」

この問いにも、天田は沈黙を貫いていた。

だが、しばらくたってようやく天田が口を開く。

「…母さんが僕を庇って死んだ時…死んだ理由なんて、誰も信じなかった…母さんは今も、ありもしない事故で死んだことになってるんだ…。だから、せめてハッキリさせたかった…それだけが弔いなんだって…母さんだって、きっとそうだって思った。」

天田が顔を上げる。

「あの人も、暴力事件で意識不明って事になったんでしょ？ 遙さんも…。ホントの事なんて…誰も知りやしない。母さんと同じに…そして、いつも僕だけ残されるんだ…」

「お前は二度も残された…その意味を、考えたことは無いのか？」

天田が息を呑んだ。真田は続ける。

「俺は、迎えに来たわけじゃない。歓迎をする気もない。そこがお



前の居場所なら、死ぬまで、そこにいればいい。」

その言葉には、重みがあった。親しい友人の、突然の事件の哀しみを、乗り越えた重みが。

「…だが、戦う気がまだあるのなら、自分で扉を開けて、戻って来い。」

真田はそれだけ言うと、天田の前から去って行った。

「…分かってるさ…そんな事。」

天田は真田の背中から目を逸らす。

「そうさ…ホントは分かってたんだ。ぜんぶ…ごまかしだつて。誰かを憎んでれば、立っていられた…だから、僕は…僕は、僕だけで生きるのが、怖かったんだ…そして、また…関係ない人だつて、巻きこんで…」

天田は目の前の壁に、自らの拳を叩きつけた。

「ずっと逃げていたんだ…」

やがて、天田は立ち上がった。

「…分かったよ。もう逃げない…もう逃げないつて…誓うよ。」

天田は、荒垣と遙が撃たれた、あの溜まり場となっている路地に目を向けた。

「荒垣さん…後は僕がやっておきます。だからゆっくり、休んでて…。…遙さんも、ありがとう。」

決意の心は、天田自身に新たな力を呼び醒ます…。

天田の頭上に顕現したネメシスから、眩い光が放たれる。

そこにいたのは、もうネメシスではない。

「時の輪の外輪」の名前を持つ神、カーラ・ネミ。

天田は少しだけ微笑んだ。その視線の先には、今はもう駐車場になっている場所…天田の前の家の跡地。

「…さよなら…母さん。僕は、もう大丈夫だから…」

寮のラウンジ。昨日のように、また寮の全員が集まっていた。だが、天田と真田の姿は無い。

「もう、丸一日か…」

まず口を開いたのは、ゆかりだった。

「…そうだな。」

「つか真田サンは？」

「放っておけて言われたけど、そろそろ、探しにいった方が…」  
順平はここに居ない真田のことを気にして、風花は心配げに玄関を見つめている。

「君はどう思う？」

美鶴が、彩音に訊いた。

「…昨日真田先輩も言っていましたけど、これは天田くんが決めること…なんです。これからをどう生きるのか…だから、心配ではあるけど…」

「…明彦と同じか。」

彩音が頷いた。しかし、そこで風花が立ち上がる。

「…私、やっぱり、もう待てません！今からでも探しに…」  
言い終わらないうちに、玄関のドアが開いた。みんなが、一斉にそちらを見る。

そこにいたのは、小柄な人影。

「ワン、ワンッ！」

真っ先に、コロマルが天田に駆け寄る。

「天田君!？」

「よかった…ほんと…心配したんだから…」

「心配…?」

天田がきよとんとした顔をする。

「天田…戦えるのか?」

美鶴がいささか厳しい目で天田を見据える。

「はい。…もう、勝手なことはしません。」

「大丈夫なんだろうな？」

「はい。」

順平も、訊いた。

「大丈夫…天田くんは、ウソを言っていない…」

「…まったく、心配せんなよ？」

美鶴は天田を見ていたが、ふっと表情を緩めた。

「…分かった。理事長には私から言っておく。…休んでくれ。」

「はい。」

ふと、そこで天田は彩音と湊が自分を見ていることに気がついた。

「…荒垣先輩の分まで頑張れ、とは言わない。けどね…」

ぼん、と彩音は天田の頭に手を置く。

「守ってくれた人とか、心配してくれた人がいるんだから、その人

たちに恥ずかしくないようにすること。いい？」

「…はい。」

「ん、よし！」

彩音は微笑んで見せた。

その夜の影時間。

慣れた気配がして、彩音は目が覚めた。

「やあ。」

見れば、いつもの通りファルロスがいた。

「…今夜はちよつと冷えそうだね。でも、今はもう秋だ。それが過

ぎたら…冬がくるよ。」

「早いね…時の流れは。」

「なんだか、少し疲れているみたいだね。…何かあったの？」

ファルロスが心配そうな視線を向けてくる。

「…大事な仲間と…友達がね、今大変なことになってるんだ…」

「…そうだったんだ。」

ファルロスは悲しそうに目を伏せた。

「この世界じゃ、毎日、たくさん人間が死ぬんだ。今までは、そんなことは、風や水の流れと同じものだと思ってた。でも今は…ちよつと違う…。僕にも、友達が出来たからね…」

ファルロスはじつと、彩音を見た。

「…この頃、はつきりと感じることもあるんだ。僕が言う”終わり”のことを、”滅び”と呼ぶ者もいるみたいだけど…それは、凄く近づいてきてる。君は、何も感じないのかな…」

ファルロスは少しだけ、寂しそうな感じがした。

「僕らは、共にある存在のはずなのに、なんで、僕だけが思い出すんだろう…これは、とても辛いことだよ。僕は、もしかすると、君達には受け入れてもらえない存在なのかも知れない。」

ファルロスは、とてもか悲しげに微笑んでいた。

頭の中で、またカードが浮かび上がった。

”??番 死神”のランクが8にあがった。

「今日は、変な話をしちゃったね。…季節が変わるからかもしれない。僕が君の友達なのは、変わらないはずなのにね…」

「絶対…変わらないから安心して？」

彩音が言つと、ファルロスは少しだけ嬉しそうに微笑んだ。

「じゃ…今夜は、これで。おやすみなさい。いつでも、君達の傍にいるからね…」

ファルロスはそういうと、いつものように消えてしまった。

10月6日 く天田の決心く（後書き）

いかがでしたでしょうか？

さて次回は、オリキャラ遥のネタバレの回となりそうです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

10月7日 く遙のペルソナく（前書き）

もうすっかり冷え込んできましたね…。  
ストーブなしじゃいられないです。

では、どうぞ。

10月7日　～遥のペルソナ～

放課後。特別課外活動部の面々は、辰巳記念病院に集められていた。集めたのは美鶴。何でも、伝えておきたい大事な話があるという。美鶴に導かれ、病院の中を歩き、着いた先は…  
遥の、病室だった。

遥もまた、この辰巳記念病院に収容されていた。重症だったものの、その後に湊たちがかけた回復魔法で、遥は一命を取り留めていた。遥の病室は1人部屋で、なかなか広かった。こうやって、特別課外活動部のメンバーを集めて極秘の話が出来るよう、美鶴が手配したらしい。

昨日まで、遥は検査をされていたという。本人に無断で、というのはいけないことだが、天田が「遥さんはペルソナを使っていた」と証言したので、それどころではなかったのだ。

「今日集まってもらったのは、彼の検査結果が出たからだ。それを報告しておかなければと思っただけ。」

天田だけではなく、ここにいる全員の表情は暗い。活動部以外の人間を巻き込んでしまったという罪悪感が少なからず、全員にあるようだ。しかも、湊たち2年生組にとっては親しい人物が。

「検査の結果で…彼は、ペルソナ使いたということが分かった。」  
「色々な反応があった。驚く者、唇をぎゅっと噛みしめた者、平然としている者。」

「…何で、気づかなかつたんだろう…影時間中でも、遥君の反応なんて、一度も…」  
「風花がぼつりと言う。」

「それについても、答えが出ている。アルカナ隠者”ケイロン”。それが満嶋のペルソナだ。」

天田はあの時見た、魔術師然としたペルソナを思い出した。

「ケイロン」は戦闘能力が全くと言っていいほど無い。が…代わりに、山岸やあのチドリという子すらも凌駕する、感知系のペルソナなんだ。」

「だからあの時…ストレガの奴が、遙さんのこと」戦闘では何もできない」って連呼してたんだ…」

天田はあのときの、タカヤの言葉を思い返す。

美鶴は続けた。

「チドリが使っていた、”攪乱する能力”を覚えているか？あれの強化版を、彼は有している、と考えてもらっていい。山岸がいくら探したとて、見つからないはずだ。」

風花が悔しそうに唇をかんだ。

「索敵のメカニズムを簡単に説明しておこう。」

サーチ系、バックアップ系のペルソナ使いは、味方の生体情報を共有して、付近の敵を感知したり、周りの地形を知ることが出来る。山岸の場合、生命反応を感じ取る力があるから、それで味方の近くの敵などを感知している、というわけだ。あのチドリという子も、同じような力があると推測されている。

しかし満嶋の場合は、生体情報共有という点は同じなのだが…山岸が受動的であるのに対し、能動的なんだ。感じ取るのではなく、自ら干渉するというわけだな。そこで、相手の知覚に干渉し、ジャミングを行うことが出来る。」

「？…あのー、全然分からないです。」

順平がぼかんとしている。

「…今は時間がない。山岸、後で伊織に説明してやってくれ。で、続けるが…満嶋はその干渉力が強い。それは同時に、索敵能力やジャミング能力も強いということだ。その方面では、満嶋は山岸やチドリがまるで齒が立たないだろう。現に、ペルソナを表に出していない時でも、感覚ジャミングをある程度行えている。」

「ちょ、ちょっと待ってください！そんなこと、どうして分かった



「んですか？」

「山岸は満嶋と同じクラスだった筈だ。いくら昼間で、ペルソナを出していないとも、山岸には近くに居るペルソナ使用の反応などは感じ取れる。だが、何も異常を感じていなかった。そうだな？」

「はい。近くに居たのに全然、何も…」

「もしかしたら、人間1人くらい簡単に操れてしまえるかもしれないな。」

これには、美鶴を除く全員が息を呑んだ。

「だがそれほどまで強力な力を有していたとなると、何かしら代償があるはずだ。案の定、満嶋には大きな弱点があった。」

「弱点？」

彩音が訊き返す。

「ペルソナを持つものには、必ずあるはずのものが無いんだよ。」

「…補正、か。」

黙っていた湊が口を開いた。

「そうだ。普通、ペルソナ使いには補正がつく。シャドウの攻撃を受けてもペルソナを持たない者よりダメージが軽減されたり、身体能力が向上したり、回復魔法が効きやすくなったり…だがそれらが一切、満嶋には存在しない。」

つまり、あの時銃弾を受けて、今ここで重体ながらも生きているというのはまさに奇跡だ。それを、湊は察した。

「精神系能力に特化しすぎたペルソナ使い…か。」

真田が眠っている遥を見て言った。

「…ねえ、もしかして…ストレガが言ってたペルソナ使って…遥くんのこと？」

「可能性は高いでありますね。あの時こそ満嶋さんは荒垣さんや天田さんをかばったものの…それまでは、わたし達に気づかれないように隠れていたようであります。ストレガの”タカヤ”という人物が、満嶋さんを囿にしたという天田さんの証言でも、ストレガの方とも関係は良好ではなかったと推測できます。」

「ちょっと待てよ、じゃあ何でストレガは遙のことを知ってたんだ？」

順平が口を挟む。

「話聞いていると、その、遙はチドリにも見つからないように強いジヤミング張ってたってことだろ？それに、サーチも出来るんだからストレガと会わないようにも出来たってことじゃなか。ならなんで

…」

「そこまでは流石に分からない。彼が目覚めた時に、聞くしかないだろうな。」

美鶴もまた、遙の方に目を向けた。

「今分かっていることはここまでだ。急に集まってもらって悪かったな。」

「遙くん、ますます不思議な存在になった気がする…」

遙は相変わらず、眠っている。荒垣と同じように、様々な生命維持装置に繋がれて。

皆が病室を出た後、湊は1人、遙の病室に残っていた。

「…何を、遙は僕達に隠してる？」

訊いてみたが、勿論返事など返ってくるはずはなく。

「何で、こんなこと…」

湊はそつと、遙の手を握ってみた。少し体温は低いように感じる。

しばしの間、静寂が病室に流れた。

やがて湊は、遙の手をゆっくり離す。

「…早く、目を覚ませよ…」

湊は踵を返した。そしてそのまま、病室を出て行った。

10月7日 〈遙のペルソナ〉（後書き）

いかがでしたでしょうか？

追加で解説します。

簡単に言うとチドリのジャミング能力の強化版を、遙は使えます。

「遙は神出鬼没だ」と言わせていますが、あれは実はジャミングで気配を消して移動していたからです。

ちなみに人は操れません。美鶴が推測して言ってるだけ。

では何故隠れていたか？などはまた後で。

説明が足りていない：かも知れませんが、質問や疑問があったら感想かメッセージで下さい。答えられる範囲でお答えします。

アルカナを結局明かせずにここまで来てしまったという。申し訳ありませんでした。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

10月12日 く遥とストレガく（前書き）

遥の暴露話、第2弾。

：別に、ゲームでテスト期間入っちゃって書く話が無い、とかじゃありませんよ？

では、どうぞ。

10月12日　～遥とストレガ～

今日、順平はチドリの見舞いに来ていた。明日からテストだが、何となく勉強が手に付かず、ふらふらと病院に来てしまった、という感じなのだった。

チドリの病室に向かう途中で、ふと順平は遥のことを思い出す。そういえば、遥はストレガに関わりがあるような感じだった。

チドリに訊いてみれば、何か分かるかもしれない。そんな考えが、頭をよぎった。

「よっ、チドリ。」

「…順平。」

チドリはスケッチブックにまた絵を描いていたようだった。手を一旦止め、順平の方に視線を向ける。

「へへっ、なんか勉強に集中出来ねえんだよ。で、つい来ちゃった。」

ベッドの脇の椅子に座った順平がはははと笑うと、チドリは呆れたような目を順平に向けた。しかし、その口元は笑っている。

「ああ…っと、そうだ。チドリ、訊きたいコトあるんだけど、いいか？」

「何？」

順平は思い切って、遥のことを聞いてみることにした。

「あのさ、満嶋遥、ってヤツ…チドリ知らない？」

チドリの顔が、一瞬だけ驚きに染まった。

「…知ってる…」

チドリがすつと目を閉じる。

「この病院にいるんでしょ？メーディアが教えてくれた。でも…こんな簡単に見つかることなんて、今まで無かったけど。」

「や、やっぱり知ってるのか…」

「で？遙が、どうしたの？」

再び、チドリが順平の方に視線を向ける。

「えっと、その…何か知ってることあったら、教えてくれねえかな。どこで知り合ったのかとか、アイツのペルソナのこととか、さ。」  
チドリは少しだけ黙った。

「…遙とは、ずっと昔に知り合った。友達…ってわけじゃない。ちよっと一緒にいただけで、すぐどこかに行ってしまったから。」

順平は驚いた。ストレガとも、やっぱり知り合いだったのだ。

「メーディアが、唯一見つけれなかったの。必ず、どこかしらに居る筈なのに、絶対に見つからなかった。だから…会うときは、いつも遙が私達に会いに来た時だけ。」

チドリはちよっと複雑そうだ。

「でも、最近になって…いきなり遙は変わった。これまでは、何ていうか…あまり干渉し合わなかったのに、最近、私達に宣戦布告、のようなこともしてきた。」

「…宣戦布告？」

順平が穏やかではないその言葉に顔をしかめる。

「あなたたちを傷つけるようなことをすれば、全力で私達を妨害する…みたいなことを言った。」

「…確かにそりゃ宣戦布告とも取れるわな…あー、つまり、遙はオレたちと会って変わった、ってことなのかな？」

「それはないよ。」

すぐにチドリは否定した。

「彼のペルソナは、精神世界を覗き見るペルソナ。他の誰よりも強いその力は、相手の心を覗き見てしまうことでもあるわ。そんなペルソナをずっと持っていて…それでも遙は変わらなかった。流されなかった。いつだって、ただ物事を外から眺めていて、中立の立場にいた。」

人の心とは、必ずしも綺麗な感情だけとは限らない。否、そんな人など、いない。

その心を少なからず見てきて、変わらなかった遙が…今更誰かの影響によって変わる事など、ないだろう。

チドリはそう断言した。

「私が知ってることはこのくらい。」

しばらくの沈黙の後、チドリが言った。

「あ、ああ…そっか。…ありがとな、チドリ。」

チドリは黙って首をゆっくり横に振った。

チドリの病室からの、帰り道。

順平は、ついでにと遙の病室に寄ってみた。

相変わらず、遙は眠っている。

「何っーか…オマエって謎だよな。」

答えは勿論、返って来ない。

「あ、そーだ…このこと、先輩にも一応報告しとかないとな。」

順平は最後にもう1度だけ遙を見ると、病室を少し早足で行った。

10月12日 〈遙とストレガ〉（後書き）

いかがでしたでしょうか？

追加で解説です！。

遙は、ペルソナ制御剤の代わりみたいなことも出来たりします。体に影響を与えず、暴走したペルソナを静めることが出来ます。元々ペルソナが精神の一部なんで、精神系能力に特化している遙は、ジャミングの応用で出来てしまうのです。

しかしストレガの面々にそれを使う気はありません。チドリなら助けてもいいかな…ぐらいには思ってますけど、タカヤには絶対やりませんね。

逆に荒垣は助けたいと思ってました。ですが、荒垣の方がそれを拒否したので出来ずじまい。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。



10月20日 く風花の願いく（前書き）

中間試験はすっ飛ばして風花覚醒イベント。

今回もテストは2人同時学年トップでした。という設定で。

…ああ、ペルソナ主人公のパラメータMAXの学力が欲しいです。

では、どうぞ。

10月20日　〜風花の願い〜

2年E組。

教室にはどこか沈んだ顔をした風花を心配そうに見ている夏紀の姿がある。

「えーでは、ホームルームな。最近、色々騒がしいが、勉強なまけとらんか？んん？3年で文系取らないつもりでも、古文、赤点でいって事はないぞ、んん？」

風花の様子などお構いなしに、江古田は続ける。

「おーい、聞いとるか？」

しかし、風花は心ここにあらずの状態だった。彼女の心によぎるのは、前回の作戦日から入院している荒垣と、遥のことだ。

遥の席は空席のままだ。それを見るたびに、風花は自分を責めてしまふ。

「どしたー、風花？冴えない顔して。」

「え…？」

見かねた夏紀が声をかけた。

「話してみ、なんか悩みでしょ？」

この友人には、何でもお見通しのようだ。

「…先輩…のこと…。…それに…遥くん…」

「ああ…荒垣先輩と満嶋か、驚いたよね…先輩は、学校では見かけなかったけど、街では、見かけてたからさ…満嶋に至っては同じクラスだしねえ…」

「取り戻せない事って、あるんだよね…私、すごく分かってさ…。そんな事考えてたらさ…両親の事とか、考えちゃってて。…考えないようにしてきたけど、このままでいいのかなって…」

「親か…ムズいね、親の話はさ。でも風花なら、ダイジョブじゃない？」

「森山、どうした、早く前へ来なさい。」

会話は、江古田の声によって一旦打ち切られた。

「はいはいはい。」

「返事は1度！最後まで、しっかりやらんかね。」

夏紀は立ち上がる。それを、風花が驚いた顔で見上げた。

「え…どうしたの？」

風花の問いには答えず、夏紀は教壇の、江古田の横に行く。

「えー、どうも。長いようで短い間、お世話になりました。転校しても皆さんの事は忘れません。ありがとうございました…って感じ？」

「え、転…え？」

風花は思わず立ち上がってしまう。

「えー…っ！？」

その後の昼休み、風花と夏紀は屋上にいた。

風花は、まだショックを隠せていない。

「あんたも物好きだよね。」

沈黙の中、屋上からの眺めを見ていた夏紀が口を開く。風花はベンチに座り俯いていた。

「せっかくイヤな女が出てくつてのに、惜しんだりして。」

「転校しちゃうなんて…全然知らなかった…。」

「言っただくなるもんでもないっしょ。暗い話になんのもやだしね…。」

夏紀は、少しだけ微笑んでいた。

「パパが急に倒れちゃってさ…難しい病気らしくて、すぐには、治らないんだって…ウチ、あんまお金ないし、なんっーか、ノンビリしてらんなくて。」

風花は黙っている。夏紀は風花の方を向いた。

「気づいてみりゃ、あたしの世話焼くような物好きは…アンタだけだったな。」

風花も顔を上げて夏紀を見た。

「前に言ったよね…あたしはアンタと同じだって。ウチの親…あたしに興味とか全然無くてさ。あんま、家とか居たくなかったんだ。だから、アンタが寮に入った時、あたし、ちよつと羨ましかった。」

「夏紀ちゃん…」

「でも風花…アンタ、家が近くて、親も普通なのに、なんで寮に入ったの？」

「えっ…それは…その…」

影時間のことやシャドウのことを話すわけにはいかない。風花は言葉に詰まった。

「言いたくなきゃいいよ。…でも、話して何とかかなりそうってんなら、早めに話しときな。ウチのパパ…今の様子じゃ、当分は、話とが出来なそうだしね。」

風花は黙って夏紀を見た。

「ハハ、何言ってるのかね。暗い話ヤダって、自分で言ったクセにね。」

夏紀は困ったように笑った。そしてすぐ、真面目な顔に戻る。

「あたしね…毎日って、おんなじユーウツがただ始まって終わるだけって思ってた。でもね、風花…あんただから真顔で言うけどサ…人生には、2度巡ってくるモンなんて、たぶん無いよ。今の居場所だけにすがってると、そこだけくなるよ…あたしみたいにさ。」

「夏紀ちゃん…」

それは、夏紀の心からのアドバイス。過去に経験した者の、言葉。

夏紀はまた、屋上からの景色に目を戻した。海が、太陽光を反射してキラキラ輝いている。

「この景色も見納めか。じゃあ、あたし、家の用事で来週は学校来ないから、これでお別れ。」

「そんなんっ!!」

風花が勢いよく立ち上がった。

「ハハ、見送りとかヤメてよ。…このままでいいから。」

風花は納得のいかなそうな、寂しそうな顔で夏紀を見る。

「ったくもー、そんな顔しない。」

「だって…」

「言っとくけど、あたし結構ゲンキよ。アンタに会えて…結構変わったからネ。今は、やれる事やってみようって思ってる。…だから、アンタもやりたい事探しな。」

夏紀は晴れやかに笑っている。いつも通りの、寂しさなんて微塵も感じさせない笑顔。

「私の…やりたい事…私の…」

風花は、少しだけ考えたあと、ぽつぽつと話す。

「私…今まで、人に好かれてなきゃ、居場所は無いんだって思ってた…だから、嫌われるのが怖くて、いつつも周りに合わせて…私、自分がほんとは何したいかなんて、考えたことなかった…」

「ハハハ、アンタらしいよ。ヤなら、シカトしときゃいいじゃん。」

…でも、あたし、風花のこと好きよ。風花自身が、自分のこと嫌いでもね…」

「夏紀ちゃん…」

風花が驚いた顔で、夏紀を見る。その言葉は予想外だった。

「じゃ…行くから。」

夏紀は振り返らずに、出て行った。屋上のドアが、音を立てて閉まる。

「夏紀ちゃん…」

風花はドアを、黙って見つめていた。

すると、そこで風花の携帯が鳴る。メールの着信を知らせる音だった。

「携帯…」

すぐに風花は携帯を取り出し、メールを確認する。

「えっ、夏紀ちゃんっ!？」

送り主は、今別れたばかりの夏紀。

『>”離れてても、繋がってる”でしょ?いつだって話せるよ。今

まで、ありがとね。私、ちょっとだけ泣いてるw」

「夏紀…ちゃん…」

風花は画面を開いたまま、携帯をぎゅっと握り締めて俯く。

彼女には、最初はいじめられていて、いいことなどなかった。でも、あの6月の事件があり、そのお陰で彼女と和解し、今まで助けてもらってきた。出会いこそ良くはなかったものの、今はこうして、親友と呼べるレベルまで、2人の中は良くなっていた。

やがて、風花は顔を上げて頷いた。

「離れてても、繋がってる…」

風花の顔には、夏紀のような晴れやかな笑みがあつた。少し目は潤んでいるものの、風花は笑っていた。

「分かったよ…夏紀ちゃん。私…この”力”に目覚めたのは、自分の性格のせいって思ってた。人の気持ちばかり気にしてるから…だから”探す力”なんだって…」

風花は携帯を、ゆっくり閉じた。

「…でも、私にも願いがある。みんなが仲良くしてるだけで、私、凄く嬉しいの。私は…それをずっと見ていたい。離れてても、繋がる力…」

風花は空を見上げた。空は青く、澄み切っている。

「私のペルソナは…」結ぶ者”。…私が願う”絆”そのもの。」

決意の心は、風花自身に新たな力を呼び醒ます…

風花を包むようにそこに顕現したペルソナは、ルキアにはなかった大きな翼のような部位を持っている。服は赤の色に変わっていた。

”ユノ”。彼女の、”結ぶ者”たる新しきペルソナ。

不意に、階段の方から足音が聞こえてきた。

屋上に入ってきたのはゆかり。後から、彩音と湊、順平とアイギスが入ってくる。

「いたいた。」

「リーダー、みんな…どうしたの？」

「屋上に居るパターンは、不意を突かれたであります。」

「いや、見かけねーからさ。どうしたのかなって…」

風花は少し驚くと、笑って言った。

「私、分かつちやいました。」

「わか…？」

「…何が？」

皆は意味が分からない、といった表情になる。

「…私、決めたの。この力で、やれるだけの事をやる。それが私の、願いでもあるから…」

「ふ、ふうん…」

「ふふ、ごめん。言葉にすると当たり前ね。」

皆が驚いている。今目の前に居る風花は、前とは別人のように見える。

「な、なんか、どしたの？」

「ふふつ。」

「なんか、吹っ切れたみたいだね？」

風花は笑って、大きく頷いた。

10月20日 く風花の願いく（後書き）

いかがでしたでしょうか？

この章ははじめても話数が少なくなりそうな予感がします。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。



10月×日　く帰還、そしてく（前書き）

明後日から冬休み！

だけど勉強で、家に缶詰状態になりそうな予感…

では、どうぞ。

10月×日　〜帰還、そして〜

不意に、意識が浮上した気がした。

それでも、見渡す限り辺りは闇。何も見えない。

どのくらい眠っていた。否、眠っているのかは見当が付かない。だがあの時、自分は1度でも完全に、“死”を覚悟した。そう簡単に目を覚まさないだろう。

頭の中は酷く冷静だった。今自分は生きるか死ぬかの境界線に立っているのに、頭の中は酷く冷静だった。

だが、1つだけ不安なことがあった。荒垣、そして天田はどうなったか。それだけが、心配だった。

刹那、蒼い光が目飛び込んできた。

奥に、半開きのドアがある。そこから、蒼い光は漏れていた。

勝手に体が動いていた。そのドアに、自分の足は向かっていた。

そして、吸い込まれるようにそのドアの中に入っていく…

「ようこそ、ベルベツトルームへ。」

老人の声で、はっとなる。とっさに、遙は辺りを見回した。

古いエレベーターの中のような部屋だった。床やテーブルは蒼いベルベット張りだ。

テーブルを挟んだ、これもまたベルベット張りのソファに、声の主と思われる老人が座っている。ソファの両脇には、エレベーターガールのような格好をした女性と、ホテルのドアマンのような格好の男性が付き添うように立っていた。2人の手には、辞書のようなものがある。

そして、自分は椅子に座らされていた。

「ほほう…これはまた珍しい。”ワイルド”を持たぬ方が、この部屋にいらつしやるとは、いやはや…何と言う偶然でしょうな。」  
老人はぎよると、血走った目でこちらを見た。

「あなたは…どなたですか？」

遙は目の前の老人と付き人2人に警戒の眼差しを向ける。

「失礼、申し遅れましたな。私はイゴール、そしてこちらがエリザベスとテオドアでございます。」

イゴールの紹介に合わせて、エリザベスとテオドアが一礼する。

「さて、ここに貴方がいらつしやったのも何かの縁…少し、貴方のペルソナを、見せていただくとしましょうか。」

そう言つて、イゴールは指をパチンと鳴らした。

すると、1枚のカードがクルクルと回りながら目の前のテーブルの上に降りてきた。

「！」

そのカードに書いてあるのは、間違いなく自分のペルソナだ。自分のペルソナが、カードとなつて目の前にある。

「驚かれましたかな？このカードは貴方のペルソナ…ですが貴方からペルソナ能力が無くなった訳ではございませんので、ご安心を。」  
遙は少しだけ、安心した。

「ほほう…これはこれは、何とも面白いペルソナをお持ちでいらつしやる。」

ただでさえぎよるとしている目がまた少し開かれる。遙はこの老人の目がいつか落ちてしまわないかと、少しだけはらはらした。

「それぞれのペルソナの在り方とも言える”アルカナ”…私は幾人もペルソナを扱う方たちを見てきましたが、そのアルカナが変化する方など、ワイルドを持ったお客人以外では存在しませんでした。

ですが貴方のペルソナは、その兆候が見えます。近い未来…」

イゴールは心なしに笑っているように見えた。

「どうやら、貴方がここに招かれましたのも、ただの偶然ではないようですな。よくお聞きなさい。」

イゴールがまた指を鳴らすと、カードは青い光を残して消える。

「これからの貴方の選択次第で、貴方はお客人の大きな光となるでしょう。あなたが心に決めた道を、進まれるといい。」

「…分かっています。」

「宜しい。よくよく、心に留めておかれますよう。…さて、そろそろお別れですな。貴方にはまだ、やらなければならぬことがある。そうでしょう?」

遥は頷いた。

「…ありがとうございます、イゴールさん。」

「いえいえ。礼には及びません。それでは…」

そこで、遥の意識はぼやけ、ゆっくりと闇に沈んでいった。

ゆっくりと、目を開ける。

辺りは静かだ。見慣れない天井がある。

窓からは、影時間特有の緑の夜空が見えた。

遥は、手を動かした。点滴などの針やチューブは邪魔だが、動けないほどではない。

体を動かそうとして、胸の辺りに鈍い痛みが走った。まだ、完治はしていないらしい。

見てみると、この生命維持装置は影時間でも動くように作られている。恐らく桐条製なのだろう。

しかし、幸いなことにナースコールなどは影時間のお陰で停止している。

それを遥は確認すると、おもむろに点滴の針を反対の手で掴んだ。そしてそれを、容赦なく抜いた。

制服は近くにかけてあった。血に濡れてしまった制服は処分されたのだろう。新しい制服だった。

遥は病院着から着替え終わると、ちらりとベッドを確認した。

そこには、きちんと整えられたベッド。

痛みはあるが、家まで歩く分には、なんとか大丈夫だろう。

もう先ほどから、今あったことは誰にも分からないように、ジャミングを開始している。

「じゃあね」

小さな呟きは、誰も居なくなった病室で、消えた。

10月×日　〜帰還、そして〜（後書き）

いかがでしたでしょうか？

遥復活しました。荒垣は寝てて、しかも遥の方がダメージ大きいのに何で、と思われると思います。

ベルベットルームのイゴールに手助けされたお陰で目が覚めてしまったのです。あとは意志の力で。

結局、何とか病院抜け出しますが家に着いた途端ダウンしてしまったので、遥は少しの間、家で療養中になります。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

10月23日 ～動搖～ (前書き)

H a p p y M e r r y C h r i s t m a s !

♪♪♪♪♪

10月23日 〈動揺〉

『大変ですっ！』

朝。美鶴の部屋のドアを、風花が慌しくノックする。

美鶴はその風花の慌てように、急いでドアを開けた。

「どうした、山岸。何があった。」

「病院から…遙くんの反応が消えています！」

「！」

美鶴も驚愕を隠せなかった。

「念のため、ユノで周囲の搜索はしてみました…。でも、反応はどこにもなくて…」

「あの怪我で、病院を抜け出したというのか…！？それに、いつ目を覚ますかも分からないという診断だったはず、こんな早く目が覚めるなんて事は…」

言いかけたところで、携帯の着信音が鳴った。それは、美鶴の部屋からする。

美鶴は風花に断りを入れ、電話に出る。

「…はい。」

『お嬢様、たつた今、病院からの連絡で…病院に入院していた満嶋遙さんが、居なくなつたと。』

「…そうですね。何か、痕跡のようなものは…」

『警報も何も鳴っていない状況でしたから、恐らく影時間中に抜け出したものと思われます。しかし、彼はまだ完治してはいないと医師に聞きましたので、あまり遠くには行っていないかと。』

「なるほど…分かりました。こちらでも搜索はしてみます。では、何かありましたら、また。』

美鶴は電話を切ったようだ。

「こちらでも確認は取れた。影時間中に抜け出したらしい。」

「影時間中、ですか…」



風花は悲しげに俯いてしまう。ペルソナがユノに覚醒したにも関わらず、見つけられなかった自分が悔しいのだろう。

「そう気を落とすな。影時間は、我々ペルソナ使いのテリトリーでもある。彼の妨害が最も働くのも、影時間なんだ。君が落ち込む必要はない。」

「それは分かってますけど……」

だがやがて、風花は何かを振り払うように頭を軽く振った。

「今は、私に出来ることをします！とりあえず、このことは皆さんに伝えてきます！」

「……ああ。頼んだ。」

風花は急いで走り去っていった。

美鶴は風花の変化に驚いていた。前は、（言い方は悪いが）まだおろおろしていたように思う。こうやってすぐ事態を理解し、すぐに行動に移れるようになったのは、彼女のペルソナが覚醒したからだろうか。

「……っと、私もこんなことをしている場合ではないな。」

美鶴ははっと我に返り、急いで手配を開始した。

時は経ち、放課後。

メンバーには朝のうちに、遥失踪のことは伝えてあった。

だからだろう。湊は珍しく、チャイムが鳴るとすぐに教室を出て行った。

「あ、湊……！」

彩音が呼び止めようとするが、もう湊は教室から出てしまっている。

「湊君、多分遙くん探しに行ったよね……」

「俺たちも探そうぜ！」

彩音は頷き、残りの4人も湊の後を追うべく、急いで教室を出た。

湊は未だ、信じられなかった。否、信じたくないという気持ちが強かった。

あんな体で、起きられるはずが無い。ましてや一歩間違えれば致命傷だった傷が完治しないまま、病院からの逃走を成功させたとは思えない。

だからこそ、湊は今街の中を探して走っていた。

気づけば、ムーンライトブリッジに来ていた。一旦立ち止まり、すっかり荒くなってしまった呼吸を整える。

秋の日はすぐ短くなる。今、海には夕焼けが反射してキラキラと輝いていた。

4月の、遥が転校してきて間もない頃、街を案内したことを思い出す。あの日も、ここで夕焼けを見た。

「…遥。」

気づけば、声に出していた。

「…くそっ！」

湊はやりきれない気持ちで一杯だった。

自分にはペルソナを付け替えられる、ワイルドという力がある。だが、今この時遥を、親友を探し出すことは出来ない。風花のように、サーチが出来るペルソナを、湊は使えない。

そのことが酷く苛立たしかった。何より、無力な自分に腹が立った。

しかし、それは諦める理由にはならない。

湊は、そう自分を叱り付けた。

湊は再び、どこにいるかも分からない遥を捜し求めて、走り出した。

10月23日 〈動揺〉（後書き）

いかがでしたでしょうか？

もう一週間後は2012年です。時が経つのは早い…

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

10月24日 く美鶴とゆかりく (前書き)

新年まであと2日!

今年最後の投稿ですね。

では、ごきげん。

10月24日　〜美鶴とゆかり〜

放課後、ゆかりは教師の許可を取らずに、生徒会室で部活の記録をまとめていた。

その生徒会室に、不意に美鶴が入ってきた。

「あ、すいません。空いてたんで、勝手に使ってみました。」

すぐに美鶴の姿を確認したゆかりが軽く頭を下げて謝罪する。

「ここに来るとは、珍しいな。…部活の関係か？」

「はい、活動報告、先生に頼まれちゃって…」

「そうか…大変だな。」

美鶴が怒っている様子は無い。むしろ、口調は穏やかだった。

「別に、先輩よりかは全然、大した事ないですよ…」

ゆかりは苦笑気味にそう言って、また活動報告の方に意識を戻した。

美鶴は何やら、生徒会で使うような書類の整理を始める。

ふと、ゆかりのペンが止まる。

「…あの、ちよっと聞きたいんですけど。」

「ん…？」

美鶴も、作業の手を止めた。

「先輩って…何のために戦ってるんですか？」

それは、前々からゆかりが美鶴に聞きたいと思っていたことだった。

今は丁度2人きりで、聞くチャンスだと思ったのだ。

「私は…」

美鶴は静かに話し出した。

「私の戦いは”贖罪”だ。昔も今も、変わらない。」

「…私は…何のためとか、ホント言つと…もう無いです。父さんのこと、わかっちゃったし…」

ゆかりが特別課外活動部に入って車道と戦うようになった理由。それは、父の死の真相を知ること。

春頃のタイムカプセルの手紙を読んで、それを決意した。

しかし、夏の屋久島旅行で、それは最悪の形であったことを知った。  
「ただ、それでも父さんの残したものをせめて私が消せればって…」  
美鶴は黙って聞いている。

「…なんで戦うかなんて、最初に考えなきゃですよ。なのに私…  
今頃になつて、初めて真剣に考えてる。」

「…仕方ないさ。」

「けど、みんな違いますよね…戦ってる理由…ま、シャドウをやっ  
つけるっただけでもいいとは思ってますけど…」

「…何が言いたい？」

美鶴はゆかりの言い方に、僅かに疑問を覚えた。

「…自分でもよく分かんないです。次の満月で、いよいよ最後のシ  
ヤドウだし、考えてるうちに、終わっちゃいますよね…」

「…そうだな。」

次の満月まで、残り10日。

「次で、全て終わるさ。そして、普通の学園生活に戻る。」

美鶴は、ちらりと壁にかけてある時計を確認した。

「そろそろ、生徒会の委員が来る頃だ。話なら、後でも聞くが…」

「あ、いいんです。すいません、お邪魔しました。」

ゆかりは慌てて立ち上がり、荷物をまとめて生徒会室を慌しく出た。

「戦う理由…か。」

1人残された生徒会室で、美鶴はポツリとつぶやいた。

さつきはああ言ったが、本当の理由はそうじゃない。

本当の理由は…

「おっと、いけないな。まだやることが残っていた。」

美鶴は軽く頭を振り、定例会議の準備を始めた。

10月24日 く美鶴とゆかりく (後書き)

いかがでしたでしょうか？

多分今日が今年最後の投稿ですね…  
それでは皆様、よいお年を！

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

10月27日 最後の忠告（前書き）

新年、明けましておめでとございます！  
今年も宜しくお願い致します。

では、どうぞ。



## 10月27日 〈最後の忠告〉

満月まで、残り1週間。

つまり、最後の戦いまで残り1週間、ということの意味する。

それにより、湊は一旦、遥の搜索を中断せざるを得なくなつた。

シャドウの方が今は優先だ。思うところはあるだろうが、今は戦いに集中してくれ。

そう美鶴に言われては、流石に続けることは出来ない。

12体の大きなシャドウを全部倒すまであと1体。すなわち、影時間を消すまであと1体。

この戦い、何としても勝たねばならないのだ。

しかし、湊の方でも、搜索の意味に迷いが生じていた。

聞かされてすぐの時は、衝撃からほぼ反射的に探さなければ、と感じて搜索に走つたが、落ち着いて考えてみるとそれは本当に良いことなのか？と思えてきてしまったのだ。

遥を連れ戻して、一体何になる？何か変わるのか？

勿論、良い意味で変わることもあるだろう。しかし、見つけ出したとすれば間違いなく、美鶴が放つておくはずはない。何故逃げたのかとか、本来の遥の目的などを聞き出すことになるだろう。それが本当にいいことなのか？と、湊は思ってしまうのだ。

元々、遥が能力を駆使して自分達から隠れていたのは何のためだったのか。それは、何か自分達に隠している事がある、としか考えられない。わざわざ重症を負っている中で病院から抜け出すような無茶をしたのも、知られたくないこと…言いたくないことが、あるからではないのか。

ならば…それをはたして、自分達は聞き出していいのだろうか？  
そう、湊には思えてしまうのだ。

勿論、心配もある。もし遙が見つかったら、なぜあんな無茶をした、と湊は怒るだろう。だが、その後のことを考えるとどうにも、捜索に戸惑いが生じてしまふのだった。

そんなことを考えながら、湊はベッドの中に入っていた。

いつの間にか、影時間になってしまっている。影時間前にベッドに入った筈だが、どうにも眠れなかった。

美鶴に詳しく聞かないでくれと頼んでみるか？ いや、無理だろう。遙は色々謎が多く、かつ何か重要そうなことを知っていそうな雰囲気がある。見過ごすとは思えない。

ならばどうする…とまた頭を悩ませたところで、湊は慣れた気配を感じた。

「こんばんは。」

「…ファルロス。」

今日で、満月まで残り1週間だということを聞いてから、来るような予感はしていた。

「あと1週間で、満月だよ。いよいよ、今回は12体目だ。…準備はいい？」

「…ああ。」

「ここまで、長かったのか短かったのか…でも、いろんなことが起きたね。けれど、思い出話をするには、まだ、早いよね。」

「…そうだな。」

「じゃ、終わったらまた会いに来るよ。…くれぐれも、気をつけてね。」

ファルロスはそれだけ言うと、消えてしまった。

「…っ…」

湊は更に目が冴えて眠れなくなってしまい、何とか今は考えを打ち切って眠ろうと、深くベッドに潜った。

10月27日 〈最後の忠告〉（後書き）

いかがでしたでしょうか？

多分、今年中にこの小説は完結するのでは…という予感がしています。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

11月2日　　〜決戦前夜〜（前書き）

次は満月バトルになりますね〜。

ああ、冬休みがあと3日…。

では、どうぞ。

11月2日　〜決戦前夜〜

ついに明日が、最後の大型シャドウとの戦いの日　勝利すれば影時間が消えるという日である。

今夜は決戦前日ということで、特別課外活動部の全員がラウンジに集合していた。

「…いよいよ、明日で最後の作戦ですね。」

「まあね…けど、たった半年チョイで色々あったよね…」

「頑張ってきたよね、ほんと…」

「うん…やれることは、やってきたよね…」

ゆかりは明日のことを考えてか、少し不安そうな顔をしている。

「オレ的にゃ、ヒマしてるよりかは全然良かったけどな。いろんな人にも会えたしさ。」

「…そうですね。」

「無駄な事は1つも無かったさ。”力”を得て2年半…悪くない時間だった。」

「真田さん…」

天田がまじまじと真田を見た。真田は、いつもの毅然とした姿のままだ。

「ワン！」

「ふふっ、コロちゃんにも会えたしね。」

傍に寄って来て一声吠えたコロマルの頭を、風花が微笑んで撫でた。

「…それにしても真田先輩、2年半って長いですよね…あ、アイギスはもつと長いか。」

「わたしは、ほとんど寝ていたので、実稼動は、極めて短いであります。」

ふと、順平が美鶴を見た。

「桐条先輩は、いつからやってんですか？確か、真田サンよりもっと前からって…」

「…ん？私か…？」

考え事をしていたらしい美鶴が顔を上げた。

「…最初は、私1人だった。もつともその頃は、まだ作戦も無く、ここもただの学生寮だったがな。」

「先輩も、理事長から誘われて？」

「いや…違う。私は幼い頃から、影時間への適性があったんだ。以前、父の指揮するタルタロス調査の一団がシャドウに襲われた事があってな。傍らで見ていた私に、その時、ペルソナが覚醒したんだ。」

美鶴の脳裏に思い浮かんだのは、ペルソナを始めて発現させたあの日のこと。

桐条のSPの1人が突然シャドウと化し、父と自分を含んだ調査団に襲い掛かった。美鶴は父を守るため無我夢中で飛び出し、その時にペルソナが発現した。

「そんな事が…」

美鶴の表情からその当時のことを何となくであるがイメージしたゆかりが、美鶴の胸中を察して言った。

「…私は、安定制御下でペルソナを覚醒できた最初の例だったらしい。…あの日、私に覚醒が起こらなければ、今日みんなの苦労は…無かったのかもな。」

「先輩…」

「どのみち、誰かがやっただろ。敵を放ってはおけないんだからな。」

「…そうだな。」

美鶴は少しだけ微笑んだ。

最後の戦いを前にして、仲間の静かな闘気が感じられる。

”0番 愚者”のコミュが、ランク6になった。

「明日は、最後の召集をかける事になる。…今日はよく休んでおい

てくれ。」

その一言にみんなが頷き、この場は解散となった。

その後、彩音と湊の二人だけが残ったラウンジ。

「…ねえ。」

彩音が口を開く。

「明日で、本当に何もかも終わり…なのかな？影時間もシャドウもタルタロスも…全部、本当に消えるのかな？」

「…どうした、いきなり。」

湊が問い返す。

「何か、色々と中途半端な気がしてさ…まだ何か、モヤモヤしてるってどうか…片付いてないこととかが、ある気がするんだよね。例えば、この間のタルタロス…」

タルタロスはもう、今行ける限界まで上りつめている。

「屋上…っばい気がしたけどさ、何か違うくない？まだ上がある…よ  
うな気がするし。」

「…感覚ばっかりだな。でも…分かる気がする。」

「でしょ？」

彩音が身を乗り出した。

「結局、分かっただけのこと色々残ってるしさ。ファルロスもそうだし、遙くんが何者なのか…とか、湊の特殊能力とか、ストレガって一体何者なのかとか。タルタロスについてもそう。何か色々、本当に謎だらけ。」

湊は黙って考え込んだ。

「戦い終わった後で、ちゃんと研究結果とか…そういう”答え”みたいなものは教えてくれるかな？」

「…さあ。先輩を悪く言うつもりはないけど、まだ何か桐条には”

裏”がありそうな気がしないでもないから…。それに僕は理事長…何か胡散臭い気がしてならないんだ。」

「幾月さん？昨日も来てたけど。」

昨日、作戦目前ということだ。幾月がこの寮に来た。いつもの寒いオヤジギヤグを飛ばしても、寮のみんなはことごとくスルーで、少し寂しそうだったのが印象的だった。

「ま、湊の勘はよく当たるからな……。まだ分からないし、どう警戒していいかも分からないけど……。一応その辺は注意深く見ておこうか。」

「……そうした方がいいと思う。それと、姉貴の勘もよく当たる。」

「そう？」

彩音は少し考える素振りを見せたあと、「ま、いつか。」と勢よく立ち上がった。

「じゃ、明日に備えて今日はもう寝よう？」

「……そうだな。」

湊も立ち上がった。

運命の戦いは、明日。



11月2日 〳決戦前夜〵 (後書き)

いかがでしたでしょうか？

やっぱりタルタロス探索は時間がかかる…。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などありましたらお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8170q/>

---

ペルソナ3 ~ 死神の旅路 ~

2012年1月6日23時48分発行